
本 庄 市

今井条里遺跡

本庄今井工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告 IV

1 9 9 8

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



第146号溝跡遠景



見玉郡北部と赤城山を望む



第2 遺構面(第24・29・30号坪型区画跡)



第3 遺構面(G 4 グリッド周辺)



第4遺構面(G4グリッド周辺)



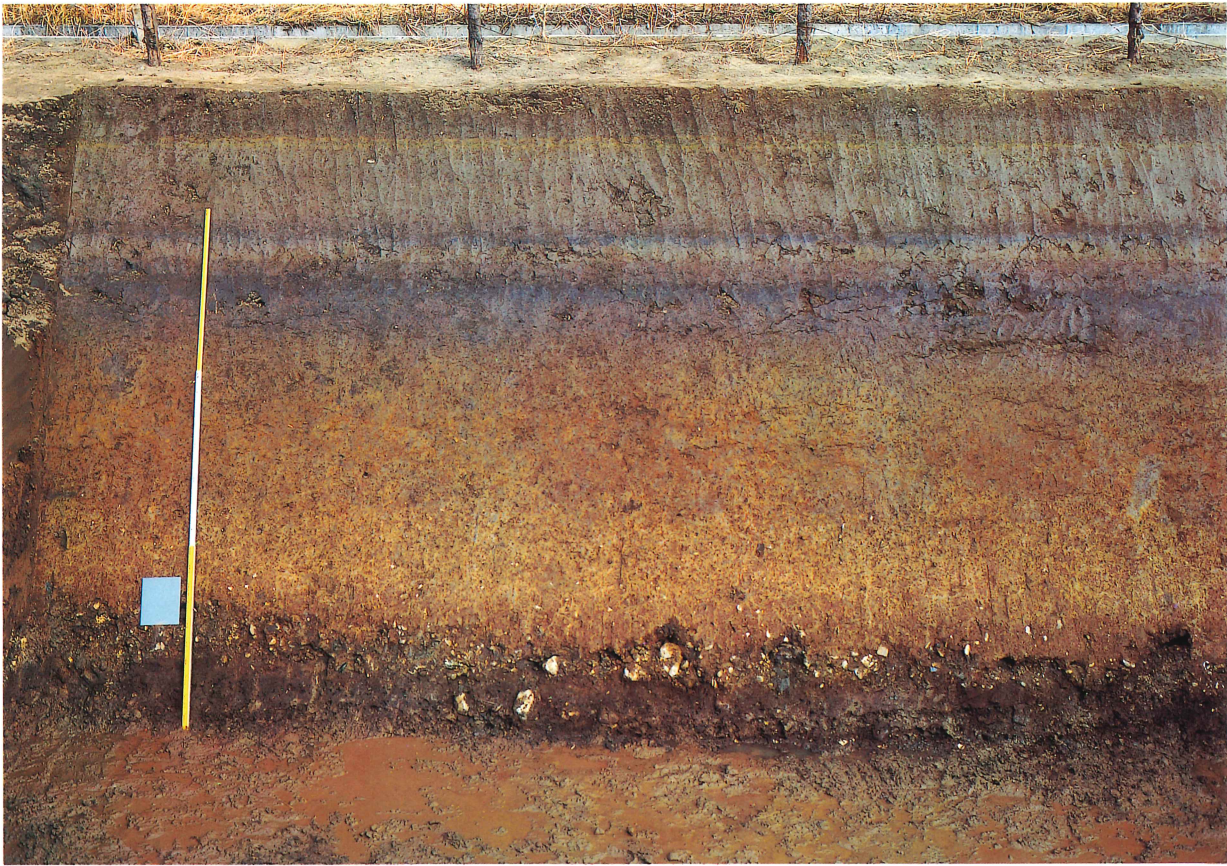
第4遺構面(調査範囲北部)



古墳時代前期の集落跡



坪界線大畦畔の土壤化状況(第17・18号坪型区画跡)



今井条里遺跡の土壤層位(J 4 グリッド)



河川跡出土遺物

序

埼玉県では、豊かな彩の国づくりを実現するため、調和と均衡ある発展を目指し、それぞれの地域の特性や文化に応じた整備事業を行っております。都市と農村が調和をおこなす県北地域では、自然環境と共生し、創造性に満ちた活気ある産業社会の構築に向けて、先端技術産業を軸としたテクノグリーン構想が推進されております。

本庄今井工業団地造成事業は、県北地域の都市機能と居住環境の調和を図る本庄地方都市地域の産業拠点として計画されたもので、高い技術力と創造性にあふれた次世代産業の導入・集積を図ることを目指す「児玉テクノグリーンエリア」の中心的な産業団地建設事業であります。

本庄市域は、古くから交通の要衝として栄えたことからもうかがえるように、埼玉県内でも多数の埋蔵文化財が分布する地域として知られております。本庄今井工業団地の造成地内にも5か所の埋蔵文化財包蔵地が存在しておりました。その取扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県企業局の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

今回報告いたします今井条里遺跡は、埼玉県内における最初の本格的な古代水田跡の発掘調査となりました。

古墳時代前期から平安時代にいたる広大な水田跡を検出し、現在の児玉地域に広がる方格地割が古代にさかのぼることが判明いたしました。大規模な発掘調査であったことから、水田耕作に関する多くの知見を得ることができました。

また、周辺には古墳時代から中世に至るまで著名な遺跡が多数分布しており、これらの遺跡との関連も考えられるようになりました。本庄・児玉地域における開発史の一端を把握することができたと考えております。

本書を埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及や教育機関の参考資料として、広く活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県企業局土地開発第2課、同北部土地開発事務所、本庄市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県本庄市に所在する今井条里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

今井条里遺跡 (IMIJR)
本庄市大字今井字下田240番地他
平成5年9月3日付け委保第5の952号
平成6年5月11日付け教文第2-27号
平成7年4月18日付け教文第2-14号
平成8年10月7日付け教文第2-126号
3. 発掘調査は、今井工業団地造成事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、平成5年度は磯崎 一、石坂俊郎、山本 靖、伴瀬宗一、岩田明広、渡辺清志が、平成6年度は元井 茂 (現 白岡町立南中学校)、井上尚明、高崎光司 (現 埼玉県立越谷高等学校)、瀧瀬芳之、伴瀬宗一、岩田明広が、平成7年度は岩瀬謙、瀧瀬芳之、岩田明広、小林明子 (現 東京紙工株式会社) が、平成8年度は西井幸雄、大谷徹がそれぞれ担当し、平成5年4月1日から平成8年3月31日までと、平成8年10月1日から平成8年12月31日まで実施した。整理報告書作成事業は岩田が担当し、平成9年10月1日から平成10年3月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、航空写真は中央航業㈱に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、土壌分析は㈱古環境研究所に各々委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、元井、瀧瀬、西井、大谷、伴瀬、岩田、渡辺が行い、遺物の写真撮影は岩田が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、岩田が行い、鉄製品については瀧瀬芳之の、縄文時代の尖頭器・石鏃については上野真由美の協力を得た。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、他は岩田が行った。また、附編1は㈱古環境研究所 杉山真二、早田 勉氏によるものである。
8. 本書の編集は、岩田があたった。
9. 本書にかかる資料は平成9年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 「今井条里遺跡」の名称は、本庄・児玉地域に広がる条里型地割のうち、発掘調査対象地となった本庄市大字今井地区の便宜的な名称である。
11. 今井条里遺跡の調査内容については、すでに公になったいかなる文書にも本書が優先する。
12. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して謝意を表します。(敬称略) 荒川正夫 井上昌美 太田博之 神戸聖語 工楽善通 恋河内昭彦 坂口 一 鈴木徳雄 高井佳弘 高島英之 長谷川勇 前原 豊 増田一裕 Caroline Pathy-Barkaer

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは大グリッド(100×100m方眼)を主体とし、内一部に小グリッド(10×10m方眼)を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。

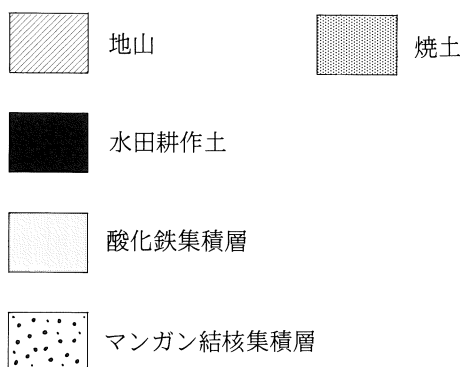
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。

SJ…住居跡 SK…土坑 SD…溝跡
SB…掘立柱建物跡 SX…土器集中遺構・畝跡
SN…水田跡

4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。

遺構全測図1/5,000
住居跡・掘立柱建物跡・土坑1/60
炉跡1/30 坪型区画跡1/1,000
断面図1/60

5. 遺構図中のスクリーントーンの指示は以下のとおりである。



6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものにはスケールで示した。

土器1/4 土製品・金属製品1/2
石製品1/2 石器1/3
弥生土器拓影図1/3

7. 遺物観察表の計測値は、()内は推定値、単位はcmおよびgである。

8. 発掘調査における土壌および遺物観察表における遺物の色調は、新版標準土色帳(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)に準じて細別した。

9. 遺物観察表の胎土は、含有碎屑物のうち礫と砂粒鉱物を肉眼観察し、下のよう

A…ガラス質透明・半透明鉱物
B…角閃石および輝石
C…黒雲母 D…白雲母 E…片岩類
F…その他の砂粒鉱物 G…礫
H…白色針状物質

10. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。

A…良 B…不良 C…悪

11. 水田跡の平面図における畦畔の表現は、通常の上端・下端の表現を除き次のとおりである。

実線…畦畔基部
波線…畦畔痕跡
一点鎖線…擬似畦畔

目次

口絵	
序	
例言	
凡例	
目次	
I. 発掘調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 発掘調査・報告書作成の経過	1
3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2
II. 遺跡の立地と環境	5
III. 遺跡の概要	9
IV. 調査の方法	17
V. 第1遺構面の遺構と遺物	27
VI. 第2遺構面の遺構と遺物	90
VII. 第3遺構面の遺構と遺物	145
1. 坪型区画跡	148
2. 溝跡	153
3. 水田跡	154
VIII. 第4遺構面の遺構と遺物	174
1. 竪穴住居跡	177
2. 掘立柱建物跡	182
3. 土坑	183
4. その他の遺構	190
5. ピット	191
6. 水田	194
7. 溝跡	195
8. その他の溝跡	213
IX. その他の出土遺物	229
1. 水田耕作土出土古銭	229
2. 河川跡出土遺物	229
3. 縄文時代の出土遺物	229
X. 調査の成果	
今井条里遺跡における地割の変遷	254
引用・参考文献	260
附編	
埼玉県、今井条里における自然科学的分析	261

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	5	第36図	第22号坪型区画跡	70
第2図	周辺の遺跡	6	第37図	第23号坪型区画跡	72
第3図	帝国陸軍迅速図にのこる地割	10	第38図	第24号坪型区画跡	74
第4図	今井条里遺跡第1遺構面全測図	12	第39図	第24号坪型区画跡土層図	75
第5図	今井条里遺跡第2遺構面全測図	13	第40図	第25・26号坪型区画跡	76
第6図	今井条里遺跡第3遺構面全測図	14	第41図	第27号坪型区画跡	78
第7図	今井条里遺跡第4遺構面全測図	15	第42図	第3号堰跡	79
第8図	基本堆積層理と土壤層位	19	第43図	第28号坪型区画跡	81
第9図	水田跡の種類と擬似畦畔	22	第44図	第29号坪型区画跡	83
第10図	今井条里遺跡における畦畔の検出方法	25	第45図	第30号坪型区画跡	85
第11図	第1号坪型区画跡	29	第46図	第30号坪型区画跡土層図	86
第12図	第2号坪型区画跡	31	第47図	第1遺構面出土遺物	88
第13図	第2号坪型区画跡土層図	32	第48図	第9号坪型区画跡(第2遺構面)	93
第14図	第3号坪型区画跡	34	第49図	第10号坪型区画跡(第2遺構面)	95
第15図	第4号坪型区画跡	36	第50図	第11号坪型区画跡(第2遺構面)	97
第16図	第5号坪型区画跡	38	第51図	第88～91号水田跡	98
第17図	第5号坪型区画跡土層図	39	第52図	第12号坪型区画跡(第2遺構面)	100
第18図	第8号坪型区画跡	42	第53図	第13号坪型区画跡(第2遺構面)	102
第19図	第9号坪型区画跡	43	第54図	第14号坪型区画跡(第2遺構面)	103
第20図	第9号坪型区画跡土層図	44	第55図	第15号坪型区画跡(第2遺構面)	105
第21図	第10号坪型区画跡	46	第56図	第16号坪型区画跡(第2遺構面)	106
第22図	第11号坪型区画跡	48	第57図	第16号坪型区画跡土層図(第2遺構面)	106
第23図	第8号水田跡	49	第58図	第17号坪型区画跡(第2遺構面)	109
第24図	第12号坪型区画跡	51	第59図	第18号坪型区画跡(第2遺構面)	111
第25図	第12号坪型区画跡土層図	52	第60図	第19号坪型区画跡(第2遺構面)	113
第26図	第13号坪型区画跡	53	第61図	第20号坪型区画跡(第2遺構面)	115
第27図	第14号坪型区画跡	55	第62図	第21号坪型区画跡(第2遺構面)	117
第28図	第15号坪型区画跡	56	第63図	第22号坪型区画跡(第2遺構面)	119
第29図	第17号坪型区画跡	59	第64図	第23号坪型区画跡(第2遺構面)	121
第30図	第18号坪型区画跡	61	第65図	第23号坪型区画跡土層図(第2遺構面)	123
第31図	第19号坪型区画跡	63	第66図	第131～136号溝跡周辺	124
第32図	第19号坪型区画跡土層図	64	第67図	第24号坪型区画跡(第2遺構面)	125
第33図	第20号坪型区画跡	65	第68図	第24号坪型区画跡IV-1層水田微細図	127
第34図	第20号坪型区画跡土層図	66	第69図	第27号坪型区画跡(第2遺構面)	129
第35図	第21号坪型区画跡	69	第70図	第27号坪型区画跡土層図(第2遺構面)	130

第71図	第28号坪型区画跡(第2遺構面) ……131	第106図	第1号掘立柱建物跡 ……182
第72図	第28号坪型区画跡土層図(第2遺構面)(1) ……………133	第107図	第2号掘立柱建物跡 ……183
第73図	第28号坪型区画跡土層図(第2遺構面)(2) ……………134	第108図	土坑(1) ……184
第74図	第28号坪型区画跡IV-1層水田微細図 ……135	第109図	土坑(2) ……185
第75図	第29号坪型区画跡(第2遺構面) ……137	第110図	土坑出土遺物(1) ……186
第76図	第29号坪型区画跡IV-1層水田微細図 ……138	第111図	土坑出土遺物(2) ……187
第77図	第30号坪型区画跡(第2遺構面) ……140	第112図	土器だまり ……191
第78図	第121号溝跡と取水状況 ……141	第113図	畠跡 ……192
第79図	第31号坪型区画跡(第2遺構面) ……143	第114図	ピット ……193
第80図	第32・33号坪型区画跡(第3遺構面) ……146	第115図	第4遺構面北部の水田跡全景 ……196
第81図	第32～34号坪型区画跡(第3遺構面) ……150	第116図	第4遺構面北部の水田跡微細図 ……198
第82図	第3遺構面土層図(1) ……152	第117図	第11号溝跡遺物出土状況(1) ……199
第83図	第89号溝跡周辺 ……156	第118図	F4グリッド周辺第4遺構面 ……200
第84図	第89号溝跡土層図 ……157	第119図	F4グリッド周辺第4遺構面土層図 ……201
第85図	第89号溝跡遺物出土状況 ……158	第120図	第11号溝跡遺物出土状況(2) ……202
第86図	F2グリッド周辺第3遺構面 ……159	第121図	G4グリッド周辺第4遺構面 ……203
第87図	G3グリッド周辺第3遺構面 ……160	第122図	G4グリッド周辺第4遺構面土層図 ……204
第88図	H3グリッド周辺第3遺構面 ……161	第123図	G4グリッド周辺VII-2層水田跡微細図(1) ……………205
第89図	第3遺構面土層図(2) ……162	第124図	G4グリッド周辺VII-2層水田跡微細図(2) ……………206
第90図	F4グリッド周辺第3遺構面 ……163	第125図	H4グリッド周辺第4遺構面 ……207
第91図	G4グリッド周辺第3遺構面 ……164	第126図	H4グリッド周辺第4遺構面土層図 ……208
第92図	H4グリッド周辺第3遺構面 ……165	第127図	I4グリッド周辺第4遺構面 ……209
第93図	第3遺構面検出水田跡微細図 ……166	第128図	I4グリッド周辺第4遺構面土層図 ……210
第94図	第375号水田跡 ……167	第129図	J4グリッド周辺第4遺構面 ……211
第95図	第2・3遺構面出土遺物(1) ……168	第130図	J4グリッド周辺第4遺構面土層図 ……212
第96図	第2・3遺構面出土遺物(2) ……169	第131図	第6号堰跡 ……213
第97図	第2・3遺構面出土遺物(3) ……171	第132図	G5グリッド周辺第4遺構面 ……214
第98図	第4遺構面北部の状況(1) ……172	第133図	G2グリッド周辺第4遺構面 ……215
第99図	第4遺構面北部の状況(2) ……175	第134図	F3グリッド周辺第4遺構面 ……216
第100図	第1号住居跡 ……176	第135図	G3グリッド周辺第4遺構面 ……217
第101図	第1号住居跡遺物出土状況 ……177	第136図	G3グリッド周辺第4遺構面土層図 ……218
第102図	第1号住居跡出土遺物 ……178	第137図	I2グリッド周辺第4遺構面 ……219
第103図	第2号住居跡 ……179	第138図	I2グリッド周辺第4遺構面土層図 ……220
第104図	第2号住居跡遺物出土状況 ……180	第139図	J2・K2グリッド周辺第4遺構面 ……221
第105図	第2号住居跡出土遺物 ……181	第140図	J2・K2グリッド周辺第4遺構面土層図(1)

.....	222	第164図	植物珪酸体分析結果(8)	302
第141図	J 2・K 2 グリッド周辺第 4 遺構面土層図(2)	第165図	植物珪酸体分析結果(9)	303
.....	223	第166図	植物珪酸体分析結果(10)	304
第142図	K 3 グリッド周辺第 4 遺構面	第167図	植物珪酸体分析結果(11)	305
第143図	第 4 遺構面出土遺物(1)	第168図	植物珪酸体分析結果(12)	306
第144図	第 4 遺構面出土遺物(2)	第169図	植物珪酸体顕微鏡写真説明(2)	307
第145図	第 4 遺構面出土遺物(3)	第170図	植物珪酸体分析結果(13)	309
第146図	水田耕作土出土古銭	第171図	植物珪酸体分析結果(14)	310
第147図	河川跡出土遺物	第172図	植物珪酸体顕微鏡写真説明(3)	310
第148図	縄文時代の出土遺物	第173図	花粉組成図(1)	314
第149図	今井条里遺跡における地割の変遷	第174図	花粉組成図(2)	315
第150図	地質柱状図(1)	第175図	花粉組成図(3)	316
第151図	地質柱状図(2)	第176図	花粉組成図(4)	317
第152図	地質柱状図(3)	第177図	花粉組成図(5)	320
第153図	テフラ組成ダイヤグラム(1)	第178図	花粉組成図(6)	321
第154図	テフラ組成ダイヤグラム(2)	第179図	花粉組成図(7)	322
第155図	テフラ組成ダイヤグラム(3)	第180図	花粉組成図(8)	324
第156図	植物珪酸体分析結果(1)	付図 1	今井条里遺跡第 1 遺構面全図	
第157図	植物珪酸体分析結果(2)	付図 2	今井条里遺跡第 2 遺構面全図	
第158図	植物珪酸体分析結果(3)	付図 3	今井条里遺跡第 3 遺構面全図	
第159図	植物珪酸体分析結果(4)	付図 4	今井条里遺跡第 4 遺構面全図	
第160図	植物珪酸体分析結果(5)	付図 5	今井条里遺跡水田番号図(1)	
第161図	植物珪酸体顕微鏡写真説明(1)	付図 6	今井条里遺跡水田番号図(2)	
第162図	植物珪酸体分析結果(6)	付図 7	今井条里遺跡水田番号図(3)	
第163図	植物珪酸体分析結果(7)	付図 8	今井条里遺跡水田番号図(4)	

表 目 次

第 1 表	第 1 遺構面出土遺物観察表	89	第10表	今井条里遺跡水田跡一覧	237
第 2 表	第 2・3 遺構面出土遺物観察表	169	第11表	テフラ分析結果(1)	284
第 3 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表	178	第12表	テフラ分析結果(2)	285
第 4 表	第 2 号住居跡出土遺物観察表	181	第13表	テフラ分析結果(3)	286
第 5 表	土坑出土遺物観察表	188	第14表	植物珪酸体分析結果(1)	290
第 6 表	第 4 遺構面出土遺物観察表	228	第15表	植物珪酸体分析結果(2)	291
第 7 表	水田耕作土出土古銭表	229	第16表	植物珪酸体分析結果(3)	298
第 8 表	河川跡出土遺物観察表	231	第17表	植物珪酸体分析結果(4)	299
第 9 表	今井条里遺跡溝跡一覧	233	第18表	植物珪酸体分析結果(5)	308

第19表	花粉分析結果(1)	311	第22表	花粉分析結果(4)	318
第20表	花粉分析結果(2)	312	第23表	花粉分析結果(5)	319
第21表	花粉分析結果(3)	313	第24表	花粉分析結果(6)	323

図版目次

- 図版1 第33～37号溝跡
第37号溝跡
第1～4号水田跡
- 図版2 第7号水田跡
第38号溝跡
第107号溝跡
- 図版3 第67号溝跡
第8号水田跡
第8号水田跡畦畔際馬蹄跡
- 図版4 第8号水田跡遺物出土状態
第12・21号坪型区画跡坪界線第2号溝跡
第2号溝跡の猿尾状分水
- 図版5 第12・20号坪型区画跡坪界線第2号溝跡B
第20・21号坪型区画跡坪界線第2号溝跡
第13・21号坪型区画跡坪界線第1号溝跡B
- 図版6 第112・113号溝跡と大畦畔
第112・113号溝跡と大畦畔
第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点
- 図版7 第17号坪型区画跡II－1層水田面
第18・19号坪型区画跡坪界線近世大畦畔
第18・19号坪型区画跡坪界線近世大畦畔
- 図版8 第3号溝跡
第3号溝跡内第3号堰跡
第119号溝跡
- 図版9 第119号溝跡
第120号溝跡
第120号溝跡
- 図版10 第11・19号坪型区画跡IV－1層水田跡
第12号坪型区画跡IV－1層水田跡
- 図版11 第9号坪型区画跡IV－1層水田跡
第10号坪型区画跡
第11・19号坪型区画跡IV－1層水田跡
- 図版12 第17号坪型区画跡IV－1層水田跡
第18号坪型区画跡IV－1層水田跡
第11・19号坪型区画跡IV－1層水田跡
- 図版13 第21号坪型区画跡IV－1層水田跡
第28～30号坪型区画跡IV－1層水田跡
第31号坪型区画跡IV－1層水田跡
- 図版14 第10・11号坪型区画跡坪界線平安大畦畔
第88～90号水田跡
第11号坪型区画跡内馬蹄跡断面
- 図版15 第11号坪型区画跡IV－1層水田跡
第18号坪型区画跡IV－1層水田跡
第196号溝跡
- 図版16 第21号坪型区画跡支線用水路跡
第146号溝跡周辺
第146号溝跡脇大畦畔と埋没水田跡
- 図版17 第146号溝跡
第146号溝跡際の焼土と土器
第22・23・28・29号坪型区画跡坪界線交点
- 図版18 第146号溝跡底部遺物出土状況
第147号溝跡
第154・170・171号溝跡
- 図版19 第131～134号溝跡
第24号坪型区画跡IV－1層水田跡
第4号溝跡
- 図版20 第4号溝跡・女堀川合流点
第29号坪型区画跡東辺坪界線
第28号坪型区画跡東辺坪界線
- 図版21 第145号溝跡水口
第29号坪型区画跡東辺大畦畔検出状況
第29号坪型区画跡西辺坪界線大畦畔
- 図版22 第29号坪型区画跡内IV－1層水田跡小畦畔
検出状況
第29号坪型区画跡内As-Bで埋没した人足跡
第29～30号坪型区画跡IV－1層水田跡
- 図版23 第30号坪型区画跡IV－1層水田跡
第20号坪型区画跡内の畦畔痕跡
第30・31号坪型区画跡坪界線
- 図版24 第121号溝跡水口

	第31号坪型区画跡Ⅳ-1層水田跡		第1号竪穴住居跡遺物出土状況
	第32~36号坪型区画跡他	図版37	第1号竪穴住居跡炉跡
図版25	VII-1層田跡		第1号竪穴住居跡貯蔵穴
	第54号溝跡他		第2号竪穴住居跡
	第41~54号溝跡	図版38	第2号竪穴住居跡掘り方
図版26	第53~54号溝跡		第2号竪穴住居跡遺物出土状況
	第53~54号溝跡底面		第2号竪穴住居跡遺物出土状況
	第54号溝跡他	図版39	第2号竪穴住居跡炉跡
図版27	第58号溝跡遺物出土状況		第2号竪穴住居跡貯蔵穴
	第89号溝跡		第2号竪穴住居跡はしご穴
	第89号溝跡	図版40	第1号掘立柱建物跡
図版28	第89号溝跡中央		第2号掘立柱建物跡
	第128・129号溝跡		第1号土坑
	第141号溝跡	図版41	第2号土坑
図版29	第157・158号溝跡		第2号土坑遺物出土状況(1)
	第164号溝跡		第2号土坑遺物出土状況(2)
	第162・163・181・182号溝跡	図版42	第4号土坑
図版30	第163号溝跡		第5号土坑
	第163号溝跡		第5号土坑遺物出土状況
	第168号溝跡	図版43	第6号土坑
図版31	第176号溝跡		第7号土坑
	第186号溝跡他		第8号土坑
	VII-1層水田跡	図版44	第10号土坑
図版32	VII-1層田跡		第11号土坑
	VII-1層水田跡小畦畔にみられる水口		第12号土坑
	第375号水田跡	図版45	第13号土坑
図版33	第375号水田跡調査風景		第14号土坑
	第375号水田跡耕作土除去後の耕作痕		第14号土坑遺物出土状況
	第375号水田跡耕作痕	図版46	第15号土坑
図版34	第375号水田跡小畦畔断面		第16号土坑
	第4遺構面調査範囲北部		第18・21・22号土坑
	第4遺構面集落跡	図版47	第19号土坑
図版35	古墳時代前期の遺構群		第20号土坑
	第1号竪穴住居跡		第23号土坑
	第1号竪穴住居跡掘り方	図版48	第24号土坑
図版36	第1号竪穴住居跡遺物出土状況		第25号土坑
	第1号竪穴住居跡遺物出土状況		第26号土坑

図版49	第27号土坑 第27号土坑遺物出土状況 第28号土坑	VII-2層水田跡 (E 6・7グリッド) 第11号溝跡分流点遺物出土状況 (E6グリッド)
図版50	第29号土坑 第30号土坑 第31号土坑	図版62 第11号溝跡支線管玉出土状況 第11号溝跡支線管玉出土状況 VII-2層水田跡 (G 6グリッド)
図版51	第32号土坑 第34号土坑 SX 1 (土器だまり)	図版63 第20・21号溝跡 (J 2グリッド) 第22・23号溝跡断面 (K 2グリッド) 第22・23号溝跡 (J 3グリッド)
図版52	SX 2 (畝跡) 土坑群 (SK 2・4・11) 第4遺構面 (G 4グリッド周辺)	図版64 第32号溝跡 (G 2グリッド) 第74~80号溝跡 (H 4グリッド) 第74~80号溝跡 (H 4グリッド)
図版53	第7~14号溝跡 (J 4グリッド) 第8号溝跡 (J 4グリッド) 第6号堰跡 (H 4グリッド)	図版65 第4遺構面 (I 2グリッド周辺) 第4遺構面 (J 4グリッド周辺)
図版54	第8・11号溝跡 (I 4グリッド) 第9号溝跡 (I 4グリッド) 第10号溝跡 (J 4グリッド)	図版66 第4遺構面 (K 2グリッド周辺) 第4遺構面 (J 3グリッド周辺)
図版55	第11号溝跡 (J 4グリッド) 第8・11号溝跡 (H 4グリッド) 第7号溝跡 (F 4グリッド)	図版67 昭和24年の表層地割 (立体視可) 図版68 第146号溝跡 (立体視可)
図版56	第7号溝跡遺物出土状況 (F 4グリッド) 第11号溝跡 (第7号溝跡下層) 第11号溝跡遺物出土状況 (F 4グリッド)	図版69 第95図2 第95図3 第95図9 第95図11 第95図12 第95図13 第95図15
図版57	第94・95号溝跡 (G 4グリッド) 第5・6・54号溝跡 (G 4グリッド) 第162・163・181・182号溝跡 (D 7グリッド)	第95図26 図版70 第95図27 第96図45 第96図47 第96図51 第96図52 第96図53 第96図55 第96図56
図版58	第167号溝跡 (D 6・7グリッド) 第177号溝跡 (E 5・6グリッド) 第11号溝跡とVII-2層水田跡	第97図61 第97図62 第97図65 第97図66
図版59	VII-2層水田跡大畦畔 (G 4グリッド) VII-2層水田跡 (G 4グリッド) 第5・6・97号溝跡 (G 4グリッド)	
図版60	第11号溝跡遺物出土状況 第7・11号溝跡断面 (G 4グリッド) VII-2層水田跡検出状況 (G 4グリッド)	
図版61	VII-2層水田跡全景	

- 第97図72
 第97図74
 第97図79
 第102図9
 図版72 第102図2
 第102図5
 第102図10
 第102図11
 第102図12
 第105図8
 図版73 第110図1
 第110図2
 第110図4
 第110図5
 第110図9
 第110図11
 図版74 第143図14
 第143図15
 第143図16
 第143図19
 第143図21
 第143図22
 図版75 第143図23
 第143図24
 第143図25
 第143図26
 第143図28
 第144図30
 図版76 第144図33
 第144図38
 第144図49
 第144図50
 第144図52
 第144図58
 図版77 第147図3
 第148図1
 第1遺構面出土遺物(第47図)
 図版78 左：第97図86・右：第47図11
 土坑・土器だまり出土遺物(第110・112図)
 図版79 第4遺構面出土遺物(第144図)
 出土石器類(第111・145・148図)
 図版80 出土玉類
 出土古銭
 図版81 出土金属製品(第47・105図)
 縄文時代の石器
 図版82 検出された植物珪酸体
 図版83 検出された植物珪酸体
 図版84 検出された植物珪酸体
 図版85 検出された植物珪酸体
 図版86 検出された植物珪酸体
 図版87 検出された植物珪酸体
 図版88 花粉・孢子I
 図版89 花粉・孢子II
 図版90 第11号坪型区画跡出土種実
 図版91 出土炭化材の顕微鏡写真
 図版92 出土木材の顕微鏡写真
 図版93 検出された植物珪酸体
 図版94 検出された植物珪酸体
 図版95 検出された植物珪酸体
 図版96 検出された植物珪酸体
 図版97 検出された植物珪酸体
 図版98 花粉・孢子遺体
 図版99 寄生虫卵分析写真
 図版100 検出された植物珪酸体
 図版101 検出された植物珪酸体
 図版102 検出された植物珪酸体
 図版103 花粉・孢子遺体

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。

工業の振興では、都心からおおむね50km以遠の県北地域を対象圏域として、豊かな自然環境との調和を図りながら、付加価値の高い工業団地の整備を進め、地域産業の技術の高度化や先端技術産業などの導入を進めるテクノグリーン構想を推進している。本庄市今井・西富田地区及び児玉町高関地区にわたる本庄今井工業団地はこの構想に基づき計画された事業である。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、この開発事業と文化財の保護について関係部局と事前協議を重ねてきたところである。

平成2年7月31日に開催した協議で、本庄市教育委員会が事業予定地内の埋蔵文化財の試掘調査を実施することを確認した。その後、用地買収等が進展し、終了した平成4年11月13日に試掘調査の方法・日程等を協議した。そして平成5年1月6日から3月12日にわたり、試掘調査が実施された。

調査の結果、以下の埋蔵文化財包蔵地が確認された。

遺跡・地区名	種別	時代
今井条里遺跡	条里遺跡	古代～中世
今井川越田遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
北廓遺跡	集落跡	奈良・平安
宇塚田地区	散布地	縄文
字塔頭地区	散布地	平安

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

今井条里遺跡の調査は、平成5年4月から平成8年3月31日までと平成8年10月1日から平成8年12月31日まで行われた。調査面積は約298,010㎡である。今井工業団地用地内には今井条里遺跡の他に、今井川越田

条里跡は現水田面の畦畔・水路に広範囲に留めているが、調査では、現畦畔と走向が異なる旧畦畔・溝などが確認された他、事業地の南部で新たに大規模な集落跡（今井川越田遺跡）が確認された。

試掘調査の結果をふまえた協議では、事業の計画変更が不可能であることから、造成地区について記録保存の措置を講ずることとし、調査対象面積が広範囲にわたることなどから、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施することとなった。

その後、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団・県企業局・文化財保護課の三者で工事工程、調査計画、調査期間などについて協議し、平成5年4月から今井条里遺跡、今井川越田遺跡の発掘調査を開始することとした。今井条里遺跡の調査は平成5年度から平成8年度までの4年にわたった。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が、埼玉県公営企業管理者から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。届けに対する文化庁からの指示通知は以下のとおりである。

平成5年9月3日付け 委保第5の952号

平成6年5月11日付け 教文第2-27号

平成7年4月18日付け 教文第2-14号

平成8年10月7日付け 教文第2-126号

(文化財保護課)

遺跡、地神遺跡、塔頭遺跡が存在した。今井川越田遺跡は平成5・6年度に、地神遺跡・塔頭遺跡については平成7年度に調査が行われた。

今井条里遺跡における発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

平成5年度 平成5年4月から5月、文化財保護課、企業局担当者と調査工程の打ち合わせを行った。その結果、今井工業団地用地内を東西に流れる真下堀川以南の地域については平成5年度の発掘調査対象地域とし、真下堀川以北の地域については次年度以後の調査対象地域とする全体計画がまとまった。平成5年度の対象面積は約72,000㎡であった。5月、表土掘削を開始した。6月、補助員・委託工事作業員を導入し、調節池予定地である対象地北東部から調査を開始した。トレンチによる確認調査を行いつつ、遺存状態のよい部分を重点に調査をすすめ、平成5年12月末をもって予定の調査を終了した。平成6年1月～3月、真下堀川以北の用地内について、水田跡の遺存状況を把握し次年度の調査計画をたてる目的で、範囲確認調査を行った。水田跡の広がり把握するとともに、地神遺跡・塔頭遺跡の存在を確認した。

平成6年度 真下堀川から関越自動車道における約124,000㎡について発掘調査を行った。4月、表土掘削を開始。同時に補助員・委託工事作業員を導入し、調査範囲北西部分から調査を行った。遺存状態のよい真下堀川沿いの部分を重点に調査を進めた。平成7年1月、予定の調査を終了し、関越自動車道北側の地域の表土掘削を開始した。なお、平成6年度をもって今井

川越田遺跡の調査を終了した。

平成7年度 関越自動車道以北の約100,000㎡について発掘調査を行った。調査範囲の南側から順次調査を進めた。平成8年3月末、対象地域のうち、土地取得の遅れた約2,000㎡を除いて、すべての調査を終了した。他に地神遺跡・塔頭遺跡の発掘調査を行い、ともに年度内に終了した。

平成8年度 平成7年度からもちこしとなった約2,000㎡について発掘調査を行った。10月、表土掘削を行い、同時に調査を開始した。順次調査を進め、12月末をもって今井条里遺跡に関する発掘調査をすべて終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成9年10月1日から平成10年3月31日まで実施した。10月、遺物の接合・復元・実測を行った。11月、遺物の実測と平行して、遺構図面の整理、遺物写真撮影を行った。12月～1月、遺構・遺物図面のトレース、および遺構図・遺物図版組を行った。1月、割付、原稿執筆を行った。2月～3月、校正を行い、3月末に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1)発掘調査

平成5年度

理事長 荒井 桂

副理事長 富田 真也

専務理事 横川 好富

常務理事兼
管理部長 柴崎 光生

理事兼調査部長 中島 利治

管理部

庶務課長 萩原 和夫

主 査 贄田 清

主 事 菊池 久

経 理 課 長 関野 栄一

主 任 江田 和美

主 事 長 滝 美智子

主 事 福田 昭美

主 事 腰塚 雄二

調査部

調査部副部長 高橋 一夫

調査第三課長 村田 健二

主任調査員 儀崎 一

主任調査員 石坂 俊郎

調 査 員 山本 靖

調 査 員 伴 瀬 宗 一
 調 査 員 岩 田 明 広
 調 査 員 渡 辺 清 志
 平成6年度
 理 事 長 荒 井 桂
 副 理 事 長 富 田 真 也
 専 務 理 事 梶 原 嗣 雄
 常 務 理 事 兼 加 藤 敏 昭
 管 理 部 長
 理 事 兼 調 査 部 長 小 川 良 祐
 管 理 部
 庶 務 課 長 及 川 孝 之
 主 査 市 川 有 三
 主 事 長 滝 美 智 子
 主 事 菊 池 久
 専 門 調 査 員 兼 関 野 栄 一
 経 理 課 長 江 田 和 美
 主 任 事 福 田 昭 美
 主 事 腰 塚 雄 二
 調 査 部
 調 査 部 副 部 長 高 橋 一 夫
 調 査 第 三 課 長 村 田 健 二
 主 査 元 井 茂
 主 任 調 査 員 井 上 尚 明
 主 任 調 査 員 高 崎 光 司
 主 任 調 査 員 瀧 瀬 芳 之
 調 査 員 伴 瀬 宗 一
 調 査 員 岩 田 明 広
 平成7年度
 理 事 長 荒 井 桂
 副 理 事 長 富 田 真 也
 専 務 理 事 吉 川 國 男
 常 務 理 事 兼 新 井 秀 直
 管 理 部 長
 理 事 兼 調 査 部 長 小 川 良 祐
 管 理 部
 庶 務 課 長 及 川 孝 之

主 査 市 川 有 三
 主 任 長 滝 美 智 子
 主 事 菊 池 久
 専 門 調 査 員 兼 関 野 栄 一
 経 理 課 長 江 田 和 美
 主 任 事 福 田 昭 美
 主 任 事 腰 塚 雄 二
 調 査 部
 調 査 部 副 部 長 高 橋 一 夫
 調 査 第 三 課 長 村 田 健 二
 主 任 調 査 員 岩 瀬 讓
 主 任 調 査 員 瀧 瀬 芳 之
 調 査 員 岩 田 明 広
 調 査 員 小 林 明 子
 平成8年度
 理 事 長 荒 井 桂
 副 理 事 長 富 田 真 也
 専 務 理 事 吉 川 國 男
 常 務 理 事 兼 稻 葉 文 夫
 管 理 部 長
 理 事 兼 調 査 部 長 小 川 良 祐
 管 理 部
 庶 務 課 長 依 田 透
 主 査 西 沢 信 行
 主 任 長 滝 美 智 子
 主 事 菊 池 久
 専 門 調 査 員 兼 関 野 栄 一
 経 理 課 長 江 田 和 美
 主 任 事 福 田 昭 美
 主 任 事 腰 塚 雄 二
 調 査 部
 調 査 部 副 部 長 高 橋 一 夫
 調 査 第 二 課 長 大 和 修
 主 任 調 査 員 西 井 幸 雄
 主 任 調 査 員 大 谷 徹
 (2)整理・報告書刊行

平成9年度

理事 長	荒井 桂
副理事 長	富田 真也
専務理事	塩野 博
常務理事兼 管理部 長	稲葉 文夫
庶務課 長	依田 透
主 査	西沢 信行
主 任	長 滝 美智子
主 任	腰塚 雄二

専門調査員兼 経理課 長	関野 栄一
主 任	江田 和美
主 任	福田 昭美
主 任	菊池 久
資料部	
資料部 長	谷井 彪
主幹兼 資料部副部長	小久保 徹
専門調査員	
兼資料整理第一 課 長	坂野 和信
主任調査員	岩田 明広

II 遺跡の立地と環境

今井条里遺跡は、埼玉平野西部に形成された西縁台地群のもっとも北にあたる本庄台地南縁部に立地する。本庄台地は立川面に相当する浅間山・榛名山起源のローム層に被覆されており、北部に利根川が東流し、南部には神流川によって形成された扇状地が展開している。神流川扇状地は北東方向の妻沼低地に向いゆるやかに傾斜し、南方には秩父山系から上部山地・児玉丘陵・松久丘陵が張り出している。

神流川扇状地は、傾斜方向である北東方向に流下する利根川支流の中小河川によってもたらされる沖積堆積物に厚く覆われており、低地的景観を呈している。

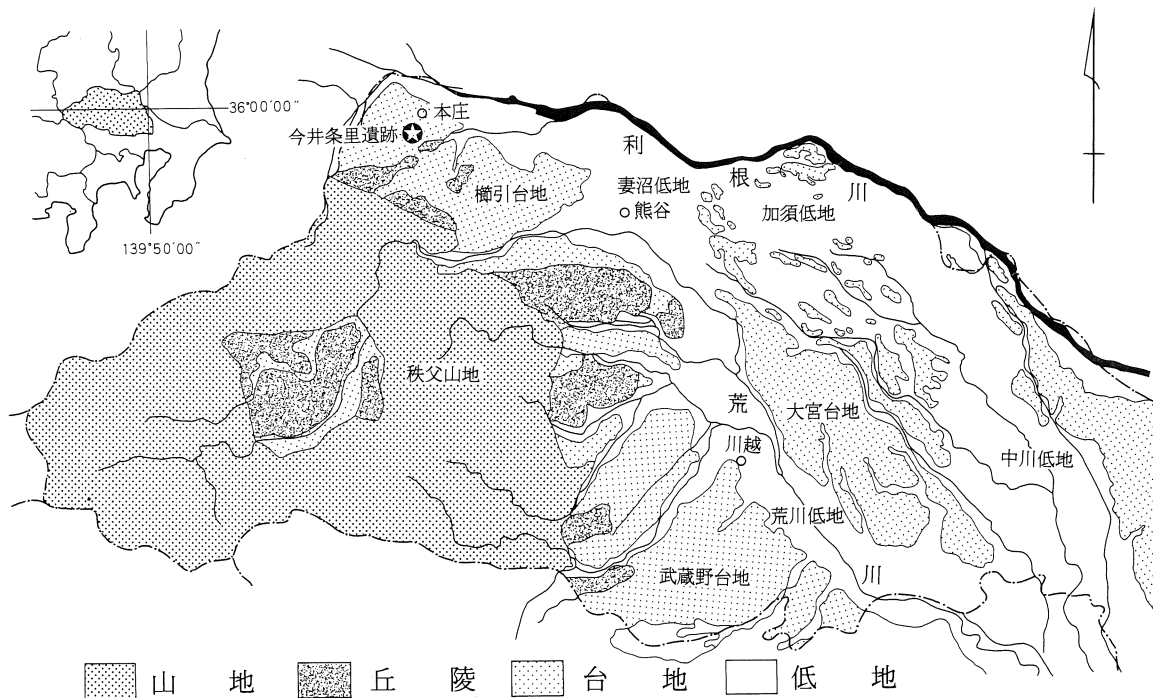
この地域は、児玉丘陵につづく第三紀の残丘である生野山丘陵と大久保山丘陵を境に、金鑽川・赤根川・女堀川流域と小山川・志戸川流域に分けることができ、ともに圃場整備以前の条里型地割を遺す水田地帯として知られている。しかし、扇状地帯にあたり河川が伏

流するのに加え、年間を通じて降水量が少ないため、冬季には各河川の水量が極端に減少する。農業用水確保のため、古くから、当地では大規模な用水路開発が不可欠であった。

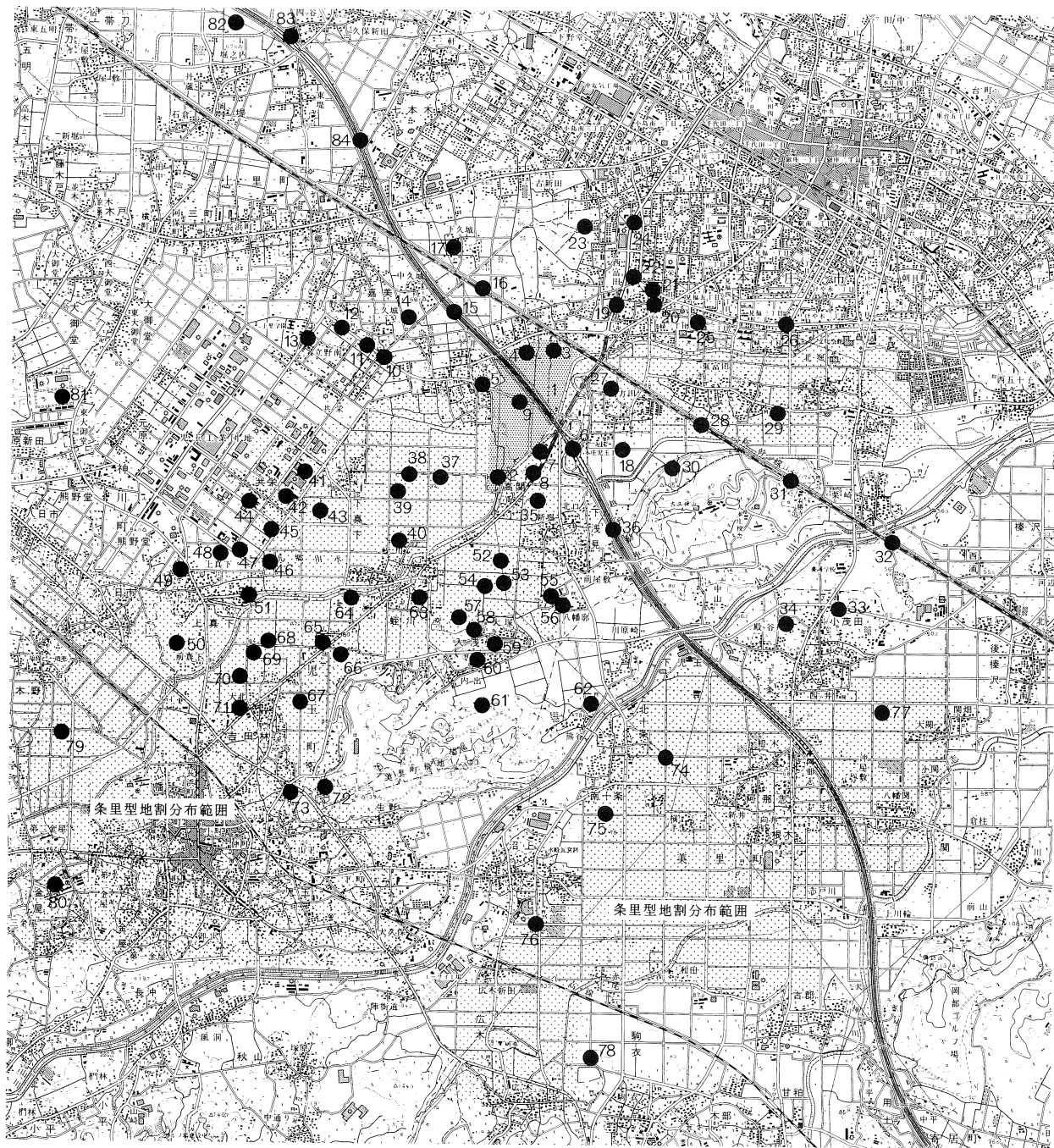
今回調査対象地域となった今井条里遺跡は、金鑽川・赤根川・女堀川流域の水田地帯北部にあたり、低地的景観の埋没台地に広がる水田域と台地上面との境界地域に相当する。

本庄台地上には、古墳時代から奈良・平安時代を中心として、旧石器時代から中・近世に至る多くの遺跡が分布している。発掘調査件数の多い本庄・児玉地域では、これらの遺跡についても多くの考古学的成果が蓄積されてきた。本来ならば、これらの成果を踏まえるべきであるが、すでに前刊書（富田・赤熊ほか1985、磯崎1995、伴瀬1996、瀧瀬1997）他に詳しく記されているので、本書では、水田遺跡としての今井条里遺跡

第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡



- 1 今井条里遺跡 2 今井川越田遺跡 3 地神遺跡 4 塔頭遺跡 5 北廓遺跡 6 後張遺跡 7 川越田遺跡 8 梅沢遺跡 9 一丁田遺跡 10 今井遺跡群 11 熊野大神南遺跡 12 八幡大神南遺跡 13 立野南遺跡 14 往來北遺跡 15 久城前遺跡 16 諏訪遺跡 17 下廓遺跡 18 四方田遺跡 19 社具路遺跡 20 南通り線内遺跡 21 薬師遺跡 22 西富田新田遺跡 23 夏目遺跡 24 二本松遺跡 25 雌濠遺跡 26 笠ヶ谷遺跡 27 九反田遺跡 28 下田遺跡 29 久下東遺跡 30 山根遺跡 31 東谷遺跡 32 古川端遺跡 33 向田遺跡 34 村後遺跡 35 東牧西分遺跡 36 雷電下遺跡 37 柿島遺跡 38 藤塚遺跡 39 堀向遺跡 40 左口遺跡 41 将監塚・古井戸遺跡 42 古井戸南遺跡 43 平塚遺跡 44 南共和遺跡 45 藤島遺跡 46 坊田遺跡 47 新宮遺跡 48 辻ノ内遺跡 49 真下境東遺跡 50 金佐奈遺跡 51 上真下東遺跡 52 浅見境北遺跡 53 浅見境遺跡 54 東田遺跡 55 鷺山古墳 56 鷺山南遺跡 57 延遺跡 58 城の内遺跡 59 新屋敷遺跡 60 金鎖神社古墳 61 入浅見向田遺跡 62 宮ヶ谷遺跡 63 共和小学校校庭遺跡 64 輕川坊田遺跡 65 辻堂遺跡 66 南街道遺跡 67 宮田遺跡 68 石橋遺跡 69 鶴崎遺跡 70 極越遺跡 71 高繩田遺跡 72 阿知越遺跡 73 御林下遺跡 74 前畑遺跡 75 樋之口遺跡 76 宮下遺跡 77 日の森遺跡 78 北貝戸遺跡 79 円良岡遺跡 80 倉林後遺跡 81 皂樹原遺跡・檜下遺跡 82 中堀遺跡 83 耕安寺遺跡 84 愛宕遺跡

の性格に関連した遺跡を主に、歴史的環境を概観することにした。

縄文・弥生時代をつうじて大久保山・生野山など独立丘陵上に遺跡が立地するのに対して、沖積世堆積物に覆われた扇状地部分に集落遺跡が形成されるのは、古墳時代前期のことである。女堀川流域の自然堤防上や微高地には、後張遺跡(6)・川越田遺跡(7)・梅沢遺跡(8)・西富田本郷遺跡(22)・四方田遺跡(18)、今井条里遺跡内で発見された地神遺跡(3)など、身馴川流域には村後遺跡(34)、志度川流域には南志度川遺跡・北貝戸遺跡(78)などの集落が成立している。すでにこの時代、今井条里遺跡の一角を構成する一丁田遺跡(9)では、用水路跡と思われる溝跡が設けられていたことがわかっている。また、美里町日の森遺跡(77)では、堰状の杭列をとまう溝跡が検出されており、中期前半にさかのぼる水田経営が推定されている(菅谷1987)。

古墳時代中期後半になると社具路遺跡(19)・西富田新田遺跡(22)・夏目遺跡(23)などの大規模集落が出現し、後期前半の今井川越田遺跡(2)・川越田遺跡(7)・梅沢遺跡(8)などではさらに規模が拡大する。この時期、児玉町児玉条里遺跡・同遺跡北部地区・鶴蒔遺跡(69)・金佐奈遺跡(50)・田端南屋敷遺跡・川越田遺跡(7)、神川町反り町南遺跡・反り町南遺跡、一丁田遺跡(9)などでは、用水路跡と思われる溝跡が掘削されており、女堀川旧河道などからの引水、あるいは小規模河川を掘削整備したと推定されるものがあり、中小河川利用と灌漑用水の整備が集落の拡大をもたらしたと考えられる。

7世紀後半以後になると大規模用水路の開鑿が開始された。中小河川の利用から大規模用水へ、灌漑技術に変革がおこったと考えられている(富田・赤熊他1985)。久城前遺跡(15)・諏訪遺跡(16)では用水路と考えられる溝跡が、今井遺跡群(10)・熊野太神南遺跡(11)・八幡太神南遺跡(12)・立野南遺跡(13)などでは、生活用水を供給したとみられる大溝がそれぞれ検出されている。この時期の集落は、児玉町古井戸遺跡・将監

塚遺跡(41)、神川町皂樹原遺跡・松下遺跡(81)などの拠点的な大集落が営まれる反面、扇状地帯には北廓遺跡(5)など少例を除き顕著な集落がみられなくなる。大久保山遺跡のように独立丘陵に移動したと考えられている。

今井条里遺跡を含む水田域は、今日、主に本庄台地縁辺をはしる九郷用水によって潤されている。かねて中世段階の開削であるといわれてきた九郷用水の開鑿年代は、近年の発掘調査によって7世紀後半の可能性が指摘され(鈴木1989)、条里型地割をなす水田の年代が問題となっている。児玉条里遺跡では、表層条里型地割の坪界線に一致する溝跡内から、この時期に相当する土師器杯2点が重なって出土しており、表層条里型地割の施工を当該期とする指摘も認められる(鈴木1991)。

平安時代以後、本庄台地上面中心部に大形の掘立柱建物跡を含む大規模集落が、また独立丘陵上に小規模集落が点在する。古井戸遺跡・将監塚遺跡(41)、皂樹原遺跡・松下遺跡(81)などが存続し、上里町中堀遺跡(82)が出現する。水田地帯には、用水路とみられる多数の溝跡が条里型地割にそって確認されており、覆土に含まれる浅間山起源火山灰(As-B、1108年降下)から、当該期までには条里型地割が施工されていたことが推定されてきた。児玉町円良岡遺跡(79)では、時期的には明確でないものの、ほぼ正方位を基軸とした水田跡22筆が検出されている。この時期、水田地帯に立地する集落遺跡は明らかでなかったが、地神遺跡(3)では、L字に並ぶ掘立柱建物跡を含む条里型地割に沿った小規模集落が検出されている。条里型水田の経営を考える上でも、重要な遺跡である。

中世以後については、調査例が少なく考古学的な歴史事情は明確になっていないが、一丁田遺跡(9)などでは、条里型地割坪界線に沿った小規模な溝跡が検出されており、条里型の水田経営が行われていたことが推定できる。今井条里遺跡内で発見された塔頭遺跡(4)では、条里型地割内に井戸跡をとまう多数の土坑墓群と小規模な掘立柱建物跡から構成される集落

が検出されており、条里型地割をなす溝跡とともに注目できる。社具路遺跡(19)や鷺山古墳火葬墳墓跡(55)では火葬墓が検出されている。また、13世紀以後には、条里型地割内に方形の区画をもつ館跡が出現している。今井条里遺跡周辺の館跡には、空堀をもつ古井戸遺跡(41)、条里型地割の引水とは異なる導水施設による水堀をもつ真境寺館跡、神川町阿保境館跡、今井条里遺

跡内に位置する北廓遺跡(5)、四方田「堀ノ内」館跡などがある。これらの館跡は、扇状地帯に広がる条里型水田を領有した在地領主のものと考えられている。真境寺館跡は児玉党塩谷氏館跡と推定されている。

なお、中世以後の歴史的環境については、次いで刊行される『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第193集 地神・塔頭遺跡』(岩瀬1997)に詳述する。

III 遺跡の概要

発掘調査の概要

今井条里遺跡は、本庄台地縁辺部の台地上面から神流川扇状地に広がる水田跡、および集落跡である。扇状地に沿って北東へ緩やかに傾斜し、標高67~70m前後である。遺跡の地質構成は女堀川によって運ばれた沖積世堆積物によって埋没した低地的景観の埋没台地が大部分を占めるが、埋没の浅い微高地と旧女堀川によって形成された自然堤防が存在する。すでに報告した今井川越田遺跡は旧女堀川の自然堤防上に、かつて調査された北廓遺跡と今後報告予定の地神遺跡・塔頭遺跡は微高地上にそれぞれ立地する。

今井条里遺跡の立地する扇状地帯は、部分的にはあるが、圃場整備されない旧来の条里型地割を遺す広大な水田地帯として知られてきた。

今井条里遺跡の発掘調査では、1783(天明三)年に大災害をもたらした浅間山の噴火によって降下した火山灰(As-A)に被覆された江戸時代の遺構面(第1遺構面)、1108(天仁元)年に降下した浅間山起源の火山灰(As-B)層直下の遺構面(第2遺構面)、一部を女堀川等の洪水砂に覆われた古墳時代後期の遺構面(第3遺構面)、古墳時代前期の遺構面(第4遺構面)の計4層にわたって調査を行った。各遺構面の調査概要は、次のとおりである。

1. 第1遺構面

検出した遺構は、条里型地割をなす坪型区画跡31筆、坪型区画跡内の小区画水田跡8筆、条里型地割をなす水田跡にともなう用水路跡29条である。坪型区画跡は1辺77~110m程度の不揃いな方形であるものの、正方位を基軸とした条里型地割の坪並みを形成していた。表層の条里型地割との相違はほとんどみられなかった。坪並みは調査範囲全体に確認できた。坪型区画跡内は東西および南北方向の長地型、および半折型地割に分割され、さらに小区画に区分されていた。小区画水田跡はAs-A火山灰を覆土とするものが中心であった。水田面には馬の蹄跡が残されていた。坪型区画跡周囲

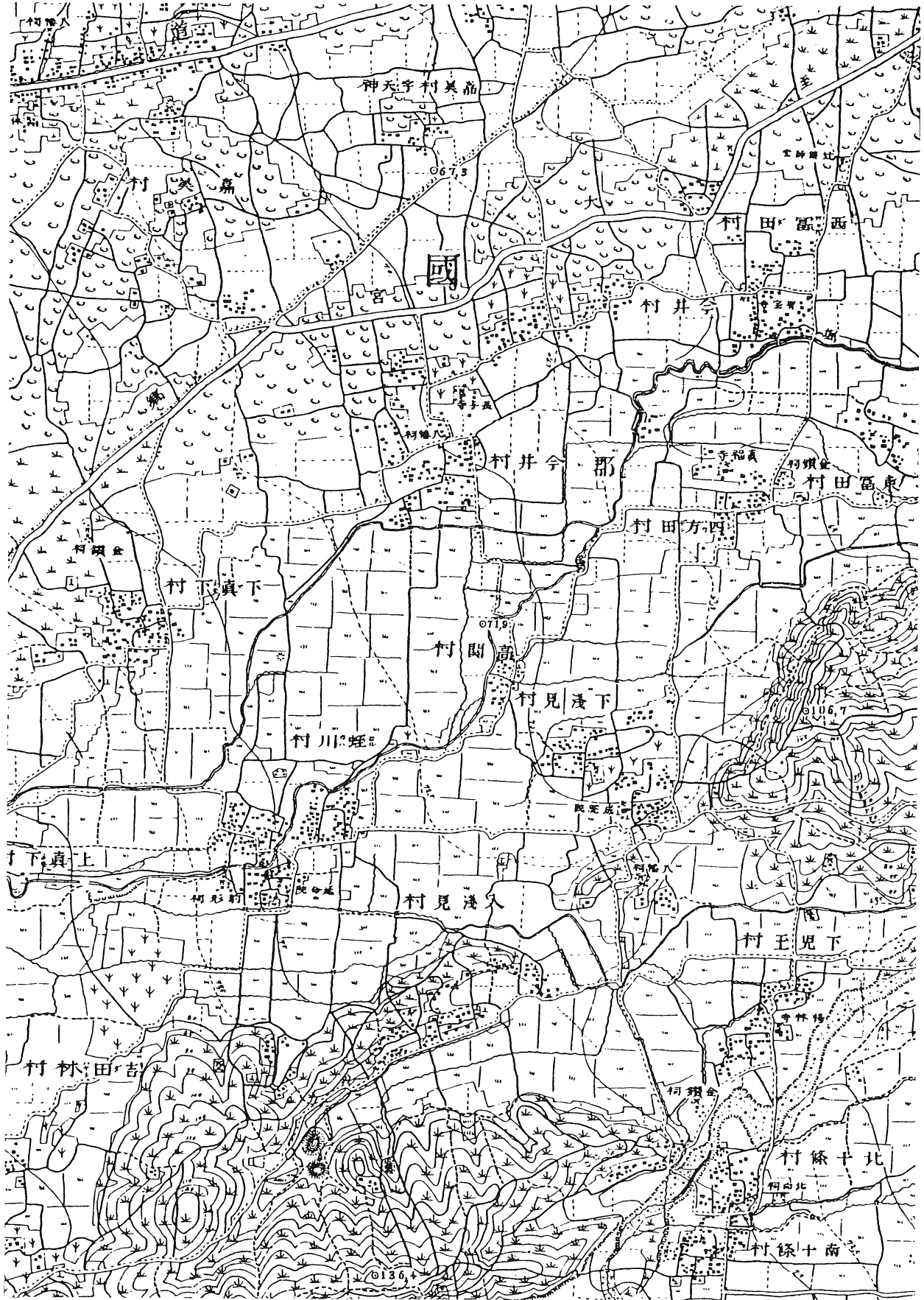
にめぐる用水路跡には、典型的な「猿尾状」分水をなすものが認められた。用水路跡は一般に、中世以後継続的に利用されていた。水掛かりは女堀川および真下堀川からの引水が中心で、南西から北東方向であった。出土遺物は、水田面、水田耕作土、用水路跡等から陶磁器・金属製品が得られた。

2. 第2遺構面

検出した遺構は、条里型地割をなす坪型区画跡23筆、坪型区画跡内の小区画水田跡671筆、用水路跡等の溝跡41条などである。大半の遺構がAs-B火山灰層を直上にもつものであったが、降灰後の復旧等のため、被覆された状態で検出した遺構は多くない。

坪型区画跡は1辺107~109m程度の整った方形をなし、正方位を基軸とした条里型地割の坪並みを形成していた。中・近世の地割に比して、坪塚線の蛇行が極端に少なかった。坪型区画跡内は南北方向を軸とした長地型類似の地割に分割され、内部が小区画に区分されていた。As-B火山灰に被覆された水田面には無数の凹凸と人馬の足跡が残されていた。また、一部には前代の区画を踏襲したため、地割の異なる小区画水田跡も認められた。坪型区画跡周囲は、きわめて浅い用水路跡を中央にもった大畦畔跡で区画されていた。大畦畔にともなう用水路跡には、2条が平行している箇所も認められたが、明確な猿尾状の分水は確認できなかった。中世以後に継続された用水路跡はなく、中世段階で掘り直されたことがわかる。水掛かりは、奈良時代前半までに掘削された大規模水路SD89および平安時代前半までに掘削されたSD146が中心で、南西から北東方向であった。なお、大規模水路(SD146)脇で洪水砂に覆われた坪内の小区画水田跡8筆を検出した。出土遺物および堆積層理から、洪水砂は平安時代前期のものと思われ、条里型地割に基づく坪型区画跡内部の小区画水田跡である。出土遺物は、水田耕作土、用水路跡等から土師器・須恵器が得られた。

第3図 帝国陸軍迅速図にのこる地割



3. 第3遺構面

検出した遺構は、条里型地割をなす坪型区画跡5筆以上、坪型区画跡と関係しない小区画水田跡376筆、用水路跡等の溝跡36条などである。

条里型地割をなす坪型区画跡には、2時期のものが認められた。第1は平安時代初期を中心とした時期が想定できるのもので2筆以上、第2は古墳時代後期から奈良時代初頭頃のもので3筆以上を検出できた。いずれも1辺108~109m程度の非常に整った方形をなすものであった。平安時代初期と想定されるものはN-22°-Wを基軸とするもので、坪型区画内は南北方向の長地型類似の地割に区分され、さらに小区画水田に分けたものであった。第2遺構面で検出した平安時代末(As-B直下)の坪内小区画水田に地割の一部が継承されていた。古墳時代後期から奈良時代初頭のは、N-17°-Eを基軸としたもので、調査範囲北東部に認めることができた。坪型区画跡周囲には、小規模だが直線的で、掘り方のしっかりした用水路跡が巡っていた。水掛かりは、奈良時代前半までに掘削された幹線用水路跡SD48~55などが中心で、水懸かりは、用水路が北西から南東、水田内部が南西から北東方向であったと予想される。

小区画水田跡は、SD54周辺の洪水砂直下で検出できた。条里型地割施工直前の段階のものと考えられる。古墳時代後期の地割を踏襲していた。

出土遺物は、水田耕作土、用水路跡等から土師器・須恵器が得られた。

4. 第4遺構面

第4遺構面では、埋没台地部分に展開する古墳時代前期の小区画水田跡1033筆、用水路等の溝跡40条のほか、微高地部分に立地する同時期の小規模集落跡を検出した。

水田跡はほぼ正方位を基軸とするもので、6×6~10×15m程度の区画をさらに一辺1~2m前後小区画水田にわけたものである。幅3m程度の用水路(SD7・11)を中心に展開し、水掛かりは南から北であった。この用水路跡は、川越田遺跡の存続時期を通じて

掘り直されながら7世紀前半まで存続し、支線用水路(SD5・6)なども整備される。支線用水路は、後の条里型地割に一部存続していた。出土遺物は、用水路跡から土師器、管玉などが得られた。集落跡は、竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟、土坑25基、畠跡1箇所等からなるもので、水田域と微高地縁辺をはしる用水路跡(SD11)を境に立地していたものである。地神遺跡として調査した北側微高地の同時期集落ととも、当時の村落の全体像を把握できた好例となった。出土遺物は土師器・鉄製鋤先などが得られた。水田耕作土、溝跡、住居跡ともにAs-C火山灰を多量に含んでおり、純粋な堆積層こそ確認できなかったが、古墳時代前期後半以前には水田、集落とも出現していたことがわかる。出土土器はいわゆる五領式期のものが中心であった。

また、同じ微高地上で、弥生時代中期に属する土坑3基を検出し、弥生土器・石器を得た。第4遺構面では、弥生時代のものと思われる土器・石器類が採集でき、水田跡の検出を試みたが、発見することはできなかった。

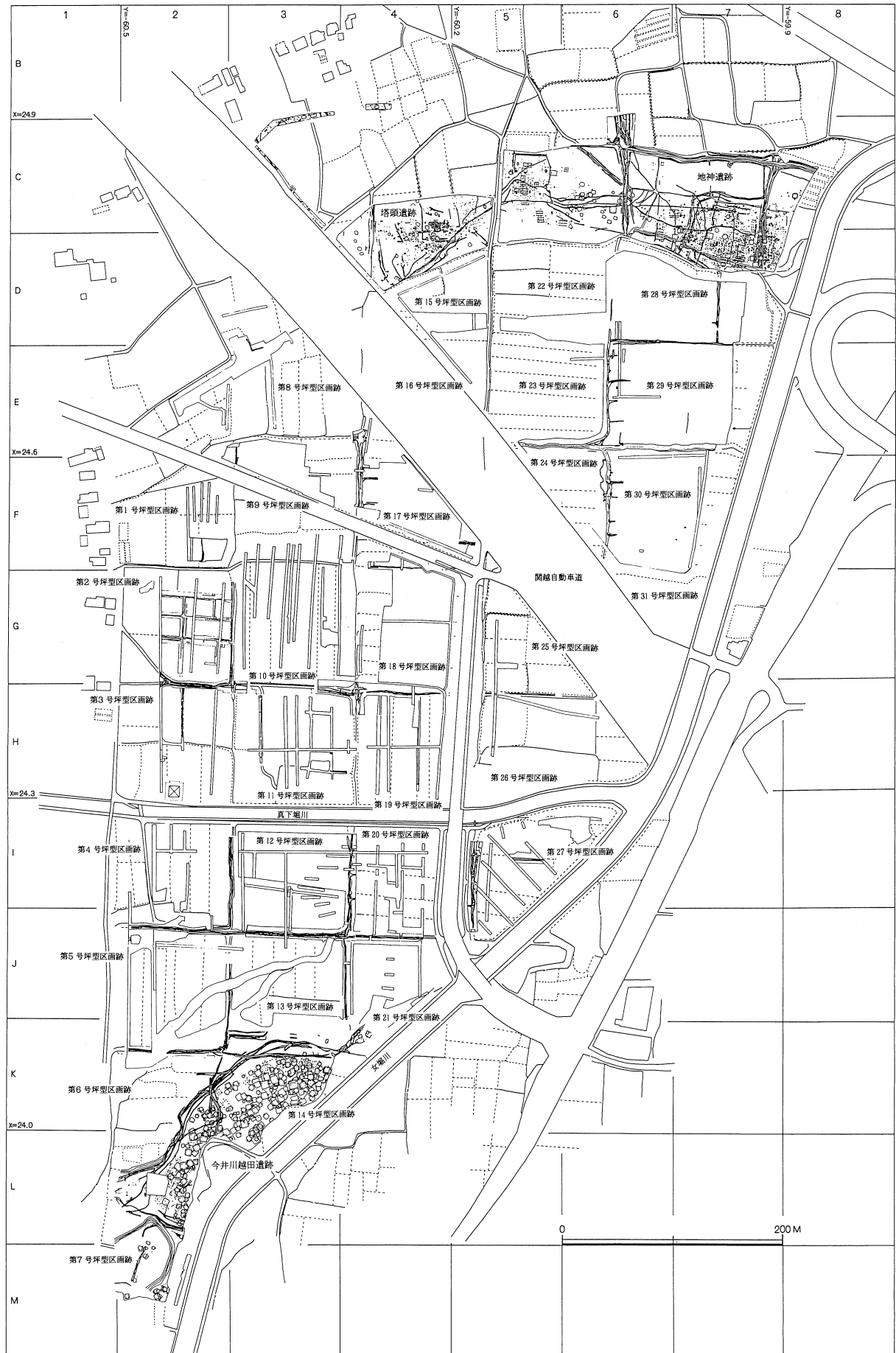
5. 表層条里型地割の概要

今日まで継続して利用されているという性格をもつ条里型地割を調査するにあたって、表層条里型地割との関わりをおいて埋没条里型地割を理解することはできない。ここで、調査対象地内の表層条里型地割について概観しておきたい。

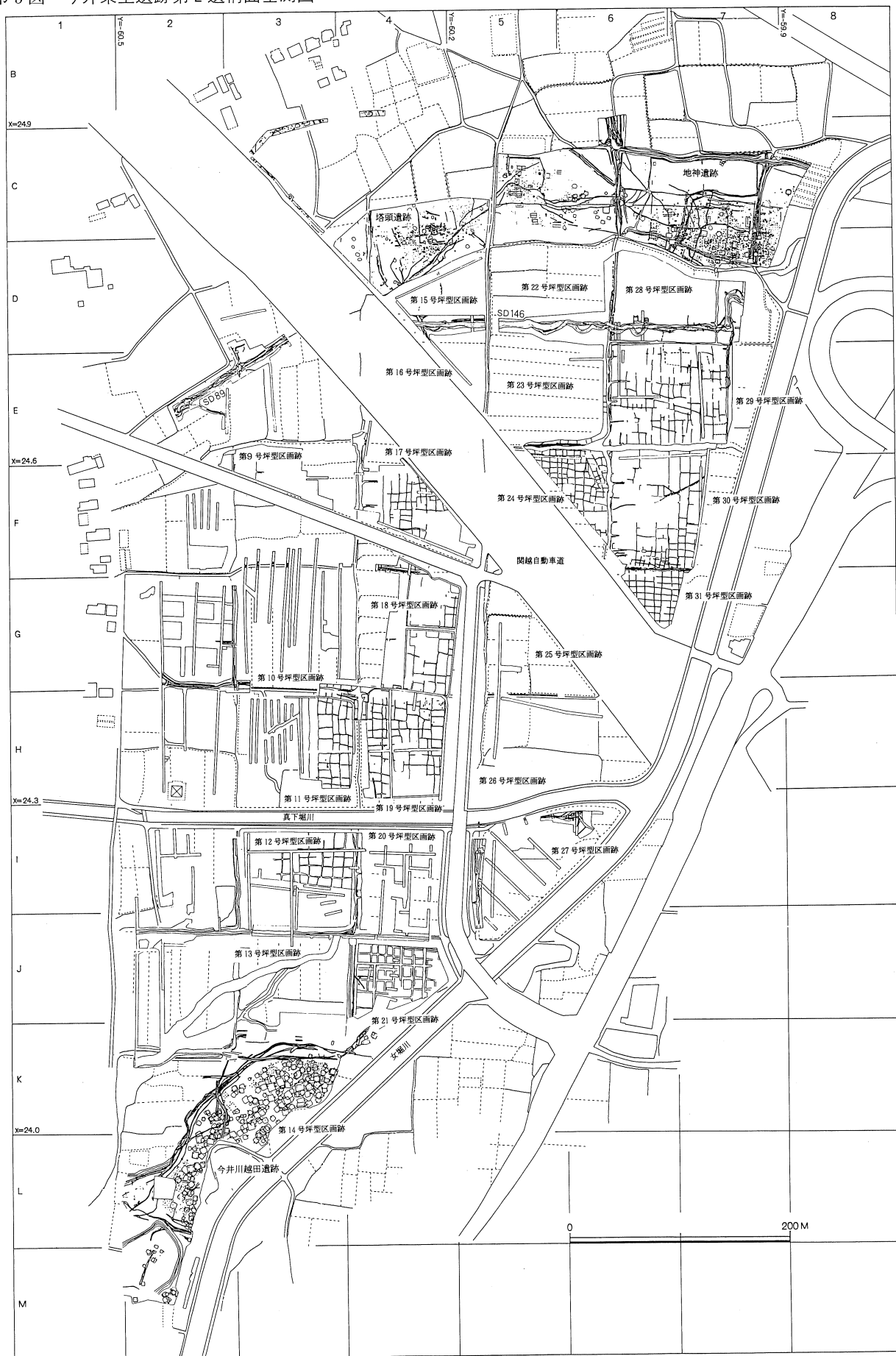
条里型地割の遺存する水田地域は、生野山・浅見山丘陵をはさんで、南の美里地域に広がる身馴川水系を利用した地域と、北の本庄・児玉地域に広がる金鑽川・赤根川・女堀川水系を利用した地域に分けられる。地割の方向は、概ね正方位であるが、生野山丘陵脇には西に24°程度振れた地割が存在する。

今井条里遺跡は、北側の本庄・児玉地域に位置する。この地域は神流川から引水する九郷用水堀によって潤されている。地形図上および今井川越田遺跡では、女堀川旧河道が確認でき、女堀川が自然河川であったことがわかる。九郷用水堀は女堀川旧河道を巧みに利用

第4図 今井条里遺跡第I遺構面全測図



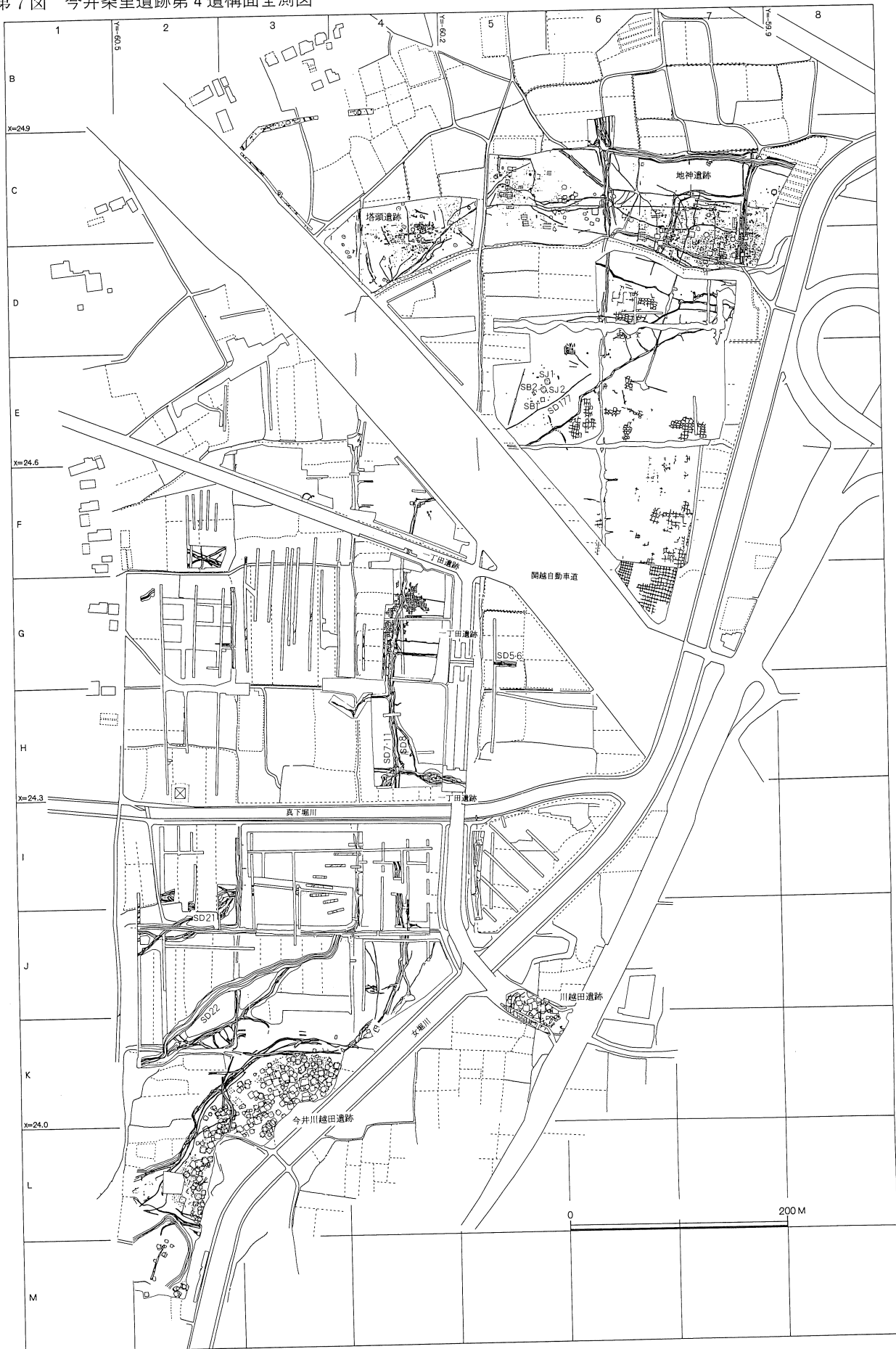
第5図 今井条里遺跡第2遺構面全測図



第6図 今井条里遺跡第3遺構面全測図



第7図 今井条里遺跡第4遺構面全測図



して掘削され、北東流を基本に南北・東西へと階段状に条里型地割の坪並中を流れ、所々で東流する東西方向の用水堀を分流している。

調査対象範囲は、女堀川旧河道で東・南を限られ、中央には児玉町上真下で九郷用水堀から分流する真下堀川が貫流する位置にある。1885（明治十八）年大日本帝国参謀本部陸軍部測量局による迅速図や第2次大戦後の米軍による航空写真をもって、周囲の地割をみわたしても、自然河川等による乱れが少なく、もっとも整った坪並みをみせる地域である。一町四方のいわゆる「坪」は、一辺108～109mの整った方形をなし、南北あるいは東西に7～8つの長地型地割をなす長方形の水田に分けられている。長方形の水田は、湛水する際には矢板材やトタン板によって3～4筆の区画に分けられるのが普通である。現在では、1段といえども1,500m²近い大きさを占めている。隣接地である久城田に関する史料とされ、年次不明の『武蔵国賀美郡久城村飛地・久城田耕地古図』（元禄・元文の記載があることから近世古図と考えられている）にも、長地型を基本とした地割がみえるが、1区画の広さは9畝から2段程度とまちまちである。今井地区では、坪や1段の区画を一町（ひとまち）と呼ぶことがある。

坪の周囲は、中央に幅約1.5～2m、深さ約1mほどの用水路をもつ大畦畔によって囲まれている。大畦畔は、水田面からの高さ約30cm程度である。県北地域では、小畦畔ともども「畔（くろ）」と呼ばれている。隣

り合う坪の比高差は30～50cmである。水掛かりは、南西の坪界線交点の用水路から東へ、南東の坪界線交点から北と東へと引水する。

坪界線をはしる大畦畔中央の用水路は、水田に引水する際、30m以上上流部分に堰を設け、幹線用水から支線用水へと分水する方法をとる。幹線が直進し、支線が直角方向に曲がり次の坪を潤す場合と、個々の水田に引水される場合とがある。これは「猿尾状」用水路と表現される。調査範囲内の用水路は、一般的にこの猿尾状をなしている。また周辺一帯では、用水路が交差する場合には、既存の用水路の上部に樋を架けたり（樋越：といこし）、下に導管をくぐらせたり（伏越：ふせごし）する場合があるというが、調査範囲内では、伏越を確認している。

調査範囲内には、北部の微高地である小字北廓付近に畑地が認められるが、大部分は水田域である。水田1段あたりの収穫量は、地域住民によると約7～8俵程度であるという。先の『武蔵国賀美郡久城村飛地・久城田耕地古図』でも畑地は多くない。水田の別は、武蔵国賀美郡久城村飛地・久城田耕地古図』、1598（文禄六）年の『田今井之水帳』ともに上田・中田が多く、現在まで良質の水田地帯であることがわかる。

調査対象地域周辺には、1885（明治18）年段階で、壱丁田・塚田・九反田・六反田・七本林などの条里に関連したと思われる小字が残存しており（『九郷用水関係町村全図』）、現在でも変化していない。

IV 調査の方法

1. 遺跡の名称

「条里型地割」とその条件

「今井条里遺跡」における調査の契機は、全国に広く分布する一町方格の地割が連なる土地区画の存在にある。一般に「条里」を冠して呼ばれることが多い土地区画であるが、「条里」には法制史上の律令制度と密接に関わる特別な意味合いが存在している。発掘調査によって検出した遺構について記述する際、これを無批判に用いるのは適当ではないだろう。

文献・地誌学研究において全国的に条里制研究が盛んになった1950年代以降、一町方格の地割を連ねた土地区画の名称についても、さまざまな表現が用いられてきた。「条里制遺構」「条里遺構」「条里水田」「条里制土地割」「条里制地割」「条里地割」「条里形(型)土地割」などが代表例で、経済政策としての条里制と、土地行政・農村計画としての条里制など、呼称に対応する多くの概念が形成されてきた。法制度としての側面と土地区画としての側面を区別するなど研究の細分化が進み、一部では混沌とした状況下にある。こうした中で、旧来の「条里制」の語を避け、「三条五里十八坪」などのような土地の呼称と一町方格の土地区画に対する概念として「条里プラン」の語が提案されている(金田1985)。文献・地誌学研究者間では、現在のところ「条里地割」というのが一般的なところといえる。

本書は発掘調査によって検出した遺構を記述するものであり、上のような諸概念を避ける必要がある。同時に、これに関連した研究や検討を行う研究者集団や市民の間で一般化している呼称から遊離しないよう、配慮しなければならない。

近年、水田跡の調査事例が急激に増加するにしたがって使用されるようになった呼称に、「条里型地割」がある。きわめて考古学的な表現であるが、一町方格の土地区画方法として明確な計画が存在すること、土地区画の規格・設計・土木作業の内容を加味し、かつ制度の有無に規制されない呼称であること、法制史上登

場する一町方格の土地割である「条里」に適合することを表現できること、すでに一般的に用いられていること等から、現在のところ発掘調査の成果を記述する際にもっとも適した表記であると考えられる。

ところで、「条里」を冠した地割については、いくつかの認定条件が存在する。一般的には、一町方格の地割(「坪」)が存在すること、「坪」内が「長地型」あるいは「半折型」に区分されていること、とされる場合が多かったが、近年の発掘調査では、「坪」内部の区画に多様性が認められることが明らかになっている(矢田1993)。関東・東北では不定な細分が多く認められ、奈良盆地・大阪平野から静岡県下では「長地型」の地割が多いようであるが、いずれの場合も「坪」内部の全容が明らかにされた例は少なく、現段階では確定的なことはわかっていない。広域的な面的調査による判断が必要であろう。

このような状況下で、調査担当者側からは一町方格の土地区画をもって「条里型地割」の基本条件としようという提案がある(矢田1993)。文献史上においても中世以前の土地管理は「坪」単位で行われていたという報告もある(金田1991)。

これらの事柄を参考に、本書では一町方格の土地区画が1区画以上認められる場合、「条里型地割」と表記した。また、一町方格の区画および内部の区画についても、「条里型地割」の呼称の趣旨に沿って、一町方格の区画を「坪型区画」、「坪型区画」内部を縦もしくは横に「通し分割」する地割を「長地型」、はじめに縦もしくは横に半分分割し、後にこの区分線と垂直に分割する地割を「半折型」と呼称した。

なお、本書で「条里型」を冠する語は、いずれも一町方格の土地区画に基づいた配置・計画をもった遺構を意味するものである。

遺跡の名称

次に、本遺跡の名称「今井条里遺跡」について触れておきたい。今井条里遺跡は、神流川扇状地に展開する条里型地割をなす水田域のうち、本庄市大字今井周辺を指すもので、各機関で協議の結果、今回の発掘調査対象地に付された便宜的な名称である。

今井条里遺跡が属する条里型地割をなす水田域は、生野山丘陵と大久保山丘陵を境に、金鑽川・赤根川・女堀川流域と小山川・志戸川流域に分けることができる。慣例的には、児玉町一帯に展開する前者を児玉条里遺跡あるいは女堀川条里、美里町十条を中心に展開する後者を十条条里遺跡と呼称する場合がある。また、「一郡一条里の原則」をもって児玉条里と呼称する場合もあるが、一郡内の条里型地割が統一の規格で営ま

2. 調査の方法

平成4年度、本庄市によって実施された試掘調査の結果、今井条里遺跡の調査対象範囲は、本庄今井工業団地（現在、埼玉県長期ビジョンにともない「本庄いまい台産業団地」と正式名称が変更されている）の造成地全体約300,000㎡におよぶものと判断された。事業の公共性等を考慮した結果、全対象範囲について均等かつ精緻な調査を行うことは事実上不可能と判断し、次の要領で調査を行った。

- 1) 基本の堆積状況・土壌変化の状況を把握し、調査可能な層位を確認した。下記の水田土壌、水田跡の認定条件を踏まえた確認の結果、今井条里遺跡ではAs-A火山灰を直上層にもつII-1層水田跡、As-B火山灰を直上層にもつIV-1層水田跡、VI層洪水砂を直上層にもつVII-1層水田跡、厚い耕作土をもつVII-2層水田跡について調査可能と判断した。その他の水田土壌については、各土壌の層厚がきわめて薄く、土壌間隔がほとんどないこと、どの層位における営田による土壌化かが判然としなないことから、一部の地区における確認に留めることにした。
- 2) 調査対象範囲全体のトレンチ調査を行い、各区域

れたものでないことは、すでに周知のことであるし、この原則を否定する条里研究者はかねてから多数存在する（落合1967など）。近年では、条里型地割の計画線の境界が研究対象になり、坪の形状に変化のある「変形条里」や、2郡以上にわたる「広域条里」、一里に満たない少数の坪からなる「小規模条里」がとりあげられるようになり（矢田1993、条里制研究会など）、表層条里型地割をもって条里型地割の歴史的検討を行うのは難しい段階にきているといつてよい。

今井条里遺跡の属する表層条里型地割をみると、本遺跡の呼称が最良であるとはいえないが、歴史的な解釈を除外し、遺跡の所在地を適宜示すものであるとしたとき、当面、妥当な名称であると捉えたい。

ごとの遺存状態を確認した。

- 3) 遺存状態によって、各区域ごとの調査方法・調査の精度を検討した。遺存状態の悪い区域では、基本的な条項（基本的な堆積と土壌、遺構の存否、遺構の形態、遺構の状況、地割方法、表層条里型地割との関係）に限って重点的に、遺存状態のよい区域では、対象の時代・時期について精度の高い調査（水田面の状況、足跡調査、小区画水田の水懸かり、水口・尻水口の確認、自然科学的分析等）を行うことを基本方針とした。
- 4) 調査は坪型区画を基本単位として行った。坪型区画は、周囲に巡る大畦畔跡・用水路跡を含めて捉え、隣接する坪型区画の一部を含めて表土を掘削した。
- 5) 坪型区画を調査する場合、はじめにトレンチ調査を行い坪型区画内部の堆積状況・土壌化の状況、畦畔・用水路跡の存在等を確認した。
- 6) 坪型区画に入れるトレンチは中央を通る十字を基本とした。周囲に排水溝を掘削して層位・土壌把握の補助とするのは極力避けた。これは、用水路跡からの引水状況、坪界線からの地割状況など、

条里型地割の基準となる要素の欠落を防ぐためである。

- 7) 表土は、水田耕作土表面もしくは遺構面の上位に堆積した層を薄く残して重機で掘削し、残りの部分を水田耕作土表面もしくは遺構面まで人力で掘削した。
- 8) 遺構の実測および写真は、人力による1mメッシュの地張測量と航空写真・航空写真測量を併用した。等高線は1または2cm間隔とした。これは、水田耕作土を盛り上げて造る畦畔の判別に対応したもので、水田耕作土表面において、上部を上層の水田耕作で削り取られたため微細な高まりしか

もたず、しかも畦畔下に明瞭な土壌化による疑似畦畔がみられない場合の畦畔検出を目的としたものである。

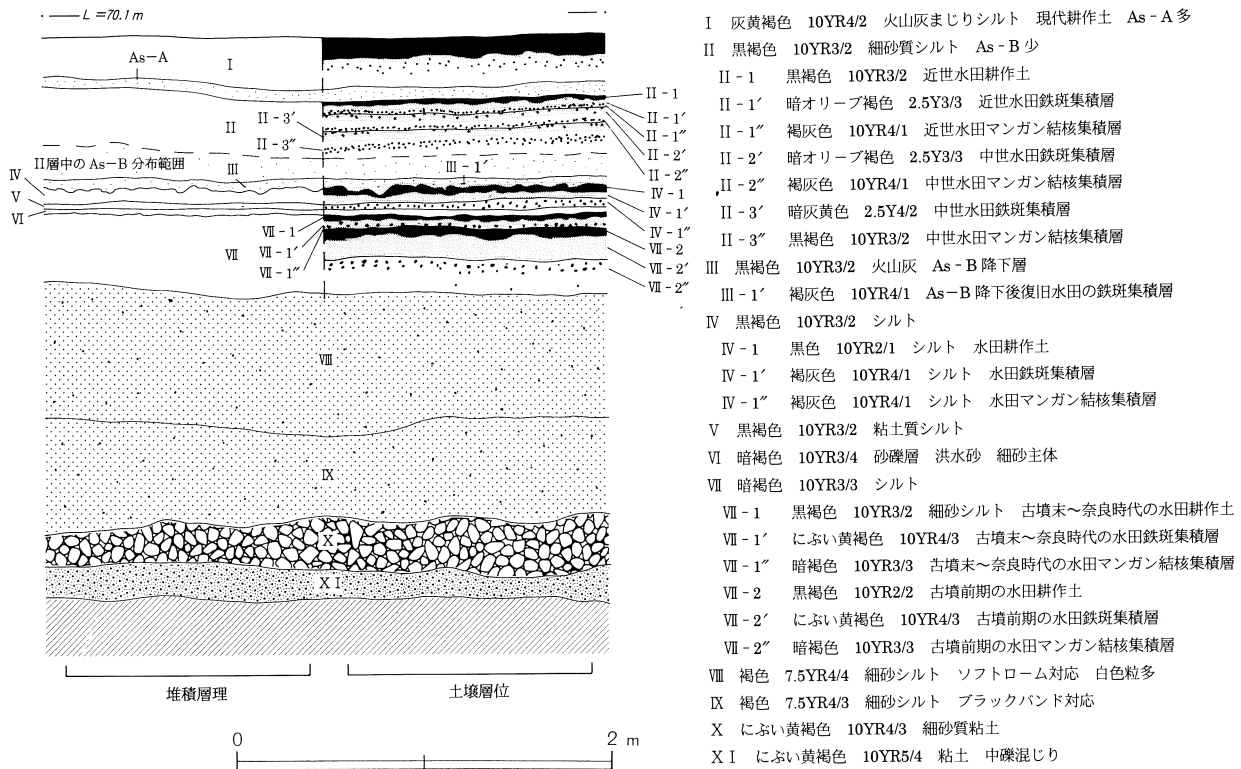
- 9) 造成事業計画との整合を図り、必要に応じて調査区域を設定した。
- 10) 水田面については、畦畔の検出を中心にできるかぎり広範な調査を行った。
- 11) 下層面の調査では、上層との関係に配慮し、疑似畦畔と当該面での畦畔を区別するよう努めた。
- 12) 水田耕作土認定および耕作方法を確認するため、水田面の調査後、耕作土を除去して床上面の状況を調べるよう努めた。

3. 基本層序

対象範囲を広域にトレンチ調査することによって、遺跡南東部ほど堆積層理が厚く、土壌化の状態もよいことがわかった。基本層序の標本として、初年次である平成5年度に調査したJ4グリッドの土層柱状図をあげた。

基本層序では、堆積による層理と水田経営による土壌化にともなう層位とを区別した。堆積による層理区分は、ローマ数字（I～XI）を用いて行い、水田経営によって生じた土壌化を水田耕作土表面、もしくは同一の土壌化による層位と認められる単位のうち最上

第8図 基本堆積層理と土壌層位



層の属する堆積層理に算用数字（1～）をつけて表記し、各土壌化に対応する水田跡を「ローマ数字－算用数字 層水田跡」と呼んだ（例えばIV－1層水田跡は、堆積層理IV層中の上位から1番目の水田土壌をなす水田跡をさす）。また、各水田土壌の単位のうち、耕作土は無印とし、鉄斑集積層には（'）を、マンガン結核集積層には（"）を付した（IV－1層は堆積層理IV層中に営田された水田土壌のうち上位から1番目の水田土壌中耕作土を表し、IV－1'層は鉄斑集積層を、IV－1"層はマンガン結核集積層を表す）。

基本的な堆積は、X層以下が神流川扇状地を構成する扇状地性堆積物で、VIII・IX層がこれを被覆する立川面対応の火山灰土（ローム層）である。砂粒の混入が非常に多いことを特徴とし、全体にマンガン結核が多く分布する。地下水位は非常に低く、XI層がややグライ化しているものの、X層以上は酸化土である。ただし、IX層には部分的にグライ化の痕跡が認められる。これは夏場の今井地区に時折発生する伏流水の湧水である「久上水」の影響とみられ、過去の地下水位変動よりも季節的な水位の変化と考えられる。VII層はいわゆるローム漸移層である。砂粒の多く混じるシルト層である。2単位の水田土壌が認められた。上層のVII－1層は非常に薄く、層厚2cm程度の耕作土下に層厚約3cm程度の鉄斑集積層、さらに層厚5cm程度のマンガン集積層が認められた。耕作土はほとんど遺存していなかったが、部分的に直上のVI層洪水砂に被覆されたため水田面として検出することができた。鉄斑集積層上面には、鋤による耕起痕が認められ、耕作土直下の鉄斑集積層が鋤床であることが確認できた。VII－2層の土壌化は明確で、水田面そのものを確認することはできなかったが、層厚5cm程度の耕作土が遺存しており、下層には層厚15cm程度の鉄斑集積層と10cm程度のマンガン結核集積層が認められた。鉄斑集積層上面には、耕作によるものとみられる攪乱があった。鉄斑集積層上面が鋤床であると思われる。水田耕作土には、As－Cの混入があった。

VI層は洪水砂である。

V層はVI層の砂粒が混じるシルト層である。2層の鉄斑集積層（層厚0.5cm～2cm）が認められたが、明瞭な耕作土、マンガン結核集積層は確認できなかった。

IV層は粘性・含水率の高いシルト層である。As－B火山灰に被覆された1単位の土壌化を認めた。耕作土は有機質で粘性・含水率とも高く、粘土化しつつある。層厚は2～10cm程度であった。鉄斑集積層は非常に明瞭で層厚15cm程度であった。下位に層厚5cm程度の非常に密なマンガン集積層が形成されており、さらにV層全体にわたってIV－1層水田跡にともなうマンガン結核の集積が認められた。

III層はAs－Bの堆積層であるが、純粋な堆積状況の部分はほとんどなく、多くが降灰後の水田復旧にともなう攪乱を受けていた。上面に1層の水田が営まれたものと思われ、IV層上面に非常に薄い鉄斑集積層が形成されていた。

II層はシルト混じりの砂層で、安定的に厚く堆積している。水路の整備が進んだ後、風性堆積に女堀川からもたらされた砂粒が混じたものと考えられる。水田土壌は、約10cm間隔に認められる鉄斑集積層で5層程度が確認できるが、大畦畔付近やII－1層とII－2層間などでは2～3cm間隔となる場合もある。明瞭に観察できたのは3層の鉄斑集積層であった。特にもっとも上位のII－1層では、I層との間にAs－A火山灰の厚い堆積があり一部で水田耕作土および水田面が保存されていた。全堆積層理中にまばらなマンガン結核の集積がみられた。

I層はAs－Aとシルト質砂が混じたもので、多量のパミスが特徴的である。表土下10cm弱のところに明瞭な鉄斑集積層が存在していた。現表土を耕作土とする鉄斑集積層である。これは表層条里型地割に対応するものである。

今井条里遺跡では、上のように痕跡をふくめ11層の水田土壌が確認できた。耕作土表面もしくはこれに近似した耕作土が遺存していたのは4層に限られる。

4. 水田土壌の認定基準

水田は、畦畔とこれに区画された耕作土と床の湛水部分からなる。畦畔と耕作土・床土がそろえば水田跡として認定できるわけだが、火山灰や洪水砂によって完全に埋没したものを除き、水田跡の検出は土壌学的な所見によらなければならない。

今井条里遺跡では、火山灰および洪水砂の堆積が認められるが、埋没した高まりのある畦畔を検出することはほとんどできなかった。ここでは、今井条里遺跡における土壌学的水田跡の認定基準を示し、用語の整理を行っておきたい。

水田は表面に湛える水の鉛直透過によって耕作土中の鉄・マンガン・有機物等が容脱し、耕作土と床土および下位の土層に土壌学的な変化をもたらす。

水田は、大きく乾田系水田と湿田系水田に分けられるが、それぞれ土壌学的な層位の形成に特徴がある。主に地下水位の高さによって区別される両者は、乾田系水田では、耕作土下の床土あるいは床土の下層に酸化鉄が斑状に析出し鉄斑集積層を、さらに下位に酸化マンガンが斑状に集積したマンガン斑集積層が形成される。前者をオレンジ斑鉄層、後者をマンガン斑層という場合もある。地下水位の高い「半乾田」などでは、地下水位変動層に酸化鉄の暈管状斑紋が現れる。湿田系水田では、耕作土がグライ化し、床土もしくは下位に炭酸鉄結核が集積する。床土は、地下水位の高低により弱グライ層である場合もある。

しかし、上記のような土壌化の存在をもって直ちに水田土壌の存在を認めることはできない。水田経営によって形成された水田土壌は、いろいろな要因で変化するからである。

土壌変化の一つの原因は、地下水位の変動によって水田土壌が消失したり移動したりすることや、形成された水田土壌が表面水の鉛直透過によって常に下位に移動していることからくる再土壌化である。

これを確認するため、今井条里遺跡における調査では、トレンチ調査の際にすべての坪型区画について地下水位の変動の確認を行った。土壌学では、現在のと

ころ水田面下1 m以下に地下水位のある場合（松井・近藤1965）やグライ層の位置が水田面下80cm以下の場合（三好ほか1983）が乾田系水田とされることが多い。今井条里遺跡では、地下水位変動層と思われる弱グライ化層は地表下330cm以下であり、すべての層位の水田土壌について後世の地下水位変動による再土壌化のない乾田系水田として捉えてよいことがわかった。

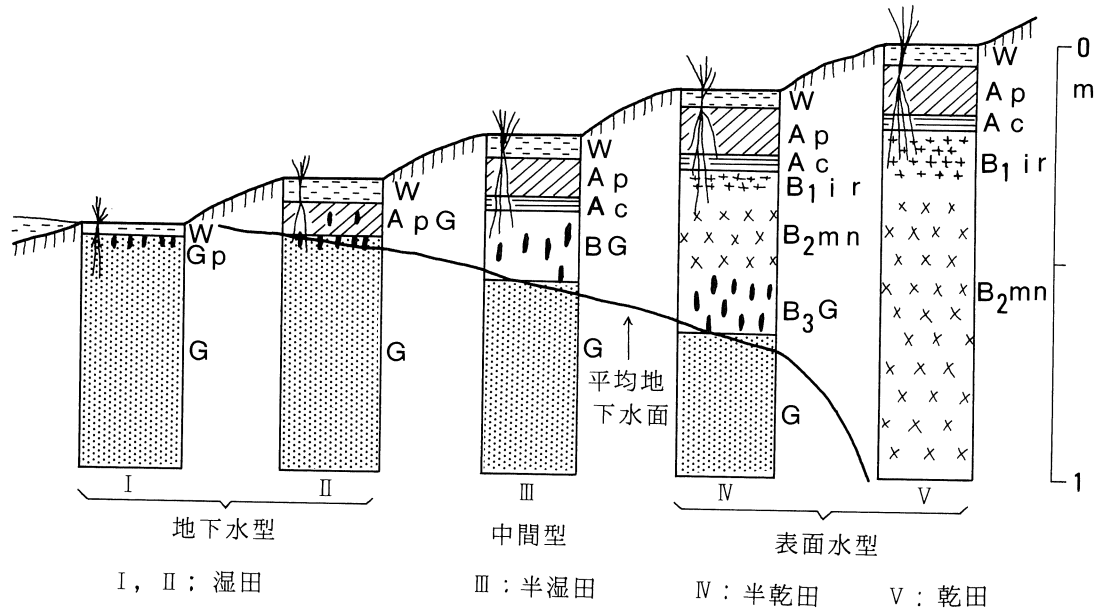
先に記したように一般的には、耕作土・鉄斑集積層・マンガン斑集積層の1単位をもって乾田系水田の水田土壌と考えてよい。しかし、1989年に行われた第5回条里制研究会において堺市小阪遺跡（赤木1989）で表層条里型水田の擬似畦畔が約1 m下の縄文晩期の層位に転写されていたことが報告されて以来、この認定方法に疑義がもたれている。問題は、床と床以下の層との土層構成碎屑物の粒度組成の相違や表面水の鉛直透過による水田土壌の日常的な下方への移動に起因して、鉄斑集積層が床土層もしくは床土層直下に確認できない場合があるため、鉄斑集積層をもって検出した水田跡が、どの層位で営田されたものかわからないこと、および鉄斑集積層よりかなり上層に床土が存在した可能性もあり、耕作土の認定自体にも疑義が生じてしまったことである。

土壌学における現状も同様で、床土に鉄斑集積がおこるとする研究結果（三木1968）と床土層より下層におこるとする結果（松井1970）が両立している。砂質土で床土に鉄斑集積がおこるとする研究結果の傾向があり、この結果が埼玉県槻川流域の結果であるということを加味しても、鉄斑集積層の上層に常に耕作土があるとはいえ、現在のところ鉄斑集積をもって耕作土、床土の存在を認定するのは困難であるとしなければならない。

土壌変化をもたらすもう一つの原因は、上層水田等による土壌の削剝がある。

もっとも一般的な事象は、水田の継続的な使用によるもので、安定的に少量の堆積物が供給されている場合、水田面は徐々に高くなるが、過去の水田の耕作土

第9図 水田跡の種類と擬似畦畔



W：湛水

Ap, ApG, Gp：作土（Gはグライ化土、pは耕土を示す記号）

Ac：鋤床

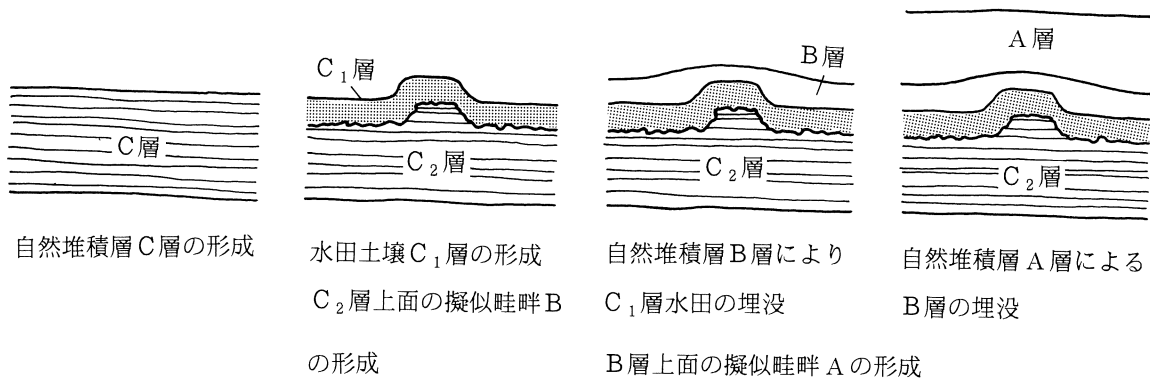
B_{1ir}：酸化鉄斑文集積層

B_{2mn}：酸化マンガン斑紋集積層

BG：地下水変動層（暈管状斑紋をふくむ）

G：グライ層（常時平均地下水面以下）

水田土壌断面模式図（松井 1970 より）



畦畔・擬似畦畔模式図（斎野他 1987 より）

は常に破壊されることになる。

また、水田の老朽化にともなう天地返し（容脱して下層に移動した鉄分等を耕作土に戻す深耕）が行われる場合がある。すでに形成されていた床、鉄斑集積層が破壊される。

火山灰降下など上位に水田耕作土として不適当な堆積物の被覆が起こると、これを水田耕作土に混ぜ込んで復旧する場合がある。復旧前の水田における耕作土および床が破壊される可能性がある。

これら削剝による水田土壌の破壊は、本来、耕作土・鉄斑集積層・マンガン斑集積層でセットとなる水田土壌が鉄斑集積層・マンガン斑集積層のセットや、マンガン斑集積層単独で存在する場合もあることを示している。

土壌化のおよぶ深さが、土層の粒度組成によって異なることを合わせると、耕作土・鉄斑集積層・マンガン斑集積層はいずれも単独で存在することがありえるといつてよい。

上記のことを考慮して、今井条里遺跡における調査では、次の条件のうち1または2と3・4を同時に満たす場合を積極的に水田土壌と認定し、5については上下の水田土壌のセット関係が完全で、かつ再土壌化の形跡が認められないものについて水田土壌と推定した。

- 1) 耕作土がある。耕作土は、有機質の土壌と有機物を含まない下位の層が認められ、下位層上面に耕作による攪乱、上位の有機質土層下部に下位層のまきあげ、下位層上面に上層の人為的落ち込みのいずれかがある場合に限り認定した。同時に土壌のプラント・オーパール分析を行い、考古学的な見解を補った。
- 2) 耕作土はないが、耕作痕をとまなう床上面がある。

5. 水田面・畦畔の検出方法

水田土壌の存在と遺構としての水田跡の存在とは同義ではない。水田調査における水田跡の検出は、主に埋没水田調査における水田跡そのものの検出、かつて

耕作痕は、鋤跡・手鋤跡などが面的に行動の連続として検出されるものに限って認定した。

- 3) 耕作土下、または床土層内もしくは床土層の下層に鉄斑集積層がある。
- 4) 鉄斑集積層と同位もしくは下位にマンガン斑集積層がある。
- 5) 再土壌化の可能性が低いか認められない場合で、累積する鉄斑集積層・マンガン斑集積層がある。

なお、「耕作土」については本来「作土」といわれ、「床」について「鋤床」などと表現される場合があるが、前者についてはより性状を表現するため「耕作土」とし、後者については「床」には表面水の湛水状態を調整する役割をもつことや、床づくりが行われる場合があることなどから、鋤の耕作深度との関係を重視した「鋤床」を用いず、「床」を用いることにした。

「乾田」・「湿田」・「半乾田」・「表面水型水田」・「地下水型水田」等の用語も現在の使用状況を考慮して、「乾田系水田」・「湿田系水田」に統一した。

なお、上の条件から水田土壌として、I層内にある表層条里型地割にとまなう水田で、3年前まで耕作を続けていたもの、II-1層の単位をなす水田土壌、IV-1層の単位をなす水田土壌、VII-1層の単位をなす水田土壌、VII-2層の単位をなす水田土壌の5層位がこれを満たすが、基本層序では、他に、鉄斑集積層とマンガン斑集積層の組み合わせや、一方が上記の5層間に多数認められた。地下水位による変動がないこと、上記の条件を備えた水田跡によって上下を区切られていること、上記の水田土壌各層に移動が認められないことから、それらの土壌についても水田経営による痕跡と考え、層順・時期を含め各土壌層位の属する堆積層理に帰することができるとしてよいだろう。

水田が存在したことによってできた酸化鉄等の土壌化物質の分布を把握することを通じての水田痕跡の検出という2つの方法で行われている。両者は明確に区別

される必要がある。前者では遺構が調査対象となるが、後者では遺構の遺した影響が調査の対象となる。

今井条里遺跡における水田調査でも、火山灰および洪水砂による埋没水田跡は多くなかった。本書の性格上、水田跡検出の方法を示して、検出した水田跡の遺構としての性格を明確にしておく必要がある。今井条里遺跡では、火山灰・洪水砂の堆積が認められるため、特定部分については水田跡の全容が良好に遺存していた。これらの部分に関しては、水田耕作土・水田土壌の認定をもって水田跡の遺存を推定し、火山灰・洪水砂の除去によって高まりのある1条以上の畦畔を確認した場合、水田跡と認定し、表面をもって水田面とした。

しかし、大部分については、降灰・洪水後に深耕によって水田が復旧されているため、高まりのある畦畔が検出できない状況であった上、上層における擬似畦畔A(斎野1987、本書では擬似畦畔は斎野の概念を用いる)による下層畦畔の位置も想定できない状況にあった。また、断面では鉄斑・マンガン結核の集積がきわめて旺盛で、いずれの水田層においても床土層全体が酸化鉄集積によって褐色・褐灰色系に変色し、マンガン結核も過度に集積したため大部分で一律な分布となり、一般的な擬似畦畔Bの存在もほとんど認めることができなかった。上層に降灰・洪水のないVII-2層でも状況は同じであった。

このような状況の中、実際の調査にあたって次のような方法をとることにした(第10図)。

1) 表土除去については、水田耕作土表面が遺存している場合を除き、上層からの攪乱土をすべて取り除くまで手作業で徐々に削り込んだ。その際、畦畔が出現するか否かに注意を注いだ。検出された畦畔は構成土壌を観察し、対象となる面に属するものか、上位の層位に属するものか判断した。強めに削り込むのは、対象となる遺構面の耕作土も、上位の攪乱によって一旦掘り返されたものが再び堆積した可能性があり、本来の遺構面として遺存していない場合、その下部に畦畔基部等が埋没し

ている可能性があるためである。

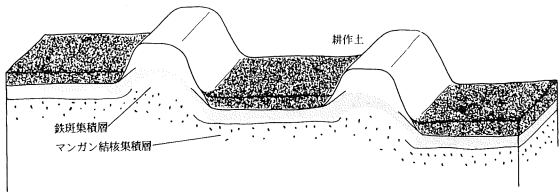
2) 擬似畦畔が認められないため、耕作土の切れ目をもって畦畔検出を行った。畦畔部分は本来耕作が行われないため、有機質の耕作土が分布しない。今井条里遺跡では、上部に有機質の耕作土がまったくない、下層(鉄斑が集積した床土層)の盛り上がりとして捉えることができた。畦畔部分には表面水の透過が斜めに起こる。このため、容脱した鉄分やマンガンは畦畔の形状に沿って集積し、下層に擬似畦畔Bを形成する。今井条里遺跡で検出した畦畔は、耕作土ののらない幅約20cm程度の下層の盛り上がりであって、床土と同じく鉄斑集積によって全体が褐色に変色していた。これは、土壌化による擬似畦畔Bの形成と類似の現象があった結果とも考えられるが、水田面が遺存していた火山灰による埋没水田でも、水田面と同レベルの畦畔基部は、褐色の下層土が露出していた。これらのことから、今井条里遺跡で検出した耕作土ののらない畦畔は、水田耕作土面との高さの比較からみても畦畔基部として扱えるだろう。なお、畦畔上部には耕作土と同じ土壌による盛土が行われていたと思われる。

3) 耕作土の切れ目として検出した畦畔に隣接し、しかも平行する部分に、耕作土と下層土の攪乱部分が帯状に、かつ共通の地割をもって検出された場合、同一水田面における旧畦畔として認定した。かつて畦畔として利用された部分が後に耕作されたものと捉えたもので、平行する2条の畦畔の存在に合理的機能が見いだせず、重複するように存在する場合に限った。

4) 鉄斑集積やマンガン斑集積の帯状分布によって判別できる擬似畦畔Bは、上記の畦畔と連続して検出できる場合に遺構に準ずるものとして扱った。この場合、平面図上等で擬似畦畔Bとして検出したことを示した。

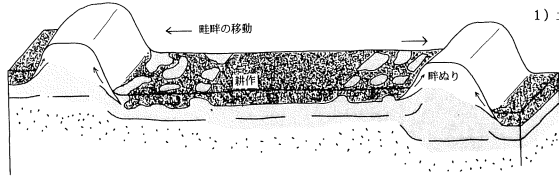
なお、今回行った方法では、畦畔が毎年破壊され作り直された場合、検出することはできないが、検出し

第10図 今井条里遺跡における畦畔の検出方法



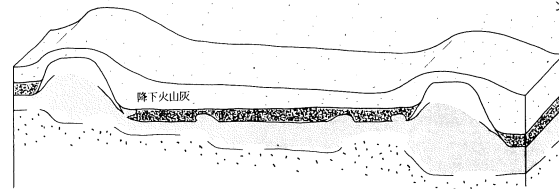
調査対象水田の開田

- 1) 土壌化によって鉄斑集積層とマンガン結核集積層が形成される。



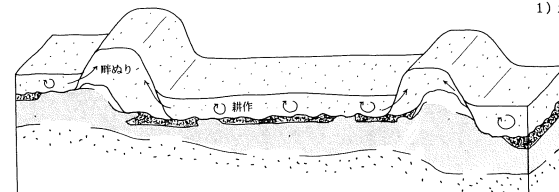
畦畔の付け替え

- 1) 上部に堆積の形跡がない場合、水田老朽化にともなう牛馬耕による深耕や、区画線の引き直し等の要因で畦畔の付け替えが起こったものと想定した。
- 2) 旧畦畔下の鉄斑集積層が、耕作によって攪乱されブロック状となり耕作土上面に露出する。
- 3) 土壌化の進行と既に形成された水田土壌層の下方への移動によって、鉄斑集積層とマンガン結核集積層が厚くなる。



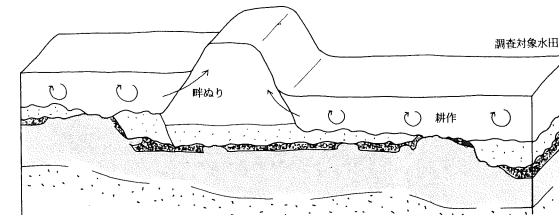
火山灰の降下

- 1) 水田面が埋没する。



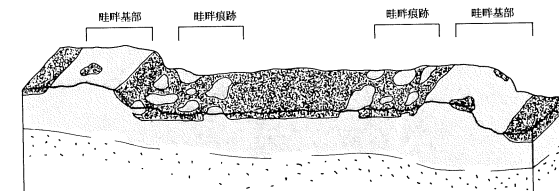
水田の復旧

- 1) 降下火山灰は保水性と養分に問題がある。深耕によって埋没水田の耕作土を混耕し、水田を復旧する。
- 2) 旧水田面は削平される。旧畦畔は上部の盛土を失うため、下層に形成された鉄斑集積層が露出する。



自然堆積後、中・近世の区画変更にもなう畦畔の付け替え

- 1) 自然堆積によって土壌が供給される。
- 2) 上層に後世(中・近世)の水田面が形成される。下層の水田面は耕作によって削平される。



調査段階

- 1) 調査対象となる水田跡上層に形成された耕作による攪乱土を取り除く。
- 2) 対象水田面に遺存する畦畔等を検出する。対象となる水田面は、火山灰降下後の耕作によって上部を削平されているため、部分的にのこる水田面、耕作土中に露出する鉄斑集積層の帯として把握できる畦畔基部、畦畔の付け替えによってブロック状の鉄斑集積層の分布となった旧畦畔の痕跡等、が検出できる。

なお、この模式図では、上位層に形成される水田によって起こる土壌変化については表現していない。

た畦畔からは頻繁に破壊された形跡は認められなかった。

6. 足跡の認定方法

埋没水田や耕作土表面を把握できた水田跡では、水田表面に無数の窪みが認められる。こうした窪みのうち、形状から明確に足跡と考えられているものがある。主なものに、人間、牛、馬、水鳥等がある。今井条里遺跡の調査においても、足跡と思われる窪みが無数に検出されているが、窪みの成因が明確でない現状では、足跡を認定する条件が必要である。調査段階では、以下の項目を満たす場合に足跡と認定した。

- 1) 明瞭に形状が把握でき、遺した主体を特定できるもの。人間では足指の形状、馬では前足蹄と後足蹄の形状の差異が判断できるもの。
- 2) 断面観察によって、耕作土の踏み込み、床土の褶曲・巻き上げ等が認められるもの。
- 3) 歩行の形跡が追跡できること。人間なら左右の規則的な歩行状況が、馬では前後の蹄跡が区別でき、規則的な歩行状況が認められるもの。

V 第1遺構面の遺構と遺物

概要

第1遺構面は、基本層序I層下層に存在する火山灰層を取り除くことによって検出した。火山灰層は、灰白色、乳白色を中心とする軽石を主体とするもので、下位の層に同様の火山灰層が2層存在すること、遺構面から江戸時代の出土遺物が採集されること、テフラ分析の結果などからみて、1783年の浅間山大噴火によって降下した火山灰層(As-A)であると考えられる。ほとんどの部分で、火山灰は攪乱を受けており、降下当時の状態で堆積した箇所は特定部分に限られていた。

調査は、調査時点で地表面に認められた坪型区画毎に実施した。はじめにバックホウを用いて、坪型区画中央をとおる幅約2mおよそ東西南北のトレンチ調査を行った。坪型区画を形成する1町方格の地割をなす水路については、いずれも断面調査によって中世以後の継続が認められたため、未買収地および調査時点で水田耕作を行っていたなど水利権の関係で掘削できなかった部分を除き、すべて面的に調査を行った。ただし、現在まで継続的に使用されてきたため、As-A層の自然堆積が認められる部分は少なかった。また、下層に遺構面として遺存しているのが、平安時代の面と考えられたため、中世以降に使用された遺構については、同時に調査することにした。1町方格の坪型区画跡をなす大畦畔、および坪型区画跡内部の水田面については、坪型区画跡の形状と内部状況の同時性を重視し、トレンチ断面に明瞭なAs-A層の堆積が認められた部分に限って面的調査を実施した。このため、検出した遺構は、中世から近代に至る時期のもので、第1遺構面で調査を行ったすべての遺構がAs-A層によって埋没したものに限られるわけではない。なお、その他の時期の大畦畔については、断面調査をもって代用したが、ほとんどの部分で水路補修、浚渫等による破壊を受けており、良好な状態で遺存していた部分はなかった。

検出した主な遺構は次の通りである。

中世から現在まで継続使用されてきた坪型区画跡31筆、中世の溝跡3条、このうち、坪型区画跡周囲の大畦畔にともなった用水路跡2条、坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水するための小規模用水路跡1条、近世の溝跡38条、このうち、坪型区画跡周囲の大畦畔にともなった用水路跡27条、坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水するための小規模用水路跡11条、坪型区画跡内部の小区画水田跡7筆、As-A層で埋没した坪型区画跡周囲の大畦畔1条、As-A層で埋没した坪型区画跡内部の小区画水田跡1筆、As-A層で埋戻された土坑1基である。これらの各時期の溝跡には、堰跡が認められるものもあり、遺存状態のよいものに限って調査した。

坪型区画跡は、用水路跡と大畦畔、および大畦畔のみからなる坪界線によって区画されていた。用水路をとまなう坪界線では、坪並の計画線上に用水路跡が配置され、この両側に双方の坪型区画跡の湛水のための大畦畔が設けられている状態で、各坪型区画跡にともなう2条の大畦畔の中央に用水路が配置されると表現するのが適当である。大畦畔のみからなる坪界線では、用水が大畦畔に設けられた尻水口から下方の坪型区画跡へ流れ込んでおり、数カ所の尻水口を検出した。

坪型区画跡は、北部の小規模な区画を除き、一辺約95~111mで、坪界線をほぼ正確な東西南北に向けて坪並を形成していた。坪型区画跡間の標高差は、明瞭な水田面が検出できた部分が少ないが、およそ12cm程度であった。坪型区画跡の周囲をめぐる用水路跡が方格子地割を崩すのは女堀川堤防近くと、調査範囲北西側G2グリッドで検出した第2号坪型区画跡南辺の第3号坪型区画跡との坪界線、同じく第7号坪型区画跡付近であった。女堀川の右岸では現在でも条里型地割がみられるのに対し、南北の2グリッド以西では明治時代以後の記録に条里型地割はみられず、北郭遺跡の存在も知られており、下層の調査結果からみても、この付近が条里型地割の限界と捉えられる。

坪界線に存在する用水路跡は、断面V字形のしっかりした掘り方をしたもので、遺存状態のよいものでは、上端の幅約3m、下端の幅約0.3m、深さ約0.8m程度で、顕著な蛇行が認められた。水流は南西から北東への傾斜にあわせて南から北、西から東であった。坪界線交点より上流約30m程度の部分からは、付近の水田に引水する支線用水路と下流の区画へ用水を供給する幹線用水路に分流して2条の用水路跡が平行してはしる「猿尾状」用水路となっており、現代の分水方法が近世まで遡ることが明らかになった。分水点には杭と丸太を利用した横木、および板材をもって溝跡の壁面崩壊をおさえる堰跡が認められる場合があった。出土遺物は少量の陶磁器類を得ることができた。

中世段階の用水路については、部分的に平行して2条以上が検出できた箇所もあったが、継続して用いられた用水路跡では、堆積が進むと浚渫が行われて上部が破壊されたため、分流部分が検出できず、「猿尾状」分水の初現を明らかにすることはできなかった。坪界線をはしる深い用水路跡は、第2遺構面の調査ではほとんど認めることがなく、中世以後の掘削によるものであることがわかった。出土遺物は、少量の陶磁器類と馬骨・馬歯を得ることができた。馬骨・馬歯の分布は用水路跡に広く認めることができた。

As-A堆積以後の坪型区画跡内部は、高さ約20cm、上端の幅約100～150cm程度の畦畔によって、14～20m程の幅で南北もしくは東西に区分され、さらに高さ約10～20cm程度、上端の幅約10～30cm程度の畦畔で5×10～5×30m程の小区画水田跡に区分されていた。前者の畦畔は一部で現代まで地割りを継続させており、継続性が低い後者の畦畔とは正確を異にしている。

As-A層で埋没した坪型区画跡内部の状況もほぼこれと共通した状況であった。埋没水田では明瞭な馬の蹄跡を検出した。畦畔の方向に沿って歩行した状況を把握できた。

以下に各遺構の状況を記述するが、溝跡、水田跡については、代表的なものに限定し、その他は第9・10表に譲るものとする。

第1号坪型区画跡(第11図)

E2・F2・G2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、北側で区画がみだれるものの、西・南・東に正方位を基軸とした坪型区画を形成する用水路が認められ、内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成6年の調査段階まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が少なくほとんどが表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壤層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、一部にAs-A層、II-1'層・VII層・VIII層という層序が認められた。VII・VIII層には、水田経営にともなうものと考えられる多量のマンガン結核の集積があった。第1遺構面における表土除去は、VII層上面まで取り除いた。

溝跡・大畦畔

調査範囲は、現在も耕作が続いている未買収地の存在、および周辺水田の水利権保護のため、表層の坪型区画内部のうち、南東部の4分の1程度に限られた。F2グリッド南側に設定した調査区内では、As-A層で埋没した遺構として、中央付近で南北にのびる第71・72号溝跡を検出した。この2条が表層の坪型区画の南辺をなす用水路下に併行して続くものであった。周囲の表層坪型区画と第1遺構面で検出した溝跡の状況などからみて、この2条の続く南側の表層坪型区画をなす用水路下に同様の地割に基づく溝跡が存在することが予想された。また東側にも続くものであると考えられることから、As-A降下時点で経営されていた坪型区画跡であると認定した。

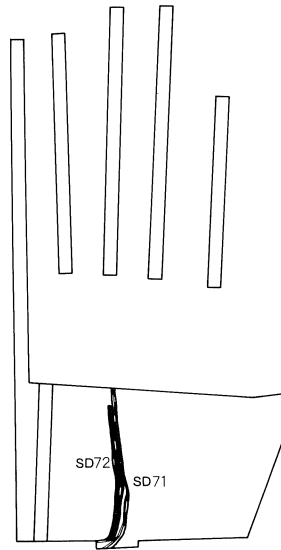
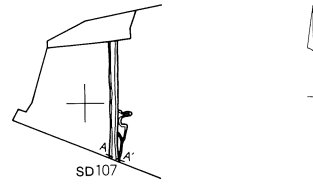
なお、中世に遡る可能性のある遺構、遺物、水田土壌は検出できなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

区画内の地割は、南北方向のSD71・72が存在することから、南北方向に継続性の高い区画が存在した可能

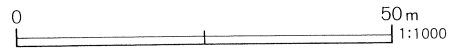
第11図 第1号坪型区画跡

F2

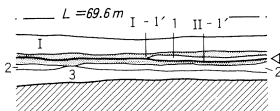


G2

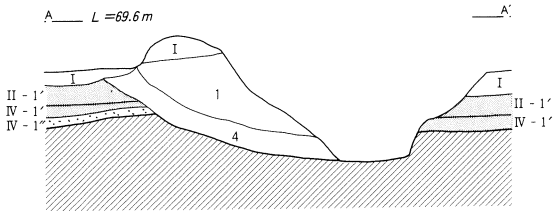
G3



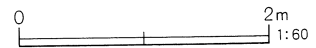
土壤層位



A L = 69.6m



- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 火山灰 As-A 純層
- 2 にふい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 基本層序のVII~VIII層対応
- 3 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト As-C 含
- 4 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト



性が高い。また、本来、遺構が存在する基本層序II-1層が全く遺存していなかったため、大畦畔・内部の小区画水田跡等の詳細は明確にできなかった。

出土遺物はなかった。

第2号坪型区画跡(第12・13・47図)

F2・G2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。坪型区画南東側の坪界線付近には、北西から南辺の用水路に流れ込む用水路が認められる。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、As-Aによる埋没水田ではないが、対応する層と考えられるII-1層、II-1層、VIII層、VIII層という層序が認められた。VII・VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第1遺構面における表土除去はII-1層上面までとした。

調査範囲は周辺水田の水利権保護のため、北辺坪界線を除く部分に限られた。

検出した坪界線は、いずれも中央に溝跡をもつ大畦畔で区画されており、溝跡の芯芯距離で南北約103mであった。坪界線の方位は、東辺がN-1°-E、南辺がN-96°-Eで、やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなしていた。

なお、中世に遡る可能性のある遺構、遺物、水田土壌は検出できなかった。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南辺を限る坪界線では、近世から近代に至る用水路跡SD33-37およびこれにともなう大畦畔を検出した。近代・現代の遺物を含むSD37は、本来

の坪界線より北西側から流れ込み、坪界線との交点以東では、坪界線を通る用水路跡となる。この地割りは現在の表層地割りと共通しているが、As-A降下以前の用水路跡は、坪界線を東西にとっており、As-Aの降灰層準を覆土にもつSD33の地割りを起源にしたものと考えられる。SD37は、第2・3・10・11号坪型区画跡との坪界線交点を北に向きを変え、東辺の坪界線を構成する。南辺の坪界線を通る用水路跡は、東方への流下が明瞭ではなく、いわゆる「猿尾状」の分水は認められなかった。これは、より規模の大きい南の第3号坪型区画跡と第11号坪型区画跡間の坪界線を北流する用水路跡SD40が、第2・3・10・11号坪型区画跡の坪界線交点で北および東に分水するなど、用水の切り回し方法によるものと考えられる。

断面調査では近世から近代に至る浚渫による存続が認められた。用水路跡の規模は大畦畔上端で計測した場合、幅約2~3m、下端の幅約30~50cm、深さ30~60cmであった。

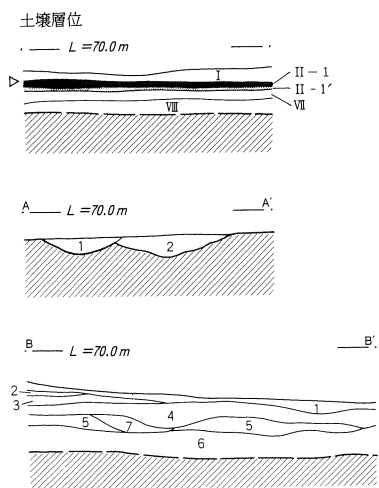
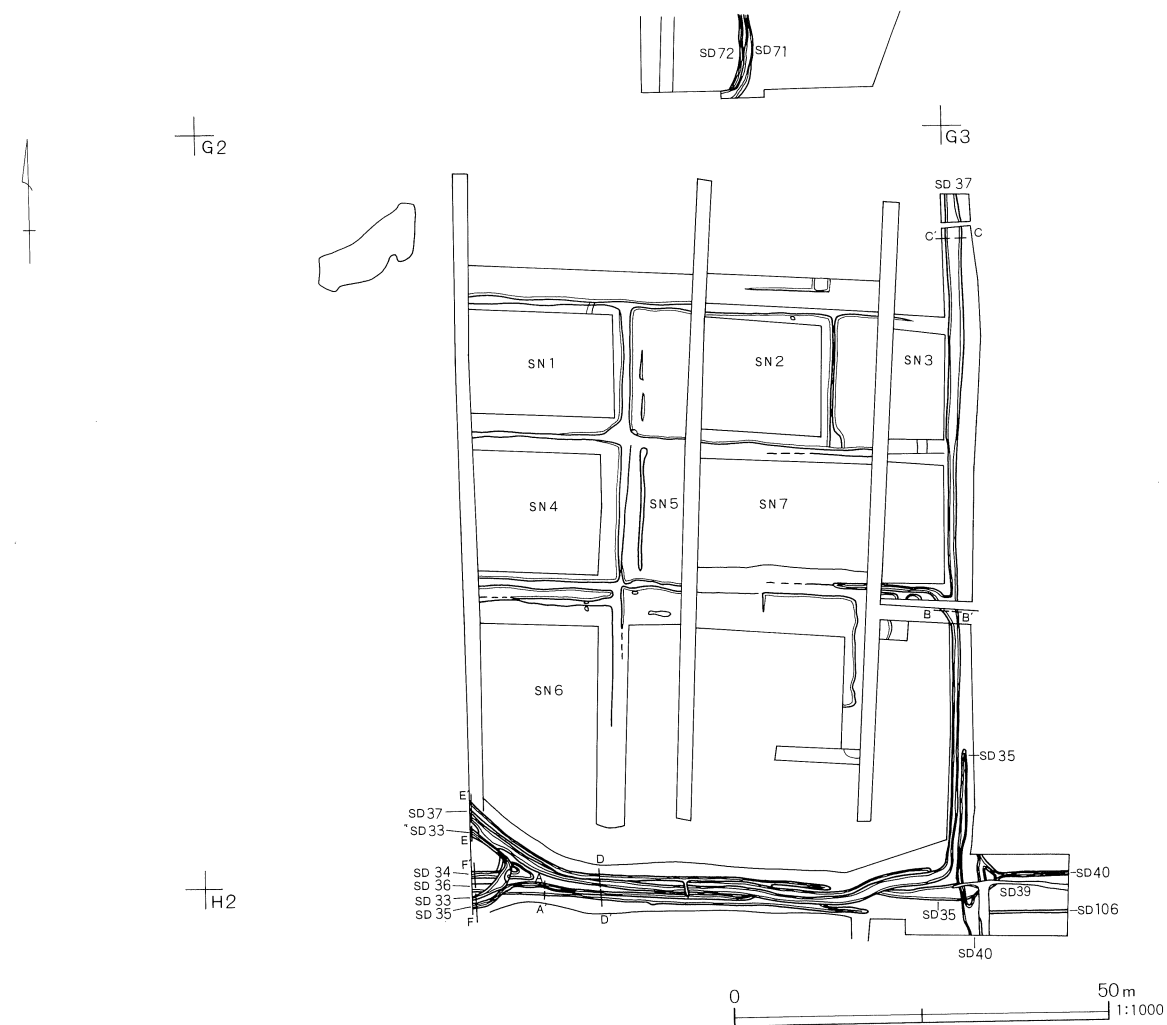
調査期間等との関係から、大畦畔は断面調査としたが、それぞれ対応する溝跡壁面から直接盛土されていた。大畦畔は盛土が基本で杭・矢板による補強は行われていなかった。As-A降下以前のもので、上端の幅約30~70cm、下端の幅約40~80cm、水田面からの高さ10cm程度、As-A以後のもので、上端の幅約40cm、下端の幅約80cm、水田面からの高さ10cm程度であった。

出土遺物はSD37で少量の陶磁器類を得た。もっとも古いもので、18世紀中頃以降に流通した伊万里焼くらわんか手茶碗や在地産のすり鉢片で、近代の遺物も混在していた。

坪型区画跡内部の地割り・水田跡

坪型区画跡内は、東西方向にやや規模の大きな畦畔が存在し、長地型に地割られていた。この区画は、短辺の東西が畦畔の芯芯距離で14~20mであった。1段内部は、小規模な畦畔でさらに小区画に区分されており、畦畔内辺で南北14×18m~20×27m程度の小区画水田跡となっていた。東西方向の畦畔は上面の幅

第12図 第2号坪型区画跡

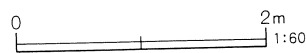


A - A'

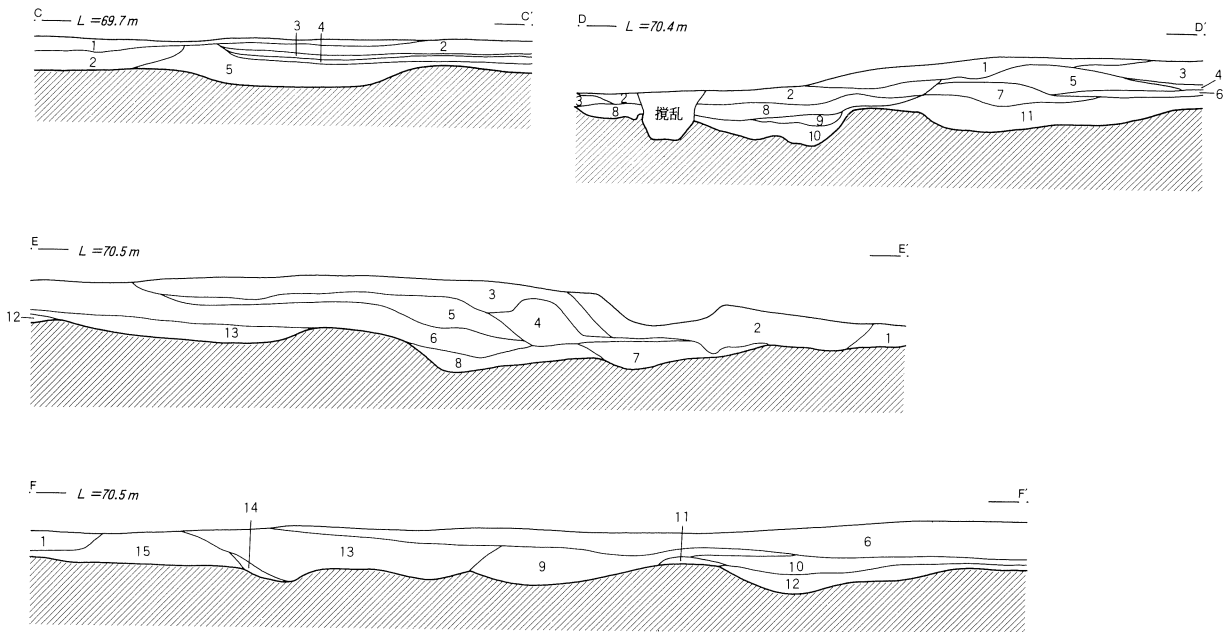
- 1 におい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト As-A 少
- 2 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト

B - B'

- 1 シルト質火山灰 10YR3/3 暗褐色 現代耕作および草による攪乱層
- 3 褐色 10YR4/4 シルト質火山灰 現代～江戸水田下の鉄斑集積層 II-1' 層
- 4 褐色 10YR4/4 シルト質火山灰 江戸水田下の鉄斑集積層 II-1'' 層
- 5 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 近世から現代水田のマンガン斑層 VII層
- 6 暗褐色 7.5YR3/4 細砂質シルト VIII層
- 7 暗褐色 10YR3/4 シルト As-A 以前の用水路 (SD37)



第13図 第2号坪型区画跡土層図



C - C' · D - D'

- 1 暗褐色 10YR3/3 色 砂質シルト 現代攪乱層
- 2 暗灰黄色 2.5Y4/2 粗細砂質シルト 現代用水路堆積物
- 3 にふい黄褐色 10YR4/3 火山質シルト 現代耕作土 基本層序 I - 1 層
- 4 にふい黄褐色 10YR4/3 火山質シルト 鉄斑集積層 基本層序 I - 1' 層 As-A 多
- 5 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト質火山灰 As-A 主体 近代大畦畔
- 6 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト 7層の畦畔にともなう鉄斑集積層
- 7 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト 6層にともなう近世大畦畔
- 8 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト質火山灰 5層にともなう用水路 As-A 主体
- 9 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト 7層にともなう用水路
- 10 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト 7層にともなう用水路 酸化鉄結核多
- 11 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 中世以後の用水路

E - E' · F - F'

- 1 褐色 10YR4/4 シルト質火山灰 現代作土 基本層序 I - 1 層
- 2 黒褐色 10YR3/2 火山質シルト 近現代溝覆土 As-A 多
- 3 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 玉砂利を上面に敷いた現代農道
- 4 褐色 10YR4/4 火山質シルト 8層の農道以前の畦畔 As-A 非常に多含
- 5 褐色 10YR4/4 火山質シルト 9層以前の畦畔
- 6 褐色 10YR4/4 火山質シルト 10層以前の畦畔
- 7 暗褐色 10YR3/3 火山質シルト As-A 以後の用水路 As-A 多含
- 8 暗褐色 10YR3/4 シルト As-A 以前の用水路 (SD37)
- 9 にふい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト As-A 以前の畦畔
- 10 暗褐色 10YR3/4 シルト層 As-A 以前の大畦畔
- 11 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 中世の畦畔
- 12 暗褐色 10YR3/2 シルト 中世の畦畔
- 13 暗褐色 10YR3/4 シルト質火山灰 As-A 以後のSD33 覆土 As-A 主体
- 14 褐色 10YR4/4 火山質シルト 地山崩落層 As-A 主体
- 15 暗褐色 10YR3/4 シルト II - 2 ~ 3 対応



100～150cm、下端の幅120～200cm程度、高さ20cm前後で継続性の高い、いわゆる「中畦畔」である。南北方向の小区画をなす畦畔は上面の幅10～30cm、下端の幅30～50cm程度、高さ10～20cm前後で、継続性の低い畦畔と考えられる小畦畔であった。

検出した小区画水田跡は7筆で、攪乱されてはいるものの、層厚20～30cm程度のAs-A層を覆土にもち、近世から近代初期の水田跡と考えられる。水田土壌は層厚5～8cm程度の耕作土(II-1)下に層厚5cm程度の酸化鉄集積層(II-1')が認められた。酸化鉄集積層下には、中世から近世の水田経営にともなう酸化鉄集積層(II-2')が一部に認められた。マンガン結核の集積は、VII層上面に認められたが、すでに削平された水田土壌を含め、どの水田経営にともなうものか判断できなかった。耕作土上面には現代水田の土壌化によって多量の酸化鉄とマンガン結核が集積しており、As-A降下後の耕作による攪乱のため本来の水田表面を検出することはできなかった。出土遺物は、水田耕作土およびI層下層の一部に分布する純度の高いAs-A層内より、少量の陶磁器片と、第3号水田跡南東小畦畔際の耕作土中から柘製横櫛(第47図10)が出土した。

第3号坪型区画跡(第14図)

G2・H2・I2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は南北に2分する半折型となっているが、北側区画では、東西に2分する半折型の地割をなしている。坪型区画南辺の坪界線には、九郷用水から引水する幹線用水路が認められる。この用水路は現在、真下堀川と呼ばれる大規模用水路となっており、コンクリートブロックによる護岸工事が行われている。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌

層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、As-Aによる埋没水田ではないが、対応する層と考えられるII-1層、II-1'層、VII層、VIII層という層序が認められた。VII・VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第1遺構面における表土除去はII-1層上面までとした。

はじめにトレンチ調査を行った結果、第2号坪型区画跡と異なりAs-Aの堆積が少なく、現代水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していないことがわかった。また、周辺水田の水利権保護のため、東辺の溝跡(SD40)は部分調査にとどめ、南辺は真下堀川となっていたため、調査不可能であった。調査は、トレンチを中心に行い、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

検出した坪界線は北辺および第2・10・11号坪型区画跡との坪界線交点付近の東辺を検出したが、ともに中央に溝跡をもつ大畦畔で区画されていた。坪界線の方位は、北辺がN-96°-Eで、やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなしていたと思われる。

なお、中世に遡る可能性のある遺物、水田土壌は検出できなかった。

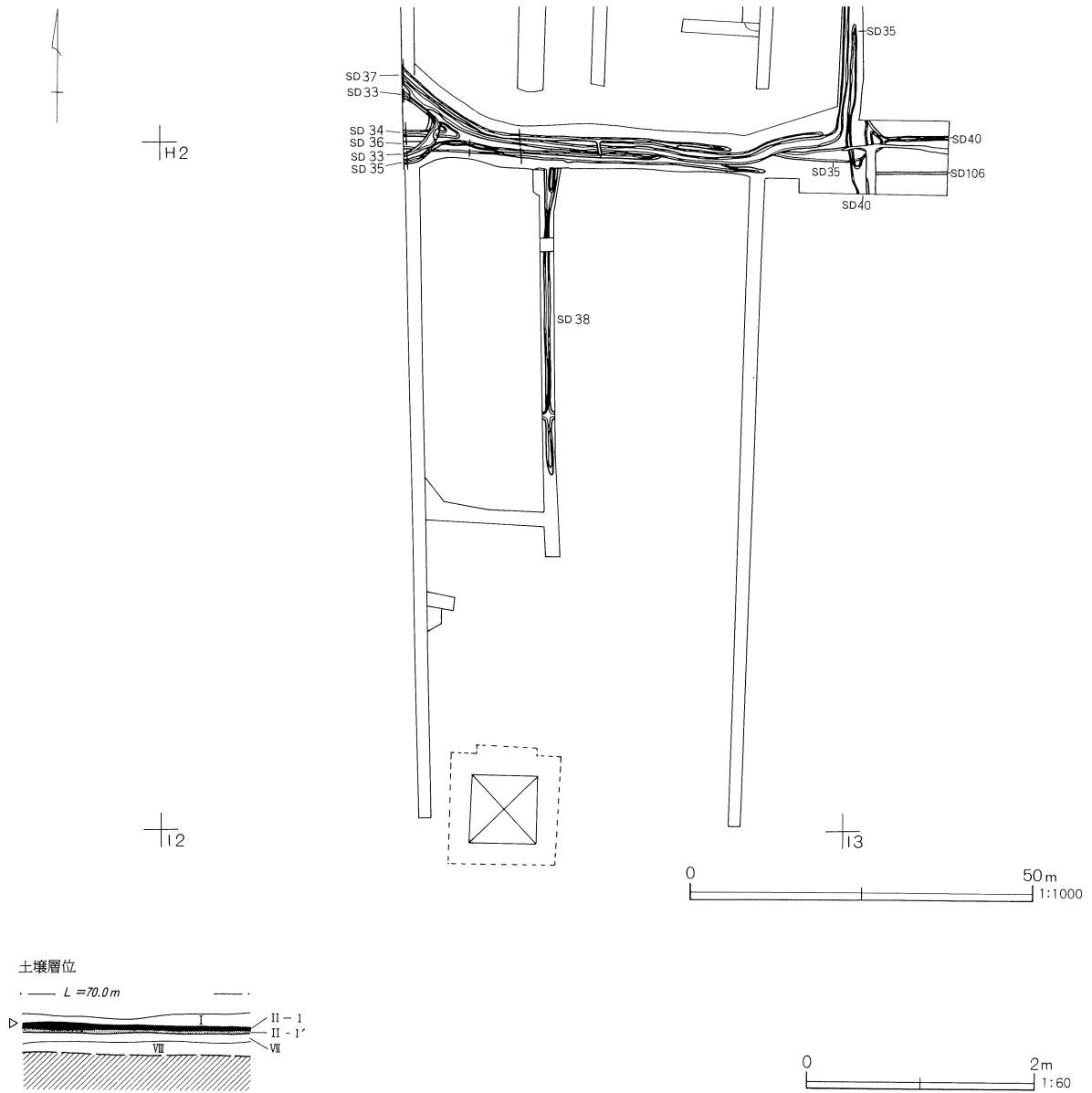
溝跡・大畦畔

表層坪型区画の北辺坪界線を構成する溝跡および大畦畔については、第2号坪型区画跡南辺と共通するので、第2号坪型区画跡の記述に譲る。東辺の坪界線を構成するSD40は真下堀川の前身となる幹線用水路から取水したのと考えられるが、確認することはできなかった。

検出できた遺構は、攪乱されたAs-Aまじりのシルト質細砂を覆土にもつ坪型区画跡内部の小規模用水路(SD38)に限られる。覆土からみて近代から現代に機能したのと考えられるが、出土遺物は得られなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

第14图 第3号坪型区画迹



現代水田の耕作による攪乱が激しく、明瞭な水田跡は確認できなかった。SD38の区画も、昭和24年の米軍写真にみられる北側区画を南北に2分する地割に共通しており、近世以前の坪型区画跡内部の地割を遺したものと判断することはできない。

第4号坪型区画跡(第15図)

I2・3、J2・3グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は南側の乱れを除き、南北方向の長地型に区画されている。坪型区画北辺は、九郷用水から取水する幹線用水路が東流し、西辺は女堀川から取水する幹線用水路が北流する。前者は現在の真下堀川、後者は横堀である。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位に土壌化のないII層、VI層の混入したV層、VII層、VIII層という層順が認められた。VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。また、As-Aの堆積が少ない上、現代水田の耕作による攪乱が激しく、ほとんどの部分で遺構が遺存していないことがわかった。北辺は真下堀川、西辺は調査対象地外となっていたため、南辺および東辺を中心に調査し、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

検出した坪界線は、いずれも中央に溝跡をもつ大畦畔で区画されていた。北辺と西辺が調査対象地外であったため、坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は、東辺が $N-1^{\circ}-E$ 、南辺が $N-92^{\circ}-E$ で、やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなすものと考えられる。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南辺を限る坪界線では、近世から現代に至る用水路跡SD2・193を検出した。両者は並行して東流し、第4・5・12・13号坪型区画跡坪界線交点で、SD193は北へ向きを変え第4・12号坪型区画跡坪界線を構成し、SD2は第12・13号坪型区画跡坪界線を構成しつつ東流していた。南辺にはいわゆる「猿尾状」の分水は認められなかったが、東辺のSD193は2個所で分水しており、いわゆる「猿尾状」分水があったことが推定できる。しかし、支流は現代までの浚渫および用水路の付け替え等で削平され10m程度の長さしか検出できなかった。SD2・SD193とも下層にはAs-Aの堆積が認められたが、上層は平成5年の調査段階まで使用されていた用水路が踏襲していた。いずれも近世以後の掘削と考えられる。SD193は東辺の坪界線では第12号坪型区画跡の平安時代水田土壌(IV-1層)を切って掘り込まれており、中世以前の区画を認めることはできなかった。

SD193の規模は、遺存していた近世段階の畦畔で計測して、上端の幅約100~250cm、下端の幅約20~50cm、深さ約40~80cmであった。SD2では、遺存していた近世段階の畦畔で計測して、上端の幅約100~150cm、下端の幅約20~40cm、深さ約50~80cmであった。ともに現代までの補修によって上端が広げられており、上端の幅については当時の規模を表すものではない。

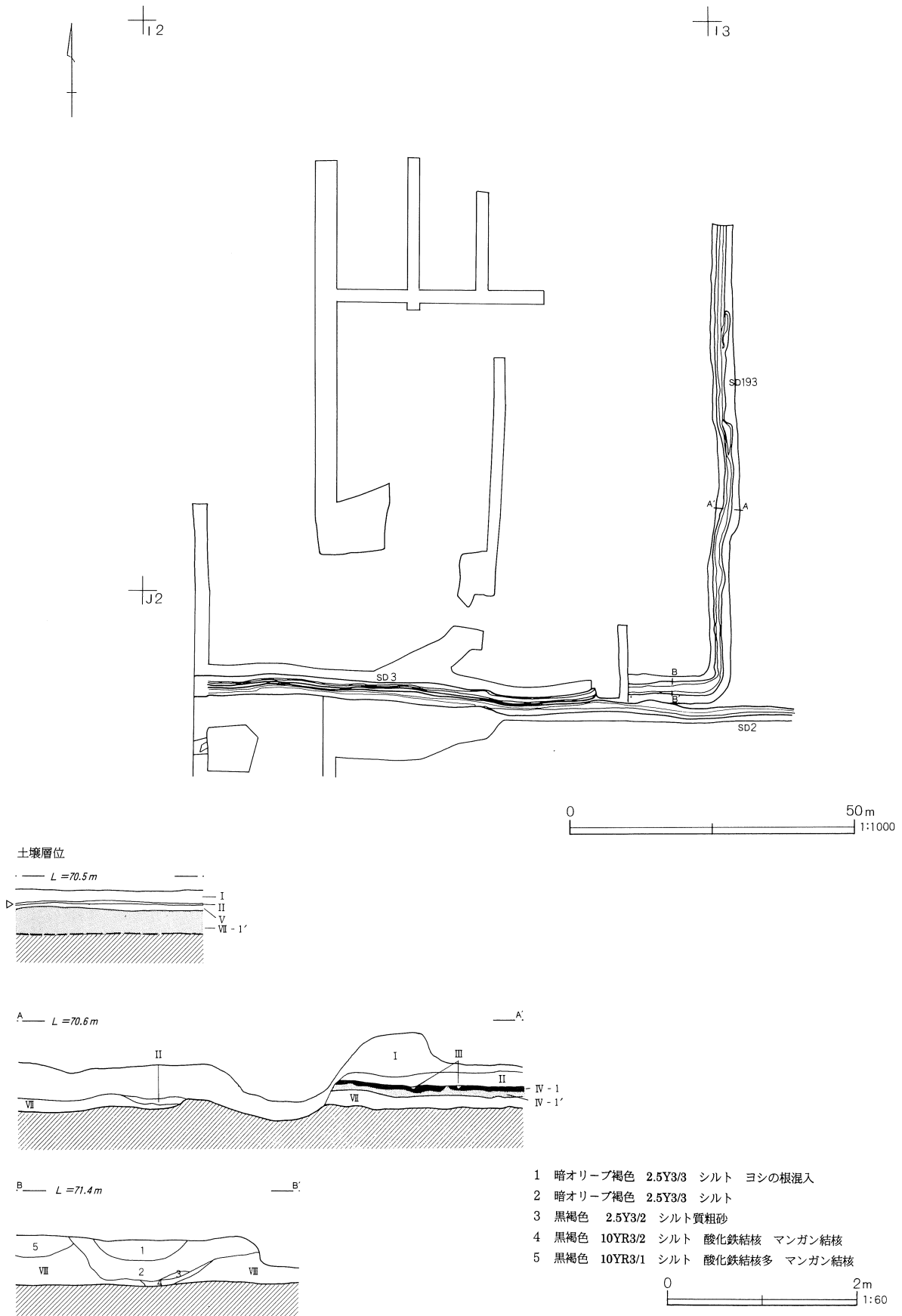
大畦畔は、溝跡の浚渫および補修等による破壊が著しかったため、断面調査とした。SD193両岸の近世段階の大畦畔は近世以後の耕作によってすでに破壊されていたが、地山であるVIII層の盛り上がりとして捉えることができた。盛土が基本で杭・矢板による補強は行われていなかった。具体的な規模は明らかにできなかった。

SD2の第5号坪型区画跡側には近世水田土壌にともなう大畦畔が認められたが、これについては、第5号坪型区画跡で記述する。

出土遺物は認められなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

第15図 第4号坪型区画跡



現代水田の耕作による攪乱が激しく、明瞭な水田跡等は確認できなかった。

第5号坪型区画跡(第16・17図)

J2・K2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は南北方向の長地型に区画されている。坪型区画西辺は女堀川から取水する幹線用水が北流する。現在の横堀である。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する近世の水田層と考えられるII-1'~II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV層、VII層、VIII層という層順が認められた。VII層およびVIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。また、第4遺構面で報告する河川跡SD22・23・24上部には平安時代の水田耕作土IV-1層、酸化鉄集積層IV-1'層マンガン結核集積層IV-1''層が明瞭に認められた。As-Aの堆積が少なく、現代水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。また、西辺は調査対象地外となっていたため、南辺および東辺を中心に調査し、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

検出した坪界線は、いずれも中央に溝跡をもつ大畦畔で区画されていた。北辺はSD2・3が第4号坪型区画跡との坪界線を構成し、南辺をなすSD1が第5・6・13・14号坪型区画跡坪界線交点で北に分流して東辺坪界線となっていた。ともに第5号坪型区画跡側の溝跡であるSD2・SD1の芯芯距離で、南北109mであった。坪界線の方位は、北辺がN-92°-E、南辺がN-94°-E、東辺がN-2°-E、で、やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなしていた。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の北辺を限る坪界線では、近世から現代に至る用水路跡SD2・193を検出した。両者は並行して東流し、第4・5・12・13号坪型区画跡坪界線交点でSD193は北へ向きを変え、SD2は第12・13号坪型区画跡坪界線を構成しつつ東流していた。いわゆる「猿尾状」の分水は認められなかった。SD2・SD193とも下層にはAs-Aの堆積が認められたが、上層は平成5年の調査段階まで使用されていた用水路が踏襲していた。近世以後の掘削と考えられる。

南辺の坪界線を構成するSD1は、北に近世段階の溝跡、南に近世から現代の溝跡が重複しており、南側の新段階の溝跡の破壊によって、「猿尾状」の分水については明確にできなかった。古段階の北側の溝跡は、覆土にAs-Aの堆積が認められ、下層にはこの堆積が認められないことから近世段階の、南側の溝跡はAs-Aの堆積がみられないことから近世後期のものと判断した。いずれも浚渫を繰り返しており、複数の溝底の重複が認められた。

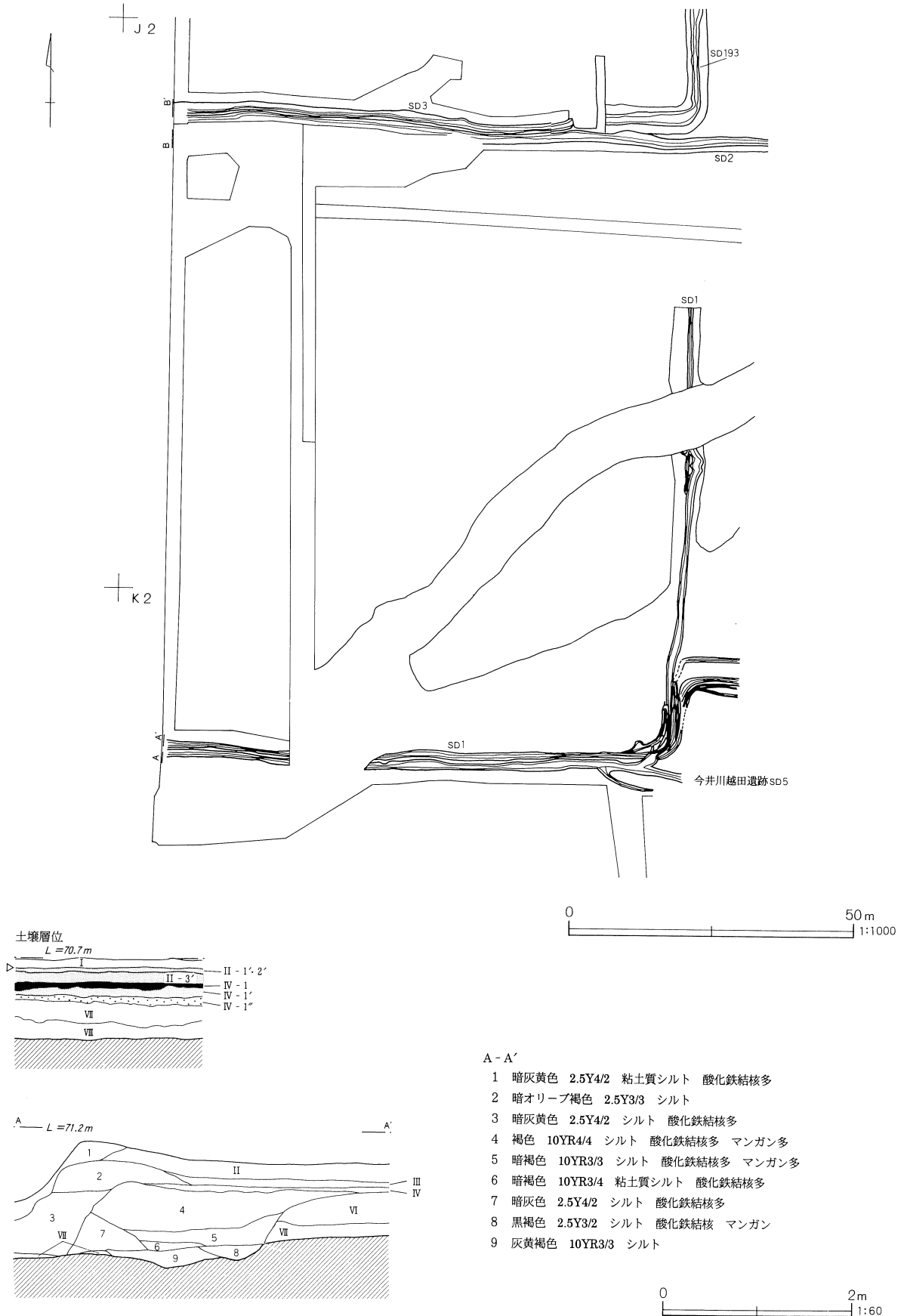
北側の溝跡は第5・6・13・14号坪型区画跡坪界線交点で北側に向きをかえて、第5号坪型区画跡の東辺坪界線を構成していた。第5・6・13・14号坪型区画跡坪界線交点では、SD1に切られた4条の用水路跡がほぼ地割を同じくして北側へ向きを変え、15~20m北流した後、さらに直角に東流していた。浚渫・補修を繰り返したSD1の前身と考えられ、SD1および周囲の坪型区画跡の状況から、近世段階に機能したものと推定できる。

溝跡の規模は、SD1南側は近世から近代段階と思われる大畦畔で計測して、上端の幅約270cm、下端の幅約90cm、深さ約80cm、SD1北側は近世段階の大畦畔で計測して、下端の幅約110cm、深さ約90cmであった。

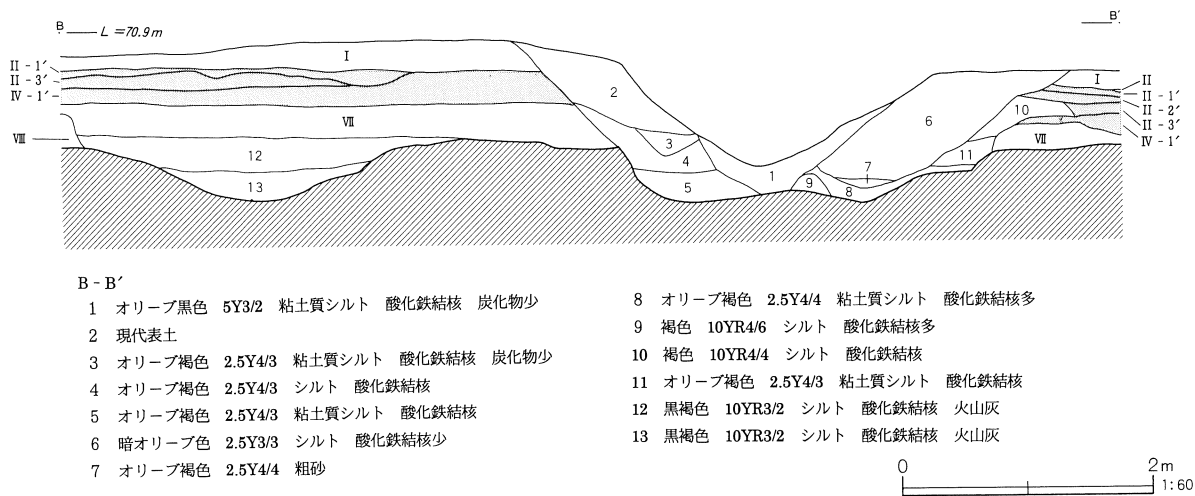
各溝跡にともなう大畦畔は、現代水田の耕作等にもなう攪乱によって破壊されていたため、断面調査をもって対応した。

SD1南側にともなう近世から近代段階の大畦畔は、上端の幅30cm、下端の幅64cm程度で、高さ10cmであっ

第16図 第5号坪型区画跡



第17図 第5号坪型区画跡土層図



た。SD1北側にもなう近世段階の大畦畔は、現代水田等の攪乱のため明らかにできなかった。

SD2の南側に認められた近世水田土壌にもなう大畦畔は、上端の幅110cm、下端の幅130cmで、高さ13cmであった。

いずれの畦畔も盛土が基本で、杭・矢板による補強は行われていなかった。なお、上端の幅については、上層水田等による攪乱・削平が行われており、当時の規模を表すものではない。

出土遺物は認められなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、明瞭な水田跡等は確認できなかった。

第6号坪型区画跡(付図1)

K2・L2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、北辺と西辺に東西南北を基軸とする用水路をもち、南辺と東辺に蛇行する用水路をもつ歪んだ坪型区画となっている。内部は東西方向の長地型に類似した区画となっているが、北西角付近に南西から北東への斜行した水路が認められる。坪型区画西辺は女堀川から取水する幹線用水が北流する。現在の横堀である。この地割りは平成5年の調査時点まで踏

襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する近世の水田層と考えられるII-1'~II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV層、VII層、VIII層という層序が認められた。VII層およびVIII層には、水田経営にもなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。また、第4遺構面で報告する河川跡SD22・23・24上部には平安時代の水田耕作土IV-1層、酸化鉄集積層IV-1'層が明瞭に認められた。As-Aの堆積が少なく、現代水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。また、当坪型区画跡は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として調査されているが、区画西辺は調査対象地外となっていたため、北辺および東辺を中心に調査し、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

溝跡・大畦畔

検出した坪界線は、北辺に限られる。中央に溝跡(SD1)をもつ大畦畔で区画され、第5号坪型区画跡との坪界線をなしていた。方位はN-94°-Eであった。

南辺および東辺は、今井川越田遺跡として調査されている(瀧瀬1997)。南辺の坪界線が想定できる位置には近世のものと推定されている今井川越田遺跡SD31が検出された。この溝跡は東へゆるやかに傾斜するもので、用水路跡の可能性はあるが、N-115°-Eと他の坪界線に比べ著しい傾きをもっている。表層の坪界線もこの溝跡と類似の地割となっており、近世から現代まで歪んだ区画となっていたことがわかる。東辺には近世の遺構は検出できなかった。なお、この溝跡の詳細は『今井川越田遺跡III』(瀧瀬1997)に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

明瞭な区画は確認できなかった。表層坪型区画の地割にある北東角の乱れは、下層にあるSD22・23に由来するものであることが分かった。この溝は、埋没した自然河川(女堀川旧流路の一部)、あるいは扇状地性堆積物中の伏流水流路と考えられるもので、上層堆積物の沈下によって表層まで影響し用水路が設けられたものである。溝跡の詳細については第4遺構面で記述する。また、表層坪型区画の東辺にみられる坪界線の歪みは、今井川越田遺跡SD12を踏襲したものであることがわかった。この溝跡中には、As-B純粹堆積層が含まれており、平安時代後半から続く地割であることが明らかになった。近世段階の坪界線の状況は明確にできなかったが、踏襲されているものと推定できる。

第7号坪型区画跡(付図1)

L2・M2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とするが、非常に歪んだ区画となっており、四辺に用水路が認められる。内部は東西方向の長地型に類似した区画となっている。西辺は女堀川から取水する幹線用水が北流する。現在の横堀である。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

当坪型区画は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として調査されていたが、調査対象地は北辺付近の一部に限られた。

溝跡・大畦畔

検出した坪界線は、北辺に限られる。今井川越田遺跡SD31が対応する。詳細は第6号坪型区画跡ですでに記した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

近世段階の明瞭な水田区画は確認できなかった。内部には、9世紀段階の遺物を主体に包含し、As-Bが含まれる今井川越田遺跡SD34が乱流する。女堀川旧流路に沿って蛇行しており、平安時代を通じて条里型地割が施行されなかったことがわかる。

第8号坪型区画跡(第18図)

D3・4、E3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、溝をとまわらない大畦畔による北辺の坪界線が、九郷用水支線の延長上で南西から北東へ斜行しているのを除き、東西南の3辺に用水路をもつ坪型区画となっており、内部は南北方向の長地型に区画されている。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1層、II-1'層、II-2層、II-2'層、II-3層、II-3'層、IV-1層、IV-1'層、VII層、VIII層という層順が認められた。

土壌層位は良好であったが、未買収地が多く、周辺水田の水利権保護の必要もあったため、調査はトレンチを主体とし、主要な用水路跡のある部分に限って行った。

検出した坪界線は、南東角の第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点に限られる。坪型区画跡の形状・規模、坪界線の方位等は明確にできなかった。

表層坪型区画北辺の坪界線を構成する大畦畔下に奈良時代から続く大規模な用水路跡SD89が存在することから、第8号坪型区画跡が当初から1町方格の形状を

なしていなかったことがわかる。しかし、中世以後には表層坪型区画同様の区画が成立していたと考えられ、条里型地割の一部であるとしてよいだろう。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南東角では、第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点となる中世から近世に至る用水路跡SD118を検出した。SD118は第8号坪型区画跡南辺の坪界線をなす東流する用水路跡で、南から北流する用水路跡SD112に坪界線交点で合流していた。合流点となる坪界線交点では、上層にAs-Aの純粹堆積層が層厚30cm以上も認められた。堰が存在した可能性が高いが、施設そのものは認めることができなかった。SD112は坪界線交点から北側の延長部分で北東方向に向いていたが、坪界線交点付近では取水・用水の取り回しの関連で溝跡の形状に乱れがある部分が多く、東辺の坪界線を構成すると考えてよいだろう。SD112に関する詳細は、第9号坪型区画跡で記述する。

その他、第2遺構面で検出した奈良時代を起源とする九郷用水跡SD89北側で、この地割に影響されたものと考えられる小規模用水路跡SD110を検出した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

調査範囲の制限で明確にすることができなかった。

第9号坪型区画跡(第19・20図)

E3・4、F3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ1町方格の坪型区画となっており、内部は南北に2分する半折型に区画されている。坪型区画北辺と南辺をなす用水路は、西側の坪型区画との坪界線付近で南西・北東に若干斜行している。これより南東に位置する坪型区画はほとんどが整った1町方格となっており、第6・7号坪型区画跡の歪んだ状況からみて、いずれかの時期に西の里界線となっていた可能性がある。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、部分的に平安時代の水田土壌であるIV-1層、IV-1'層、VII-1層、VII-1'層が認められるが、基本的には直下にVIII層という層序であった。VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第1遺構面における表土除去はIV-1層上面とした。

調査は未買収地および周辺水田の水利権保護のため、西辺および東辺坪界線を中心に行い、南部はトレンチ調査とした。

また、表層坪型区画中央には取付け道路が通っており、1980～1981年(昭和55年度)に一丁田遺跡として調査されている(富田・赤熊1985)。第12～23トレンチが設定されているが、明瞭な遺構は検出されていない。A-22トレンチ断面6層が平安時代水田酸化鉄集積層であるIV-1'層に該当すると考えられる。

検出した坪界線は西辺・東辺および断面調査による南辺で、南辺以外は中央に溝跡をもつ大畦畔で区画されていた。溝跡の芯芯距離で東西約110～111mであった。坪界線の方位は、東辺がN-2°-E、西辺がN-Sで、全体に整った方形をなすものと考えられる。

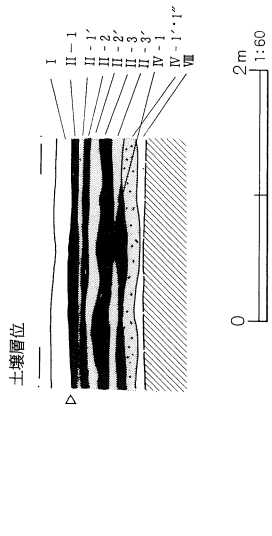
東辺の坪界線をなすSD112と重複するSD113覆土にはAs-Bが含まれ、第2遺構面で検出したSD114にはAs-B純粹堆積層が認められるなど、この坪型区画跡の地割りが平安時代から継続してきたものであることが明らかになった。

溝跡・大畦畔

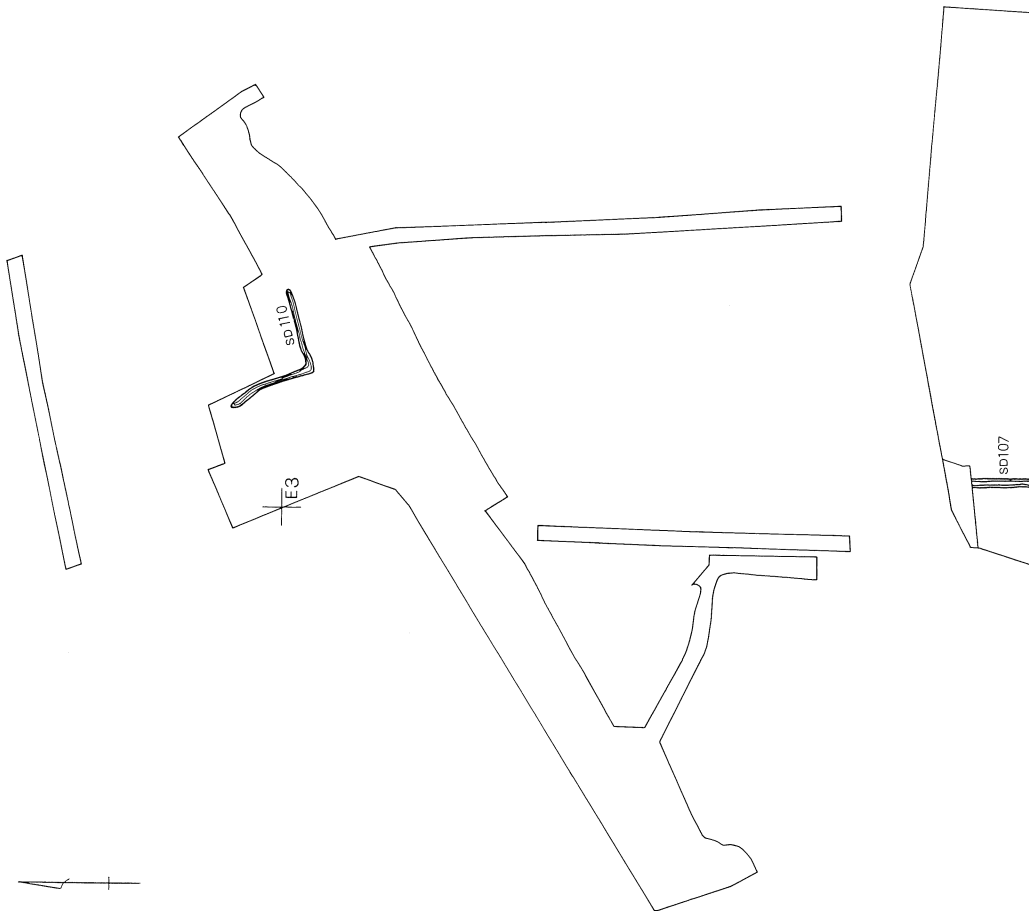
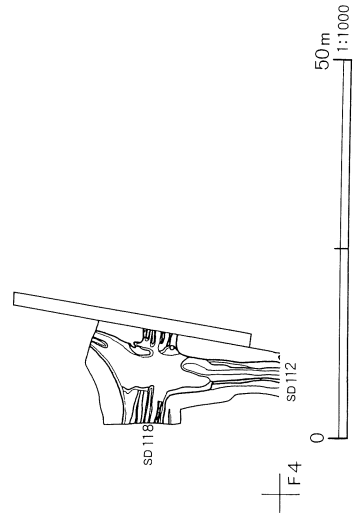
表層坪型区画の東辺を限る坪界線では、中世から近世に至る用水路跡SD112を検出した。蛇行が少なく直線的な溝跡で、底面には護岸に用いたと思われる杭跡が残されていた。

断面ポイントB-B'北側付近から2条に分かれる「猿尾状」分水が認められ、第17号坪型区画跡側の小区画

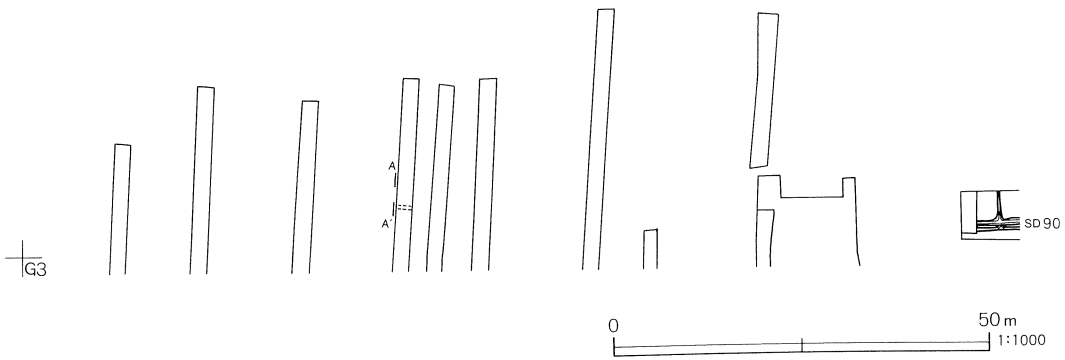
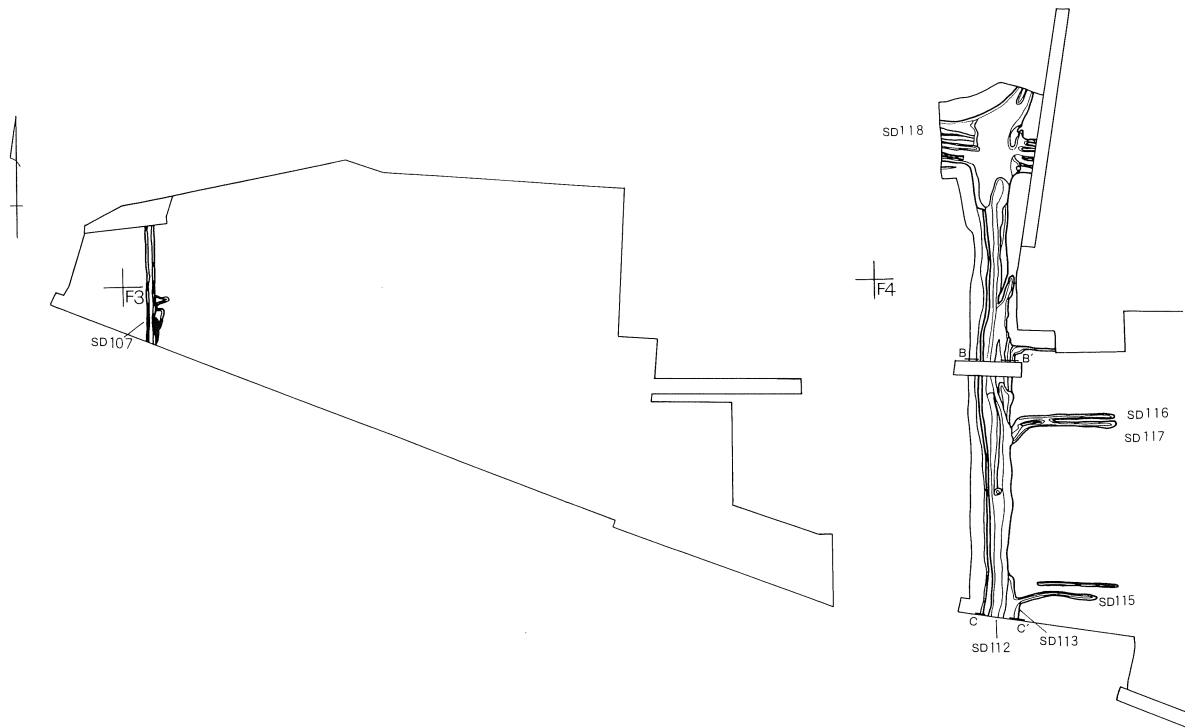
第18图 第8号坪型区画迹



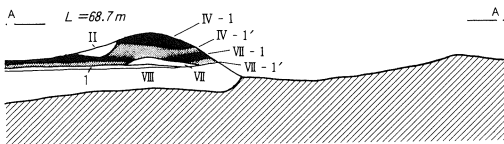
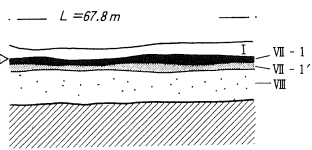
E4



第19図 第9号坪型区画跡

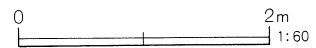


土壤層位

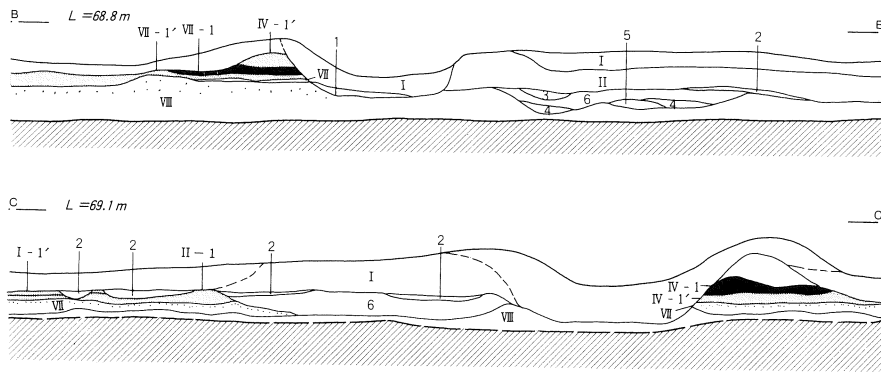


A-A'

1 暗褐色 10YR3/4 火山灰シルト FAか

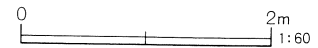


第20図 第9号坪型区画跡土層図



B-B'・C-C'

- 1 にぶい黄褐色 10YR5/4 火山灰 As-A 純層
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 火山灰 As-A 純層
- 3 褐色 10YR4/4 中砂 酸化鉄結核
- 4 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト As-B 多に 酸化鉄結核少 マンガン少
- 5 褐色 10YR4/4 シルト
- 6 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト As-B 少



水田に引水した小水路跡が分かれていた。3個所の各分水点には堰跡の痕跡が認められた。堰跡は木杭によって横木を固定して揚水し、木杭と矢板を用いて護岸するものであった。また、南部で重複するSD113は覆土最下層にAs-Bを含む細砂質シルト(6層)が堆積しており、中世でも早い時期に掘削されたものであることがわかる。6層内からは馬骨および馬歯が出土した。第9号坪型区画跡側には、盛土による大畦畔が認められた。畦畔を構成する土壌には、平安時代の水田土壌が認められた。

規模は大畦畔上端で幅約130~450cm、下端の幅約60cm、大畦畔上端からの深さ約40~60cmであった。大畦畔は上端の幅約20cm、下端の幅約80cmで、高さ約30cmであった。大畦畔・溝跡とも浚渫や掘り直しによって破壊されており、近世段階で機能していた状態の規模を示すものではない。出土遺物は近世から近代に属する少量の陶磁器類を得たが、図示できるものはなかった。

西辺の坪界線ではSD107を検出した。SD107は覆土最下層にII層に対応する細砂質シルトの堆積が認めら

れたが、この層の上層に層厚40cmをこえるAs-Aの純粹堆積層が認められた。現代まで地割を共通にしており、上部は現代用水路となっていた。分水があったと考えられるが、大畦畔とともに現代用水路による破壊のため詳細は確認できなかった。

出土遺物は検出できなかった。

南辺では第2遺構面におけるSD46上層にAs-A降灰層準を覆土にもつ溝跡があり、これにともなう大畦畔を検出した。大畦畔はII層を基盤としていた。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

坪型区画跡内部は、現代水田の耕作によって中世以後の水田土壌が完全に削平されており、明らかにすることができなかった。

第10号坪型区画跡(第21図)

F3・4、G3・4、H3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ1町方格の坪型区画となっており、内部は南北方向の長地型に区画されている。

坪型区画南辺をなす用水路は、西側の坪型区画との坪界線付近で南西・北東に若干斜行している。第9号坪型区画とともに、いずれかの時期に西の里界線となっていた可能性がある。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、攪乱されたIII層、IV-1''層、VII層、VIII層という層序が認められた。VII・VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。

調査範囲は水田土壌の状態を勘案してトレンチによる面的調査とし、9条のトレンチを設定した。

坪界線には、西辺に第2号坪型区画跡との坪界線をなす溝跡SD35・37、南辺のうち南東角に第11号坪型区画跡との坪界線をなす用水路跡SD102、南西角に用水路跡SD40、東辺に第18号坪型区画跡との坪界線をなすSD100を検出した。北辺については断面調査によって第2遺構面SD46上層に溝跡をともなう大畦畔を検出した。溝跡の芯芯距離で計測した坪型区画跡の規模は東西約109mであった。北辺の大畦畔から南辺までの想定距離は108mであった。坪界線の方位は、西辺がN-1°-E、南辺がN-93°-Eで、やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなすものと考えられる。

溝跡・大畦畔

坪界線をなす用水路跡はいずれも近世から現代まで浚渫を経て継続して使用されていた。第11号坪型区画跡との坪界線をなす南辺の用水路跡SD40は、As-A降灰層準を覆土にもつ近世の溝跡で、第11・12号坪型区画跡坪界線から北流し、第2・3・10・11号坪型区画跡坪界線交点で北と東に分流していた。出土遺物は認められなかった。

南辺の坪界線のうち南東角で検出したSD102は、第11・19号坪型区画跡坪界線を北流するSD100に合流し

ていた。SD102は第11号坪型区画跡側に大畦畔をともなっていた。詳細は第11号坪型区画跡の記述に譲る。

また、西辺をなすSD37については、第2号坪型区画跡の記述に譲る。

北辺坪界線で検出した第2遺構面SD46上層の溝跡は、As-Aを覆土としていた。脇には、これにともなう大畦畔が認められた。大畦畔はII層を基盤としていた。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作等による攪乱のため、遺構は検出できなかった。

第11号坪型区画跡(第22・23・31・32・47図)

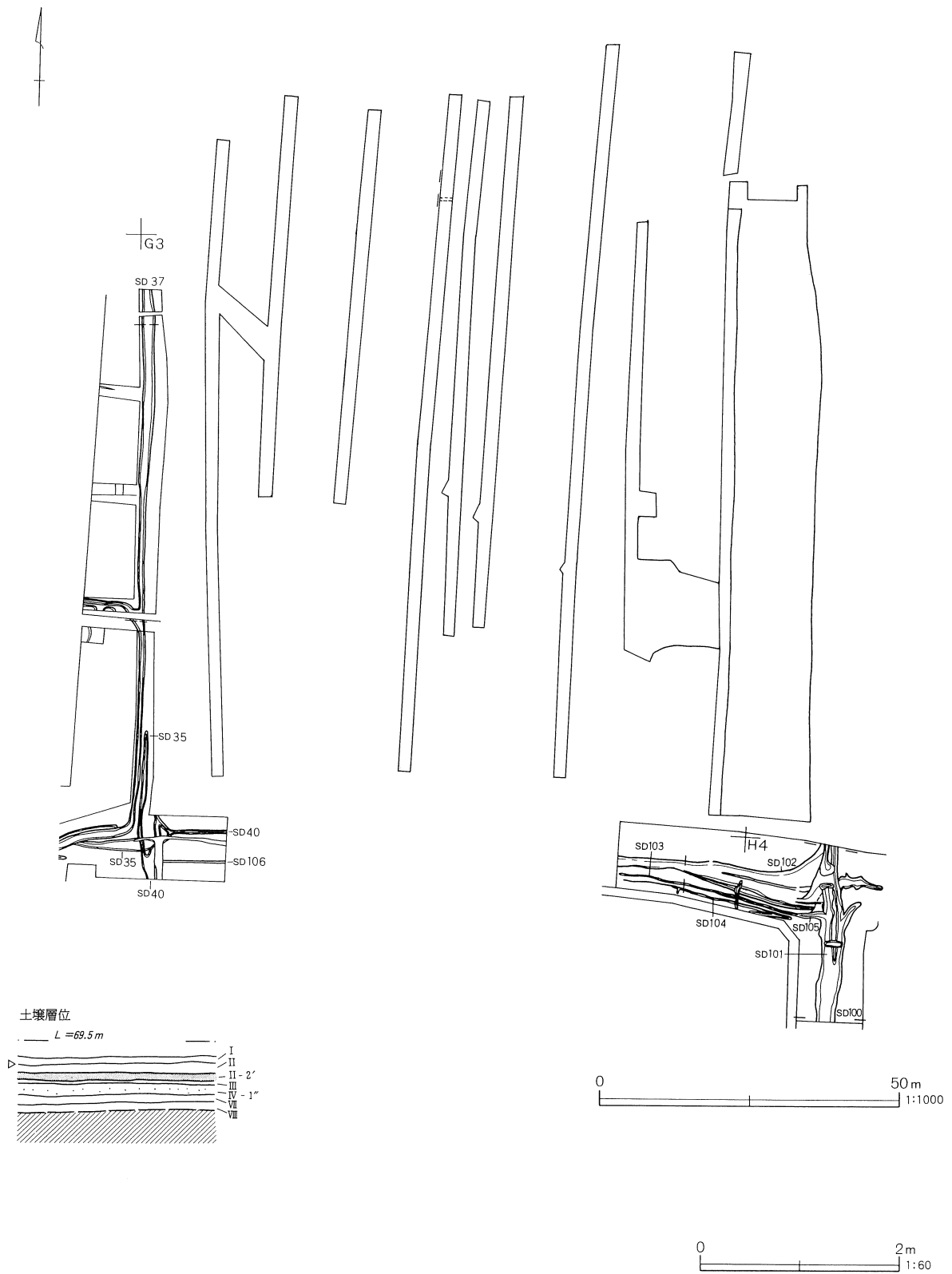
H3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は南部に東西方向の区画が認められるものの、南北方向の長地型に区画されている。坪型区画南辺の坪界線には、九郷用水から取水し東流する幹線用水路が認められる。現在の真下堀川である。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの良好な純粋堆積層が存在していた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、As-A層、II-1層、II-1'層、II-1''層、II-2層、II-2'層、II-2''層、II-3層、II-3'層、II-3''層、III層、IV-1層、IV-1'層、IV-1''層、VIII層という層序が認められた。VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第1遺構面における表土除去はII-1層上面までとした。

調査範囲は良好なAs-A層の堆積が遺存している部分を中心に設定し、周辺水田の水利権保護のため、坪界線の用水路下については部分調査とした。

検出した坪界線は、北辺および東辺が中央に用水路跡をもつ大畦畔、西辺が用水路跡であった。溝跡の芯

第21图 第10号坪型区画跡



芯距離で東西約109mであった。坪界線の方位は、北辺がN-93°-E、東辺がN-1°-Eで、南辺・西辺が不明確であるが、やや北東に振れた整った方形をなすものと考えられる。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の北辺坪界線では、近世から近代に至る用水路跡SD102を検出した。SD102は東流し、第19号坪型区画跡との坪界線をなすSD100に合流していた。脇には大畦畔が認められた。大畦畔は中央にAs-A層で埋没したSD103をともない、第11号坪型区画跡水田面側は小規模な溝跡SD104に区画されていた。水田耕作土をすくい取り、畦畔にぬりつけて補修する「くろぬり」による溝跡と考えられる。SD102は大畦畔上端から計測して、上端の幅約300cm程度、下端の幅約20cm、深さ約20cmであった。大畦畔は土盛で構築されており、上面の幅約220~270cm、下端の幅300cm前後で、高さ20cm程度であった。大畦畔には、II-1~3層水田跡による土壌化痕跡であるマンガン結核の集積が認められた。

東辺の坪界線をなす用水路跡SD100は、坪界線交点から10mほど上流の南側でAs-A層で埋没した支線用水路跡と分流しており、いわゆる「猿尾状」分水が認められた。分水点には堰の横木を設置した痕跡が認められ、下流に矢板を固定したと考えられる木杭による護岸の痕跡を列状に検出した。断面調査の結果、脇には土壌化の痕跡のないII層を基盤とした土盛で構築した大畦畔を検出した。上面の幅90cm程度、下端の幅100cm程度、高さ5cm程度が遺存していたが、上面は削平されており本来の規模を表す数値ではない。畦畔下に土壌化痕跡が認められないことは、該当部分が継続して大畦畔として用いられていたことを示している（第31・32図）。

出土遺物は認められなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

坪型区画跡内では、坪型区画跡南西部でAs-Aの降

灰層準で埋没した小区画水田跡1筆SN8を検出することができた。南北7~8m、東西12mの長方形で、周囲には高さ約2cm程度の小畦畔にともなう段差が残されていた。畦畔上部は現代水田の耕作によって削平されており、周囲の水田跡も検出することができなかった。耕作土表面には現代水田からの土壌化が進み、酸化鉄斑紋が多量に集積していた。水田面はほぼ水平であったが、水懸かりの下手にあたる北側畦畔際が溝状に深くなっていた。これは水位を確保するために高い畦畔が必要とされる下流側で、頻繁に畦畔の盛り上げ補修が行われたことによるものと考えられる。近接して検出したSD66との関係は明確でないが、As-Aによって埋没していた溝跡で、SN8あるいはこれに用水を供給した溝跡から下流に取水するための小規模用水路跡と推定できる。

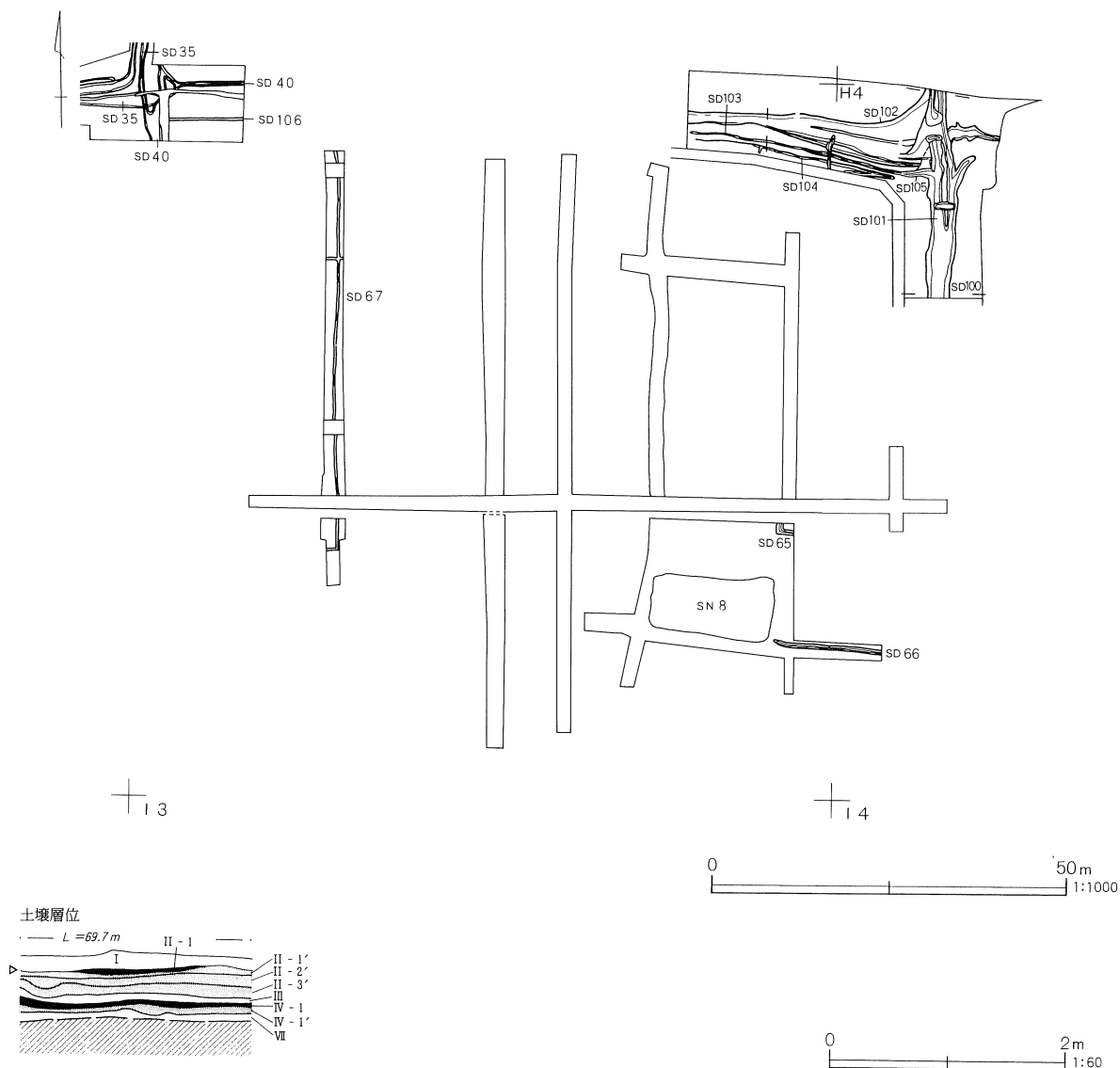
水田面には、若干の凹凸と無数の馬蹄跡が認められた。馬蹄跡は幅広の前足と先の尖った後ろ足の蹄跡の送りをよく残しており、東西方向に往復した様子が観察できた。東側畦畔際では転回したと考えられる痕跡も認められた。左右の組み合わせと考えられる馬蹄跡を計測すると、歩幅は約80cm程度で、体高130cm前後の中型馬であった可能性が高い。断面観察では、進行方向が深く、耕作土、床土に上層からの踏み込みによる明瞭な褶曲があった。東側畦畔際のAs-A層中から、第47図12のキセル雁首が出土した。

なお、畦畔のAs-A層による確実な埋没水田跡は、当遺跡では唯一の例である。

このほか、西辺のSD40上端から約25m程度のところに南北に走る溝跡SD67を検出した。As-Aは覆土中に攪乱されて多量に存在していた。近世後期の溝跡と考えられる。北辺の坪界線から20m程度のところで直行する溝跡を検出した。SN8の形状からみて、As-A降下前後の第11号坪型区画跡は、南北方向の長地型に地割されており、さらにこの中を小区画水田に区分していたものと考えられる。

第12号坪型区画跡(第24・25図)

第22図 第11号坪型区画跡



I 3・4、J 3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。坪型区画北側の坪界線には、九郷用水から取水し東流する幹線用水路が認められる。現在の真下堀川である。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集

積層が認められ、部分的にIII層、北側部分にIV-1層、IV-1'層、V層上面にIV-1''層によるマンガン結核の集積、V層、VII-1層、VII-1'層、VII-2'層、VIII層という層序が認められた。

第1遺構面を構成する土壌が検出できなかったため、坪界線下の遺構を中心に調査した。なお、北側坪界線下は真下堀川となっており、周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。

検出した坪界線は、西辺が第4号坪型区画跡との坪界線をなすSD193、南辺が第4号坪型区画跡南辺の坪界線から東流する幹線SD2、東辺が第12・13・20・21

号坪型区画跡坪界線交点で北に分流する支線SD2 Bによって構成されていた。坪型区画跡の規模は東西108～109mで、坪界線の方位は西辺が $N-1^{\circ}-E$ 、南辺が $N-93^{\circ}-E$ 、東辺が $N-1^{\circ}-E$ であった。北辺が不明であるが、やや北東に振れた整った方形をなすものと考えられる。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南辺から東辺坪界線下では、As-A降下以前から近代まで継続する用水路跡SD2 Bを検出した。SD2は幹線をなす南辺では東流し、第4・5・12・13号坪型区画跡坪界線交点から東へ32m程度の部分で分流、第12・13・20・21号坪型区画跡坪界線交点で北側溝跡が北へ向きを変えSD2 Bとなるまで並行して流れる「猿尾状」分水となっていた。SD2 Bは北流していた。南辺SD2の覆土にはAs-A降灰層準が認められ、上層には現代のヒューム管による用水路が設置されていた。南辺の断面調査では、第13号坪型区画跡側にII-1～3層水田土壌にともなう大畦畔が認められた。大畦畔は、マンガン結核が集積したII層が利用されていた。

SD2は大畦畔上端から計測して上端の幅約200～320cm程度、下端の幅約20～80cm、深さ約80cmであった。大畦畔は、上面の幅約40cm、下端の幅60cm前後で、高さ20cm程度であった。

下層には純度の高いAs-Bの堆積をもつ用水路跡SD2 Aがあり、第12号坪型区画跡の地割が平安時代から継続されていたものであることが明らかになった。

西辺の坪界線をなすSD193は「猿尾状」の分水が認められたが、第12号坪型区画跡側への引水状況を示す遺構を検出することはできなかった。SD193については第4号坪型区画跡に記述した。

出土遺物は認められなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

第13号坪型区画跡(第26図)

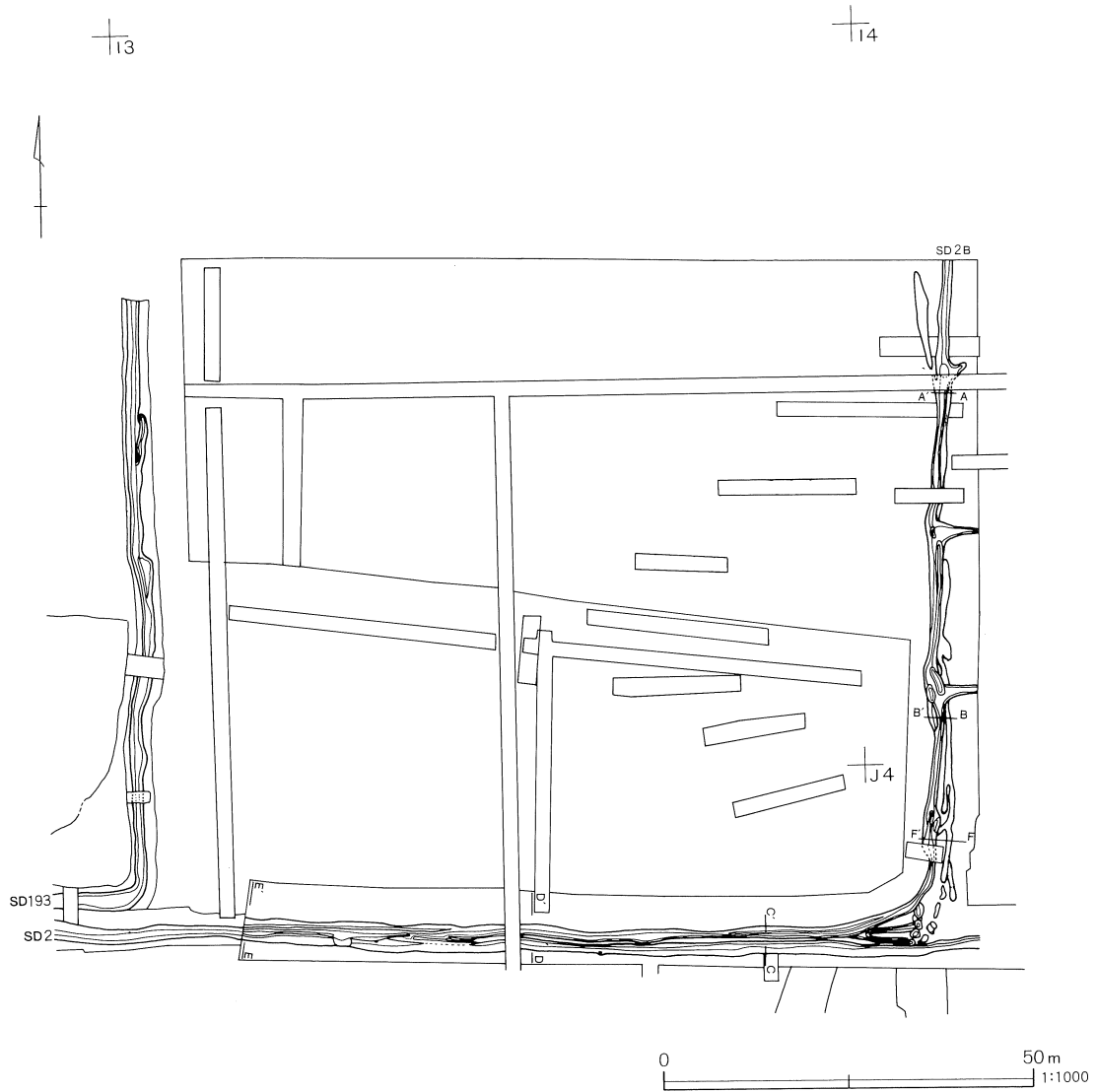
J2・K2グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った1町方格の坪型区画となっており、内部は東西方向に2分した半折型に区画されている。坪型区画南辺の坪界線付近には、東西に長い水田1筆がみられるが、他に地割の乱れはない。南東坪界線交点が女堀川に接する。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する近世の水田層と考えられるII-1'～II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV-1層、IV-1'層、VII層、VIII層という層序が認められた。IV層、VII層には多量の土器片が包含され、有機質の土壌になっていた。包含されていた土器片は、古墳時代後期および平安時代のもので、今井川越田遺跡の包含層を形成するものであった。

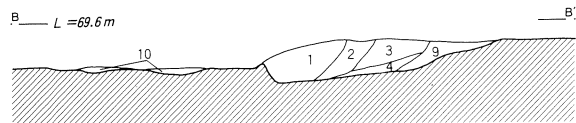
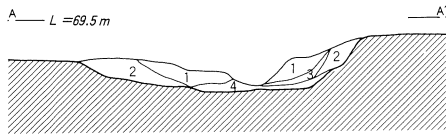
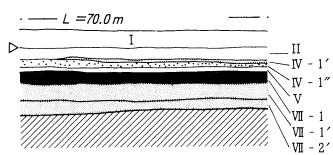
As-Aの堆積が少なく、現代水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。また、当坪型区画南辺付近は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として調査されている。

検出した坪界線は、北辺が第12号坪型区画跡との坪界線をなすSD2、西辺が第5号坪型区画跡との坪界線をなすSD1北流、南辺が第14号坪型区画跡との坪界線をなすSD1東流の延長として検出した今井川越田遺跡SD5、東辺が南辺を東流する今井川越田遺跡SD5もしくは女堀川旧河道から取水したのと考えられるSD1 Bによって構成されていた。坪型区画跡の規模は東西108～109m、南北109～110mで、坪界線の方位は北辺が $N-93^{\circ}-E$ 、東辺が $N-2^{\circ}-E$ 、南辺が $N-93^{\circ}-E$ 、西辺が $N-2^{\circ}-E$ であった。やや北東に振れるものの、整った方形をなすものと考えられる。

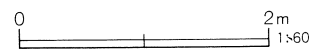
第24図 第12号坪型区画跡



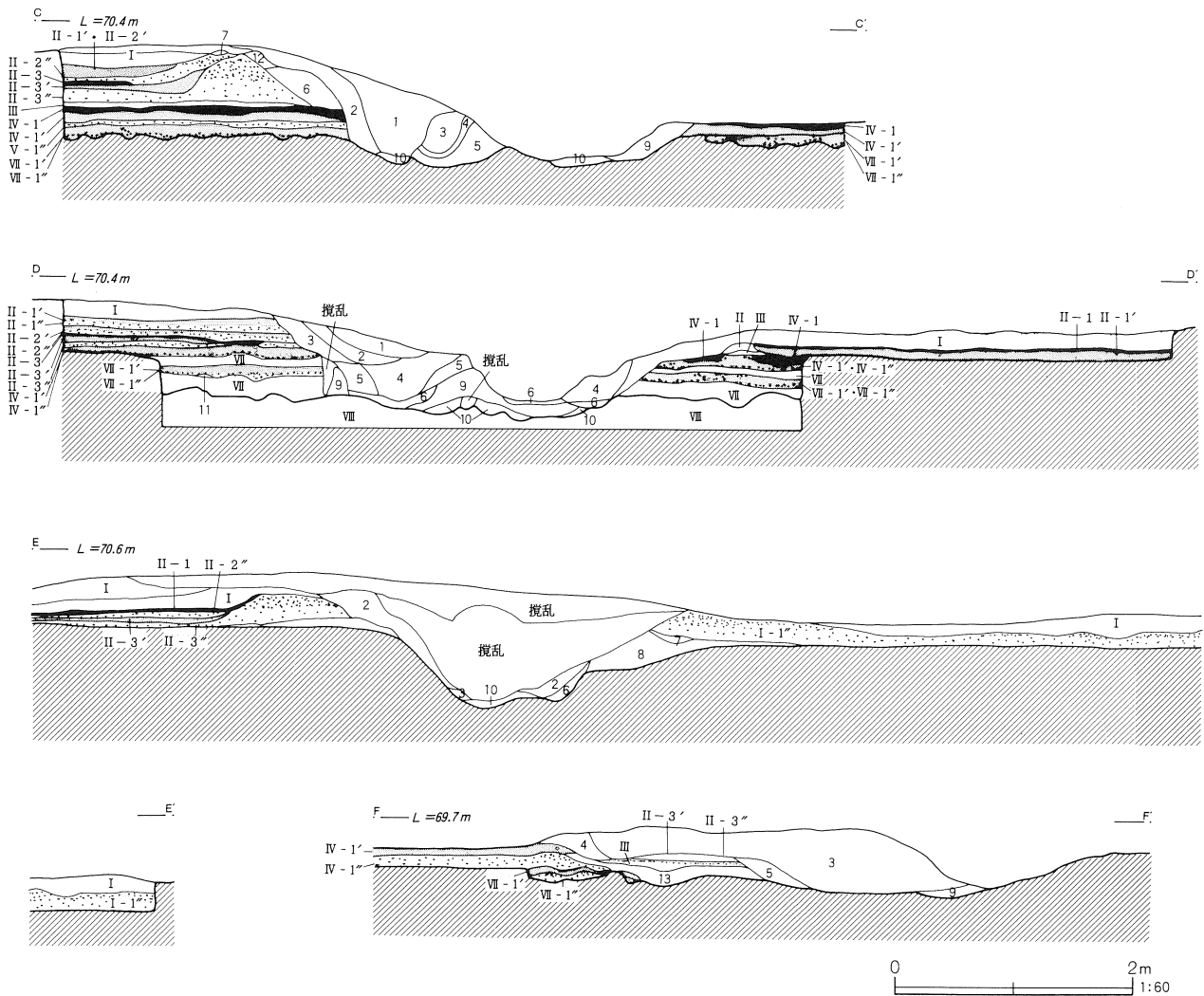
土壌層位



- 1 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト 現代溝堆積土
- 2 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト 近代溝堆積土 As-A
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト II-1~2に対応する溝堆積土
- 4 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 II-1~2に対応する溝堆積土下層
- 5 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 II-2~3に対応する溝堆積土 As-B 少
- 6 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂質シルト II-2~3に対応する溝堆積土 As-B 少
- 7 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質火山灰 II-1~2に対応する大畦畔
- 8 黒褐色 2.5Y3/3 シルト IVに対応する畦畔
- 9 黒褐色 2.5Y3/1 シルト IVに対応する溝堆積層
- 10 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 As-Bが堆積
- 11 にふい黄褐色 10YR4/3 火山灰 As-Cの層
- 12 暗褐色 10YR3/4 シルト質火山灰 As-A 大畦畔
- 13 黒褐色 10YR3/2 シルト As-B 少混入



第25図 第12号坪型区画跡土層図



溝跡・大畦畔

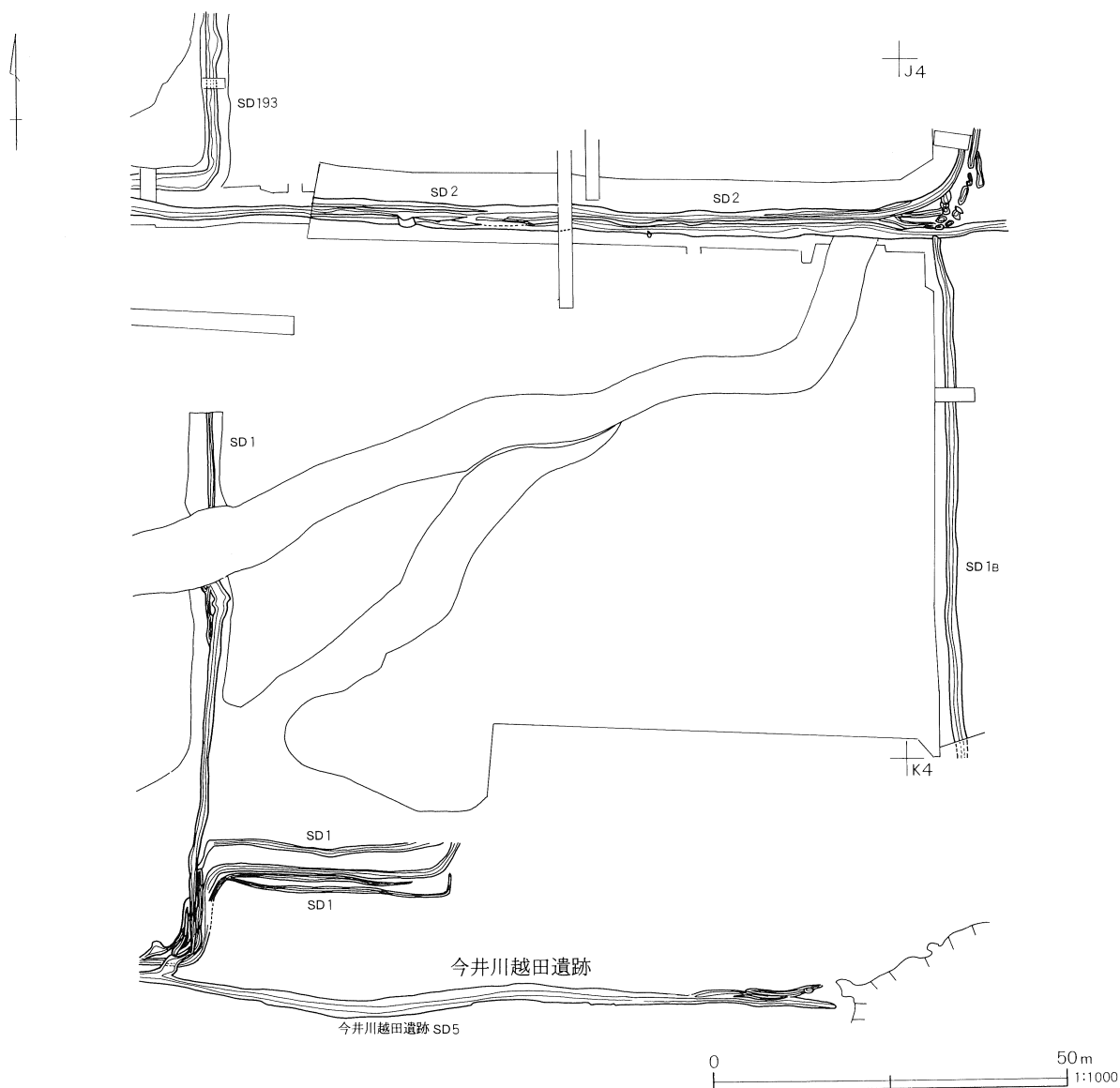
表層坪型区画の北辺をなす坪界線下では、As-A降灰層準をもつSD2を検出した。断面調査の結果、SD2は第13号坪型区画跡側にII-1～II-3層水田跡に対応する大畦畔をもつことがわかった。SD2は、第5号坪型区画跡北辺をなす坪界線から東流するもので、第5号坪型区画跡との坪界線から約32m付近で分流して、第21号坪型区画跡との坪界線まで支線と幹線が並行する「猿尾状」の分水が認められた。大畦畔規模は、上端から計測して上端の幅約200～320cm程度、下端の幅約20～80cm、深さ約80cmであった。大畦畔は、上面の幅約40cm、下端の幅60cm前後で、高さ20cm程度であっ

た。

第5・6号坪型区画跡坪界線を東流してきたSD1は、第5・6・13・14号坪型区画跡坪界線交点を北流する分流が、坪界線交点から15～20m程度の地点で直角に東に向きを変え、東流する幹線の今井川越田遺跡SD5と10m程度の区画において並行して東流していた。この地割は表層坪型区画南部にみえる半折型の乱れに踏襲されていた。

今井川越田遺跡SD5は、平安時代以後のものとして報告されているが、第13・14・21号坪型区画跡坪界線交点で女堀川田流路へ流入しており、この部分に堆積した多量のAs-Aを除去した際、近世段階の陶磁器類が出

第26図 第13号坪型区画跡



土した。As-A上層には近世から近代・現代に至る陶磁器類が分布していた。上流にあたる第5・6号坪型区画跡坪界線を東流するSD1覆土中にAs-Aの堆積が認められることから、近世段階に機能したものとよいだろう。また、女堀川への流入部からは北へ続く用水路跡SD1Bがのびていた。表層の坪型区画では、今井川越田遺跡SD5上層に掘り込まれた用水路と連続していた。この用水路跡は第13号坪型区画跡東辺の坪界線をなすもので、この連続関係からSD1の延長と判断し、図示したが、女堀川から直接取水した用水

路跡とも考えられる。

SD1Bは直線的な用水路跡で上端が削平されていたため、規模を明確にすることはできなかった。また、今井川越田遺跡SD5とともに、上層の堆積が少なく耕作による攪乱が激しかったため、大畦畔等を検出することはできなかった。詳細は第21号坪型区画跡に記述する。なお、今井川越田遺跡SD5については『今井川越田遺跡III』（瀧瀬1997）に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

第14号坪型区画跡(第27図)

K3・4、L3・4グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、女堀川流路が坪型区画と想定できる範囲の中央部を南西から北東流しており、方格地割を認めることはできない。しかし、周囲はすべて条里型地割を呈しており、北辺と西辺に坪界線をなす用水路が認められることから、坪型区画と認定した。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

当地区は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として周知されており、平安時代および古墳時代の遺物包含層となっているIV層、VII層を除去し、VIII層上面で調査が行われた。また、表層坪型区画南半には女堀川が北東流しており、第1遺構面に対応する遺構は、坪界線北辺をなす今井川越田遺跡SD5を除いて検出することはできなかった。しかし、東辺には覆土にAs-B純層をもつ今井川越田遺跡SD12が蛇行しつつ北に延びており、表層坪型区画の地割がこれを踏襲していた。近世以前に遡る坪型区画跡が存在したものと判断し、これを第14号坪型区画跡とした。今井川越田遺跡の調査成果を踏まえば、古墳時代後期段階では、すでに女堀川が同地を流れ、現在まで類似の河道を継続していたことがわかっている。第14号坪型区画跡は条里型地割施行当初から歪んだ区画であったものと考えらえる。

なお、第14号坪型区画跡内部では古墳時代後期の大規模集落を検出したが、近世の条里型地割に関わる遺構を検出することはできなかった。集落遺跡の詳細については『今井川越田遺跡III』(瀧瀬1997)に譲る。

第15号坪型区画跡(第28図)

C4・5、D4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、北・東・西に用水路、南に大畦畔をもつ方格の地割となっ

ているが、南北の距離が短く坪型区画としては歪みの目立つ区画である。ほぼ中央部には西辺の坪界線を北流してきた用水路が北東方向に流れており、この乱れを除けば、ほぼ南北方向の長地型に区画されているとあってよい。北東流する用水路は、九郷用水支流延長上の地割に当たり、第8号坪型区画跡上層の表層坪型区画における大畦畔と地割上では連続している。この地割は平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

当地区は、平成5年度の範囲確認調査の結果、北半に中世の墓域を中心とした塔頭遺跡が発見されたため、遺物包含層となっていたII~VII層を除去し、VIII層上面で調査を行った。また、中央には九郷用水支線の延長上にのびる大規模用水路が、南西部には関越自動車道が設置されていた。

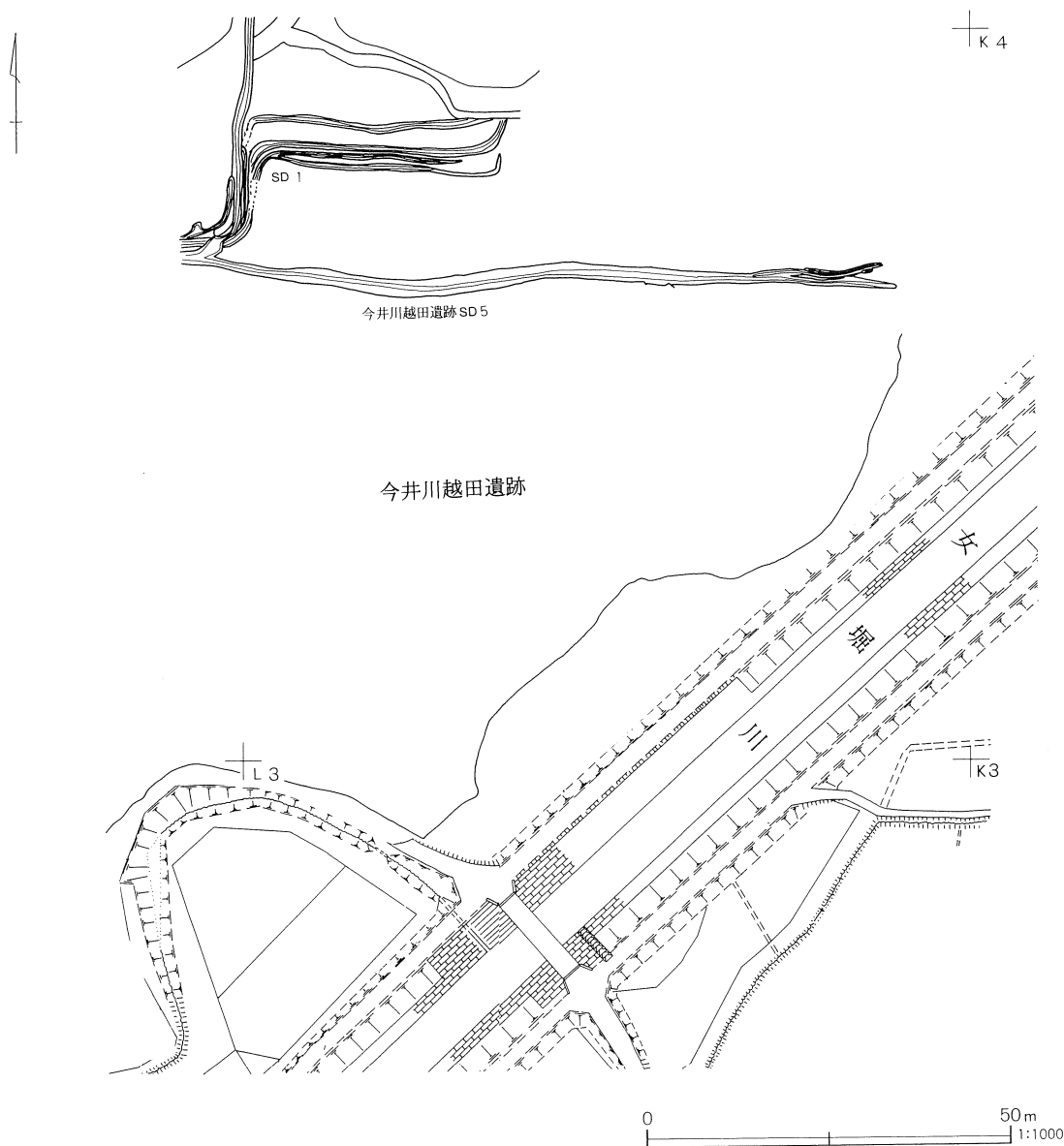
塔頭遺跡の調査および平成5年度に行った範囲確認調査において断面観察した結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のVIII層が浅い上、調査直前の段階では桑畑となっているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすII層が破壊されていた。上層を被覆するAs-A層もすべて表土中に攪乱されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたII層、VII層、VIII層であった。

調査は、トレンチを中心に行った。

今井条里遺跡では、南辺の坪界線相当位置が調査対象範囲にはいるが、第1遺構面に対応する遺構を検出することはできなかった。なお、第2遺構面では平安時代前半までに掘削された大規模用水路跡SD146が南辺の坪界線を構成する坪型区画跡を検出した。南辺の坪界線については、第19号坪型区画跡で検出した、溝跡をともしなわなないか極めて小規模な溝跡をともしなう大畦畔による区画であった可能性が高いが、現代の耕作による攪乱のため詳細を明らかにすることはできなかった。

また、塔頭遺跡の調査では、上層は攪乱されており明確にできなかったものの、西辺の坪界線をなす塔頭遺跡SD30を検出した。東辺については、周辺水田の水

第27図 第14号坪型区画跡



利権保護のため調査できなかった。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、西辺がほぼN-Sであった。

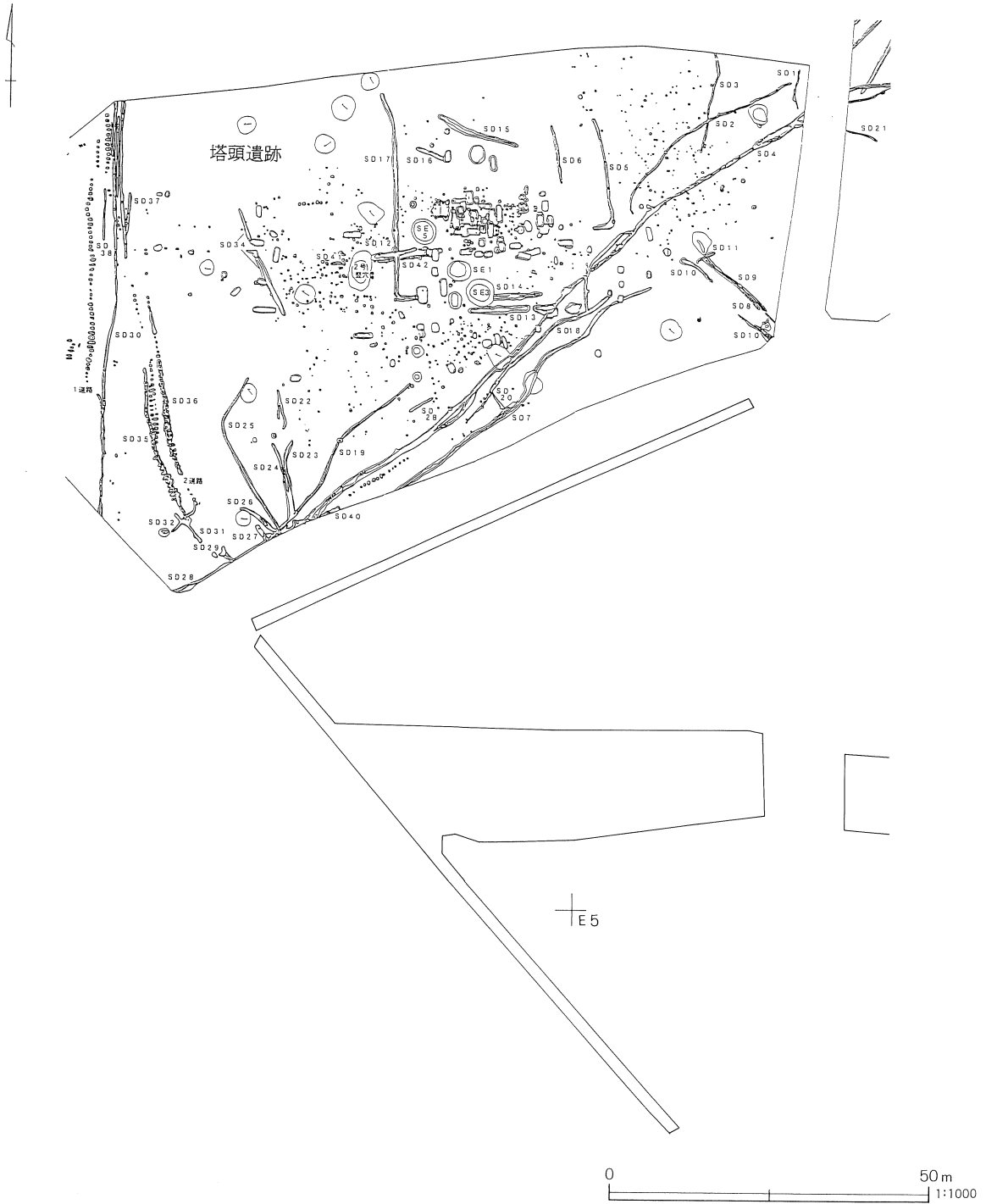
塔頭遺跡では、第1遺構面に対応する近世の遺構として、南辺坪界線相当位置から北に77mほどの部分で東西に延びるSD42を検出した。この溝跡は、中世の墓域を区画するSD12の地割に影響されたものと思われ、やや北東方向に斜行していた。中世の墓域は条里型地割に沿って配置されており、中世段階の条里型地割が可耕地の地割にとどまらなかったことを示している。

なお、塔頭遺跡で検出した溝跡についての詳細は、続いて刊行される『地神・塔頭遺跡』（岩瀬1997）に譲るが、出土遺物はなく、大畦畔等も検出できなかった。

第16号坪型区画跡(付図1)

D4・5、E4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、南・東・西に用水路、北に大畦畔をもつ1町方格の整った坪型区画となっている。この地割りは平成6・7年の調査時点まで踏襲されていた。

第28図 第15号坪型区画跡



表層の坪型区画は、南西の半分以上が関越自動車道建設によって、すでに破壊されていた。また、平成5年度に行った範囲確認調査において断面観察した結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のⅧ層が高い上、調査直前の段階では桑畑となっているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすⅡ層が破壊されていた。上層を被覆するAs-A層もすべて表土中に攪乱されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるⅠ層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたⅡ層、Ⅶ層、Ⅷ層であった。

調査は、トレンチを中心に行った。第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点では、関越自動車道の関係でわずか5mほどであるが、西辺の坪界線をなすSD112を検出した。SD112は坪界線交点で東に分流しており、2mほどであるが南辺の坪界線として検出することができた。

北辺坪界線については、溝跡をともしなわなないか極めて小規模な溝跡をともしなう大畦畔による区画であった可能性が高いが、現代の耕作による攪乱のため詳細を明らかにすることはできなかった。なお、第2遺構面では、表層の坪型区画北辺下に平安時代前半までに掘削された大規模用水路跡SD146を検出した。当坪型区画跡が平安時代以降継続していたものと考えられる。

坪型区画跡の規模・方位は不明である。

溝跡・大畦畔

第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点で検出したSD112は、覆土中にAs-A純粋堆積層をもつ近世の用水路跡である。詳細は第9号坪型区画跡および第17号坪型区画跡に譲るが、これと重複するSD114覆土中には多量のAs-Bの堆積が認められ、第16号坪型区画跡が平安時代以降継続されていたことが明らかになった。

第17号坪型区画跡(第29・47図)

E4・5、F4・5グリッドにかけて検出した。昭

和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、東・西に用水路、北・南に大畦畔をもつ1町方格の整った坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、表層の坪型区画内にはAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。また、第2遺構面を形成するⅡ-1層水田土壌は現代水田の耕作によって削平されており、遺存する部分は限られていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるⅠ層下に薄い鉄斑集積層が認められ、上部の水田土壌を削平され土壌変化のおよばないⅡ層、Ⅳ-1層、Ⅳ-1'層、Ⅶ-1層、Ⅶ-1'層、Ⅶ-1"層、Ⅷ層という層序であった。Ⅳ-1層水田に対応するマンガン結核集積は認められなかった。Ⅶ-1"層に析出した可能性がある。第1遺構面における表土除去はⅡ層上面までとした。

表層坪型区画の北辺坪界線に関越自動車道、区画南部に一丁田遺跡として調査された取付け道路が通じ、限られた調査範囲となった。また、周辺水田の水利権保護のため、北辺坪界線の大部分と南西坪界線交点は調査できなかった。

検出した坪界線は、中央に溝跡をもつ大畦畔で構成されており、第8・9・16・17号坪型区画跡坪界線交点で東に分流するSD112と南辺で検出したSD90・82のうちSD90の芯芯距離で南北約109mであった。坪界線の方位は西辺N-2°-E、南辺N-93°-Eであった。やや北東に振れるものの、全体に整った方形をなす地割であったと考えられる。

西辺から北辺をなすSD112下には重複してAs-B層を覆土にもつSD114が、また、南辺のSD90下、北に2mほどずれて覆土中に多量のAs-Bをもつ平安から中世にかけて機能したSD83と、これを中央にもつⅣ-1層水田大畦畔が存在していた。第17号坪型区画跡の地割りが平安時代以後現代まで継続していたことが明らかになった。

南部の取付け道路として調査された一丁田遺跡（富田・赤熊1985）では、A-1～10トレンチで第1号溝跡が、A-5～6トレンチで第2号溝跡が検出されている。

溝跡・大畦畔

西辺を限る坪界線では、中世から近世に至る用水路跡SD112を検出した。蛇行が少なく直線的な溝跡で、第9号坪型区画跡側では大畦畔が遺存していた。詳細は第9号坪型区画跡の記述に譲る。

第17号坪型区画跡側には、小区画水田に引水した小水路跡SD116・SD117を検出した。ほぼ真東に引水していた。SD112と重複関係にあるSD113は、覆土中にAs-Bが分布する中世でも早い段階の用水路跡であるが、近世段階の小水路跡SD116・SD117に比べ、蛇行があった。

南辺を限る坪界線では、As-A降下以前の溝跡SD82・90を検出した。ほぼ直線的に延び蛇行が少ない。両者は同一の覆土で埋没しており、いわゆる「猿尾状」分水による並行する用水路跡の可能性もあるが、調査範囲の関係で明確にはできなかった。東流するものと考えられ、北側の第17号坪型区画跡への引水が認められた。大畦畔はAs-A降下後に復旧した水田で用いられたと思われるAs-A純粋堆積層の高まりとして、断面調査で確認したが、平面的に検出することはできなかった。

第2遺構面では北に2m前後の位置にはAs-Bを覆土中にもつSD83と、これを中心とするIV-1層水田跡にともなう大畦畔を検出した。

なお、一丁田遺跡（富田・赤熊1985）A-1～10トレンチで検出した第1号溝跡は、土層および位置関係からみて、今回調査したSD82である。また、A-5～6トレンチで検出した第2号溝跡は、今回第4遺構面で検出したSD7・11である。

出土遺物はSD117から波佐見焼のくらわんか手椀（第47図1）を得た。銘款から中尾登窯で焼成された18世紀後半のものであることがわかる。火山灰から推定さ

れる層位と矛盾しない。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層からの攪乱のため坪型区画跡内に水田跡は検出できなかったが、SD116・117、SD113から東西方向に区画されていた状況が予想できる。また、As-A層の堆積が遺存していた坪型区画跡南東部では、一部表土除去から人力で行った個所がある。数条の耕作痕を検出した。幅約20～30cm、深さ5cm前後の並行する溝跡となっており、牛馬を用いた犁耕の痕跡の可能性が高い。耕作痕の残存状況からみて、検出した面はII-1層水田跡の床土にあたるII-1層上面であったと思われる。

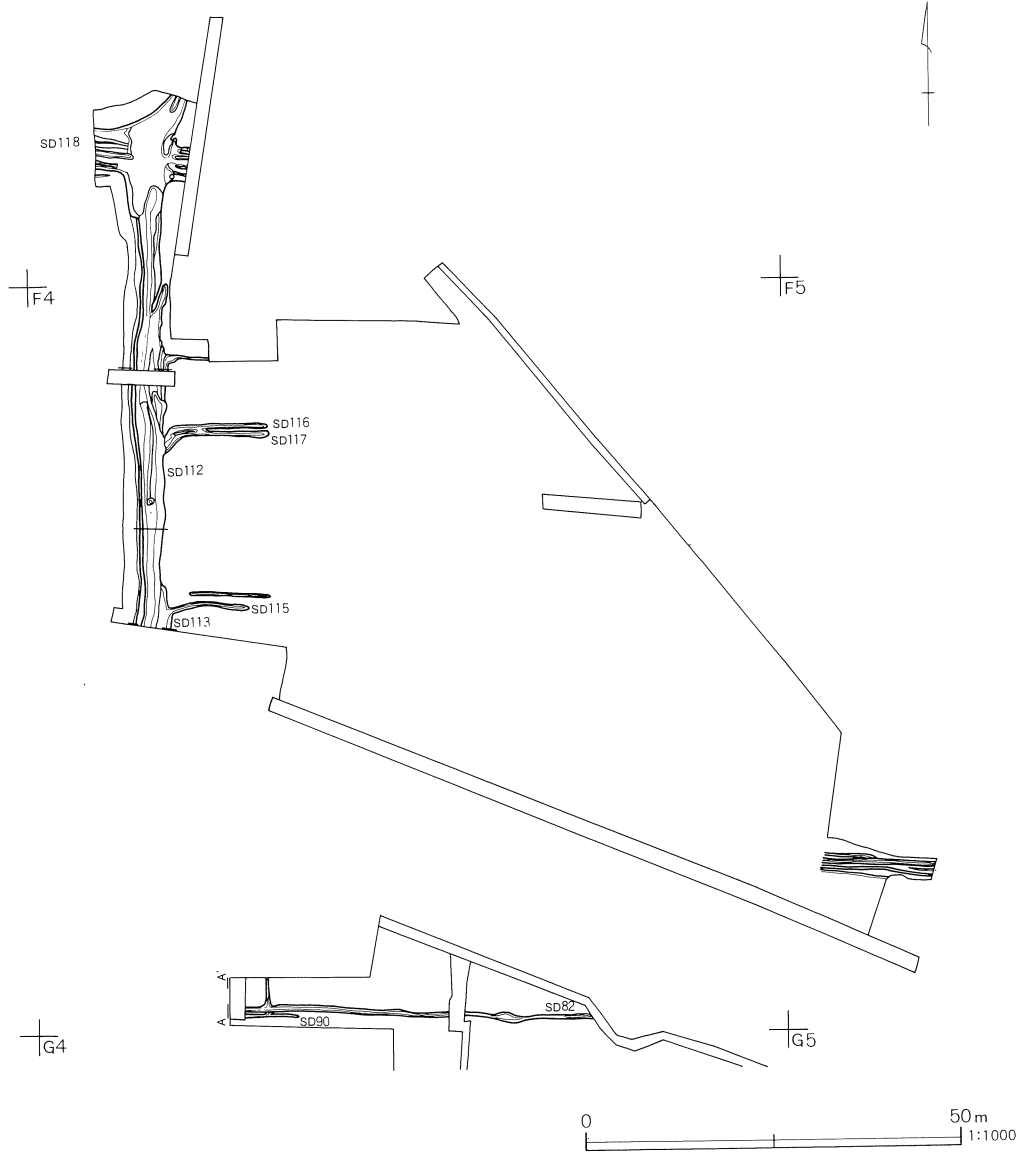
出土遺物は、As-Aを多量に含む表土中から非常に細かい陶磁器片・土師器片等を得たが、図示できたのは円盤状土製品、鉄釘2点、用途不明の鉄製品7点（第47図14～18・20・21）である。なお、鉄製品は水田に鉄分を補給して老朽化を防ぐために投棄されたものと考えられる。

第18号坪型区画跡（第30図）

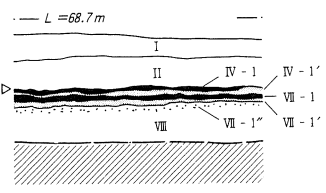
F4・5、G4・5、H4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、南・東・西に用水路、北に大畦畔をもつ1町方格の整った坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、表層の坪型区画内にはほとんどの部分でAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。また、第2遺構面を形成するII-1層水田土壌は現代水田の耕作によって削平されており、遺存する部分は限られていた。基本的な堆積層理および土壌層位は17号坪型区画跡と同様で、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、上部の水田土壌を削平され土壌変化のおよばないII層、IV-1層、IV-1'層、VII層、VII-1層、VII-1'層、VII-1''層、VII-2層、VII-

第29図 第17号坪型区画跡

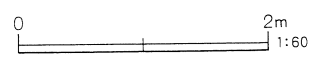
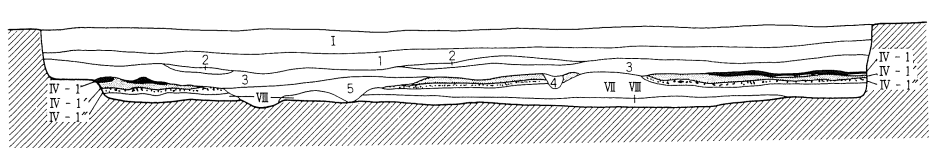


土壤層位



- 1 黒褐色 2.5Y3/2 火山灰シルト As-A 酸化鉄多
- 2 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 火山灰 江戸期大畦畔 As-A 純層
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y4/3 火山灰シルト II~III-3層 As-B 多
- 4 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト 中世以前の溝 As-B 少量
- 5 にぶい黄褐色 10YR3/2 シルト質砂 中世~As-A 以前の溝

A — L = 69.4m



2層、VIII層という層序であった。IV-1層水田跡に対応するマンガン結核集積は認められなかった。VII-1層に析出した可能性がある。第1遺構面における表土除去はII層上面までとした。

表層坪型区画の北辺坪界線に一丁田遺跡として調査された取付け道路が通じ、限られた調査範囲となった。また、周辺水田の水利権保護のため、東西の坪界線の大部分は調査できなかった。

検出した坪界線は、北辺がSD82・90、西辺が第11・19号坪型区画跡坪界線を北流してきたSD100延長、南辺が第19号坪型区画跡との坪界線をなし顕著な用水路跡をともなわない大畦畔で構成されていた。坪型区画跡の規模は、北辺坪界線のSD82と南辺坪界線の大畦畔の芯芯距離で南北約110~112mであった。坪界線の方位は北辺N-93°-E、南辺N-91°-Eであった。東西の坪界線は明確でないものの、整った方形をなす坪型区画跡であったと考えられる。

南辺の大畦畔下は中世段階の耕作による攪乱が激しく明瞭な坪界線を検出できなかったが、相当位置にAs-Bの純粹堆積層を覆土とするSD195を検出した。西に隣接する第10・11号坪型区画跡坪界線では良好なIV-1層水田跡にともなう大畦畔が検出されており、北辺のSD82・90下では、北に2mほどずれて覆土中に多量のAs-Bをもつ平安から中世にかけて機能したSD83、およびIV-1層水田跡にともなう大畦畔が存在していたことから、SD195はIV-1層水田跡に対応する大畦畔に設けられた用水路跡と判断できる。このことから、第18号坪型区画跡の地割が平安時代以後現代まで継続していたものと予想できる。

溝跡・大畦畔

北辺を限る坪界線では、As-A降下以前の用水路跡SD82・90を検出した。大畦畔はAs-A降下後のものを断面調査で確認したが、平面的に検出することはできなかった。一丁田遺跡（富田・赤熊1985）で検出した第1号溝跡は、今回調査したSD82である。詳細は第17号坪型区画跡の記述に譲る。

南辺坪界線ではAs-A純粹堆積層で埋没した良好な大畦畔を検出した。第1遺構面で検出した大畦畔では唯一の埋没遺構で、ほぼ完全な形で遺存していた。大畦畔脇には、水懸かりにおいて上手にあたる第19号坪型区画跡側にSD68・69が、下手にあたる第18号坪型区画跡側にSD70が認められた。これらの溝跡は幅約30cm、深さ約1~5cm程度と、他にみられる用水路跡に比べて著しく小規模で、流水の痕跡や掘り直された形跡もなく完全にAs-A層で埋没していた。畦畔の補修に際して土採りした痕跡であると思われる。大畦畔には幅40cm程度の尻水口が設けられており、第19号坪型区画跡から第18号坪型区画跡へ水路を経ずに用水の取り回しが行われていた。SD68は用水路として第19号坪型区画跡から第18号坪型区画跡へ連続しているようにみえるが、畦畔補修でできた溝跡と尻水口が連結してしまったものと推定できる。他の坪界線に認められる用水路跡から坪型区画内への引水も、例外なく北側へ向かって行われていた。東西方向の用水路跡が水懸かりで下手に位置する北側の坪型区画への引水に用いられていたことがわかる。

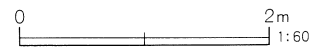
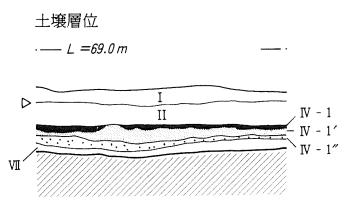
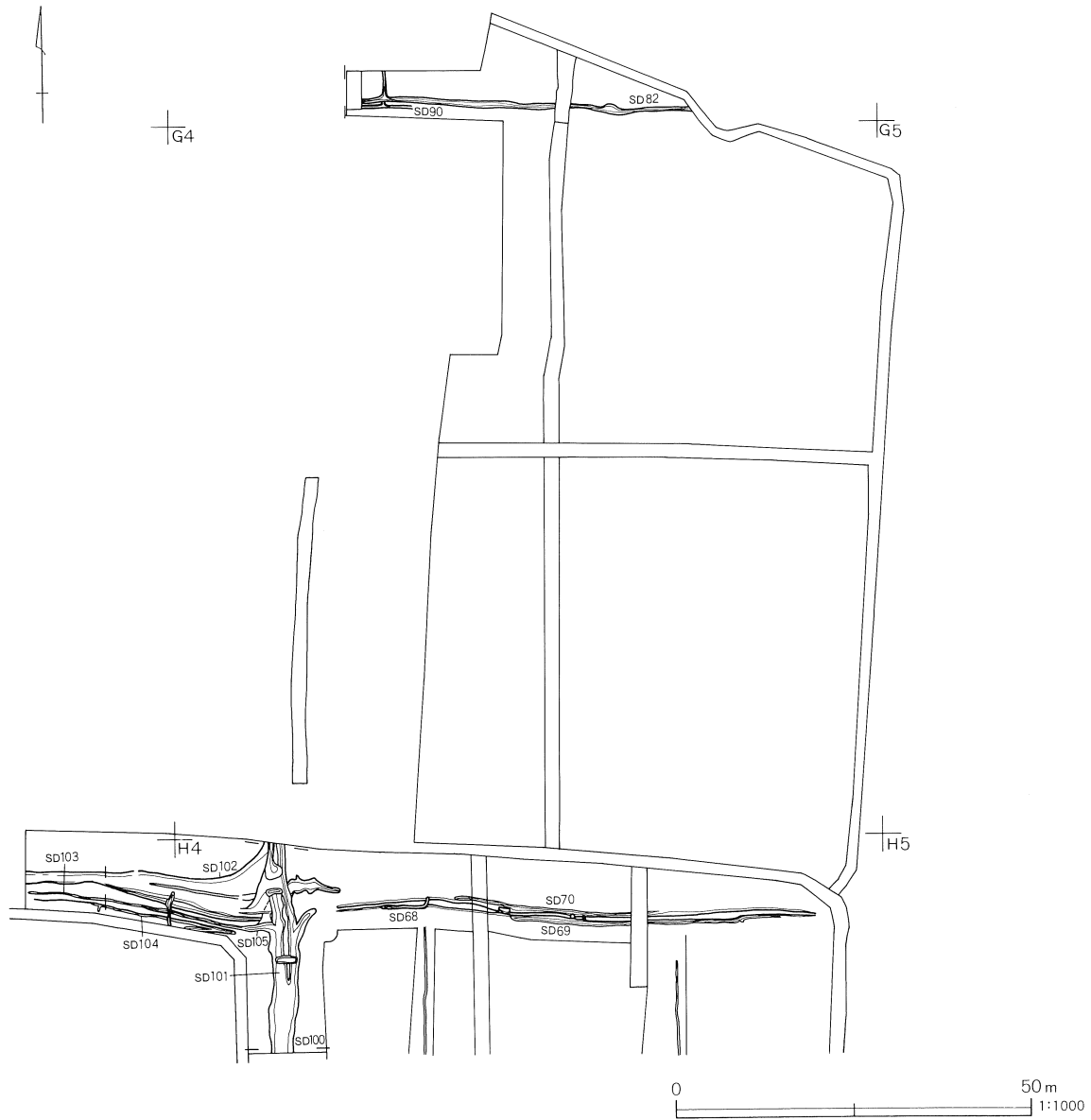
大畦畔の構造は盛土によっており、規模は上端の幅40cm、下端の幅120cm程度であった。水田面からの高さについては、第18号坪型区画跡側にも第19号坪型区画跡側にも対応する耕作土が遺存していなかったため明確ではないが、床土層であるII-1層上面から計測した場合、水懸かりで上手にあたる第19号坪型区画跡側で18cm、下手にあたる第18号坪型区画跡側で30cm程度であった。なお、この大畦畔は盛土補修を繰り返しながら継続して用いられたもので、断面調査によれば下層にはII-3層水田跡の水田土壌にともなう大畦畔も検出することができた。

出土遺物はAs-A純粹堆積層中から少量の陶磁器片と、大畦畔を構成する盛土内から土師器片、須恵器片を得たが、図示できるものはなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層からの攪乱のため坪型区画跡内の地割を明確に

第30图 第18号坪型区画跡



することはできなかった。

第19号坪型区画跡(第31・32図)

H4・5、I4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ1町方格の整った坪型区画となっており、内部は南北方向の長地型に区画されている。南辺をなす用水路は、九郷用水から取水する幹線用水路となっている。現在の真下堀川である。この地割は平成6年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、表層の坪型区画内にはほとんどの部分でAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。また、第2遺構面を形成するII-1層水田土壌は現代水田の耕作によって削平されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-1''層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、II-3''層、III層、IV-1層、IV-1''層、VII-1'層、VII-1''層、VIII層という層序であった。IV-1層水田跡に対応するマンガン結核集積は認められなかったが、VII-1''層に析出した可能性がある。第1遺構面における表土除去はII層上面までとした。

調査は、トレンチ調査を主体とし、遺構が検出された部分について範囲を拡大した。表層坪型区画東部は一丁田遺跡として調査された取付け道路、南辺は護岸工事された真下堀川となっており、調査できなかった。東辺は周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。西辺は周辺水田の水利権保護のため、北西坪界線交点部分に限定して平成7年度冬季に調査を行った。

検出した坪界線は、北辺が第18号坪型区画跡との坪界線をなす大畦畔、西辺が中央に用水路跡SD100をもつ大畦畔で構成されていた。坪界線の方位は、北辺N-91°-Eであった。坪型区画跡の規模は明らかにできなかった。

第2遺構面では、北辺坪界線に平安時代のIV-1層水田跡にともなう用水路跡SD195を検出した。当坪型

区画跡が平安時代以後継続されてきたものであることがわかった。

溝跡・大畦畔

北辺を限る坪界線ではAs-A純粋堆積層で埋没した大畦畔を検出した。これについては第18号坪型区画跡の記述に譲る。

西辺坪界線は、第11号坪型区画跡との坪界線を北流するSD100と大畦畔によって構成されていた。第19号坪型区画跡側の大畦畔は、SD100の補修や掘り直し、およびII-1層水田跡の土壌のほとんどが現代水田の耕作によって削平されていたため、畦畔本体を検出することはできなかった。しかし、床土にあたるII-1'層のまくれあがり、いわゆる擬似畦畔Bとして痕跡を認めることができた。第11号坪型区画跡側にはIV層を基盤とした畦畔基部を検出した。詳細は第11号坪型区画跡の記述に譲る。

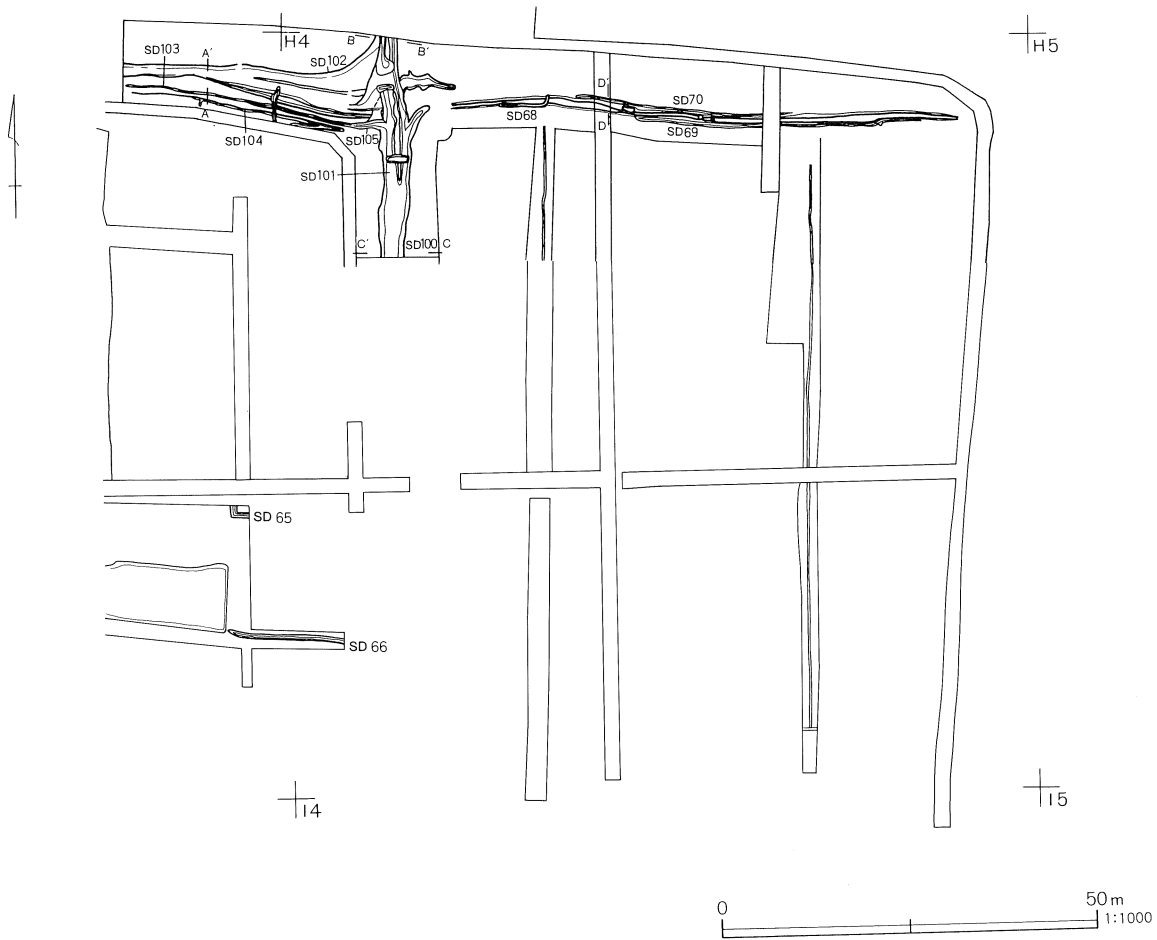
坪型区画跡内部の地割・水田跡

少量のAs-Aを覆土中にもつ南北に延びる小規模な溝跡2条を検出した。近代の溝跡と考えられる。現在の表層坪型区画にみられる南北の長地型地割が、近代以前に遡ることが明らかになったが、近世の状況については近代以後の耕作による攪乱が激しく明確にすることはできなかった。

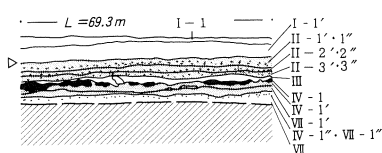
第20号坪型区画跡(第33・34図)

I4・5、J4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ1町方格の整った坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。北辺をなす用水路は、九郷用水から取水する幹線用水路となっている。現在の真下堀川である。南辺をなす用水路には典型的な「猿尾状」分水がみられる。西辺をなす用水路は1段毎に小規模で短い用水路をもって引水しており、南から2段目の北辺を通り3段目に引水する用水路跡は坪型区画を貫通して東辺の用水路に注

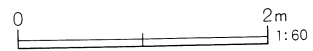
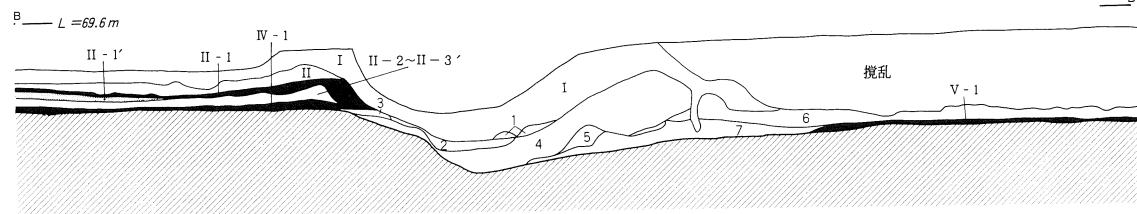
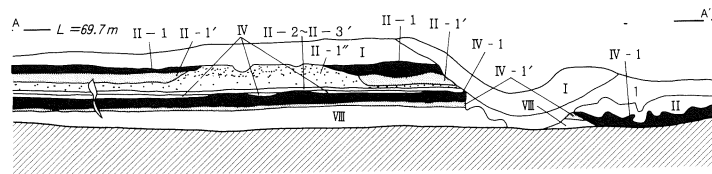
第31図 第19号坪型区画跡



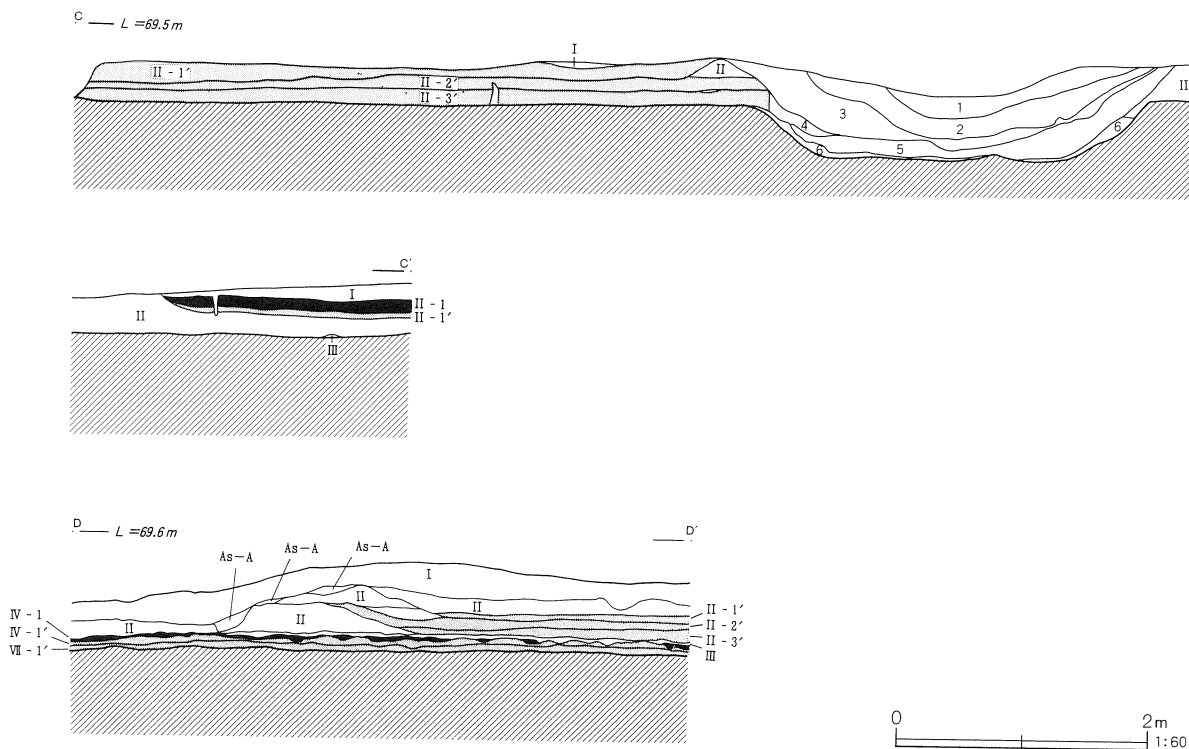
土壤層位



- 1 灰黄褐色 10YR4/2 火山灰まじりシルト As-A 少 酸化鉄結核少
- 2 黄褐色 10YR4/3 火山灰まじりシルト As-A 多 酸化鉄結核少
- 3 細砂質シルト 平安水田耕作土の流れ込んだもの
- 4 灰黄褐色 10YR5/2 細砂質シルト As-A 少 酸化鉄結核多 マンガン班少
- 5 褐色 10YR4/4 細砂質シルト As-A 少 酸化鉄結核少 マンガン班多
- 6 II-2~II-3' 層に対応
- 7 にぶい黄褐色 10YR4/3 細砂 氾濫による流入砂



第32図 第19号坪型区画跡土層図



ぎ込んでいた。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、表層の坪型区画内にはほとんどの部分でAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。また、第2遺構面を形成するII-1～3層水田土壌は現代水田の耕作によって削平されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、土壌化痕跡を残さないII層、IV層、VII-1層、VII-1'層、VII-2'層、VIII層という層序であった。第1遺構面における表土除去はII層上面までとした。

調査は、トレンチ調査を主体とし、遺構が検出された部分について範囲を拡大した。表層坪型区画北辺は、護岸工事された真下堀川となっており調査できなかった。東部は一丁田遺跡として調査されているが、第1遺構面に対応する遺構は検出されていない(富田・赤熊1985)。

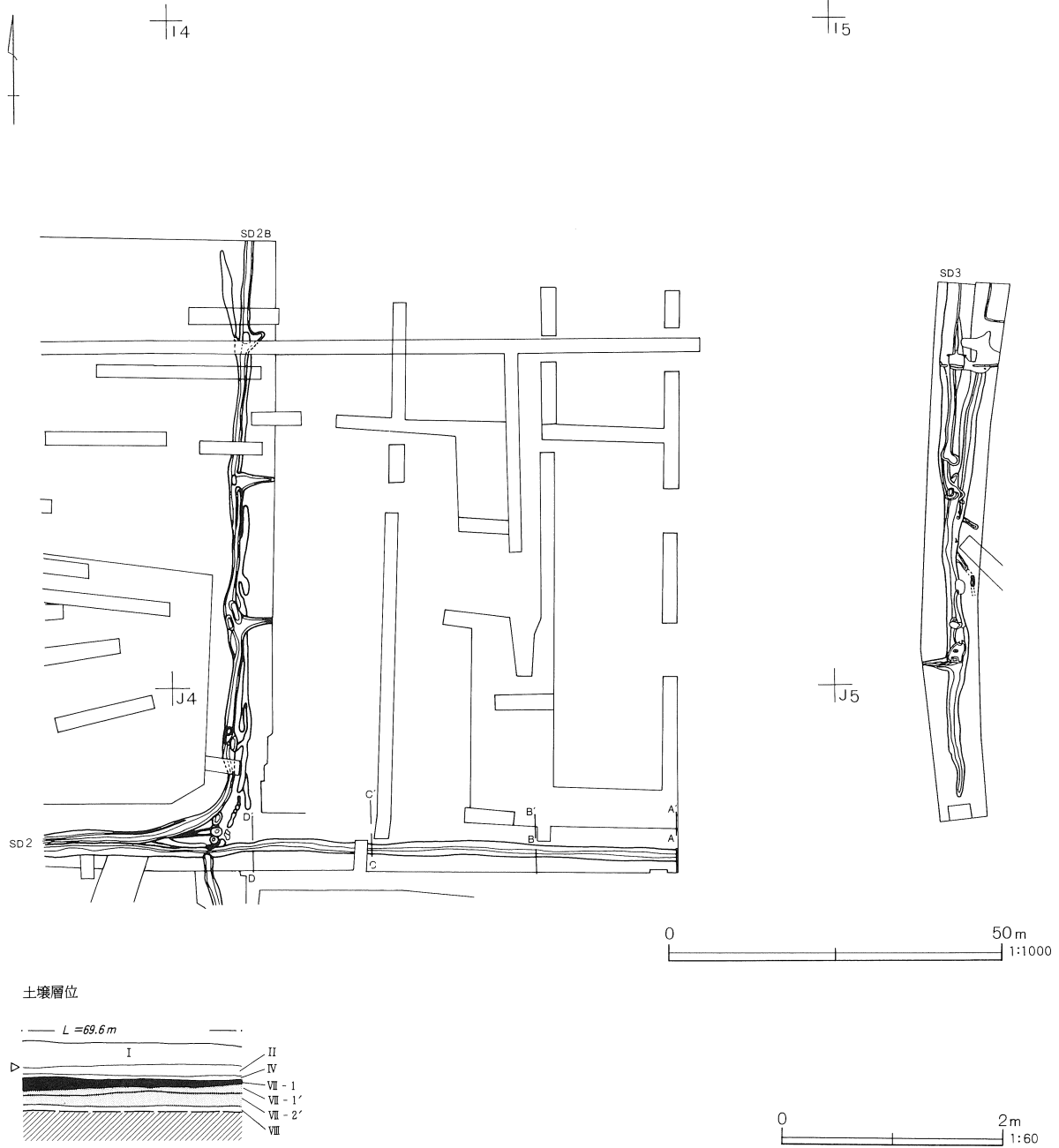
検出した坪界線は、南辺が第4号坪型区画跡南辺の

坪界線から300m以上も東流する幹線用水路跡SD2、西辺が第12・13・20・21号坪型区画跡坪界線交点で幹線SD2から北に分流する支線用水路跡SD2B、東辺が取付け道路を隔てて検出したSD3によって構成されていた。坪型区画跡の規模は東西の坪界線をなすSD2BとSD3の芯芯距離で107～109m、坪界線方位は西辺がN-1°-E、南辺がN-91°-E、東辺がN-2°-Eであった。北辺が不明であるが、整った方形をなすものと考えられる。

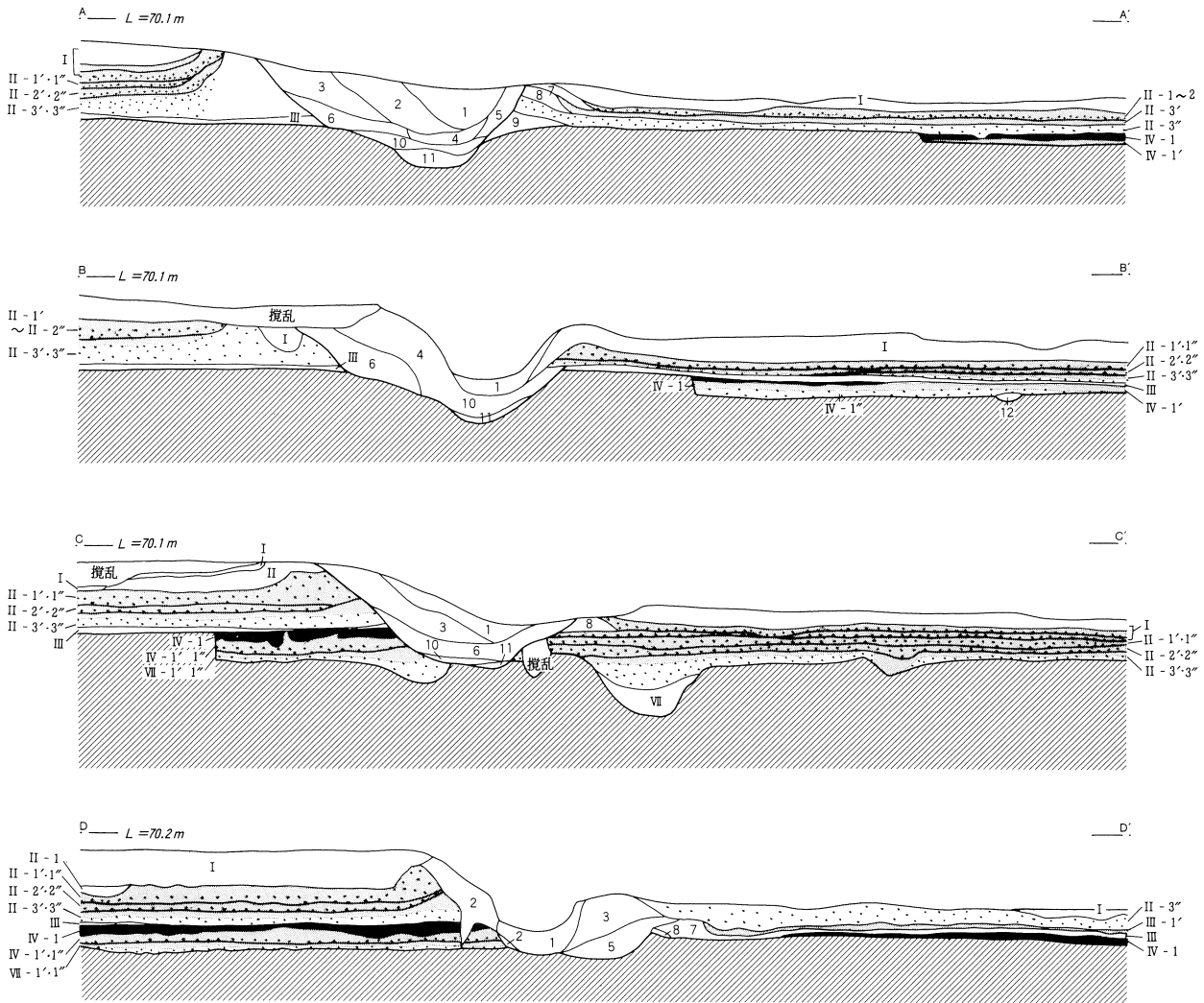
溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南辺坪界線下では、As-A降下以前から近代まで継続する用水路跡SD2を検出した。第12・13号坪型区画跡坪界線では、分流後70m以上にわたって並行して東流する「猿尾状」分水を検出したが、第20号坪型区画跡南辺では検出した67mすべてが単独の用水路跡であった。覆土には部分的にAs-A純粹堆積層が認められ、上層には現代の用水路跡が掘削されていた。断面調査では、両脇にマンガン結核集積層もし

第33图 第20号坪型区画跡



第34図 第20号坪型区画跡土層図



- 1 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト 現代溝堆積土
- 2 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト 近代溝堆積土 As-A
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 細砂質シルト II-1~2に対応する溝堆積土
- 4 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 II-1~2に対応する溝堆積土下層
- 5 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 II-2~3に対応する溝堆積土 As-B少
- 6 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂質シルト II-2~3に対応する溝堆積土 As-B少
- 7 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質火山灰 II-1~2に対応する大畦畔
- 8 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト質火山灰 II-3に対応する大畦畔 As-B多
- 9 黒褐色 2.5Y3/3 シルト IVに対応する畦畔
- 10 黒褐色 2.5Y3/1 シルト IVに対応する溝堆積層
- 11 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 As-Bが堆積
- 12 にぶい黄褐色 10YR4/3 火山灰 As-Cの層

0 2m
1:60

くは酸化鉄集積層のまくれ上がりの擬似畦畔Bとして大畦畔が検出できた。遺構本体が遺存しておらず大畦畔の規模は明らかにできなかったが、木杭・矢板をともなわない盛土によって構築されており、マンガン結核が集積したII層を基盤としていた。SD2の規模は上端の幅200cm程度、下端の幅70cm前後、深さ30~50cmであった。

SD2は第12・13・20・21号坪型区画跡坪界線交点で支線SD2Bを北に分離していた。SD2Bは、坪界線交点から北に34m、54m、76mの地点で小規模な用水路を第20号坪型区画跡側に分流していた。これは昭和24年段階の表層地割に共通するもので、34m地点で分流する用水路跡は東辺をなすSD3の西からの用水路入点で合流するものと考えられる。小規模用水路跡覆土にはAs-A層の堆積はないが、分流点には木杭を用いた堰跡が検出されており、堰跡下流に流れ落ちる際の水流によってできた深みにはAs-Aが厚く堆積していた。堰跡上層には空き缶などの現代廃棄物もみられたが、小規模用水路跡を含め、この地割が近世以降継続したものとしてよいだろう。

東辺のSD3は、As-A層の純粹堆積をもたない近世から現代に機能した用水路跡である。詳細は主に引水していたと考えられる第27号坪型区画跡で記述する。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

西辺坪界線をなすSD2Bの分水状況からみて、表層坪型区画同様東西の長地型地割であったと考えられるが、現代水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第21号坪型区画跡(第35図)

J4・5、K4・5グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、南部に女堀川の流路が蛇行しているため南辺の坪界線がみられないものの、北・東・西の坪界線には整った区画の用水路が認められる。内部は南北方向の長地型に区画されている。蛇行する女堀川が付け変えられ直線的に北東流することを除き、

基本的な地割は平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、非常に良好な水田土壌が形成されていることがわかった。しかし、As-Aの堆積層は存在せず、すべて表土中に攪乱されていた。また、第2遺構面を形成するII-1~3層水田耕作土は上層の水田耕作によって削平されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、V層、女堀川氾濫による洪水砂VI層、VII-1'層、VII-1''層、VII-2'層、VII-2''層、VIII層という層序であった。第1遺構面における表土除去はII-1'層上面までとした。

調査は、トレンチ調査を主体とし、遺構が検出された部分について範囲を拡大した。表層坪型区画南部は、護岸工事された女堀川となっており調査できなかった。また、東部は一丁田遺跡として調査されているが、第1遺構面に対応する遺構は検出されていない(富田・赤熊1985)。

検出した坪界線は、北辺が第4号坪型区画跡南辺の坪界線から東流する幹線用水路跡SD2、西辺が今井川越田遺跡SD5もしくは女堀川の蛇行した旧河道から引水したものと考えられるSD1Bによって構成されていた。坪型区画跡の規模は不明であるが、坪界線方位は西辺がN-2°-E、北辺がN-91°-Eであった。

溝跡・大畦畔

表層坪型区画の南辺坪界線下では、As-A降下以前から近代まで継続する用水路跡SD2を検出した。覆土には部分的にAs-A純粹堆積層が認められ、上層には現代の用水路跡が掘削されていた。断面調査では、両脇に擬似畦畔Bとして大畦畔が検出できた。詳細は第20号坪型区画跡の記述に譲る。また、西辺のSD1Bは、本来第21号坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水する用水路跡と考えられるが、上部を削平されており、分水などの遺構は検出できなかった。溝跡底面には部分

的にAs—A純粋堆積層が認められた。出土遺物は認められなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第22号坪型区画跡(第36図)

C5・6、D5・6グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、北・東・西に用水路、南に大畦畔をもつ一町方格の地割となっているが、南辺をなす大畦畔はやや南東に斜行している。区画中央やや北側には第15号坪型区画跡の表層坪型区画を北東流してきた九郷用水支流延長上の地割を流れる大規模用水路が南に湾曲しながら東流している。内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のⅧ層が浅い上、調査直前の段階では桑畑となっているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすⅡ層が破壊されていた。上層を被覆するAs—A層もすべて表土中に攪乱されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるⅠ層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたⅡ層、Ⅷ層であった。

表層坪型区画のうち大規模用水北側には、平成5年度の範囲確認調査で古墳前期～平安時代の集落跡を中心とした地神遺跡が発見されていたため、遺物包含層となっていたⅠ～Ⅶ層を除去し、Ⅷ層上面で調査を行った。大規模用水路は、本来調査対象となっていたが、調査時点で農業用水以外に生活排水路としても利用されていたため、調査を断念した。

大規模用水路の南側について今井条里遺跡の調査範囲とし、トレンチを中心に調査を行い、遺構が存在する部分について範囲を拡大した。西辺については周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。

坪型区画跡北部にあたる地神遺跡の調査では、上層

は攪乱されており、詳細を明らかにすることはできなかった。

今井条里遺跡内では西辺坪界線は調査できなかったが、東辺にSD140を検出した。南辺坪界線については現代の耕作等によって完全に失われており検出できなかったが、表層では大畦畔のみによって構成されており、近世段階の区画も第19号坪型区画跡北辺の坪界線に類似した状況であったと考えられる。

なお、第2遺構面では、西に隣接する第15号坪型区画跡南辺坪界線下から延びる大規模用水路跡SD146を検出したが、表層坪型区画の南辺坪界線および、これの東に連続する第28・29号坪型区画跡坪界線は、南に15m程度ずれており、平安時代から近世に至るいずれかの時期に坪界線の変更があったものと考えられる。

坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は、北辺がN—91°—E、東辺がN—1°—Eであった。今井条里遺跡におけるSD140は、南東坪界線交点から40m程度しか検出できなかった。

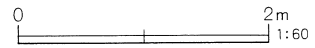
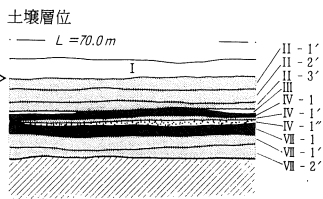
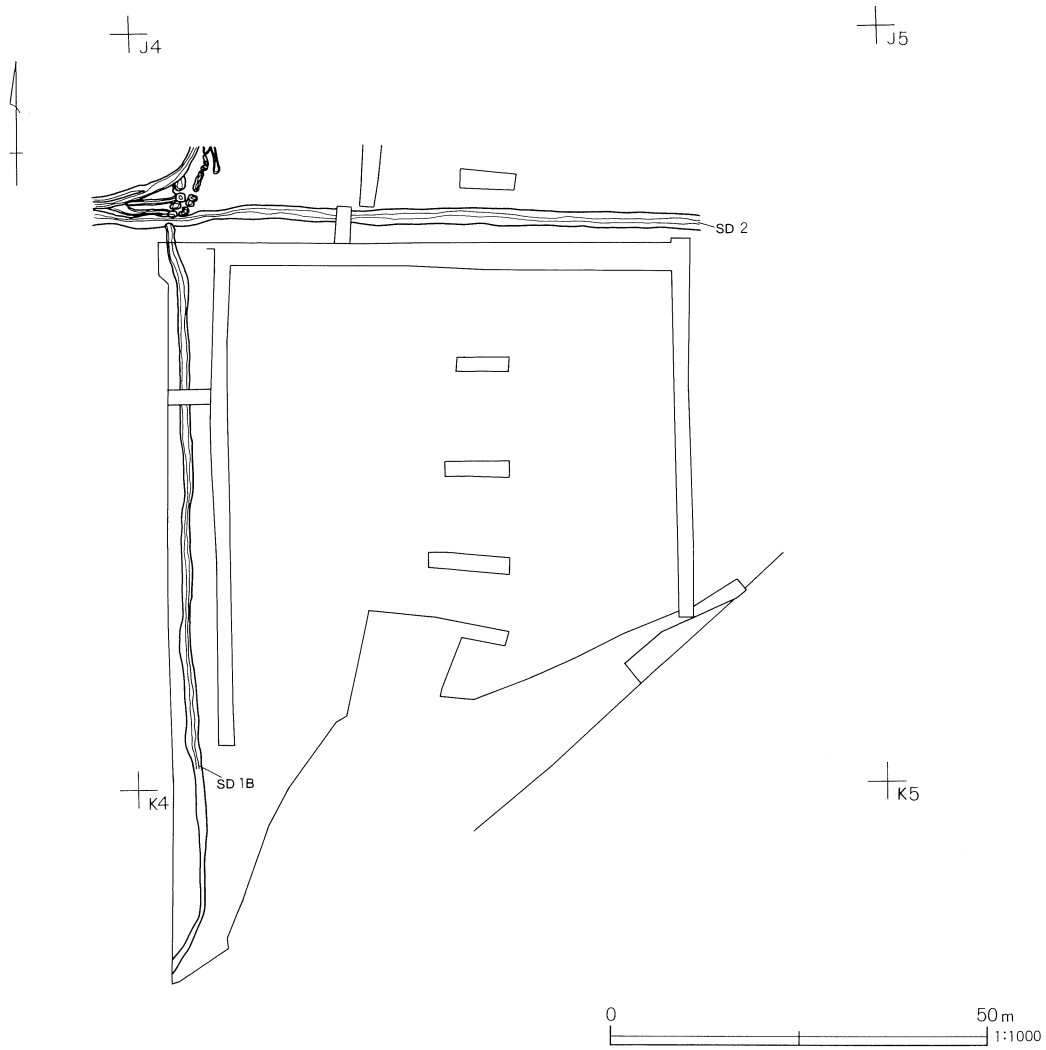
SD140は、第23・24号坪型区画跡坪界線を東流したSD120から第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点付近で分流したのち北流する用水路跡で、覆土下層にAs—A層の堆積はなく、底面付近の覆土中から19世紀から近代にかけての陶磁器類を得ることができた。詳細は用水の主な供給区画である第29号坪型区画跡での記述に譲る。

第23号坪型区画跡(第37・38・39図)

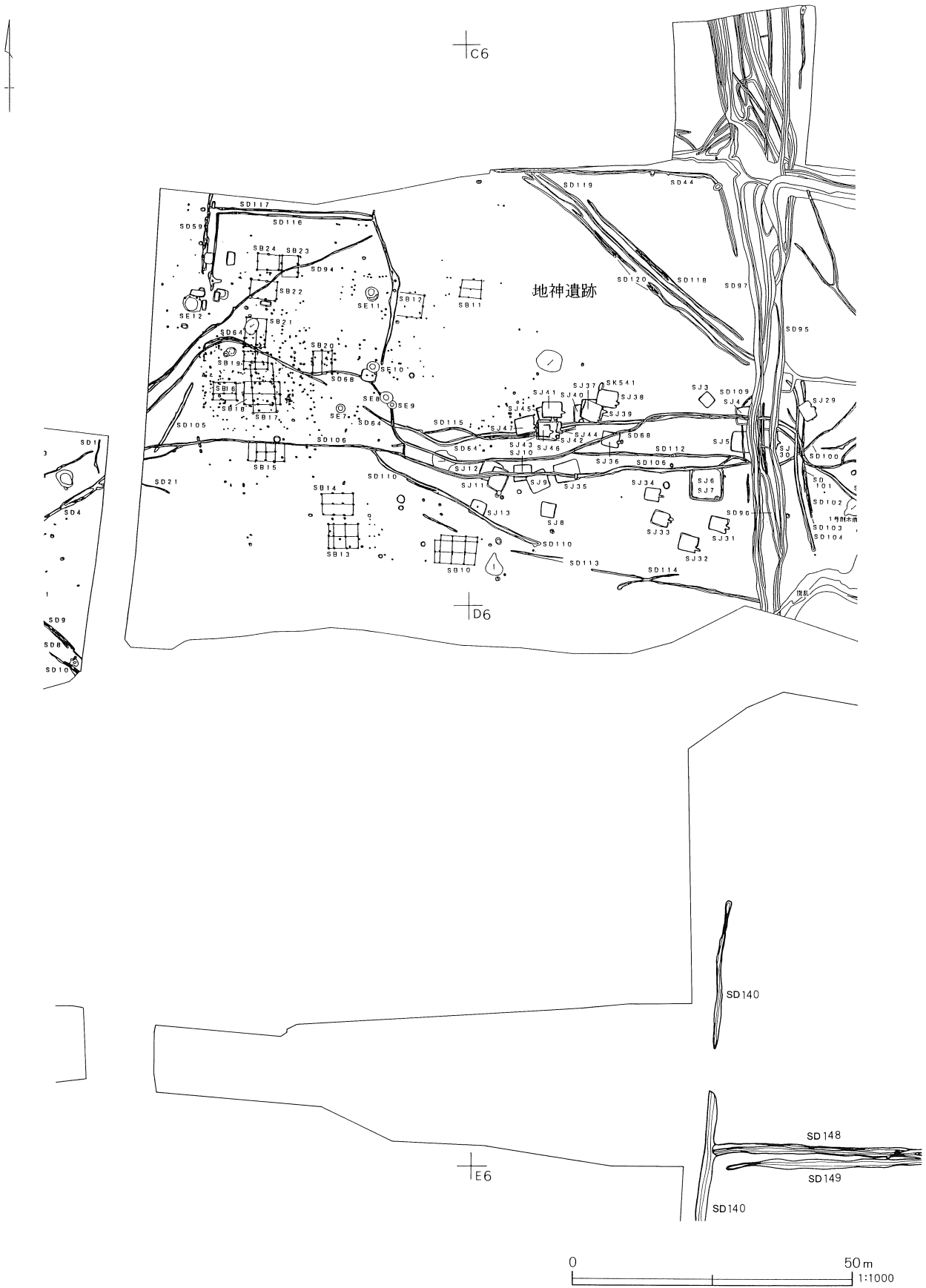
D5・6、E5・6グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、南・東・西に用水路、北に大畦畔をもつ一町方格の地割となっているが、西辺に比べて東辺が短く、北辺をなす大畦畔はやや南東に斜行している。内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のⅧ層が浅い上、調査直前の段階では桑畑となっ

第35图 第21号坪型区画跡



第36図 第22号坪型区画跡



ているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすII-1層が削平されていた。上層を被覆するAs-A層もすべて表土中に攪乱されていた。良好な水田土壌遺存部分における基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1層、II-2層、II-2'層、II-3層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよび、マンガン結核集積層VII-2'層が認められた。なお、表層坪型区画の大部分は、表土のI層下にVIII層が存在する埋没台地縁辺の微高地となっており、第4遺構面の調査によって、古墳時代前期には集落跡として利用されていたことがわかった。

調査はトレンチを主体に行い、遺構が存在する部分について範囲を拡大した。表層坪型区画のうち西辺については周辺水田の水利権保護および関越自動車道下となるため調査できなかった。

検出した坪界線は、南辺が東流するSD120、東辺がSD120が第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点付近で分流したのち北流する用水路跡SD140によって構成されていた。現代の用水路による浚渫もしくはコンクリートによる護岸等のため、いずれの坪界線も破壊されており、大畦畔を検出することはできなかった。

坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は、南辺が $N-91^{\circ}-E$ 、東辺が $N-1^{\circ}-E$ であった。整った方形であったと思われる。

溝跡・大畦畔

南辺の坪界線をなすSD120は、第23・24号坪型区画跡坪界線を東流する大規模な用水路跡であった。上部を現代のコンクリートの護岸等によって削平されていたため、第1遺構面に対応する大畦畔を検出することはできなかったが、II-1層上面における上端の幅約300~400cm、下端の幅約20~100cm、深さ60~120cmであった。SD140分流点は、第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点から15m程度上流によっているが、SD2・3等に認められるような典型的な「猿尾状」分水

ではなかった。出土遺物は得られなかった。

東辺をなすSD140は、SD120が第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点付近で分流したのち第23・29号坪型区画跡坪界線を北流する用水路跡であった。底面付近の覆土中から19世紀から近代にかけての陶磁器類を得ることができた。第2遺構面では、東側にほとんど重複してIV-1層水田跡にともなう大畦畔を検出しており、第23号坪型区画跡の区画が平安時代以降継続してきたことが推測できる。

第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点にはSD140前身となるSD130・138の痕跡が認められた。覆土にはともにAs-Aを多量に含んでいた。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

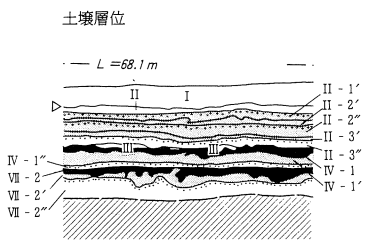
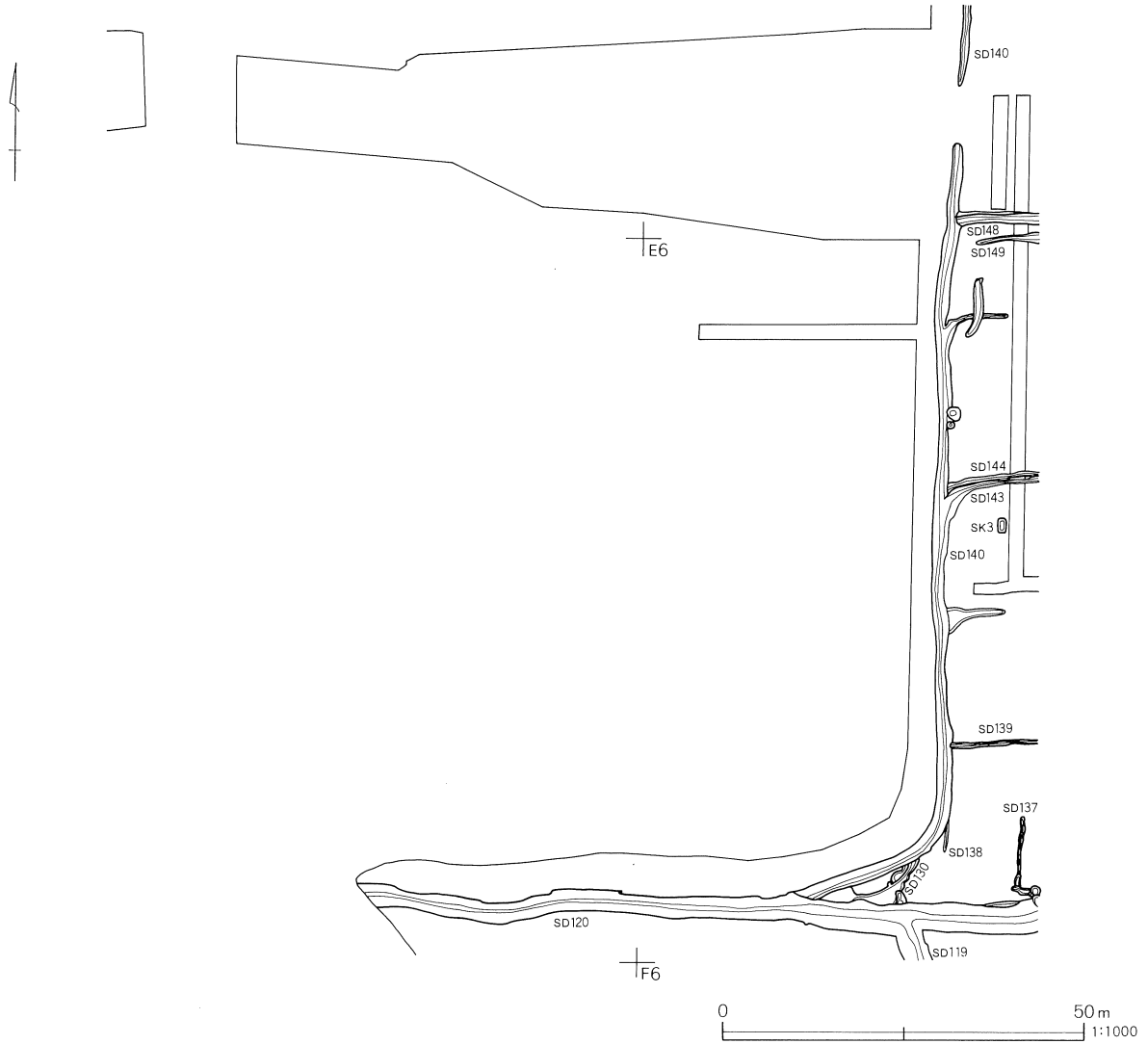
現代水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第24号坪型区画跡(第38・39図)

E5・6、F5・6、G5・6グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った一町方格の地割となっている。内部は、基本的に東西方向の長地型に区画されているが、北部に一部用水路の乱れが認められる。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のVIII層が浅い上、調査直前の段階では桑畑となっているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすII-1層水田耕作土が削平されていた。上層を被覆するAs-A層もすべて表土中に攪乱されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1層、II-2層、II-3層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよびマンガン結核集積層VII-2'層が認められた。なお、北半部は表土のI層下にVIII層が存在す

第37图 第23号坪型区画迹



る埋没台地縁辺の微高地となっており、第4遺構面の調査によって、古墳時代前期には集落跡として利用されていたことがわかった。

表層坪型区画のうち南西部分については関越自動車道下となっており、調査できなかった。関越自動車道建設に先立つ試掘調査では特に遺構を検出していない。

検出した坪界線は、北辺が東流するSD120、東辺が第24・30号坪型区画跡坪界線を北流するSD119によって構成されていた。現代の用水路浚渫もしくはコンクリートによる護岸等のため、いずれの坪界線も破壊されており、大畦畔を検出することはできなかった。

坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は、北辺がN-91°-E、東辺がほぼN-Sであった。整った方形であったと思われる。

溝跡・大畦畔

北辺の坪界線をなすSD120については、第23号坪型区画跡の記述に譲る。

東辺をなすSD119は蛇行の大きい大規模な用水路跡で、第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点でSD120に合流していた。上層にはコンクリートによる護岸工事が多く認められ、現代用水路が完全に重複していたが、上部を削平されていながら120cm程度の深さをもっていたため、底面付近が損なわれずに遺存していた。覆土・出土遺物からみて18世紀中頃に掘削されたものと考えられる。詳細は、主な用水の供給先である第30号坪型区画跡に記述する。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第25・26号坪型区画跡(第40図)

G5・6、H5・6、I5・6グリッドにかけて検出した。第25号坪型区画跡については、昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ整った一町方格の地割となっている。第26号坪

型区画跡については、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつが、南辺の用水路は規模が小さく流路に乱れがあり、本来南辺を東流すると考えらえる大規模用水路は、西辺坪界線で一旦北に折れ、坪型区画南部の1段をおいて、この北辺を東流している。この用水路は現在の真下堀川にあたり、付け変え後の流路に影響を与えている。ともに用水路に乱れはあるが、内部は東西方向の長地型に区画されている。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、第1遺構面上層を被覆するAs-A層がすべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、土壌化痕跡のないII層、II-1'層、IV-1'層、土壌化痕跡のないIV層、VII-2'層、VIII層であった。

当地区については、北側に関越自動車道が建設されているため、第25号坪型区画跡の北辺坪界線が予想される部分については調査できなかった。また、平成5年度にトレンチを主体として範囲確認調査を行った後、公園として盛土保存されることが決定したため、ほとんどの部分が未調査となった。

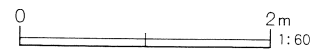
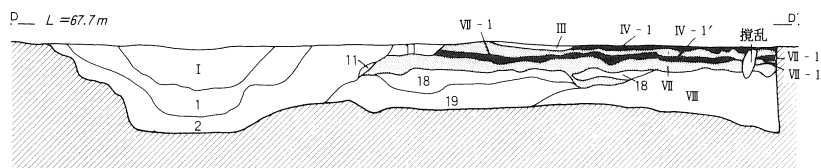
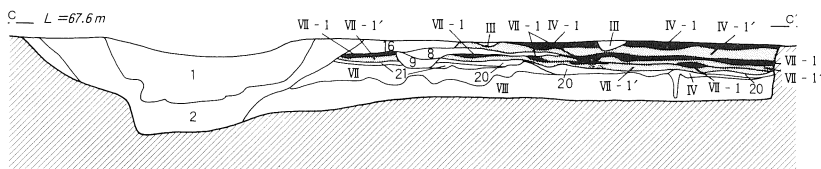
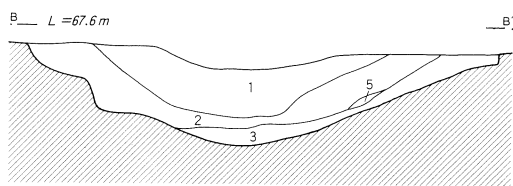
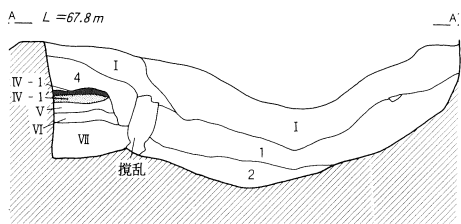
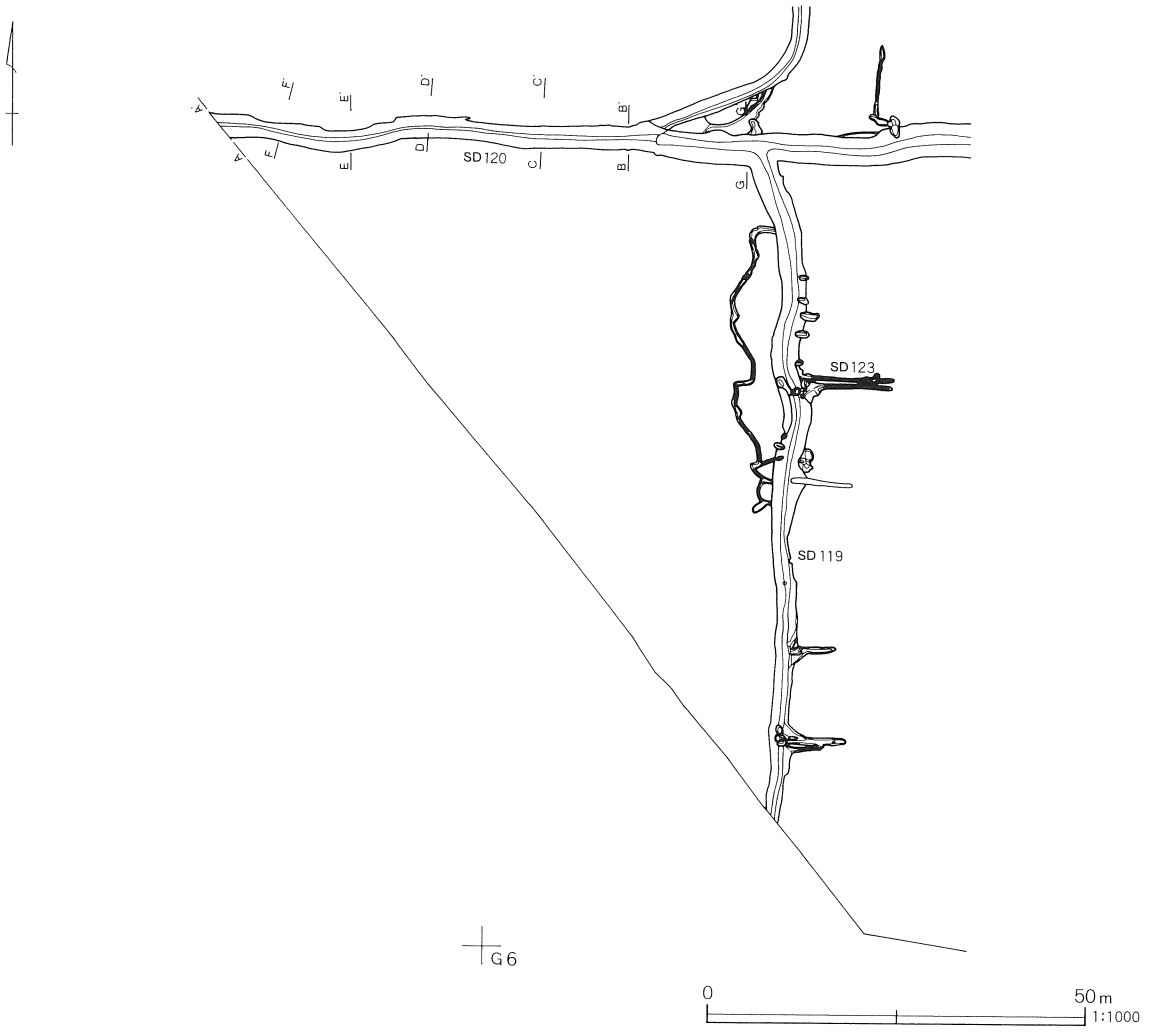
検出した坪界線は、第25・26号坪型区画跡を画する坪界線で、南北に設定したトレンチのうち、Hグリッドの基準線から南に10mの地点で確認した。As-A純粋堆積層を覆土にもつ用水路跡で、現代用水路が上層に認められた。大畦畔は現代用水路によって削平されていた。

第26・27号坪型区画跡を画する坪界線は、真下堀川南の調査区で、As-Bの堆積前後に掘削され中世段階まで機能したと思われるSD3を検出したが、第1遺構面に対応する坪界線は検出できなかった。

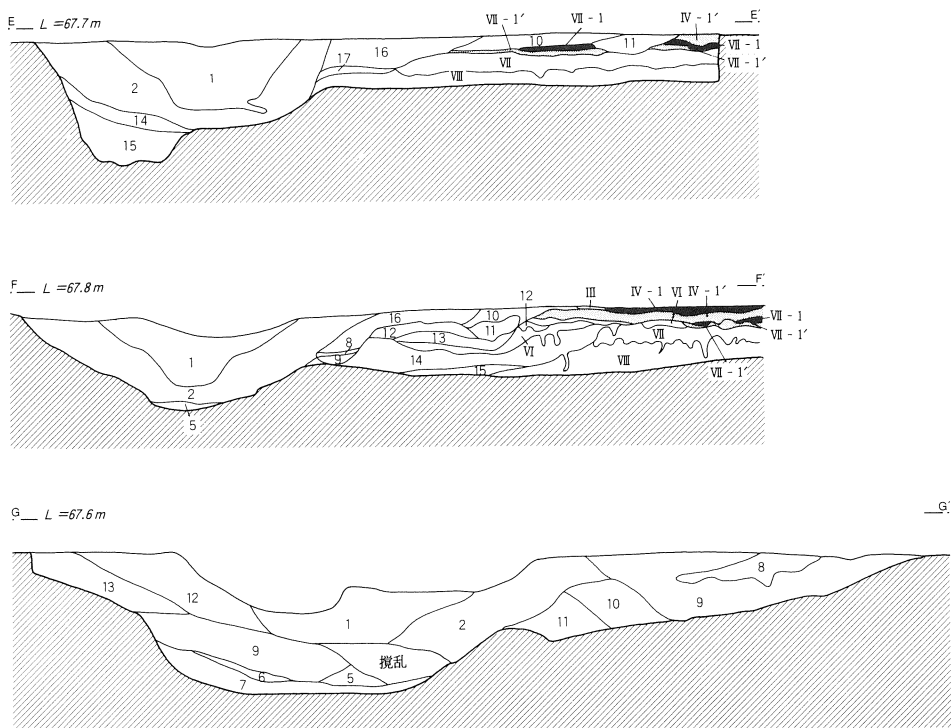
本来、第26・27号坪型区画跡を画する坪界線はSD3の検出された位置に求められるが、平安時代以後一定期間をおいて、現在の真下堀川下に移動したものと考えられる。原因は女堀川の蛇行・氾濫等と推測できる。SD3については第27号坪型区画跡で詳述する。

なお、実際の坪界線を構成する遺構が認められない

第38图 第24号坪型区画跡



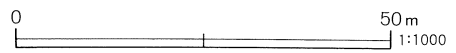
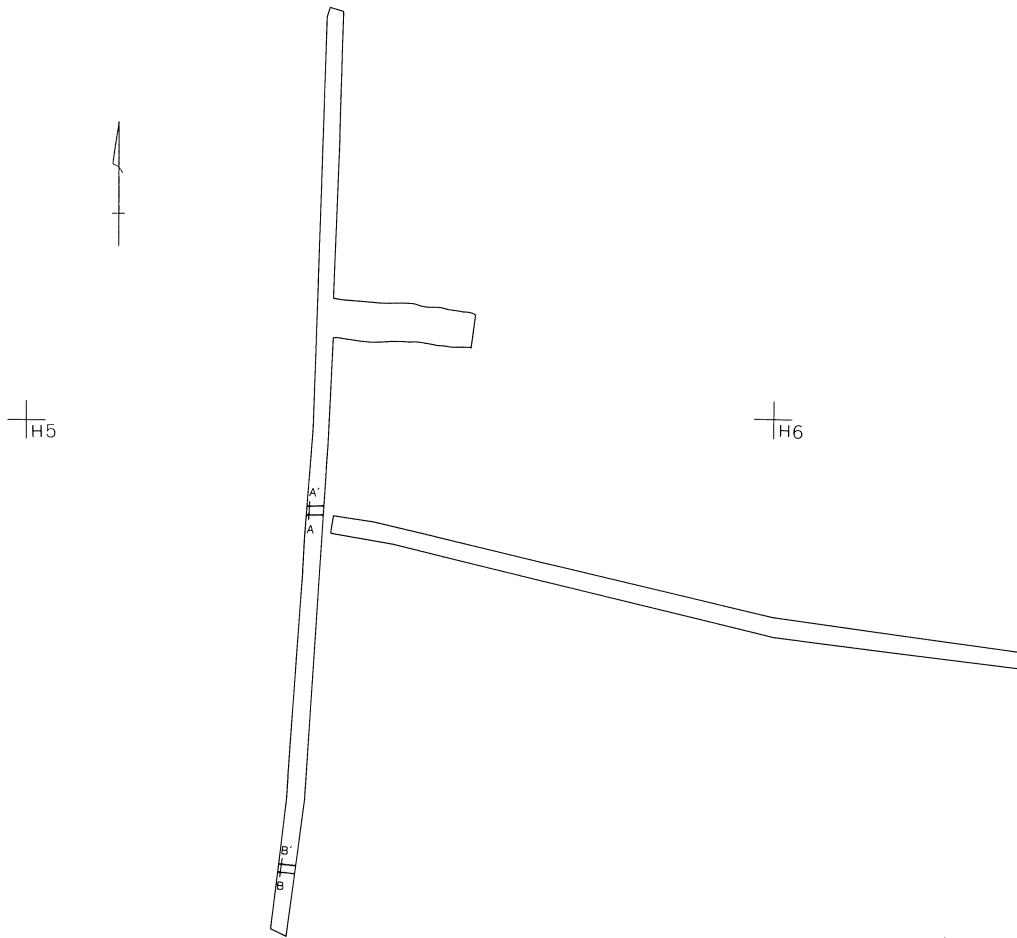
第39図 第24号坪型区画跡土層図



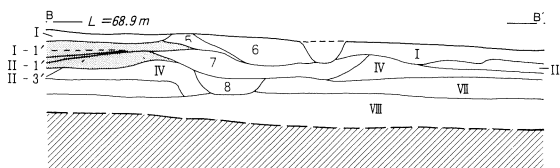
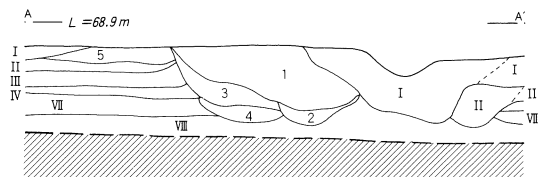
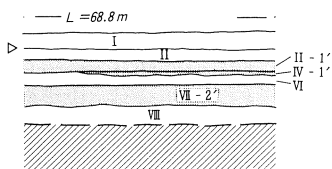
- | | |
|---|---|
| 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質火山灰 As-A 主体 | 12 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト 水田耕作土 FA 多 |
| 2 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質火山灰 As-A 主体 VIIIブロック入る | 13 黒褐色 10YR3/1 シルト質細砂 鉄斑集積層 |
| 3 暗褐色 10YR3/4 火山灰まじりシルト 近世以後の畦畔 As-B 少 | 14 黒褐色 10YR3/2 シルト 18層に同じ As-C |
| 4 I層と同色同質のコンクリート堰の裏込土 | 15 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 19層に同じ VIII層小ブロックを多 |
| 5 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質中砂 クロスラミナ発達 | 16 褐色 10YR4/4 シルト質細砂 鉄斑が全体に入る |
| 6 黒褐色 2.5Y3/2 細砂質シルト クロスラミナあり | 17 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 16層に似るが砂粒やや粗い |
| 7 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂質シルト 弱いクロスラミナあり | 18 黒褐色 7.5Y2/2 細砂質シルト As-C 少 |
| 8 暗褐色 10YR3/4 中細砂 As-B 多 酸化鉄結核少 | 19 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 18層に似るが細砂少ない |
| 9 暗褐色 10YR3/4 細砂 As-B 酸化鉄結核少 | 20 暗褐色 10YR3/4 細砂 旧河道 |
| 10 暗黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト As-B 少 | 21 暗褐色 10YR3/4 細砂 旧河道 鉄斑多 |
| 11 にふい黄褐色 10YR4/3 火山灰 As-B 純層 | |



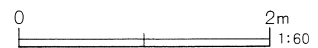
第40図 第25・26号坪型区画跡



土壤層位



- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 火山灰まじりシルト As-A多
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 火山灰まじり細砂 As-A多
- 3 暗灰黄色 2.5Y4/2 火山灰 As-A純層
- 4 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質火山灰 As-A多
- 5 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト 大畦畔 As-A 酸化鉄結核多
- 6 暗オリーブ褐色 2.5Y4/3 火山灰まじりシルト As-A多 酸化鉄結核少
- 7 暗灰黄色 2.5Y4/2 火山灰まじりシルト As-A少
- 8 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 火山灰まじりシルト As-A少



ことと、条里型地割計画線における坪界線とは区別するべきであるが、近世段階におけるこうした現象は、条里型地割の基本的な理念が失われていたことを示していると考えられる。

また、南北に設定したトレンチ内には、第25・26号坪型区画跡を画する坪界線をなす用水路跡より42m南でも溝跡を検出した。As-Aの純粹堆積層がなく、先の坪界線をなす用水路跡より新しいと考えられるが、堆積状況からみて近世の溝跡であると思われる。

坪型区画跡内部の地割・水田跡等の詳細は、明らかにすることができなかった。

第27号坪型区画跡(第41・42図)

I 4・5・6グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、四方に用水路をもつ1町方格の整った坪型区画となっており、内部は東西方向の長地型に区画されている。北辺の用水路は規模が小さく流路に乱れがあり、本来北辺を構成すると考えられる大規模用水路は、北西坪界線交点を北に折れ、北側に隣接する坪型区画内部を東流している。この用水路は現在の真下堀川にあたり、付け替え後の流路に影響を与えている。この地割りは平成5年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、表層の坪型区画内にはほとんどの部分でAs-Aの堆積層が存在せず、すべて表土中に攪乱されていることがわかった。また、第1遺構面を形成するII-1層水田跡耕作土は現代水田の耕作によって削平されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-3'層、III層、IV-1'層、IV-1''層、VII-1'層、VII-2'層、土壌化痕跡のないVII層、VIII層という層序であった。第1遺構面における表土除去はII-1'層上面までとした。

調査は、トレンチ調査を主体とし、遺構が検出された部分について範囲を拡大した。表層坪型区画北には、護岸工事された真下堀川が東流していたが、昭和24年

段階の区画にみられるように、本来坪界線が予想される位置より北側によっていたため、北辺坪界線相当位置を調査することができた。南辺および東辺坪界線は、女堀川の堤防となっており、調査することはできなかった。

第1遺構面において検出した坪界線は、西辺のSD3のみである。坪界線方位は西辺でN-2°-Eであった。坪型区画跡の規模は計測できなかった。

溝跡・大畦畔

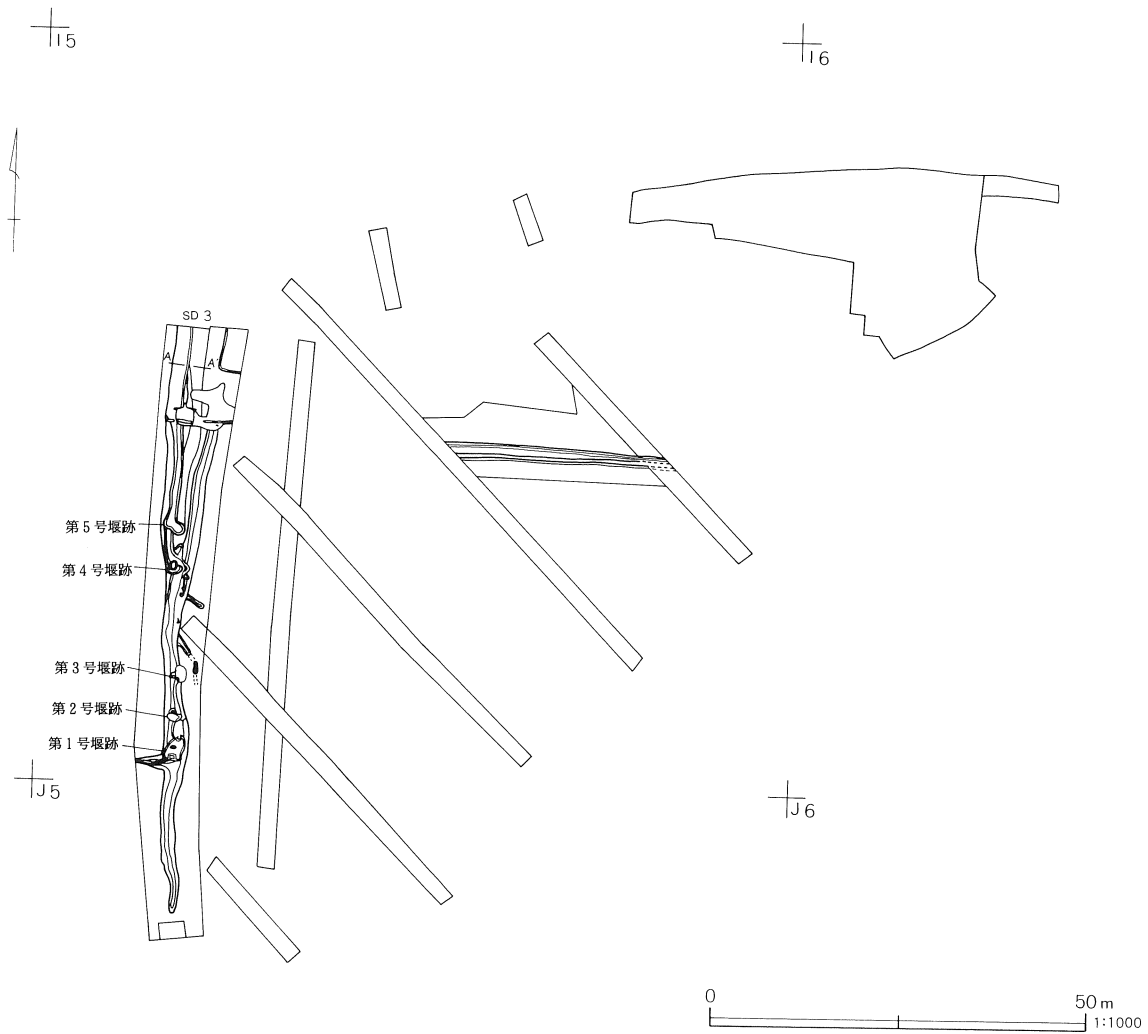
表層坪型区画の東辺坪界線下では、As-A層の純粹堆積をもたない近世から現代に機能した用水路跡SD3を検出した。南から蛇行しつつ北流していた。Iグリッド北辺の基準線から南に67mの地点で分流し、並行して流れる「猿尾状」分水が認められた。調査できた範囲内では、32mにわたって並行する状況が観察できた。この分流点を含め5個所の堰跡が設けられていたが、いずれも松材を用いた木杭によって横木を止め、下流にあふれる水流の勢いから護岸するために矢板を用いるものであった。横木には丸木が用いられる場合(第42図)と板材が用いられる場合があった。板材には杉板が用いられていた。加工は手斧等によって行われたものと考えられる。攪乱されたII層またはI層で埋没しており、近世から近代、あるいは昭和初期に設置されたものであろう。現代水田の耕作による攪乱のため、大畦畔は検出できなかった。

北辺坪界線には、第1遺構面に対応する遺構は検出できなかったが、第2遺構面において覆土にAs-B層をもつSD4を検出した。近世以後、北側の坪型区画内に移った用水路も、平安時代から中世初期には本来の坪界線にあったことがわかる。

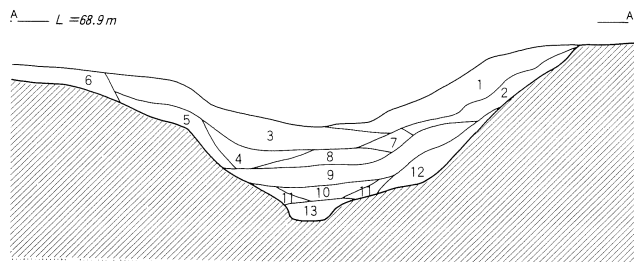
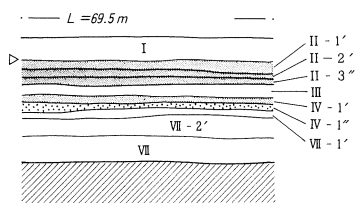
坪型区画跡内部の地割・水田跡

内部にはAs-Aで埋没した畦畔1条を検出した。両側に畦畔補修時の土取りを行ったとみられる小規模な溝跡が認められた。上面の幅20cm程度、下端の幅60~70cm程度、高さ10~20cm程度で、東西に直線的に設けら

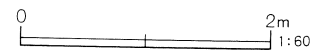
第41図 第27号坪型区画跡



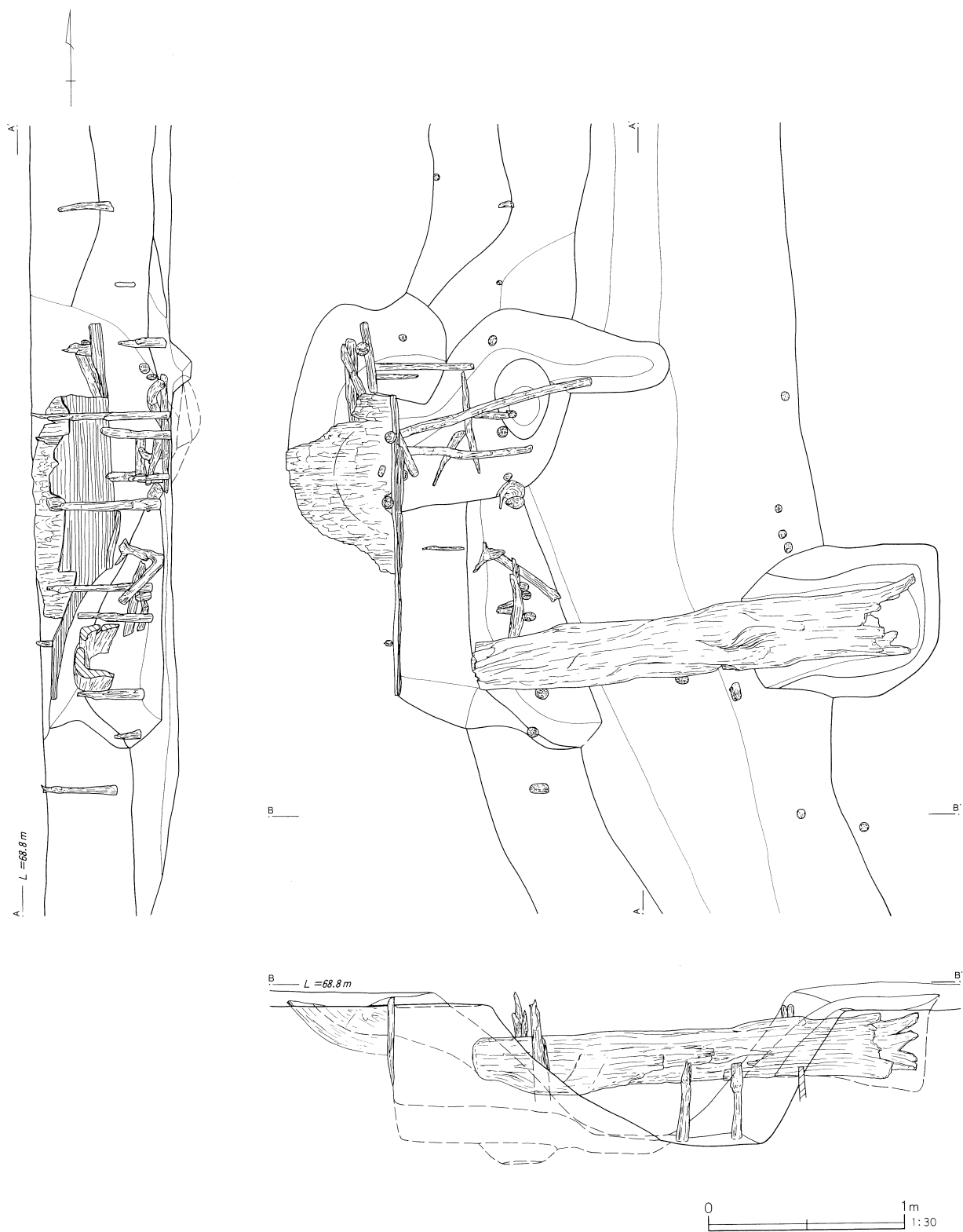
土壤層位



- 1 黒褐色 2.5Y2/3 粘土
- 2 暗褐色 2.5Y3/2 細砂
- 3 黒褐色 2.5Y2/3 粘土 壁崩落層 酸化鉄結核
- 4 褐灰色 5Y4/1 シルト 炭化物少 焼土少
- 4 褐灰色 5Y4/1 シルト 炭化物少 焼土少 マンガン結核少
- 5 暗褐色 7.5Y3/3 細砂質シルト
- 6 灰褐色 5Y4/2 細砂質シルト 炭化物少
- 7 灰褐色 7.5Y4/2 細砂質シルト 木片
- 8 黒褐色 10YR4/2 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核少
- 9 黒褐色 2.5YR3/1 細砂質シルト クロスラミナあり 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 10 灰褐色 5Y4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核
- 11 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質中細砂 酸化鉄結核多
- 12 暗灰褐色 細砂質シルト
- 13 暗褐色 10YR3/3 中砂



第42図 第3号堰跡



れていた。近世における坪型区画跡内部の地割が、東西の長地型であったことがわかる。

第28号坪型区画跡(第43図)

C6・7、D6・7グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、北部に第22号坪型区画跡の表層坪型区画北部を東流してきた大規模水路が北西から南東に斜行して流れるため、北辺坪界線の認められない区画となっている。南・東・西には方位を基軸とした整った水路をもち、南半は方格の地割となっている。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、当地区は本庄台地上の扇状地性堆積層が薄く、地盤を構成するローム層対応のⅧ層が高い上、調査直前の段階では桑畑となっているなど攪乱が深く、第1遺構面をなすⅡ層が破壊されていた。上層を被覆するAs-A層もすべて表土中に攪乱されていた。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるⅠ層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたⅡ層、Ⅷ層で、部分的にⅦ-2層、Ⅶ-2'層が残存していた。また、第2遺構面で検出したSD146際には、Ⅵ層とこれによって埋没した水田跡を構成した水田土壌が認められた。なお、図示した土壌層位は第29号坪型区画跡のものである。

表層坪型区画のうち大規模用水北側には、平成5年度の範囲確認調査で古墳前期～平安時代の集落跡を中心とした地神遺跡が発見されていたため、遺物包含層となっていたⅠ～Ⅶ層を除去し、Ⅷ層上面で調査を行った。大規模水路は、本来調査対象となっていたが、調査時点で利用されていたため、調査を断念した。

坪型区画跡北部にあたる地神遺跡の調査では、上層が攪乱されており詳細を明らかにすることはできなかった。

大規模水路の南側について今井条里遺跡の調査範囲とした。

今井条里遺跡内では、西辺にSD140、南辺にSD140から直角に分流し東流するSD148、分流関係について

は明確でないが、これと重複関係にあるSD149、東辺にはSD148から分流した支流を検出した。南辺をなすSD148・149は、本来坪界線にあたる位置より南に15mほどずれており、第2遺構面で本来の坪界線下に検出した平安時代の大規模水路跡SD146の存在をみると、近世に至るいずれかの時期に坪界線の変更があったものと考えられる。

坪型区画跡の規模は、溝跡の芯芯距離で東西97m、坪界線の方位は、東辺が $N-2^{\circ}-E$ 、西辺が $N-1^{\circ}-E$ 、南辺が $N-91.5^{\circ}-E$ であった。今井条里遺跡におけるSD140は、南西坪界線交点から40m程度しか検出できなかった。

溝跡・大畦畔

南辺の坪界線をなすSD148は、第23・24号坪型区画跡坪界線を西から東流してきたSD120から北に分流するSD140が、さらに第22・23・28・29号坪型区画跡坪界線交点で分流して東流するものであった。上部を削平されていたため、明確な規模は不明である。底面に点々とAs-A純粋堆積層が認められた。出土遺物は、近世から近代に至る少量の陶磁器類を得たが図示できるものはなかった。SD148に切られる関係にあるSD149は、Ⅱ層に類似した覆土をもつもので、底面付近のみを検出した。出土遺物は近世に属する陶磁器類を得たが、図示できるものはなかった。

SD148支流は、第28・29号坪型区画跡坪界線を東流するSD148が、第28・29号坪型区画跡坪界線東側交点で北に分流したもので、階段状に取り回される水路跡の状況をもっともよく示すものの一つである。底面付近にはAs-A純粋堆積層が認められた。出土遺物は、近世から近代に至る少量の陶磁器類を得たが図示できるものはなかった。

西辺の坪界線をなすSD140は、覆土にAs-A層の堆積をもたない水路跡で、底面付近の覆土中から19世紀から近代にかけての陶磁器類を得ることができた。詳細は用水の主な供給区画である第29号坪型区画跡での記述に譲る。

第43図 第28号坪型区画跡



坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第29号坪型区画跡(第44・47図)

E6・7グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とし、北・南・西に用水路、東に水田の区画線をもつ一町方格の地割となっているが、東辺の坪界線は明瞭ではない。内部は東西方向の長地型に区画されており、東に近接する女堀川まで東辺坪界線をこえて長地型の水田が連続している部分もある。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、第1遺構面を被覆するAs-A層がすべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよびマンガン結核集積層VII-2''層が認められた。

検出した坪界線は、南辺が東流するSD120、西辺はSD120が第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点付近で分流したのち北流する用水路跡SD140、北辺はSD140が第22・23・28・29号坪型区画跡坪界線交点で分流したのち東流するSD148、および重複関係にあるSD149によって構成されていた。

現代の水田耕作、用水路浚渫もしくはコンクリートによる護岸等のため、いずれの坪界線も破壊されており、大畦畔を検出することはできなかった。

坪型区画跡の規模は溝跡の芯芯距離で南北95mであった。坪界線の方位は、北辺がN-91.5°-E、西辺がN-1°-E、南辺がN-91°-Eであった。東辺を明らかにできなかったが、整った方形であったと思われる。

溝跡・大畦畔

南辺の坪界線をなすSD120は、第23・24号坪型区画

跡坪界線から東流する大規模な用水路跡で、女堀川へ流入するものであった。上部を現代のコンクリートの護岸等によって削平されていたため、第1遺構面に対応する大畦畔を検出することはできなかったが、上端の幅約400~600cm、下端の幅約50~100cm、深さ120~130cmであった。顕著な蛇行があった。出土遺物は19世紀以後の陶磁器類少量を得たが、図示できるものはなかった。

西辺をなすSD140は、SD120から第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点付近で分流するもので、蛇行が認められた。第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点から、23m、42m、57m、80mの地点で分流しており、小規模用水路をもって第29号坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水したと思われる。いずれの個所でも「猿尾状」分水は行われていなかった。底面付近の覆土中から19世紀から近代にかけての陶磁器類を得ることができた。第47図3は波佐見焼の椀で18世紀中頃から後半にかけて生産されたものである。第47図8は万古焼の急須把手である。木型押しによる成形で、19世紀以後に生産されたものである。

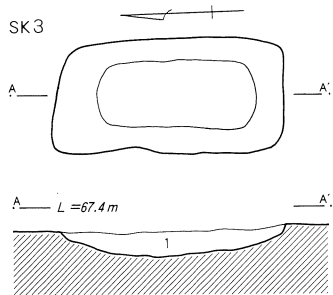
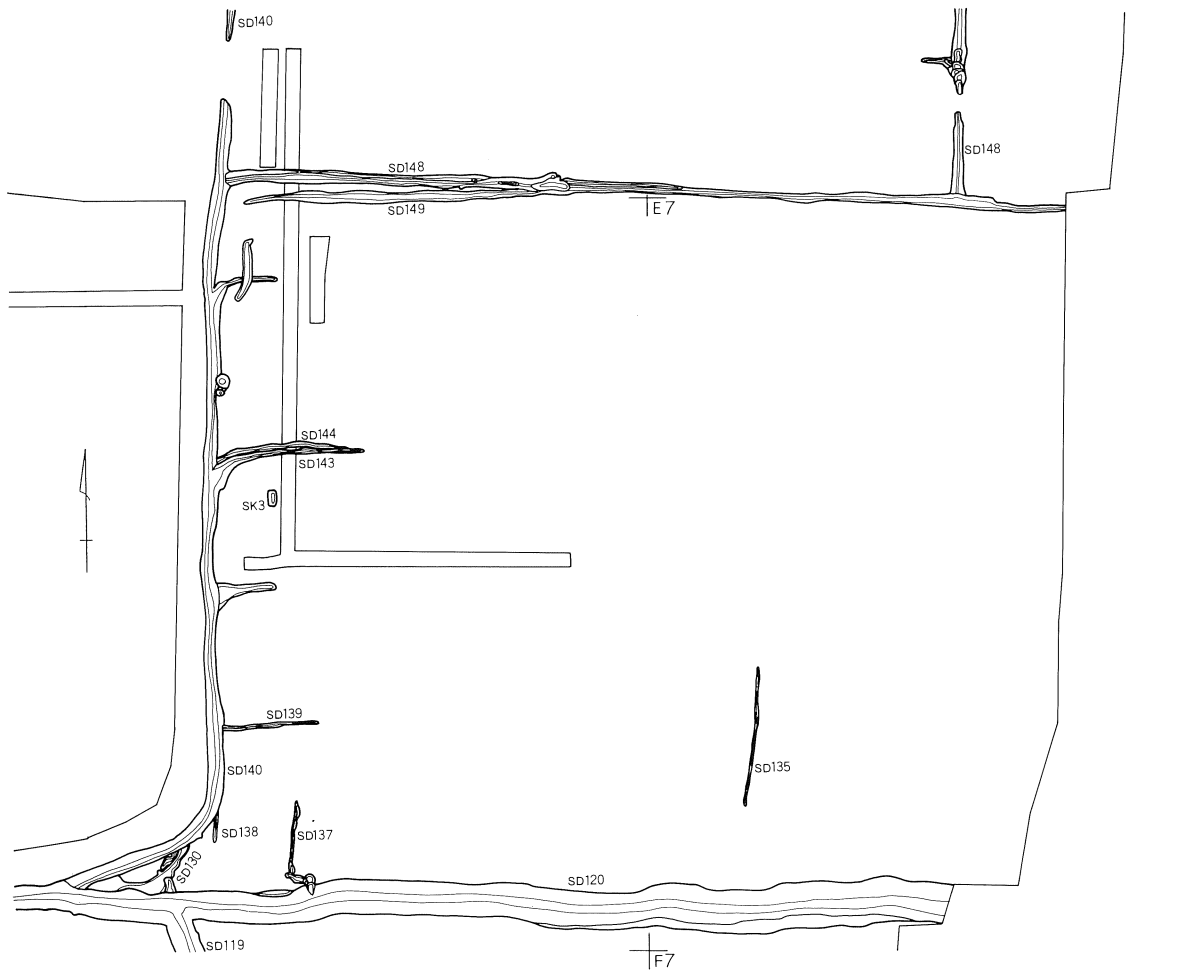
第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点にはSD140前身となるSD130・138の痕跡が認められた。覆土にはAs-Aを多量に含んでいた。

北辺のSD148・149については、第28号坪型区画跡に記述した。

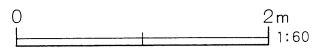
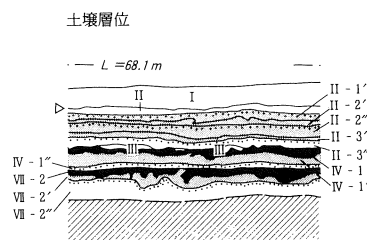
坪型区画跡内部の地割・水田跡

第29号坪型区画跡に主に用水を供給する西辺坪界線をなすSD140からは、18~22m程度の間隔で小規模用水路跡が東に分流しており、近世段階でも東西方向の長地型の区画が行われていたことがわかる。一方、南辺の大規模用水路跡SD120は、SD137を分流しており、第29号坪型区画跡内部の水田が単純な長地型の地割に区画されていたのではないことを示している。表層坪型区画の地割にもみられるような、長地型を基本としつつ、これを小区画に分け、各々用水を確保する引水方法をとっていたと考えられる。

第44図 第29号坪型区画跡



1 暗褐色 10YR3/3 火山灰 As-A 純層
降灰後かき集めて埋めたもの



なお、現代水田の耕作による攪乱が激しく、水田跡を検出することはできなかった。

また、SK 3は水田面に堆積したAs-Aを取り去り、廃棄した土坑と考えられる。完全にAs-A火山灰によって埋没していたが、噴火にともなう降灰層準はみられず、攪乱された状態であった。

第30号坪型区画跡(第45・46・47図)

F 6・7、G 6・7グリッドにかけて検出した。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とした用水路が北辺・西辺にみとめられる。東には女堀川が蛇行しながら北流しており、東辺・南辺の区画は氾濫等によって破壊されてしまった可能性がある。内部は東西方向の長地型に区画されており、東に近接する女堀川まで東辺坪界線をこえて長地型の水田が連続している。この地割りは平成7年の調査時点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、第1遺構面を被覆するAs-A層がすべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2"層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよび、マンガン結核集積層VII-2"層が認められた。

検出した坪界線は、北辺が東流するSD120、西辺が第24・30号坪型区画跡坪界線を北流し、第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線交点でSD120に合流するSD119によって構成されていた。南辺坪界線には、現代水田耕作による攪乱のため、明瞭な遺構を検出することはできなかったが、断面調査によってII-1層水田跡の土壌化にともなう酸化鉄集積層II-1'層のまくれあがり(擬似畦畔B)として大畦畔の存在が予想できた(第79図A-A断面)。

東辺は女堀川堤防付近にあたり、堤防の破損を予防するため排土置き場とした。調査は断念した。

現代の水田耕作、用水路浚渫もしくはコンクリート

による護岸等のため、いずれの坪界線も破壊されており、大畦畔を検出することはできなかった。

坪型区画跡の規模は溝跡の芯芯距離、および擬似畦畔Bを利用した計測で、南北109mであった。坪界線の方位は、北辺がN-91°-E、西辺がN-Sであった。表層地割では坪型区画をなさないが、近世以前の段階では、坪型区画をなしていたものと想定できる。

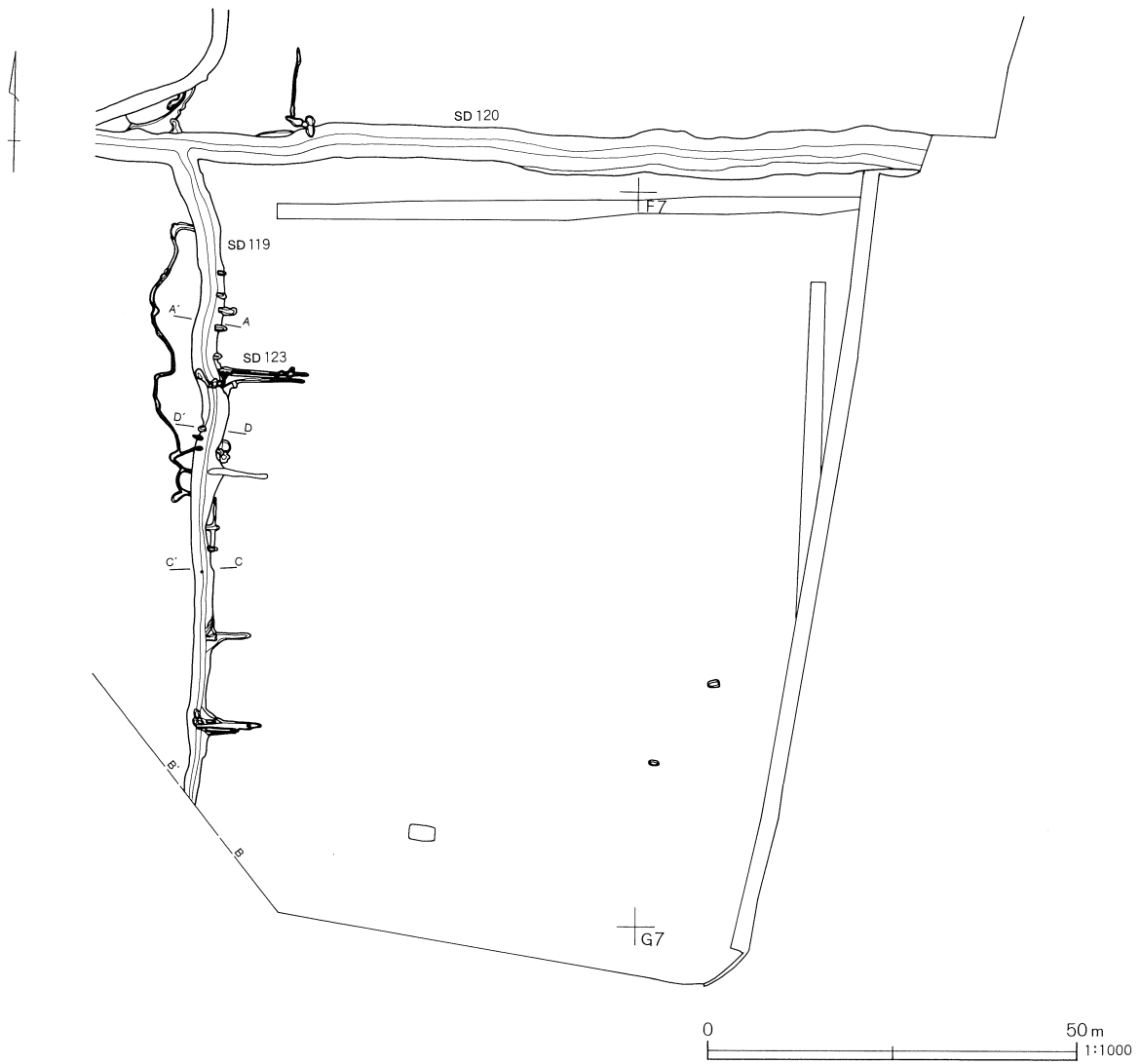
溝跡・大畦畔

北辺の坪界線をなすSD120は、東流する大規模な用水路跡で、女堀川へ流入していた。上部を現代のコンクリートの護岸等によって削平されていたため、第1遺構面に対応する大畦畔を検出することはできなかった。詳細は第23・24・28号坪型区画跡に記述した。

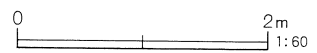
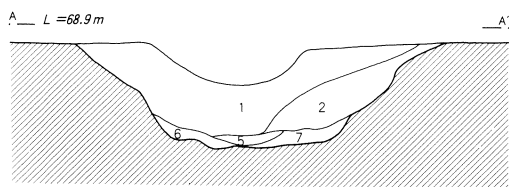
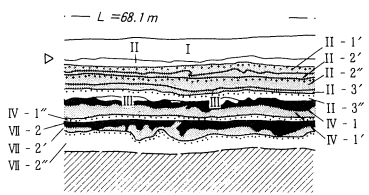
西辺をなすSD119は、第24・30号坪型区画跡坪界線を北流するもので、顕著な蛇行が認められた。第23・24・29・30号坪型区画跡坪界線から南へ32m、45m、67m、79mの地点で分流しており、小規模用水路をもって第30号坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水していた。いずれの個所でも「猿尾状」分水は行われていなかった。各分流点には木杭列が遺存しており、横木を止め、下流を矢板で護岸する方法が採られていた。一部にはAs-A火山灰の純粋堆積層で覆われた護岸用の石組も検出した。径20cm程度の川原石を溝跡壁面に隙間なく貼りつけたものであった。この他の地点でも小規模用水路跡への分流点と考えられる遺構がみられたが、判断できる根拠が得られなかった。出土遺物は、底面付近の覆土中から18世紀中頃から後半にかけて生産された伊万里焼蓋(第47図7)などの陶磁器類を得た。

南辺の擬似畦畔Bは、II-1'層のまくれあがりとして検出したもので、大畦畔の規模などは明らかにできなかった。下層にはII-2層、II-3層水田跡の土壌化にともなう酸化鉄集積層も存在し、畦畔下で厚くなる現象が認められた。さらに下層にはIV-1層水田にともなうAs-B火山灰によって埋没した大畦畔を検出した(第79図A-A断面)。第29号坪型区画跡の地割りが

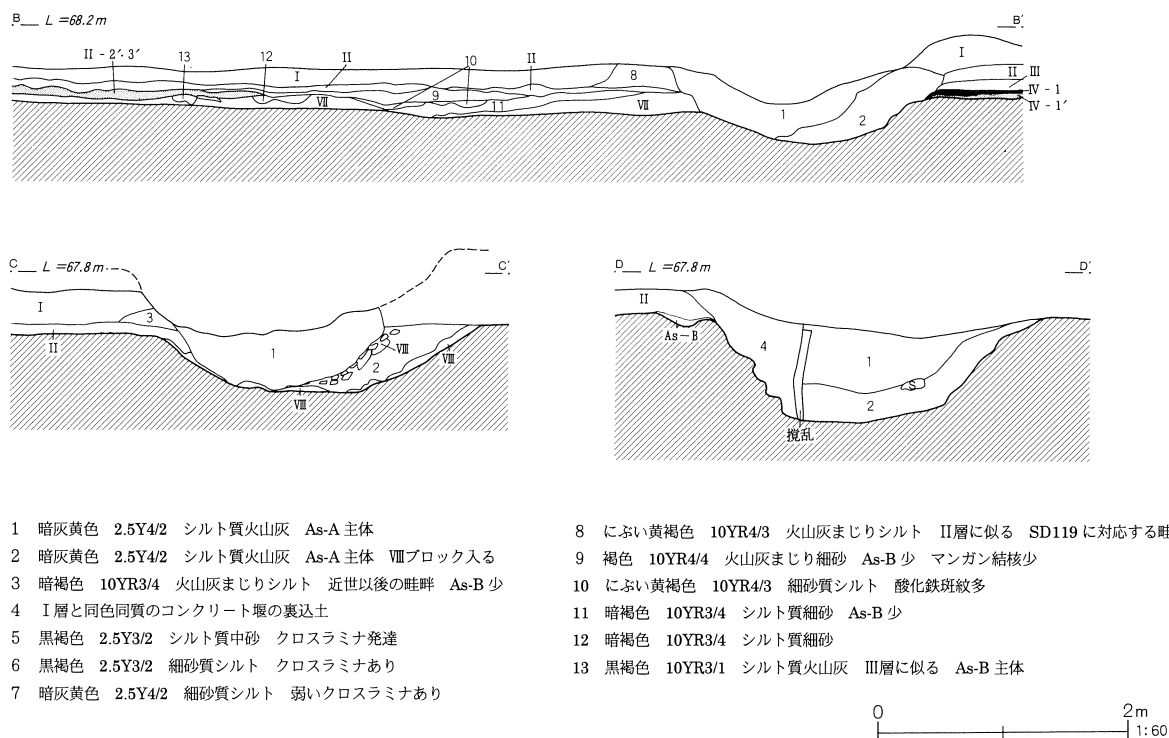
第45图 第30号坪型区画迹



土壤層位



第46図 第30号坪型区画跡土層図



- 1 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質火山灰 As-A 主体
- 2 暗灰黄色 2.5Y4/2 シルト質火山灰 As-A 主体 VIIブロック入る
- 3 暗褐色 10YR3/4 火山灰まじりシルト 近世以後の畦畔 As-B 少
- 4 I層と同色同質のコンクリート堰の裏込土
- 5 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質中砂 クロスラミナ発達
- 6 黒褐色 2.5Y3/2 細砂質シルト クロスラミナあり
- 7 暗灰黄色 2.5Y4/2 細砂質シルト 弱いクロスラミナあり

- 8 におい黄褐色 10YR4/3 火山灰まじりシルト II層に似る SD119に対応する畦畔
- 9 褐色 10YR4/4 火山灰まじり細砂 As-B 少 マンガン結核少
- 10 におい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト 酸化鉄斑紋多
- 11 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 As-B 少
- 12 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂
- 13 黒褐色 10YR3/1 シルト質火山灰 III層に似る As-B 主体

0 2m
1:60

平安時代以降継続されてきたことがわかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

第30号坪型区画跡に主に用水を供給する西辺坪界線をなすSD119からは、12～15m程度の間隔で小規模用水路跡が東に分流しており、近世段階でも東西方向の長地型の区画が行われていたことがわかる。

なお、現代水田の耕作による攪乱が激しく、水田跡を検出することはできなかった。

第31号坪型区画跡(付図1)

G6・7グリッドにかけて想定できる。昭和24年段階の米軍写真では、東西南北を基軸とした用水路が南辺・西辺にみとめられる。東には女堀川が蛇行しながら北流しており、表層坪型区画東辺にあたる部分を含む東側半分程度が流路となっている。東西方向において本来の坪型区画の規模を有していない。内部は東西方向の長地型に区画されており、女堀川まで長地型の水田が連続している。この地割りは平成8年の調査時

点まで踏襲されていた。

トレンチによる断面調査の結果、第1遺構面を被覆するAs-A層がすべて表土中に攪乱されていることがわかった。基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよび、マンガン結核集積層VII-2''層が認められた。

調査は、表層坪型区画の西側半分程度が関越自動車道下となり、東側部分には女堀川堤防が設置されていたため、北側の一部に限って行った。また、平成8年まで高さ1m以上の盛土が置かれており、平成8年度に調査となった部分である。

検出した坪界線は、断面調査によって検出したII-1層水田跡にともなう酸化鉄集積層のまくれあがりから予想した北辺大畦畔に限られる(第79図A-A'断面)。

東辺は女堀川堤防付近にあたり、堤防の破損を予防

するため排土置き場とした。調査は断念した。

坪型区画跡の規模・坪界線の方位は不明である。

溝跡・大畦畔

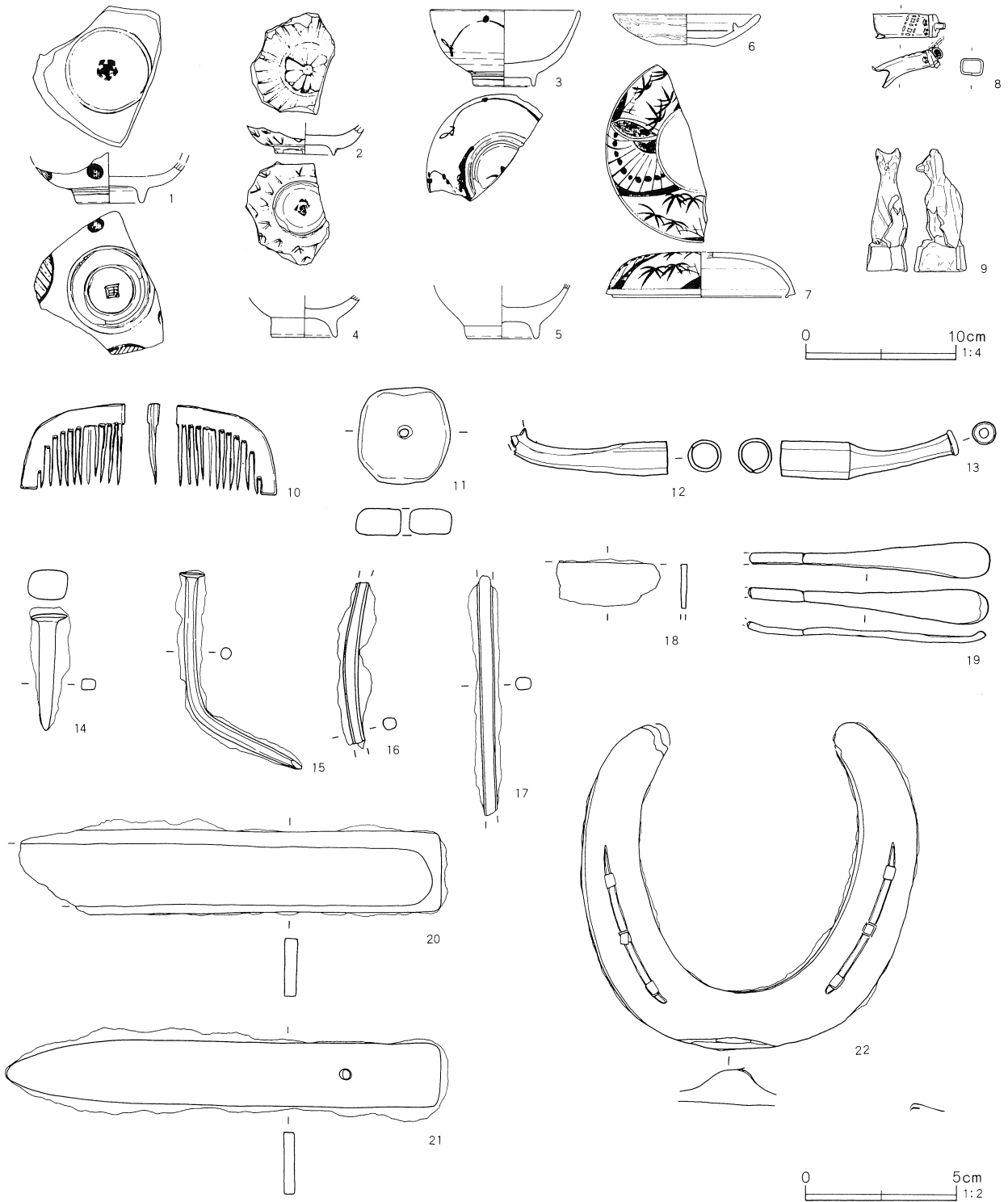
北辺の擬似畦畔Bは、II-1'層のまくれあがりとして検出したもので、大畦畔の規模などは明らかにでき

なかった。詳細は第30号坪型区画跡の記述に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

盛土に際しての攪乱と現代水田の耕作による攪乱が激しく、明確にすることはできなかった。

第47図 第I遺構面出土遺物



第1表 第1遺構面出土遺物観察表(第47図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考	
1	くらわんか手椀			(4.4)	陶石	A	灰白色	60	SD117	波佐見焼中尾登窯 見込;五弁花文 外;窓絵 高台;銘款	
2	椀			4.0	陶石	A	明緑色	50	SD139	伊万里 見込;菊花文 内外;二重網目文 高台;禍福文	
3	椀	(9.0)	5.0	(4.0)	陶石	A	灰白色	45	SD140	波佐見焼草花文 高台;銘款	
4	椀			4.6	陶石	A	浅黄色	75	SD119	美濃	
5	椀			4.0	陶土	A	にぶい黄色	75	SD140	美濃	
6	灯明皿	9.2	2.0	3.5	陶土、砂	A	明赤褐色	70	SD119	鉄釉	
7	椀蓋	12.4	3.0		陶石	A	灰白色	45	SD119	伊万里	
8	急須把手				陶土	A	灰白色	80	SD140	万古焼	
9	土人形		8.1		A	A	橙色	75	SD139		
10	つけ	現長3.4×2.9cm								2坪SN 3	
11	円盤状土製品	長さ3.2×3.4cm, 厚み0.9cm								17坪	
12	キセル雁首	現長5.1cm, 最大孔径1.0cm, 重さ7.5g								11坪SN 8	
13	キセル吸口	現長5.8cm, 最大孔径1.1cm, 重さ7.3g								12坪	
14	釘	現長3.8cm, 重さ6.7g								17坪	
15	釘	現長8.5cm, 重さ8.8g								17坪	
16	不明鉄製品	現長5.3cm, 重さ7.3g								17坪	
17	不明鉄製品	現長7.5cm, 重さ10.5g								17坪	
18	不明鉄製品	現長3.0cm, 重さ3.8g								17坪	
19	スプーン柄	現長7.9cm, 重さ6.0g								12坪	
20	不明鉄製品	現長15.1cm, 重さ93.4g								17坪	
21	不明鉄製品	現長14.2cm, 重さ87.7g								17坪	
22	蹄鉄	現長10.9cm, 重さ142.8g								SD2	

VI 第2遺構面の遺構と遺物

概要

第2遺構面は、基本層序III層をなす火山灰層を取り除くことによって検出した。火山灰層は、灰白色、乳白色の軽石を主体とするものであった。類似の火山灰層が、I層下層、VII層中にそれぞれ存在すること、遺構面から奈良～平安時代の出土遺物が採集されること、テフラ分析の結果などからみて、1108年の浅間山噴火によって降下した火山灰層(As-B)であると考えられる。As-B層は水田復旧等による攪乱を受けていたが、As-Aに比べ広い範囲で降下当時の状態を遺していた。埋没していた水田跡はIV-1層水田跡である。

調査は、第1遺構面で検出した坪型区画跡毎に実施した。第1遺構面の調査に際して設定した表層坪型区画中央をとおる幅約2mのトレンチによって、断面観察を行った。その後、未買収地および調査時点で使用されていた水利関係施設を除き、できる限り面的に調査を行った。調査の主眼を、埋没遺構として検出できる条里型水田(特に坪並)の広範囲な景観復元、各坪界線の状況、灌漑施設の状況、坪型区画内部の区画と小区画水田跡の状況、条里型地割の施行時の状況と時期把握の諸点においた。

検出した主な遺構は次の通りである。

平安時代末(1108年)に埋没した坪型区画跡23筆、平安時代～中世の溝跡41条、このうち、坪型区画跡周囲の大畦畔にもなった用水路跡29条、坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水するための小規模用水路跡11条、坪型区画跡内部の小区画水田跡671筆(洪水砂で埋没した平安時代前半の埋没水田跡9筆含む)大規模用水路跡2条である。

坪型区画跡は、中央に小規模な用水路跡をもつ大畦畔、あるいは大畦畔のみからなる坪界線によって区画されていた。第1遺構面では、用水路両脇に坪型区画跡縁辺を区画する大畦畔が設けられており、坪界線が2条の大畦畔と中央の1条の用水路跡によって構成されていたのと異なり、第2遺構面の坪界線は1条の大

畦畔を基準としており、中央をわずかに掘り込んで用水路跡が設けられていた。用水路跡には水口が切れ、坪型区画跡内部の小区画水田跡に直接用水を供給していた。

坪型区画跡はほとんどが幅約107～109mで、坪界線をほぼ東西南北に向けて坪並を形成していた。坪型区画跡間の標高差は、明瞭な水田面が検出できた部分が少ないが、およそ5～10cm程度であった。

坪界線に存在する用水路跡のうち、As-Bで埋没したものは、幅20～50cm、深さ5～10cm前後と小規模であったが、第23・29号坪型区画跡北辺の坪界線を通るSD146は、上端の幅約4～15m、下端の幅約2～8m、深さ約0.5～1.3m程度の大規模な用水路跡であった。出土遺物から平安時代前半までの掘削と考えられ、2回以上にわたる浚渫が行われていた。今回の調査では、もっとも新しい時期の浚渫以後と掘削当時の溝底を区別して調査した。大規模用水路の掘削は、用水の確保を果たしたと考えられるが、河川の増水・氾濫の影響を直接水田域にもたらした。増水・氾濫時、多量に供給された砂層は、周辺水田を埋没させ、用水路の度重なる浚渫を必要としたようである。洪水砂はSD146周辺に主に堆積しており、この砂層に覆われた埋没水田跡9筆を検出した。覆土中から出土する土器から平安時代前半頃のものと思われる。

用水路跡の水流は南から北、西から東であった。いわゆる「猿尾状」分水はみられなかった。出土遺物は、大規模用水路跡SD146およびその上流と考えられるSD89で土師器杯・甕を検出したが、他では少量の土師器・須恵器片しか得られなかった。

坪型区画跡内部で検出した水田跡は、As-Bの降下によって埋没したもので、水田面がよく遺存していたが、畦畔上部は火山灰降下後の水田復旧による耕作で、ほとんどが削平されていた。水田跡の区画は、耕作土の切れ目から判断できる畦畔基部か、耕作土の分布限界から把握できる段差、帯状に分布する耕作土中に攪

乱されていた床土層のブロックからわかる畦畔痕跡として検出した。

坪型区画跡内は、主に南北方向の畦畔で10m程度の幅に区画される長地型に類似した地割を基本とし、さらに1段内部に東西方向の小畦畔を設け小区画水田跡に分割していた。南北方向の小畦畔は基本的に坪型区画跡内部を貫通しており、並行する小畦畔の痕跡も多く認められた。小畦畔の西と東の水田面には2～4cm程度の比高差がみられるものが多く、水位の確保にとって重要な、かつ継続性の高い畦畔であったと考えられる。東西の小畦畔は小区画水田跡毎に設けられており、坪型区画跡内部を貫通するものはほとんどなかった。南北の水田面には0～2cm程度の比高差しかなく、南北の1段内部で水位を安定させる機能をもったものと考えられる。土壌化が進まないため、明瞭に検出できるものが少なく、継続性は低いものと推定できる。

注目できるのは、小畦畔が前代の地割に規制されて斜行する部分を多く検出できたことである。特に第24号坪型区画跡北東坪界線交点付近では、検出段階から明らかに小畦畔の屈曲がみられ、斜行する地割に連続していた。同一坪型区画跡内部に異なる地割線が共存していたことがわかった。第3遺構面との比較でより明確になるが、条里型地割が奈良～平安時代前期にかけて大きく変化していたことがわかる。

水田表面には、As-B層で埋没した明瞭な馬の蹄跡・人足跡を検出した。畦畔の方向に沿って歩行した状況を把握できた。

以下に各遺構の状況を記述するが、溝跡、水田跡については、代表的なものに限定し、その他のものについては、第9・10表に譲るものとする。

なお、水田土壌の広がり、第1遺構面における第5・6号坪型区画跡坪界線下の第4遺構面で検出したSD22・23上層に層位の落ち込みのため、削平されずに遺ったIV-1層水田耕作土と酸化鉄集積層を認めることができた。As-B降下時点における水田跡の広がり、第1遺構面第1～6号坪型区画跡下にも存在していたことが明らかになった。条里型地割の存在について

は、今後の西側隣接地の調査に期待したい。図および本文の記述は、検出した坪型区画跡に限って掲載した。坪型区画跡の名称は、地割が第1遺構面に継続していることが明らかであることから、これをそのまま用いた。

また、第1遺構面の第1号坪型区画跡北側と第8号坪型区画跡北側には、第2遺構面で大規模用水路跡SD89を検出した。SD89には奈良時代前半代の土師器杯集中出土地点があり、覆土上層にはAs-Bの堆積層が認められた。平安時代の水田土壌はこの溝跡脇で切れており、平安時代まで継続して機能していたことがわかる。この地点では、条里型地割をなす遺構は検出できなかった。しかし、第9号坪型区画跡では条里型地割をもつ水田跡が検出できており、条里型地割計画線と実際の遺構とは異なる場合もあることを考えると、これをもって里界線や条里型地割限界を想定することは避けておきたい。

第5号坪型区画跡(付図2)

J2、K2グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線にSD2・193、南辺坪界線にSD1・3を中央にもつ大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模は南北109m、坪界線の方位は北辺がN-92°-E、南辺がN-94°-E、東辺がN-2°-Eで、平面形は整った1町方格をなしていた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する近世の水田層と考えられるII-1'～II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV層、VII層、VIII層という層序が認められた。VII層およびVIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。

中世・近世水田の耕作による攪乱が激しく、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。西辺は調査対象地外となっていたため、南辺および東辺を中心に調査し、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

坪界線は、東辺で用水路跡SD19を検出した。その他

の坪界線は上層用水路跡等の攪乱によって破壊されていた。東側調査範囲で検出した良好な坪並と基本的な地割を共通にした東辺坪界線、および第4遺構面で報告する河川跡SD22・23・24上部に平安時代の水田耕作土IV-1層、酸化鉄集積層IV-1'層が明瞭に認められたことから、当地区に第13号坪型区画跡の前身が存在したと判断した。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、東辺でN-Sであった。

溝跡・大畦畔

東辺坪界線で検出したSD19は、第1遺構面で検出した条里型地割をなす用水路跡SD1の西側2mの位置に並行して掘削されていた。蛇行のない直線的な用水路跡で、底面に凹凸はみられなかった。確認面は平安時代水田耕作土IV-1層直下であった。にぶい黄褐色のシルトで埋没していた。IV-1層水田跡にともなう耕作によって大畦畔は完全に削平されていた。確認面における上端の幅80cm程度、下端の幅約40cm、深さ約20~30cmであった。出土遺物は平安時代前期のものと思われる土師器杯片が1点出土したが、台風の影響によって紛失した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田面は完全に削平されており、遺構を検出することはできなかった。

第6号坪型区画跡(付図2)

K2・L2グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線に中央に用水路跡SD1をもつ大畦畔を検出した。方位はN-92°-Eであった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する近世の水田層と考えられるII-1'~II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV層、VII層、VIII層という層序が認められた。VII層およびVIII層には、水田経営にともなうもの

と考えられるマンガン結核の集積が認められた。また、第4遺構面で報告する河川跡SD22・23・24上部には平安時代の水田耕作土IV-1層、酸化鉄集積層IV-1'層が明瞭に認められた。

As-Bの堆積が少なく、上層水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。当坪型区画は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として調査されているが、区画西辺は調査対象地外となっていたため、北辺および東辺を中心に調査し、遺構周辺に限って範囲を拡大した。

南辺および東辺は、今井川越田遺跡として調査されている(瀧瀬1997)。南辺の坪界線が想定できる位置には、覆土にAs-B層をもち平安時代前期の土器を出土した今井川越田遺跡SD33を検出した。この溝跡は水路跡の状況を示すとされ、東へ傾斜するものであるが、南から大きく東へ向きを変えて坪界線付近を通過していた。極端な方向の変化があり、方位を計測することはできないが、下流で第1遺構面で記述した今井川越田遺跡SD31に接して並行しており、N-115°-Eの傾きとなっていた。この地割は表層条里型地割まで継続されていた。

東辺坪界線には今井川越田遺跡SD12を検出した。大きく蛇行しており、南に向かって傾斜していた。覆土中にはAs-Bの純層が認められたが、出土遺物はなかった。この地割は表層条里型地割と共通しており、踏襲されていたと考えられるが、第1遺構面では対応する溝跡は検出できなかった。

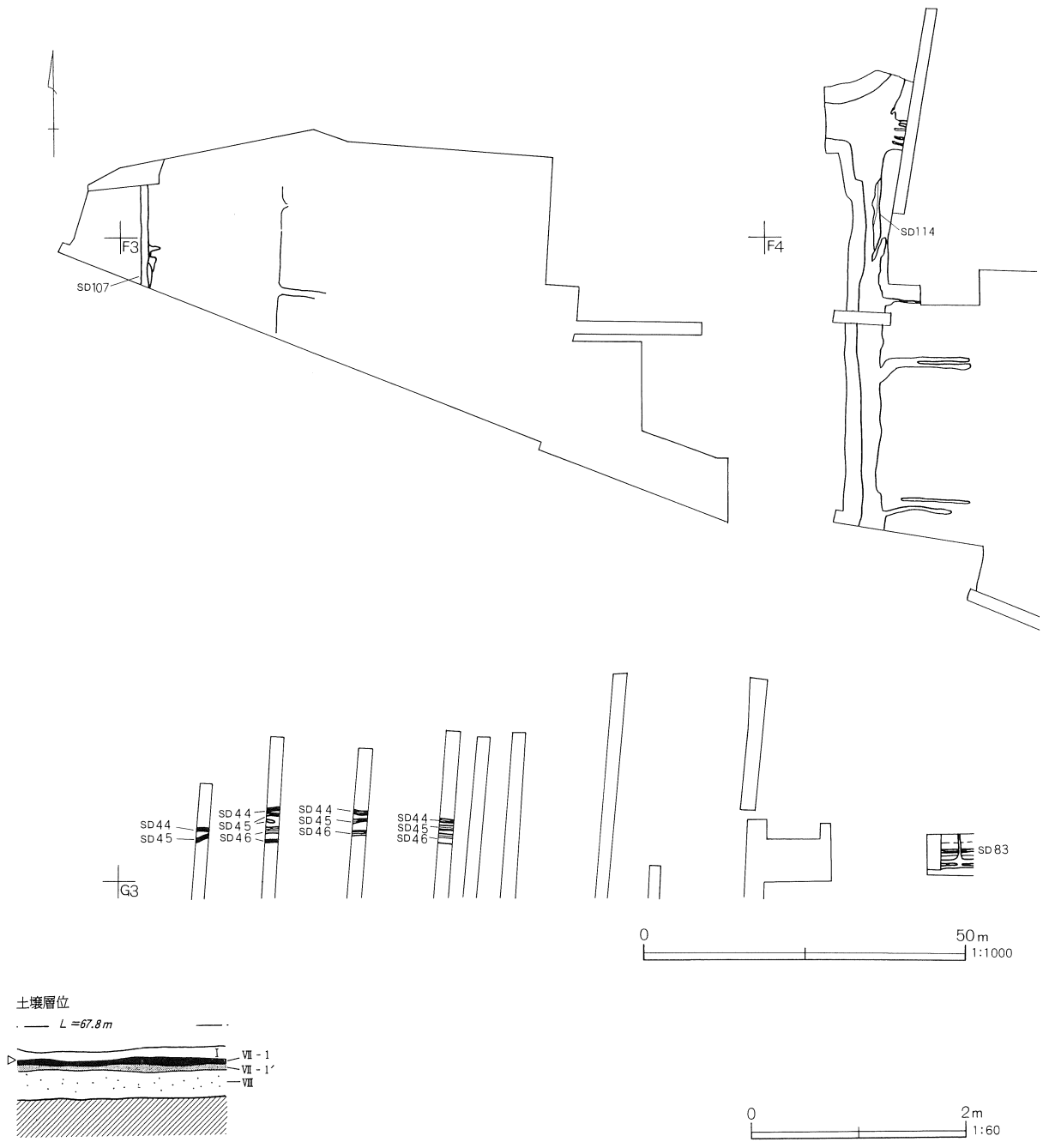
この地区については条里型地割をなさなかった可能性もある。

個々の溝跡の詳細は『今井川越田遺跡III』(瀧瀬1997)に譲る。

第9号坪型区画跡(第48図)

E3・4、F3・4グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、西辺・東辺坪界線で中央に溝跡をもつ大畦畔を検出した。溝跡の芯芯距離で南北約110~111m、坪界線の方位は、東辺がN-2°-E、西辺がN-

第48図 第9号坪型区画跡 (第2遺構面)



Sで、全体に整った方形をなすものと考えた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、部分的に平安時代の水田土壌であるIV-1層、IV-1'層、VII-1層、VII-1'層が認められるが、基本的には直下にVIII層という層序であった。VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第2遺構面を覆う基本層序III層をなすAs-B火山灰層は、ほとんどがII層中に攪乱されており、埋没したIV-1層水田跡の水田面を検出することはできなかった。

第2遺構面における表土除去はIV-1層上面とした。

調査は未買収地および周辺水田の水利権保護のため、西辺および東辺坪界線を中心に行い、南部はトレンチ調査とした。

また、表層坪型区画中央には取付け道路が通っており、一丁田遺跡として調査されている(富田・赤熊1985)。第12~23トレンチが設定されているが、明瞭な遺構は検出されていない。A-22トレンチ断面6層が平安時代水田酸化鉄集積層であるIV-1'層に該当すると考えられる。

検出した坪界線は、東辺が第1遺構面SD112に切られた用水路跡SD114、南辺が用水路跡SD44・45・46・49であった。ほとんどが平安時代に属する用水路跡と考えられるが、基本層序III層As-Bの堆積状況から、SD46がAs-B降下以前から降下後まで継続した用水路跡であることがわかった。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、南辺でN-91°-Eであった。

溝跡・大畦畔

東辺を限る坪界線では、中世から近世の用水路跡SD112に切られてSD114を検出した。覆土にAs-B層が堆積していたが、検出できた部分が少なく、詳細は明らかにできなかった。

南辺の坪界線ではSD44・45・46・49を検出した。SD46上層にはIII層As-Bがかぶっており、IV層もしくはVII

層を基盤とする大畦畔基部が認められたが、SD46新段階の溝跡によって削平されていた。SD44・45も上層にAs-Bをもち、SD46との間が坪界線大畦畔である可能性もある。

出土遺物は検出できなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

坪型区画跡内部は、II層水田の耕作によって削平されていたが、坪型区画跡内部北西部で南北に延びるIV-1層耕作土限界と、東に向かう小畦畔基部を検出した。他の坪型区画跡同様南北方向の地割を基本としたものと考えられる。水田面は削平されており、状況を明らかにすることはできなかった。

第10号坪型区画跡(第49図)

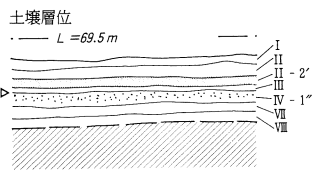
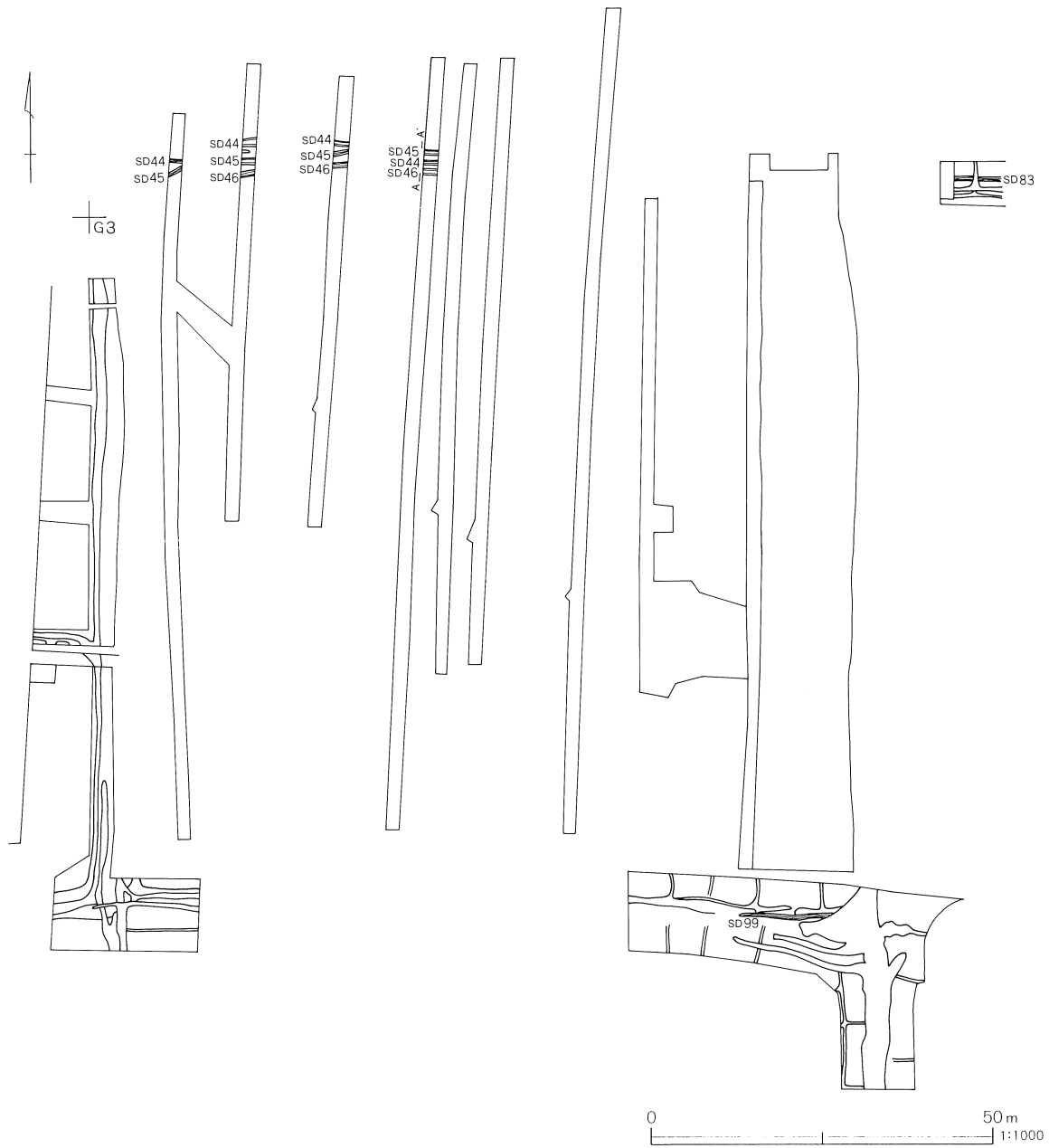
F3・4、G3・4、H3・4グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、西辺坪界線にSD35・37、南東坪界線交点にSD102、東辺坪界線にSD100、西辺坪界線にSD40を検出した。北辺では、断面調査によってAs-A降灰層準を覆土にもつ溝跡とこれにともなう大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模は東西約109m、南北108m、坪界線の方位は西辺がN-1°-E、南辺がN-93°-Eで、平面形は全体に整った方形をなしていた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、攪乱されたIII層、IV-1'層、VII層、VIII層という層序が認められた。明瞭なIV-1層水田跡の水田土壌は部分的にしか検出できなかった。VII・VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。

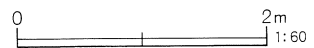
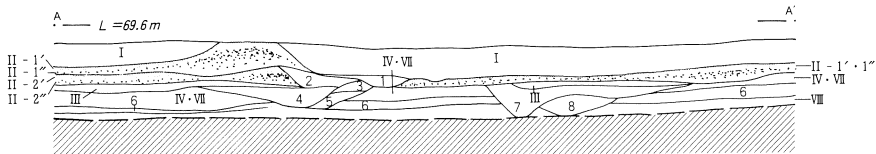
調査範囲は水田土壌の状態を勘案してトレンチによる面的調査とし、9条のトレンチを設定した。

検出した坪界線は、北辺が用水路跡SD44・45・46・49、南辺が南東坪界線交点付近で検出した中央に用水路跡SD99をもつ大畦畔、および南西坪界線交点付近で検出した大畦畔によって構成されていた。基本層序III

第49図 第10号坪型区画跡 (第2遺構面)



- 1 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質火山灰 As-A 降下時の条里型水路 As-A 主体
- 2 黒褐色 2.5Y3/2 細砂質シルト 小礫
- 3 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト As-B 降下時の畦の一部 マンガン結核
- 4 暗褐色 10YR3/2 細砂質シルト 小礫 細砂
- 5 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト VIII層ブロック多
- 7 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 近現代～中世の鉄斑集積層
- 8 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト



層As-Bの堆積状況から、SD46がAs-B降下以前から降下後まで継続した用水路跡であることがわかった。南西坪界線交点および南辺坪界線は第1遺構面のSD40に切られた畦畔跡で、明確でないが大畦畔の可能性が高いものである。

坪型区画跡の規模は南北107~109m程度である。坪界線の方位は、北辺でN-91°-E、南辺でN-92°-Eであった。

溝跡・大畦畔

坪界線は、基部の幅約1~3m、遺存していた高さ3cm程度の大畦畔によって構成されていた。第10・11・18・19号坪型区画跡坪界線交点から40m程度西まで検出した南辺坪界線では、東流する用水路跡SD99が大畦畔中央に設けられていた。SD99は幅30~50cm、深さ5~10cm程度で底面に無数の凹凸が認められた。本来は第2・3・10・11号坪型区画跡坪界線交点から大畦畔上を東流するものと考えられるが、上層の攪乱によって削平され、もっとも標高が低く溝底が下がった部分のみが遺存し、検出できたものであろう。大畦畔には水口が設けられ、水懸かりで下手の北側に当たる第10号坪型区画跡内の小区画水田跡が直接SD99から取水していた。出土遺物は検出できなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡を検出できたのが南辺坪界線付近に限られるため、東西の区画は確認できなかったが、約5~9m間隔で南北にはしる小畦畔を検出した。周囲の第11・18・19号坪型区画跡の状況からみて、南北方向を基本に区画されていたと推定できる。小畦畔は幅20cm程度で、耕作土分布をもとに基部として検出した。高さは不明である。確認できた小区画水田跡は、5筆であった。南北の畦畔を境にした小区画水田跡の水田面比高差は、As-B層による埋没部分で計測して2cm程度であった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって削平されていたが、層厚5cm程度の耕作土が

遺存しており、若干の凹凸と深く潜り込んだ馬蹄跡を検出した。出土遺物はなかった。

第11号坪型区画跡(第50・51図)

H3・4グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線の中央に用水路跡SD102をもつ大畦畔、東辺坪界線と同じく中央に用水路跡SD100をもつ大畦畔、西辺坪界線に用水路跡SD40を検出した。坪型区画跡の規模は東西約109m、坪界線の方位は、北辺がN-93°-E、東辺がN-1°-Eで、平面形は整った方形をなしていた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、As-A層、II-1層、II-1'層、II-1''層、II-2層、II-2'層、II-2''層、II-3層、II-3'層、II-3''層、III層、IV-1層、IV-1'層、IV-1''層、VIII層という層序であった。VIII層には、水田経営にともなうものと考えられるマンガン結核の集積が認められた。第2遺構面における表土除去はIV-1層上面までとした。

坪型区画跡内東半部に良好なAs-B層の堆積が遺存していたため、この部分を中心に調査を行い、西半部についてはトレンチを主体に遺構の遺存状況に応じて範囲を拡大した。北東・北西の坪界線交点付近を除き、東西および北辺の坪界線は周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。また、南辺坪界線は真下堀川となっており、調査できなかった。

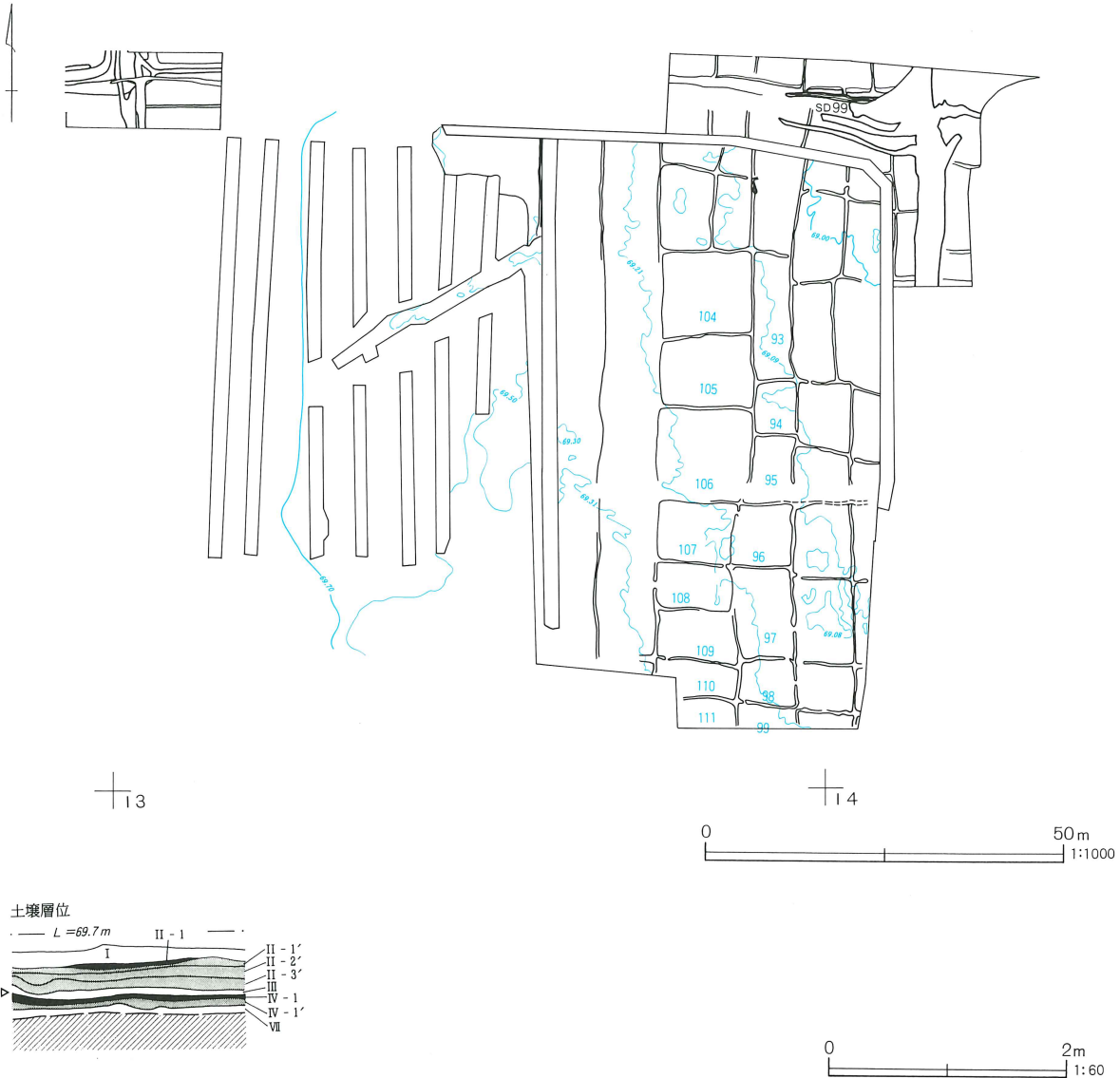
坪界線は、北東坪界線交点付近で中央に用水路跡SD99をもつ大畦畔、北西坪界線交点付近で大畦畔を検出した。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、北辺でN-92°-Eであった。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線をなす大畦畔を検出した。南東の第10・11・18・19号坪型区画跡坪界線交点付近では、用水路跡SD99が大畦畔中央を東流していた。詳細は第10号坪

第50図 第11号坪型区画跡（第2遺構面）



型区画跡に記述した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

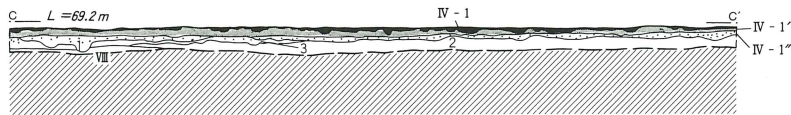
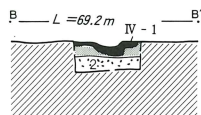
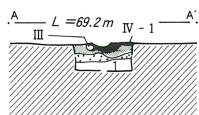
水田跡は、東辺坪界線から50m程度の範囲で検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区画水田跡のうち、区画のわかるものは、45筆であった。

南北の小畦畔は7～12m程度の間隔で設けられ、坪型区画跡内部を貫通していた。南北小畦畔の西側と東側では2～4cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部

が遺存したものである。幅約20～30cmで、高さは不明である。方位はほぼN-Sであった。

東西の小畦畔は6～12m程度の間隔で南北小畦畔で区画された範囲内を区分しており、坪型区画内を貫通するものはなかった。南北小畦畔毎に階段状に位置を変えており、ほぼ東西に設けられていたが、中央付近にはN-107°-E程度の傾きをもつものがあった。N-107°-Eの小畦畔は、第18号坪型区画跡におけるN-107°-Eの小畦畔の延長上に位置しており、第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭段階の坪型区画跡の地割が一部残存したものであると考えられる。確認は耕作土の切れ目をもって行ったが、南北小畦畔に



- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 FA多
- 2 暗褐色 10YR3/4 シルト 基本層序VII層下層
上層のVII-1層水田は削平されている
- 3 褐色 10YR4/4 シルト質細砂 As-C



比べ明瞭さを欠いた。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～30cmで、高さは不明である。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、6×7m～12×12m程度の規模であった。坪型区画跡中央付近で大きく、水懸かりで上手の南辺坪界線付近ほど小さい傾向があった。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0～2cm、東西で2～4cmであった。

坪型区画内の水懸かりは南北小畦畔に規制されており、東西の小畦畔に水口を設け、南から北を主な水流方向としていた。南北の小畦畔にも水口は認められたが、東西小畦畔に比べ少なかった。

坪型区画跡中央部では、耕作土の広がりか東側だけに限られ、西側には酸化鉄集積層であるIV-1層が面的に広がる部分がみられ、両者の境界は直線的な耕作土の切れ目となっていた。これは、南北の小畦畔を境にして、東側の低い水田に耕作土が遺存し、西側の高い水田では削平されて酸化鉄集積層が露出したもので、境界の直線的な耕作土の切れ目は、南北小畦畔によってつくられた水田面の段差のうち、東側の畦畔下端を表すものと考えられる。畦畔基部を表す線のうち片側だけで表現したのは、こうした耕作土の切れ目である。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚3～8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。南北の小畦畔にそって歩行した状態で、歩幅は70～80cm前後であった。体高110～120cm程度の小形馬と考えられる。

出土遺物は少量の土師器片・須恵器片を得たが、図示できるものはなかった。

第12号坪型区画跡(第52図)

I 3・4、J 3・4グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、西辺坪界線にSD193、南辺坪界線に幹線SD2、東辺坪界線に支線SD2Bを検出した。坪型区画跡の規模は東西108～109m、坪界線の方位は西辺が

N-1°-E、南辺がN-93°-E、東辺がN-1°-Eで、平面形は非常に整った方形をなしていた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、部分的にIII層、北側部分にIV-1層、IV-1'層、V層上面にIV-1''層によるマンガン結核の集積、V層、VII-1層、VII-1'層、VII-2'層、VIII層という層序であった。第2遺構面における表土除去はIV-1層上面までとした。

北側坪界線下が真下堀川となっていたため調査できなかった。

坪界線は、東辺で用水路跡SD2Aを検出した。その他の坪界線は上層用水路跡等の攪乱によって破壊されていた。第12・13・20・21号坪型区画跡坪界線交点では、断片的ではあるが第12・13号坪型区画跡坪界線方向からの屈曲の痕跡を検出できた。第1遺構面における用水路跡の取り回しと同様の用水路配置が想定できる。第11号坪型区画跡北辺の坪界線からみて、平安時代以前においても第12号坪型区画跡の存在が推定できることから、当地区を第12号坪型区画跡と認定した。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、東辺でN-Sであった。

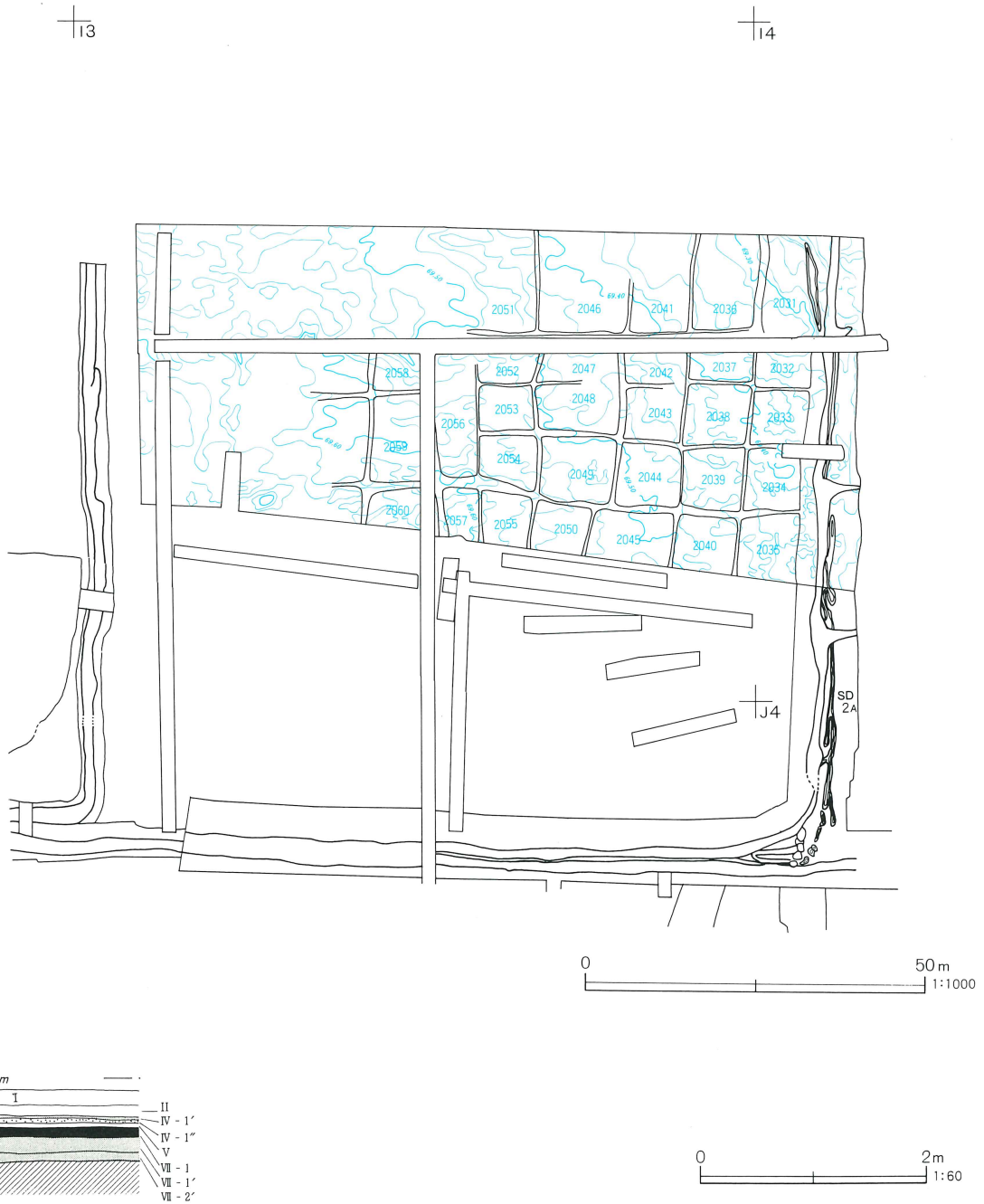
溝跡・大畦畔

東辺坪界線で検出したSD2Aは、第1遺構面で検出した条里型地割をなす用水路跡SD2Bとほぼ共通の地割上に掘削されていた。覆土中には純度の高いAs-Bの堆積があった。いわゆる「猿尾状」分水は観察できなかった。大畦畔は完全に削平されていたため検出できなかった。確認面における上端の幅50～120cm程度、下端の幅約20～40cm、深さ約20cmであった。出土遺物はなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、北辺坪界線から50m程度の範囲で検出できた。トレンチ調査の結果、水田耕作土IV-1層が遺存していなかった南半部については、諸般の事情によ

第52図 第12号坪型区画跡 (第2遺構面)



って平面調査を断念した。

水田面を埋没させたAs-Bの堆積が薄く、降灰後の水田復旧による攪乱のため、坪型区画跡内部の小畦畔はすべて削平されていた。夏期の降雨により水田耕作土の切れ目を探検出方法が適当でなかったため、当坪型区画跡については航空写真測量による畦畔検出を試みた。2cm単位に等高線を求め、その屈曲と、水田面に広がる凹凸・馬蹄跡の切れる部分に小畦畔を想定した。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていたものと考えられる。

南北の小畦畔は8~12m程度の間隔で設けられ、坪型区画跡内部を貫通していたが、南辺坪界線想定線から50mの位置に、東西に貫通する小畦畔があったものと思われる。基本的に長地型類似の地割を想定できるが、半折型類似の可能性もある。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では2~4cm前後の比高差があった。小畦畔範囲は想定範囲であるため、具体的な規模は不明である。方位はほぼN-3°-Eであった。

東西の小畦畔は7~13m程度の間隔で、南北小畦畔で区画された範囲内を区分していた。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0~2cm前後の比高差があった。小畦畔範囲は想定範囲であるため、具体的な規模は不明である。方位はN-95°-E程度の傾きがあった。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、9×10m~10×11m程度の規模であった。

坪型区画内の水懸かり、水口等は明らかにできなかった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2~8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。

出土遺物はなかった。

第13号坪型区画跡(第53図)

J2・K2グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線にSD2、西辺坪界線にSD1北流、南辺坪界線に今井川越田遺跡SD5、東辺坪界線にSD1Bを検出した。坪型区画跡の規模は東西108~109m、南北109~110mで、坪界線の方位は北辺がN-93°-E、東辺がN-2°-E、南辺がN-93°-E、西辺がN-2°-Eであった。平面形は非常に整った方形であった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、下位にAs-B火山灰を混在する中・近世の水田層と考えられるII-1'~II-3'層、平安時代の土壌と考えられるIV-1層、IV-1'層、VII層、VIII層という層序であった。IV層、VII層には多量の土器片が包含され、有機質の土壌になっていた。包含されていた土器片は、古墳時代後期および平安時代のもので、今井川越田遺跡の包含層を形成するものであった。

As-Bの堆積が少なく、上層水田の耕作による攪乱が激しいため、ほとんどの部分で遺構が遺存していなかった。当坪型区画南辺付近は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として調査されている。

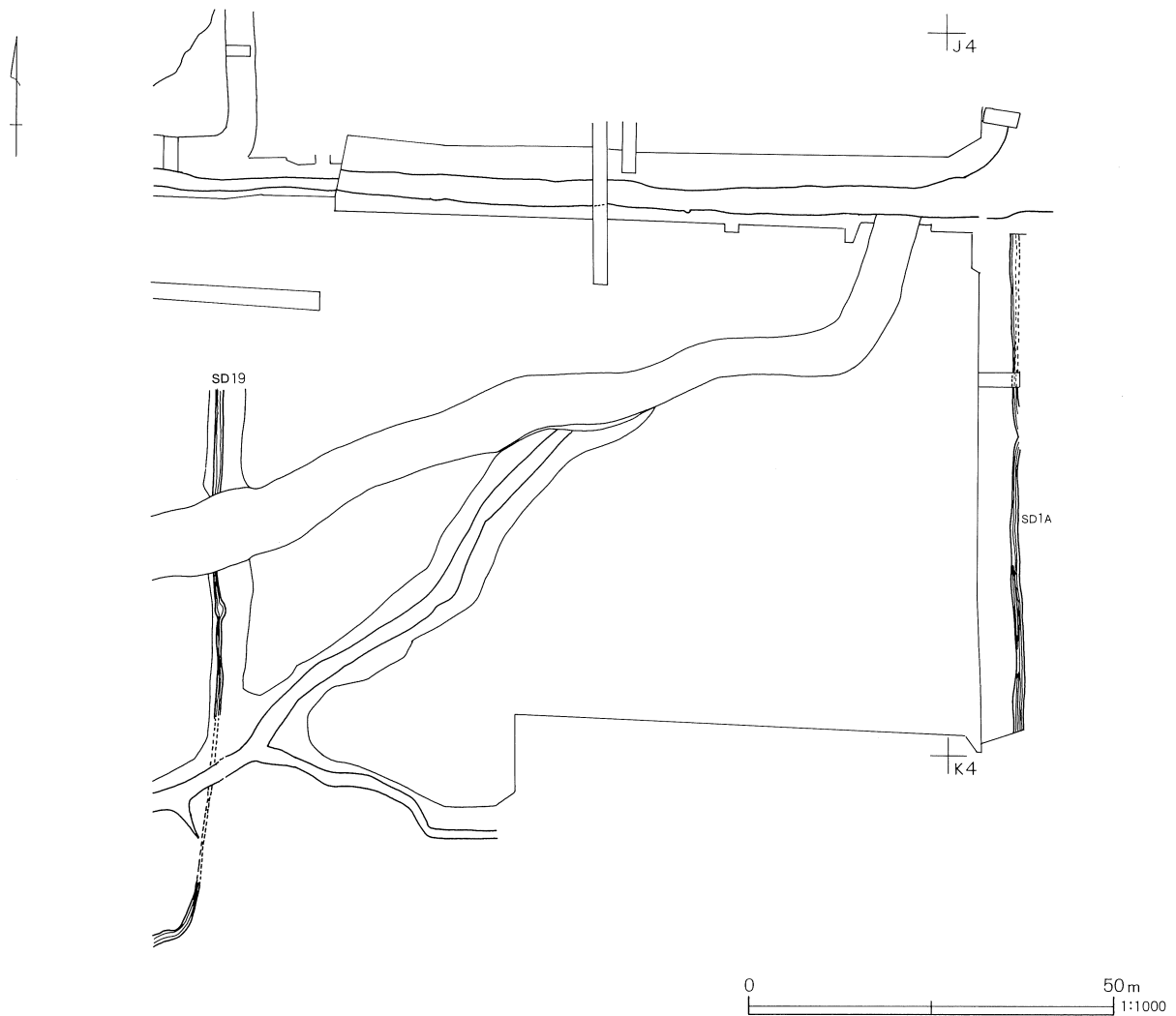
坪界線は、西辺坪界線で用水路跡SD19を、東辺坪界線で用水路跡SD1Aを検出した。また、今井川越田遺跡にはいる南辺坪界線では溝跡痕跡を検出した。その他の坪界線は上層用水路跡等の攪乱によって破壊されていた。周辺の坪型区画跡の地割から北辺と南辺の坪界線位置を第1遺構面と同様であると推定できることから、当地区を第13号坪型区画跡と認定した。他の坪界線については、上層水田の耕作や用水路の設置等による攪乱のため、検出することができなかった。

坪型区画跡の規模は東西109~110m、坪界線の方位は、東辺・西辺ともにN-Sであった。非常に整った1町方格の坪型区画跡であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

東辺坪界線をなす用水路跡SD1Aは、女堀川の蛇行部分から直線的に北流していた。上端が削平されていたため、高まりのある大畦畔等を検出することはでき

第53図 第13号坪型区画跡（第2遺構面）



なかったが、溝跡上端の西側部分には耕作土IV-1層が認められず、IV-1層が露出していた。坪型区画単位の水田面の標高差が現れたもので、大畦畔の存在が予想できる。溝跡上端の東側、第21号坪型区画跡側には南北のトレンチを設定したため大畦畔痕跡等を検出することはできなかった。溝底にはAs-B降灰層準が点々と遺っていた。第21号坪型区画跡には、SD1Aから取水したと思われる小規模水路跡が延びていた。詳細は第21号坪型区画跡に記述する。

南辺坪界線については今井川越田遺跡の範囲内にあたる。予想されるKグリッド基準線から南に15および19mの位置に溝跡の痕跡2条を検出した(第54図)。北

側の溝跡は底面に規則的な凹凸が認められた。第2遺構面の第28号坪型区画跡西辺坪界線をなすSD171・175など平安から中世初頭段階の条里型地割坪界線をなす溝跡に同様の特徴があり、これらの溝跡痕跡が坪界線を構成していたものと考えられる。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

第14号坪型区画跡(第54図)

K3・4、L3・4グリッドにかけて検出した。当

地区は、古墳時代後期の集落を主とする今井川越田遺跡として周知されており、平安時代および古墳時代の遺物包含層となっているIV層、VII層を除去し、VIII層上面で調査が行われた。第1遺構面では対応する遺構を検出できなかった。

第2遺構面における東辺坪界線相当位置には、覆土にAs-B純層をもつ今井川越田遺跡SD12が蛇行しつつ北に延びていた。表層坪型区画の地割がこれを踏襲していた。

北辺坪界線では、Kグリッド基準線から南に15およ

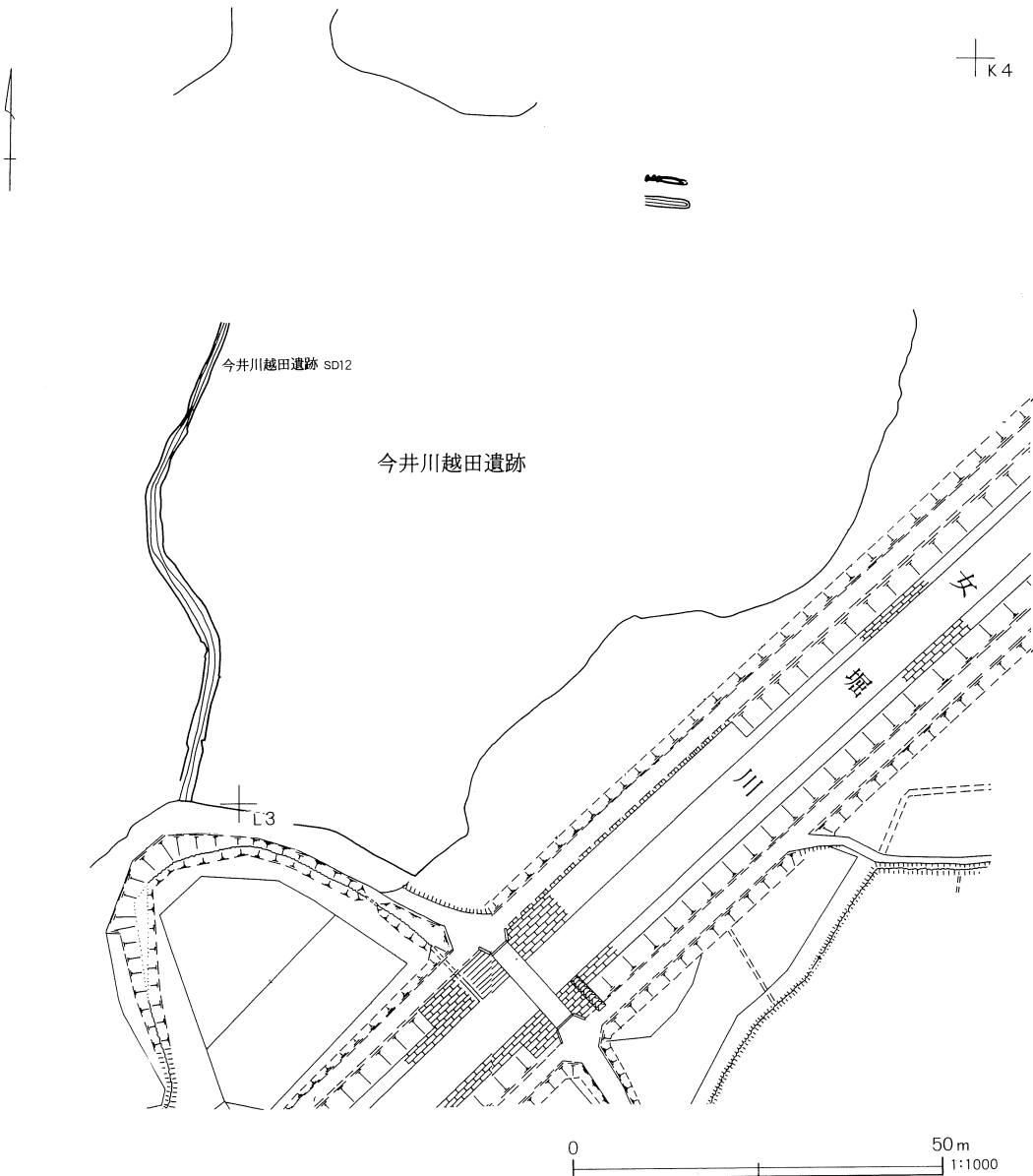
び19mの位置に溝跡の痕跡2条を検出した。北側溝跡底面には規則的な凹凸が認められ、同様の特徴をもつ溝跡が、第29号坪型区画跡西辺坪界線などでも検出できたことから、これらが坪界線をなしたものと考えられる。

なお、今井川越田遺跡SD12の詳細については『今井川越田遺跡III』（瀧瀬1997）に譲る。

第15号坪型区画跡(第55図)

C4・5、D4・5グリッドにかけて検出した。

第54図 第14号坪型区画跡(第2遺構面)



当地区は、平成5年度の範囲確認調査の結果、北半に中世の墓域を中心とした塔頭遺跡が発見されたため、遺物包含層となっていたII～VII層を除去し、VIII層上面で調査を行った。また、中央には九郷用水の地割を踏襲した大規模用水路が、南西部には関越自動車道が設置されていた。

調査は、トレンチを中心に行った。第1遺構面では、今井条里遺跡の調査範囲内に対応する遺構を検出することはできなかった。塔頭遺跡では、西辺の坪界線をなす塔頭遺跡SD30を検出した。坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は、西辺がほぼN-Sであった。東辺については、周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。

塔頭遺跡の調査および断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたII層、VII層、VIII層であった。第2遺構面を構成するIV層が削平されていたため、表土除去はVII層上面までとした。

坪界線は、今井条里遺跡内で南辺坪界線に大規模用水路跡SD146、脇に並行するSD160・165・166、塔頭遺跡内で西辺坪界線に1号道路跡とした規則的な凹凸を検出した。

坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は、南辺がN-92°-E、西辺がN-Sであった。整った1町方格の坪型区画跡であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

南辺坪界線をなすSD146は、平安時代前半以降に掘削された大規模用水路跡で、第28・29号坪型区画跡坪界線を東流し、第28号坪型区画跡東辺坪界線に至るまで300m程度が検出できた。SD146の詳細は第16号坪型区画跡に記述する。SD160・165・166は、幅40cm前後、深さ5～10cm前後の小規模な溝跡で覆土にみられるラミナから水流があったことがわかった。SD146を切る重複関係をもった用水路跡である。SD146が覆土にAs-Bの純粹堆積をもつことから、細～中砂で埋没したSD160・165・166は平安時代末から中世にかけて機能

したものであることがわかる。第23号坪型区画跡南辺坪界線には、同様の覆土をもつ小規模用水路跡SD131他を検出しており、いずれの溝跡群も底面に規則的な凹凸があった。

覆土が共通し、底面の特徴も類似するのが、塔頭遺跡1号道路跡であった。明瞭な硬化面は検出できず、平安時代から中世初期の条里型地割にともなう溝跡底面付近である可能性が高い。

なお、塔頭遺跡で検出した遺構についての詳細は、続いて刊行される『地神・塔頭遺跡』（岩瀬1997）に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

第16号坪型区画跡(第56・57図)

D4・5、E4・5グリッドにかけて検出した。

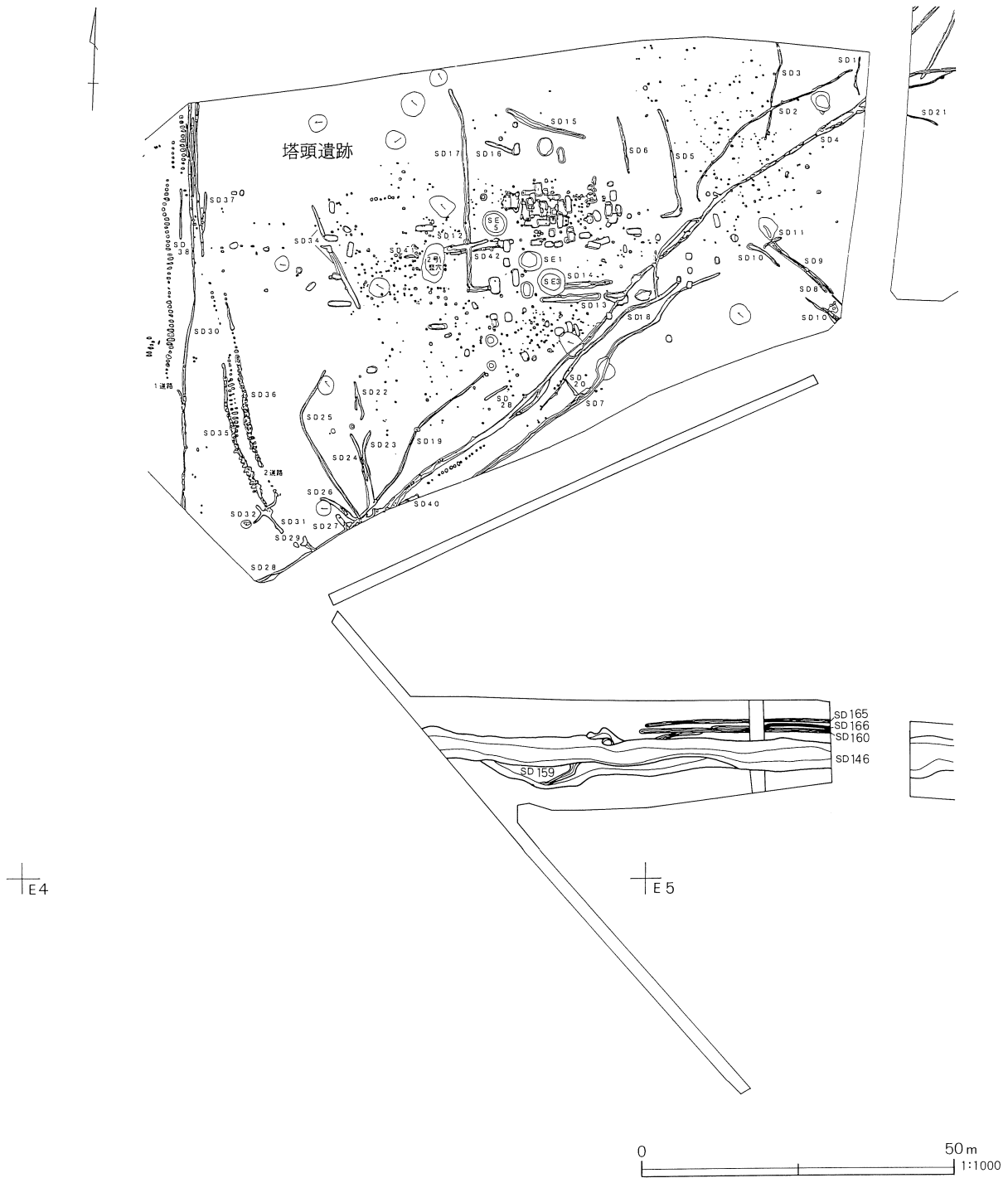
表層の坪型区画は、南西の半分以上が関越自動車道建設によって、すでに破壊されていた。調査は、トレンチを中心に行った。第1遺構面では、西辺坪界線にSD112を検出した。坪型区画跡の規模・方位は不明である。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたII層、VII層、VIII層であった。第2遺構面を構成するIV層が削平されていたため、表土除去はVII層上面までとした。

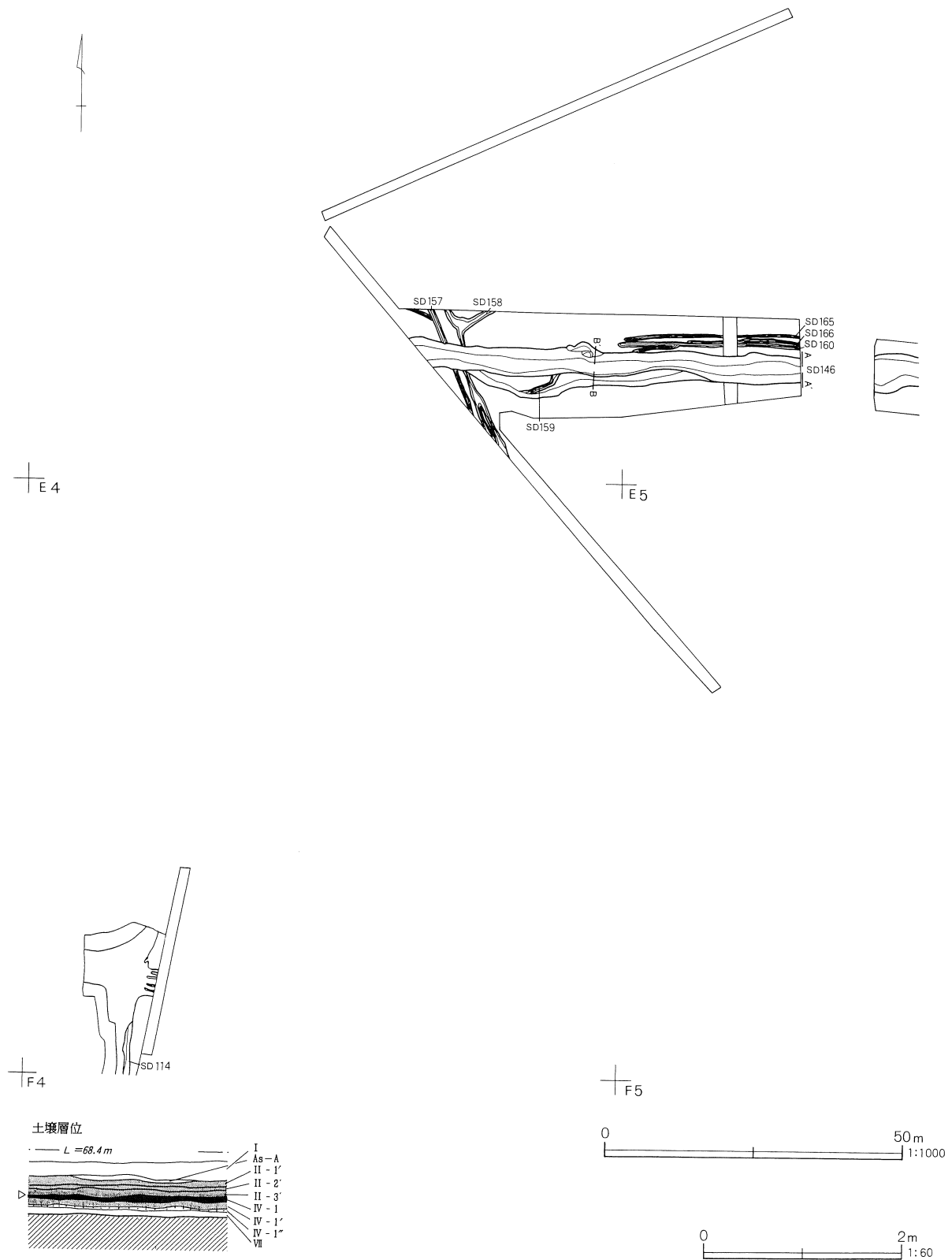
坪界線は、北辺坪界線に大規模用水路跡SD146を検出した。東辺・南辺については周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。第1遺構面でSD112を検出した南西坪界線交点では、南の第9・17号坪型区画跡坪界線を北流するSD114が、SD112によって破壊されており、遺構を検出することができなかった。

坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は北辺でN-92°-Eであった。

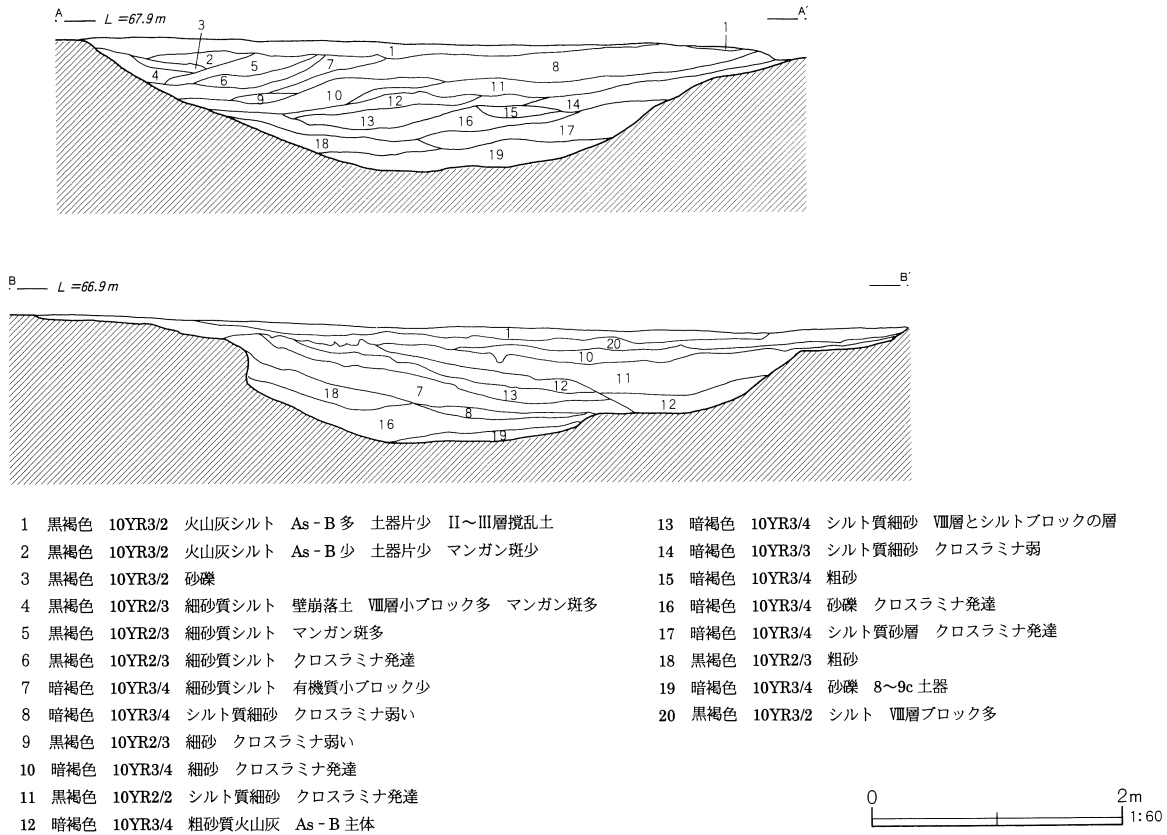
第55図 第15号坪型区画跡（第2遺構面）



第56図 第16号坪型区画跡 (第2遺構面)



第57図 第16号坪型区画跡土層図（第2遺構面）



溝跡・大畦畔

第15・16号坪型区画跡坪界線にはSD146を検出した。断面調査では、大きく2回の浚渫が行われていた。各時期の溝跡は、底面付近に礫まじりの粗砂や砂礫、上層に中砂～細砂およびシルト質細砂・細砂質シルトが堆積していた。明瞭なクロスラミナの発達があり、継続的に多量の流水があったものと考えられる。確認面での上端の幅5～9m、下端の幅約2m、深さ1～1.2mで、非常に大規模な用水路跡としてよいだろう。

1回目の浚渫を行った溝跡が埋没していく過程でAs-B火山灰の降下があったもので、流水による浸食と粗砂の貫入があるものの、12層にほぼ純粋な堆積が認められた。もっとも古い段階の溝底からは平安時代前半頃の土師器が主体的に出土した。1回目の浚渫後の溝底からは、10世紀前半頃の土師器・須恵器が出土した。2回目の浚渫後の溝底からは出土遺物は得られなかった。遺物の出土状況については第28号坪型区画

跡に記述する。

当地区では断面調査をもって浚渫の時期差を捉えたが、各時期の溝底を区別して調査した第28・29号坪型区画跡坪界線では、最初の掘削時には直線的な地割をもっていたもので、浚渫後の流路には顕著な蛇行があった。蛇行は時期が下るほど大きくなっていった。

なお、もっとも西よりの関越自動車道際で検出したSD157・158は、第3遺構面から第2遺構面までの時期のいずれかに対応するもので、第24号坪型区画跡のIV-1層水田跡小畦畔の地割方向や第30号坪型区画跡SD129に現れた異なる条里型地割にのるものである。ここでは、SD146との関連を示すために同一図に図示した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

現代水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

第17号坪型区画跡(第58図)

E4・5、F4・5グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、東辺坪界線に大畦畔をもつSD112、南辺坪界線にSD90・82を検出した。坪型区画跡の規模は南北約109m、坪界線の方位は西辺N-2°-E、南辺N-93°-Eで、平面形は全体に整った方形であったと考えられる。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、上部の水田土壌を削平され土壌変化のおよばないII層、IV-1層、IV-1'層、VII-1層、VII-1'層、VII-1''層、VIII層という層序であった。IV-1層水田跡に対応するマンガン結核集積は認められなかった。VII-1''層に析出した可能性がある。III層は部分的に遺存していた。第2遺構面における表土除去はIV-1層上面までとした。

表層坪型区画の北辺坪界線に閑越自動車道、区画南部に一丁田遺跡として調査された取付け道路が通じ、限られた調査範囲となった。また、周辺水田の水利権保護のため、北辺坪界線の大部分と南西坪界線交点は調査できなかった。

坪界線は西辺にSD112に切られてSD114を、南辺にSD83を中央にもつIV-1層水田跡に対応する大畦畔を検出した。北西坪界線交点はSD112に破壊されており、遺構を検出できなかった。坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は南辺でN-92°-Eであった。

溝跡・大畦畔

西辺坪界線では、第1遺構面で検出したSD112に切られる関係で重複するSD114を検出した。SD114は覆土中にAs-B降灰層準が認められた。上層耕作による削平のため大畦畔は検出できなかった。規模等は不明である。出土遺物は古墳時代前期の土師器甕片を得たが本来ともなう遺物ではない。

南辺坪界線では、覆土中に多量のAs-Bをもち平安から中世にかけて機能したと思われるSD83を中央にもつ大畦畔を検出した。大畦畔は耕作土限界として基部

を検出したものである。中央にマンガン結核集積層、両脇に酸化鉄集積層のまくれあがりがある典型的な土壌化がみられ、耕作土限界で計測した畦畔幅は、幅約3mであった。SD83は直線的に東流する小規模な用水路跡で、上端の幅10~20cm、深さ1~5cmであった。溝跡に水口はみられなかったが、大畦畔には直接小区画水田跡に引水する水口痕跡があった。大畦畔上部を切り込んだものと考えられる。水懸かりで下手にあたる第17号坪型区画跡内部に主に引水していた。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、坪型区画跡中央部で広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区画水田跡のうち、区画のわかるものは、49筆であった。

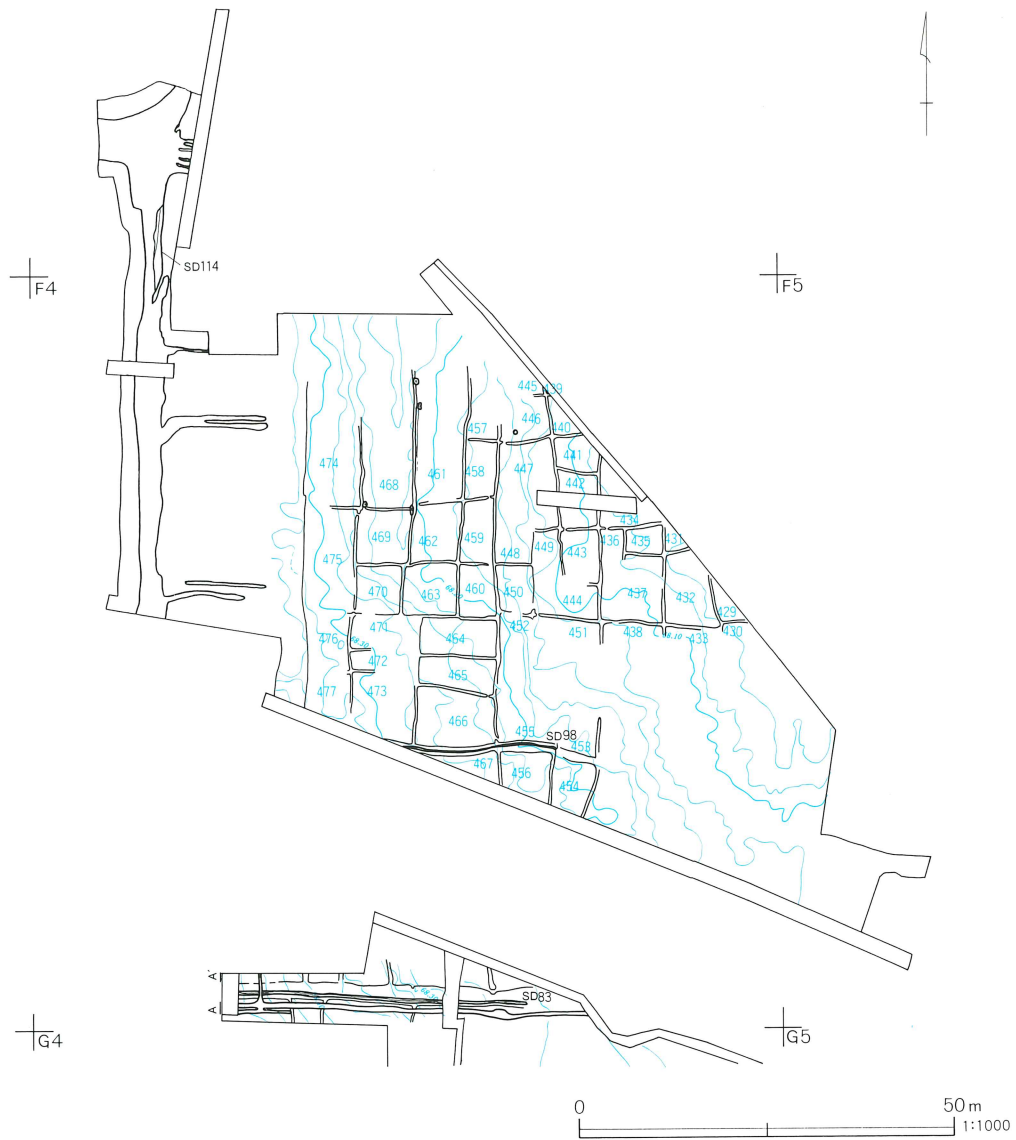
南北の小畦畔は5~11m程度の間隔で設けられ、坪型区画跡内部を貫通するものがあった。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では4cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20~30cmで、高さは不明である。方位はほぼN-Sであった。

東西の小畦畔は6~8m程度の間隔で設けられていた。南辺坪界線から北に50m程度の位置には、東西に坪型区画内を貫通する小畦畔がみられた。方位にはN-93°-E程度の傾きがあった。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0~2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行ったが、南北小畦畔に比べ明瞭さを欠いた。畦畔基部が遺存したものである。幅約15~30cmで、高さは不明である。

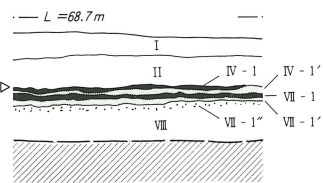
小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、5×8~6×7m程度の規模であった。南辺坪界線から北に33m付近では、中央に蛇行する小規模用水路跡SD98をもつ畝畝を検出した。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0~2cm、東西で2~4cmであった。

坪型区画内の水懸かりは南北小畦畔に規制されており、東西の小畦畔に水口を設け、南から北を主な水流

第58図 第17号坪型区画跡 (第2遺構面)



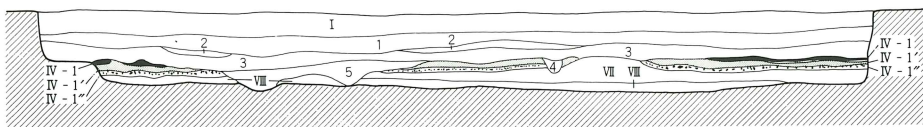
土壤層位



- 1 黒褐色 2.5Y3/2 火山灰シルト As-A 酸化鉄多
- 2 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 火山灰 江戸期大睦畔 As-A 純層
- 3 暗オリーブ褐色 2.5Y4/3 火山灰シルト II~III-3層 As-B 多
- 4 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト 中世以前の溝 As-B 少量
- 5 におい黄褐色 10YR3/2 シルト質砂 中世~As-A 以前の溝

A— L = 69.4 m

—A'



0 2m 1:60

方向としていた。南北の小畦畔にも水口は認められたが、東西小畦畔に比べ少なかった。

坪型区画跡西部では、耕作土の広がりか東側だけに限られ、西側には酸化鉄集積層であるIV-1'層の面的に広がる部分がみられ、両者の境界は直線的な耕作土の切れ目となっていた。これは、南北の小畦畔を境にして、東側の低い水田に耕作土が遺存し、西側の高い水田では削平されて酸化鉄集積層が露出したもので、境界の直線的な耕作土の切れ目は、南北小畦畔によってつくられた水田面の段差のうち、東側の畦畔下端を表すものと考えられる。畦畔基部を表す線のうち片側だけで表現したのは、こうした耕作土の切れ目である。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2~7cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。南北の小畦畔にそって歩行した状況であった。

出土遺物は少量の土師器片・須恵器片を得たが、図示できるものはなかった。

第18号坪型区画跡(第59図)

F4・5、G4・5、H4・5グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線にSD82・90、西辺坪界線にSD100、南辺坪界線に用水路跡をともなわない大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模は南北約110~112m、坪界線の方位は北辺N-93°-E、南辺N-91°-E、平面形は整った方形であったと考えられる。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は17号坪型区画跡と同様で、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、上部の水田土壌を削平され土壌変化のおよばないII層、IV-1層、IV-1'層、VII-1層、VII層、VII-1'層、VII-1''層、VII-2層、VII-2'層、VIII層という層序であった。IV-1層水田跡に対応するマンガン結核集積は認められなかった。VII-1''層に析出した可能性がある。

第2遺構面を覆うIII層はII層中に攪乱されていたが、部分的に降灰時の堆積が遺存していた。第2遺構面に

おける表土除去は、III層遺存部分ではこれを取り除き、その他の部分ではIV-1層の削平にかかわらず、その上面までとした。

表層坪型区画の北辺坪界線に一丁田遺跡として調査された取付け道路が通じ、限られた調査範囲となった。また、周辺水田の水利権保護のため、東西の坪界線の大部分は調査できなかった。

坪界線は北辺に用水路跡SD83を中央にもつIV-1層水田跡に対応する大畦畔を検出した。南辺では中世の耕作による攪乱のため大畦畔を検出することはできなかったが、As-Bで埋没した用水路跡SD195底面を検出した。坪型区画跡の規模はSD83とSD195の芯芯距離で南北108m、坪界線の方位は北辺でN-92°-E、南辺でN-92°-Eであった。整った1町方格の坪型区画跡であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線では、覆土中に多量のAs-Bをもつ平安から中世にかけて機能した用水路跡SD83を中央にもつ大畦畔を検出した。第17号坪型区画跡側に引水した水口が認められたが、水懸かりで上手にあたる第18号坪型区画跡側への引水状況は明らかにできなかった。詳細は第17号坪型区画跡の記述に譲る。

南辺坪界線付近は、中世の水田耕作および条里型地割にともなう用水路掘削等による攪乱のため、IV-1層上面の遺存状態がきわめてわるかった。広い範囲にわたってIV-1'層が露出していた。大畦畔を検出することはできなかったが、As-B降灰層準によって埋没したSD195を検出した。底面には不規則な凹凸が多くみられた。遺構の状況および位置関係からみて大畦畔中央に設けられた用水路跡と考えてよい。出土遺物はなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、坪型区画跡東部で広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区分されていた。検出した小区

第59图 第18号坪型区画跡 (第2遺構面)



画水田跡のうち、区画のわかるものは、51筆であった。

南北の小畦畔は4～11m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通するものがあった。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では4cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20～30cmで、高さは不明である。方位はほぼN-S～N-3°-Eであった。

東西の小畦畔は6～11m程度の間隔で設けられていた。南辺坪界線から北に53m、60m程度の位置には、東西に坪型区画内を貫通する小畦畔がみられた。方位には、正東西をさすものと、N-107°-E程度の傾きをもつものがあった。第11および18号坪型区画跡同様、第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭段階の坪型区画跡の地割が一部残存したものであると考えられる。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0～2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～30cmで、高さは不明である。

全体的には南北方向の小畦畔のつながりが強く、間隔を4mと極端に狭めて坪内を貫通させている部分があった。基本的には南北方向に規制された長地型類似の地割であったと思われるが、東西に貫通する小畦畔の存在は東西に2分する半折型類似の地割を示唆するものでもある。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、4×11～9×11m程度の規模であった。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0～2cm、東西で2～4cmであった。

坪型区画内の水懸かりは主に南北小畦畔に規制されており、東西の小畦畔に水口を設け、南から北を主な水流方向としていた。

坪型区画跡西部では、耕作土の広がり東側だけに限られ、西側には酸化鉄集積層であるIV-1層が面的に広がる部分がみられ、両者の境界は直線的な耕作土の切れ目となっていた。これは、南北の小畦畔を境にして、東側の低い水田に耕作土が遺存し、西側の高い

水田では削平されて酸化鉄集積層が露出したもので、境界の直線的な耕作土の切れ目は、南北小畦畔によってつくられた水田面の段差のうち、東側の畦畔下端を表すものと考えられる。畦畔基部を表す線のうち片側だけで表現したのは、こうした耕作土の切れ目である。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2～8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。歩行状況は明確でなかった。

出土遺物は、遺構面を覆う攪乱されたAs-B層中から10世紀代を中心とする少量の土師器片・須恵器片を得た。攪乱がおよばなかったIV-1層上部には薄い酸化鉄集積層が認められ、降灰後、IV-1層を含めて深い耕作を行って上層に水田を復旧したのと考えられる。また、耕作土IV-1層中からも少量の土師器片を得たが、図示できるものはなかった。

第19号坪型区画跡(第60図)

H4・5、I4・5グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線に大畦畔、西辺坪界線に中央に用水路跡SD100をもつ大畦畔を検出した。坪界線の方位は、南辺N-91°-Eであった。坪型区画跡の規模は明らかにできなかった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-1"層、II-2'層、II-2"層、II-3'層、II-3"層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-1'層、VII-1"層、VIII層という層序であった。IV-1層水田跡に対応するマンガン結核集積は認められなかったが、VII-1"層に析出した可能性がある。比較的良好な状態でIII層が遺存していた。水田面の凹凸には噴火のユニットを遺すAs-Bの降灰層準が認められた。第2遺構面における表土除去はIV-1層上面までとした。

坪界線は北辺に用水路跡SD195を検出した。坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は北辺でN-92°-Eであった。

第60図 第19号坪型区画跡（第2遺構面）



溝跡・大畦畔

北辺坪界線付近は、上層からの攪乱のためIV-1'層が露出していた。大畦畔を検出することはできなかったが、As-B層で埋没したSD195を検出した。大畦畔中央に設けられた水路跡であろう。詳細は第18号坪型区画跡に記述した。

東部は一丁田遺跡として調査されているが、第2遺構面に対応する遺構は検出されていない（富田・赤熊1985）。南辺は護岸工事された真下堀川となっており、調査できなかった。東辺坪界線は、周辺水田の水利権

保護のため調査できなかった。西辺坪界線は水利権保護のため、北西坪界線交点部分に限定して調査を行ったが、第1遺構面で検出したSD100等によって破壊されており、第2遺構面に対応する遺構は検出できなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、南部を除く調査範囲全体に広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔に

よって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区画水田跡のうち、区画のわかるものは、67筆であった。

南北の小畦畔は4～11m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通するものがあった。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では4cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20～30cmで、高さは不明である。方位はほぼN-Sであった。

東西の小畦畔は6～11m程度の間隔で設けられていた。坪型区画内を貫通する小畦畔はなかった。方位には正東西をさすものが多かったが、南西部にはN-107°-Eをさすものがあった。N-107°-Eの小畦畔は、第11号坪型区画跡におけるN-107°-Eの小畦畔の延長上に位置しており、第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭の坪型区画跡の地割が一部残存したものであると考えられる。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0～2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～30cmで、高さは不明である。

全体的には南北方向の小畦畔のつながりが強く、間隔を2.5mと極端に狭めて畦畔を貫通させている部分があった。基本的には南北方向に規制された長地型類似の地割であったと思われる。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、2×11～11×15m程度の規模であった。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0～2cm、東西で2～4cmであった。

坪型区画内の水懸かりは主に南北小畦畔に規制されており、東西の小畦畔に水口を設け、南から北を主な水流方向としていたが、一部南北の小畦畔にも検出できた。

坪型区画跡南部には、酸化鉄集積層であるIV-1'層が露出しており、水田区画を検出できなかった。厚く形成されたIV-1'層には、南東部において1条のマンガン結核集積による擬似畦畔Bを検出した。IV-1'層水田跡では、マンガン結核集積による擬似畦畔Bはこの1条しかみられなかった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2～8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。歩行状況は明確でなかった。

出土遺物は、第3遺構面への掘削時にIV-1'層内から平安時代前半に属する土師器杯片を得たが、図示できなかった。

第20号坪型区画跡(第61図)

I 4・5、J 4・5グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、南辺坪界線に幹線用水路跡SD2、西辺坪界線に支線用水路跡SD2B、東辺坪界線にSD3を検出した。坪型区画跡の規模は東西107～109m、坪界線方位は西辺がN-1°-E、南辺がN-91°-E、東辺がN-2°-Eであった。平面形は、整った方形をなしていた。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、土壌化痕跡を残さないII層、IV層、VII-1層、VII-1'層、VII-2'層、VIII層という層序であった。

北辺坪界線は、真下堀川となっており、調査できなかった。東部は一丁田遺跡として調査されているが、第2遺構面に対応する遺構は検出されていない(富田・赤熊1985)。調査範囲が限定されていたこと、調査期間等を勘案してトレンチ調査をもって対応した。

坪界線は、西辺で用水路跡SD2Aを検出した。南辺および東辺の断面調査では、平安時代の水田耕作土IV-1層を確認したが、第2遺構面に対応する坪界線は検出できなかった。第1遺構面で検出した用水路跡SD2・SD3の攪乱によって破壊されたと考えられる。

坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、西辺でN-Sであった。

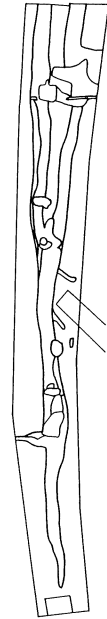
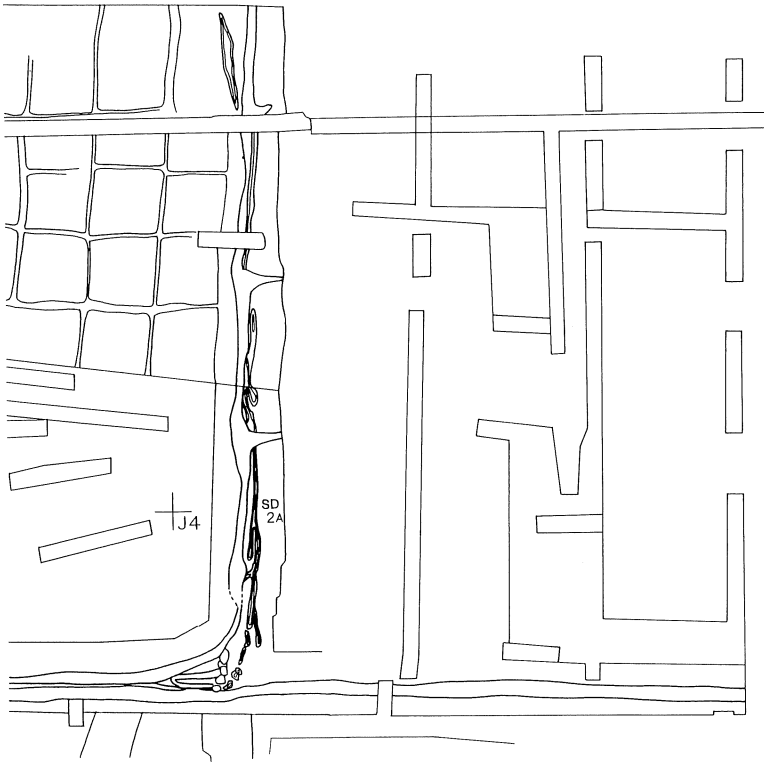
溝跡・大畦畔

西辺坪界線で検出したSD2Aは、覆土中に純度の高いAs-Bの堆積があった。本来、水懸かりで下手にあたる第20号坪型区画跡に引水するものと考えられるが、

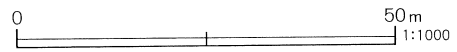
第61図 第20号坪型区画跡 (第2遺構面)

14

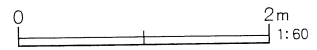
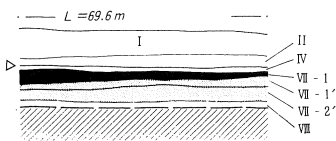
15



J5



土壤層位



水口等は上層の削平のため検出できなかった。詳細は第12号坪型区画跡に記述した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層水田の耕作による攪乱が激しく、詳細を明らかにすることはできなかった。

第21号坪型区画跡(第62図)

J 4・5、K 4・5グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線に幹線用水路跡SD2、西辺坪界線にSD1 Bを検出した。坪型区画跡の規模は不明であるが、坪界線方位は西辺が $N-2^{\circ}-E$ 、北辺が $N-91^{\circ}-E$ であった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、V層、女堀川氾濫による洪水砂VI層、VII-1'層、VII-1''層、VII-2'層、VII-2''層、VIII層という層序であった。第2遺構面における表土除去はIV-1層上面までとした。

南部が女堀川日流路および現在の堤防、北側坪界線下が真下堀川となっていたため調査できなかった。また、東部は一丁田遺跡として調査されているが、第2遺構面に対応する遺構は検出されていない(富田・赤熊1985)。

坪界線は、西辺坪界線で用水路跡SD1 Aを検出した。北辺坪界線では水田耕作土IV-1層を検出したが、第2遺構面に対応する坪界線は検出できなかった。第1遺構面で検出したSD2によって破壊されたものと考えられる。坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は、西辺で $N-S$ であった。

なお、北辺坪界線付近では、小畦畔の中央を通るSD196を検出したが、位置および畦畔との関係に問題があるため、坪界線と判断することはできなかった。

溝跡・大畦畔

西辺坪界線をなす用水路跡SD1 Aは、女堀川の蛇行

部分から直線的に北流していた。上端が削平されていたため、大畦畔等を検出することはできなかったが、溝跡上端の西側、第13号坪型区画跡側には耕作土IV-1層が認められず、IV-1'層が露出していた。坪型区画単位の水田面の標高差が耕作土の削平となって現れたもので、大畦畔の存在が予想できる。第21号坪型区画跡側では南北のトレンチを設定したため大畦畔痕跡等を検出することはできなかった。溝底にはAs-B降灰層準が点々と遺っており、第21号坪型区画跡内部に引水した小規模用水路跡が延びていた。小規模用水路跡先端周辺は水田面の凹凸が特に激しく、多量のAs-Bの堆積があった。水流による水田面の浸食であると思われる。条里型地割坪界線をなすSD1 Aの底面にも凹凸はあったが、小規模用水路跡の底面には非常に多くの不規則な凹凸があった。

小規模用水路跡は坪型区画跡内部の水田区画に対して、斜行していた。第29号坪型区画跡東辺坪界線における大畦畔に設けられた尻水口に類似の例があるが、SD1 Aは本来取水側の用水路跡にあたり、機能と地割の関連を明確にすることはできなかった。

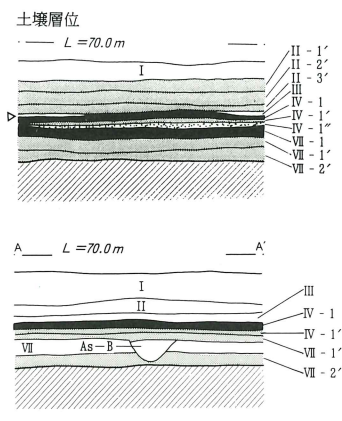
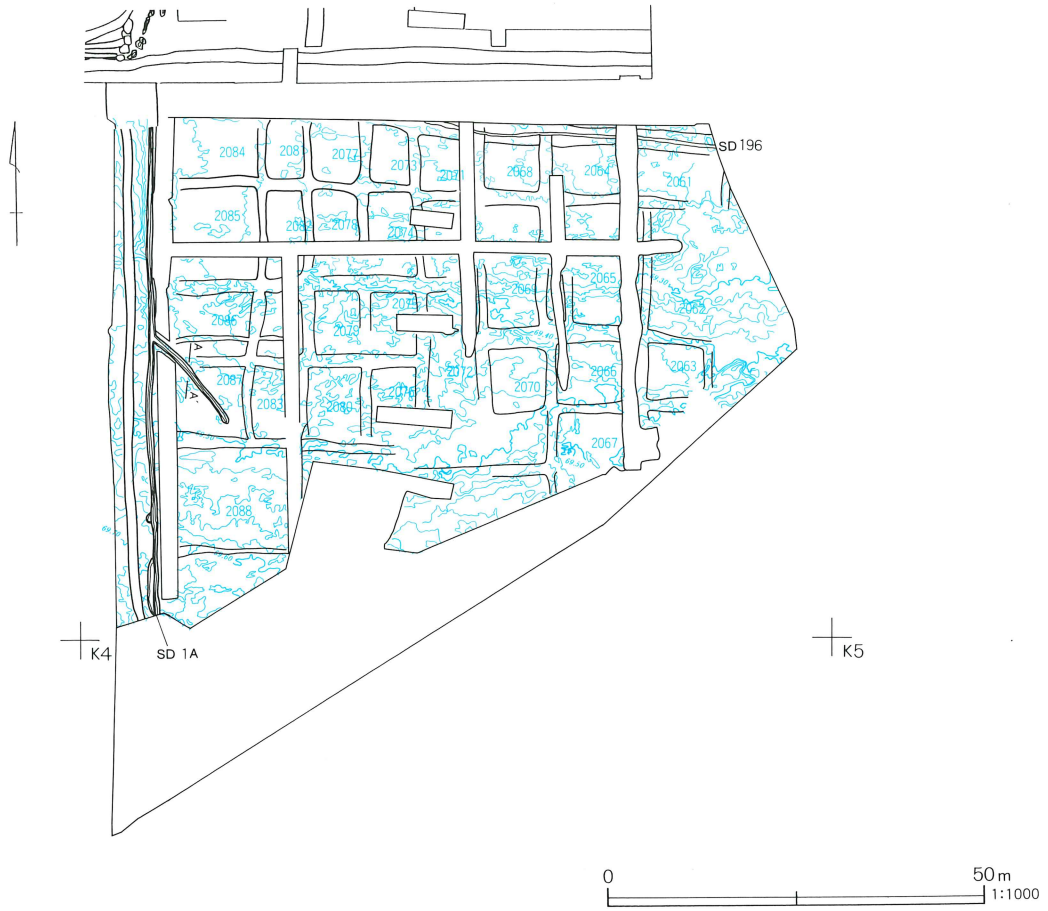
北辺坪界線付近では、小畦畔中央を通るSD196を検出した。覆土はAs-Bのみであったが、攪乱されており、底面に不規則な凹凸が無数に認められた。他の溝跡の状況からみて、用水路跡と考えられるが、等高線および凹凸の分布から復元した小畦畔は、幅を広めに推定しており、関係は不明瞭である。北部の坪型区画跡の地割から考えられる坪界線想定位置からは、6m程度南にずれていた。真下堀川をはさんで坪界線がずれる可能性もあるが、これを明確にすることはできなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、北辺坪界線相当位置から50m程度の範囲で検出できた。

水田面を埋没させたAs-B降灰後の水田復旧による攪乱のため、坪型区画跡内部の小畦畔はすべて削平されていた。第12号坪型区画跡における調査と同様、夏

第62図 第21号坪型区画跡（第2遺構面）



期の降雨により水田耕作土の切れ目を探す検出方法が適当でなかったため、当坪型区画跡については航空写真測量による畦畔検出を試みた。2 cm単位に等高線を求め、その屈曲と、水田面に広がる凹凸・馬蹄跡の切れる部分に小畦畔を想定した。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていたものと考えられる。

南北の小畦畔は7～12m程度の間隔で設けられ、坪型区画跡内部を貫通していた。基本的に長地型類似の地割を想定できる。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では2 cm前後の比高差があった。小畦畔範囲は想定範囲であるため、具体的な規模は不明である。方位はほぼN-Sであった。

東西の小畦畔は8～12m程度の間隔で南北小畦畔で区画された範囲内を区分していた。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0～2 cm前後の比高差があった。小畦畔範囲は想定範囲であるため、具体的な規模は不明である。方位は正東西のN-90°-Eであった。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、7×12m～8×12m程度の規模であった。

坪型区画内の水懸かり、水口等は明らかにできなかった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2～8 cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出した。

なお耕作土下に金助溝多数を検出した(図版36)。

出土遺物はなかった。

第22号坪型区画跡(第63図)

C5・6、D5・6グリッドにかけて検出した。当地区は、平成5年度の範囲確認調査の結果、北半に古墳時代前期から平安時代の集落跡を中心とした地神遺跡が発見されたため、遺物包含層となっていたII～VII層を除去し、VIII層上面で調査を行った。地神遺跡との

境界には、九郷用水の地割を踏襲した大規模水路が、南西部には関越自動車動が設置されていた。大規模水路は、本来調査対象となっていたが、調査時点で農業用水以外に生活排水路としても利用されていたため、調査を断念した。

大規模水路の南側について今井条里遺跡の調査範囲とし、トレンチを中心に調査を行い、遺構が存在する部分について範囲を拡大した。西辺については周辺水田の水利権保護のため調査できなかった。

第1遺構面に対応する遺構は、東辺坪界線にSD140を検出した。坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は北辺N-91°-E、東辺N-1°-Eであった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたII層、VIII層であった。

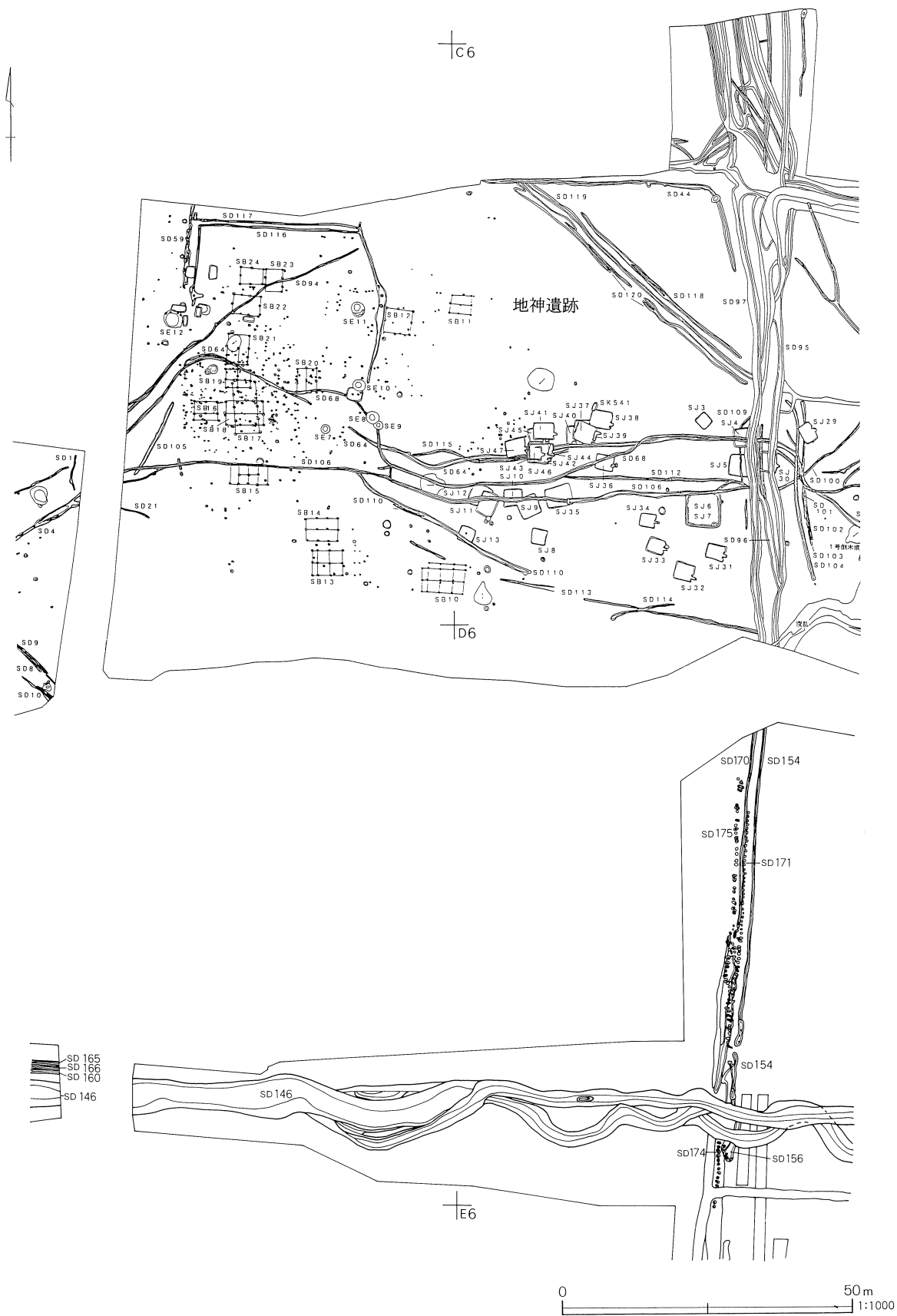
坪界線は複数時期にわたって検出できた。南辺坪界線に今井条里遺跡内で平安時代前期から12世紀以後まで継続する大規模水路跡SD146、北辺坪界線に9世紀前半以前の地神遺跡SD64・68・115、9世紀前半以後の地神遺跡SD112・106、東辺坪界線に9世紀前半以前の地神遺跡SD103・104、9世紀前半以後の地神遺跡SD95・96、今井条里遺跡では同時期のSD154・170、同時期から中世まで継続したSD171・175を検出した。

坪型区画跡の規模は北辺のSD106と南辺SD146の芯芯距離で南北109m、坪界線の方位は、北辺がN-91°-E、南辺がN-92°-E、東辺がN-1°-Eであった。北辺・東辺では9世紀前半の坪界線交点が北東方向へずれるため、地神遺跡SD64・68・115は北に5～8m、地神遺跡SD103・104は東に7～8mずれた地割となっていた。このずれはSD146の幅に含まれてしまうため、各時期とも整った1町方格の坪型区画跡であったとしてよいだろう。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線をなす地神遺跡SD64・68・115は、奈良時代前半以前に掘削された大規模水路跡SD89の延長にあたるもので、北西部で坪界線北辺に移行する以前

第63図 第22号坪型区画跡（第2遺構面）



には、第3遺構面で報告する古墳時代末～奈良時代初頭の条里型地割第32号坪型区画跡等と共通の地割をもつものである。出土遺物もこれに矛盾しない。平安時代前半以前のものと考えられる。また、地神遺跡SD112・106は直線的な地割でSD146と坪型区画をなしており、8世紀後半から9世紀前半頃の住居跡群（地神遺跡SJ37～45）を避けるように屈曲していた。9世紀前半以後のものと考えてよいだろう。

東辺坪界線をなす地神遺跡SD103・104、地神遺跡SD95・96は、各々北辺坪界線との繋がりによって時期と地割を捉えることができる。

今井条里遺跡で東辺をなすSD154・170は、底面に規則的な凹凸のある直線的な地割をもつ小規模な用水路跡で、上部が削平されていた。覆土はAs-Bを含まない細砂で、SD146下層から引水したものと考えられる。SD171・175は、底面に凹凸のない直線的な地割をもつ用水路跡で、覆土にAs-Bを含み、SD170からは馬歯を検出した。他の同様の特徴をもつ溝跡の時期からみて、平安時代から中世まで機能したものと考えられる。いずれも水田土壌が完全に削平されていたため、大畦畔を検出することはできなかった。

南辺坪界線をなすSD146は、平安時代前半までに掘削された大規模用水路跡である。2度にわたる大規模な浚渫が行われていた。覆土にAs-Bの純粋堆積をもつことから、12世紀以後まで継続して機能していたことがわかる。詳細は第23号坪型区画跡で記述する。

第3遺構面におけるSD89とSD146、および第32号坪型区画跡をはじめとした古墳時代末から奈良時代初頭の条里型地割、第35号坪型区画跡など平安時代前期以前の条里型地割の様相は、平安時代前半における正方位の条里型地割施行を示すものである。

なお、塔頭遺跡で検出した遺構についての詳細は、続いて刊行される『地神・塔頭遺跡』（岩瀬1997）に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層水田の耕作による攪乱が激しく、遺構を検出することはできなかった。

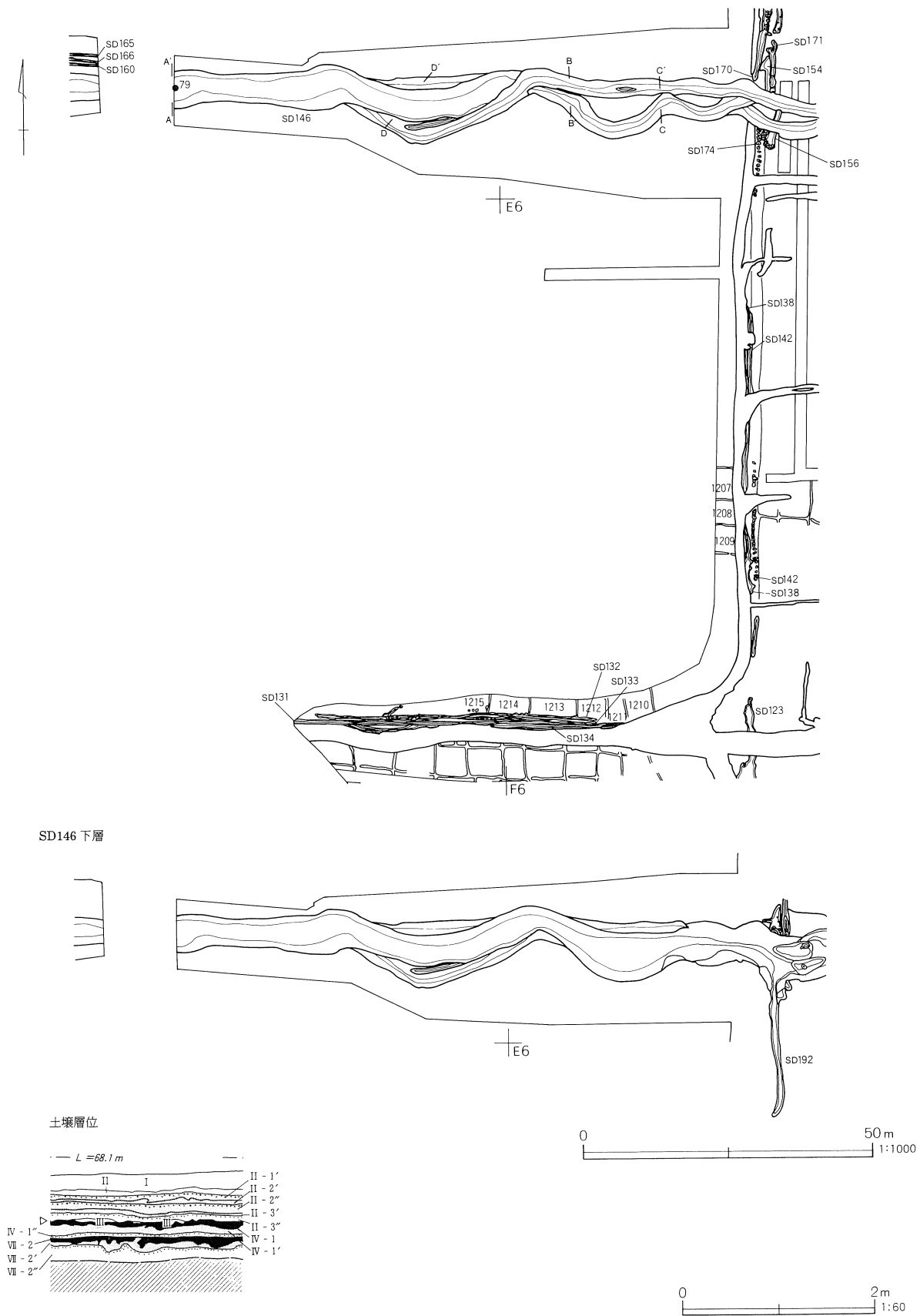
第23号坪型区画跡(第64～66・97図)

D5・6、E5・6グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、南辺坪界線にSD120、東辺坪界線にSD140を検出した。坪型区画跡の規模は不明、坪界線の方位は南辺が $^{\circ}N-91^{\circ}-E$ 、東辺が $^{\circ}N-1^{\circ}-E$ で、平面形は整った方形であったと思われる。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2"層、II-3'層、II-3"層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよび、マンガン結核集積層VII-2"層が認められた。大部分はI層下にVIII層が存在する埋没台地縁辺の微高地であり、古墳時代前期には集落跡として利用されていた。調査はトレンチを主体に行い、遺構が存在する部分について範囲を拡大したが、ほとんどの部分で第2遺構面をなすIV-1層は削平されていた。表層坪型区画のうち西辺については周辺水田の水利権保護および関越自動車道下となるため調査できなかった。

坪界線は、北辺にSD146、東辺にSD142を中央にもつ大畦畔、他に時期の異なる用水路跡SD123・138・156・174、南辺にSD131・132・133・134を検出した。坪型区画跡の規模は南北107～109m、坪界線の方位は北辺が $^{\circ}N-92^{\circ}-E$ 、南辺が $^{\circ}N-90^{\circ}-E$ 、東辺が $^{\circ}N-S$ で、西辺が関越自動車道のため不明であるが、整った1町方格であると考えられる。

第64图 第23号坪型区画跡 (第2遺構面)



溝跡・大畦畔

北辺坪界線には、SD146を検出した。断面調査では、大きく2回の浚渫が行われていた。各時期の溝跡は、底面付近に礫まじりの粗砂や砂礫、上層に中砂～細砂およびシルト質細砂・細砂質シルトが堆積し、多量の土器片が混入していた。明瞭なクロスミナの発達があり、継続的に多量の流水があったものと考えられる。断面図にはクロスミナの概略をスケッチしておいた。長さ幅とも1mほどの葉理であった。確認面での上端の幅は、第16号坪型区画跡より広く5～12mであったが、断面にみえる浚渫毎の溝跡上端では、3～4m程度であった。下端の幅も最も古い溝底で約2m、新しいもので0.5m、深さは最も古い溝底まで約1m、新しいもので0.7mであった。

上層の攪乱によって上端が削平されており、大畦畔は確認できなかったが、第28号坪型区画跡では最も古い段階の溝跡に堆積した砂層が増水によって氾濫しており、周囲の水田跡を埋没させた部分が遺存しており、一部に検出することができた。

第28号坪型区画跡において、浚渫毎に区別して調査した結果、はじめ直線的な地割をもっていたもので、浚渫を重ねる毎に顕著な蛇行が現れたことがわかった。

1回目の浚渫後にAs-Bが降下しており、ほぼ純粋な堆積があった。もっとも古い段階の溝底からは平安時代前半以前の土師器杯が主体的に出土した。西部の断面A-A'では、断面にかかって10世紀前半の須恵器椀（第97図79）が出土した。

特に第23・24・28・29号坪型区画跡坪界線交点付近の最下層溝底では、土師器杯の集中的な出土があり、もっとも上層の溝跡岸には焼土をとまなう土器の出土地点があった。詳細は第28号坪型区画跡で記述する。平安時代前期までに掘削されたとしてよいだろう。

東辺坪界線にはSD142を中央にもつ大畦畔を検出した。SD142はAs-B降灰層準で埋没していた。溝底に長径30cm程度の規則的な凹凸を連ねた用水路跡であった。上層による削平のため水口は検出できなかったが、水田面の高さからみて東の第29号坪型区画跡に引水し

ていたものであろう。

大畦畔は水田耕作土IV-1層の切れ目として検出した畦畔基部である。盛土によるもので、150cm程度の幅でIV-1層が露出していた。

東辺坪界線にはAs-Bを覆土に混入する平安から中世にかけて機能したSD123・174、10世紀代の須恵器を出土する細砂で埋没した東辺坪界線からSD146への尻水口SD156も検出した。

南辺坪界線にはSD131・132・133・134を検出した。幅20～30cm、深さ5cm足らずの小規模な溝跡であった。底面には不規則な凹凸が認められた。いずれも直線的な地割をなしており、As-B降灰層準をもつSD133には第22号坪型区画跡側への水口が設けられていた。大畦畔は認められなかった。SD131・132は細砂で埋没しており、図示はできなかったが覆土中から平安時代前半の土師器片を得ている。SD134は大畦畔北側の畦畔盛上時の土取りに要した溝跡の可能性もある。覆土にAs-Bを含んでおり、中世までの間に機能したものと考えられる。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は坪界線付近に限って検出できた。

南北の小畦畔は5～8m、東西は5m程度の間隔に設けられていた。

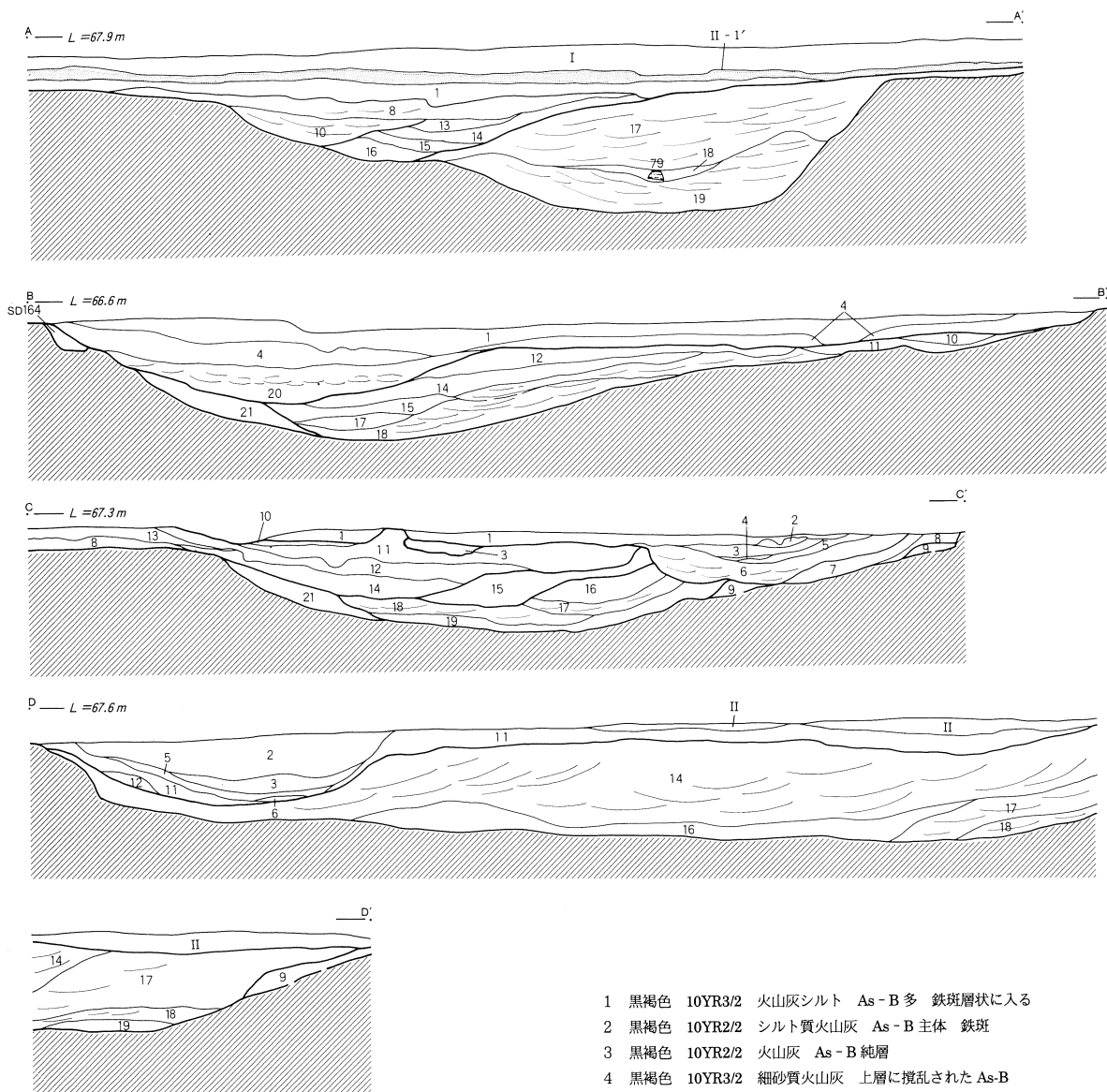
南北の小畦畔では、標高の高い西側と東側に4cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20～30cmで、高さは不明である。

東西の小畦畔では、標高の高い南側と北側では0～2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～30cmで、高さは不明である。

全域の区画、水懸かりの状況は明らかにできなかった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にとまなう耕作によって削平されていたため、凹凸や馬蹄跡は検出できなかった。

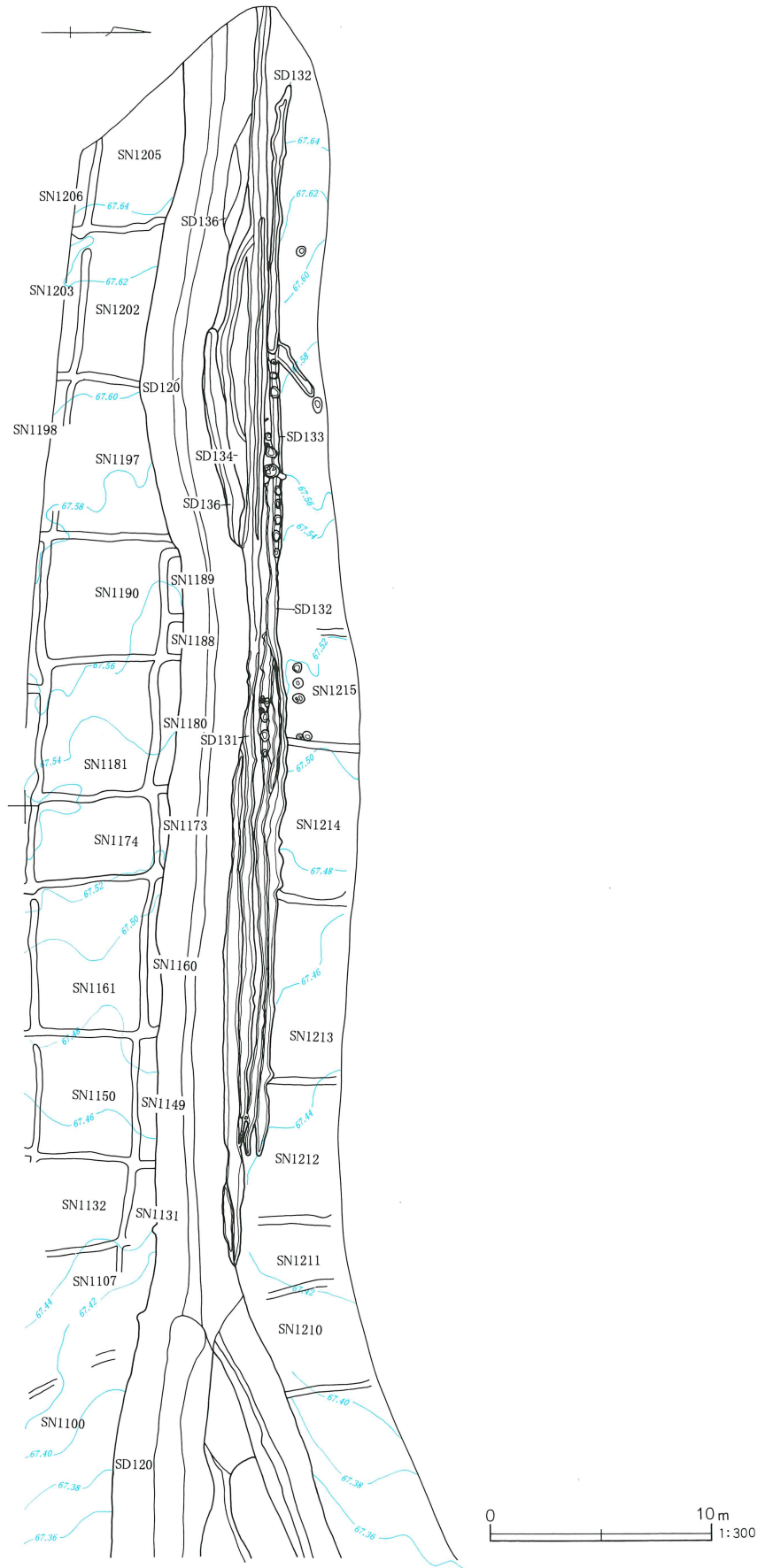
第65図 第23号坪型区画跡土層図（第2遺構面）



- 1 黒褐色 10YR3/2 火山灰シルト As-B 多 鉄斑層状に入る
- 2 黒褐色 10YR2/2 シルト質火山灰 As-B 主体 鉄斑
- 3 黒褐色 10YR2/2 火山灰 As-B 純層
- 4 黒褐色 10YR3/2 細砂質火山灰 上層に攪乱されたAs-B
- 5 黒褐色 10YR3/1 細砂 クロスラミナ発達
- 6 黒褐色 10YR3/2 砂礫
- 7 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 Ⅷ層小ブロック多 鉄斑 土器片
- 8 暗褐色 10YR3/4 粗砂 鉄斑 土器片
- 9 黒褐色 7.5YR3/2 シルト質細砂 鉄斑全体
- 10 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 鉄斑多
- 11 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 鉄斑多
- 12 暗褐色 10YR3/4 細砂シルト 中央に有機質黒色層
- 13 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 As-B 直下水田の大畦畔 鉄斑多
- 14 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト クロスラミナ発達
- 15 暗褐色 7.5YR3/3 粗砂礫
- 16 暗褐色 7.5YR3/3 砂礫 細砂とのクロスラミナ 完形土器
- 17 暗褐色 7.5YR3/3 砂礫 細砂とのクロスラミナ
- 18 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂 クロスラミナ発達
- 19 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト
- 20 黒褐色 10YR3/2 シルト Ⅷ層ブロック多
- 21 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト

0 2m 1:60

第66図 第131～136号溝跡周辺



第24号坪型区画跡(第67・68図)

E5・6、F5・6、G5・6グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線にSD120、東辺坪界線にSD119を検出した。坪型区画跡の規模は不明で、坪界線の方位は北辺N-91°-E、東辺N-Sであった。平面形は整った方形であったと思われる。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよびマンガン結核集積層VII-2"層が認められた。なお、北半部は表土のI層下にVIII層が存在する埋没台地縁辺

の微高地となっており、第4遺構面の調査によって、古墳時代前期には集落跡として利用されていたことがわかった。

第24号坪型区画跡内には、部分的に良好なIII層の堆積が認められた。第2遺構面における表土除去は、IV-1層上面までとした。

南西部分については関越自動車道下となっており、調査できなかった。

坪界線は、北辺にSD131・132・133・134、東辺にSD122・123を検出した。坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は北辺がN-90°-E、東辺がN-Sであった。南辺・西辺が関越自動車道のため不明であるが、整った1町方格であると考えられる。

第67図 第24号坪型区画跡(第2遺構面)



溝跡・大畦畔

北辺坪界線にはSD131・132・133・134を検出した。底面に不規則な凹凸が認められる小規模な溝跡であった。詳細は第23号坪型区画跡の記述に譲る。

東辺坪界線にはSD122・123を検出した。ともに直線的に掘削された小規模な用水路跡で、SD122はAs-Bを含んだ細砂で、SD123は細砂を含んではいるが純度の高いAs-Bで埋没していた。堆積状況には水流によるクロスミナがあった。大畦畔中央に設けられた用水路跡と思われる。本来第30号坪型区画跡側に引水したと思われるが、第30号坪型区画跡西部は、上層水田による攪乱のため水田耕作土IV-1層が削平されており、酸化鉄集積層IV-1層が露出していた。大畦畔の存在が予想されたが、耕作土の切れ目、および土壌化痕跡をもって大畦畔を検出することはできなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、坪型区画跡内部全体に広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区画水田跡のうち、区画のわかるものは、108筆であった。

南北の小畦畔は4～8m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通するものが多かった。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では2～3cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20～40cmで、高さは不明である。方位はほぼN-Sであった。

東西の小畦畔は4～9m程度の間隔で設けられていた。北辺坪界線から南に35m程度の位置には、東西に坪型区画内を貫通する小畦畔がみられた。方位には正東西をさすものと、N-107°-E程度の傾きをもつものがあった。第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭段階の坪型区画跡の地割が一部残存したものであると考えられ、第33・34号坪型区画跡の地割にのるものである。類似の状況は、第11・18号坪型区画跡に

も認められた。畦畔の標高の高い南側と北側では0～2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～20cmで、高さは不明である。

全体的には南北方向の小畦畔のつながりが強く、間隔を4mと極端に狭めて畦畔を貫通させている部分があった。基本的には南北方向に規制された長地型類似の地割であったと思われるが、東西に貫通する小畦畔の存在は東西に2分する半折型に似た地割を示唆するものである。

このほか、第24号坪型区画跡北東坪界線交点付近には、N-22°-W程度の傾きをもった区画が認められた(第68図)。付近は、IV-1層水田表面を埋没させていたIII層(As-B)の遺存状態がよく、バックホウをもってこれを取り除く際にも、2cm程度の盛り上がりのある南北の小畦畔が湾曲後、斜めにこれらの区画につながっていく様子が観察できた。水田土壌の遺存状態も良好で、水田面の凹凸や馬蹄跡の遺存状態からみて埋没水田としてよい。斜行する地割の小区画水田跡が同時に存在していたと考えるほかない。この地割方向は、第3遺構面において検出した異なる計画線をもつ条里型地割に対応するもので、地割を明示するために第67図に図示したSD128を南辺として第36号坪型区画跡を構成する西辺坪界線付近の地割が遺存したものと考えられる。同一地割延長上には平安時代前期のSD146に切られたSD157・158がのっていた。詳細は第3遺構面で記述する。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、東西に長い長方形のものが多く、5×7～7×8m程度の規模であった。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0～2cm、東西で2～4cmであった。

坪型区画内の水懸かりは南から北への水流を主体にしていたと考えられる。水口は東西の小畦畔に多く検出できた。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2～8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡を検出し

第68図 第24号坪型区画跡Ⅳ - I層水田微細図



た。歩行状況は明確でなかった。

出土遺物は、耕作土IV-1層中から平安時代に属する少量の土師器杯片・須恵器片を得たが図示できるものはなかった。

第27号坪型区画跡(第69・70図)

I 4・5・6グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、西辺坪界線にSD3を検出した。坪界線方位は西辺でN-2°-Eであった。坪型区画跡の規模は計測できなかった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-3'層、III層、IV-1'層、IV-1''層、VII-1'層、VII-2'層、土壌化痕跡のないVIII層、VIII層という層序であった。第2遺構面における表土除去はIV-1'層上面までとした。

調査は、調査期間等を勘案して、トレンチ調査を主体とし、遺構が検出された部分について範囲を拡大した。表層坪型区画北には、護岸工事された真下堀川が東流していたが、本来坪界線が予想される位置より北側によっていたため、北辺坪界線相当位置は調査することができた。南辺および東部は、女堀川の堤防となっており、調査することはできなかった。

坪界線は、北辺にSD4を検出した。坪型区画跡の規模は不明である。坪界線の方位は北辺がN-Sであった。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線にはSD4を検出した。東流する用水路跡で、女堀川旧流路蛇行部分に流入していた。2度にわたる浚渫が行われており、断面調査では、もっとも古い南側の溝跡岸にIV-1層水田跡の水田土壌とこれにともなう大畦畔が検出できた。大畦畔はシルトを基盤としたもので、上層の攪乱による削平のため高まりは失われていたが、耕作土および酸化鉄集積層の切れ目として確認できた。また、2回目の浚渫後の用水路跡にともなう大畦畔は、1回目の浚渫後の溝跡覆土上層

に擬似畦畔Bとして確認できた。ともなう水田土壌は上層の攪乱のため、検出できなかった。もっとも古い段階の溝跡にともなう大畦畔は、新段階の溝跡によって破壊されており、検出できなかった。

もっとも新しい溝跡は、覆土上層にAs-Bを多量に含んでおり、下層の溝跡にはクロスラミナをもつ粘土質シルトが多量に堆積していた。As-B降下以前から機能していたもので、堆積土の状況は速度の遅い水流が継続してあったことを示していた。

もっとも古い段階の溝跡は、女堀川旧流路蛇行部分への流入までに、1条の小規模用水路跡を北側に分流し、断面C-C'付近では猿尾状に類似した分流が認められた。さらに流入部では、新段階分流後の北側溝に3本の杭を水流に対して斜めに打ち込んだ堰跡状の施設が認められ、ここから小規模な溝跡が北側にさらに分流していた。オーバーフローを利用した水位調節のための溝跡であると思われる。

なお、SD19は条里型地割と関連しない溝跡で、水流の痕跡はなかった。

出土遺物は10世紀代に属する少量の須恵器片・土師器片を得たが図示できるものはなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

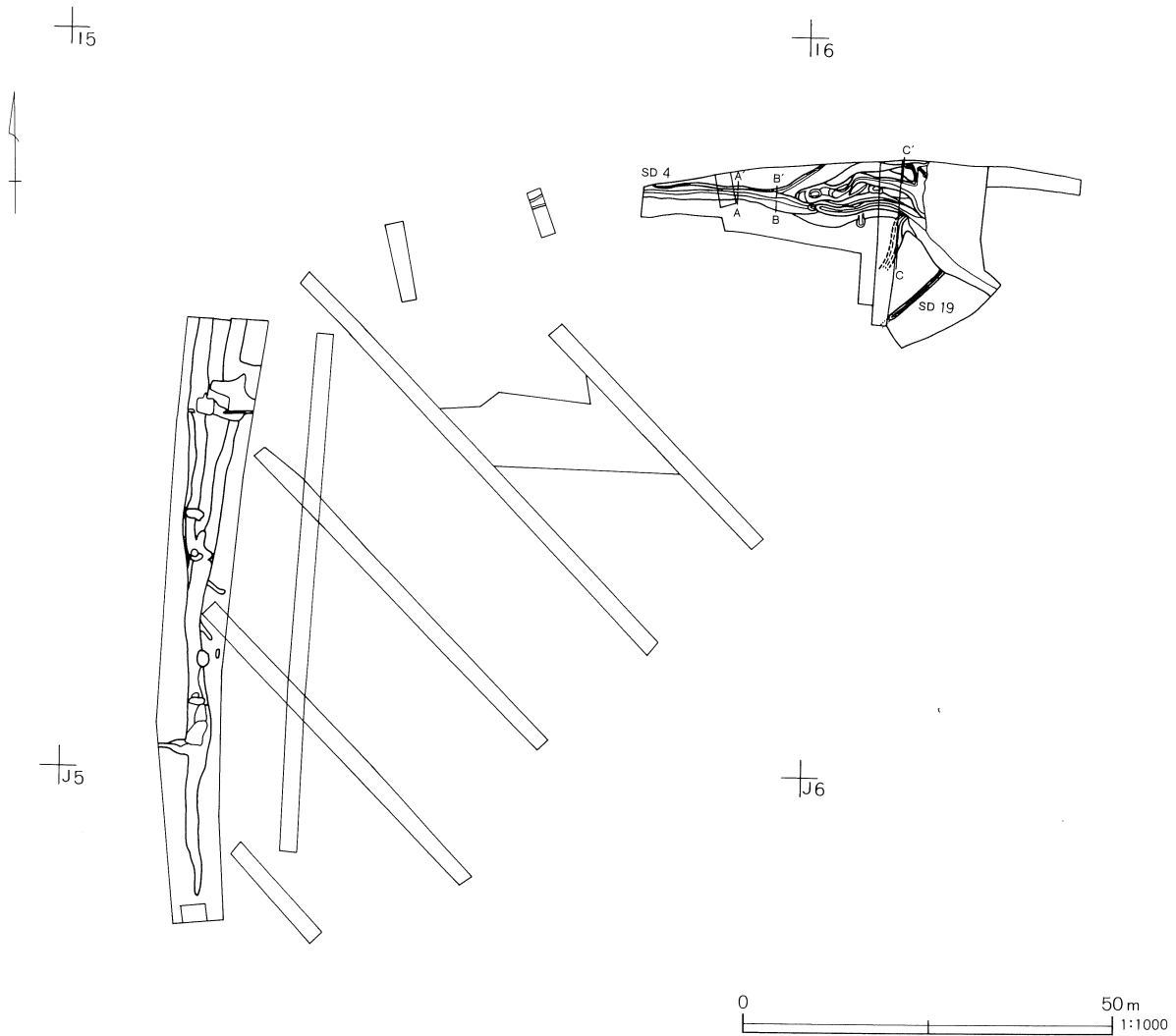
造成事業との調整など、諸般の事情で調査できなかった。

第28号坪型区画跡(第71~74図)

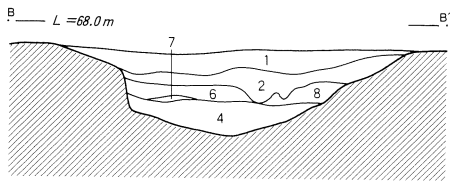
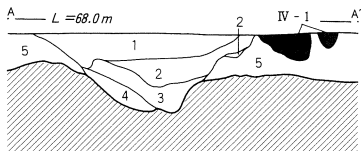
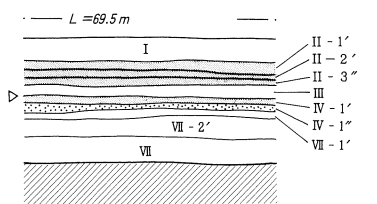
C 6・7、D 6・7グリッドにかけて検出した。第1遺構面では西辺坪界線にSD140、南辺坪界線にSD148・149を検出した。南辺をなすSD148・149は、本来坪界線にあたる位置より南に15mほどずれていた。坪型区画跡の規模は東西97m、坪界線の方位は、東辺がN-2°-E、西辺がN-1°-E、南辺がN-91.5°-Eであった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、攪乱されたII層、VIII層で、部分的にVII-2層、VII-2'層が残存していた。

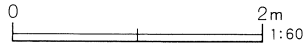
第69図 第27号坪型区画跡 (第2遺構面)



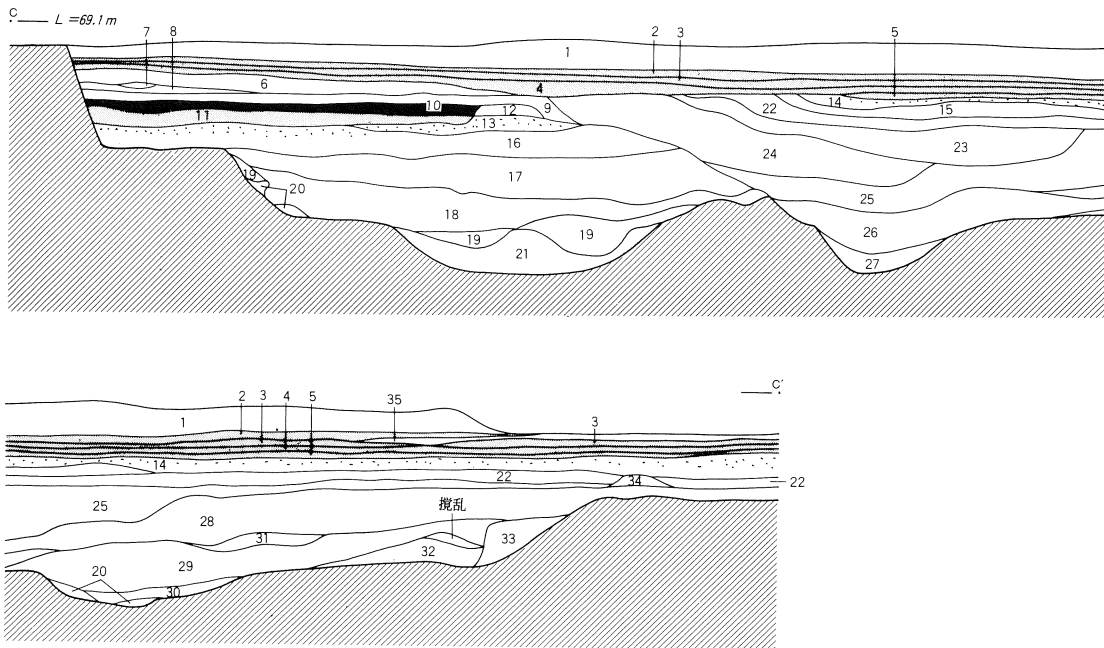
土壤層位



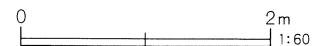
- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト As-B多 酸化鉄結核多 マンガン結核多
- 2 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質粘土 As-B多 酸化鉄結核多 マンガン結核多
- 3 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルト As-B 酸化鉄結核多 マンガン結核少
- 4 黒褐色 2.5Y3/1 粘土 酸化鉄結核 マンガン結核
- 5 黒褐色 2.5Y3/2 粘土
- 6 黒褐色 2.5Y3/1 火山灰まじりシルト As-B多 酸化鉄結核多
- 7 黒褐色 2.5Y3/1 シルト
- 8 黒褐色 2.5Y3/1 粘土質シルト As-B少 酸化鉄結核多 マンガン結核少



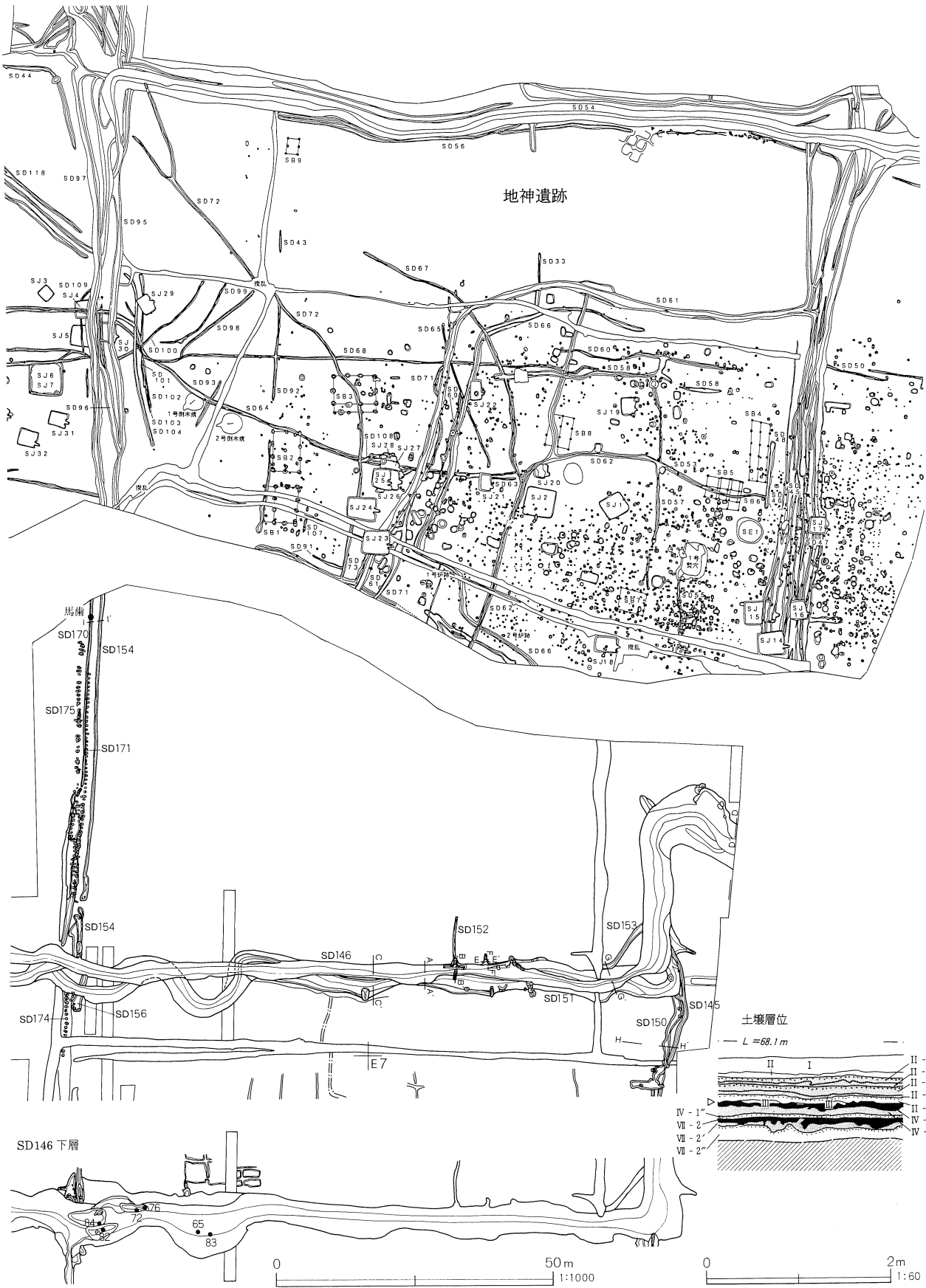
第70図 第27号坪型区画跡土層図（第2遺構面）



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色 10YR3/3 火山灰まじりシルト 現代耕作土 As-A 多
酸化鉄結核少 基本層序I-1層</p> <p>2 暗褐色 10YR3/3 シルト質火山灰 As-A多 酸化鉄結核多</p> <p>3 褐色 10YR4/4 シルト質細砂 近世水田土壌 酸化鉄結核多
マンガン結核少 基本層序II-1およびII-1'層</p> <p>4 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 中・近世水田土壌 酸化鉄結核多
マンガン結核少 基本層序II-2およびII-2'層</p> <p>5 褐色 10YR4/4 シルト質細砂 中世水田面~床土 炭化物少
酸化鉄結核多 マンガン結核少 基本層序II-3およびII-3'層</p> <p>6 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 マンガン結核 基本層序II-3''層</p> <p>7 暗オリーブ褐色 2.5YR3/3 細砂質シルト マンガン結核多</p> <p>8 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト マンガン結核</p> <p>9 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 火山灰まじりシルト As-B 多</p> <p>10 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト 基本層序IV-1層</p> <p>11 におい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核多
基本層序IV-1'層</p> <p>12 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 シルト 平安時代IV-1層水田大畦畔上層
酸化鉄結核多 マンガン結核少</p> <p>13 褐色 10YR4/4 シルト 12層に対する擬似畦畔 マンガン結核多</p> <p>14 褐色 10YR4/4 シルト 中世水田鉄斑集積層 As-B多 マンガン結核少</p> <p>15 におい黄褐色 10YR4/3 シルト As-B多 酸化鉄結核多 マンガン結核少</p> <p>16 黒褐色 7.5Y3/1 砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核多</p> <p>17 黒褐色 2.5Y3/1 粘土質シルト 酸化鉄結核少</p> <p>18 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトと中砂のクロスラミナ</p> <p>19 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルトと中砂のクロスラミナ 粘性高い</p> <p>20 灰黄褐色 10YR4/2 粘土 壁崩落土</p> | <p>21 暗褐色 10YR3/3 粘土質細砂 酸化鉄結核多</p> <p>22 23層が粘土を増したもの</p> <p>23 黒褐色 2.5Y3/2 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核少</p> <p>24 黒褐色 10YR4/2 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核少</p> <p>25 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト As-B少 酸化鉄結核多 マンガン結核多</p> <p>26 黒褐色 2.5Y3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核多</p> <p>27 黒褐色 2.5Y3/1 粘土質シルト クロスラミナ発達 酸化鉄結核少
マンガン結核多</p> <p>28 黒褐色 2.5Y3/1 火山灰 17層対応の再堆積で純度高いAs-B多</p> <p>29 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 17層下層対応の再堆積</p> <p>30 褐色 10YR4/4 細砂質粘土 27層対応 As-B多</p> <p>31 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト As-B 酸化鉄結核少 マンガン多</p> <p>32 暗褐色 10YR3/3 粘土質細シルト As-B少</p> <p>33 黒褐色 10YR3/2 粘土 腐食植物</p> <p>34 におい黄褐色 10YR4/3 シルト As-B多 酸化鉄結核多 マンガン結核少
中世大畦畔</p> <p>35 オリーブ褐色 2.5Y4/4 細砂質シルト 近世水田土壌 酸化鉄結核多
マンガン結核少</p> |
|--|--|



第71図 第28号坪型区画跡 (第2遺構面)



表層坪型区画のうち大規模用水北側には、平成5年度の範囲確認調査で古墳前期～平安時代の集落跡を中心とした地神遺跡が発見されていたため、遺物包含層となっていたⅠ～Ⅶ層を除去し、Ⅷ層上面で調査を行った。大規模用水路は、本来調査対象となっていたが、調査時点で利用されていたため、調査を断念した。

大規模用水路の南側について今井条里遺跡の調査範囲とし、Ⅱ層を除去することで第2・3遺構面とした。

坪界線は、北辺に地神遺跡SD68、南辺に平安時代前期から12世紀以後まで継続する大規模水路跡今井条里遺跡SD146、東辺には北部に地神遺跡SD55、南部に南東坪界線交点から屈曲する今井条里遺跡SD146、西辺坪界線に9世紀前半以前の地神遺跡SD103・104、9世紀前半以後の地神遺跡SD95・96、同時期の今井条里遺跡SD154・170、As-B降灰後中世まで機能したSD171・175を検出した。

坪型区画跡の規模は溝跡の芯芯距離で南北109m、東西107～109m、北辺が $N-91^{\circ}-E$ 、南辺が $N-92^{\circ}-E$ 、東辺が $N-S$ 、西辺が $N-1^{\circ}-E$ であった。平面形は整った1町方格をなしていた。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線をなす地神遺跡SD68は、第22号坪型区画跡西部では、古墳時代末から奈良時代初頭の条里型地割に類似した地割をなす溝跡で、8世紀後半から9世紀前半に営まれた地神遺跡SJ38～47を避けていることから、9世紀前半頃の坪界線と考えられる。第28号坪型区画跡では直線的な地割をもつ小規模な溝跡であった。

南辺坪界線に検出したSD146は、第15・16号坪型区画跡坪界線から続く大規模水路跡である。断面調査の結果、2度の浚渫が行われていることがわかった。

浚渫された各時期の溝跡は、底面付近に多量の土器片が混入した粗砂や砂礫、上層に中砂～細砂およびシルト質細砂・細砂質シルトが堆積していた。砂層には明瞭なクロスミナの発達があり、継続的に多量の、速い流水があったものと考えられる。断面図にはクロ

スミナの概略をスケッチしておいた。1回目の浚渫後にAs-Bが降下しており、ほぼ純粋な堆積があった。

確認面での上端の幅は、第22・23号坪型区画跡坪界線とほぼ同じ4～12m、浚渫毎の溝跡上端で4m程度であった。下端の幅は、いずれも約2m、深さは最初の溝底まで約1～1.5mであった。

上端が削平されており大部分で大畦畔は遺存していなかったが、南辺坪界線付近では、最初の溝底から氾濫した中砂が溝跡周辺の水田を埋没しており、上部を削平された大畦畔基部、水口を含めて検出することができた。

坪型区画跡内への水口は、As-B降灰層準で埋没したのも含めて大畦畔に直接切り込まれており、下層SD146に対応する埋没水田跡のように直接取水したのもと思われるが、SD152のように小規模水路跡に続く例もあった。

水路跡の流路は、はじめ直線的な地割をもっていたもので、浚渫を重ねる毎に顕著な蛇行が現れていた。

SD146は、第28号坪型区画跡南辺坪界線東端で東辺坪界線上を30m程度北流し、さらに東に向きをかえて東流していた。流路を変更した形跡はなく、当初からこの地割で掘削されたものである。東へつづく坪界線には、耕作土の切れ目として大畦畔を検出している。

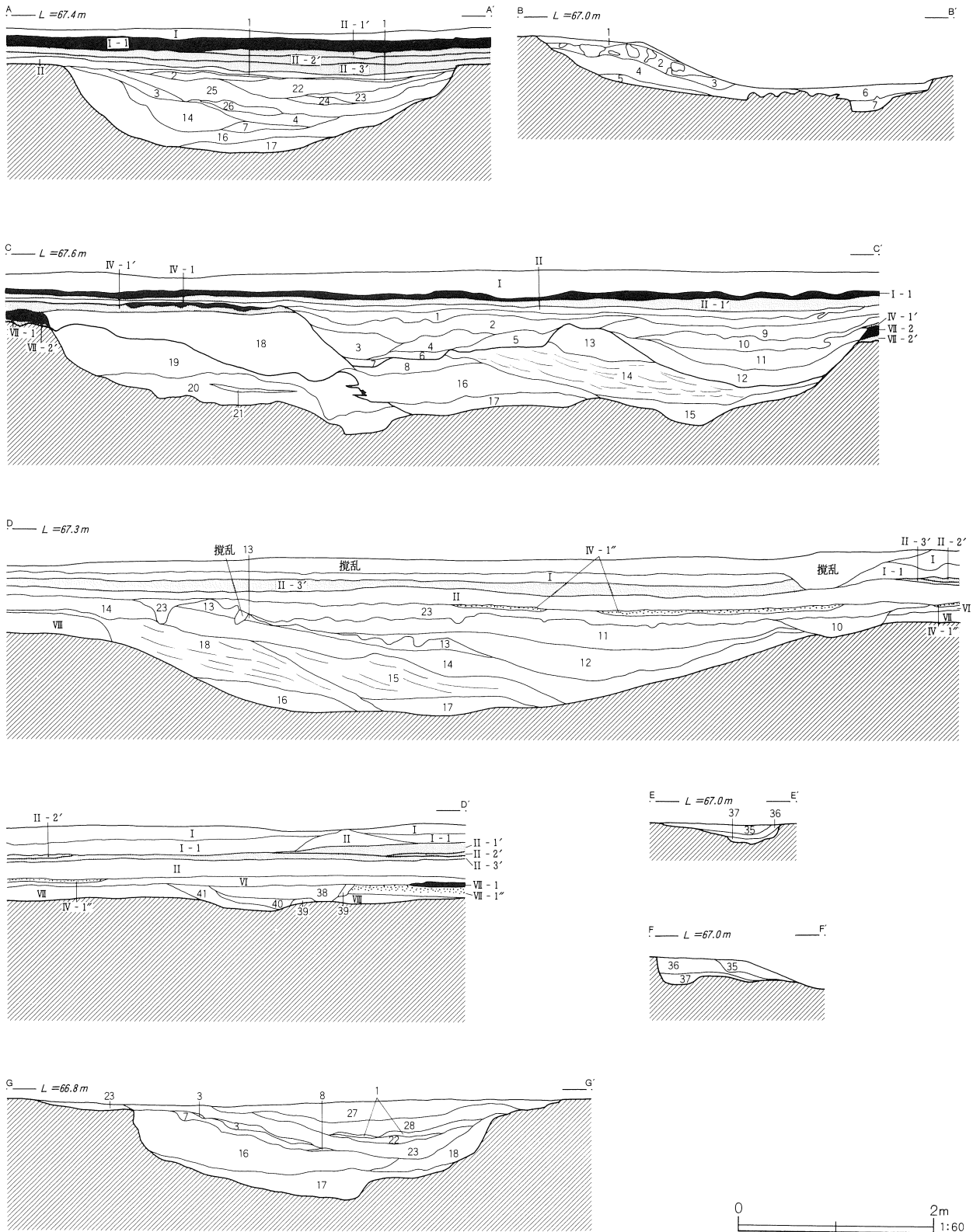
出土遺物は、第22・23・28・29号坪型区画跡坪界線交点東側の最初の溝底から、平安時代前期の土師器杯を主体として多く検出した(第97図65・72・76・82～84)。小玉の出土が特徴的である。祭祀が行われた可能性がある。南辺東端の屈曲点でも多量の土師器片を得たが、図示できるものはなかった。

同じく、第23・24・28・29号坪型区画跡坪界線交点付近の最上層の溝跡南岸には、焼土をともなった土器の出土地点があった。土師器杯(第97図67・73)のほか、図示できなかったが土師器甕1個体分を得ることができた。

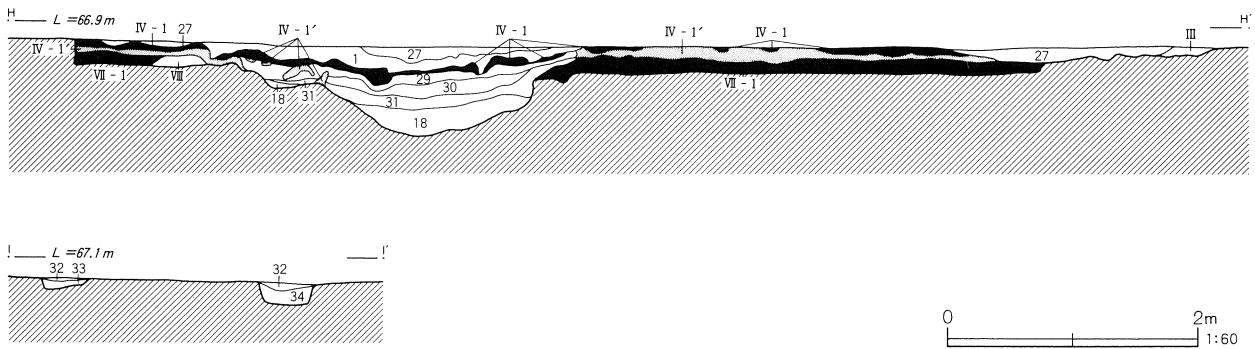
覆土および出土遺物からみて、平安時代前期までに掘削され、12世紀まで機能したのもとしてよいだろう。

なお、SD146の上流には、奈良時代前半以前に掘削

第72图 第28号坪型区画迹土层图 (第2 遺構面) (I)



第73図 第28号坪型区画跡土層図（第2遺構面）(2)



- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色 10YR3/2 火山灰シルト As-B 多 鉄斑層状に入る</p> <p>2 黒褐色 10YR2/2 シルト質火山灰 As-B 主体 鉄斑</p> <p>3 黒褐色 10YR2/2 火山灰 As-B 純層</p> <p>4 黒褐色 10YR3/2 細砂質火山灰 上層に攪乱された As-B</p> <p>5 黒褐色 10YR3/1 細砂 クロスラミナ発達</p> <p>6 黒褐色 10YR3/2 砂礫</p> <p>7 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 VIII層小ブロック多 鉄斑 土器片</p> <p>8 暗褐色 10YR3/4 粗砂 鉄斑 土器片</p> <p>9 黒褐色 7.5YR3/2 シルト質細砂 鉄斑全体</p> <p>10 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 鉄斑多</p> <p>11 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 鉄斑多</p> <p>12 暗褐色 10YR3/4 細砂シルト 中央に有機質黒色層</p> <p>13 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 As-B 直下水田の大畦畔 鉄斑多</p> <p>14 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト クロスラミナ発達</p> <p>15 暗褐色 7.5YR3/3 粗砂礫</p> <p>16 暗褐色 7.5YR3/3 砂礫 細砂とのクロスラミナ 完形土器</p> <p>17 暗褐色 7.5YR3/3 砂礫 細砂とのクロスラミナ</p> <p>18 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂 クロスラミナ発達</p> <p>19 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト</p> <p>20 暗褐色 7.5YR3/3 粗砂礫 クロスラミナ発達</p> <p>21 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト</p> <p>22 黒褐色 10YR3/2 火山灰シルト As-A 多</p> <p>23 黒褐色 10YR3/2 シルト VIII層ブロック多</p> <p>24 22 層に同じ</p> <p>25 黒褐色 10YR3/2 シルト As-A 少</p> <p>26 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト VIII層小ブロック多</p> | <p>27 黒褐色 10YR2/2 火山灰シルト As-B VIII層小ブロック少</p> <p>28 黒褐色 10YR2/2 シルト質細砂 As-B 少 VIII層小ブロック多 炭化物多</p> <p>29 黒褐色 7.5YR7/1 シルト 溝の堆積土が鉄斑集積層となったもの</p> <p>30 黒褐色 10YR2/2 シルト 溝の堆積土が鉄斑集積層となったもの</p> <p>31 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト クロスラミナやや発達</p> <p>32 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト As-B 少 マンガン結核 VIII層粒少</p> <p>33 黒褐色 10YR3/2 細砂 弱いクロスラミナ VIII層小ブロック少</p> <p>34 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 弱いクロスラミナ シルトブロック少</p> <p>35 暗褐色 10YR3/3 火山灰 As-B 純層 基本層序III層</p> <p>36 黒褐色 10YR2/3 細砂 小礫混じる</p> <p>37 黒褐色 10YR2/3 シルト質細砂 VIII層ブロック少</p> <p>38 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト</p> <p>39 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂</p> <p>40 暗褐色 10YR3/3 細砂</p> <p>41 暗褐色 10YR3/4 細砂</p> |
|--|---|
- B - B'
- | |
|---|
| <p>1 黒褐色 10YR2/3 火山灰まじりシルト As-B 多</p> <p>2 黒褐色 10YR3/2 火山灰まじりシルト 埋土か As-B 多 VIII層ブロック多</p> <p>3 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト 黒色有機物少 As-B 多 VIII層ブロック多</p> <p>4 黒褐色 10YR3/2 火山灰まじりシルト 埋土か As-B 多 VIII層ブロック多 VIII層粒多</p> <p>5 黒褐色 10YR2/3 火山灰まじりシルト 埋土か As-B 多 VIII層ブロック多 VIII層粒多</p> <p>6 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 堰横木の穴 As-B 多</p> <p>7 黒褐色 10YR3/2 シルト 堰横木の穴 酸化鉄結核少</p> |
|---|

された大規模用水路跡であるSD89が位置していた。奈良時代の用水路跡はSD89延長上の塔頭遺跡SD4・7があるが、平安時代前期の溝跡はこの延長上に検出できなかった。SD89とSD146の連結点はすでに関越自動車道下となっていたが、地割上では合流すると予想できる。平安時代前期までに正方位の条里型地割に沿って流路の変更があり、SD146が掘削されたと考えられる。

西辺坪界線の地神遺跡SD95・96・103・104、今井条里遺跡SD154・170・171・175については、第22号坪型区画跡に記述した。いずれも上層の攪乱のため、大畦畔を検出することはできなかった。

また、塔頭遺跡で検出した遺構についての詳細は、

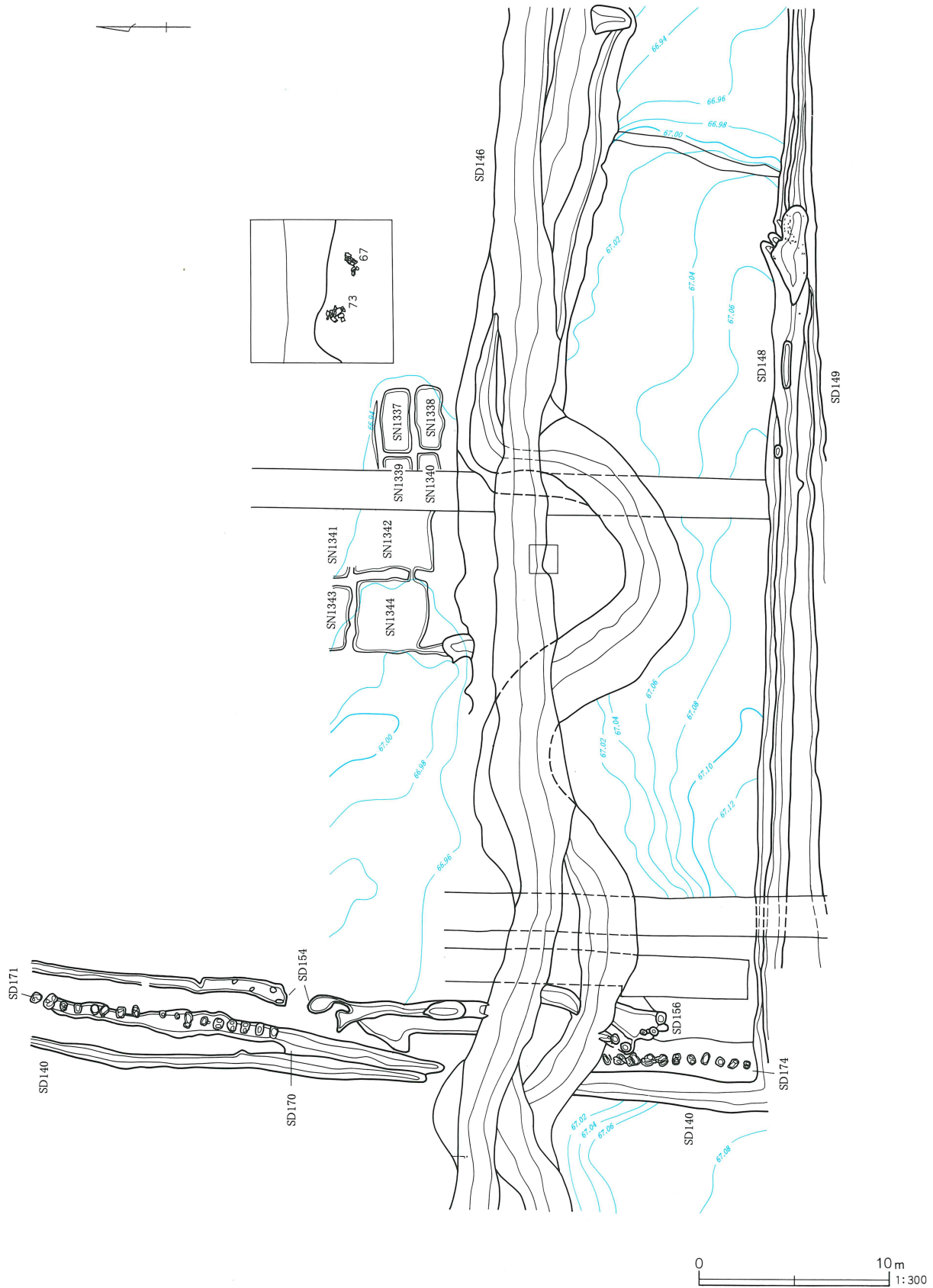
続いて刊行される『地神・塔頭遺跡』（岩瀬1997）に譲る。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

南辺のSD146脇に大畦畔とともに7筆以上の小区画水田跡を検出した。1×3～3×3m程度の規模で、畦畔の高さは3cm程度が遺存していた。上部は削平されていたが、大畦畔に直接切られた水口から水田面全体に、SD146下層の砂が流れ込んでいたため検出できた。SD146の浸濫状況によれば、平安時代前期の水田跡である。

第2遺構面を形成するIV-1層は、上層水田の耕作による攪乱が激しく、完全に削平されていた。詳細を

第74図 第28号坪型区画跡Ⅳ-Ⅰ層水田微細図



明らかにすることはできなかった。

第29号坪型区画跡(第75・76・97図)

E6・7グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、南辺坪界線にSD120、西辺坪界線にSD140、北辺坪界線にSD148・149を検出した。坪型区画跡の規模は南北95m、坪界線の方位は、北辺がN-91.5°-E、西辺がN-1°-E、南辺がN-91°-Eであった。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよびマンガン結核集積層VII-2''層が認められた。

坪界線は、北辺にSD146、西辺にSD142を中央にもつ大畦畔、他に時期の異なる用水路跡SD123・138・156・174、東辺に大畦畔とこれにともなうAs-Bで埋没したSD145、As-B堆積以後のSD150、下層SD146に対応するSD147を検出した。坪型区画跡の規模は東西107~108m、坪界線の方位は北辺がN-92°-E、東辺がN-1°-E、西辺がN-Sであった。南辺が第1遺構面におけるSD120による破壊のため不明であるが、整った1町方格であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線には、SD146を検出した。詳細は第28号坪型区画跡に記述した。

西辺坪界線にはAs-B降灰層準で埋没したSD142を中央にもつ大畦畔、As-Bを覆土に混入するSD123・174、および10世紀代と思われるSD156を検出した。詳細は第23号坪型区画跡に記述した。

東辺坪界線には、大畦畔を検出した。大畦畔は、耕作土IV-1層の切れ目として検出したものであるが、2~5cmの高まりがあった。畦畔基部として検出したものである。幅は1~2mであったが、当時の規模を示すものではない。大畦畔の東脇にはAs-B降灰層準

で埋没したSD145を検出した。堆積状況からはAs-B噴火時のユニットが観察できた。水懸かりで上手になる第29号坪型区画跡から大畦畔に直接尻水口を切って用水を取水した用水路跡で、第29号坪型区画跡東の坪型区画跡に引水するものであった。SD150は大畦畔中央付近に掘削されたもので、攪乱されたAs-B堆積を覆土中にもつ平安時代から中世段階まで機能した用水路跡である。SD147は下層のSD146溝底に流れ込む用水路跡で、本来第29号坪型区画跡東辺坪界線をなすものの北端であろう。幾度かの掘り直しがみられた。第97図77の土師器杯をはじめ、少量の土師器片を得た。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、坪型区画跡南部に広く検出できた。

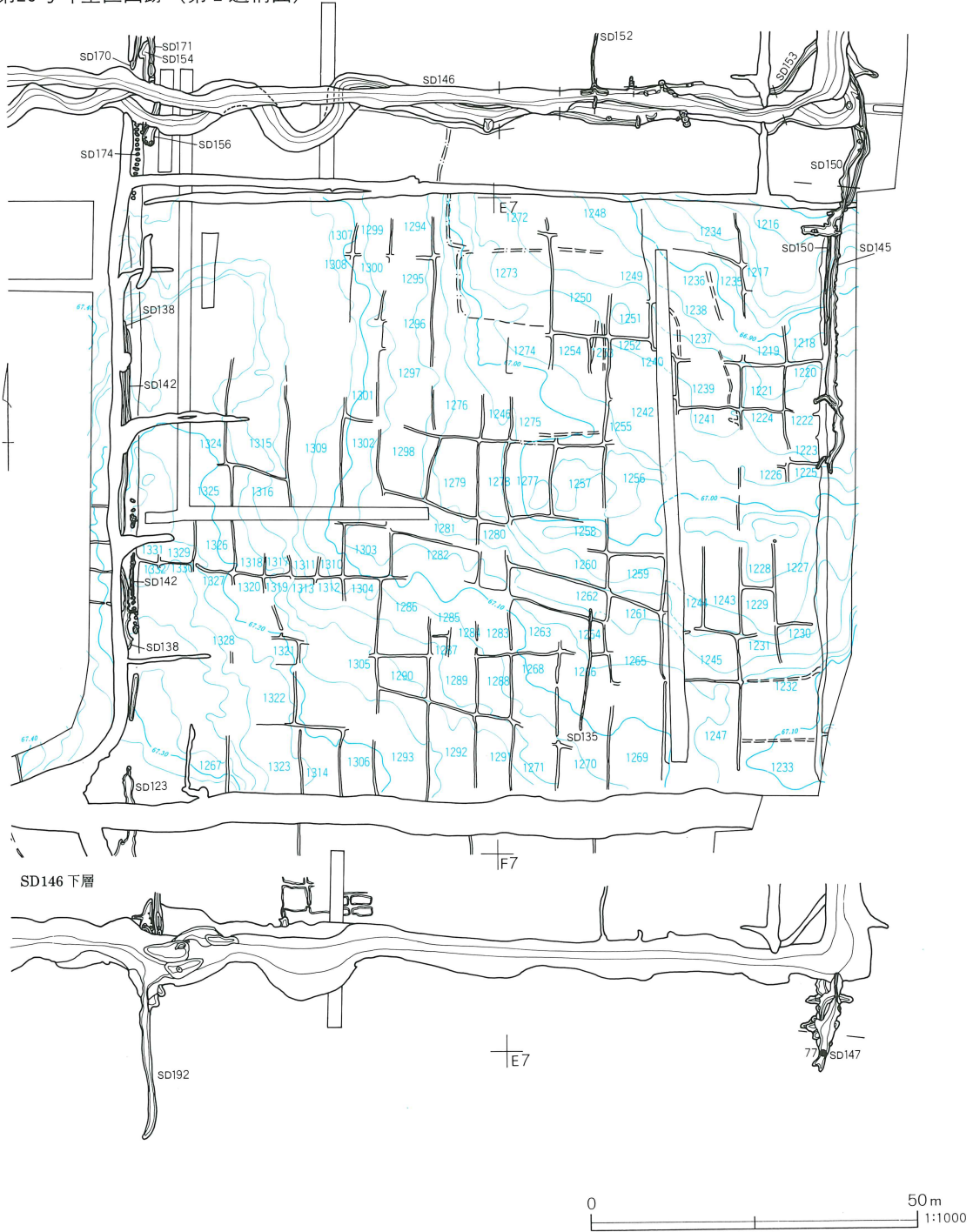
坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区画水田跡のうち、区画のわかるものは、121筆であった。

南北の小畦畔は4~8m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通するものが多かった。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では2cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20~40cmで、高さは不明である。方位はほぼN-Sであった。

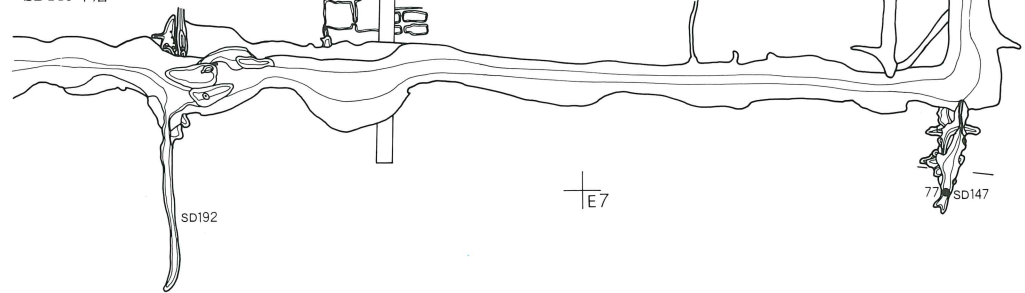
東西の小畦畔は5~11m程度の間隔で設けられていた。方位には正東西をさすものと、N-107~112°-E程度の傾きをもつものがあった。後者は中央部付近に集中していた。第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭の坪型区画跡の地割が一部残存したものであると考えられ、第33・34号坪型区画跡の地割にのるものである。類似の状況は、第11・18・24号坪型区画跡にも認められた。東西畦畔の標高の高い南側と北側では0~2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15~20cmで、高さは不明である。

全体的には南北方向の小畦畔のつながりが強く、間隔を4mと極端に狭めてまで畦畔を貫通させている部分があった。南北方向の長地型類似の地割であったと

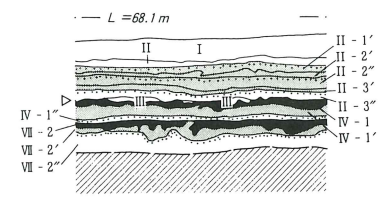
第75図 第29号坪型区画跡（第2遺構面）



SD146 下層



土壤層位



第76図 第29号坪型区画跡Ⅳ－Ⅰ層水田微細図



思われる。

第29号坪型区画跡におけるIV-1層水田跡の特徴は、耕作土中にブロックとして混在する酸化鉄集積層が帯状に検出できたことである。耕作土の切れ目として検出した小畦畔脇や、これによって造られた区画をずらした位置に認められることや、上層の耕作による攪乱をすべて取り除いて検出していることから、耕作によって破壊された旧畦畔の痕跡であると判断した。小畦畔がわずかに移動しながら造り替えられている様子が把握できた。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、南北に長い長方形のものが多く、 $4 \times 8 \sim 8 \times 10$ m程度の規模であった。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0~2cm、東西で2cm程度であった。

坪型区画内の水懸かりは、南北小畦畔の状況から、南から北への水流を主体にしていたと考えられるが、水口は少数しか検出できなかった。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2~8cm程度の耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡、人足跡を検出した。歩行状況は明確でなかった。

出土遺物は、耕作土IV-1層中から10世紀代を中心とした須恵器杯片・土師器片等を得たが図示できるものはなかった。

第30号坪型区画跡(第77・78図)

F6・7、G6・7グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、北辺坪界線にSD120、西辺坪界線にSD119を検出した。坪型区画跡の規模は南北109mであった。坪界線の方位は、北辺が $N-91^\circ-E$ 、西辺が $N-S$ であった。平面形は、整った方形であったと思われる。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡によ

る土壌化がおよびマンガン、結核集積層VII-2''層が認められた。

坪界線は、西辺にSD122・123、南辺にSD121を中央にもつ大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は南辺が $N-93^\circ-E$ 、東辺が $N-S$ であった。東辺は女堀川堤防付近となるため調査を断念した。平面形は、整った1町方格であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

西辺坪界線にはSD122・123を検出した。上層水田の耕作による削平のため、大畦畔を検出することはできなかった。詳細は第24号坪型区画跡に記述した。

南辺坪界線には、SD121を中央にもつ大畦畔を検出した。周辺はAs-Bの降灰層準が厚く推積しており、水懸かりで下手になる第30号坪型区画跡側の大畦畔下端まで、埋没した状態で検出できた。上部は削平されていたが、大畦畔の上面の幅は2m程度、下端の幅2.6m程度で、第30号坪型区画跡側の水田面との比高差は最大8cm程度であった。大畦畔には水口が設けられ、直接小区画水田跡に取水していた。SD121底面には、不規則な無数の凹凸があった。また、第31号坪型区画跡側からの尻水口も直接大畦畔に設けられていた(第78図)。

SD121覆土であるAs-B層中からは平安時代に属する土師器片が少量出土したが、図示できるものはなかった。

他に南辺坪界線から15m程度の位置を東流する小規模用水路跡SD124~127を検出したが、いずれも攪乱されたAs-Bを覆土とするもので、中世段階まで機能したものである。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

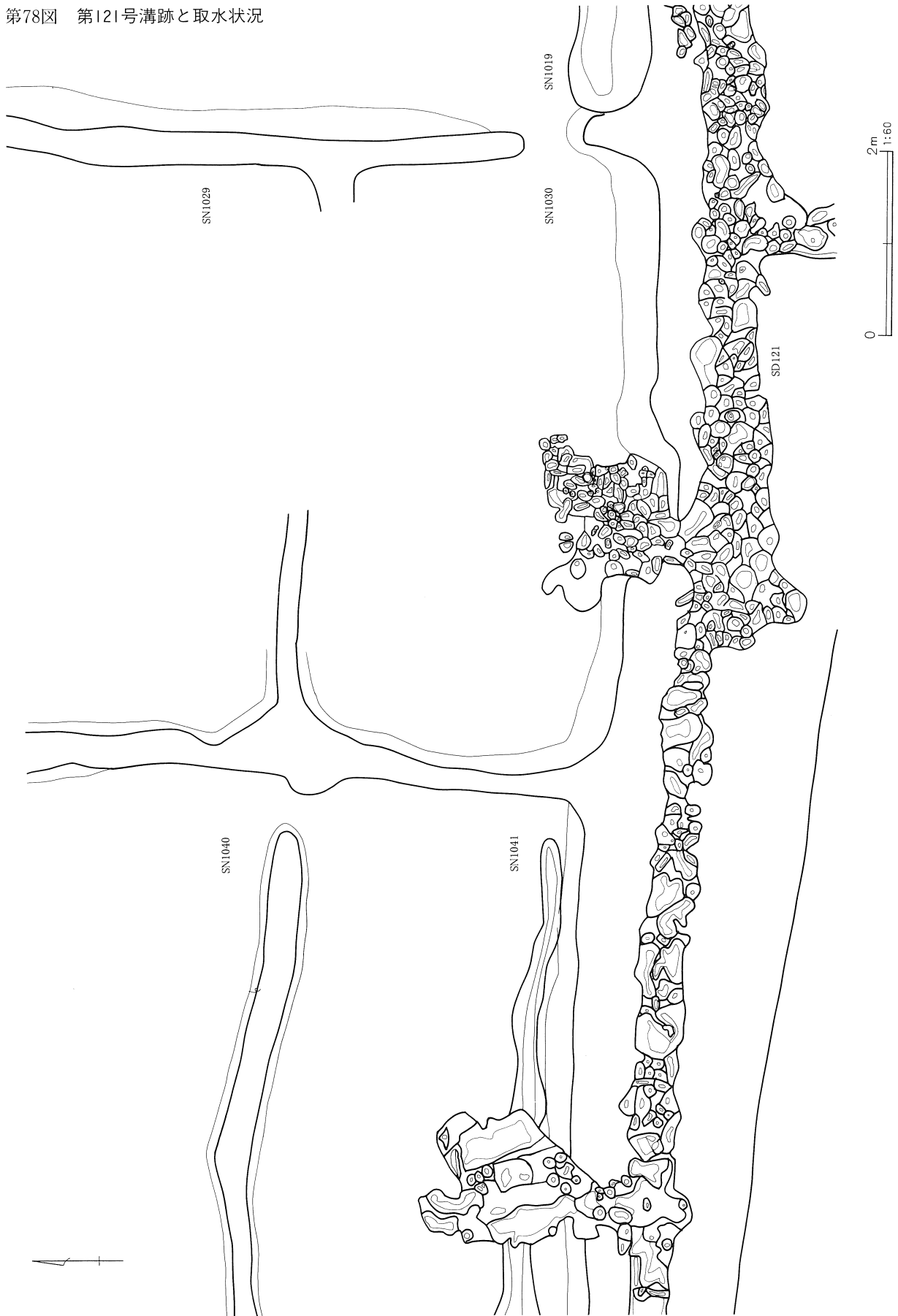
水田跡は、坪型区画跡内部南部を中心に広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区

第77図 第30号坪型区画跡 (第2遺構面)



第78図 第121号溝跡と取水状況



画水田跡のうち、区画のわかるものは、92筆であった。

南北の小畦畔は4～9m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通していた。南北小畦畔の標高の高い西側と東側では1～2cm前後の比高差があった。確認は明瞭な耕作土の切れ目をもって行うことができた。畦畔基部が遺存したものである。幅約20～40cmで、高さは不明である。方位はほぼN-S～N-3°-Eであった。

東西の小畦畔は2～15m程度の間隔で設けられており、南辺坪界線に近づくほど狭くなっていた。方位はN-91°-Eをさしていたが、中央やや北側にはN-30°-W程度の傾きをもつものがあった。第3遺構面における古墳時代末から奈良時代初頭段階の坪型区画跡の地割が一部残存した可能性があるが、他の例と方位が異なり、具体的な遺構との関係は明らかにできなかった。東西小畦畔の標高の高い南側と北側では0～2cm前後の比高差があった。確認は耕作土の切れ目をもって行った。畦畔基部が遺存したものである。幅約15～20cmで、高さは不明である。

全体的には南北方向の小畦畔のつながりが強く、間隔を4mと極端に狭めてまで畦畔を貫通させている部分があった。南北方向の長地型類似の地割であったと思われる。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、坪型区画跡中央部では南北に長い長方形のものが多く、6×8m程度の規模であった。南辺坪界線付近では、東西に長い小区画水田跡となっており、2×4程度の小型の水田跡が目立った。南辺坪界線周辺ではAs-B層の堆積が厚く遺存状態がよかったが、小畦畔の検出方法は同じであり、通常の水田区画と異なる機能を考える必要がある。小区画水田跡の水田面の比高差は、南北で0～2cm、東西で2cm程度であった。

坪型区画内の水懸かりは、南北小畦畔に規制されており、東西小畦畔に設けられた水口をもって南から北への水流をを主体にしていたと考えられる。

水田面はAs-B火山灰降下後の復旧にともなう耕作によって一部削平されていたが、層厚2～10cm程度の

耕作土が遺存しており、無数の凹凸と馬蹄跡、人足跡を検出した。歩行状況は明確でなかった。

出土遺物は少量の土師器片を得たが図示できるものはなかった。

なお、中央付近を斜めに横切るSD128・129は、第3遺構面に属する溝跡であるが、第2遺構面で検出されており、ここでも図示しておいた。

第31号坪型区画跡(第79図)

G6・7グリッドにかけて検出した。第1遺構面では、断面調査によって北辺坪界線に大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模・坪界線の方位は不明である。

断面調査によれば、基本的な堆積層理および土壌層位は、現在の水田耕作土であるI層下に薄い鉄斑集積層が認められ、II-1'層、II-2'層、II-2''層、II-3'層、III層、IV-1層、IV-1'層、VII-2層、VII-2'層、VIII層であった。VIII層上面にはVII-2層水田跡による土壌化がおよび、マンガン結核集積層VII-2''層が認められた。

調査は、表層坪型区画の西側半分程度が関越自動車道下となり、東側部分には女堀川堤防が設置されていたため、北側の一部に限って行った。また、平成8年まで高さ1m以上の盛土が置かれており、平成8年度に調査となった部分である。

坪界線は、北辺にSD121を中央にもつ大畦畔を検出した。坪型区画跡の規模は計測できなかった。坪界線の方位は北辺がN-93°-Eであった。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線ではSD121を中央にもつ大畦畔を検出した。詳細は主要な用水供給先である第30号坪型区画跡に記述した。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

水田跡は、坪型区画跡内部に広く検出できた。

坪型区画跡内部は、南北および東西方向の小畦畔によって小区画水田跡に区画されていた。検出した小区

第79図 第31号坪型区画跡 (第2遺構面)



画水田跡のうち、区画のわかるものは55筆であった。

南北の小畦畔は5～8 m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通していた。確認は耕作土の切れ目をもって行ったが、明瞭ではなかった。このため、畦畔の規模は明らかにできなかった。方位はほぼN-1～3°-Eであった。

東西の小畦畔は5～6 m程度の間隔で設けられており、坪型区画内を貫通していた。確認は耕作土の切れ目をもって行ったが、明瞭ではなかった。このため、畦畔の規模は明らかにできなかった。方位はN-92～93°-Eをさしていた。

坪型区画跡内部の地割は畦畔の検出状況が明確でないため、判断できなかった。

小畦畔によって形成された小区画水田跡は、東西に長い長方形のものが多く、5×6～6×8 m程度の規模であった。

坪型区画内の水懸かりは、等高線から南北小畦畔に規制されたものと考えられるが、明らかにすることはできなかった。

出土遺物は少量の土師器片を得たが図示できるものはなかった。

VII 第3遺構面の遺構と遺物

概要

第3遺構面は、基本層序VI層をなす洪水砂層を取り除くことによって検出した。上層にはシルト層からなるV層をはさんで、平安時代の水田土壌IV層が存在していた。遺構面をなすVII層中からは古墳時代後期の土器が中心的に出土した。水田跡に引水した用水路跡と思われるSD54等の溝跡内部に堆積したVI層起源の砂層中にも、同時期の土器が出土することからみて、古墳時代後期以後に形成された遺構面であることがわかる。遺構面をなすVII層は、粘性の高いシルトを主体としており、2面の水田跡とこれともなう水田土壌が検出できた。VI層で埋没していたのは、VII-1層水田跡である。

調査は、第2遺構面で検出した坪形区画跡を単位として実施した。未買収地および調査時点で使用されていた水利関係施設を除き、できる限り面的に調査を行った。調査の主眼を、埋没遺構として検出できる水田跡の広範囲な景観復元、条里型地割の出現時期の把握、灌漑施設の状況、小区画水田跡の状況の諸点においた。

検出した主な遺構は次の通りである。

奈良時代後半～平安時代前半の坪型区画跡2筆、古墳時代末～奈良時代初頭の坪型区画跡3筆、古墳時代後期～奈良時代の溝跡27条、このうち、坪型区画跡周囲の坪界線にともなった用水路跡7条、坪型区画跡内部の小区画水田跡に引水するための小規模用水路跡3条、その他の溝跡16条、条里型地割をなさない小区画水田跡376である。

第3遺構面上面は、上層水田の耕作によって大部分が削平されていた。検出した遺構はほとんどが遺構の下部・痕跡であった。

坪型区画跡はいずれもVI層をまき込んで攪乱された上層水田土壌に覆われていたもので、VI層によって埋没したものはなかった。坪型区画跡は、四辺の坪界線をなす用水路跡をもって確認した。

奈良時代後半～平安時代前半の坪型区画跡では、坪

界線は一辺約109mで、方位をN-22°-WとN-68°-Eとするものであった。坪界線をなす用水路跡は底面に規則的な凹凸をもち、若干の蛇行を除きほぼ直線的な地割をなしていた。

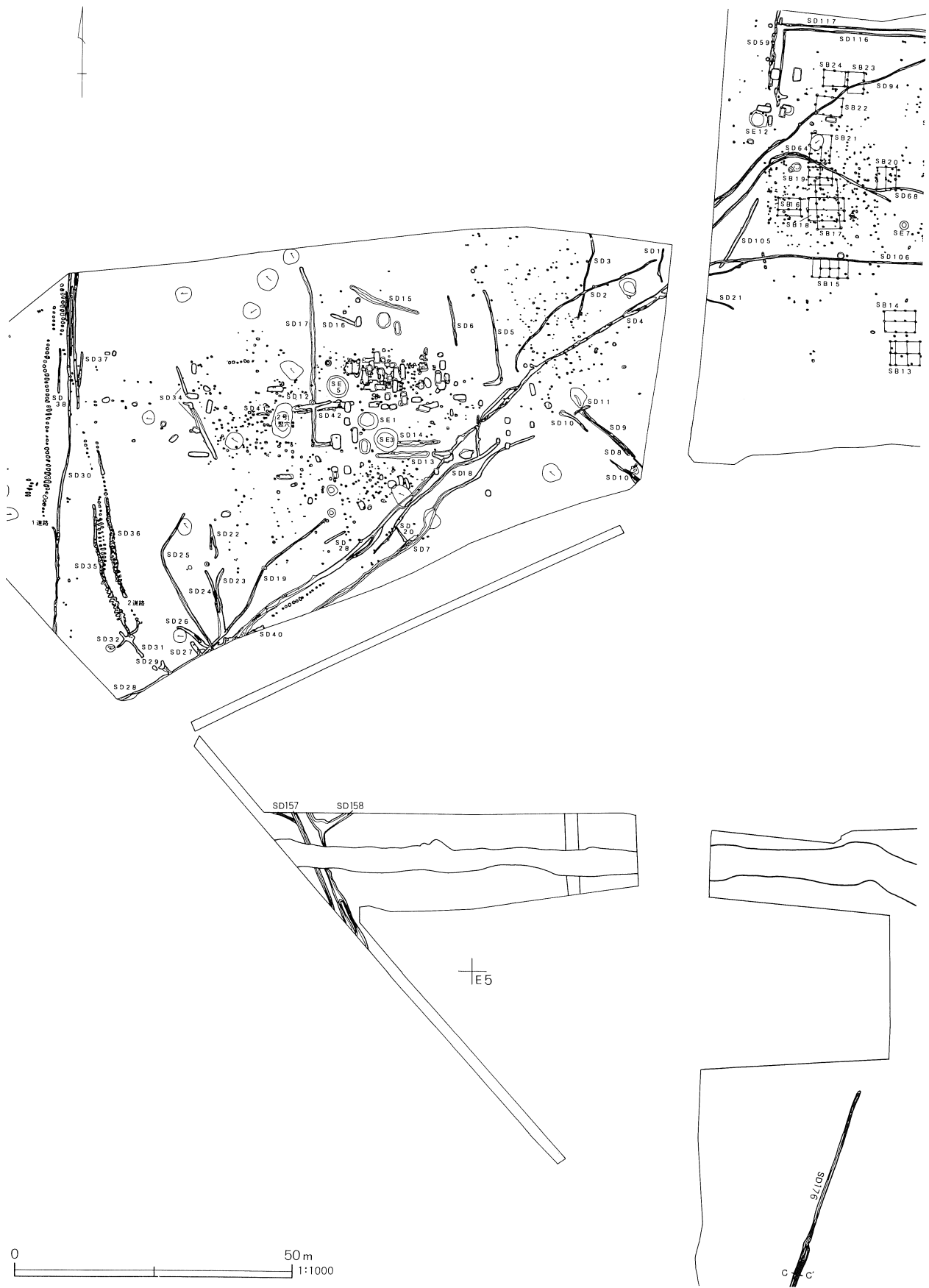
古墳時代末から奈良時代初頭の坪型区画跡は、坪界線は一辺約109mで、方位をN-17°-EとN-107°-Eとするものであった。坪界線をなす用水路跡は底面の一部に規則的な凹凸をもち、全く蛇行しない直線で地割していた。坪界線に存在する用水路跡は、いずれも幅20～50cmであったが、遺存状態のよい部分における深さは20cm前後であった。用水路跡の水流は南から北、西から東であった。出土遺物は、覆土内から土師器杯の完形品が点々と出土した。

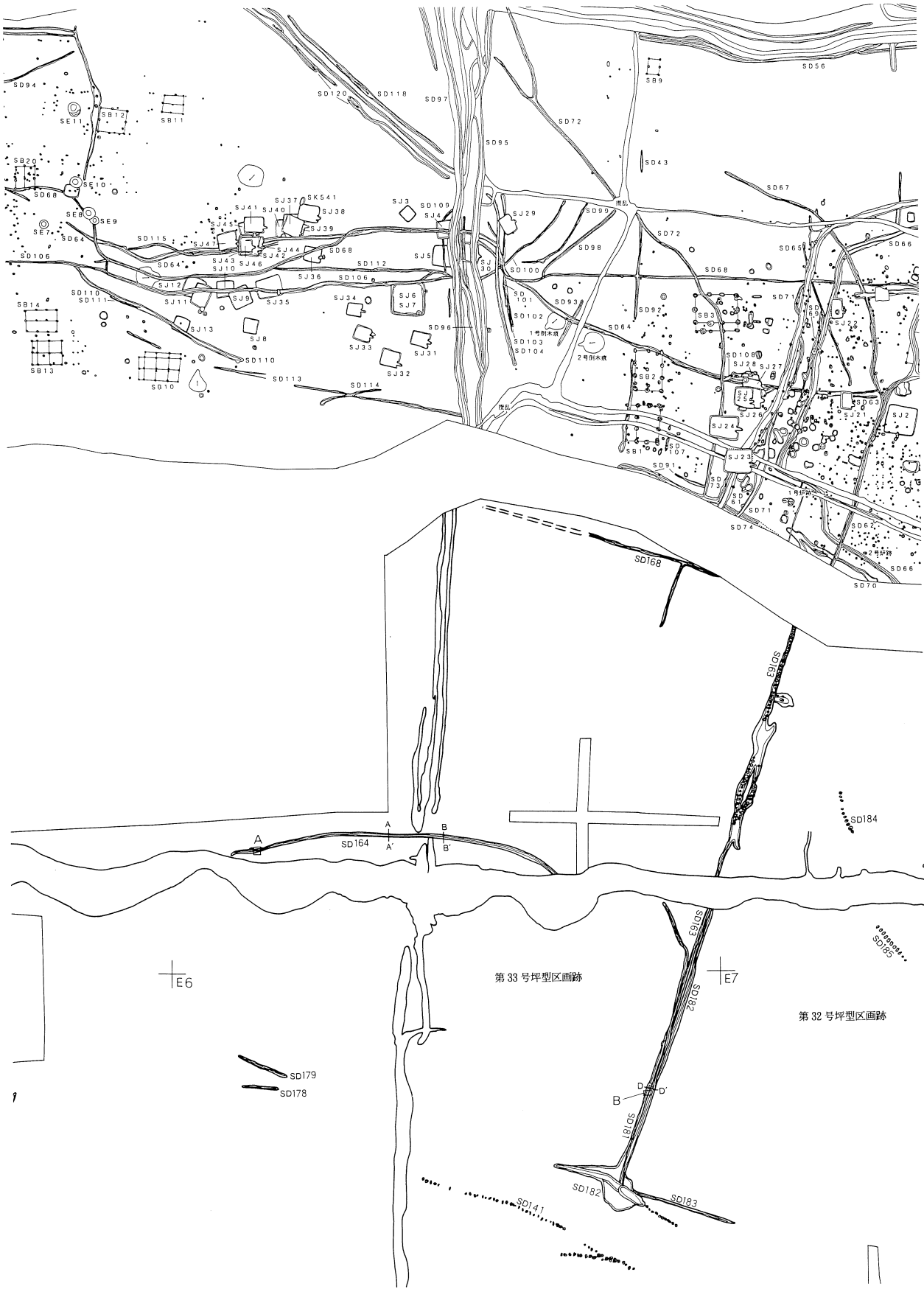
坪型区画跡内部の小区画水田跡を検出することはできなかった。また、いずれもともなう水田土壌をIV-1層水田跡の耕作によって破壊されていたため、地割の広がりを確認することはできなかった。

条里型地割をなさない小区画水田跡は、女堀川水系の増水もしくは洪水によってもたらされた砂層基本層序VI層によって埋没したもので、調査範囲中央のF4・G4グリッド付近でわずかに検出できた。一部には、水田面がよく遺存していたが、畦畔上部は上層水田による耕作で削平されていた。水田跡の区画は、耕作土の切れ目から判断できる畦畔基部か、耕作土の分布限界から把握できる段差として検出した。小区画水田跡の規模は2×3～3×5m程度であった。水田表面には、VI層で埋没した多くの凹凸を検出した。また、耕作土除去後には、床土上面において、小畦畔に沿ってならぶ鋤・鍬による耕作痕を検出した。

第3遺構面を覆うVI層は、幹線用水路跡SD54内部とその周辺に多く堆積していた。類似の堆積物は、大規模用水路SD89底面近くの覆土にも認められた。SD89は、調査範囲北西の本庄台地上面を画すように掘削された九郷用水北側支線の地割延長上に検出したもので、九郷用水の旧流路の一つであることがわかる。女堀川

第80図 第32・33号坪型区画跡（第3遺構面）





は調査できなかつたが、本来同一水系にあたるもので、女堀川水系の増水・洪水堆積物がSD89の流路にも流れ込み、調査範囲にもたらされたものと考えられる。

ただし、SD54底面から出土する土器とSD89底面の砂層から出土する土器には、四半世紀から半世紀の時期差があり、SD54を埋没させたVI層が、SD89底面付近の砂層より先に堆積したことがわかる。この相違は堆積土にも現れていた。SD54および同様のN-127-132-Eの地割をもつ幹線用水路跡には、いずれも上層に粘性の高い黒褐色のシルトが堆積していた。奈良時代前半以後の溝跡には、地神遺跡を含め、砂層のみが堆積しており、シルトの堆積は認められなかつた。SD89の掘削による用水量の増加を表すものと考えられる。SD54の地割は、SD89方向から取水するよう

1. 坪型区画跡

第32号坪型区画跡(第80・81図)

D7、E6・7グリッドにかけて検出した。第2遺構面の第28・29号坪型区画跡東部下層にあたる。

第3遺構面を覆うVI層がIV層中に攪乱されていたため、水田面は遺存していなかつた。表土除去はVII-2層およびVII-2'層上面とした。調査時点では、第4遺構面と同じ確認面となったが、図上で区別して示したものである。

坪界線はいずれも直線で構成され、北辺にSD168、南辺にSD163・181・183、西辺にSD163・181・182を検出した。坪型区画跡の規模は南北109~110m、坪界線の方位は北辺がN-107°-E、南辺がN-107°-E、東辺がN-17°-Eであった。平面形は、非常に整った1町方格であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線にはSD168を検出した。SD146の攪乱で一部に乱れがあるが、東へ傾斜する直線的な溝跡であった。覆土は黒色のシルトが中心であった。底面には若干の凹凸があった。検出面での上端幅20~40cm、下端幅20cm程度、深さ5~10cmであった。出土遺物は少

にみえ、SD89掘削以前に、若干水量の少ない幹線用水路SD89の前身が存在した可能性が高い。

さらに、SD54はG3・4グリッドにおいて古墳時代後期のSD5の地割を踏襲して流路を東西に変えていた。SD54脇には、小区画水田跡に対応する大畦畔も検出できており、VI層に覆われた小区画水田跡との同時性はほぼ確実である。小区画水田跡は古墳時代後期の地割をなしているものとしてよいだろう。時期的には古墳時代末までに埋没したものと考えられる。

以下に各遺構の状況を記述するが、溝跡、水田跡については、代表的なものに限定し、その他は第9・10表に譲るものとする。

なお、水田土壌VII-1層の広がり、西側の2グリッドと3グリッド境界付近まで連続していた。

量の土師器片を得たが、図示できるものはなかつた。西辺坪界線には、SD163・181・182を検出した。

SD163は、北側微高地に立地する地神遺跡SD62と同一の溝跡であり、直線的に延びていた。地神遺跡では東に膨らむ部分がみられるが、その要因は明らかにならなかつた。覆土は暗褐色~黒褐色のシルトが主体であったが、IV-1層水田跡による土壌化を受けて赤みを帯びてしまっていた。底面には規則的な凹凸があった。一つの穴に2つの小穴が横並びするもので、ピットに近い印象があった。検出面での上端幅約40~80cm、下端幅30~70cm程度、深さ5~20cmであった。SD163には、西から合流するようにみえる同規模の溝跡があった。黒褐色のシルトからなる覆土からみてSD164の延長の可能性もある。覆土では重複か合流かを判断することはできなかつた。同様の溝跡は、地神遺跡でも認められた。南西坪界線交点では、SD181・183に合流していた。出土遺物は古墳時代末頃の土師器杯片・甕片を得たが、図示できるものはなかつた。

SD181は、SD163に先行する溝跡で砂礫で埋没していた。直線的にのび、南西坪界線では第33号坪型区画跡南辺坪界線を東流し砂礫を覆土にもつ溝跡と直角に

合流していた。この溝跡の名称は延長であるとみなし、SD181とした。規模は、検出面での上端幅約30cm程度、下端幅15～20cm程度、深さ10cm程度であった。出土遺物は第97図61に示した古墳時代末頃の完形の土師器杯を得た。

SD182はSD163・SD181に先行する溝跡で、重複が認められた。覆土はシルト質細砂を主体としていた。地割は共通であった。南西坪界線では不自然な広がりがあり、西から東流する溝跡との合流点であったことがわかる。SD181は第33号坪型区画跡側から湾曲して合流していた。規模は、検出面での上端幅約30～40cm、下端幅20cm程度、深さ10cm程度であった。

南辺坪界線にはSD183を検出した。坪界線交点では不規則な広がりがあった。覆土は、暗褐色シルトであった。SD163と連続するものと思われる。規模は、検出面での上端幅約30～40cm、下端幅20cm程度、深さ10cm程度であった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層の攪乱のため内部の遺構は検出できなかった。

第33号坪型区画跡(第81図)

D5・6・7、E5・6・7グリッドにかけて検出した。第2遺構面の第28・29号坪型区画跡西部下層にあたる。

第3遺構面を覆うVI層がIV層中に攪乱されていたため、水田面は遺存していなかった。表土除去はVII-2層およびVII-2'層上面とした。調査時点では、第4遺構面と同じ確認面となったが、図上で区別して示したものである。

坪界線は、北辺にSD168、南辺にSD179・181、東辺にSD163・181・182を検出した。坪型区画跡の規模は南北109m、坪界線の方位は北辺がN-107°-E、南辺がN-107°-E、西辺がN-17°-Eであった。平面形は、非常に整った1町方格であったと考えられる。

溝跡・大畦畔

北辺坪界線にはSD168を検出した。直線的な溝跡であった。覆土は黒色のシルトが中心であった。底面には若干の凹凸があった。東辺坪界線をなすSD163から西へ22m程度の地点で南へ直角に分かれていた。地割の西延長上には地神遺跡SD21があった。後で詳述するSD89の延長上にあたるSD4から分流するもので、奈良時代以前の溝跡である。

東辺坪界線には、SD163・181・182を検出した。詳細は第32号坪型区画跡に記述した。

南辺坪界線には中央部でSD179を、南東坪界線交点ではSD181を検出した。SD179は、シルト質細砂で埋没していた。SD181と連続するものと思われる。南東坪界線交点では不規則な広がりがあり、細砂の面的広がりを検出した。水流の合流点であったと思われる。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層の攪乱のため内部に水田跡は検出できなかったが、SD168の南への分離から、坪型区画内部が南北方向に地割されていたと判断できる。

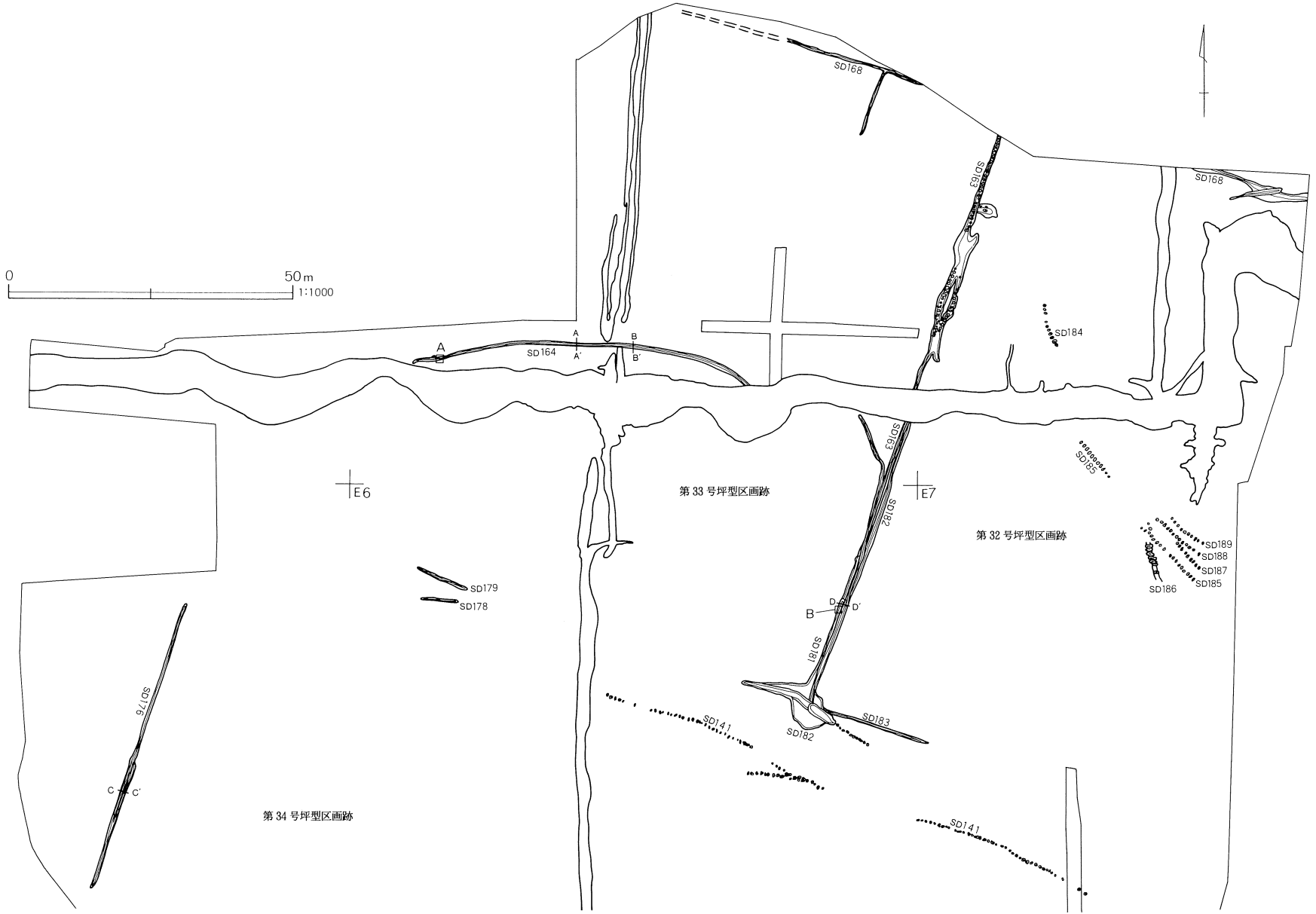
第34号坪型区画跡(第81図)

E5・6・7、F5・6グリッドにかけて検出した。第2遺構面の第23・24・29・30号坪型区画跡下層にあたる。

第3遺構面を覆うVI層がIV層中に攪乱されていたため、水田面は遺存していなかった。表土除去はVII-2層およびVII-2'層上面とした。調査時点では、第4遺構面と同じ確認面となったが、図上で区別して示したものである。

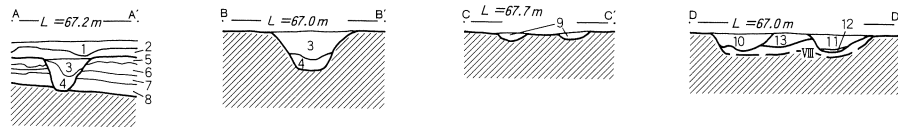
坪界線は、西辺にSD176、北辺にSD179・181を検出した。F6グリッド中央のSD128西側には、南辺相当位置付近にVII層で埋没した不自然な溝跡があったが、人為的な掘削の痕跡はみられなかった。南辺坪界線付近の土壌化による痕跡であろう。坪型区画跡の規模は計測できなかったが、およそ東西で109m、坪界線の方位は北辺がN-107°-E、西辺がN-17°-Eであった。平面形は、非常に整った1町方格であったと考えられる。

第81图 第32~34号坪型区画迹 (第3遗構面)

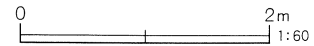
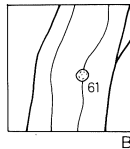
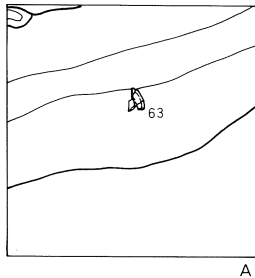




第82図 第3遺構面土層図(1)



- | | |
|------------------------------------|---|
| 1 暗褐色 10YR3/3 砂礫 土器片 亜円礫多 | 8 にぶい黄褐色 10YR5/3 IV層対応の粘土 |
| 2 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 水田耕作土 | 9 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト As-C多 VII層粒少 VII層小ブロック SD176 |
| 3 黒褐色 10YR2/3 シルト | 10 暗褐色 10YR3/3 砂礫 土器片 亜円礫多 1層に同じ SD181 |
| 4 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト | 11 暗褐色 10YR3/3 シルト 古墳時代前期包含層 As-C少 SD163 |
| 5 黒色 10YR2/1 シルト 水田耕作土 3層が土壌化したもの | 12 褐色 10YR4/4 シルト質細砂 As-C多 VII層ブロック多 SD163 |
| 6 黒褐色 10YR2/2 シルト 3層が土壌化したもの 鉄斑集積層 | 13 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 VII層粒少 |
| 7 黒褐色 10YR2/2 シルト 薄い有機質クロスラミナ | |



溝跡・大畦畔

北辺坪界線にはSD179・181を検出した。詳細は第33号坪型区画跡に記述した。

西辺坪界線にはSD176を検出した。直線的な溝跡であった。細砂質シルトで埋没していた。覆土はSD163と類似していたが、底面には目立つ凹凸はなかった。一部で2条を検出したが、重複の可能性もある。覆土はほとんど同じで区別できなかった。規模は、検出面での上端幅約30cm、下端幅約20cm、深さ5cm程度であった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層の攪乱のため内部に水田跡は検出できなかったが、東に延びるSD141を検出した。規則的な凹凸の列によって底面付近を検出したものである。東辺坪界線相当位置で、地割に乱れがあり、2条が重複していた。覆土はともに細砂で区別できなかった。SD179・181によって構成される北辺坪界線から10m程度の位置に並行して延びていた。坪界線交点に移動があり、異なる時期の坪界線を検出したものか、坪型区画内部が東西に地割されていたことを示すものか判断できなかった。

第35号坪型区画跡(第81図)

E 6・7、F 6・7グリッドにかけて検出した。第

2遺構面の第24・30号坪型区画跡下層にあたる。

第3遺構面を覆うVI層がIV層中に攪乱されていたため、水田面は遺存していなかった。表土除去はVII-2層およびVII-2'層上面とした。調査時点では、第4遺構面と同じ確認面となったが、図上で区別して示したものである。

第3遺構面に属すると思われる溝跡のうち、第32-34号坪型区画跡の地割にのらず、特定の方位をさすものがあった。D 4-E 4グリッドに延びるSD157・158は、東辺坪界線をなすSD186と並行しており、N-22°-Wをさしていた。SD186との距離は223m程度であった。F 6-7グリッドで検出したSD128・129はこれらと直角をなすN-67~68°-Eであり、SD186北端の最も深い部分まで109mであった。第2遺構面で検出した第24号坪型区画跡北東部の変形地割は、N-22°-W程度であった。これらの溝跡は整った方格地割であると判断できる。

この方格地割をもって、第35号坪型区画跡を認定した。坪界線は南辺をSD128・129、東辺をSD186とすると、北側に深くなり消滅するSD186の検出状況と、坪界線交点の合流点でもっとも深くなる他の坪型区画跡における用水路跡一般の特徴とが一致する。坪型区画跡の規模は、SD186北端から南辺坪界線まで109m、

南辺がN-67~68°-E程度、東辺がN-22°-W程度であった。この坪型区画跡は、SD128・129の南西端に西辺坪界線があたることになり、状況証拠としても十分である。整った条里型地割であるといつてよい。

溝跡・大畦畔

SD128・129は、ともに細砂で埋没していた。底面には凹凸がみられ、特にSD128は規則的で深いピット状の凹凸であった。地割は直線的であるが、若干の蛇行があった。SD128の規模は明確にできなかったが、SD129は、検出面における上端の幅20~40cm、下端の幅10~30cm、深さ10~15cmであった。出土遺物はなかった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層の攪乱のため内部に遺構は検出できなかった。

第36号坪型区画跡(第81図)

E 6・7、F 6・7グリッドにかけて検出した。第2遺構面の第24・30号坪型区画跡下層にあたる。

第3遺構面を覆うVI層がIV層中に攪乱されていたため、水田面は遺存していなかった。表土除去はVII-2層およびVII-2'層上面とした。調査時点では、第4遺

2. 溝跡

第89号溝跡(第83~85・95・96図)

E 2・3グリッドで検出した。

今井条里遺跡の調査範囲北部には、本庄台地上面が微高地として露出していた。今井条里遺跡内で検出した古墳時代前期の集落跡や、地神・塔頭遺跡のほか、北廓遺跡などが立地する地区である。SD89は、南部に広がる低地的景観の水田域と、北部の台地との境界部分に掘削されていた。地形図に照らせば、自然地形に沿ったものであることがわかる。現況では、神流川から引水する九郷用水北側支流の延長上にあたり、水田区画や道路として地割が遺存している。

検出した溝跡は、上端の幅5~7m、下端の幅1m程度、深さ0.8~1.1mで、ほぼ直線的な地割であった。

構面と同じ確認面となったが、図上で区別して示したものである。

東側で検出した第35号坪型区画跡を含む条里型地割と、第2遺構面で検出した第24号坪型区画跡北東部の変形地割から認定した。南辺坪界線にSD128を検出した。坪型区画跡の規模は不明で、坪界線の方位は、南辺が、N-67~68°-Eであった。また、第24号坪型区画跡の地割方向は、これと直交するN-22°-W程度であった。

溝跡・大畦畔

SD128は、底面に規則的な凹凸をもつ溝跡で、覆土からみて第35号坪型区画跡南辺坪界線をなすSD128と同一の溝跡であると思われる。しかし、上層条里型地割の例では、坪型区画跡が異なる場合、連続しない場合が多く、明確な関係はつかめなかった。若干の湾曲があった。

坪型区画跡内部の地割・水田跡

上層の攪乱のため内部に遺構は検出できなかった。

なお、遺構確認面から奈良時代に属する土師器杯片が出土したが、図示できるものではなかった。

断面調査では、2回以上のの浚渫の痕跡があった。As-B層は、2度目の浚渫後、溝跡の埋没過程で上層に堆積していた。覆土の大半は砂礫や砂層で、長さ1m程度のクロスミナが発達していた。速度の速い多量の流水があったことがわかる。上端には水口の痕跡がみられた。大規模な用水路跡である。

大規模な溝跡を埋めている覆土の砂層は、SD89の掘削によって、多量の水流が確保されたが、上流の河川の増水・洪水時に多量の土砂がもたらされるようになったことを示している。

出土遺物は、覆土の全体から多量の土師器片・須恵器片を得ることができた。特に、SD111水口付近では、多量の土師器杯が出土した。第96図は、すべてこの付

近から出土したものである。他に馬歯5本が出土した。

SD89の掘削時期は、出土遺物、地割のほか、両岸上端には、酸化鉄集積層IV-1層による大畦畔と耕作土IV-1層が、覆土上層にはAs-B層が認められたことから、奈良時代前半までに掘削され、12世紀まで機能していたと考えられる。なお、地神遺跡SD2・4・7は、奈良時代のSD89延長にあたるものと思われる。平安時代前半以後は、地割の直線上に連続する溝跡は検出できなかった。水量、覆土、および位置関係からみて、連結点は関越自動車道の下となっており検出できなかったが、第2遺構面で検出した大規模用水路跡SD146に流路を変更したと考えられる。

第53・54・55号溝跡(第86～89図)

F2グリッド南東部からG3・4グリッドで検出した。断面調査における重複関係から、SD54、SD55、SD53の順に掘削されたことがわかる。覆土は最も深い部分で観察すると、いずれも底面付近にクロスラミナのある中・粗砂まじりの細砂が厚く堆積しており、上層がシルト質細砂となっていた。かなりの速度の水流があったことがわかる。北西方向の本庄台地上面微高地から、G4グリッドで検出したVII-1層水田跡に引水していた。水流方向は南東流であった。幹線用水路跡である。いずれも同一の地割、共通の覆土をもっており、取水もとの用水から多量の土砂がもたらされたことによる埋没後に、復旧のため掘り直されたものであろう。2度の大規模な増水があったことがわかる。取水元がSD89延長上に向いており、覆土が類似していることから、SD89から取水したものであると考えられるが、G4グリッドのSD54大畦畔脇底面から出土した土師器杯(第97図62)が、SD89出土の土師器よりも四半世紀から半世紀程度古いものであること、SD54～55断面上層に暗褐色の細砂質シルトが堆積しているなど、水流の停滞がみとめられること、地神遺跡を含めてSD89と同時期以後の遺物を出土する溝跡が、すべて砂層主体で埋没していたことは、SD89以前に、水量のやや少ない幹線用水路が存在していたことを示している。SD89

周辺にVI層堆積がないことは、VI層以前のSD54、以後のSD89という時期差を傍証している。規模は確認面上端の幅50～100cm、下端の幅20～80cm、深さ30cm程度であった。

G4グリッドに至りN-127～132°-E程度の直線的な地割から、N-95°-E程度の直線的な地割となる。これは、この部分で、第4遺構面におけるSD5・6の地割上にのるためである。G4グリッドでは、SD54の南側上端に大畦畔が検出でき、これにともなう小区画水田跡の広がりを捉えることができた。

出土遺物は、第97図62以外にSD54・55から古墳時代末に属する少量の土師器杯片等を得た。SD55出土遺物には図示できるものはなかった。

F3グリッドで並行するSD51からも同時期の土師器片が得られており、N-127～132°-E程度の地割が古墳時代後期以後のものであったことがわかった。

第157・158号溝跡(第80図)

D4・E4グリッドで検出した。N-22°-Wの方位をもった直線的な地割であった。地神遺跡SD25と同一地割線にのっていた。第35・36号坪型区画跡を含む坪並をなす条里型地割を構成するものと考えられる。覆土は細砂が主体であった。SD89延長上の地神遺跡SD4他から取水し、南東流する用水路跡であったと考えられる。

出土遺物はなかった。

第164号溝跡(第80・82・97図)

D6グリッドで検出した。黒褐色のシルトを主体とした覆土で埋没していた。第33号坪型区画跡内部を条里型地割と無関係に、湾曲する地割をなして掘削されていた。断面形は、壁上方が開き、下方が直立しており、確認面での上端幅60～70cm、下端幅20cm、深さ30～40cmであった。幅に対して深いことが特徴的であった。用水路跡と思われるが、詳細を明らかにすることはできなかった。出土遺物は第97図63に示した内屈口縁の土師器杯のほか、少量の土師器片を得た。

第184・185・187～189号溝跡(第81図)

D7・E7グリッドで検出した。底面に規則的なピット状の凹凸列をもつ溝跡であろう。底面付近を確認したものである。覆土はいずれも細砂であった。第35・36号坪型区画跡がのる条里型地割坪界線交点想定位置に近いが、関係は明らかにできなかった。

第194号溝跡(第87・88図)

3. 水田跡(第90～94図)

F4・G4・H4グリッドにかけて広く検出できた。女堀川およびSD54周辺では、上層にVI層が確認できた。女堀川近くのH4グリッドでは、VI層で埋没した小区画水田跡3筆を検出することができた。水田跡の構成土壌は、水田耕作土がVII-1層、直下の床土層には酸化鉄が集積しており、これをVII-1'層、さらに下方にはマンガン結核層VII-1''層が認められた。

水田跡は、N-S～N-14°-E程度の方位をもつ小畦畔と、N-97°-E程度の方位をもつ小畦畔によって構成されていた。基本的に小区画水田跡からなり、規則的な大区画は認められなかった。

検出できた小区画水田跡は、区画のわかるもので376筆であった。1筆の規模は2×2～3×5m程度であった。水田面の比高差は、埋没水田跡として検出したSN375周辺で、南北方向で0～1cm、東西方向で2cm程度であった。水懸かりは主に南北の小畦畔に規制されており、南から北を主とし、東西の小畦畔に水口を設け、用水を取り回していた。

埋没水田跡SN375の水田面には多数の凹凸が検出できた。耕作土は層厚2～10cmであった。耕作土を除去し床土表面を観察した結果、東西方向の小畦畔際に規則的に並ぶ耕作痕を検出した。耕作痕は一方が深く切り込まれ、他方がなだらかに傾斜するもので、鋤もしくは鍬による耕起跡と考えられる。幅約12cmであった。

主な灌漑施設は、検出された水田域の中央をとおりSD54であった。耕作土切れ目として検出した大畦畔基部の外側には、小区画水田跡が広がっており、直接引

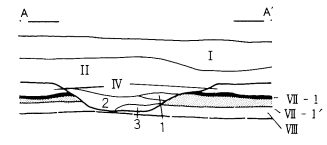
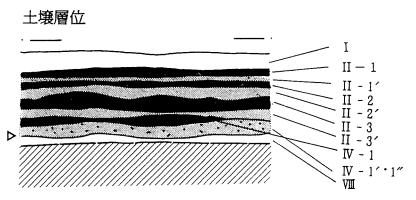
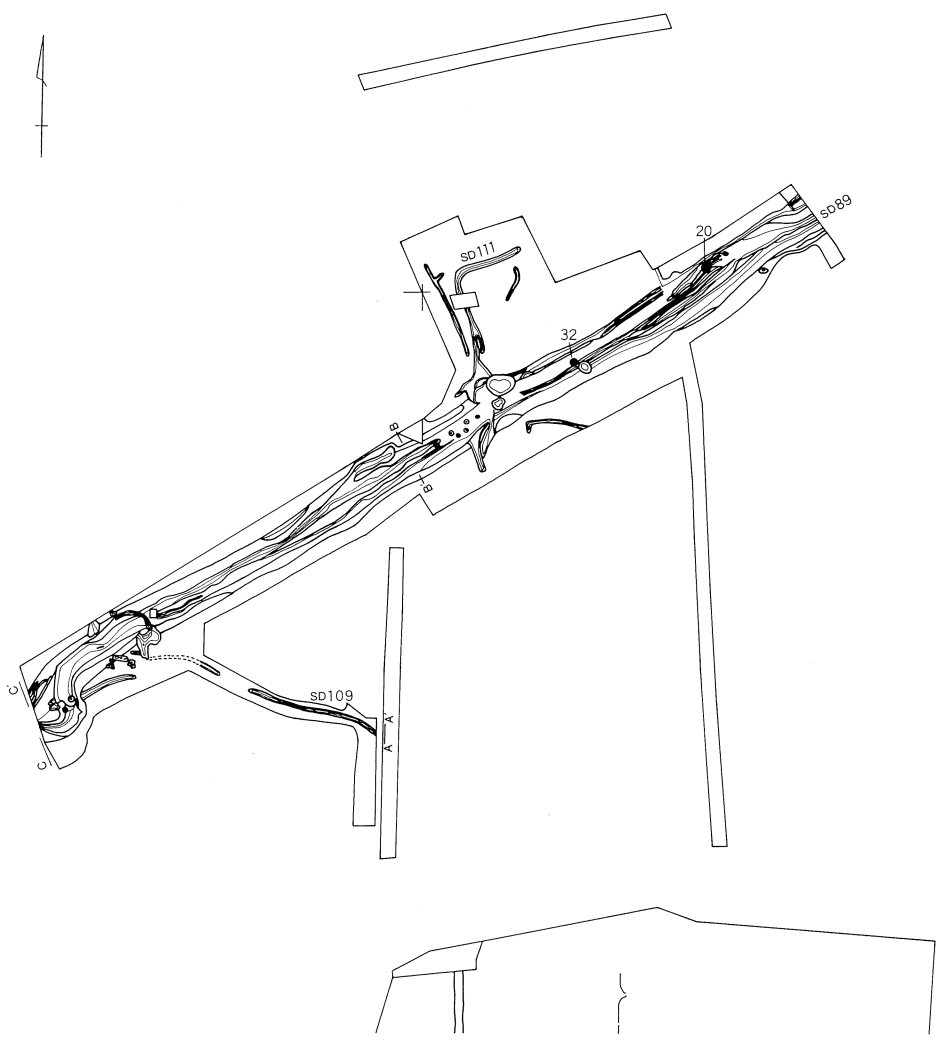
H3・4グリッドで検出した。N-60°-Eの地割をもっており、底面に規則的なピット状の凹凸があった。第2遺構面に現れていたものであるが、他の溝跡の状況からみて、第3遺構面で報告した。地割方向が共通するのは、SD89、SD89延長である地神遺跡SD4で、距離にして約280mの間隔をおいて並行していた。しかし、SD89に並行する条里型地割の存在は確認できなかった。

水したものと思われる。H4グリッドでは、SD86およびSD85を中央にもつ畝畝が検出できた。SD86をもつ畝畝は、蛇行しており、先端は水田跡に引水して止まっていた。SD85をもつ畝畝は直線的に伸びており、小区画水田への水口が認められた。

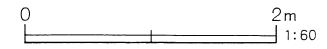
F4グリッドでは、中央付近に不自然に小さい水田が集中していた。等高線を利用して調査すると、もっとも小さい区画の水田跡が帯状に北に連なる部分が極端に低くなっていた。これは、第4遺構面において検出したSD11に影響されたもので、SD11上部の水田跡が覆土の圧密化によって沈下したものである。小畦畔がつまっており、沈下は水田跡経営時には、すでにあったことがわかる。

出土遺物は、SN375耕作土上面から古墳時代末頃の土師器内屈口縁杯片を得たほか、水田耕作土中から土師器小片を少量検出したが、図示することはできなかった。

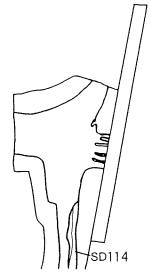
水田跡の時期は、主要な灌漑水路跡SD54出土の土師器杯(第97図62)、古墳時代末から奈良時代初頭の出土遺物をもつ第33～34号坪型区画跡によって構成される条里型地割が形成されていないこと、第4遺構面における7世紀前半の土器を出すSD94・95の一部の地割(SD5・6)をSD54が踏襲していることからみて、古墳時代後期のうちに求めるのが妥当である。小区画水田跡の特徴も、条里型地割にともなう水田跡より、古墳時代の様相に符合している。



- 1 粗砂 色はVIIと同じ 土器片 礫(5mm φ) 多
- 2 細砂 色はIIと同じ As-B 少
- 3 細砂質シルト 色はIIと同じ VIII層ブロック多



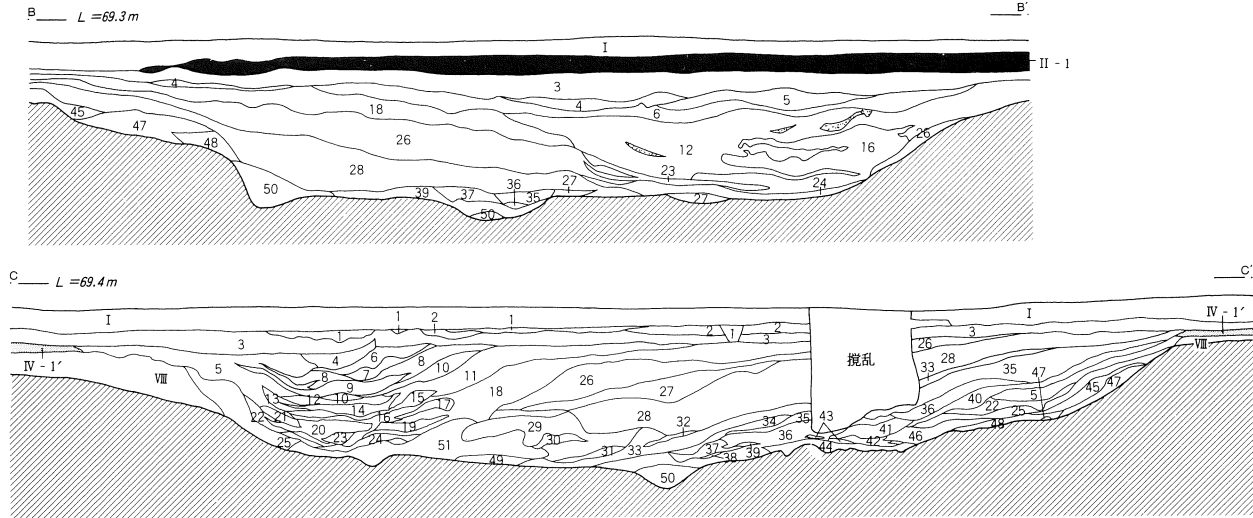
E4



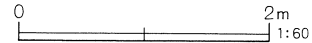
F4



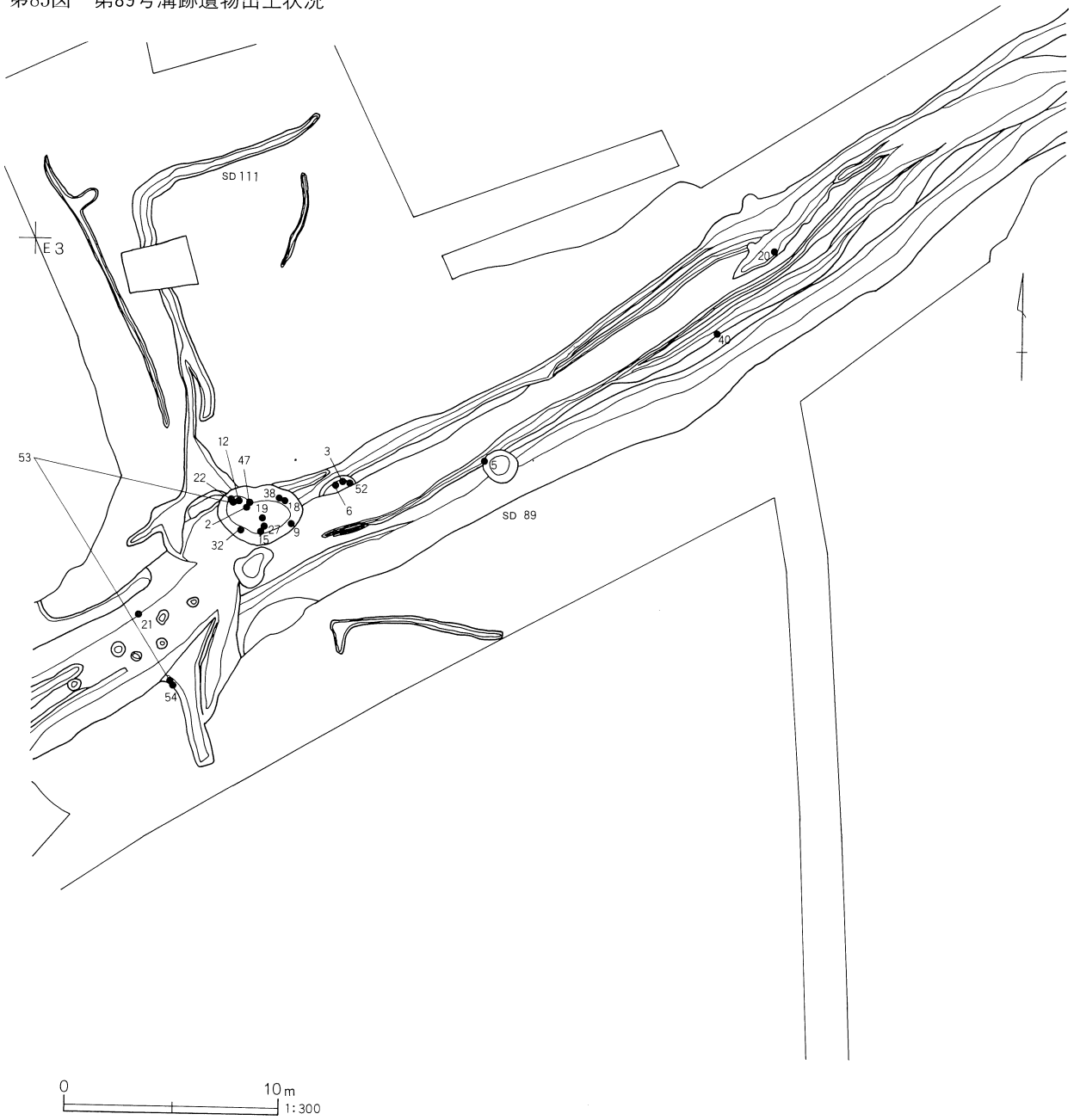
第84図 第89号溝跡土層図



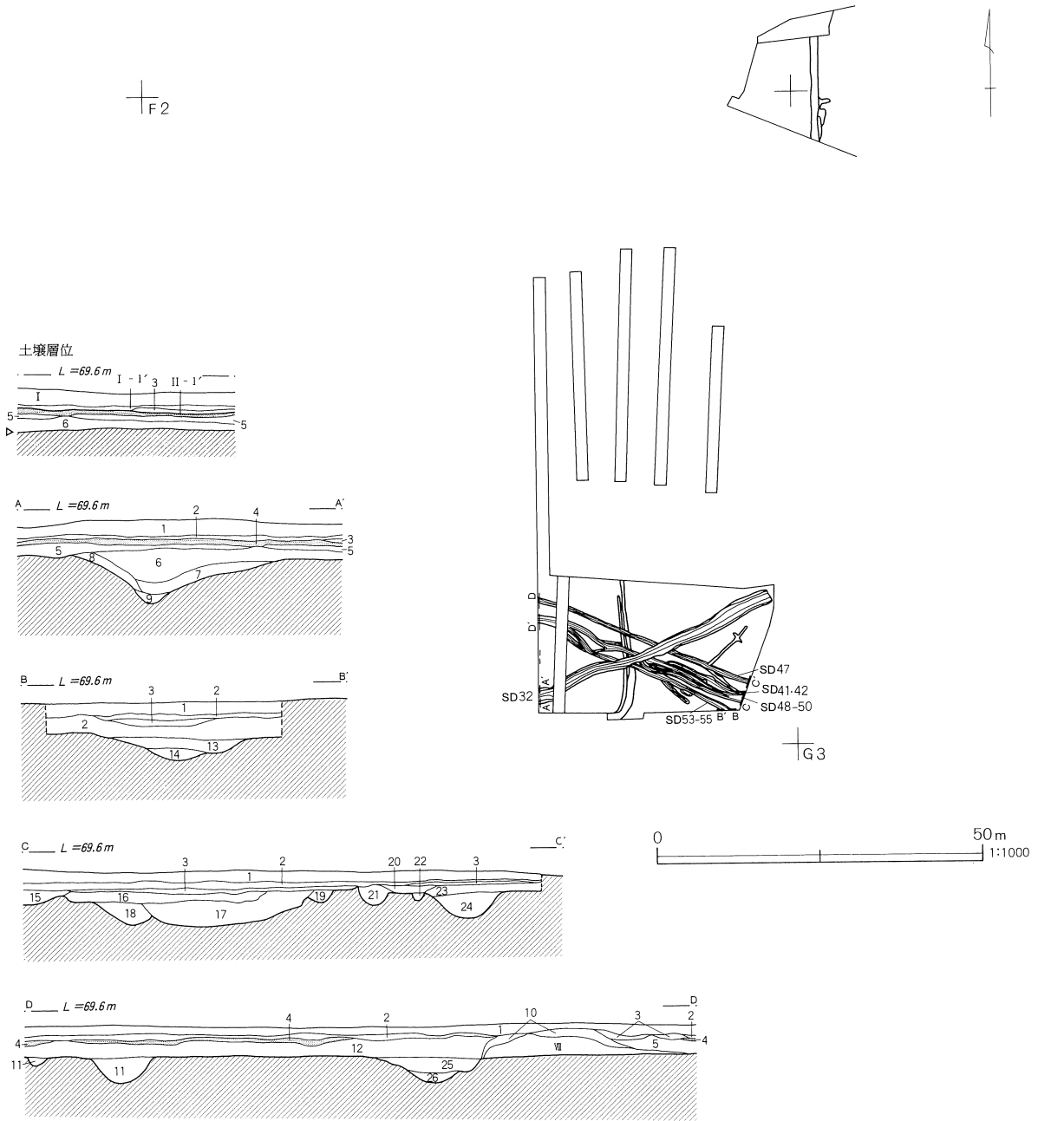
- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色 10YR3/2 火山灰まじりシルト As-A 火山灰 酸化鉄結核多 | 27 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 |
| 2 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 近世～現代の耕作土 | 28 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多 |
| 3 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 水性堆積土 酸化鉄結核多 マンガン斑多 | 29 にふい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多 小礫 |
| 4 暗褐色 10YR3/4 砂 水性堆積土 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 30 灰黄褐色 10YR4/2 砂礫 酸化鉄結核少 マンガン斑少 |
| 5 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 31 灰黄褐色 10YR4/2 砂礫 酸化鉄結核少 小礫 |
| 6 にふい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 32 にふい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核少 細砂 |
| 7 褐色 10YR4/4 砂礫 酸化鉄結核少 マンガン斑少 小礫 | 33 褐色 10YR4/4 粗砂まじりシルト 酸化鉄結核少 細砂 |
| 8 黒褐色 10YR3/2 粗砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多 | 34 にふい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核少 細砂 |
| 9 にふい黄褐色 10YR4/3 砂礫 As-B 少 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 35 褐灰色 10YR4/1 砂 酸化鉄結核少 粗砂 |
| 10 褐色 10YR4/4 細砂質シルト As-B 多 酸化鉄結核 マンガン斑多 | 36 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 炭化物少 |
| 11 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多 | 37 灰黄褐色 10YR4/2 砂 赤色火山灰少 酸化鉄結核少 |
| 12 にふい暗褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 38 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 炭化物少 |
| 13 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑少 | 39 灰黄褐色 10YR4/2 砂 酸化鉄結核 マンガン斑少 炭化物 |
| 14 灰黄褐色 10YR4/2 砂礫層 酸化鉄結核多 マンガン斑少 小礫多 | 40 にふい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑少 |
| 15 にふい黄褐色 10YR4/3 砂礫 酸化鉄結核多 マンガン斑少 小礫少 | 41 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑少 小礫少 |
| 16 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 42 にふい黄褐色 10YR4/3 砂礫 酸化鉄結核多 マンガン斑少 |
| 17 暗褐色 10YR3/3 砂 酸化鉄結核 マンガン斑少 | 43 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 細砂 |
| 18 黒褐色 10YR2/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑多 炭化物少 | 44 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 炭化物少 |
| 19 暗褐色 10YR3/3 砂 酸化鉄結核少 マンガン斑少 | 45 褐灰色 10YR4/1 細砂質シルト 酸化鉄結核 マンガン斑多 |
| 20 暗褐色 10YR3/3 砂礫 酸化鉄結核少 小礫多 | 46 にふい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト 酸化鉄結核多 細砂多 |
| 21 にふい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核少 粗砂 細砂 | 47 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑少 |
| 22 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑多 | 48 にふい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核少 マンガン斑少 |
| 23 灰黄褐色 10YR4/2 砂 | 49 暗褐色 10YR3/4 シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑多 炭化物 |
| 24 灰暗褐色 10YR4/2 砂礫 酸化鉄結核少 小礫少 | 50 暗褐色 10YR3/4 砂礫 |
| 25 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 酸化鉄結核 マンガン斑多 | 51 暗褐色 10YR3/4 砂礫 土器片 |
| 26 黒褐色 10YR3/1 細砂質シルト 酸化鉄結核少 マンガン斑多 | |



第85図 第89号溝跡遺物出土状況



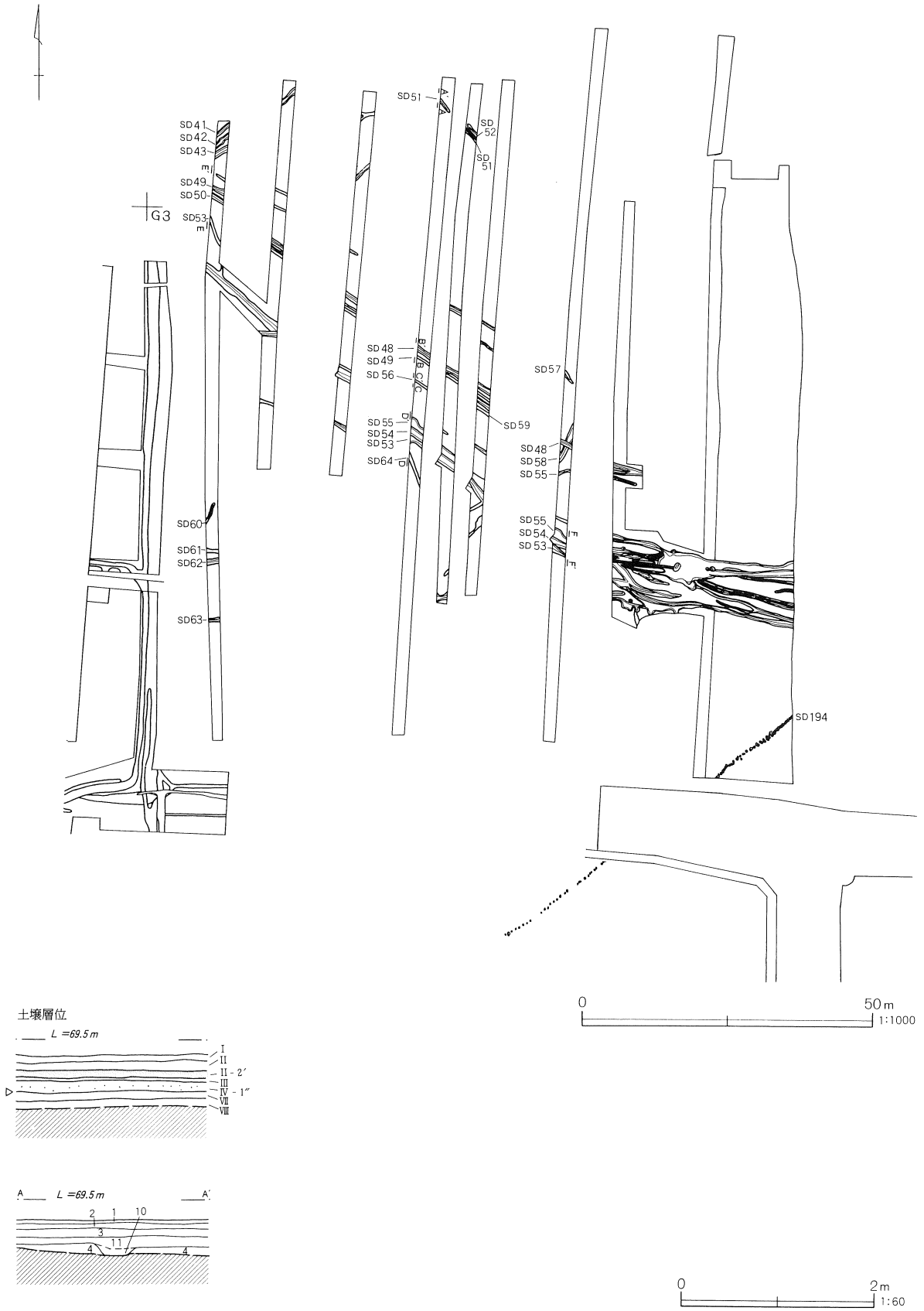
第86図 F2グリッド周辺第3遺構面



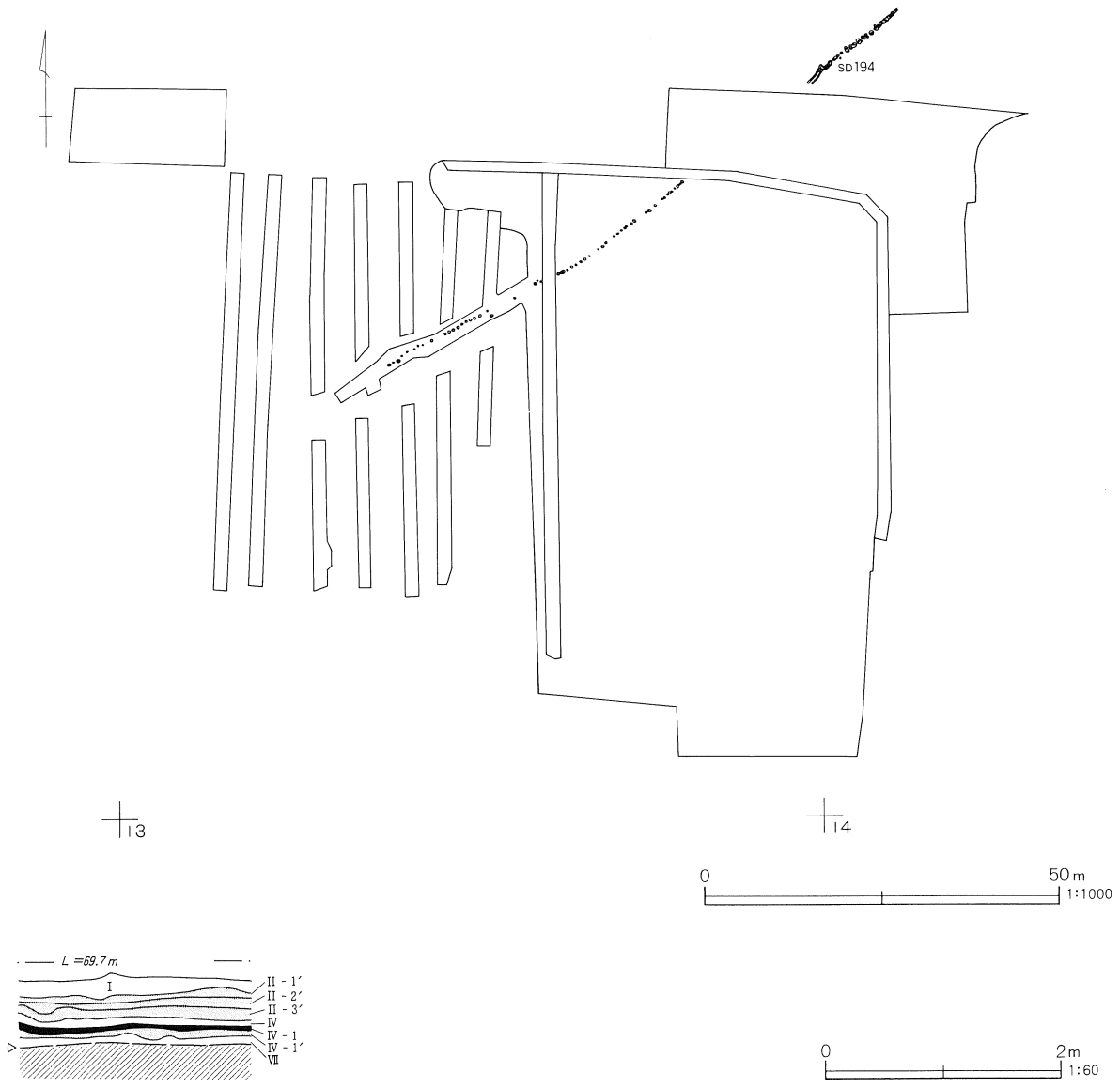
- | | |
|--|--|
| 1 黒褐色 2.5Y3/2 火山質シルト 現代耕作土 基本層序のI層 | 15 暗オリブ褐色 2.5Y3/3 シルト VIII層粒多 |
| 2 暗褐色 10YR3/3 火山質シルト 現代水田酸化鉄集積層 基本層序のII層 | 16 黒褐色 2.5Y3/2 細砂質シルト VIII層粒多 As-B少 |
| 3 暗灰黄色 2.5Y4/2 火山灰 As-A純層 | 17 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト |
| 4 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質火山灰 天明期水田酸化鉄集積層 As-A多含
基本層序のII-1'層 | 18 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 |
| 5 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 基本層序のVII~VIII層対応 | 19 暗褐色 10YR3/3 シルト質粘土 VIII層粒 酸化鉄結核多 マンガン斑多 |
| 6 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト As-C含 | 20 黒褐色 10YR2/2 シルト質細砂 VIII層粒少 |
| 7 黒褐色 10YR3/2 粗砂質シルト VIII層ブロック | 21 暗褐色 10YR3/3 シルト質粘土 19層に似るがVIII層粒 VIII層小ブロック多含 |
| 8 黒褐色 10YR3/2 粗砂質シルト VIII層ブロック 砂礫 | 22 黒褐色 10YR2/2 細砂質シルト 20層に似るがVIII層粒 VIII層小ブロック多含 |
| 9 黒褐色 10YR2/3 砂礫 細~粗砂主体 鉄分凝着 礫多 | 23 暗褐色 10YR3/3 シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多含 |
| 10 にぶい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 4層を盛土した天明期畦畔 | 24 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 小礫多含 |
| 11 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト VIII層粒子少 | 25 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 VIII層粒少 |
| 12 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂 天明期水田床土 | 26 暗褐色 10YR3/3 シルト質粗砂 クロスラミナ発達 VIII層粒多 小礫多 |
| 13 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 VIII層ブロック少 | |
| 14 黒褐色 10YR3/2 砂礫 粗砂主体 | |

0 2m 1:60

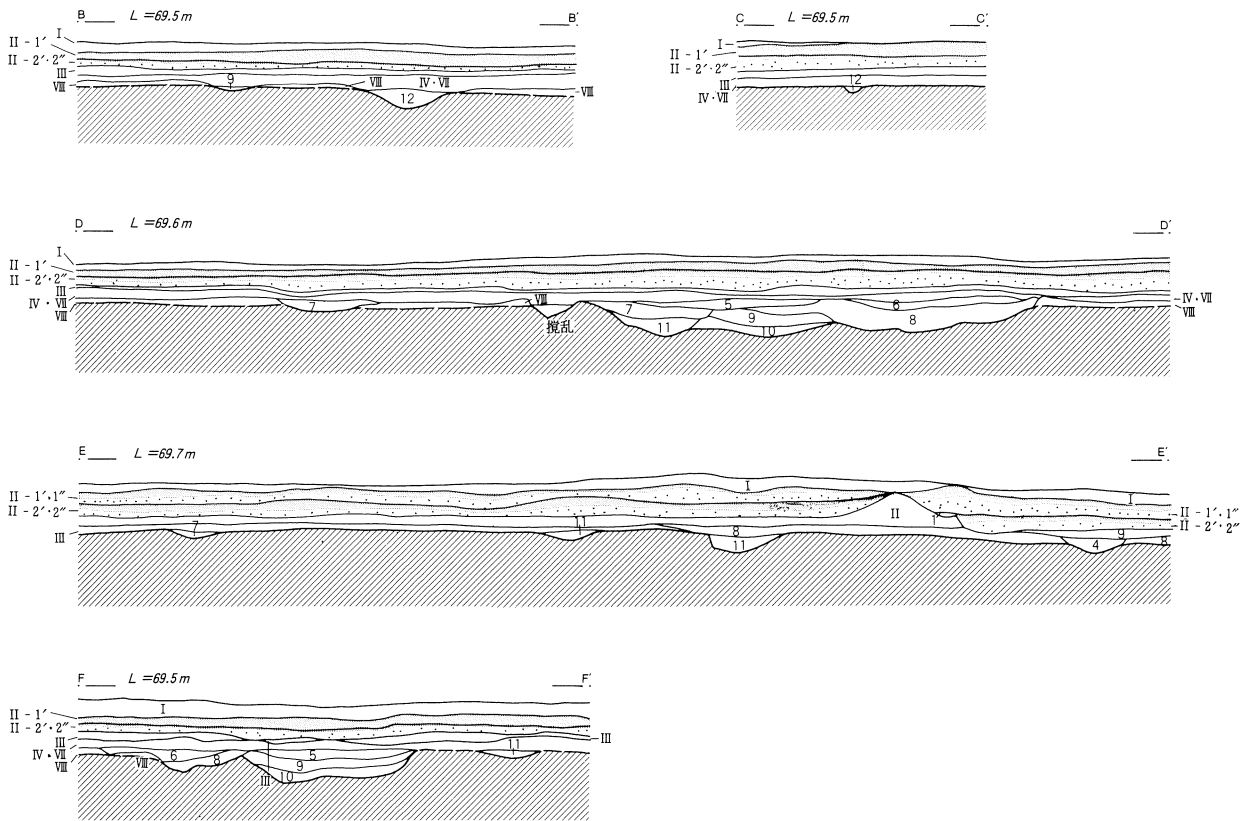
第87図 G 3 グリッド周辺第3遺構面



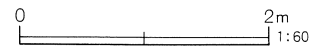
第88図 H 3 グリッド周辺第3遺構面



第89図 第3遺構面土層図(2)



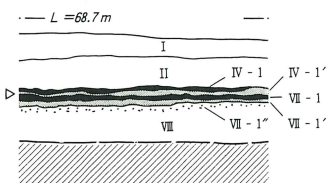
- 1 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質火山灰 As-A 降下時の糸里型水路 As-A 主体
- 2 黒褐色 2.5Y3/2 細砂質シルト 小礫
- 3 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト As-B 降下時の畦の一部 マンガン結核
- 4 暗褐色 10YR3/2 細砂質シルト 小礫 細砂
- 5 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト VIII層粒少
- 6 黒褐色 2.5Y3/2 シルト質細砂 VIII層粒少
- 7 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 細砂主体 小礫少 VIII層粒少
- 8 暗褐色 10YR3/3 シルト質粗砂 クロスミナ発達 VIII層粒多 小礫多
- 9 黒褐色 10YR3/1 シルト質細砂 VIII層粒多
- 10 黒褐色 10YR3/2 細砂 水性堆積 礫少
- 11 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 水性堆積
- 12 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト VIII層ブロック多 15層の流入



第90図 F 4 グリッド周辺第3遺構面



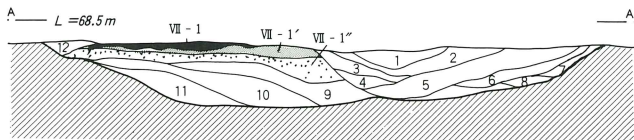
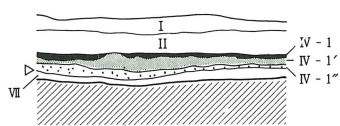
土壤層位



第91図 G 4 グリッド周辺第3遺構面



土壤層位
— L = 69.0m —



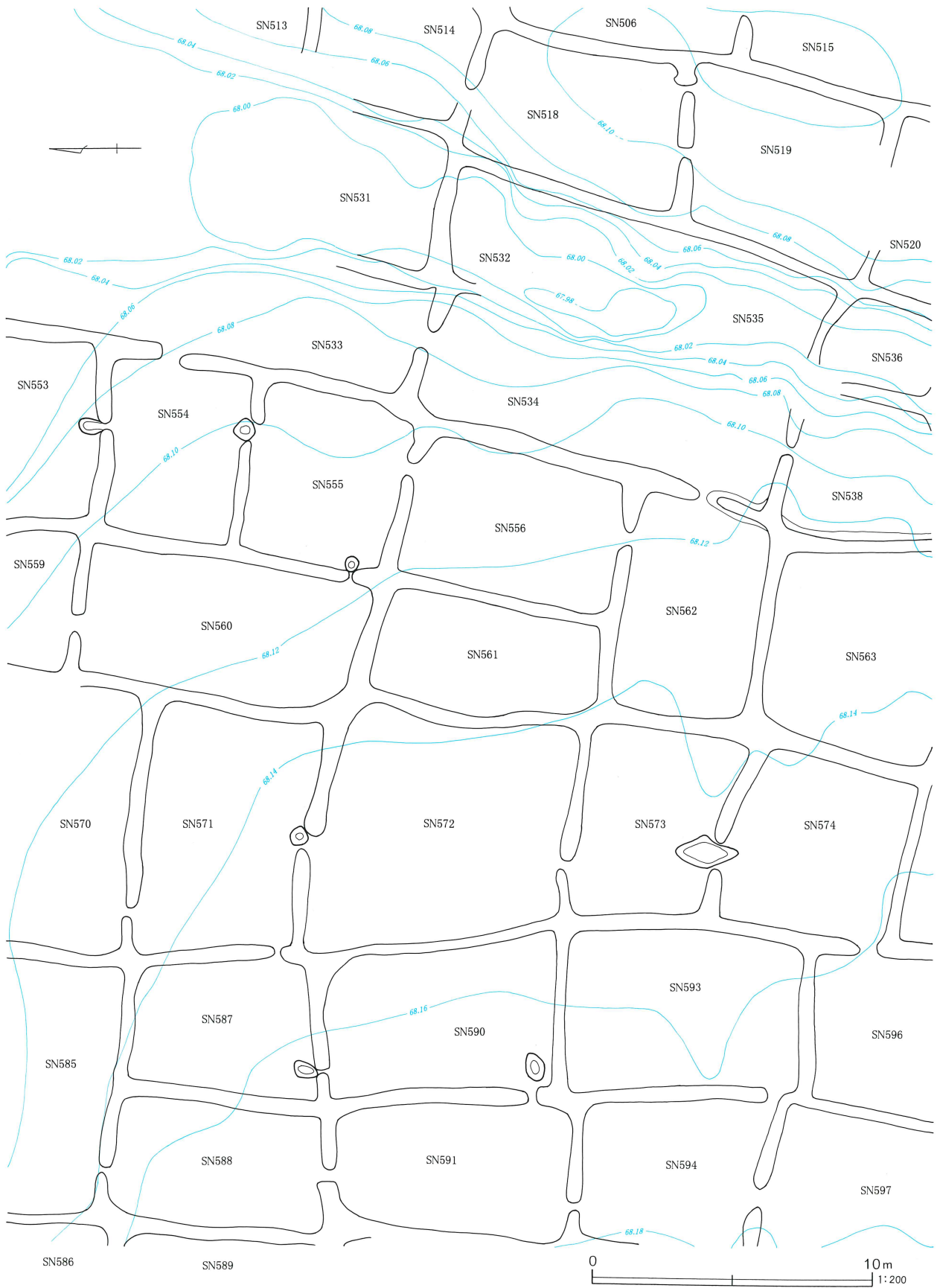
- 1 におい黄褐色 10YR4/3 細砂質シルト 川砂多
- 2 黒褐色 10YR3/2 シルト 川砂少
- 3 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核多
- 4 暗褐色 10YR3/3 中細砂 酸化鉄結核少
- 5 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核
- 6 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト 酸化鉄結核多 有機質ラミナ
- 7 黒褐色 10YR3/2 シルト
- 8 におい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 酸化鉄結核多 VIIIブロック
- 9 灰黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核少
- 10 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
- 11 黒褐色 10YR2/2 粘土 酸化鉄結核多
- 12 暗褐色 10YR3/3 シルト 酸化鉄結核多



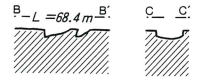
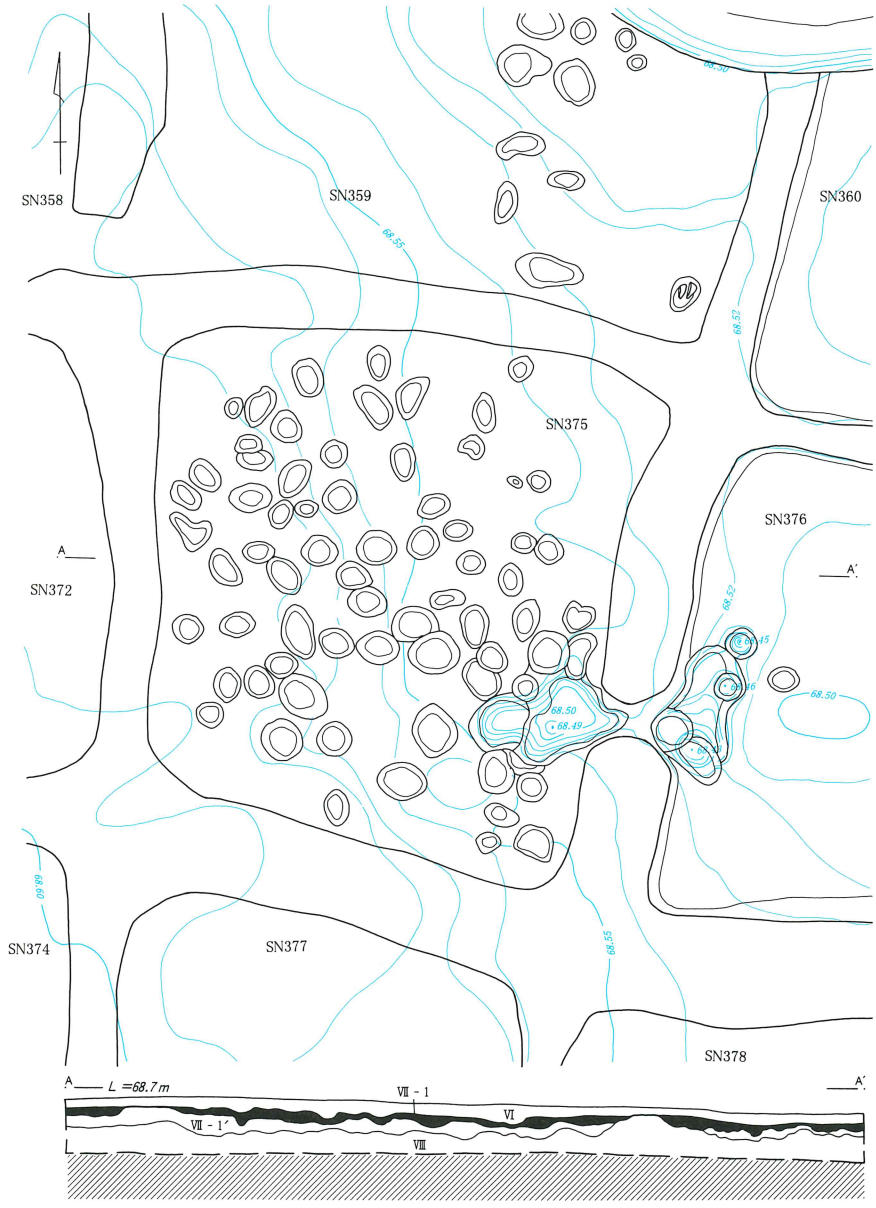
第92図 H 4 グリッド周辺第 3 遺構面



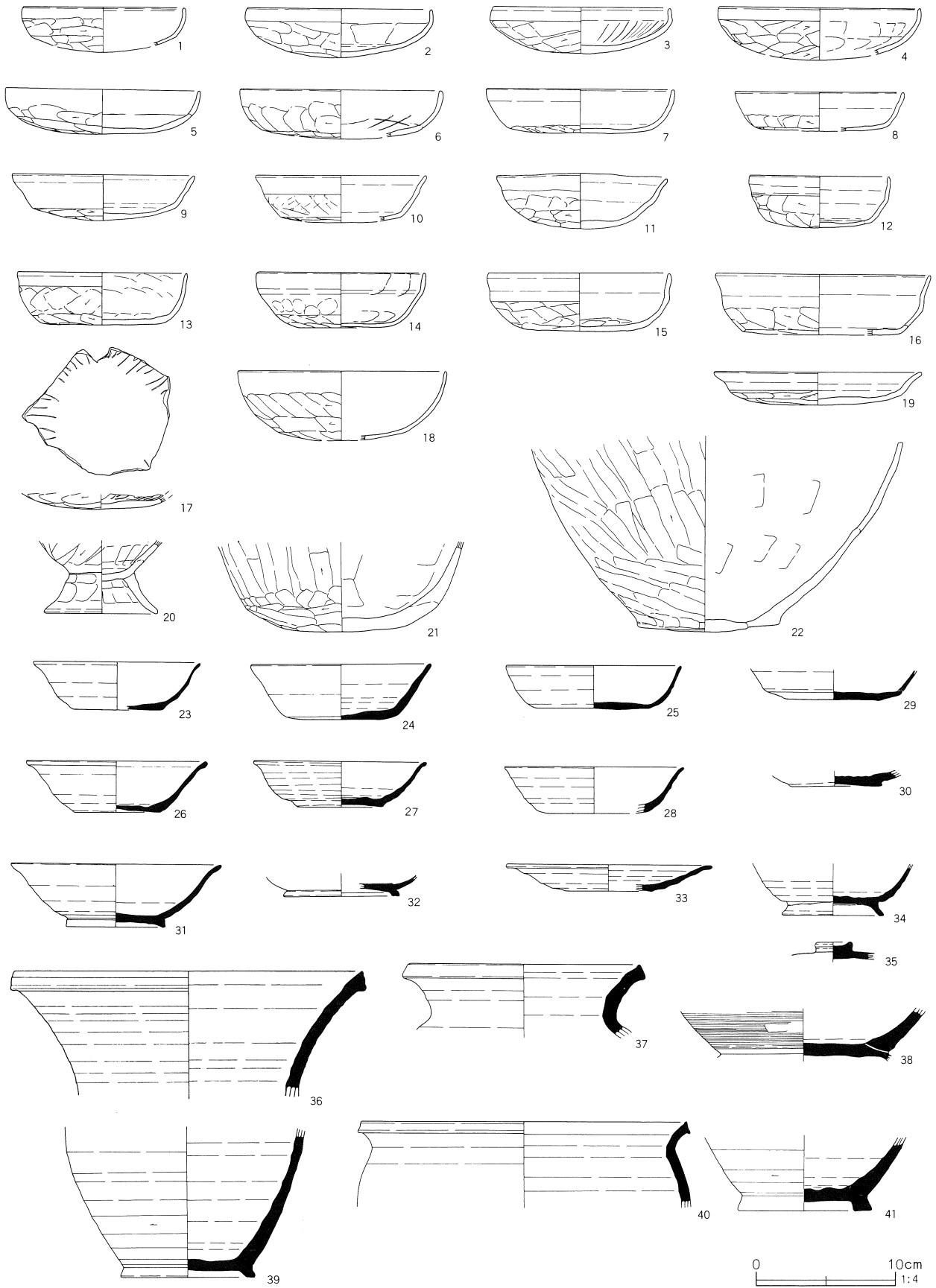
第93図 第3遺構面検出水田跡微細図



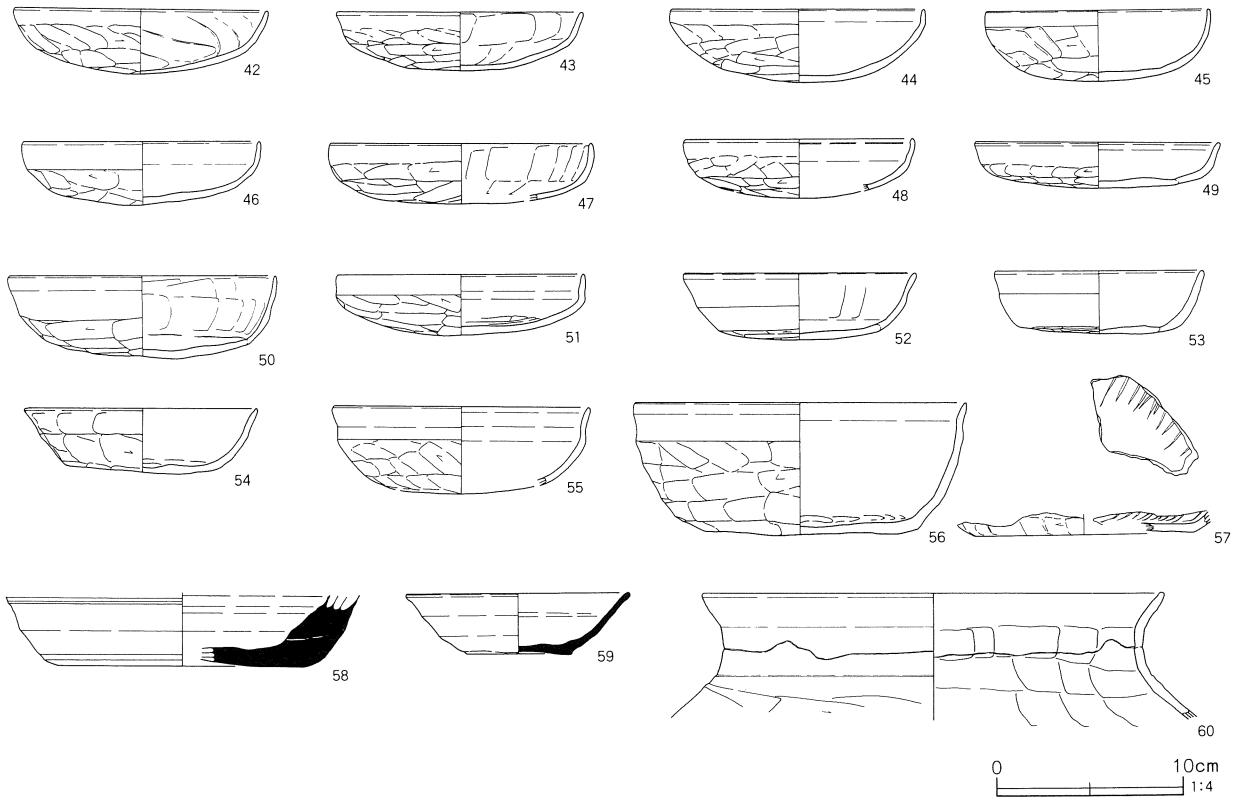
第94图 第375号水田迹



第95図 第2・3遺構面出土遺物(I)



第96図 第2・3遺構面出土遺物(2)

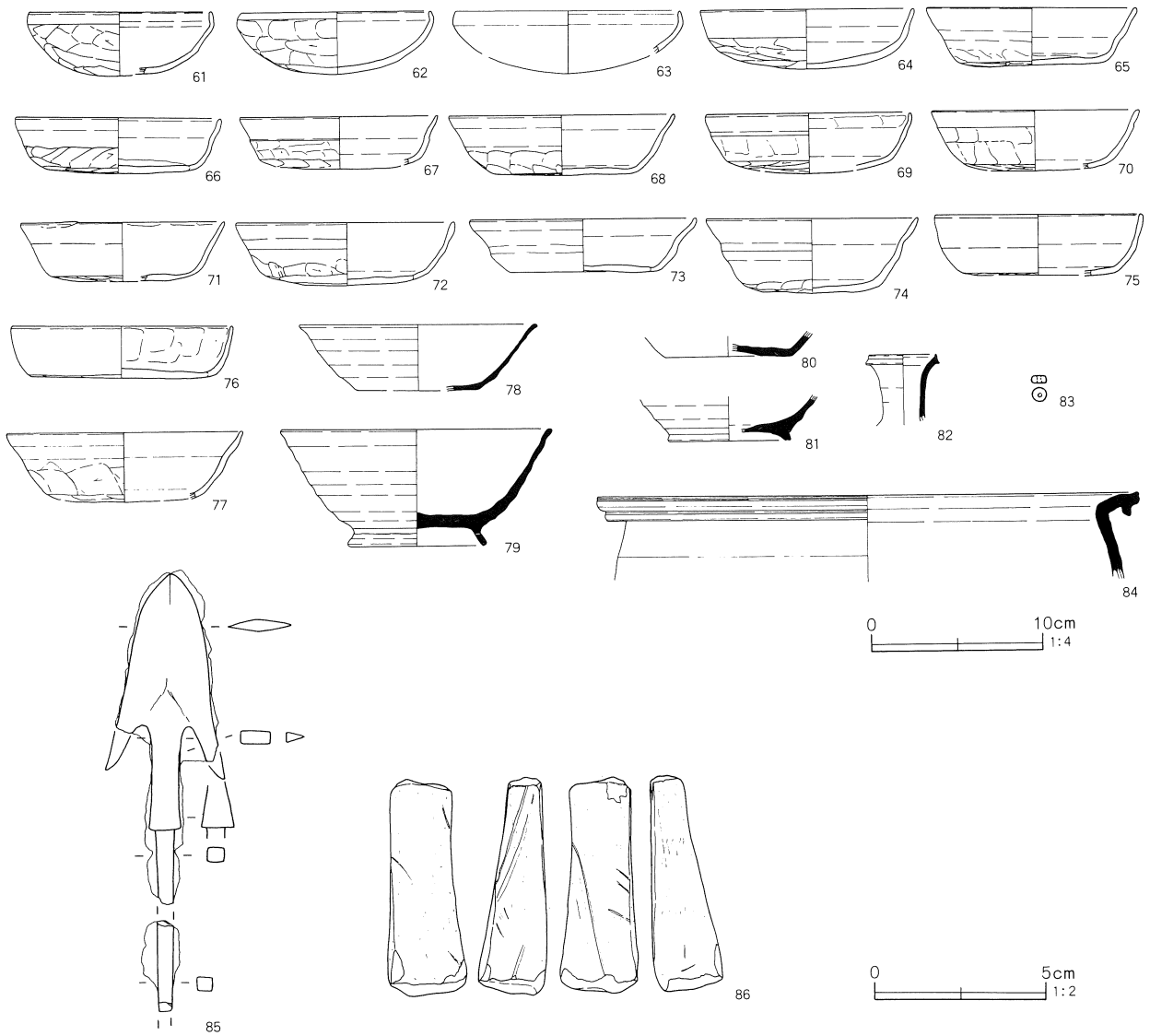


第2表 第2・3遺構面出土遺物観察表 (第95~97図)

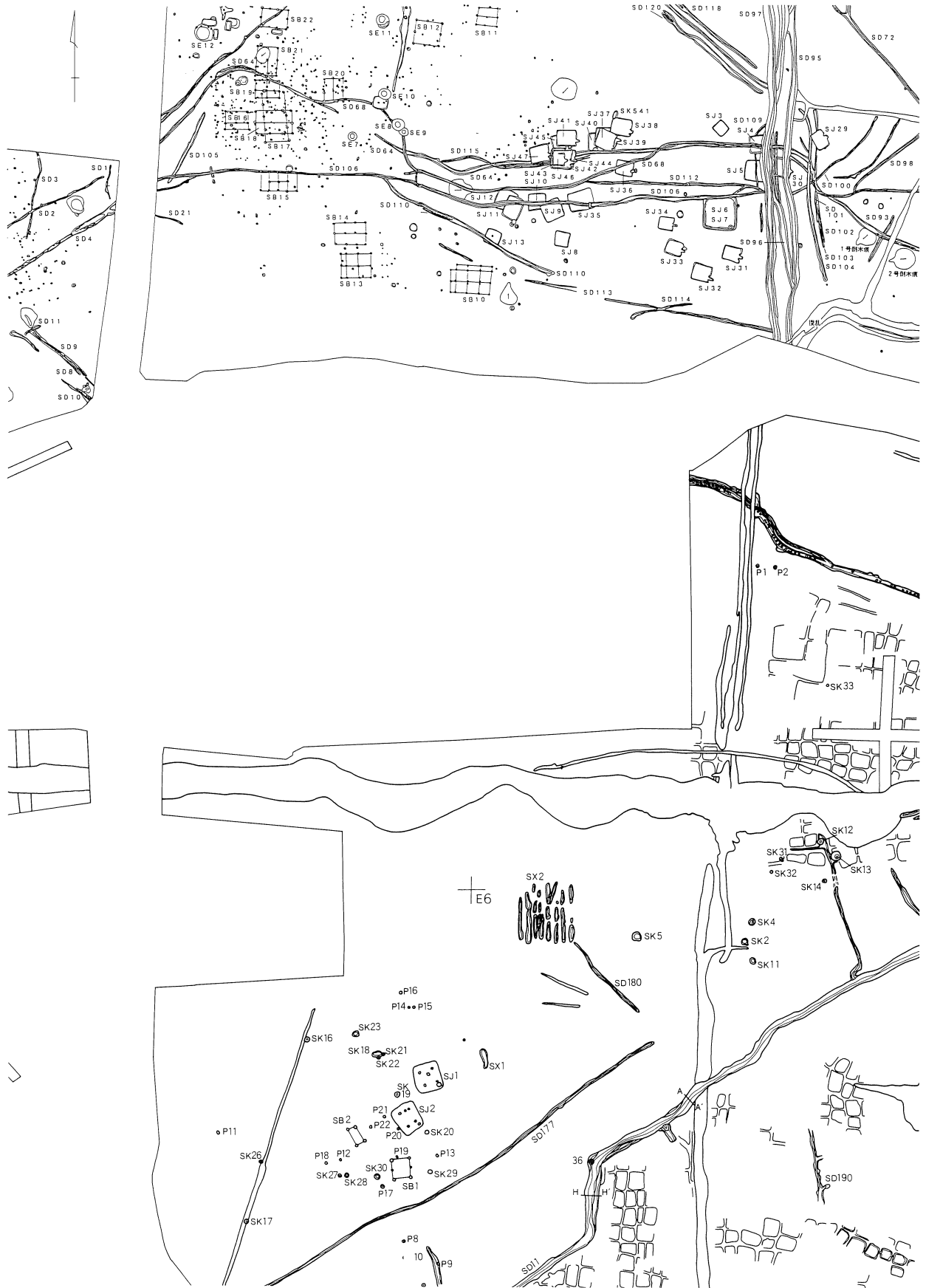
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考
1	杯	(10.3)	(3.0)		ABD	A	橙色	15	SD89	
2	杯	13.3	3.5		ABF	A	にぶい褐色	98	SD89	
3	杯	12.8	3.4		ABD	A	にぶい赤褐色	100	SD89	暗文
4	杯	(14.3)	(3.3)		AB	A	橙色	20	SD89	
5	杯	(13.8)	(3.2)		AB	A	橙色	25	SD89	
6	杯	(14.1)	(3.3)	(11.2)	AB	A	明赤褐色	40	SD89	口縁部直下一部未調整
7	杯	(13.2)	3.1	(10.5)	ABF	A	橙色	30	SD89	
8	杯	(12.0)	(2.7)	(9.4)	AB	A	明赤褐色	25	SD89	
9	杯	12.8	3.3		AB	A	にぶい褐色	80	SD89	
10	杯	(12.2)	(3.3)	(8.2)	AB	A	橙色	20	SD89	
11	杯	10.2	4.0	4.5	ABD	A	橙色	100	SD89	
12	杯	10.0	3.2	7.6	ABF	A	橙色	95	SD89	
13	杯	12.0	3.8	9.2	AB	A	橙色	75	SD89	
14	杯	(12.0)	3.9	7.0	ABF	A	明赤褐色	25	SD89	
15	杯	13.0	43.1	8.4	AB	A	橙色	100	SD89	
16	杯	(15.8)	(4.3)	(12.0)	ABDF	A	橙色	15	SD89	口縁部直下ヘラナデ
17	杯				ABF	A	明赤褐色	80	SD89	暗文
18	杯	(14.8)	(4.9)		ABF	A	明赤褐色	40	SD89	
19	盤	(14.5)	2.7	9.9	AB	A	明赤褐色	75	SD89	
20	台付甕		2.9		ABF	A	橙色	80	SD89	
21	鉢			8.7	ABD	A	橙色	65	SD89	
22	甕			10.1	ABF	A	橙色	60	SD89	
23	須恵器杯	(12.0)	3.4	(6.6)	ABF	B	にぶい黄色	25	SD89	
24	須恵器杯	(12.8)	3.9	8.0	AD	A	灰白色	45	SD89	
25	須恵器杯	(12.6)	3.1	(8.0)	AG	A	にぶい黄褐色	45	SD89	
26	須恵器杯	12.7	3.8	6.2	AF	A	灰色	95	SD89	

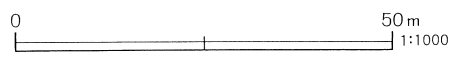
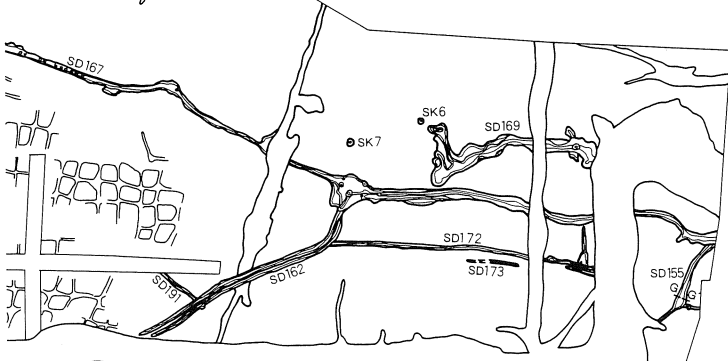
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考
27	須恵器杯	12.1	3.3	6.1	ABF	A	灰色	75	SD89	
28	須恵器杯	(12.2)	(3.3)	(8.0)	AB	A	灰白色	20	SD89	
29	須恵器杯			6.8	AG	A	黄灰色	60	SD89	
30	須恵器杯			6.5	AF	B	灰白色	80	SD89	
31	高台付杯	(14.4)	4.5	7.0	ABD	B	灰黄色	45	SD89	
32	須恵器碗			(8.2)	AB	A	橙色	15	SD89	
33	須恵器皿	(14.5)	(2.9)	(6.0)	AD	A	灰色	15	SD89	
34	須恵器碗			7.5	ABDF	A	灰色	55	SD89	
35	須恵器杯蓋				ABF	A	橙色	80	SD89	
36	須恵器甕	(24.9)			A	A	灰色	5	SD89	
37	須恵器甕	(16.2)			ABF	C	灰オリーブ色	10	SD89	
38	須恵器甕			(12.0)	AF	B	青灰色	30	SD89	
39	長頸瓶			(9.5)	AB	A	灰オリーブ色	75	SD89	
40	須恵器甕	(23.0)			AF	A	灰色	5	SD89	
41	長頸瓶			(9.6)	AD	B	暗黄灰色	45	SD89	
42	杯	(13.4)	(3.4)		AB	A	明赤褐色	50	SD89	ヘラナデが暗文風にのこる
43	杯	(13.3)	(3.2)		ABCF	A	明赤褐色	40	SD89	口縁部直下ヘラナデ
44	杯	13.5	4.0		ABF	A	にぶい橙色	90	SD89	口縁部直下ヘラナデ
45	杯	(11.9)	3.7		AB	A	橙色	75	SD89	
46	杯	12.7	3.3		AB	A	橙色	85	SD89	口縁部直下一部未調整
47	杯	(14.0)	(3.2)		AB	A	橙色	20	SD89	
48	杯	(12.2)			AB	A	橙色	25	SD89	口縁部直下ヘラナデ
49	杯	(12.7)	(2.4)	(11.1)	AB	A	にぶい褐色	45	SD89	
50	杯	14.1	4.3	9.7	ABF	A	橙色	100	SD89	口縁部直下ヘラナデ
51	杯	13.1	3.3		AB	A	にぶい橙色	80	SD89	
52	杯	12.2	3.6	8.7	ABF	A	橙色	85	SD89	
53	杯	11.0	3.3	8.7	ABD	A	橙色	75	SD89	
54	杯	12.1	3.5	8.2	ABF	A	橙色	75	SD89	
55	杯	(13.8)	(4.5)		ABF	A	明赤褐色	40	SD89	
56	鉢	17.8	6.9	11.2	AB	A	明赤褐色	90	SD89	
57	杯			(11.7)	ABDF	A	明赤褐色	10	SD89	暗文
58	須恵器底部			(14.7)	AD	A	灰色	20	SD89	
59	須恵器杯	(11.8)	3.5	5.5	A	A	灰白色	40	SD89	
60	甕	(24.5)			ABDF	A	橙色	25	SD89	
61	杯	10.6	3.7		ABF	A	銘赤褐色	90	SD181	口縁部直下、ケズリ後ナデ
62	杯	11.1	3.6		ABF	A	にぶい黄橙色	98	SD54	
63	杯	(12.8)			AF	A	橙色	10	SD164	器面風化顕著
64	杯	(12.4)	3.4		ABDF	A	明赤褐色	35	SD146	
65	杯	12.0	4.1	8.6	ABC	A	橙色	95	SD146	
66	杯	11.8	3.2	9.0	ABF	A	明赤褐色	60	SD146	
67	杯	(11.4)	(3.2)	(9.4)	ABCF	A	橙色	25	SD146	
68	杯	(13.2)	3.5	(8.0)	ABF	A	橙色	40	SD146	
69	杯	(11.6)		(9.4)	ABF	A	赤褐色	20	SD146	
70	杯	(11.8)		(8.5)	ABF	A	にぶい赤褐色	20	SD146	
71	杯	(12.0)	(3.4)	(8.6)	AB	A	にぶい褐色	25	SD146	
72	杯	13.6	3.6	9.8	AD	A	にぶい褐色	75	SD146	内面黒色処理
73	杯	(13.2)	3.0	8.0	ABC	A	明赤褐色	50	SD146	
74	杯	(12.3)	4.3	7.0	AF	A	橙色	60	SD146	
75	杯	(12.0)	3.5	(9.1)	AF	A	橙色	25	SD146	風化顕著
76	杯	(12.9)	3.0	(11.0)	ABF	A	橙色	30	SD146	器面風化顕著
77	杯	(18.5)			AB	A	明赤褐色	30	SD147	
78	須恵器杯	(12.2)	(3.8)	(7.2)	A	A	灰黄色	15	SD85	
79	須恵器碗	15.8	6.7	6.0	AB	B	にぶい黄色	70	SD146	
80	須恵器杯			(7.5)	AG	A	灰白色	50	29坪	
81	須恵器碗			(7.2)	A F	A	灰色	20	SD146	
82	長頸瓶	(2.8)			A	A	灰オリーブ色	70	SD146	
83	小玉	径0.4cm, 厚み0.2cm, 孔径0.1cm, 重さ0.1g							SD146	滑石
84	須恵器甕	31.4			AB	C	灰色	10	SD146	
85	鉄鎌	現長9.1cm, 鎌身幅1.8cm, 茎部幅0.5×0.4cm, 重さ30.9g							28坪	
86	砥石	長さ9.3×3.4cm, 厚み2.9cm, 重さ117.2g							SD170	頁岩

第97図 第2・3遺構面出土遺物(3)



第98図 第4遺構面北部の状況(1)





VIII 第4遺構面の遺構と遺物

概要

第4遺構面は断面調査によって遺構が残存していると判断できる最下層の遺構面で、古墳時代前期の水田耕作土にあたる基本層序のVII-2層上面において表土除去を行った。VII-2層水田跡にともなう土壌化痕跡は、酸化鉄集積層であるVII-2'層、マンガン結核集積層であるVII-2''層を含め、調査範囲4グリッド以東、Eグリッド以南に限って分布が認められた。水田耕作土上層には連続して粘性のきわめて高いシルト(VII層)が堆積しており、火山灰・洪水砂等で被覆された水田面を検出することはできなかった。しかし、断面調査では、部分的に層厚15cmを越える耕作土VII-2層がみられ、水田跡下部を把握することができた。検出できた水田跡は1033筆である。

水田跡は、東西南北を軸とする幅約20~30cm程度の小畦畔で区画された一辺1~3m程度の小区画水田跡であった。小区画水田跡を区画する畦畔は、東西あるいは南北に直線的に設けられていたが、10m程度の間隔で幅約50cmほどの規模の大きい畦畔が認められた。小区画水田跡は、大区画を分割したものであることが分かる。しかし、埋没水田でなかったことや、第3遺構面の遺構との重複、度重なる水田区画および用水路跡の付け替え等による攪乱のため、この畦畔による大区画の全体像を明らかにできなかった部分はない。

水田跡を潤した主な灌漑施設は、西側の微高地縁辺付近に南北を軸として掘削された大規模な用水路跡SD11であった。水田域は、主にSD11東側の低地性堆積物の厚い区域に展開していた。SD11は底面から30cm程度埋没した時点で幅を広げて掘り直されており、As-C軽石を多く含む下層(SD11)覆土中にはS字口縁甕を含む古墳時代前期の遺物が、掘りなおし後の上層(SD7)覆土中には古墳時代中期の遺物が包含されていた。VII-2層水田跡の水田土壌はSD11と重複関係にあったが、土壌のテフラ分析によれば耕作土中にAs-C軽石が包含されており水田跡の大区画をなす畦畔がSD11の

流路に沿って蛇行していることからみて、下層のSD11にともなう水田跡と判断した。

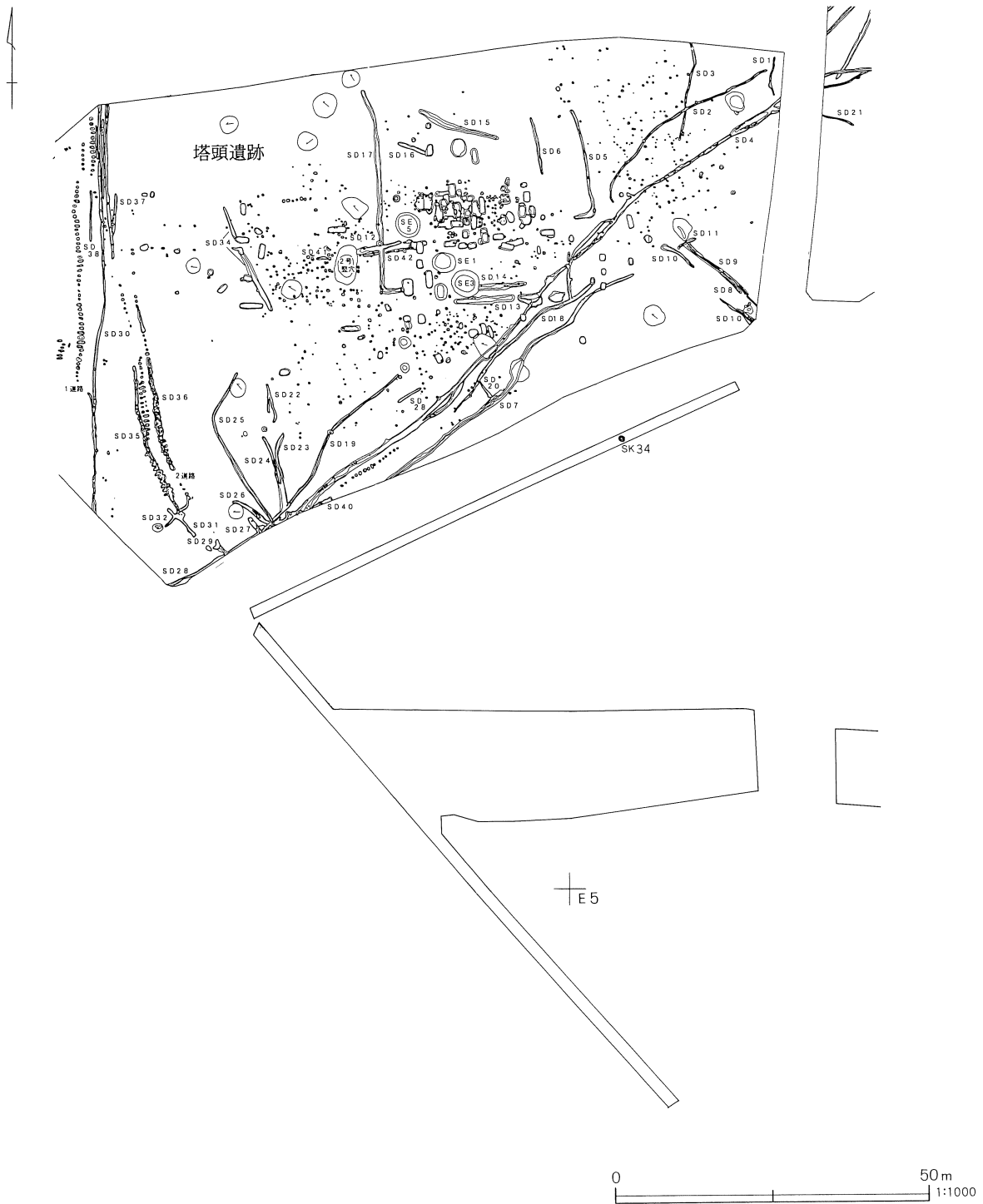
SD11は女堀川河道から取水したものと考えられ、約600mあまり直線的に北流した後、調査範囲北西部から北東部へ続く微高地縁辺に沿って北東に向きを変えていた。溝底には少量の土器片のほか、赤色顔料の付着する部分も認められたが、方向の転換点にはやや多量の土器片が散在していた。方向転換点より北東側ではSD11上層をなしたSD7が台地縁辺より位置を変えて平行しており(SD177)、用水路の掘り直しを機に水田域の拡大が行われたことが分かった。また、G3グリッドではVII-2層水田土壌のみられない西側範囲にSD7上層と同時期の土器を出土する小規模な溝跡を複数検出した。覆土には水田耕作土に類似した有機質の黒色シルトが含まれ、小形壺を多く出土した。

SD7・11は古墳時代後期まで継続して用いられ、埋没する6世紀後半以後は2m程度西側に移動するが、地割に大きな変化はみられなかった。

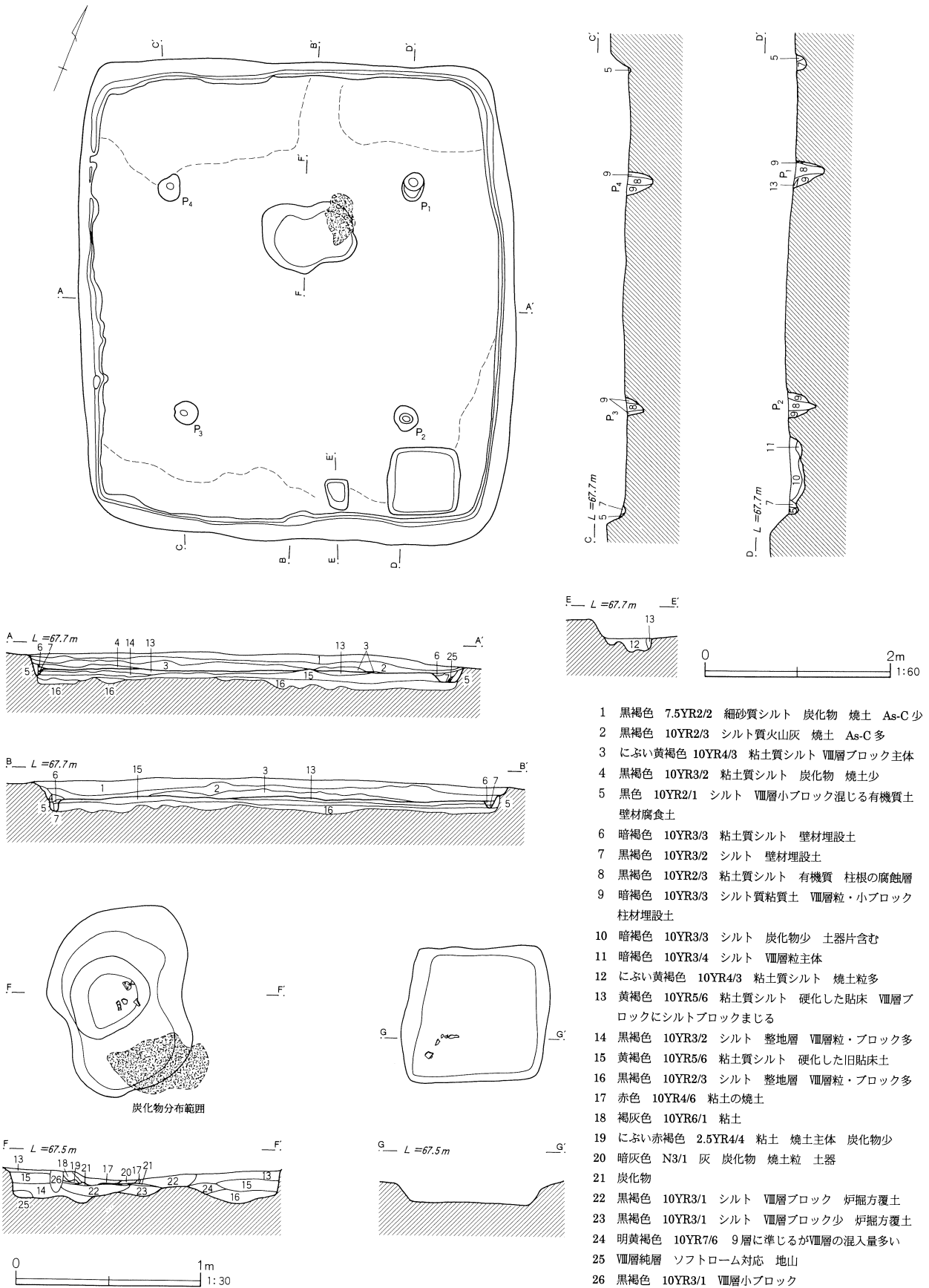
SD11で区画される台地上面ではVII-2層水田跡と同時期の集落跡を検出した。グリッド中央部に集中的に遺構が認められた。内訳は古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、掘建柱建物跡2棟、土坑29基、ピット20基などである。地神遺跡として調査した地域も基本的にはこの集落と同一の微高地上にのるもので、同遺跡で確認した古墳時代前期の竪穴住居跡を含めれば、合計16(今井条里遺跡2軒、地神遺跡13軒、塔頭遺跡1軒)軒がSD11で区画された台地上面縁辺部に立地し、水田域を見下ろしていたことになる。なお、この水田域はさらに東にも連続していたものと考えられ、調査範囲東の微高地上に位置し、すでに調査された川越田遺跡の同時期集落についても同じ条件の集落跡として捉えられることになる。

微高地縁辺では弥生時代中期の土坑3基も検出した。水田域の各所から土坑内出土のものと同石材の打製石斧(石鋏)が出土しており、当遺跡の水田域が、す

第99図 第4遺構面北部の状況(2)



第100図 第I号住居跡



- 1 黒褐色 7.5YR2/2 細砂質シルト 炭化物 焼土 As-C 少
- 2 黒褐色 10YR2/3 シルト質火山灰 焼土 As-C 多
- 3 にふい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト Ⅷ層ブロック主体
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 炭化物 焼土少
- 5 黒色 10YR2/1 シルト Ⅷ層小ブロック混じる有機質土 壁材腐食土
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 壁材埋設土
- 7 黒褐色 10YR3/2 シルト 壁材埋設土
- 8 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト 有機質 柱根の腐蝕層
- 9 暗褐色 10YR3/3 シルト質粘質土 Ⅷ層粒・小ブロック 柱材埋設土
- 10 暗褐色 10YR3/3 シルト 炭化物少 土器片含む
- 11 暗褐色 10YR3/4 シルト Ⅷ層粒主体
- 12 にふい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト 焼土粒多
- 13 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト 硬化した貼床 Ⅷ層ブロックにシルトブロックまじる
- 14 黒褐色 10YR3/2 シルト 整地層 Ⅷ層粒・ブロック多
- 15 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト 硬化した旧貼床土
- 16 黒褐色 10YR2/3 シルト 整地層 Ⅷ層粒・ブロック多
- 17 赤色 10YR4/6 粘土の焼土
- 18 褐色 10YR6/1 粘土
- 19 にふい赤褐色 2.5YR4/4 粘土 焼土主体 炭化物少
- 20 暗灰色 N3/1 灰 炭化物 焼土粒 土器
- 21 炭化物
- 22 黒褐色 10YR3/1 シルト Ⅷ層ブロック 炉掘方覆土
- 23 黒褐色 10YR3/1 シルト Ⅷ層ブロック少 炉掘方覆土
- 24 明黄褐色 10YR7/6 9層に準じるがⅧ層の混入量多い
- 25 Ⅷ層純層 ソフトローム対応 地山
- 26 黒褐色 10YR3/1 Ⅷ層小ブロック

で弥生時代から水田化されていた可能性を示唆する
と考えられる。該当時期の水田跡は検出できなかった。

ほかに、水田域の下層では、扇状地性伏流水の流路

と考えられる溝跡や女堀川旧流路と推定される溝跡も
複数検出した。

1. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡(第98・100~102図)

E 5グリッドで検出した。平面形は長方形であった。
規模は長辺5.60m、短辺4.68m、深さ0.34m、主軸方
位はN-21°-Wであった。

覆土は中程にAs-Cをもち、下層には地山を構成す
るVIII層ブロックを多量に含んでいた。

壁面は傾斜しており、全周する壁溝の位置からみて
壁面上端が崩落したものと考えられる。

柱穴は4本で整った長方形に配置されていた。径
20~25cm、深さ30cm程度で、覆土には柱痕跡が遺存し
ていた。埋設土が認められた。抜きとった形跡はなか

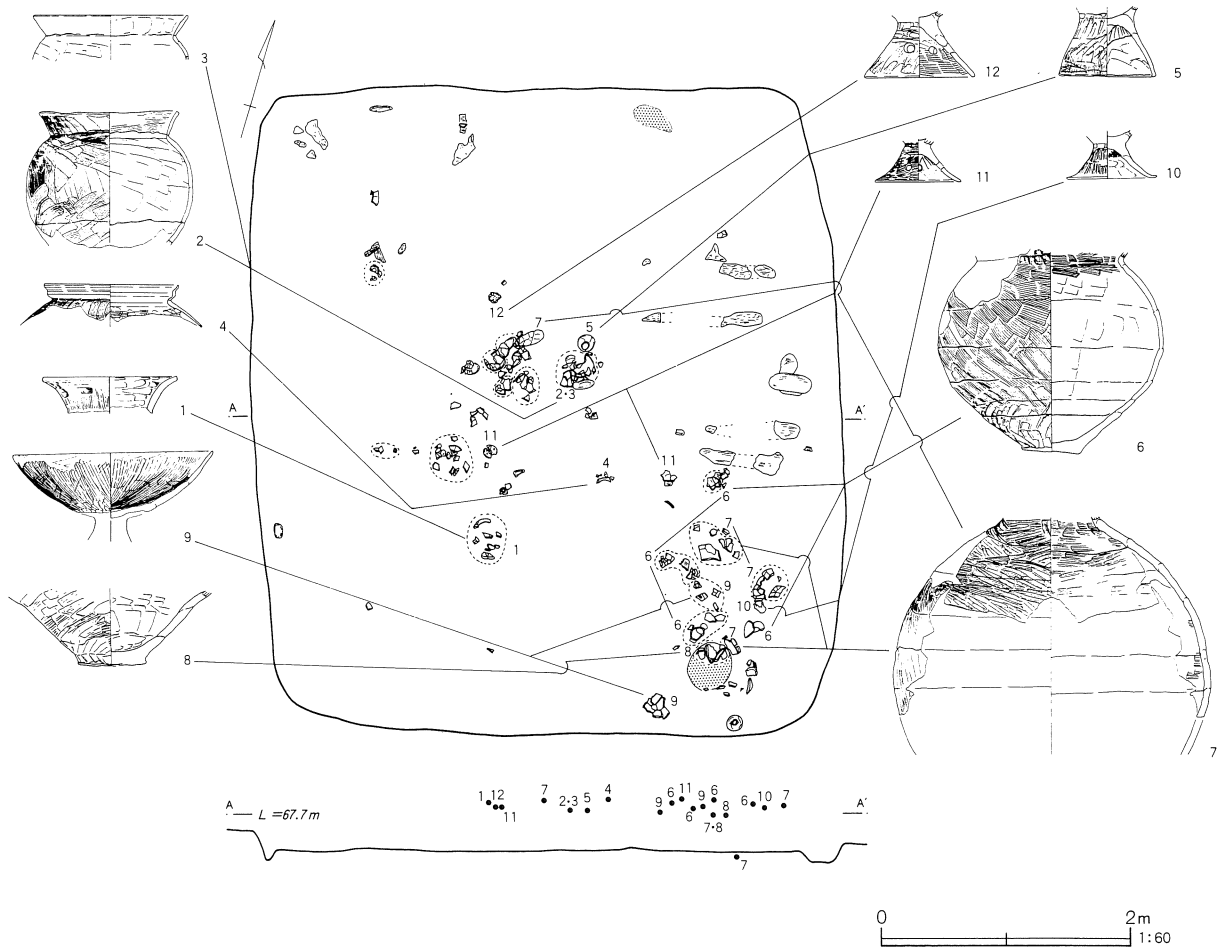
った。

炉跡は北側柱穴間に設置されていた。白色粘土で火
皿を設けており、底面は非常によく焼けていた。火皿
を外れて炭化物の分布範囲が確認できた。底面付近か
ら土器片が得られた。

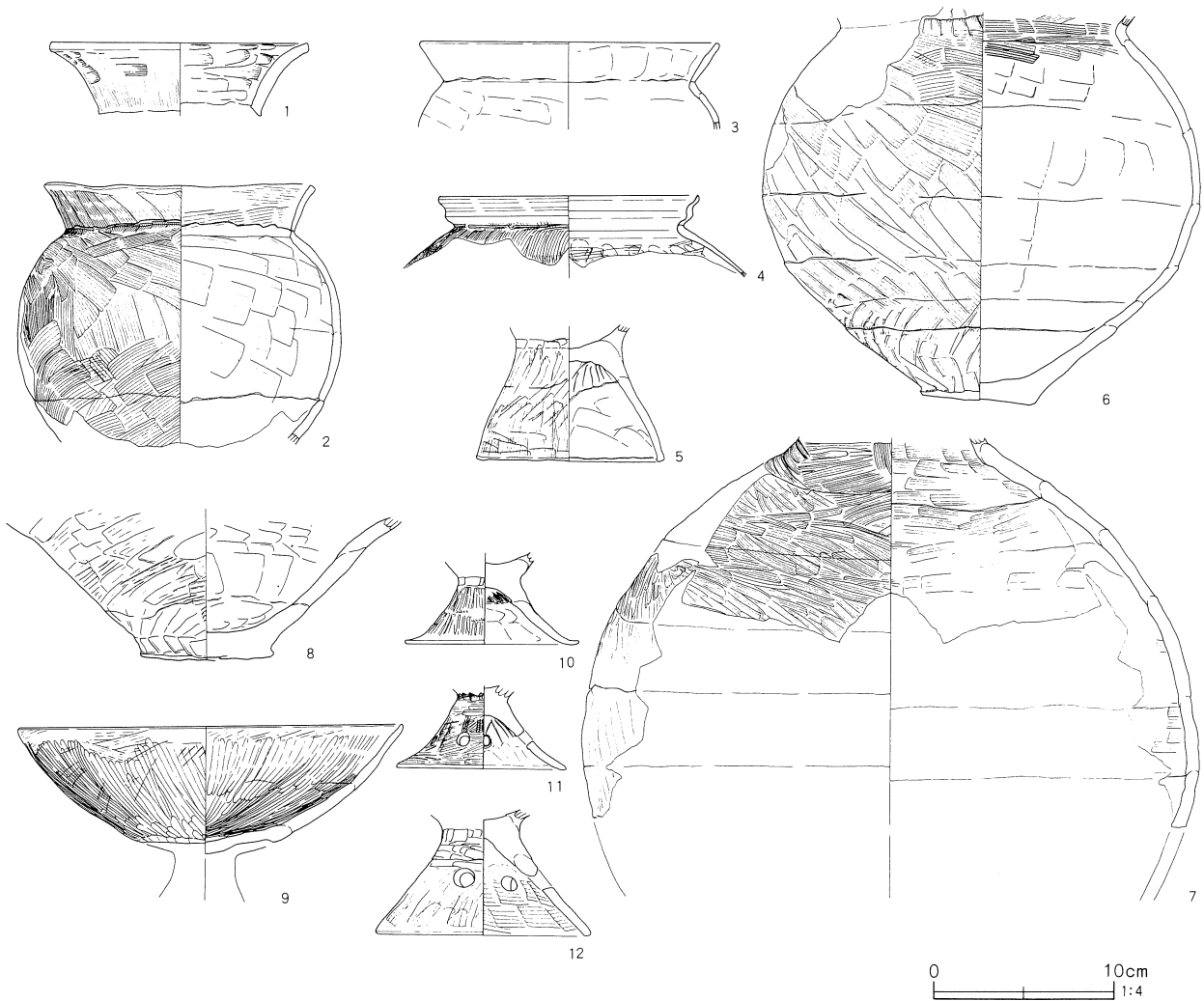
貯蔵穴は南東角に掘り込まれていた。ほぼ正方形で
長辺88cm、短辺70cm、深さ11cmで、底面は平坦であ
った。内部からは少量の土器片を得たが、図示できるも
のはなかった。

南部の壁際には小穴を検出した。20×30cmのほぼ方
形で、深さは11cmであった。覆土はローム粒を含むシ

第101図 第1号住居跡遺物出土状況



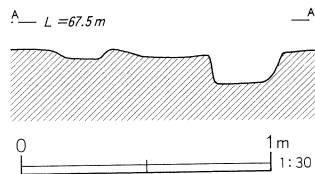
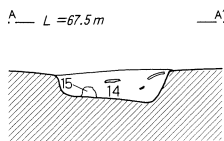
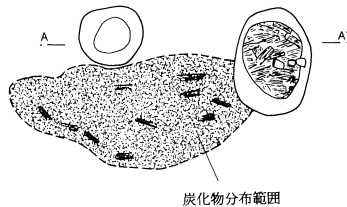
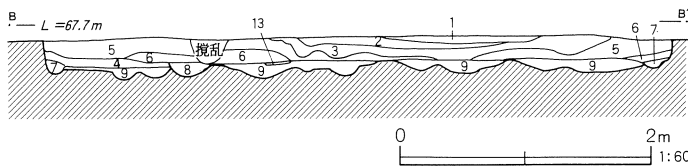
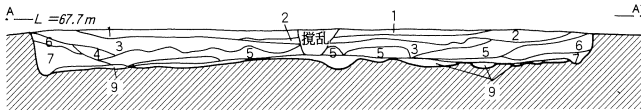
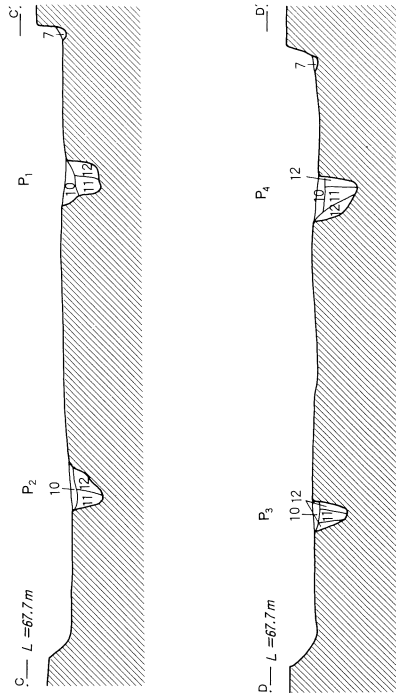
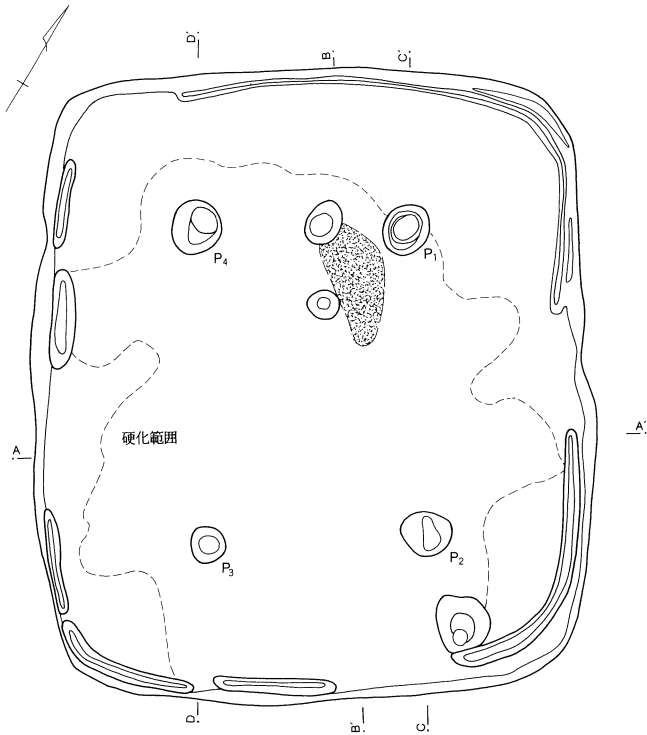
第102図 第1号住居跡出土遺物



第3表 第1号住居跡出土遺物観察表 (第102図)

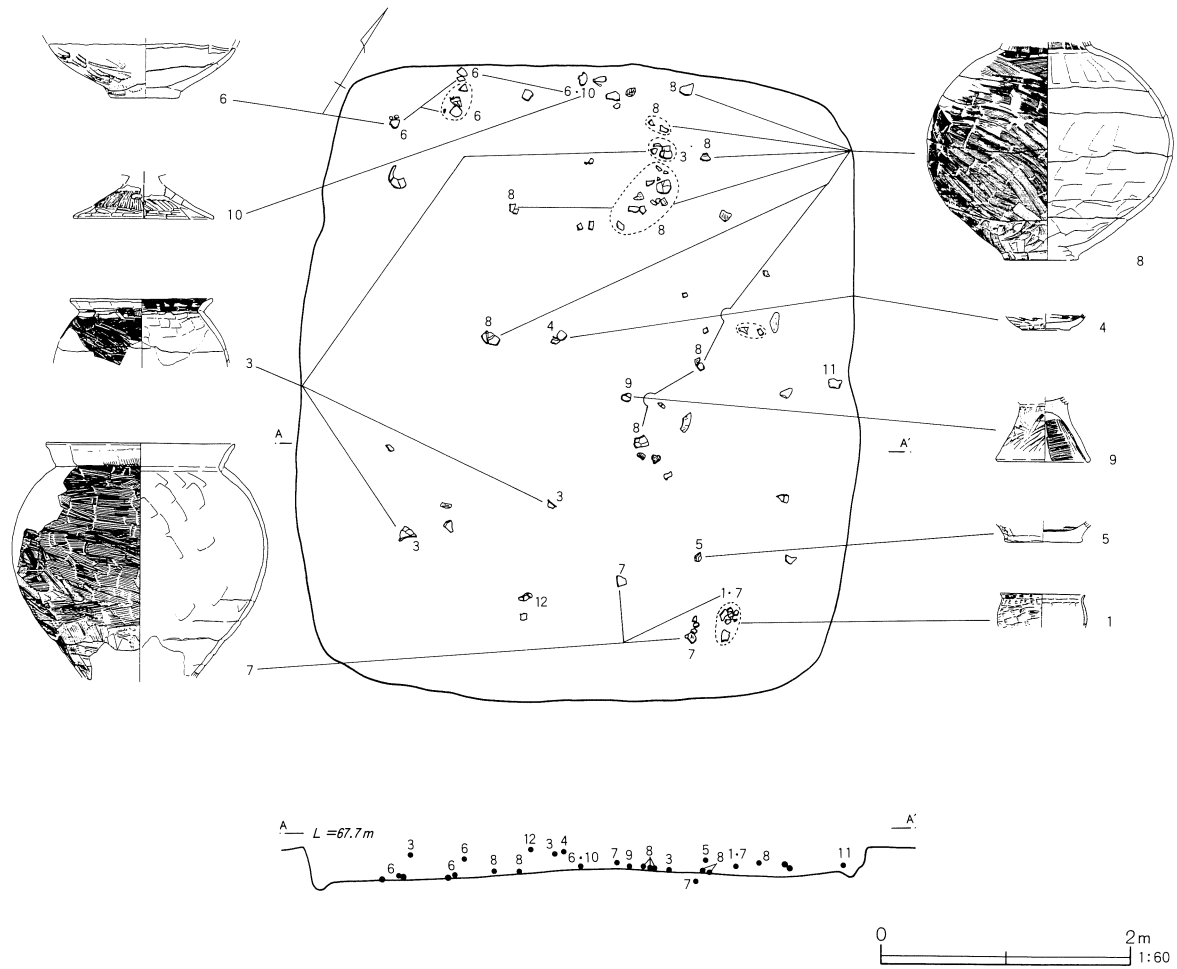
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(14.4)			ABF	A	橙色	40	ハケ後ハケナデ
2	甕	15.1			AF	B	にぶい赤褐色	35	外;ハケ 内;板ナデ
3	甕	(16.7)			AG	A	橙色	25	器面風化顕著
4	甕	(14.4)			ABF	A~B	灰白色	20	外;ハケ 内;ハケ後指ナデ
5	台付甕脚		6.2	10.5	ABF	A	橙色	100	ハケ後ナデ
6	甕			(6.4)	ABF	A	にぶい赤褐色	45	外;ハケナデ 内;ヘラナデ
7	壺				AB	B	褐色	40	ハケ
8	甕			7.3	AF	B	灰黄褐色	40	ハケ後板ナデ
9	高杯	21.4	6.9		ABF	A	明赤褐色	70	ヘラケズリ後ハケ後ミガキ
10	台付甕脚		3.7		AB	A	明褐色	65	ハケ後ミガキ
11	高杯脚		3.9	9.7	AB	A	明褐色	95	ハケ後ヘラミガキ
12	高杯脚		5.8	11.9	ABC	A	橙色	65	ハケ後板ナデ

第103図 第2号住居跡



- 1 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト As-C少 VIII層小ブロック多
- 2 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト As-C少 焼土 炭化物少 VIII層粒多
- 3 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト As-C少 焼土 炭化物多 VIII層粒多
- 4 にふい黄褐色 10YR4/3 粘土質シルト As-C少 VIII層粒・ブロック少
- 5 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト VIII層粒・小ブロック主体 As-C少 焼土 炭化物多
- 6 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト As-C少 VIII層粒少 初期流入土
- 7 褐色 10YR4/4 粘土質シルト 壁材腐蝕ブロック多 VIII層粒・小ブロック主体
- 8 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト As-C少 炭化物多 VIII層粒多 炉灰ブロック 最下に炭化材ブロック
- 9 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 焼土粒少 炭化物少 VIII層小ブロック多 貼床
- 10 褐色 10YR4/4 粘土質シルト As-C少量 VIII層粒・小ブロック多 貼床流入
- 11 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト As-C少 炭化物多 VIII層粒・小ブロック多 根固土混じりの柱根
- 12 褐色 10YR4/4 シルト質粘土 VIII層粒主体 シルトブロック少
- 13 明褐色 7.5YR5/8 シルト 焼土塊 炉の貼土が焼けたもの
- 14 暗褐色 10YR3/3 シルト 土器片多 炭化物 焼土ブロック少量 VIII層粒少 貯蔵穴
- 15 にふい黄褐色 10YR7/4 粘土

第104図 第2号住居跡遺物出土状況



ルトであった。

床面はほぼ全体に硬化していた。炉跡周辺は特に顕著で若干の盛り上がりがあり、凹凸と光沢が認められた。掘り方は床面周囲を掘り下げている。断面観察によれば、2面の貼床層が認められた。貼床層は非常に粘性の高い粘土質シルトで、土質は整地層と同じであった。整地層上層の2cm程度が硬化したものと考えられる。

出土遺物は覆土2層のAs-C上面に多量に分布していた。下層には攪乱されて入り込んだものを除き、認められなかった。出土した土器片はいずれも細かく破損しており、完形の遺物は含まれていなかった。図示したもの以外に台付甕2個体分、棒状の頁岩3個が出土した。

第2号竪穴住居跡(第98・103~105図)

E5グリッドで検出した。平面形は長方形であった。規模は長辺5.0m、短辺4.45m、深さ0.2m、主軸方位はN-30°-Wであった。

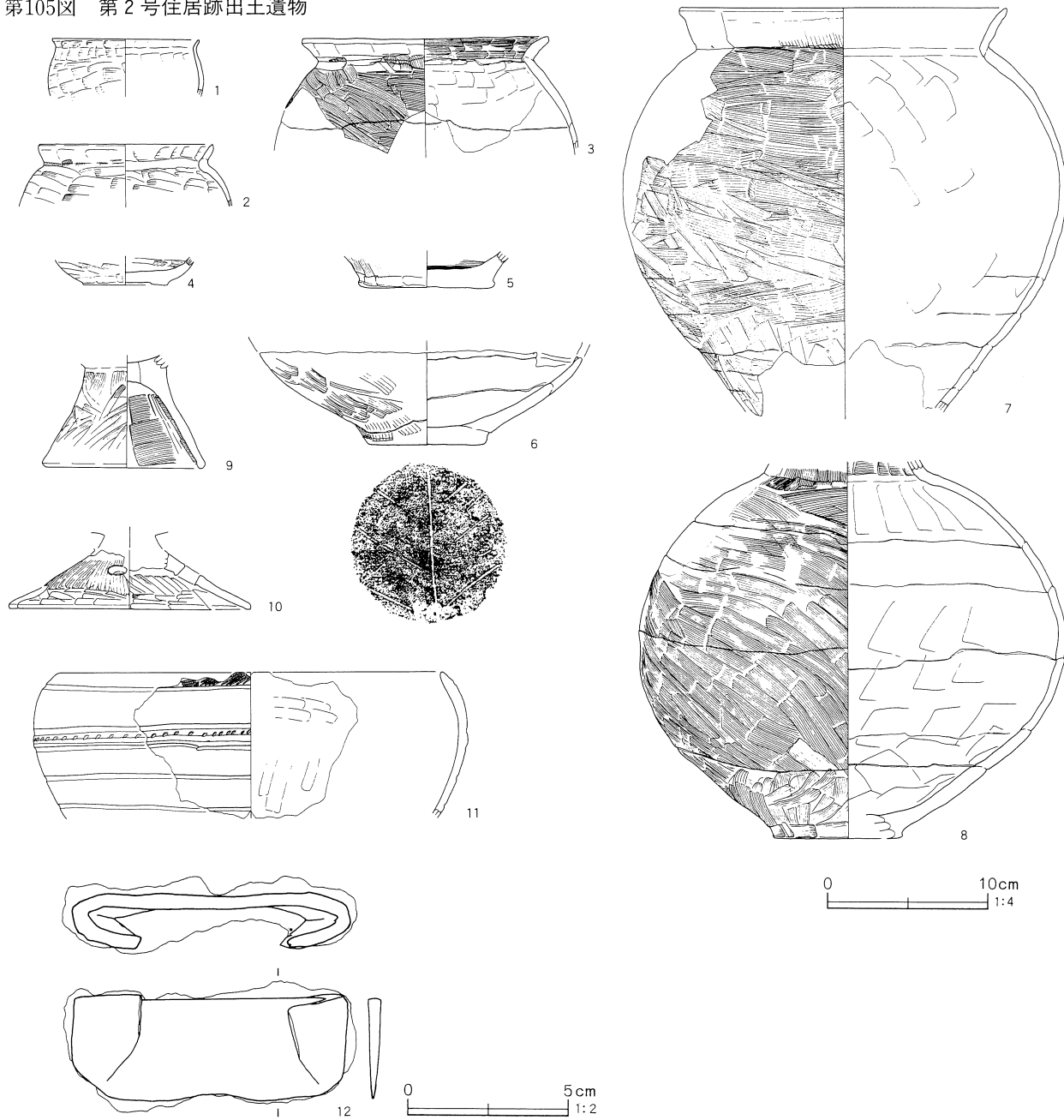
覆土全体に少量のAs-Cが含まれていた。As-C降下以後に埋没したものである。多量の炭化物が特徴的であった。

壁面はほぼ直立しており、埋没過程における壁面の崩落は少なかったと考えられる。

壁溝は途切れていたが、竪穴内部周囲の床面が検出しにくかったため、調査時点で削平してしまったもので、本来は全周していたと考えられる。壁溝内部の覆土は有機質の粘土質シルトで、壁材が腐食した形跡があった。

柱穴は4本で整った長方形に配置されていた。径

第105図 第2号住居跡出土遺物



第4表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(9.2)			ABF	A	明赤褐色	25	ハケ後板ナデ
2	甕	(10.8)			ABF	A	にぶい橙色	30	ハケ後板ナデ
3	甕	15.4			ABF	A	赤褐色	65	ハケ
4	壺			(5.3)	ABF	A	明赤褐色	80	ヘラケズリ後ハケ
5	甕			(8.4)	ABF	A	褐色	60	ハケ, ナデ
6	底部			7.4	ABF	B	橙色	100	ヘラケズリ後ハケナデ 木葉痕
7	甕	20.6			ABF	A	にぶい褐色	40	外;ケズリ後ハケ 内;ハケナデ
8	壺		(22.6)	8.1	ABF	A	明赤褐色	60	外;ハケ 内;ヘラナデ
9	台付甕脚			10.2	ABF	A	明赤褐色	40	ハケ後ハケナデ
10	高杯			15.0	ABCF	A	にぶい黄橙色	20	ハケナデ
11	鉢	(24.0)			ABCDF	A	にぶい黄褐色	10	単節LR
12	鋤先	現長3.2×8.5cm, 刃幅最大6.7cm, 重さ78.4g							

20～25cm、深さ40cm程度で、覆土には柱痕跡が遺存していた。埋設土が認められた。抜きとった形跡はなかった。

炉跡は北側柱穴間に設置されていた。底面の焼け具合はよくなかった。住居跡中央方向へ向かって広く炭化物の分布が確認できた。炭化物分布範囲の脇には、炭化物で埋没した小穴が掘り込まれていた。

貯蔵穴は南東角に掘り込まれていた。不整な円形で長径44cm、短径40cm、深さ12cm、底面は平坦であった。内部からは、粘土塊のほか、第105図8の壺片を得た。

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第98・106図)

E5グリッドで検出した。1間×2間で、規模は桁行3.35m、梁行3.1m、主軸方位はN-8°-Wであった。

四隅の柱穴が径50cm、深さ60cmほど、桁側中央の柱穴P2・P5は径25cm、深さ30cmほどの小規模なものであった。四隅の柱穴は柱根部分の腐食層を覆土としており、埋設土は認められなかった。抜きとりの形跡

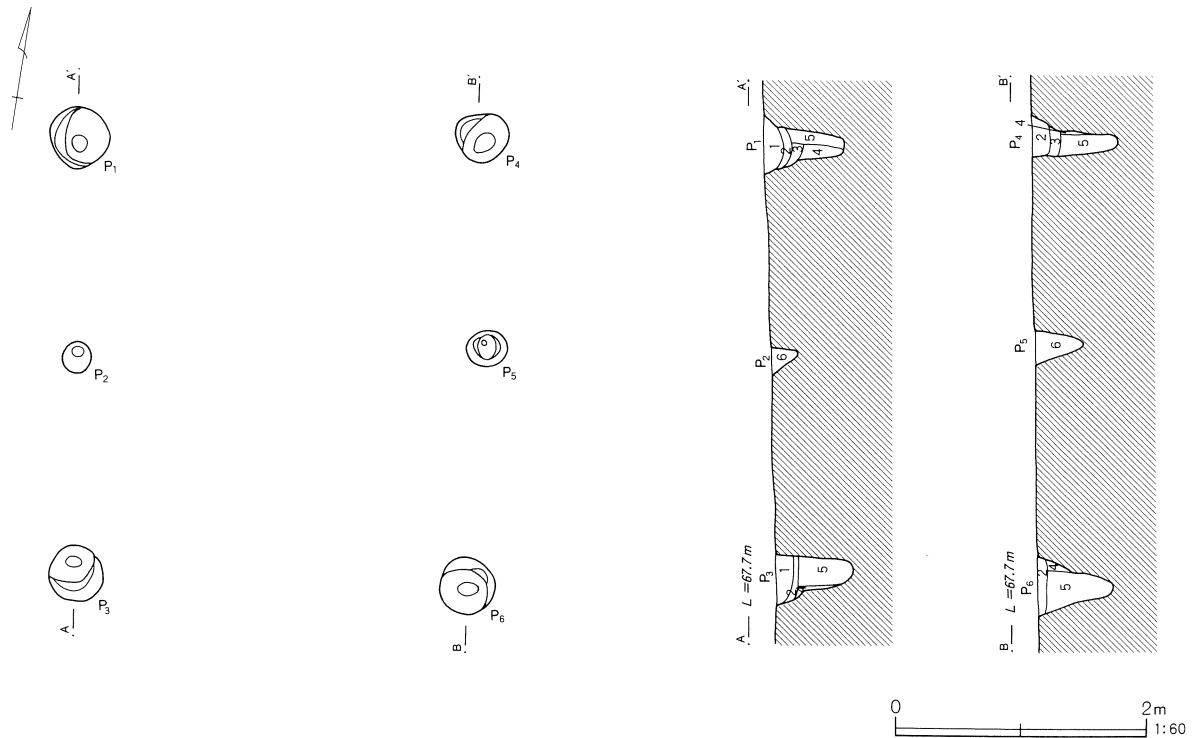
床面は中央から南部にかけて硬化していた。炉跡周辺は顕著であったが、凹凸や光沢は認められなかった。掘り方は床面下全面を不整に掘り下げていた。断面観察によれば、層厚2～5cm程度の粘土質シルトを用いて貼床しており、上層の粘性が若干高かった。

出土遺物は覆土5層内を中心に検出できた。完形の遺物はなかった。上層では第105図12の鉄製鋤先が出土した。折曲げ部分は叩いて成形していた。図示したものの以外に、小型の台付甕片、台付甕1個体分などが出土した。

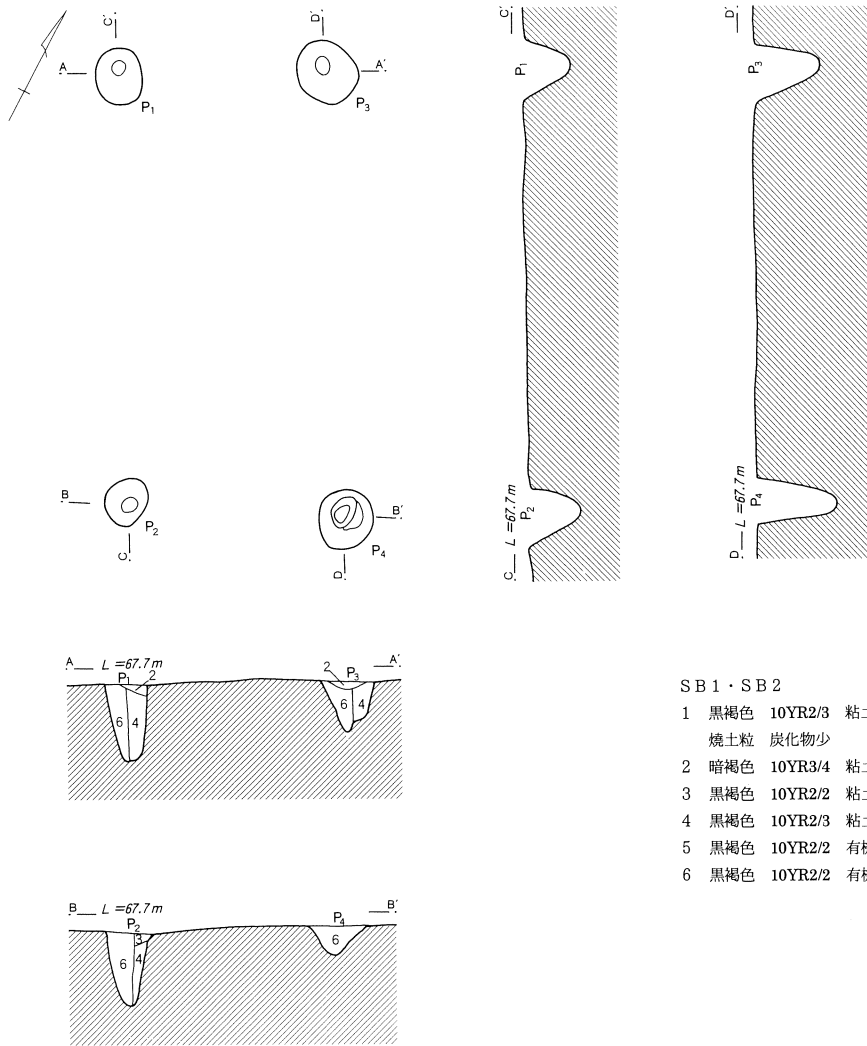
もなく、腐食後、上部から堆積土が入り込んでいた。柱材を打ち込んだものであろう。出土遺物はなかったが、柱穴上層に入り込んだ覆土は、竪穴住居跡覆土に類似し、As-Cを含んでいたことから、古墳時代前期の遺構であると判断した。

第2号掘立柱建物跡(第98・107図)

第106図 第1号掘立柱建物跡



第107図 第2号掘立柱建物跡



SB1・SB2

- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト As-C VIII層粒多 VIII層小ブロック
焼土粒 炭化物少
- 2 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト VIII層粒主体 VIII層小ブロック少
- 3 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト VIII層小ブロック多 埋戻土 ブロック状
- 4 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト VIII層小ブロック少 埋戻土 ブロック状
- 5 黒褐色 10YR2/2 有機質シルト 柱根腐蝕層
- 6 黒褐色 10YR2/2 有機質シルト 柱根腐蝕層 5層より粘性高

E 5グリッドで検出した。1間×1間で、規模は桁行3.40m、梁行1.7m、主軸方位はN-27°-Wであった。

西側にあたる柱穴P1・P2は径40cm、深さ60cmほどであり、東側の柱穴P3・P4は径47cm、深さ25cmほどであった。さらに西側に柱穴が存在する可能性が

3. 土坑

第1号土坑(第108・110・121図)

G 4グリッドで検出した。古墳時代後期の幹線水路跡SD94脇に掘削されていた。平面形は円形、径50cm程度、深さ40cmであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。出土遺物は、古墳時代後期に属する完形の

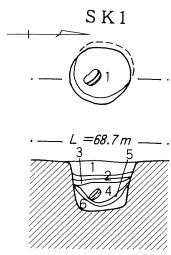
あったため精査したが、検出することはできなかった。柱穴は柱根部分の腐食層を覆土としており、埋設土が認められた。抜きとりは形跡なかった。出土遺物はなかったが、柱穴上層に入り込んだ覆土は、竪穴住居跡覆土に類似し、As-Cを含んでいたことから、古墳時代前期の遺構であると判断した。

土師器杯1点(第110図1)を得た。祭祠的性格が想定できる。

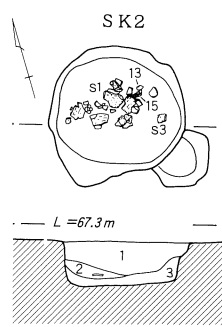
第2号土坑(第98・108・110・111図)

E 6グリッドで検出した。平面形は不整な楕円形、

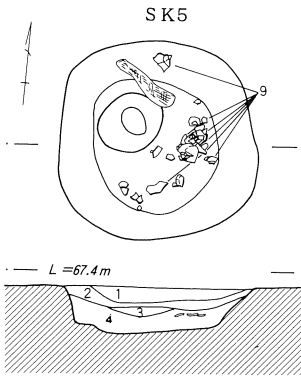
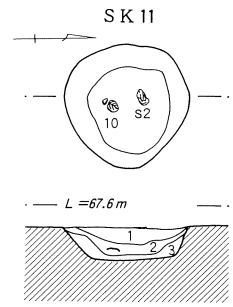
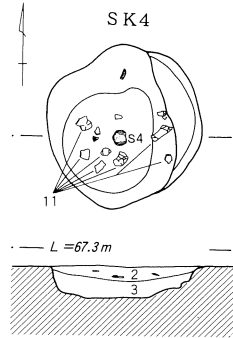
第108図 土坑(I)



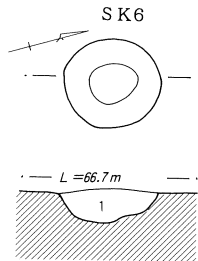
- 1 黒褐色 2.5Y3/2 粘土質シルト
- 2 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂
- 3 褐色 10YR4/6 粘土質シルト
- 4 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
- 5 黄褐色 10YR5/6 粘土質シルト
- 6 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト



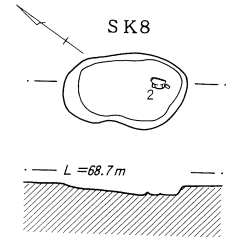
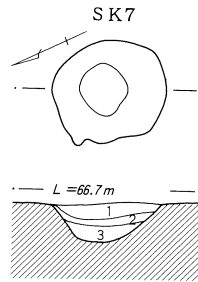
- SK 2・4・11
- 1 暗褐色 10YR3/3 シルト
Ⅷ層小ブロック多 炭化物少
 - 2 暗褐色 10YR3/4 シルト
Ⅷ層小ブロック多 炭化物少 焼土多
 - 3 褐色 10YR4/4 シルト Ⅷ層粒主体
Ⅷ層小ブロック多



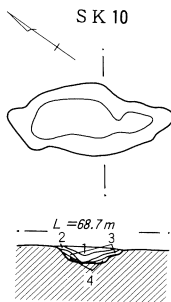
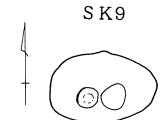
- 1 黒褐色 10YR2/2 細砂質シルト
As - C 少 炭化物少
- 2 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト
Ⅷ層小ブロック多
- 3 黒褐色 10YR2/2 シルト As - C
Ⅷ層粒多 炭化材 炭化物少
- 4 黒褐色 10YR2/3 シルト 上面に土器片散在



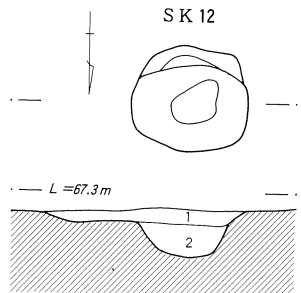
- 1 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト
埋戻土か Ⅷ層小ブロック多



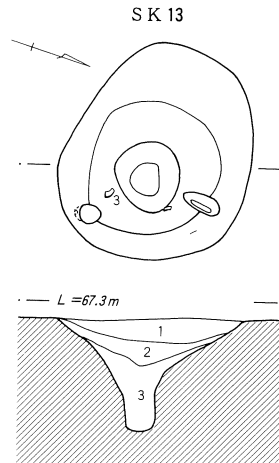
- 1 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト
- 2 暗褐色 10YR3/3 シルト
Ⅷ層小ブロック多
- 3 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂
Ⅷ層小ブロック少



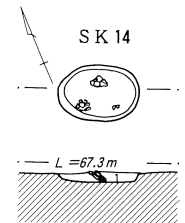
- 1 黒褐色 10YR2/2 粘土質シルト
焼土多 炭化物少
- 2 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト
焼土多
- 3 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
焼土少
- 4 褐色 10YR4/4 粘土質シルト



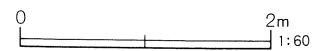
- 1 黒褐色 10YR2/3 シルト質細砂
土器片多
- 2 黒褐色 10YR2/3 シルト質細砂
シルトブロック多



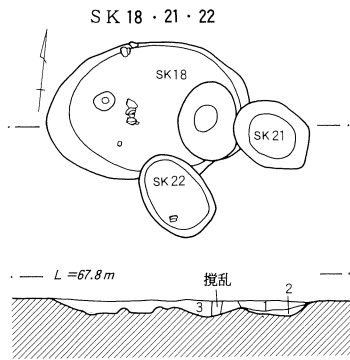
- 1 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト
炭化物少
- 2 黒褐色 10YR3/2 シルト 土器片少
- 3 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト
Ⅷ層ブロック多



- 1 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト
As - C 少 焼土粒少 炭化物少

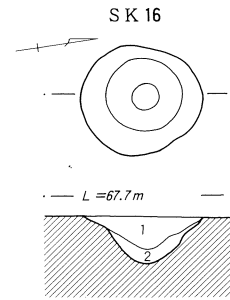
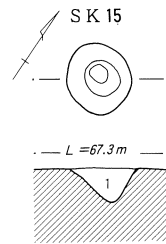
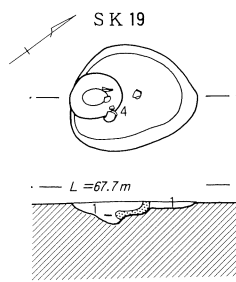


第109図 土坑(2)



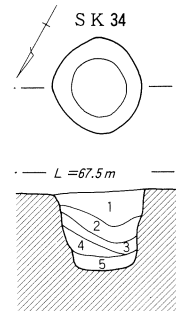
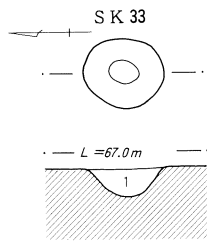
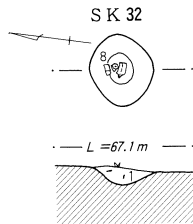
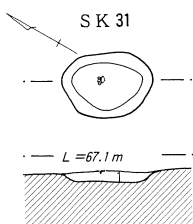
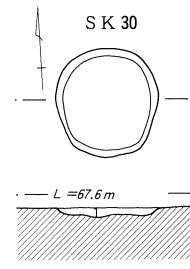
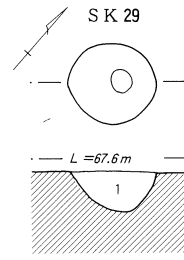
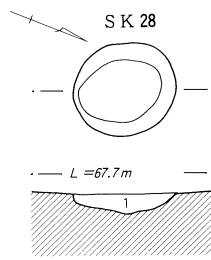
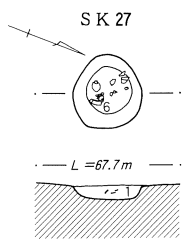
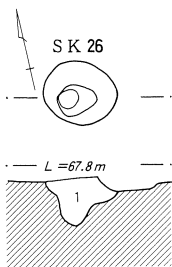
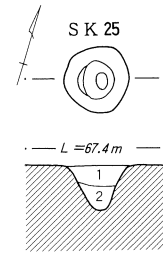
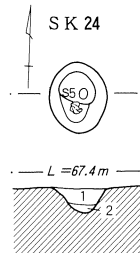
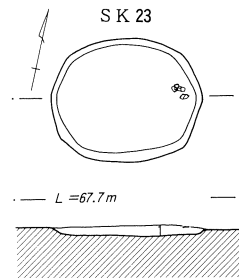
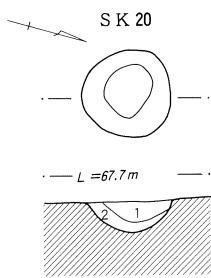
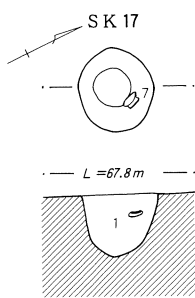
SK18・21・22

- 1 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト
As-C少 焼土粒少
- 2 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
Ⅷ層粒主体 Ⅷ層小ブロック少
焼土粒少
- 3 黒褐色 10YR3/2 細砂質シルト
As-C多 Ⅷ層粒多 Ⅷ層小ブロック



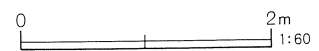
SK15・16・17・19・20・23~33

- 1 黒褐色 10YR2/3 粘土質シルト
As-C Ⅷ層粒多 Ⅷ層小ブロック
焼土粒 炭化物少
- 2 暗褐色 10YR3/4 粘土質シルト
Ⅷ層粒主体 Ⅷ層小ブロック少

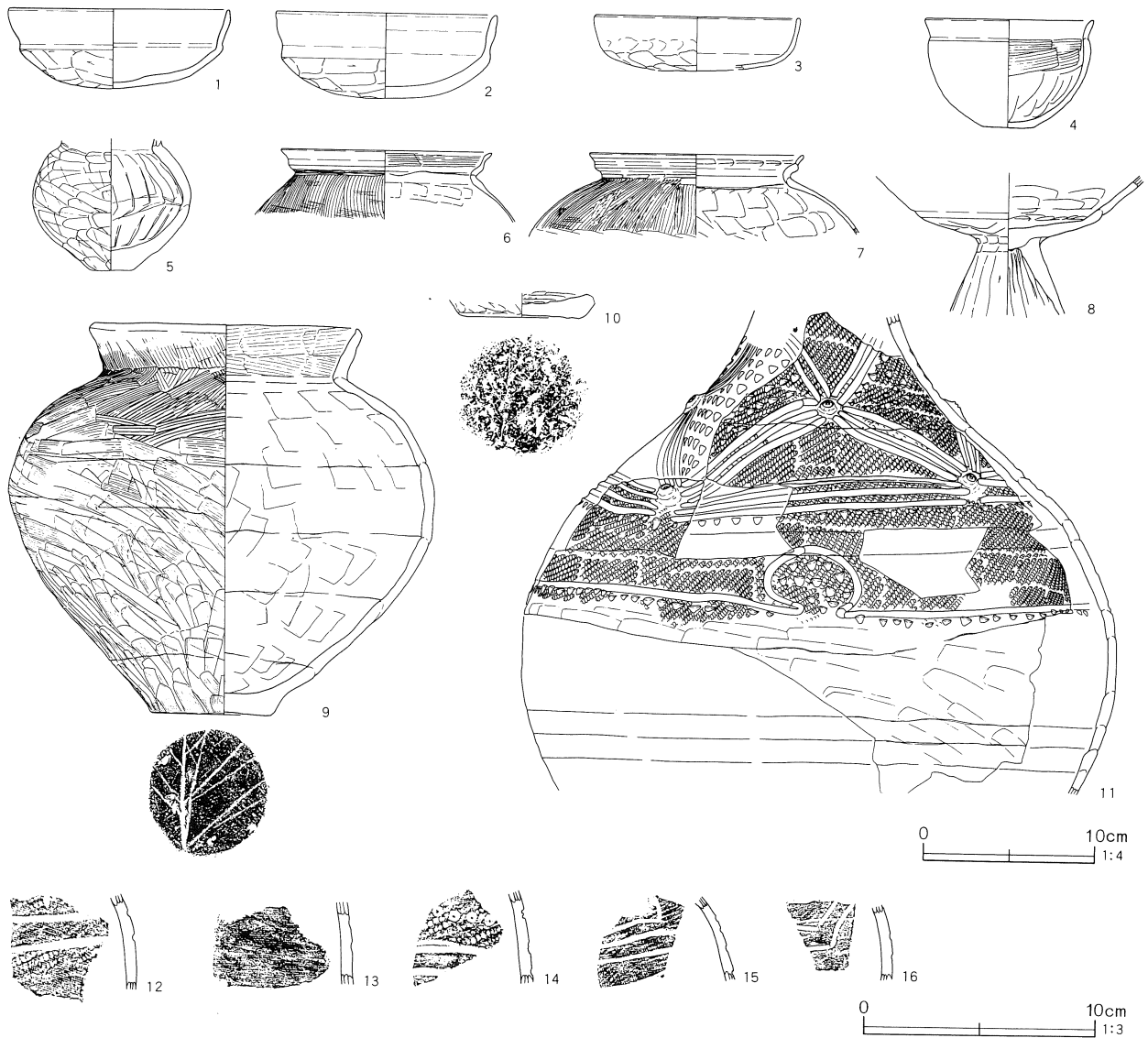


SK34

- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂
As-C少 Ⅷ層粒多 小ブロック多
- 2 暗褐色 10YR3/4 シルト As-C少
Ⅷ層粒多 小ブロック多
- 3 暗褐色 10YR3/3 シルト
- 4 褐色 10YR4/4 シルト 小ブロック主体
- 5 黒褐色 10YR3/2 シルト Ⅷ層粒多
Ⅷ層小ブロック少 炭化物多



第110図 土坑出土遺物(I)



長径110cm、短径105cm程度、深さ35cmであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。長軸方位はN-16°-Eであった。出土遺物は弥生時代中期に属する壺形土器2個体分、打製石斧2点のほか、粗粒砂岩剥片1点、チャート剥片6点、が出土した。第111図3の打製石斧は折取られたものである。出土遺物は上層に多く、床面直上で検出したものはない。

第4号土坑(第98・108・110・111図)

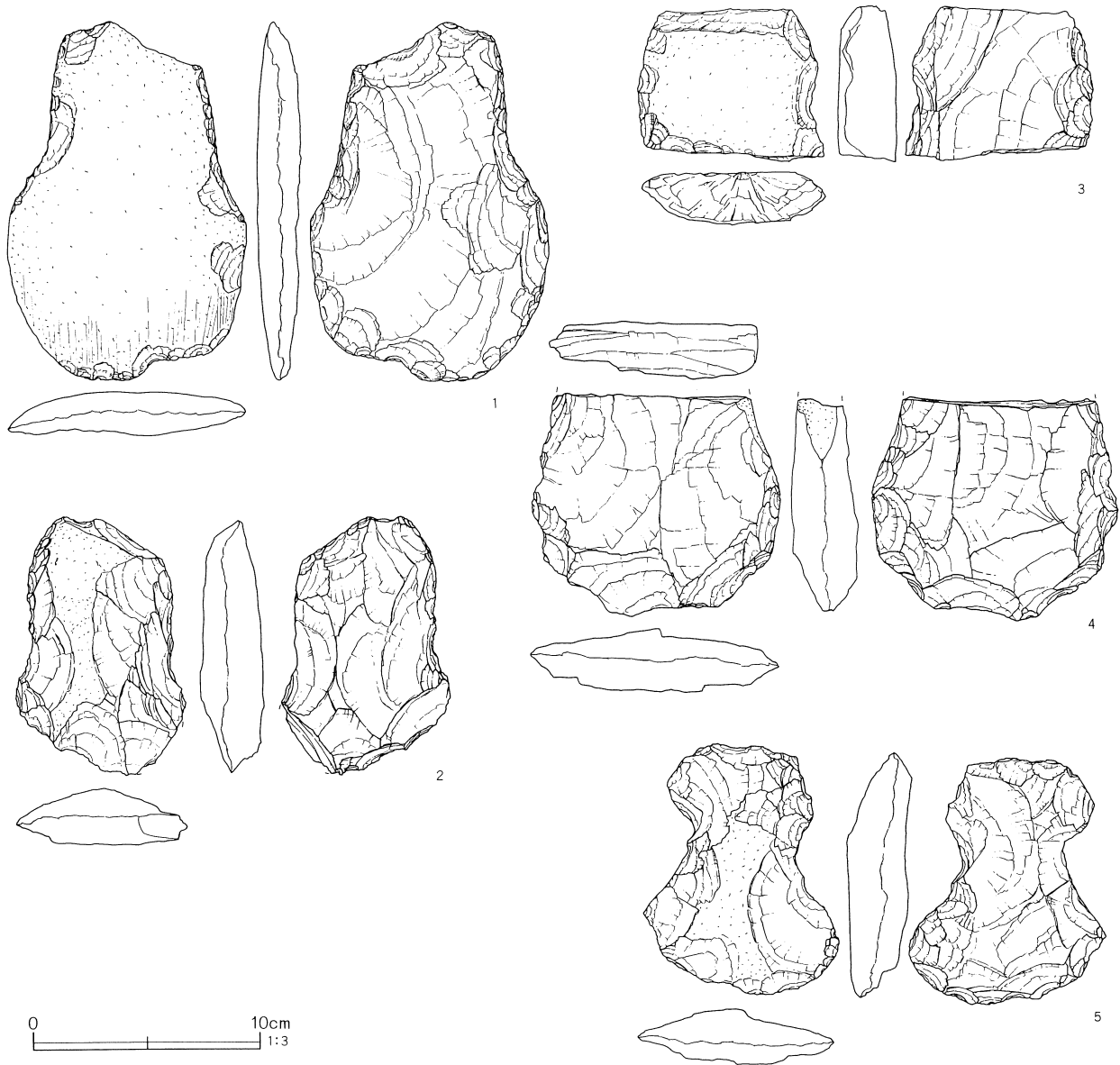
E6グリッドで検出した。平面形は不整な楕円形で

長径130cm、短径123cm、深さ25cmであった。底面はほぼ平坦で、壁面は直立していた。出土遺物は弥生時代中期に属する大型の壺形土器1点、打製石斧1点のほか、頁岩剥片1点を得た。第110図11の壺形土器は内面を上にして上層から出土したものである。類似した特徴をもつSK2と同様、折取られた打製石斧(第111図4)が出土した。

第5号土坑(第98・108・110図)

E6グリッドで検出した。平面形は円形で径155cm、

第111図 土坑出土遺物(2)



深さ35cmであった。底面には若干の凹凸があり、壁面はほぼ直立していた。出土遺物は古墳時代前期でも後半に属する完形の土師器壺1点(第110図9)を得た。他に土師器甕片が少量出土した。竪穴住居跡と近接しており、関係が想定できる。

第6号土坑(第98・108図)

D7グリッドで検出した。平面形は円形で径70cm、深さ36cmであった。底面はすり鉢状で、出土遺物はなかった。覆土の状況から古墳時代前期から中期に属す

るものと考えられる。

第7号土坑(第98・108図)

D7グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径約85cm、深さ30cmであった。底面はすり鉢状で、出土遺物はなかった。覆土の状況から古墳時代前期から中期に属するものと考えられる。

第8号土坑(第108・110・134図)

F3グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径

第5表 土坑出土遺物観察表 (第110・111図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考	
1	杯	12.9	4.7		ADF	A	橙色	100	SK 1		
2	杯	12.8	5.0		ABDF	A	橙色	60	SK 8		
3	杯	(11.8)			ABF	A	明赤褐色	20	SK13		
4	鉢	(9.8)	6.3	3.0	ABF	A	にぶい橙色	50	SK19	風化顕著	
5	小形壺		(7.3)	2.5	ABF	A	橙色	75	SK12	ヘラケズリ後板ナデ	
6	甕	(12.3)			ABF	A	にぶい橙色	25	SK27	外;ハケ内;板ナデ	
7	甕	(12.4)			ABF	A	浅黄橙色	20	SK17	ハケ後板ナデ	
8	高杯				ABF	A	橙色	75	SK32	風化	
9	短頸壺	16.0	22.6	6.9	ABF	A	明赤褐色	75	SK 5	ハケ後ハケナデ 木葉痕	
10	底部			6.5	AB	B	にぶい黄橙色	90	SK11	木葉痕	
11	壺				ABF	A	にぶい黄橙色	20	SK 4	単節LR	
12	壺				ABF	A	にぶい褐色	30	SK 2	単節LR	
13	壺		(8.7)		ABD	A	褐色	35	SK 2	条痕文	
14	壺				AB	A	にぶい橙色		SK 2	単節LR	
15	壺				AB	A	灰黄褐色		SK 2		
16	壺				AB	A	にぶい橙色		SK 2		
1	打製石斧	長さ15.8×10.5cm, 厚み1.9cm, 重さ406.4g								SK 2	
2	打製石斧	長さ11.4×7.5cm, 厚み2.8cm, 重さ255.7g								SK11	
3	打製石斧	長さ6.8×8.0cm, 厚み2.5cm, 重さ223.5g								SK 2	
4	打製石斧	長さ9.7×10.9cm, 厚み2.8cm, 重さ430.5g								SK 4	凝灰岩
5	打製石斧	長さ10.9×8.3cm, 厚み2.6cm, 重さ242.3g								SK24	ホルンフェルス

95cm、短径55cm、深さ12cmであった。底面は平坦であった。長軸方位はN-47°-Eであった。出土遺物は古墳時代後期に属する完形の土師器杯1点(第110図2)を得た。

第9号土坑(第108・134図)

F3グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径82cm、短径54cmであった。出土遺物はなかった。内部には河原石が認められた。

第10号土坑(第108・134図)

F3グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径130cm、短径59cm、深さ20cmであった。底面はすり鉢状で、長軸方位はN-57°-Eであった。出土遺物はなかった。周辺では縄文時代後期の土器片、石器類(第148図)が出土しており、調査時の所見では、縄文時代後期に属するファイアーピットの可能性が指摘された。

第11号土坑(第98・108・110・111図)

E6グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径

98cm、深さ25cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。出土遺物は弥生時代中期の壺形土器底部(第110図10)、打製石斧1点(第111図2)、他に少量の土器片を得た。

第12号土坑(第98・108・110図)

D6グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径91cm、深さ39cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。出土遺物は古墳時代中期の土師器小型壺1点(第110図5)、甕片を得た。

第13号土坑(第98・108・110図)

D6グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、長径169cm、短径150cm、深さ88cmであった。底面はすり鉢状で、中央がピット状に深くなっていた。出土遺物は奈良~平安時代頃の土師器杯(第110図3)と古墳時代前期の土師器台付甕片を得た。

第14号土坑(第98・108図)

D6グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径

63cm、短径44cm、深さ9cmであった。底面は平坦であった。長軸方位はN-22°-Eであった。出土遺物は少量の古墳時代前期の土師器甕片を得たが、図示できるものはなかった。

第15号土坑(第98・109図)

E 6グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径55cm、深さ25cmであった。底面はすり鉢状で、出土遺物はなかったが、覆土を共通にするSK17・19等の出土遺物等から、古墳時代前期のものと思われる。

第16号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は円形で、径90cm前後、深さ36cmであった。底面はすり鉢状で、中央が深くなっていた。出土遺物はなかった。覆土を共通にするSK17・19等の出土遺物等から、古墳時代前期のものと思われる。

第17号土坑(第98・109・110図)

E 5グリッドで検出した。平面形は円形で、径65cm程度、深さ50cmであった。底面はすり鉢状で、壁面は直立していた。出土遺物は第110図7の古墳時代前期のS字口縁甕を得た。

第18号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径156cm、短径106cm、深さ10cmであった。底面は平坦であったが、若干の凹凸があった。長軸方位はN-9°-Wであった。覆土にはAs-Cが含まれていた。出土遺物は古墳時代前期の土師器高杯片等を得たが、図示できるものではなかった。

第19号土坑(第98・109・110図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径100cm、短径82cm、深さ19cmであった。底面は平坦であったが、南端部がピット状に深くなっていた。底面には粘土塊があった。長軸方位はN-54°-Wであった。

出土遺物は古墳時代前期の土師器鉢(第110図4)のほか、台付甕片を得た。

第20号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は円形で、径70cm、深さ25cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。覆土を共通にするSK17・19等の出土遺物等から、古墳時代前期のものと思われる。

第21号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径60cm、短径55cm、深さ10cmであった。底面はほぼ平坦で、若干の凹凸があった。長軸方位はN-12°-Wであった。出土遺物はなかった。

第22号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径65cm、短径55cm、深さ5cmであった。底面はすり鉢状であった。長軸方位はN-50°-Eであった。出土遺物は弥生時代中期の壺形土器片を少量得たが、流入したものであろう。

第23号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径120cm、短径97cm、深さ8cmであった。底面は平坦であった。長軸方位はN-14°-Wであった。出土遺物は古墳時代前期の土師器台付甕片を得たが、図示できるものではなかった。

第24号土坑(第98・109・111図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径55cm、短径45cm、深さ20cmであった。底面はすり鉢状であった。長軸方位はN-3°-Wであった。出土遺物は縄文時代の分銅形打製石斧1点(第111図5)を得た。ホルンフェルスで、242.3gであった。

第25号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は円形で、径50cm、深さ35cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物はなかった。

第26号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径60cm、短径50cm、深さ40cmであった。底面はすり鉢状で、中央がピット状に深くなっていた。長軸方位はN-13°-Eであった。出土遺物はなかった。

第27号土坑(第98・109・110図)

E 5グリッドで検出した。平面形は円形で、径59cm、深さ12cmであった。底面は平坦であった。出土遺物は古墳時代前期の土師器S字口縁台付甕(第110図6)を得た。

第28号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径80cm程度、深さ15cmであった。底面はほぼ平坦であったが、若干の凹凸があった。出土遺物は古墳時代前期の土師器甕片を得たが、図示できるものではなかった。

第29号土坑(第98・109図)

E 5グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径70cm程度、深さ3cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物は古墳時代前期の土師器台付甕脚部を得たが、図示できるものではなかった。

第30号土坑(第98・109図)

4. その他の遺構

その他、集落跡周辺を中心に土器だまり(SX1)1箇所、畠跡1箇所を検出した。

SX1 土器だまり(第98・112図)

E 6グリッドで検出した。平面形は不整な楕円形を二つつないだような形態で、確認面における上端の長

E 5グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径85cm前後、深さ9cmであった。底面は平坦であったが、若干の凹凸があった。出土遺物はなかった。

第31号土坑(第98・109図)

D 6グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径70cm、短径50cm、深さ10cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは傾斜していた。長軸方位はN-61°-Eであった。出土遺物は古墳時代前期の土師器甕片を得たが、図示できるものではなかった。

第32号土坑(第98・109・110図)

D 6グリッドで検出した。平面形は円形で、径55cm前後、深さ15cmであった。底面はすり鉢状であった。出土遺物は古墳時代前期の土師器高杯(第110図8)と台付甕片を得た。

第33号土坑(第98・109図)

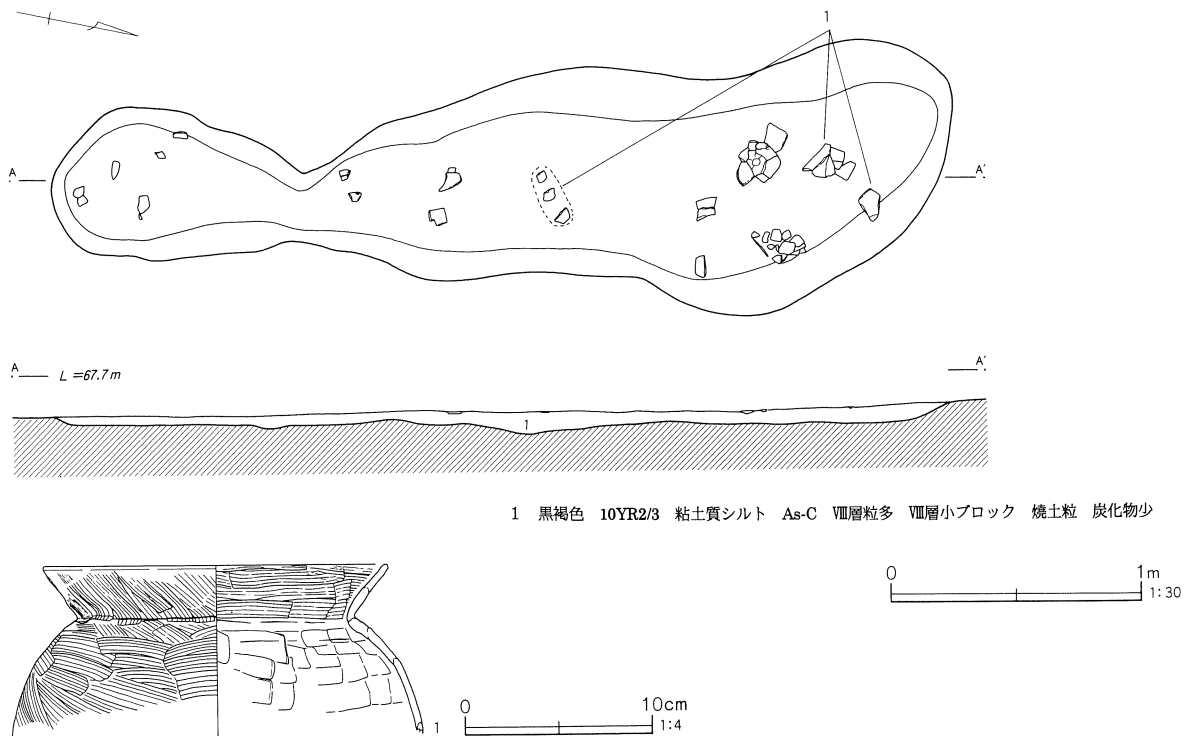
D 6グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径62cm、短径55cm、深さ24cmであった。底面はすり鉢状であった。長軸方位はN-Sであった。出土遺物はなかった。

第34号土坑(第99・109図)

D 5グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径70cm前後、深さ62cmであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。出土遺物はなかった。他の遺構と位置的に離れており、時期・性格は不明である。

さ最長350cm、最大幅96cm、深さ10cmであった。長軸の方位は、N-18°-Wであった。覆土は粘土質シルトで、集落跡全体に形成された土壌である。ピット、土坑の覆土と共通していた。古墳時代前期の土師器甕・壺片を中心とした遺物を得た。図示できたのは第112図1のみである。

第112図 土器だまり



SX 2 畝跡(第98・113図)

D 6・E 6グリッドで検出した。集落跡のうち、竪穴住居跡のあった部分より若干標高の低い微高地傾斜部分に立地し、全体で南北10.8m、東西9.8mの範囲に検出する事ができた。覆土は粘土質シルトで、集落跡

全体に形成された土壌である。土器だまり、ピット、土坑の覆土と共通していた。幅約70～120cmの畝間を検出したもので、上部は削平されていた。一部に畝間の重複があった。畝間の方位はほぼN-Sであった。

5. ピット

ほとんどのピットを古墳時代前期の集落跡周辺で検出した。覆土は黒褐色の粘土質シルトが主体で、焼土や炭化物を含んでいた。掘立柱建物跡と類似しており、集落跡によって形成された土壌と考えられる。出土遺物は少なかったが、覆土の状況からみて、古墳時代前期の遺構と考えられる。

D 6グリッドで検出した。楕円形で長径51cm、短径46cm、深さ18cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 1 (第98・114図)

D 6グリッドで検出した。平面形は楕円形で長径59cm、短径51cm、深さ25cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。

P 3 (第98・114図)

E 5グリッドで検出した。楕円形で長径55cm、短径42cm、深さ8cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 4 (第98・114図)

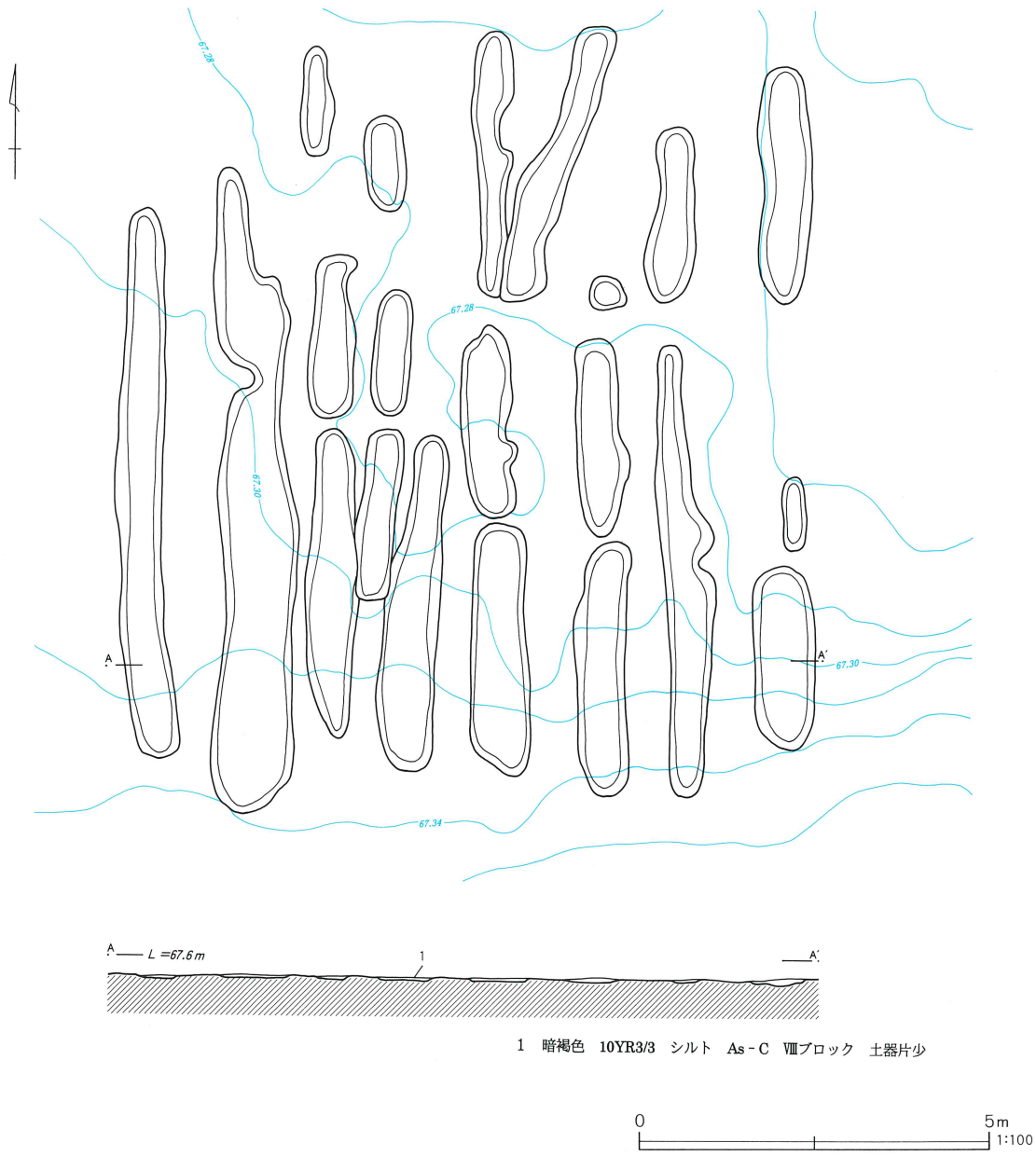
E 5グリッドで検出した。ほぼ円形で径約30cm、深さ6cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 2 (第98・114図)

P 5 (第98・114図)

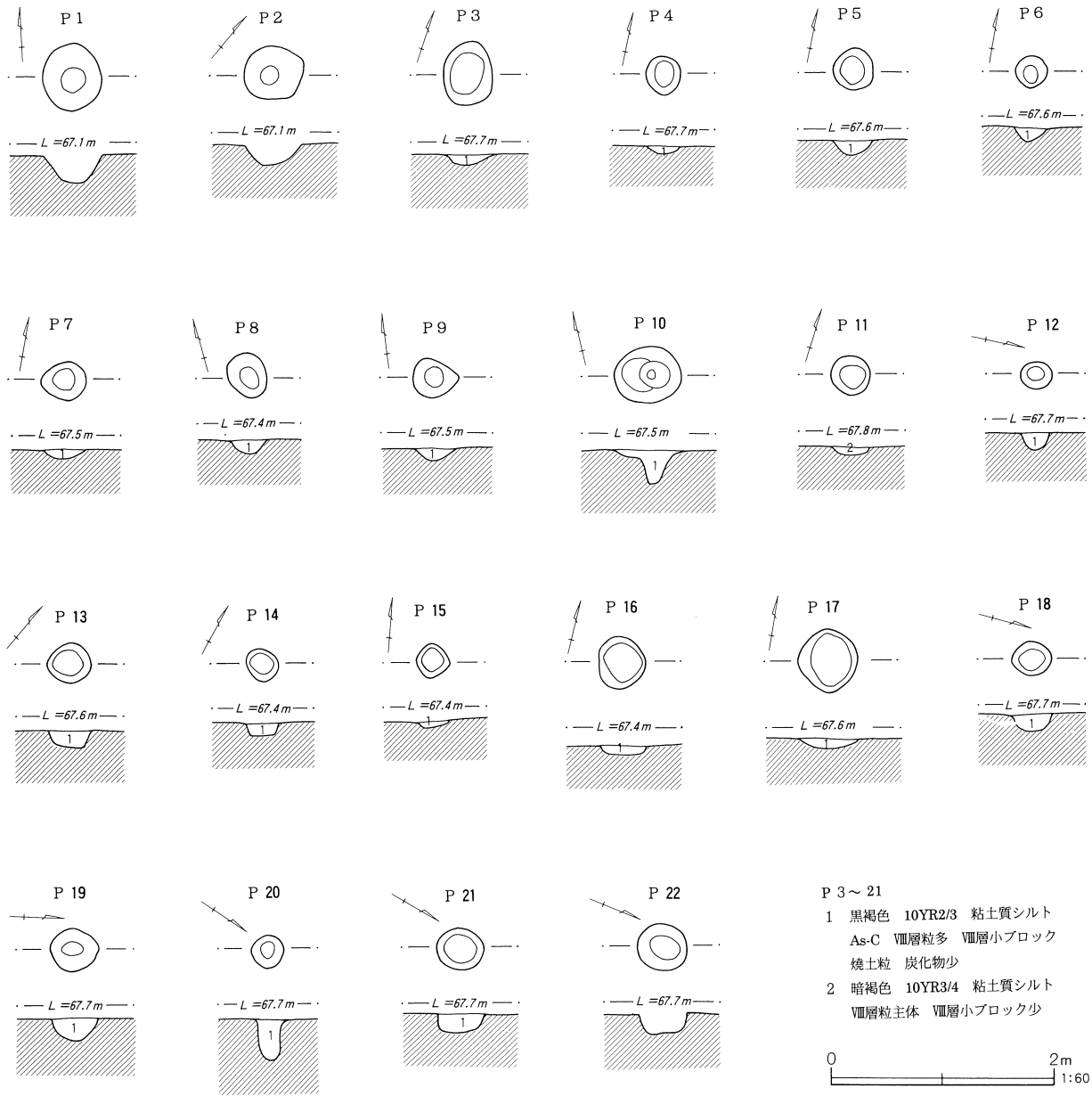
E 5グリッドで検出した。円形で径36cm、深さ11cm

第113図 畠跡



1 暗褐色 10YR3/3 シルト As-C VIIブロック 土器片少

第114図 ピット



であった。底面はすり鉢状であった。

P 6 (第98・114図)

E 5グリッドで検出した。円形で径27cm、深さ10cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 7 (第98・114図)

E 5グリッドで検出した。楕円形で長径41cm、短径

35cm、深さ9cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 8 (第98・114図)

E 6グリッドで検出した。楕円形で長径40cm、短径34cm、深さ11cmであった。底面はすり鉢状であった。

P 9 (第98・114図)

E 6グリッドで検出した。不整な円形で径40cm程度、

深さ10cmであった。底面はすり鉢状であった。

P10(第98・114図)

E6グリッドで検出した。楕円形で長径60cm、短径50cm、深さ29cmであった。底面は平坦で、一部が深くなっていた。柱穴と思われる。

P11(第98・114図)

E6グリッドで検出した。円形で径35cm、深さ6cmであった。底面はすり鉢状であった。

P12(第98・114図)

E6グリッドで検出した。円形で径約25cm、深さ15cmであった。底面はすり鉢状で、壁面の立ち上がりは急であった。

P13(第98・114図)

E6グリッドで検出した。ほぼ円形で径37cm程度、深さ14cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。覆土中から少量の古墳時代前期に属する土師器台付甕片を得たが、図示できるものはなかった。

P14(第98・114図)

E6グリッドで検出した。円形で径29cm、深さ10cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。

P15(第98・114図)

E6グリッドで検出した。方形で一辺約20cm、深さ5cmであった。底面は平坦であった。

P16(第98・114図)

E6グリッドで検出した。ほぼ円形で径45cm、深さ7cmであった。底面は平坦であった。

P17(第98・114図)

E6グリッドで検出した。円形で径56cm、深さ9cmであった。底面はすり鉢状であった。

P18(第98・114図)

E6グリッドで検出した。楕円形で長径34cm、短径30cm、深さ16cmであった。底面はすり鉢状で、壁面の立ち上がりは急であった。

P19(第98・114図)

E6グリッドで検出した。楕円形で長径43cm、短径39cm、深さ約20cmであった。底面はすり鉢状で、壁面の立ち上がりは急であった。

P20(第98・114図)

E6グリッドで検出した。ほぼ円形で径約30cm、深さ30cmであった。壁面の立ち上がりは垂直で、柱穴であったと思われる。

P21(第98・114図)

E6グリッドで検出した。楕円形で長径41cm、短径36cm、深さ17cmであった。底面は平坦で、壁面の立ち上がりはほぼ垂直であった。

P22(第98・114図)

E6グリッドで検出した。ほぼ円形で径40cm程度、深さ約20cmであった。底面はほぼ平坦で、壁面の立ち上がりは急であった。覆土中から少量の古墳時代前期に属する土師器甕片を得たが、図示できるものはなかった。

6. 水田跡 (第115～132図)

G4グリッドを中心とした部分、および調査範囲北側一帯に広く検出できた。

断面調査による水田耕作土VII-2層の確認をもって、その上面で表土除去を行った。VII-2層水田跡を覆う

土壌はⅦ-1層水田跡を構成する水田土壌で、マンガ
ン結核層Ⅶ-1層である部分が多かった。洪水砂等に
覆われた水田跡は検出できなかった。

水田跡の構成土壌は、水田耕作土がⅦ-2層、直下
の床土層には酸化鉄が集積しており、これをⅦ-2層、
さらに下方には部分的にマンガ
ン結核層Ⅶ-2層が認められた。

特に水田土壌が厚かったG4グリッド周辺では、下
層のシルトの堆積が厚く、マンガ
ン結核の集積はⅧ層
上面まで認めることができなかった。耕作土Ⅶ-2層
には、As-Cが多く混入していた。

検出した水田跡は、幅広で長く耕地を貫く畦畔によ
って形成された6×6~10×15m程度の大区画が、幅
の狭い小畦畔によって1×2~2×3m程度の小区画
水田跡に分けられていた。畦畔の方位は南北方向のも
のがN-S~N-18°-E程度、東西方向のものがN-
90°~100°-E程度であった。1つの大区画内には、
10~20筆ほどの小区画水田跡が検出できた。

上層水田等の攪乱によって水田土壌が遺存する範囲
が限られていたため、全体像のわかる大区画は検出で
きなかった。

小区画水田跡は、区画のわかるもので1033筆であ
った。

水田面の比高差は、大区画間、小区画間でも0~1
cm程度であった。水懸かりは南から北および西から東
を基本としていた。用水の供給は、幹線灌漑水路跡
SD11およびSD5・6から小規模な支線を引いて行われ
ていた。SD11には、多数の水口や尻水口を検出できた。
また、G4グリッドSN713・714間(第123図)、および
D6グリッドのSN1444・1442とSN1443・1445間では
畝畝(第116図)が検出できた。小規模水路は小区画
水田跡内部で止まっていた。

耕作土は層厚2~20cm、酸化鉄集積層が層厚10~30
cm程度であった。土壌分析ではプラントオパール
の検出率が少ないが、平安時代までの数値と比較してさ
ほど見劣りする数値ではない。

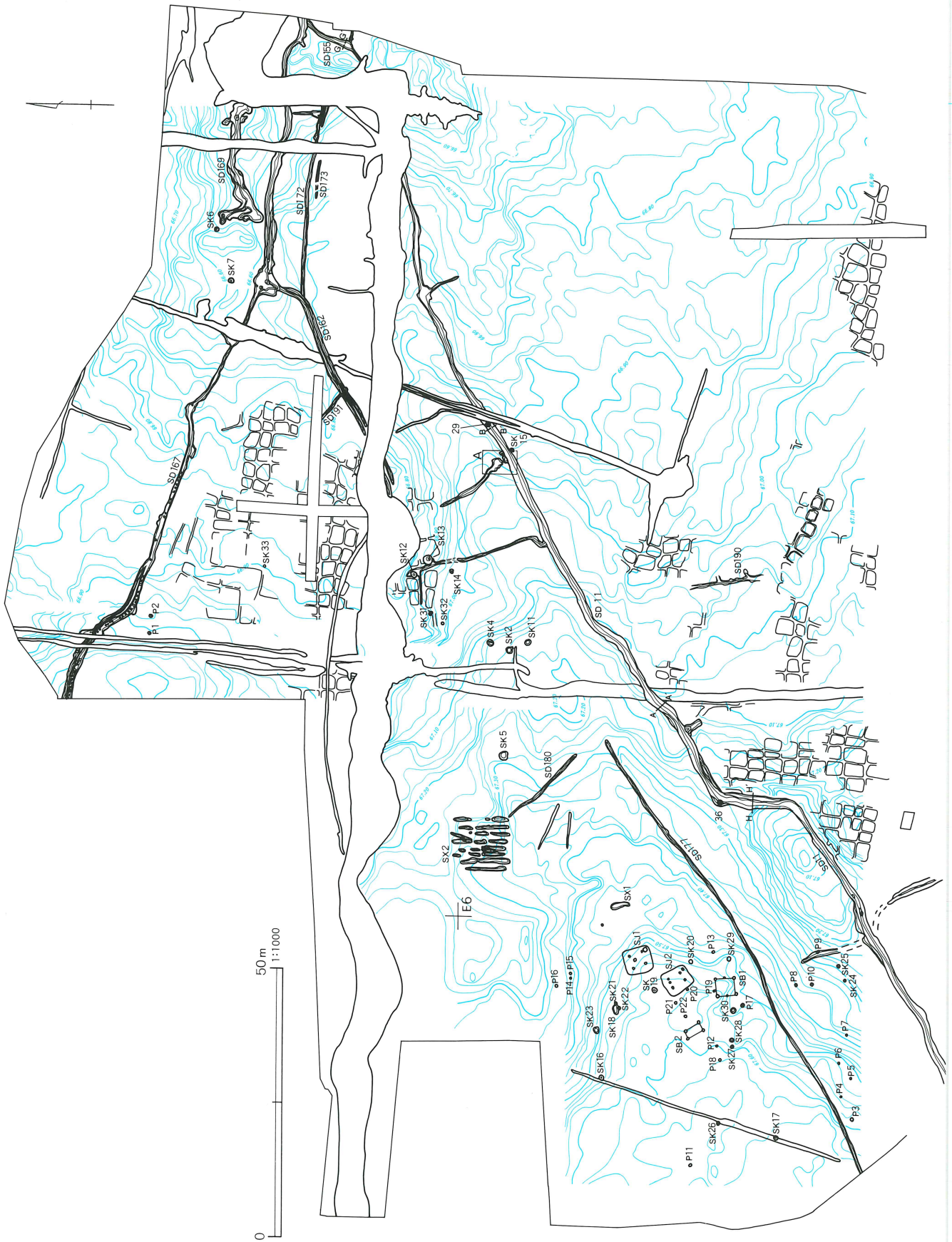
水田土壌の分布域は、基本となる灌漑水路跡SD11
の南側にほぼ限定されていた。この地割は、As-Cを
覆土にもつ古墳時代前期の住居跡SJ1を中心とする集
落域とSD11を隔てて区別するものであった。水田耕作
土中のAs-C、古墳時代前期の土器片等を考慮すると、
検出した水田跡が古墳時代前期のものであると判断で
きる。

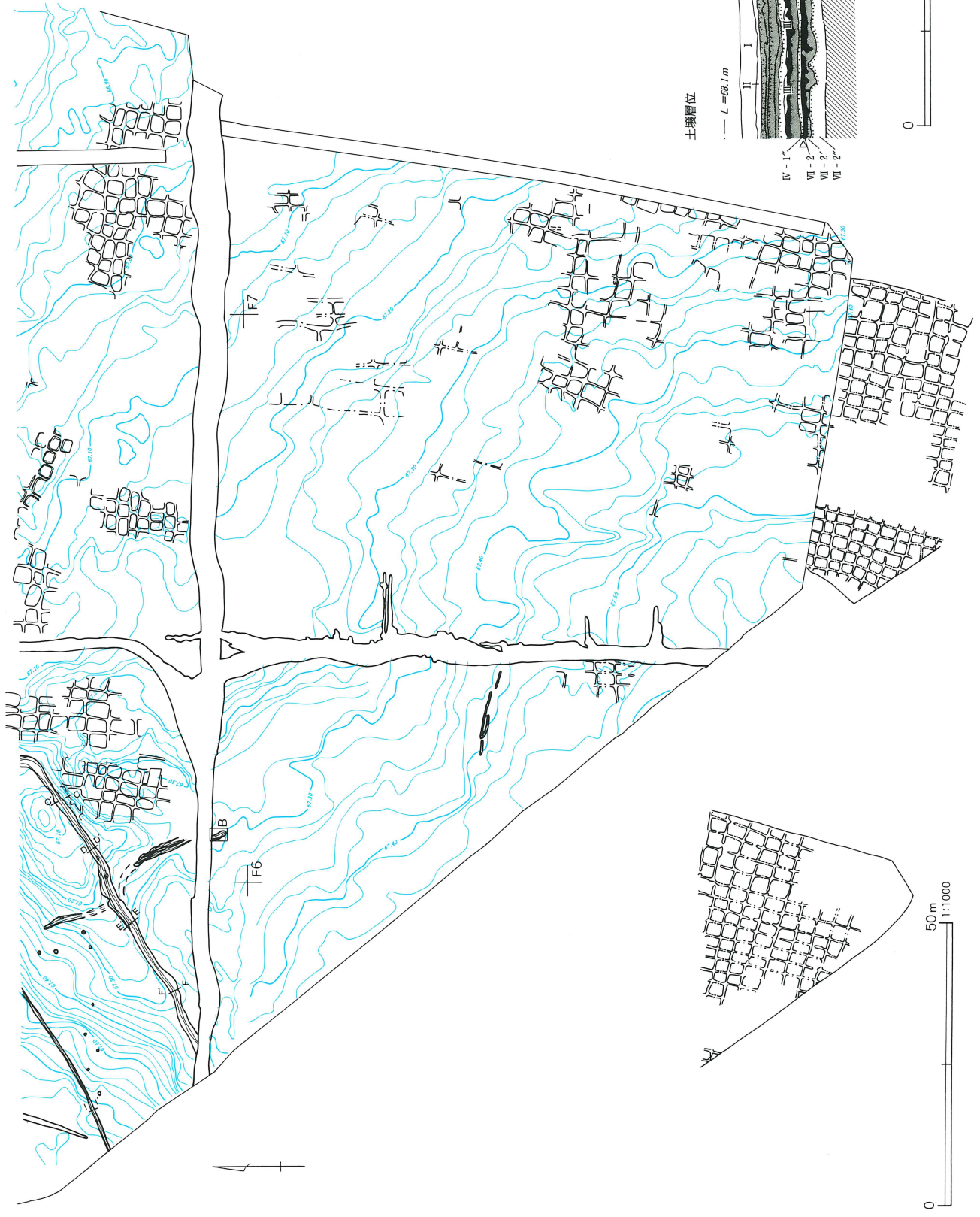
なお、SD11は、古墳時代前期末に大規模な浚渫を経
ており、中期の土器を出土する上層のSD7は調査範囲
南部のJ4グリッドで流路が一部変更されていた。女
堀川における取水口の変更によるものと思われる。集
落に接する北側E5・6グリッド付近では、SD11上層
にSD7の覆土が認められなかった。同一の覆土をもつ
溝跡は、SD11の北20mほどを並行するSD177であり、
古墳時代中期に至り、流路を変更し、水田域を拡大し
たものと考えられる。

ところで、F6付近を中心とする北側部分では、水
田耕作土がほとんど遺っていなかった。この付近では
多くの小畦畔をマンガ
ン結核の帯状分布として検出し
た。一部に遺存していた耕作土を有する水田跡との畦
畔の繋がりから、同一水田跡と判断した。しかし、耕
作土の遺りがよいG4グリッド付近の小区画水田跡は
非常に小規模であり、北側範囲で検出した小区画水田
跡とは異なる様相をもっていた。G4グリッドの小区
画水田跡はSD11上層のSD7に切られる重複関係にあ
り、異なる時期の所産である可能性を否定するもので
はない。とはいえ、耕作土が遺存した小区画水田跡は
北側でも非常に小規模であることや、いずれの地区の
耕作土からもAs-Cが検出できることは、時期的に大
きな差がなかったことを表すものとする。また、SD11
と水田土壌の重複関係も、畦畔とSD11流路の蛇行や断
面調査の結果の共通する状況(第121図)からみて、SD11
の浚渫後、SD7掘削時に起こったものと捉えられる。

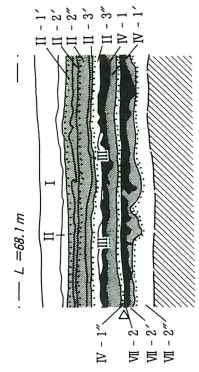
出土遺物は、耕作土内から古墳時代前期の土器片
少量を得たが、図示することはできなかった。

第115図 第4遺構面北部の水田跡全景

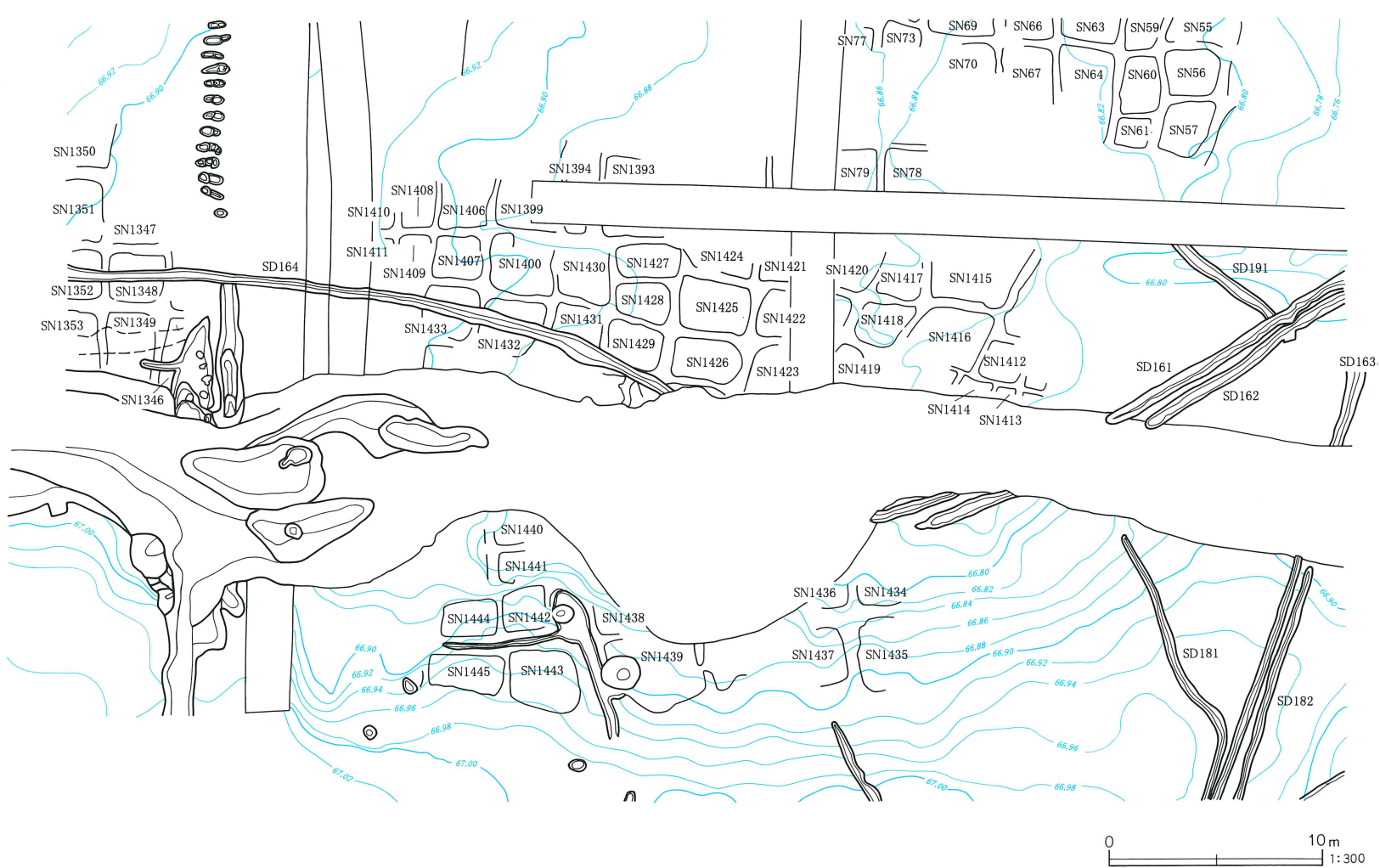




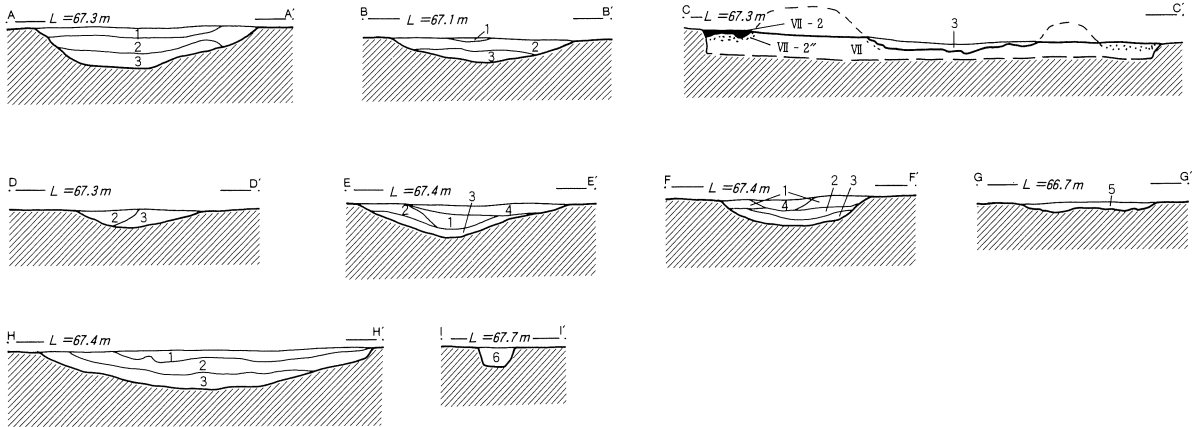
土壤層位



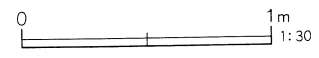
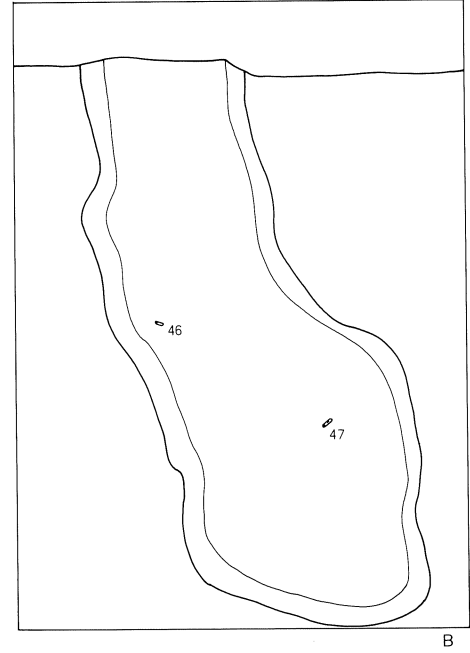
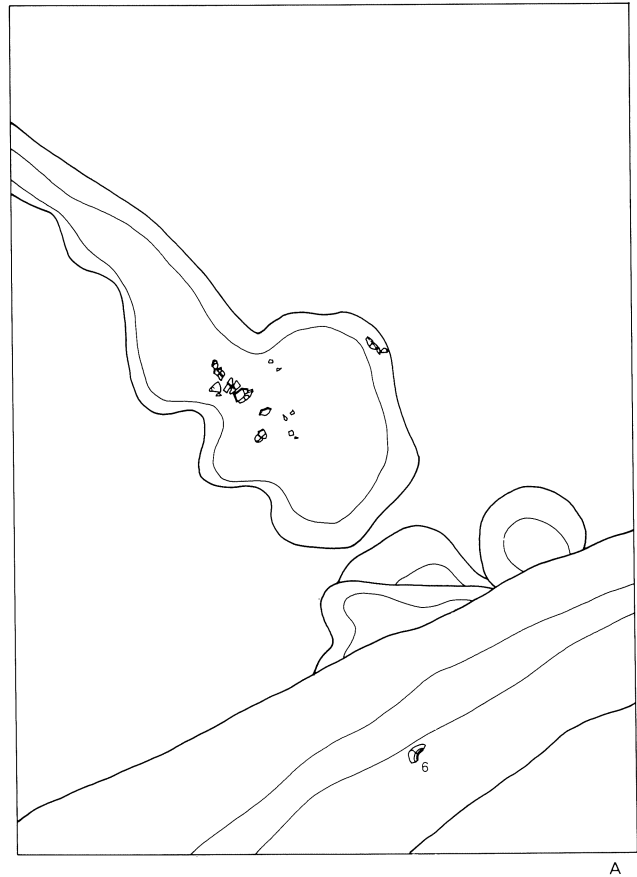
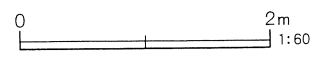
第116図 第4遺構面北部の水田跡微細図



第117図 第11号溝跡遺物出土状況(I)



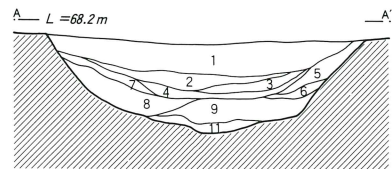
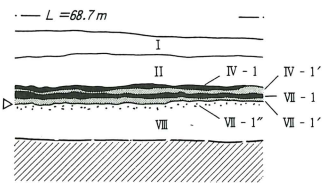
- 1 黒褐色 10YR2/2 シルト As-C多 VIII層粒多
- 2 黒褐色 10YR2/3 シルト As-C少 VIII層粒少 白色粒少
- 3 黒褐色 10YR3/2 シルト質細砂 As-C少 炭化物多 土器片多
- 4 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂 鉄斑少 マンガン結核多
- 5 暗褐色 10YR3/3 中砂 As-C多 土器片多 小礫少 SD155
- 6 黒褐色 10YR2/3 細砂質シルト As-C多 VIII層粒少 VIII層小ブロック多 SD177



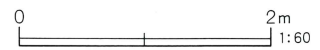
第118図 F 4 グリッド周辺第4遺構面



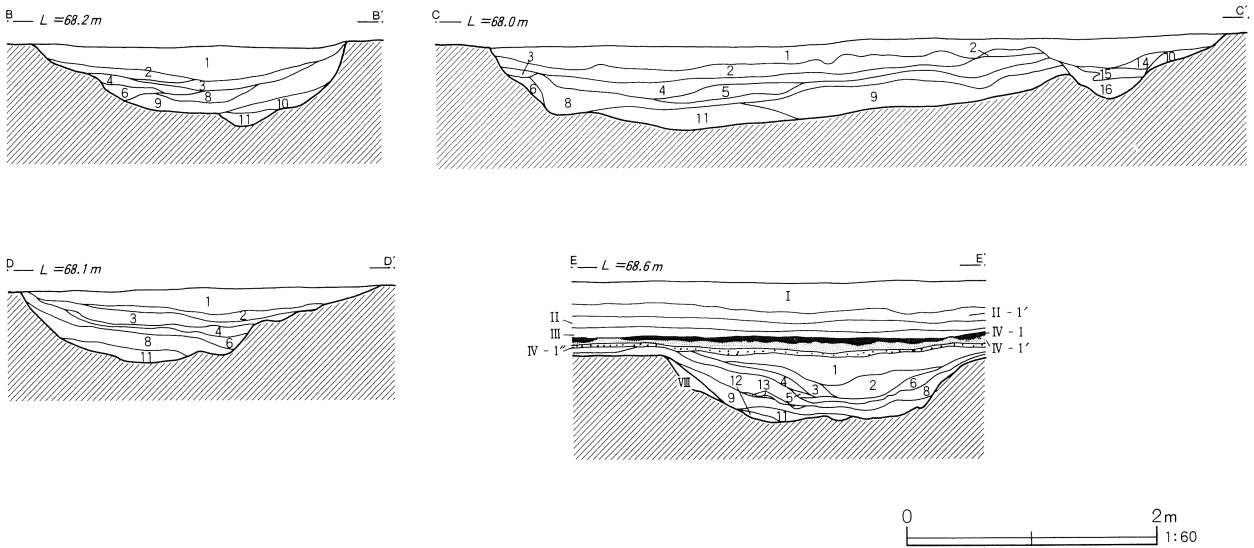
土壌層位



- 1 黒褐色 10YR2/2 シルト質粘土 黒色有機質土
- 2 暗褐色 7.5Y3/4 シルト質粘土 黒色有機質土
- 3 暗褐色 10YR3/3 細砂質粘土 黒色有機質土
- 4 黒褐色 10YR2/2 粘土 黒色有機質土 クロスラミナあり
- 5 黒褐色 10YR2/3 火山灰まじり細砂 As-C多
- 6 黒褐色 10YR2/2 粘土
- 7 黒褐色 10YR2/2 粘土 VIIブロック混じる
- 8 灰黄褐色 10YR4/2 粘土 鉄斑多
- 9 褐灰色 10YR4/1 粘土 酸化鉄結核多
- 10 黒褐色 10YR2/2 シルト質粘土
- 11 黒褐色 10YR3/2 粗砂
- 12 灰黄褐色 10YR4/2 シルト質粘土 鉄斑集積層
- 13 黒褐色 10YR3/2 シルト質粘土 斑鉄層
- 14 黒褐色 10YR3/2 粘土質シルト 酸化鉄結核少 有機物少
- 15 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト As-C少混入
- 16 黒褐色 10YR3/1 粘土質シルト As-C少混入



第119図 F 4 グリッド周辺第 4 遺構面土層図



7. 溝跡

ここでは、主要な溝跡に限って記述する。その他の溝跡については第9表を参照願いたい。

第7・11号溝跡(第115～132・143～145図)

K 4 グリッドから直線的に500m程北に延びた後、F 4 グリッドで北東方向に向きを変え、E 5・6・7、D 7グリッドまで300m以上続いていた。調査範囲東端で流路が乱れるものの、さらに東に連続していた。溝跡の東および南に水田域、北西に集落跡をのせた微高地が展開しており、境界線をなしていた。

J 4 グリッドでは、古墳時代中期まで継続するSD 8、SD12等がSD11と同様の地割りで重複しており、SD11が古墳時代を通じて基本的な水田域の地割りの基準をなしていたことがわかる。特にSD 7は、SD11上層に重なっており、J 4 グリッド以北ではSD11の掘り直し、もしくは浚渫として捉えることができる。

覆土は、下層のSD11底面付近にAs-Cを含む砂層が堆積しており、上層には黒褐色の粘質土が多く堆積していた。やや遅い流水が常時流れていたことがわかる。浚渫後のSD 7は、黒褐色の粘質土によって埋没してお

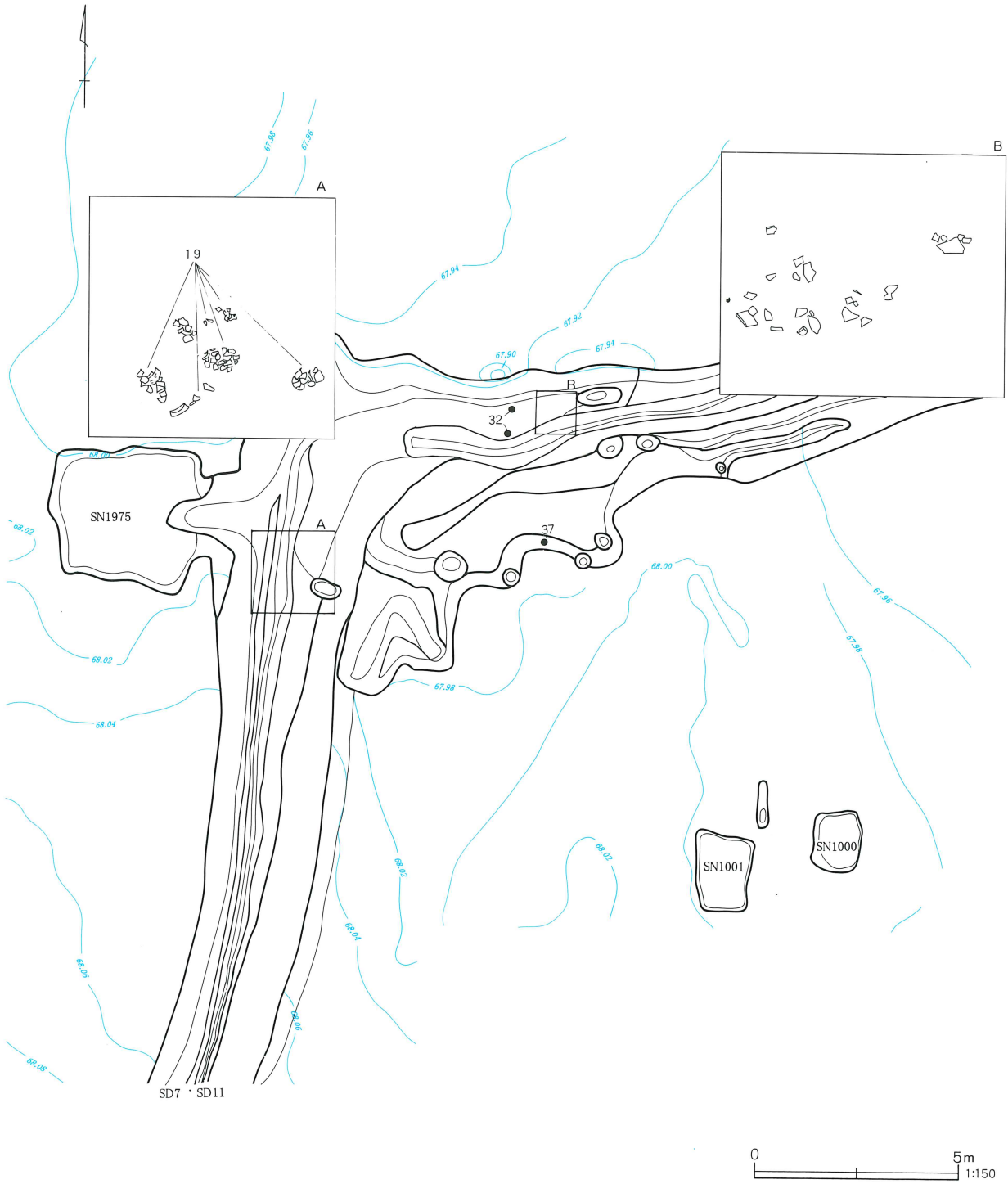
り、下層のSD11より少量の流水が常時流れていたことがわかる。G 4 グリッド以北では、水田跡への引水が認められており、幹線用水路跡としてよい(第121図)。

若干の蛇行はあったが、直線的な地割りをもって掘削されていた。K 4 グリッドでは、女堀川旧流路の蛇行部分に近接しており、該当部分の溝跡が、女堀川の水田方向に変形していたことから、取水口付近であったと考えられる(第129図)。

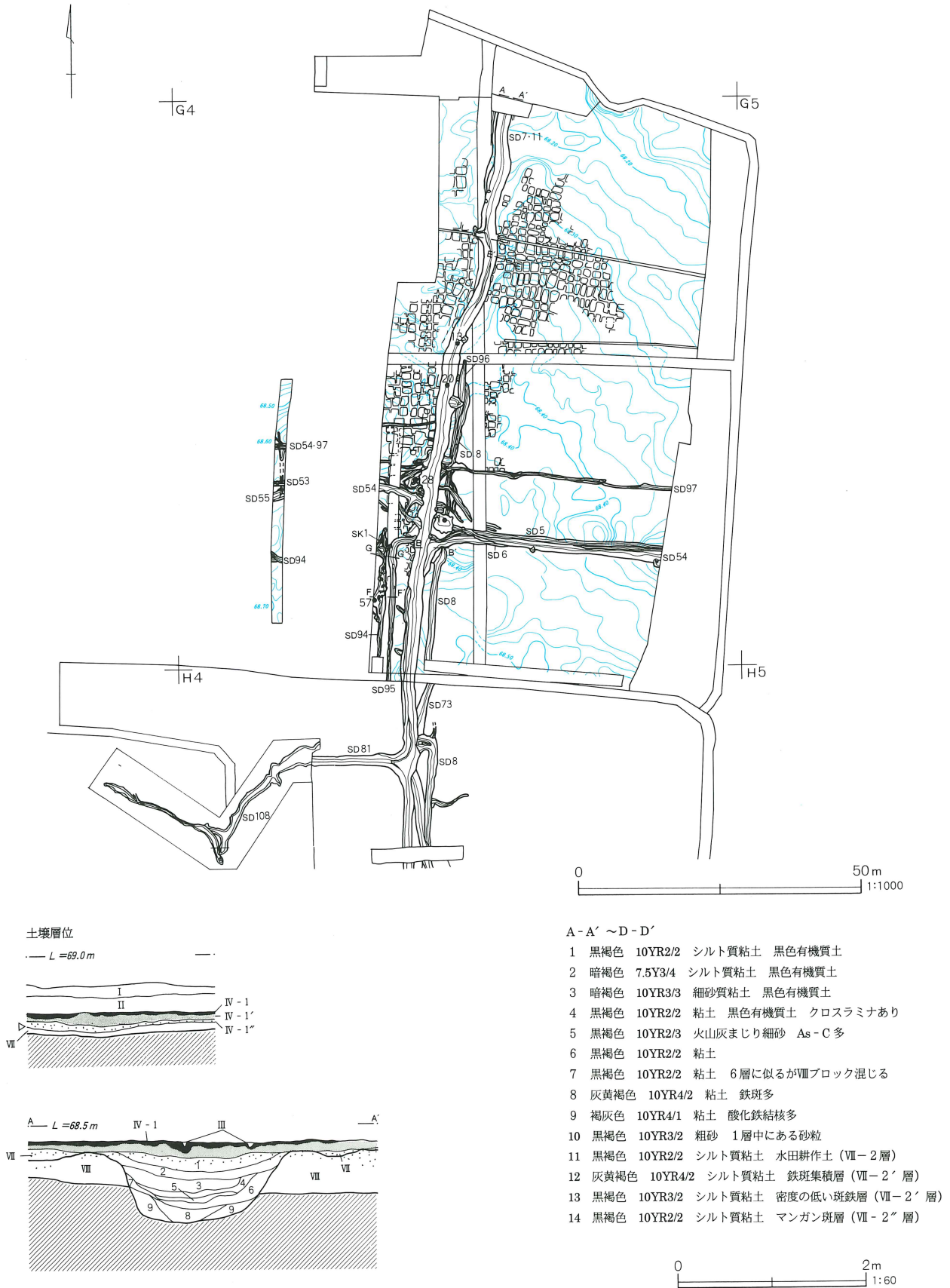
SD 7・11は、H 4 グリッドで幹線用水路跡SD79・80・81を、G 4 グリッドで幹線用水路跡SD 5・6を直角に分流していたが(第121図)、SD 5・6の地割りは古墳時代後期まで継続されたものである。幹線用水路から取水する小規模用水路は、調査範囲北側のD 6・7、E 6・7グリッドで多く検出できた。末端に水田跡が検出できた部分では、小畦畔の中央を流れる畝畝となっていた。小規模用水路は、ほとんどがSD11から直角方向に掘削されていた。

浚渫の痕跡、および上層のSD 7をなす覆土は、集落近辺のE 5グリッド付近で確認できなくなった。類似の覆土をもつ溝跡は、平行するSD177に認められた。

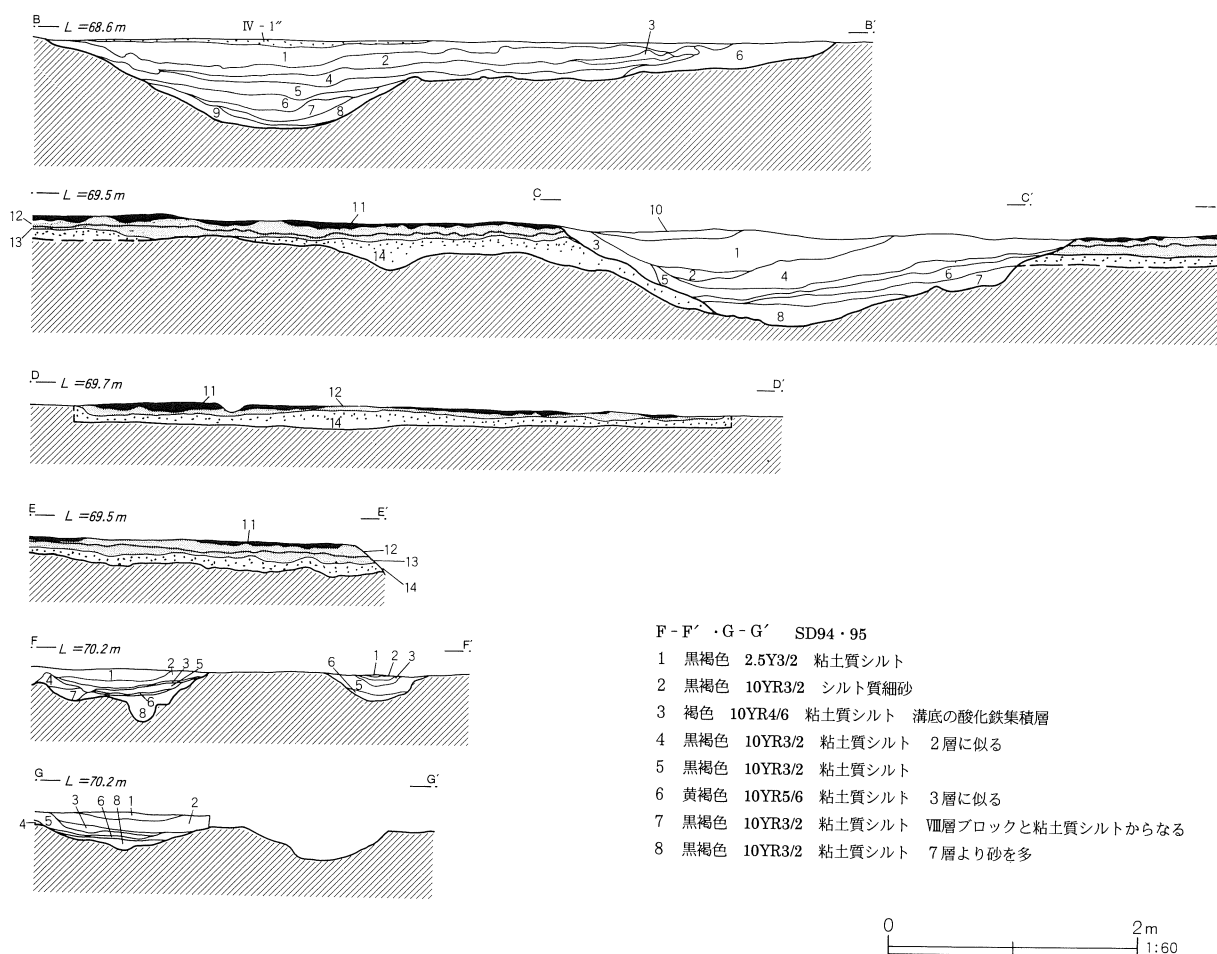
第120図 第11号溝跡遺物出土状況(2)



第121図 G 4 グリッド周辺第4遺構面



第122図 G 4 グリッド周辺第 4 遺構面土層図



当地区では、浚渫時に地割を踏襲せず、若干北側に用水路を掘り直し、水田域を広げたものと考えられる。

G 4 グリッド北端では、西岸に畦畔を検出した。また、G 4 グリッド中央部の水田跡における畦畔は、SD11の蛇行に沿って延びていた。SD11は、G 4 グリッドの水田土壌とは重複関係にあるものだが、断面調査によれば、これは浚渫後の溝跡部分であるSD7との重複に限られていた。SD11がG 4 グリッド周辺の水田域でも主要な用水路となっていたものと考えられる。

北側調査範囲では上面が削平されていたため、具体的な規模は明らかにできなかったが、畦畔が遺存していたG 4 グリッド部分における規模は、上端の幅約2～4m、下端の幅約1～2m、深さ1.3m程度であった。

上層のSD7は深さ0.7m程度であった。

出土遺物は、下層のSD11底面付近から古墳時代前期の土師器甕・高杯・小形壺・器台等が得られた。SD7からは、古墳時代中期の土師器甕・小形壺などが出土した。特にF 4 グリッドの屈曲点では、上層のSD7、下層のSD11ともに少量ながら図示できる土師器片を得ることができた(第120・143・144図)。また、SD5・6を東に分流していたG 4 グリッドでは、水口内部に第143図28の壺が逆位で出土した。支流の小規模用水路では、第115・117図Aに示した位置等から土器片(第143図6等)が、第115・117図Bに示した位置から第144図46・47の管玉が出土した。小規模な祭祀が行われた可能性がある。水口分流点には木杭の痕跡も認められた。

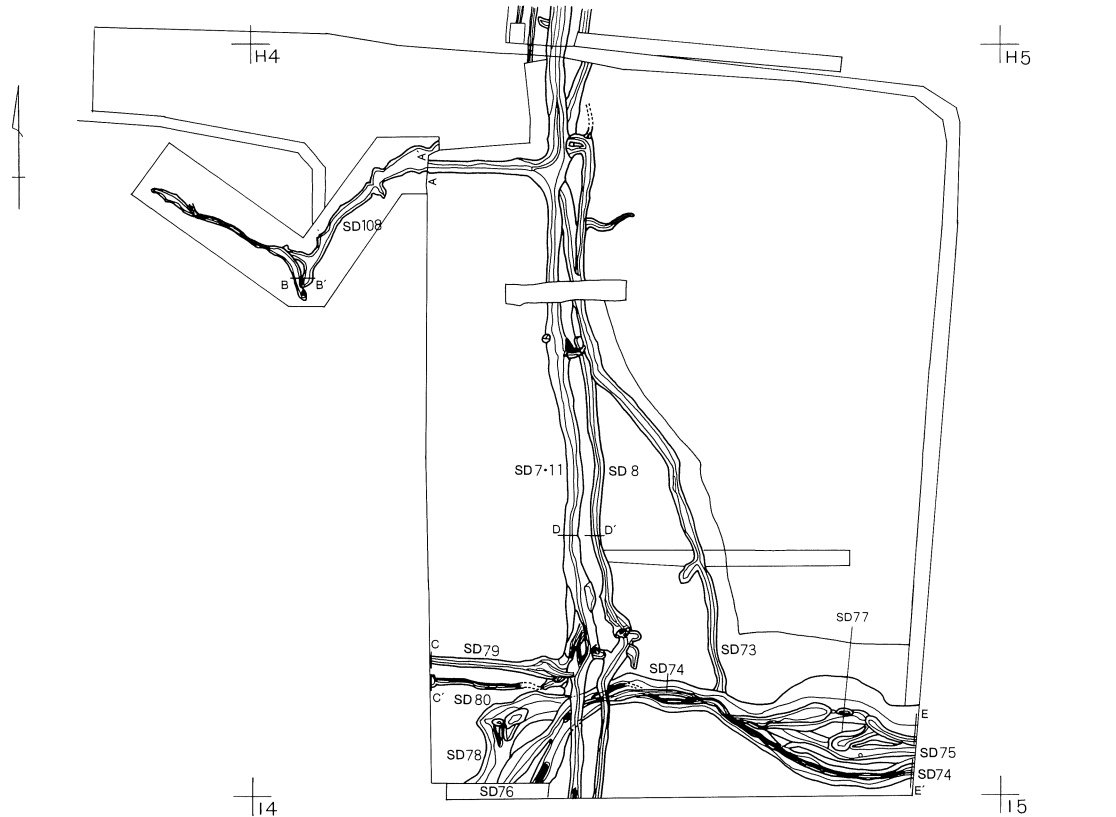
第123図 G 4 グリッド周辺Ⅶ- 2層水田跡微細図(1)



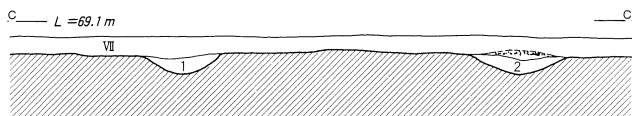
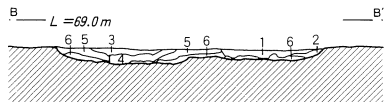
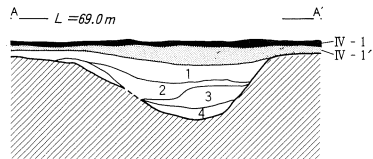
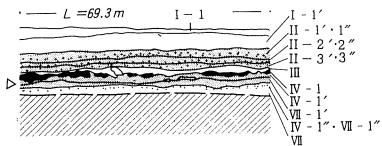
第124図 G 4 グリッド周辺VII-2層水田跡微細図(2)



第125図 H4グリッド周辺第4遺構面



土壤層位



A - A'

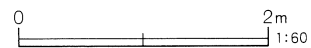
- 1 黒褐色 10YR2/2 シルト質粘土 黒色有機質土
- 2 暗褐色 7.5Y3/4 シルト質粘土 黒色有機質土
- 3 暗褐色 10YR3/3 細砂質粘土 黒色有機質土
- 4 灰黄褐色 10YR4/2 粘土 鉄斑多

B - B'

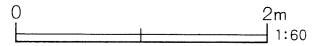
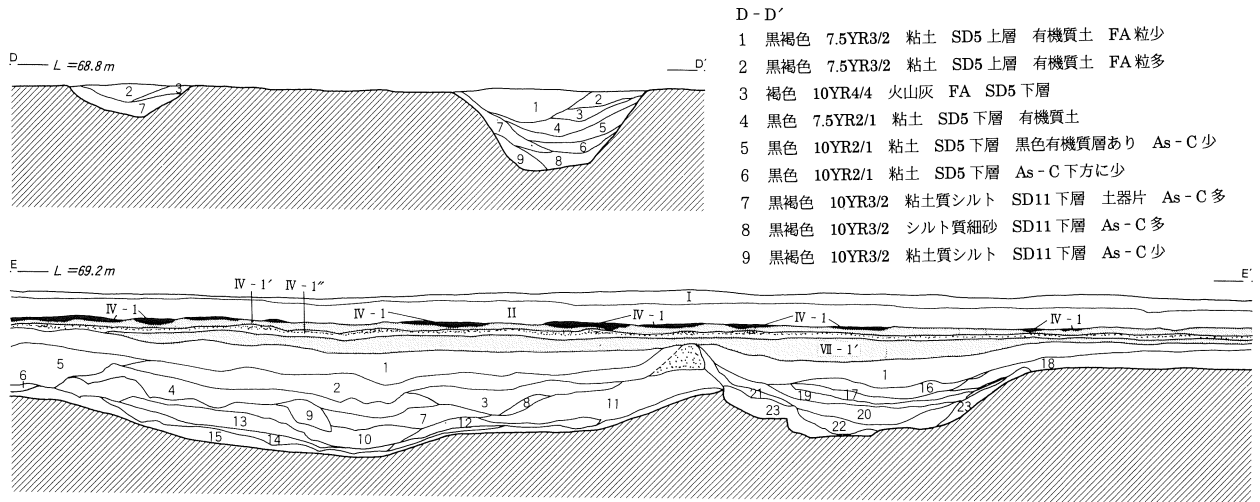
- 1 灰黄褐色 10YR4/2 細砂質シルト 酸化鉄結核多 砂粒少
- 2 暗褐色 10YR3/3 シルト 酸化鉄結核少
- 3 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多
- 4 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 酸化鉄結核
- 5 褐色 10YR4/4 細砂質シルト 酸化鉄結核少 砂粒子少
- 6 暗褐色 10YR3/4 細砂質シルト 酸化鉄結核多 マンガン斑多

C - C'

- 1 暗褐色 7.5Y3/4 シルト質粘土 黒色有機質土
- 2 暗褐色 10YR3/3 細砂質粘土 黒色有機質土



第126図 H 4 グリッド周辺第 4 遺構面土層図



この他、覆土中からは弥生時代後期の土器片(第144図40~45)、弥生時代のものと思われる打製石斧(第145図1・6)なども出土した。

第5・6号溝跡(第121~124・132・144図)

G 4グリッドでSD11から分流し、G 5グリッドへ直線的に延びていた。幹線水路跡である。重複関係にあり、北側のSD5が南側のSD6を切っていた。

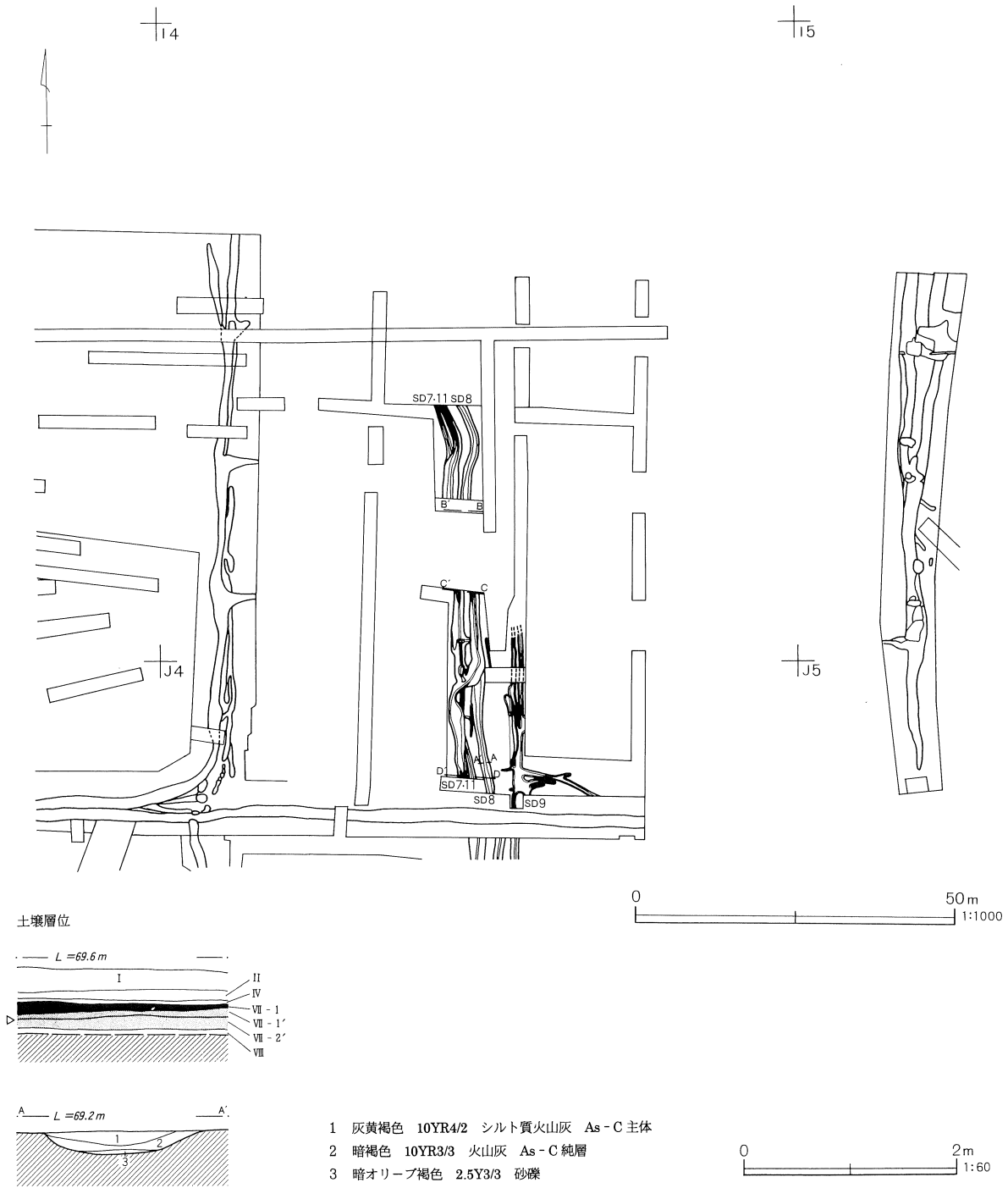
上層の水田耕作による削平のため、畦畔および対応する水田土壌は検出できなかった。規模は確認面で、ともに上端の幅約1.2m、下端の幅約0.4m、深さ0.4m程度であった。東に傾斜しており、東流していたことがわかる。

出土遺物は、SD6のSD11分流点付近で、古墳時代前期の土師器甕片が、SD5のG 5グリッドで第144図56の古墳時代後期土師器杯および甕片少量が出土した。古墳時代を通じて掘り直しつつ機能した用水路跡であると考えられる。

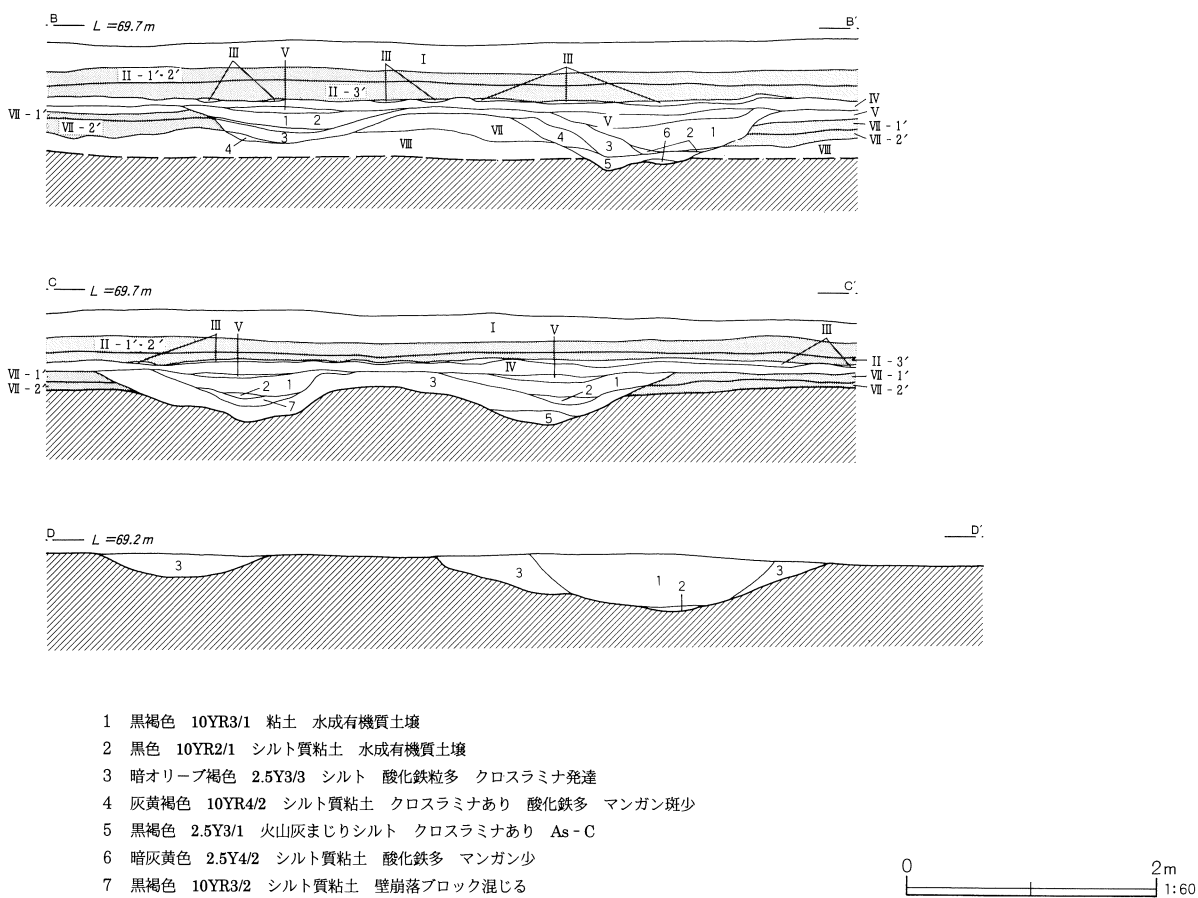
第94・95号溝跡(第121・124・144図)

SD11と平行して北流し、G 4グリッド南部で東に直角に屈曲していた。幹線水路跡である。SD11と重複関係にあり、屈曲後SD5に連続するものであった。SD94とSD95も本来重複関係にあるものと考えられるが、明確にすることはできなかった。覆土にも変化はなく、一部では合流するようにみえた。上層の水田耕作によ

第127図 14グリッド周辺第4遺構面



第128図 I 4グリッド周辺第4遺構面土層図



る削平のため、畦畔および対応する水田土壌は検出できなかった。規模は確認面で、SD94が上端の幅約1.4m、下端の幅約0.8m、深さ0.4m程度、SD95が上端の幅約0.8m、下端の幅約0.3m、深さ0.2m程度であった。SD94は屈曲点付近では、幅を広げており、SK1をともなっていた（第124図）。

出土遺物は、SD94のG 4グリッドの断面G-G'付近で、第144図57の古墳時代後期に属する土師器杯1点を得た。

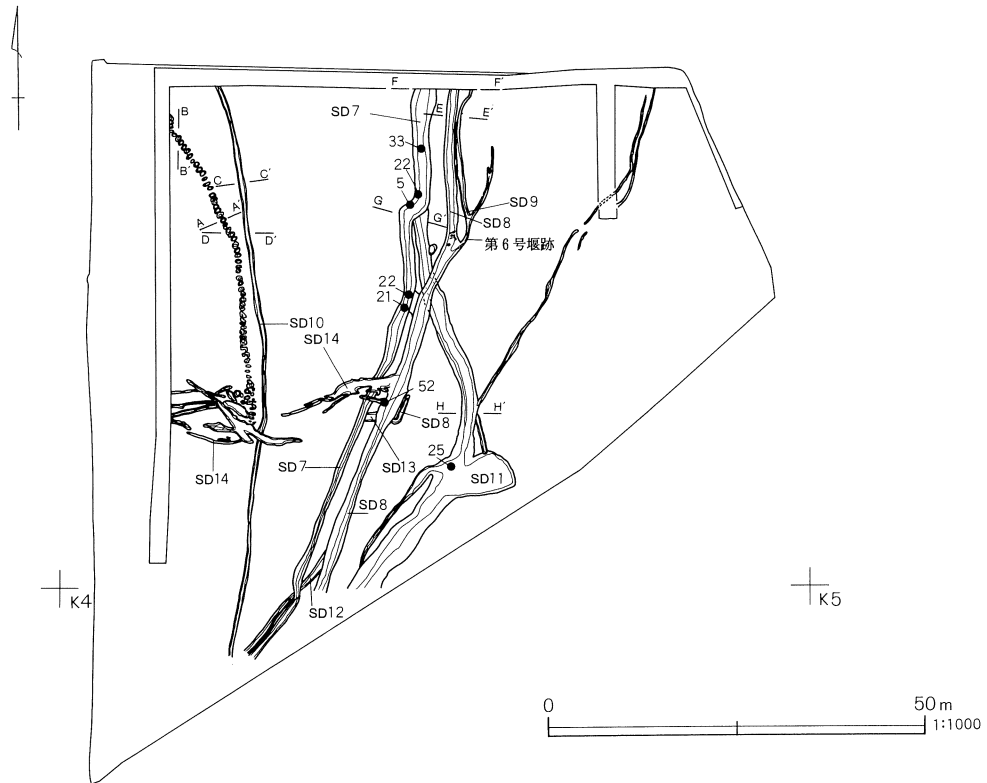
覆土の状況、重複状況、出土遺物からみて、幹線用水路跡SD7が埋没し、機能を失った後に地割を踏襲して掘削されたものと考えられる。

第8号溝跡(第121～131・144図)

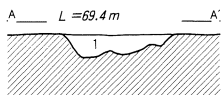
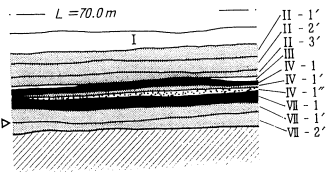
J 4グリッドからG 4グリッドまでSD7と平行して検出した。幹線用水路跡である。I 4グリッドでは、SD11と岸部が重複関係にあり、これを切っていた。J 4グリッドでは、支線小規模用水路跡SD9を分流する位置に第6号堰跡を検出した。長方形の掘り方をした部分に、木杭をもって横木と矢板を固定したものと考えられる。上層の水田耕作による削平のため、畦畔および対応する水田土壌は検出できなかった。規模は確認面で、上端の幅約1.2m、下端の幅約0.7m、深さ0.2m程度であった。

出土遺物は、J 4グリッドを中心に古墳時代前期の

第129図 J 4 グリッド周辺第4遺構面

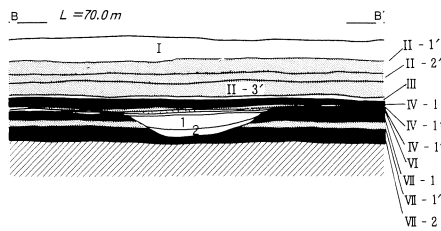


土壌層位



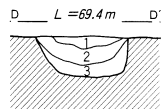
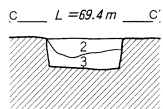
A - A' ・ B - B'

1 暗褐色 10YR3/3 火山灰まじりシルト As - C 多



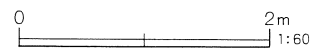
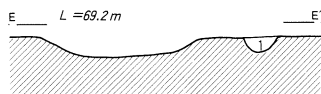
C - C' ・ D - D'

1 暗褐色 10YR3/3 火山灰シルト As-C 酸化鉄少 細砂少
 2 黒褐色 10YR2/3 シルト質火山灰 As - C 主体 酸化鉄
 3 暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト 下方に酸化鉄凝着

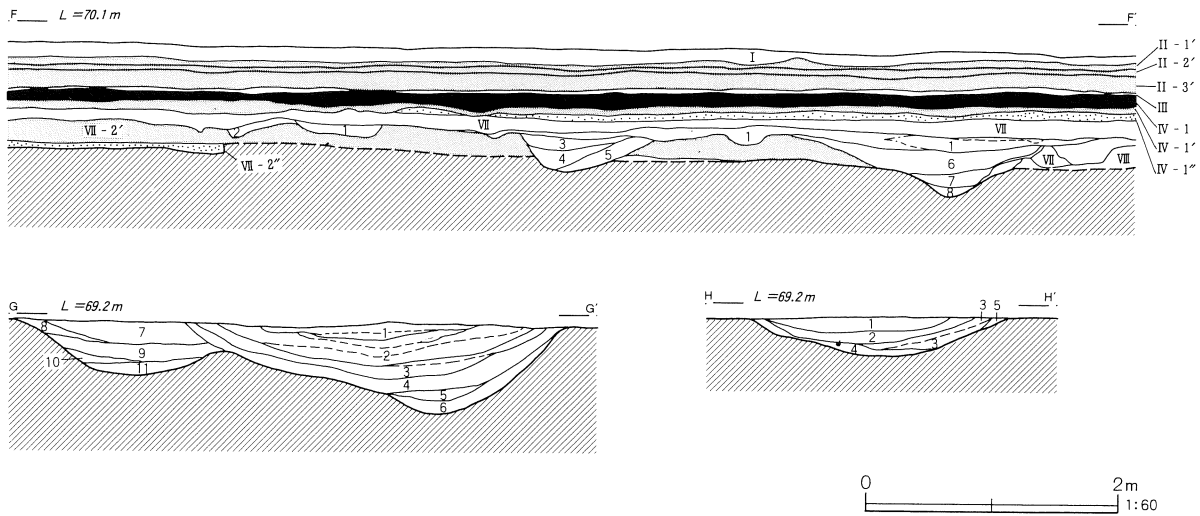


E - E'

1 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 VIII層粒 細砂主体



第130図 J 4 グリッド周辺第 4 遺構面土層図



- 1 暗褐色 10YR3/3 シルト
- 2 黒褐色 10YR2/3 火山灰まじり粘土 黒色有機質土壌と互層
- 3 黒色 10YR2/1 粘土 有機質土壌 クロストラミナあり
- 4 褐色 10YR4/4 シルト質粘土 VIII層粒多 VIII層小ブロック多
- 5 暗褐色 10YR3/3 細砂質シルト 砂礫
- 6 にふい黄褐色 10YR4/3 細砂質粘土 VIII層粒多 VIII層小ブロック多 炭化物少
- 7 にふい黄褐色 10YR4/3 火山灰まじりシルト 土器片 As-C多 酸化鉄少
- 8 6層のクロストラミナ
- 9 黒褐色 10YR2/3 シルト質火山灰 As-C主体 酸化鉄
- 10 黒褐色 10YR2/3 火山灰まじり粘土 As-C多 VIII層粒多
- 11 暗褐色 10YR3/4 シルト質細砂 VIII層粒 細砂主体

土師器類 (第144図49~55) を検出した。時期的にはSD11と大差がなく、古墳時代後期のSD94・95の関係を含めて2条1単位の用水路跡を検討する必要もあるだろう。

第58号溝跡 (第135・136・144図)

G 3グリッドで検出した。支線用水路跡と思われる。トレンチ調査のため、詳細は明らかにできなかったが、黒褐色の細砂質シルトで埋没しており、覆土中から古墳時代中期の小形壺1点 (第144図58) を得た。北東方向に斜行していた。この地区では古墳時代の水田土壌が検出できなかったが、SD58の存在は、これを予想させるものである。VIII層上面には多量のマンガン結核が集積していたが、この集積をもたらした水田は不明であり、古墳時代の水田である可能性もある。同地区内で検出したその他の溝跡 (SD41~44・48・60~63) は、覆土が類似すること、地割が類似することから、第4

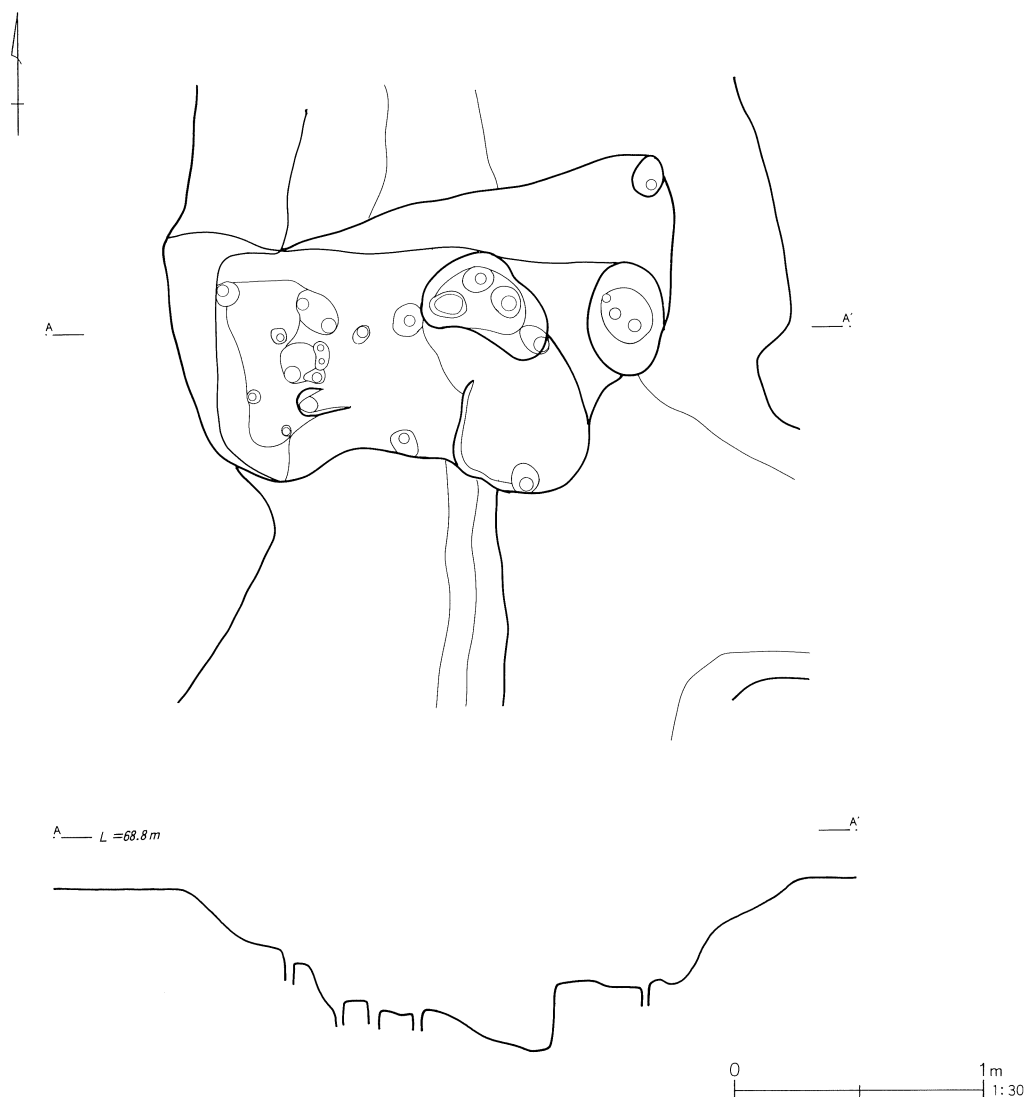
遺構面の遺構と推定したものである。

第161・162・167号溝跡 (第115・144図)

D 6・7グリッドで検出した。SD177の延長上に位置し、地割・覆土も共通であった。SD7以来連続するものと思われる。2条が平行していたが、重複関係は明らかにできなかった。D 7グリッドでは古墳時代前期の土師器壺 (第144図59) を出土したSD167に合流していた。両者の間にはVII-2層水田土壌が認められた。上層の水田耕作による削平のため、畦畔および対応する水田土壌は明確にできなかった。規模はいずれも確認面で、上端の幅約0.6m、下端の幅約0.3m、深さ0.2m程度であった。

なお、SD167は底面に規則的なピット状の凹凸を有する溝跡で、古墳時代前期からこうした形状の溝跡があったことがわかった。J 4グリッドのピット状の窪み列も溝跡である可能性が高い。

第131図 第6号堰跡



8. その他の溝跡

第15～18・20・21号溝路(第137・138図)

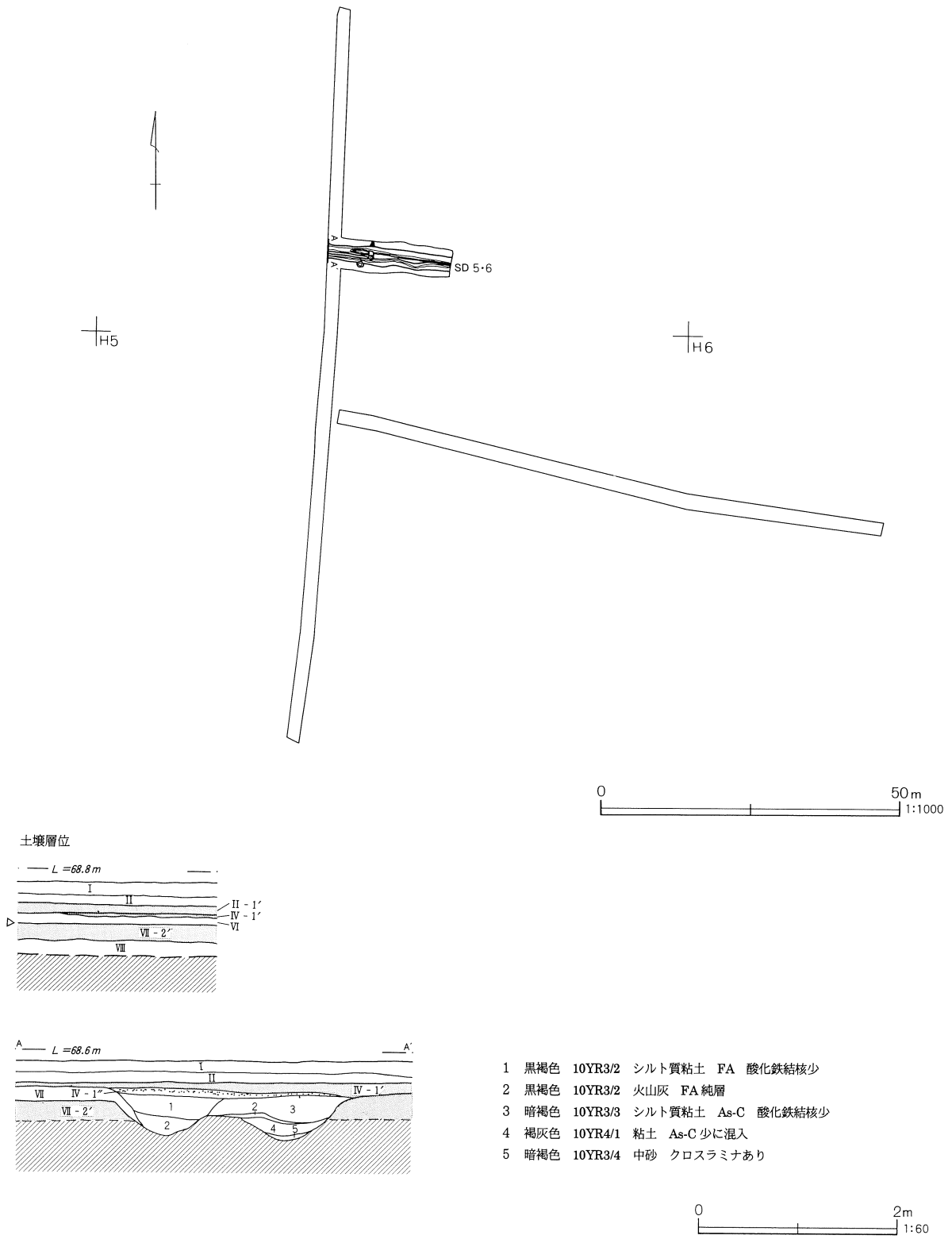
I 2・J 2グリッドで検出した。トレンチによる断面調査で第4遺構面下を調査した際に検出した溝跡である。上層には古墳時代末の水田土壌VII-1層、平安時代の水田土壌IV-1層が認められた。自然の埋没流路、扇状地伏流水の流路、周辺地域に発生する湧き水である久上水との関係等が想定できるが、堆積状況は速度の速くない水流が一定期間あったことを示しており、自然河川の氾濫原に残留した流路の一部であるとするのが妥当である。一部に蛇行があるものの、南西

から北東方向の傾斜に沿って延びていた。重複関係は複雑で、残留した流路に度重なる氾濫があったと思われる。

第22・23号溝跡(第139～142図)

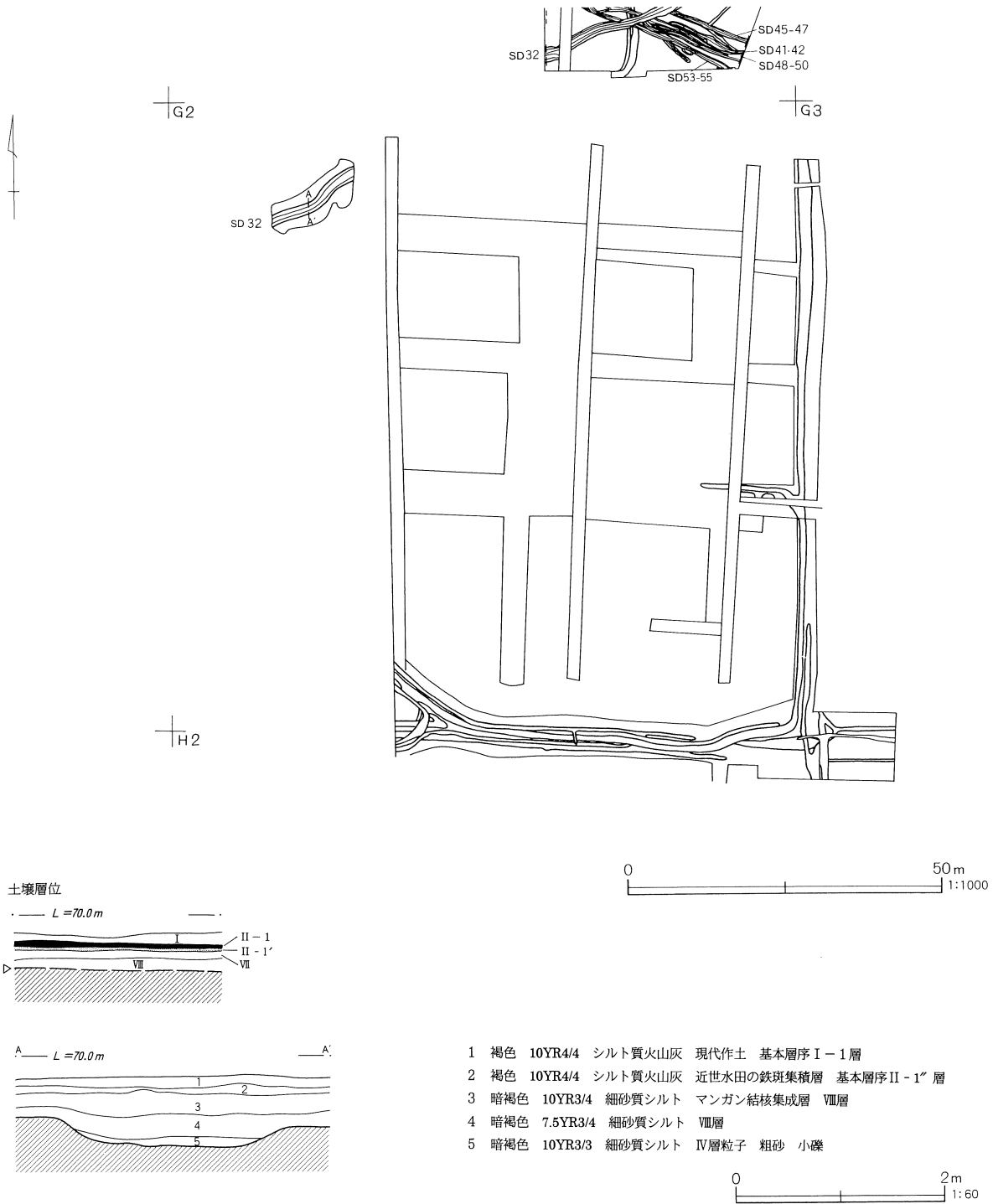
K 2・J 3グリッドで検出した。トレンチによる断面調査で第4遺構面下を調査した際に検出した溝跡である。上層には平安時代の水田土壌IV-1層が認められた。昭和24年段階の米軍写真にも明瞭に地割が遺存しており、長期間にわたる埋没過程を経た自然流路であるとするのが妥当である。蛇行しつつ、南西から北東方向の傾斜に沿って延びていた。覆土の状況は、2

第132図 G 5 グリッド周辺第 4 遺構面

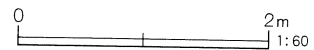
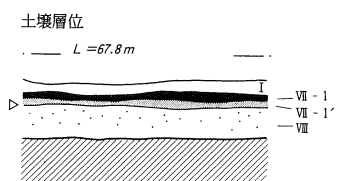
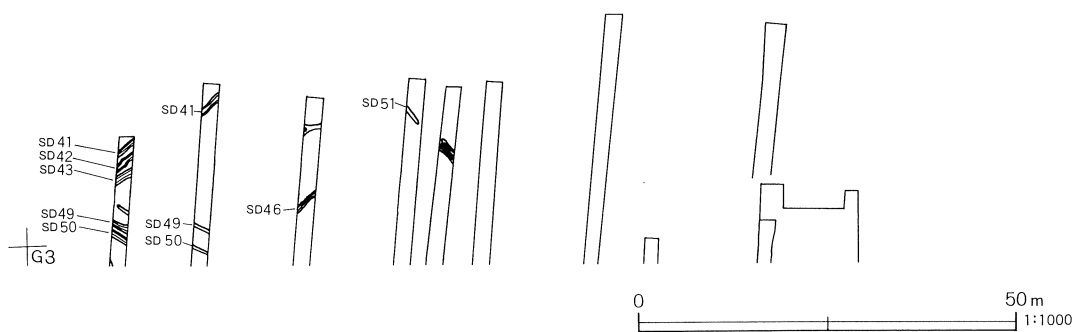
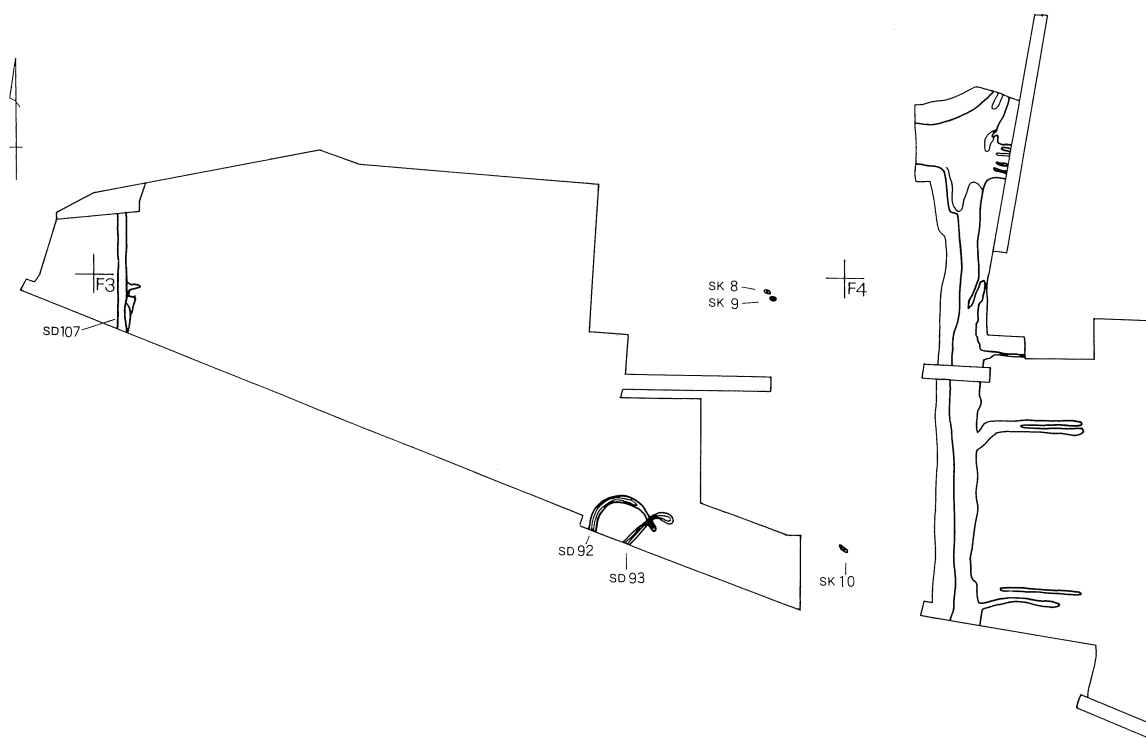


- 1 黒褐色 10YR3/2 シルト質粘土 FA 酸化鉄結核少
- 2 黒褐色 10YR3/2 火山灰 FA 純層
- 3 暗褐色 10YR3/3 シルト質粘土 As-C 酸化鉄結核少
- 4 褐灰色 10YR4/1 粘土 As-C 少に混入
- 5 暗褐色 10YR3/4 中砂 クロスラミナあり

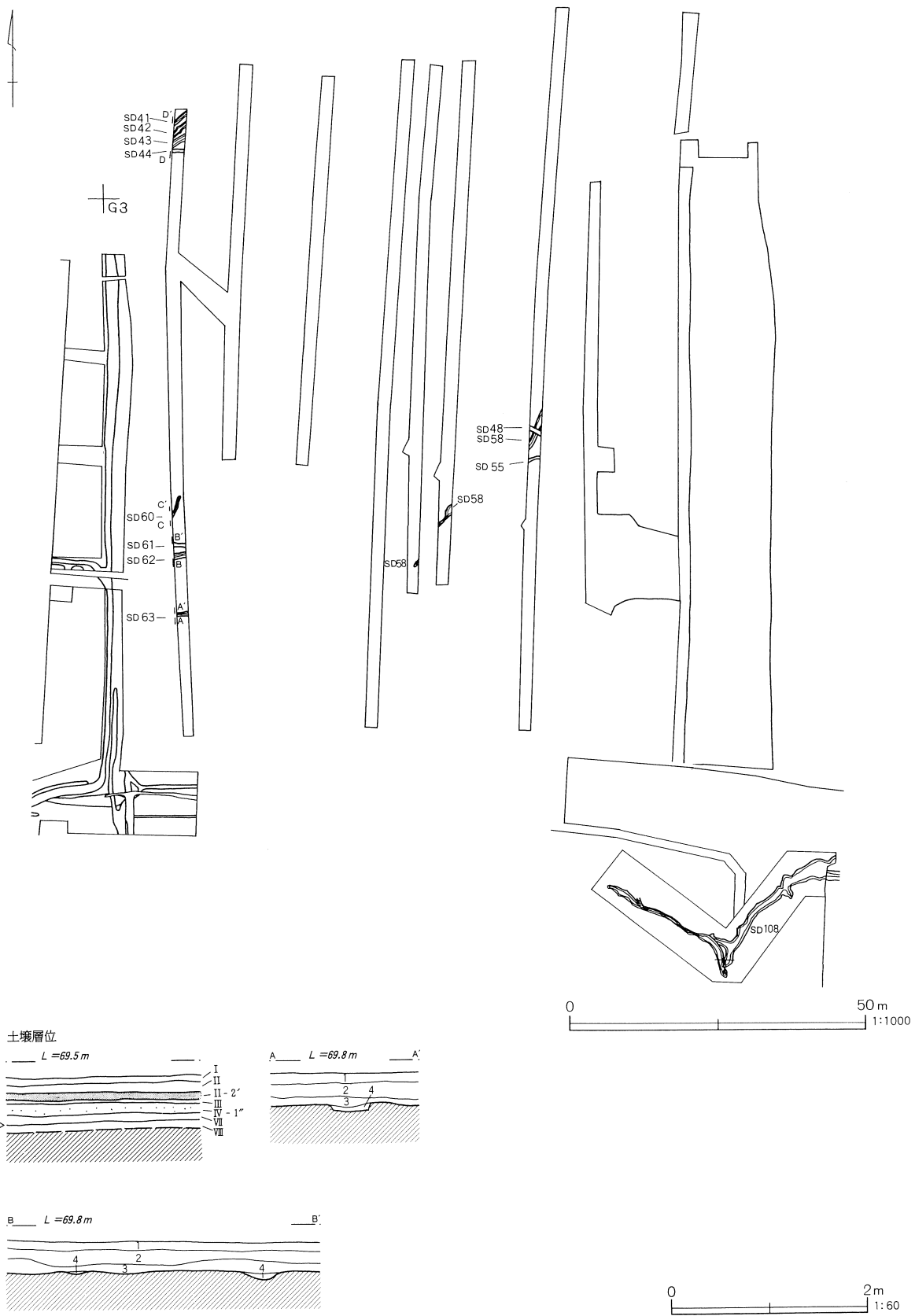
第133図 G 2 グリッド周辺第 4 遺構面



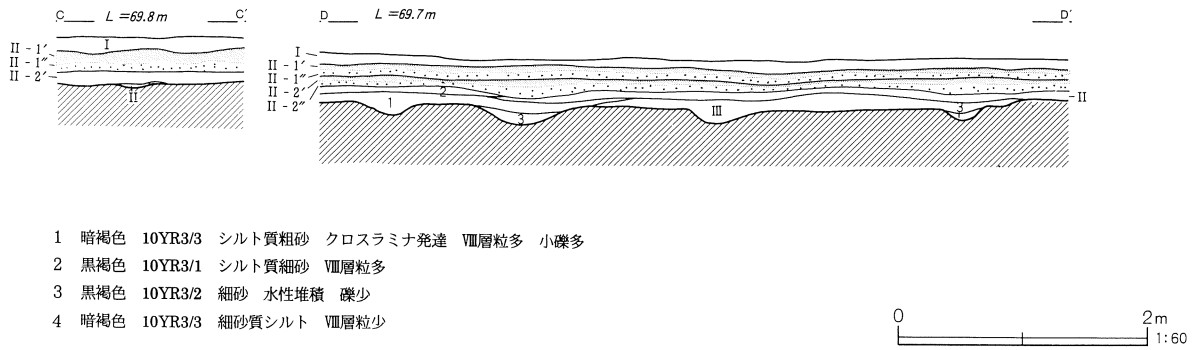
第134図 F 3グリッド周辺第4遺構面



第135図 G 3 グリッド周辺第 4 遺構面



第136図 G 3 グリッド周辺第 4 遺構面土層図



度の重複をもち、下層の2条は粘質土で、上層の1条は最下層にクロスラミナの発達した砂礫層が堆積しており、この上に酸化鉄の分厚い集積層がのっていた。下層は滞水が、上層では速い流水があったものと考えられる。

第32号溝跡(第133図)

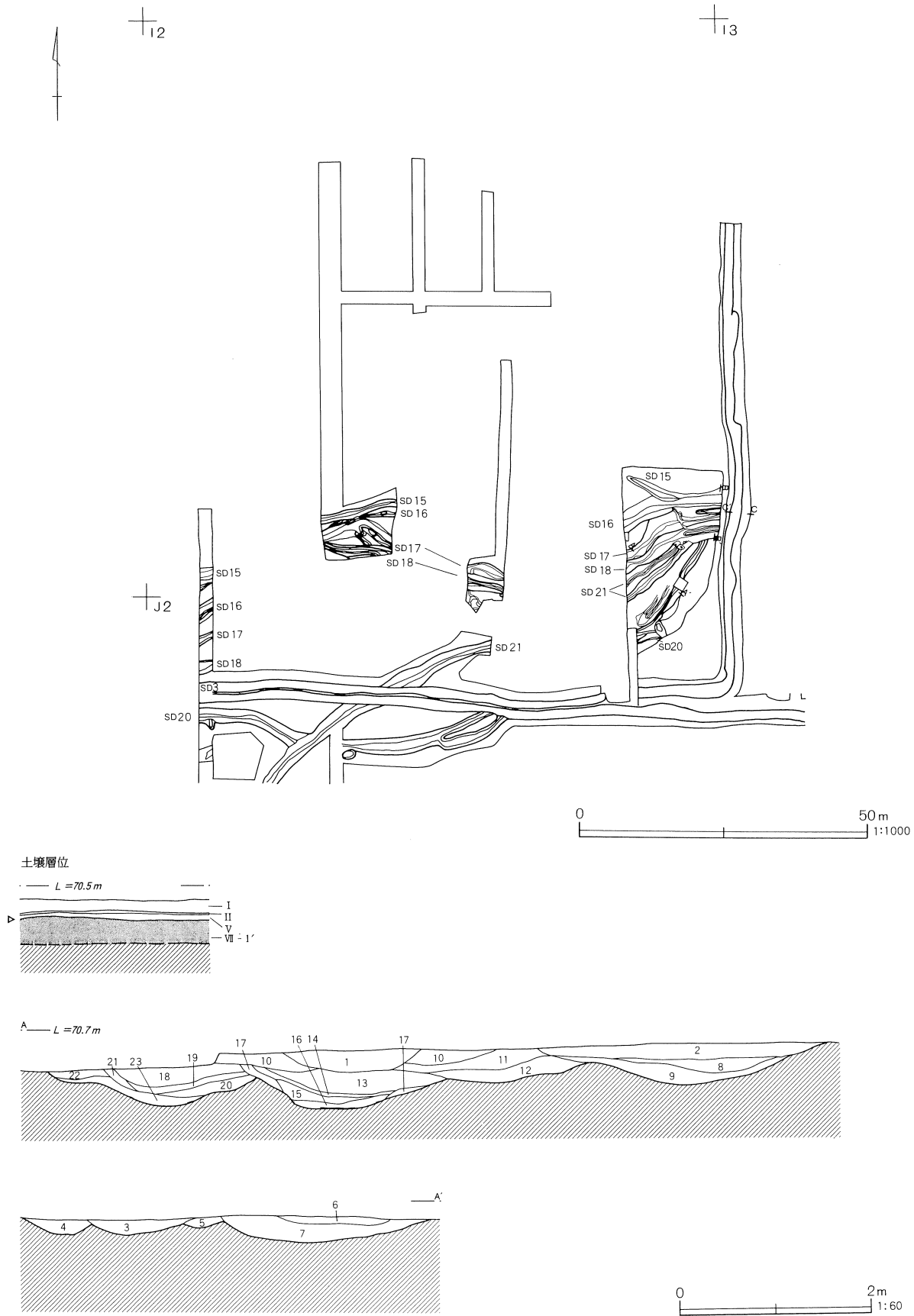
F 2・G 2グリッドで検出した。トレンチによる断面調査で第4遺構面下を調査した際に検出した溝跡である。上層には遺構のない地山VIII層が堆積していた。自然の埋没流路、扇状地伏流水の流路、周辺地域に発生する湧き水である久上水との関係等が想定できるが、堆積状況は速度の遅い水流が長期間あったことを示しており、埋没した自然河川の流路であるとするのが妥当である。蛇行しつつ、南西から北東方向の傾斜に沿

って延びていた。

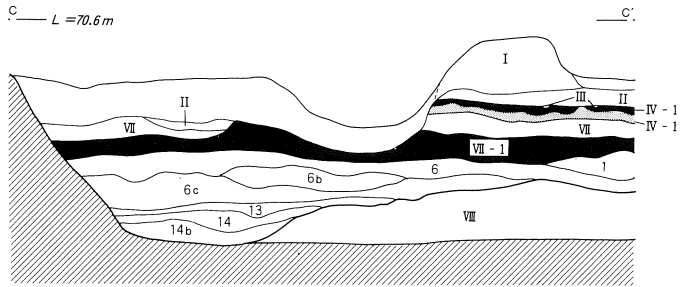
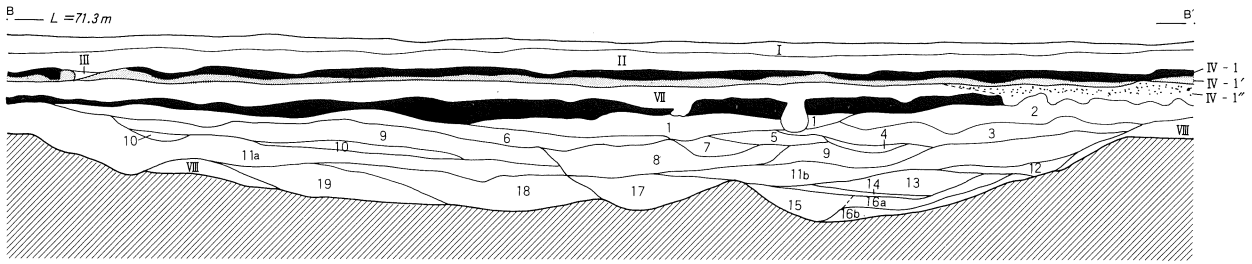
第74・75・76・78号溝跡(第125図)

H 4グリッドで検出した。トレンチによる断面調査で第4遺構面下を調査した際に検出した溝跡である。上層には古墳時代末の水田土壌VII-1層、平安時代の水田土壌IV-1層が認められた。自然の埋没流路、扇状地伏流水の流路、周辺地域に発生する湧き水である久上水との関係等が想定できるが、堆積状況は速度の遅い水流が長期間あったことを示しており、自然河川の氾濫原に残留した流路の一部であるとするのが妥当である。西に隣接する取り付け道路の調査(一丁田遺跡)でも検出されており、自然流路と考えられている(富田・赤熊1985)。

第137図 12グリッド周辺第4遺構面



第138図 Ⅰ 2グリッド周辺第4遺構面土層図

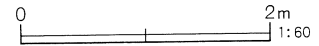


A - A'

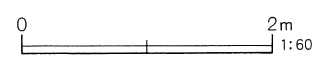
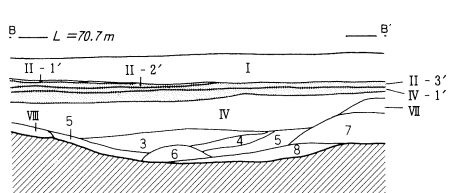
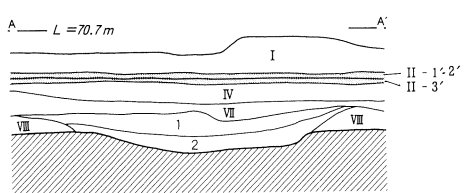
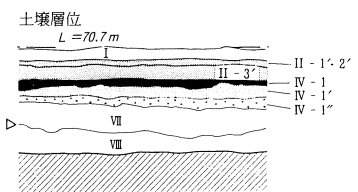
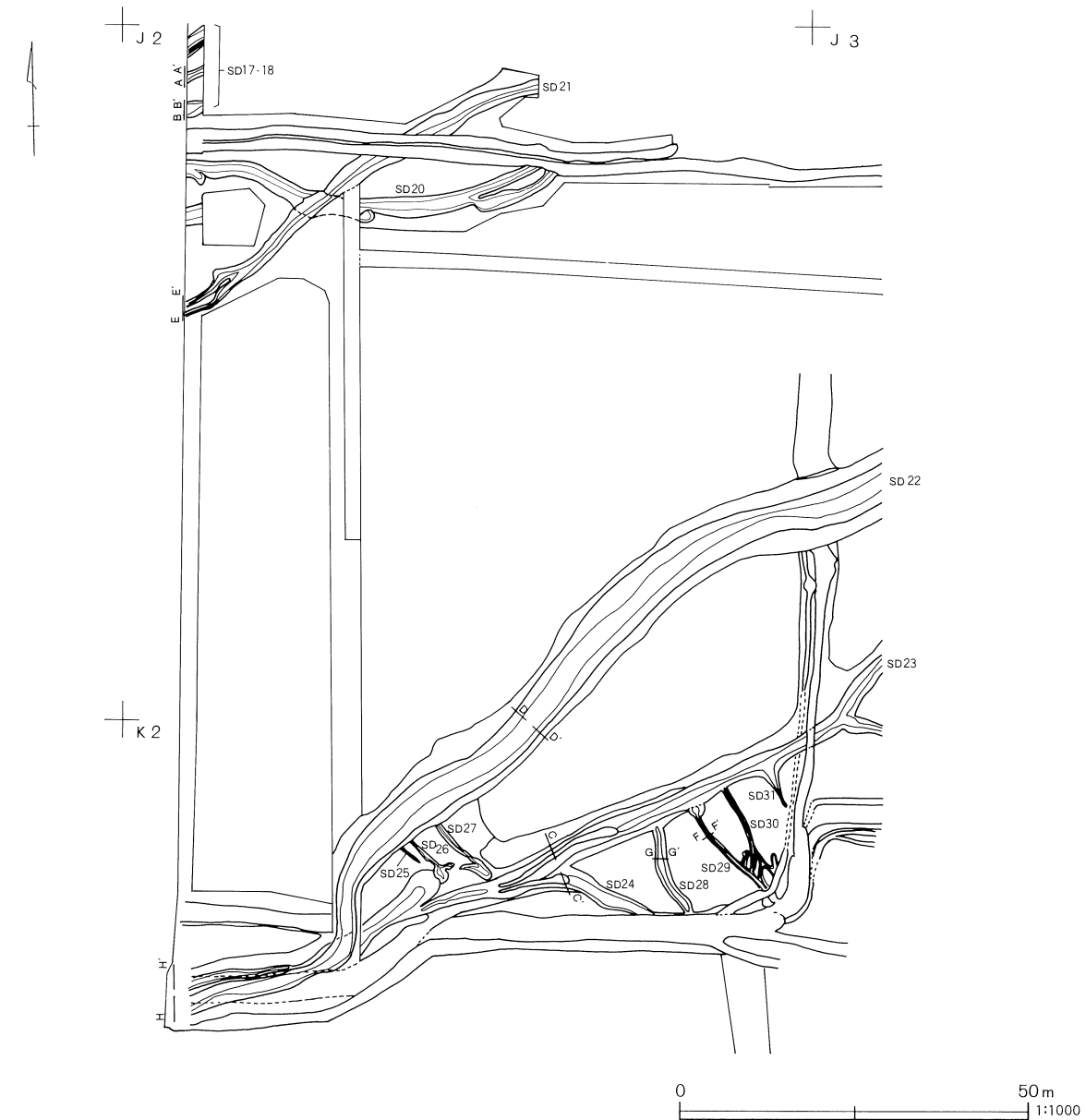
- 1 黒色 10YR2/1 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 2 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核
- 3 黒褐色 10YR2/3 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核
- 4 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核
- 5 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核多に マンガン結核
- 6 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核
- 7 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核
- 8 黒褐色 10YR3/1 砂質シルト 酸化鉄結核多
- 9 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多
- 10 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核
- 11 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 12 黒褐色 10YR2/3 シルト 酸化鉄結核多に マンガン結核少
- 13 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核少
- 14 黒褐色 10YR2/2 シルト
- 15 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核多
- 16 暗褐色 10YR3/3 砂礫 酸化鉄結核少
- 17 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核少
- 18 黒褐色 10YR2/2 シルト マンガン結核少
- 19 黒褐色 10YR3/1 細砂質シルト 酸化鉄結核 マンガン結核少
- 20 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核多
- 21 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核少
- 22 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 23 暗褐色 10YR3/3 砂礫 マンガン結核 礫多

B - B' C - C'

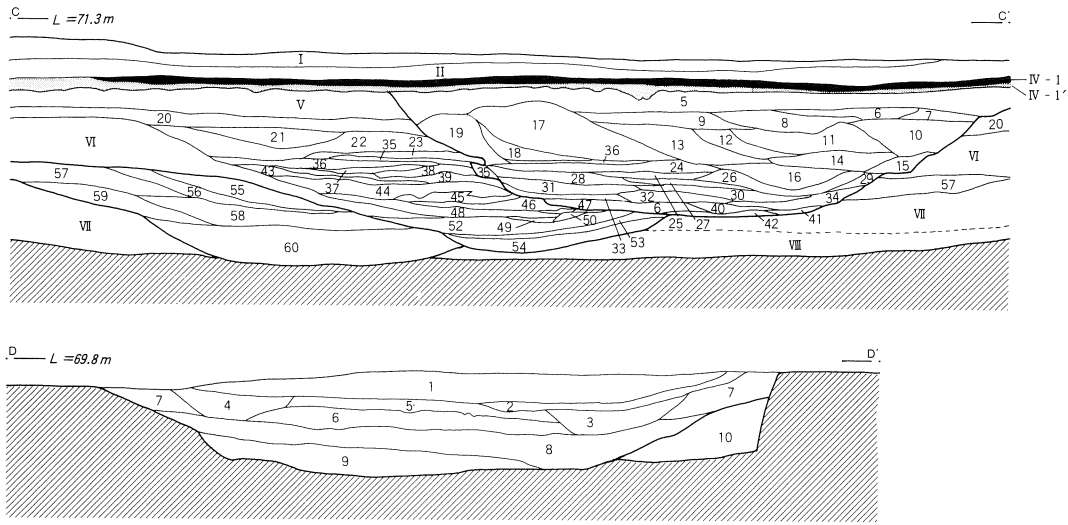
- 1 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 火山灰少 酸化鉄 マンガン結核多
- 2 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄少 マンガン結核少
- 3 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄 マンガン結核
- 4 黒褐色 10YR3/2 シルト 火山灰少 酸化鉄結核 マンガン結核多
- 5 黒褐色 10YR3/1 シルト マンガン斑少
- 6 黒褐色 2.5YR3/1 シルト 白色粒子少 酸化鉄結核 マンガン結核少
- 6b 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核
- 6c 黒褐色 10YR2/3 シルト 酸化鉄結核多
- 7 黒褐色 10YR3/3 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核少
- 8 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 火山灰少 酸化鉄結核 マンガン結核多
- 9 黒褐色 10YR3/1 シルト マンガン斑文少 酸化鉄結核少
- 10 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核多
- 11a b 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核少
- 12 黒褐色 10YR2/2 シルト
- 13 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核少
- 14 黒褐色 10YR2/2 シルト
- 14b 黒褐色 5Y2/3 シルト 酸化鉄結核多
- 15 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 16a 黒褐色 10YR2/3 シルト 酸化鉄結核少 マンガン結核少
- 16b 褐色 10YR4/6 シルト VII層との漸移層 マンガン結核少
- 17 黒褐色 10YR2/3 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核多
- 18 黒褐色 10YR3/1 シルト 酸化鉄結核多 マンガン結核多
- 19 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核 マンガン結核



第139図 J 2・K 2グリッド周辺第4遺構面



第140図 J・K 2グリッド周辺第4遺構面土層図(1)



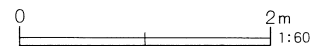
C - C'

- 5 暗褐色 10YR3/3 火山灰まじりシルト 鉄斑集積層
- 6 灰黄褐色 10YR4/2 火山灰まじりシルト 5層より火山灰密度高い
- 7 におい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核多
- 8 暗褐色 7.5YR3/3 砂 風化火山灰少 酸化鉄結核少
- 9 暗褐色 7.5YR3/4 砂 火山灰 8層より相対的にやや粗い
- 10 黄褐色 10YR4/2 灰 砂 火山灰少
- 11 におい黄褐色 10YR4/3 砂
- 12 におい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核
- 13 灰黄褐色 10YR8/2 シルト質砂層 酸化鉄結核多 マンガン
- 14 におい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核 礫
- 15 におい黄褐色 10YR4/3 砂 14層より粗い
- 16 におい黄褐色 10YR4/3 砂礫 酸化鉄結核多
- 17 18 灰黄褐色 10YR4/2 砂 酸化鉄結核多 マンガン多
- 19 暗褐色 10YR3/3 シルト質細砂層 マンガン
- 20 灰褐色 7.5YR4/2 粘土質シルト 酸化鉄結核 マンガン多
- 21 灰黄褐色 10YR4/2 シルト 鉄斑集積層 炭化物少 酸化鉄結核 マンガン少
- 22 黒褐色 10YR3/2 シルト As-C 多 酸化鉄結核多
- 23 褐色 10YR4/1 シルト As-C 少 酸化鉄結核多 マンガン少
- 24 25 におい黄褐色 10YR5/4 砂 酸化鉄結核多
- 26 27 28 暗褐色 7.5YR3/4 中砂 酸化鉄結核少
- 29 黒褐色 7.5YR3/2 極細砂
- 30 31 黒褐色 7.5YR3/1 中砂
- 32 暗褐色 7.5YR3/3 砂
- 33 におい黄褐色 10YR4/3 シルト質砂 酸化鉄結核多
- 34 黒褐色 10YR2/3 砂礫
- 35 黒褐色 10YR3/2 シルト質火山灰 As-C 多
- 36 黒褐色 10YR3/2 シルト質火山灰 砂
- 37 黒褐色 10YR3/2 シルト質火山灰 As-C
- 38 黒褐色 10YR3/2 シルト質火山灰 As-C
- 39 黒褐色 10YR2/2 シルト質火山灰 As-C
- 40a 赤褐色 5YR4/6 砂 上層に炭化層
- 40b におい黄褐色 10YR4/3 シルト質砂

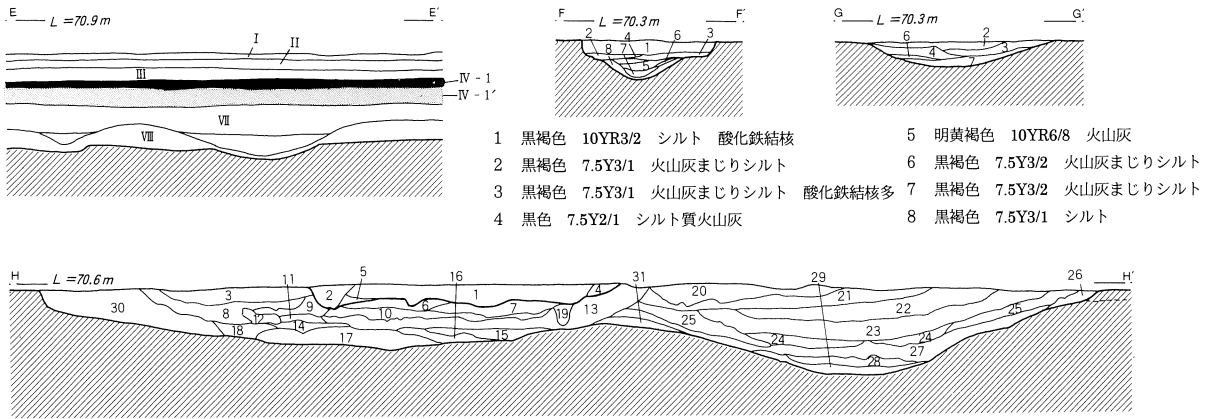
- 41 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核少
- 42 黒褐色 10YR2/3 砂礫
- 43 黒褐色 10YR3/2 火山灰まじりシルト
- 44 黒褐色 10YR3/2 火山灰まじりシルト As-C 多
- 45 46 48 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト As-C 少
- 47 褐色 7.5YR4/4 シルト質火山灰 As-C 多
- 49 50 褐色 7.5YR4/4 シルト質火山灰
- 51 欠番
- 52 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト As-C
- 53 褐色 7.5YR4/4 シルト質火山灰 49 50層に似る As-C
- 54 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト As-C 多
- 55 56 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト As-C 多
- 57 黄褐色 10YR5/6 火山灰まじりシルト As-C
- 58 黒褐色 10YR3/1 シルト As-C 少
- 59 黒褐色 10YR3/2 シルト
- 60 褐色 10YR4/4 粘土質シルト 最初の溝跡に堆積した覆土

D - D'

- 1 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核多
- 2 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核 マンガン少
- 3 黒褐色 10YR3/2 シルト マンガン少
- 4 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核少
- 5 暗褐色 10YR3/3 火山灰まじりシルト
- 6 黄褐色 10YR5/6 火山灰まじりシルト As-C 多
- 7 におい黄褐色 10YR4/3 シルト
- 8 褐色 10YR4/6 シルト
- 9 褐色 10YR4/4 火山灰まじりシルト
- 10 黄褐色 10YR5/8 シルト



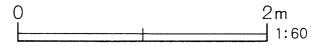
第141図 J2・K2グリッド周辺第4遺構面土層図(2)



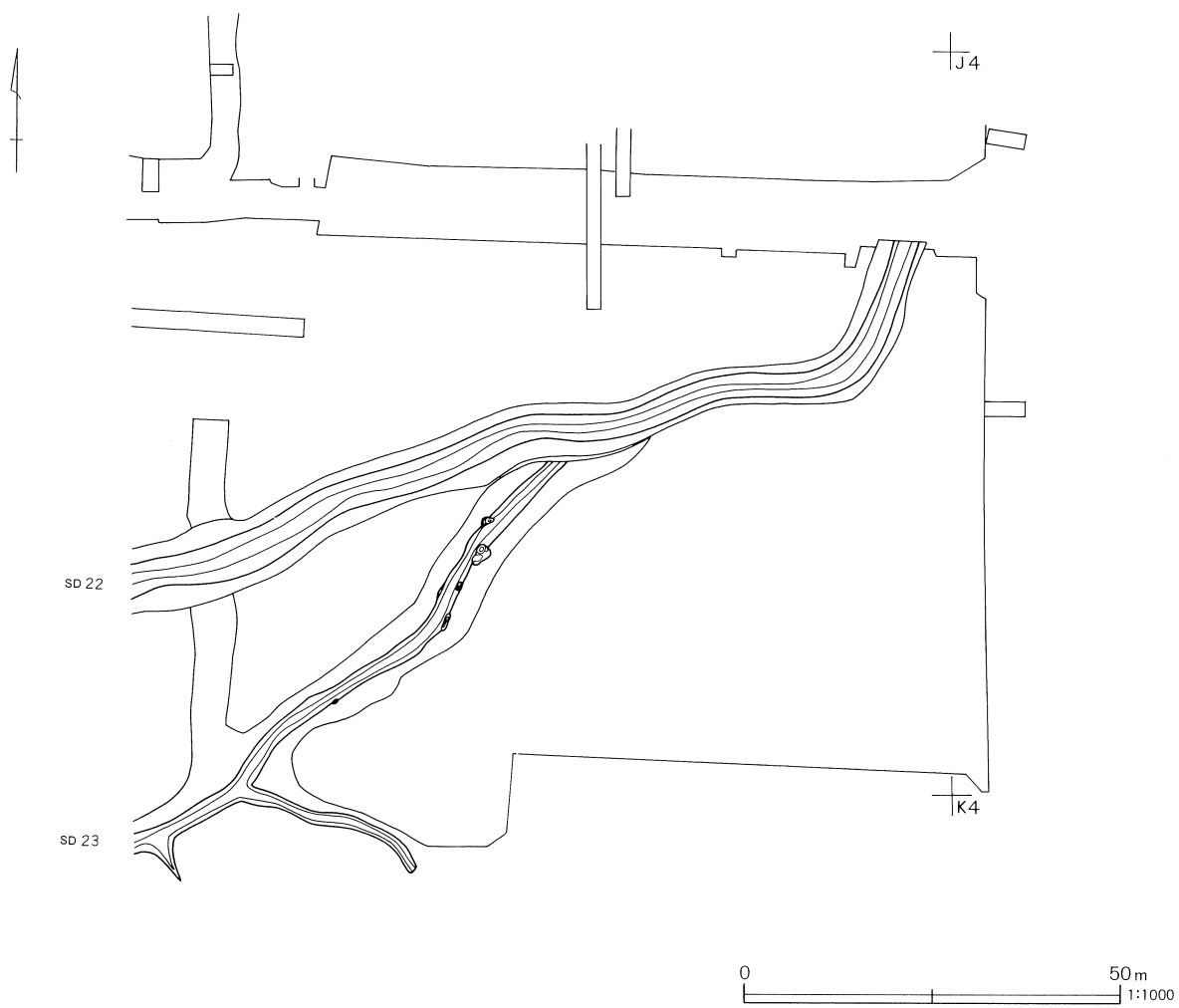
- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核 | 5 明黄褐色 10YR6/8 火山灰 |
| 2 黒褐色 7.5Y3/1 火山灰まじりシルト | 6 黒褐色 7.5Y3/2 火山灰まじりシルト |
| 3 黒褐色 7.5Y3/1 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核多 | 7 黒褐色 7.5Y3/2 火山灰まじりシルト |
| 4 黒色 7.5Y2/1 シルト質火山灰 | 8 黒褐色 7.5Y3/1 シルト |

H - H'

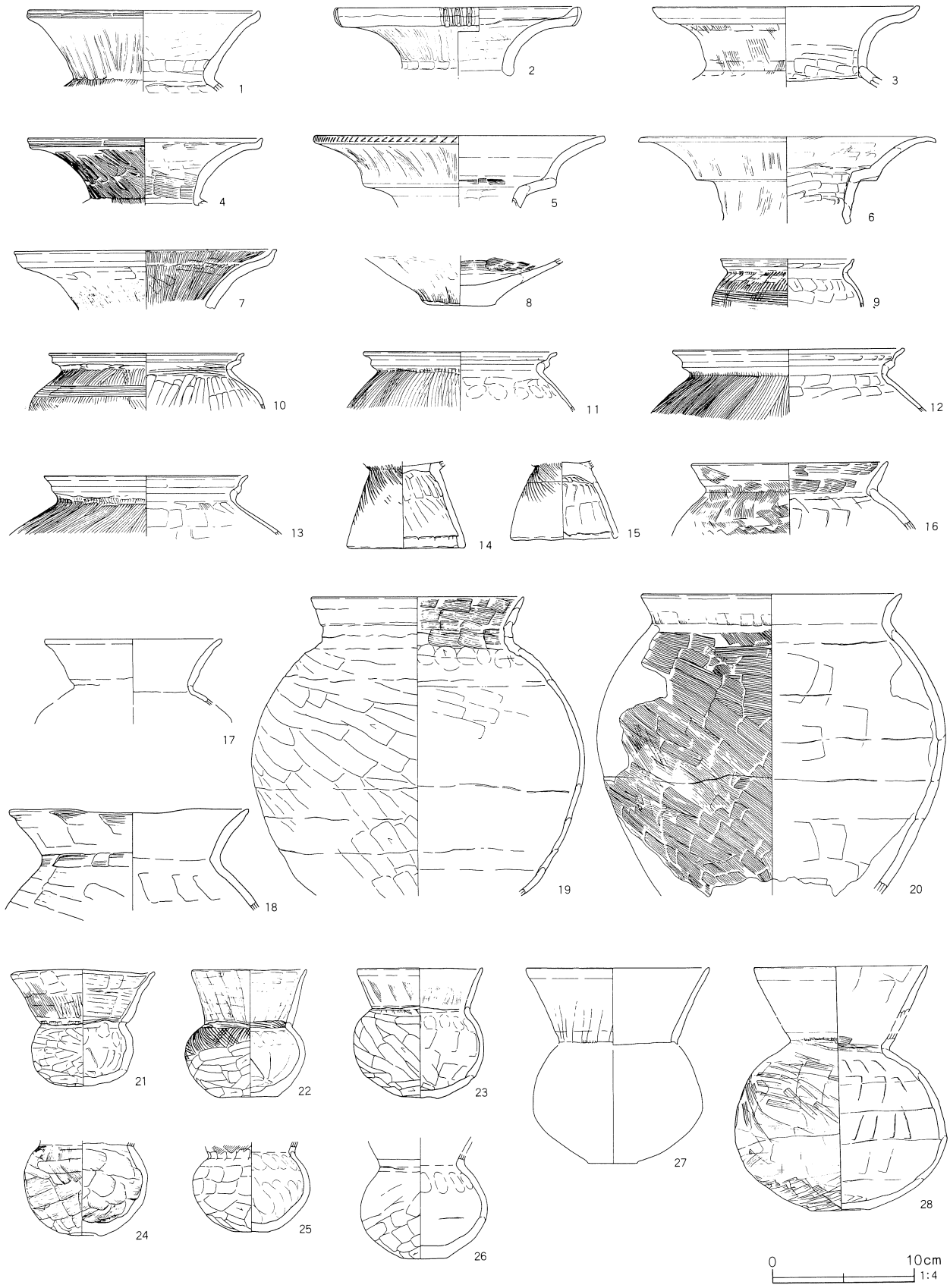
- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 2 黒褐色 10YR3/2 粗砂 酸化鉄結核 | 18 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核 |
| 3 灰黄褐色 10YR5/2 シルト 火山灰少 酸化鉄結核多 | 19 黒褐色 10YR3/2 シルト |
| 4 5 におい黄褐色 10YR4/3 砂 酸化鉄結核多に 軽石 | 20 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト |
| 6 暗褐色 10YR3/4 シルト 酸化鉄結核多 | 21 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト |
| 7 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核多 | 22 黒褐色 10YR2/2 火山灰まじりシルト |
| 8 におい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核多 | 23 火山灰まじりシルト 10YR2/3 黒褐色 |
| 9 褐色 7.5YR4/4 シルト 酸化鉄結核 | 24 火山灰まじりシルト 10YR2/3 黒褐色 酸化鉄結核多 |
| 10 におい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核多 | 25 火山灰まじりシルト 10YR2/2 黒褐色 酸化鉄結核少 |
| 11 におい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核 | 26 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核 |
| 12 暗褐色 10YR3/8 シルト 酸化鉄結核多 | 27 黒色 7.5YR2/1 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核 |
| 13 におい黄褐色 10YR4/3 シルト 酸化鉄結核 | 28 黒褐色 7.5YR1/3 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核 |
| 14 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト 酸化鉄結核多 | 29 黒色 7.5YR1/2 火山灰まじりシルト 酸化鉄結核 |
| 15 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核 | 30 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核 |
| 16 黒褐色 10YR3/2 シルト 酸化鉄結核多 | 31 明黄褐色 10YR6/8 シルト |
| 17 黒褐色 10YR2/2 シルト 酸化鉄結核 | |



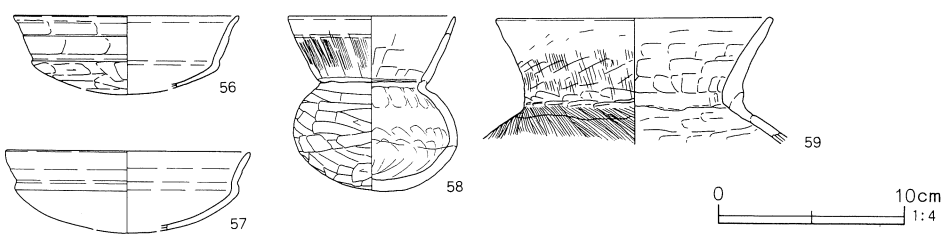
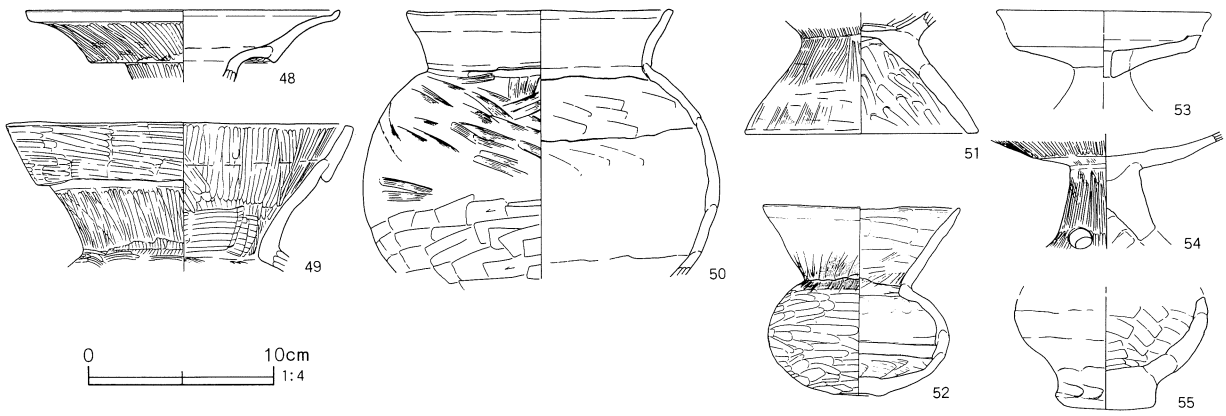
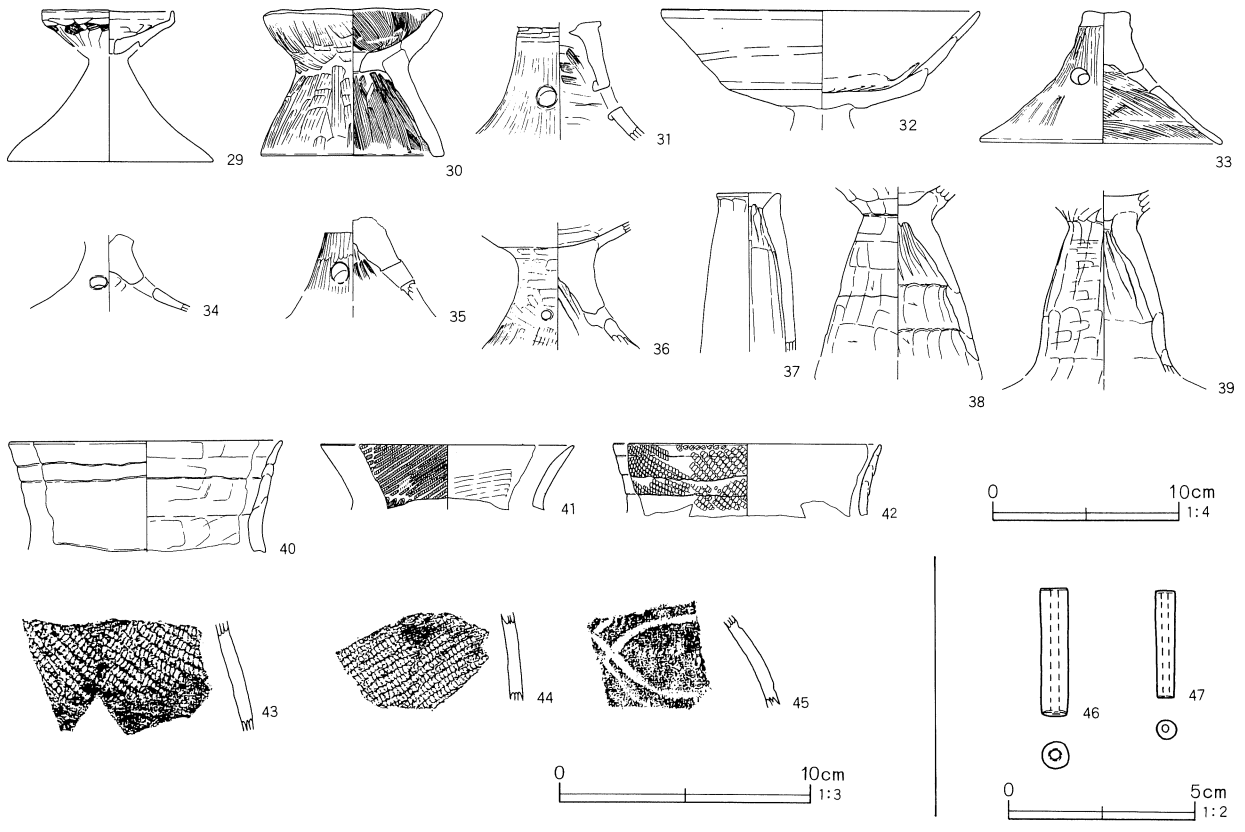
第142図 K 3 グリッド周辺第 4 遺構面



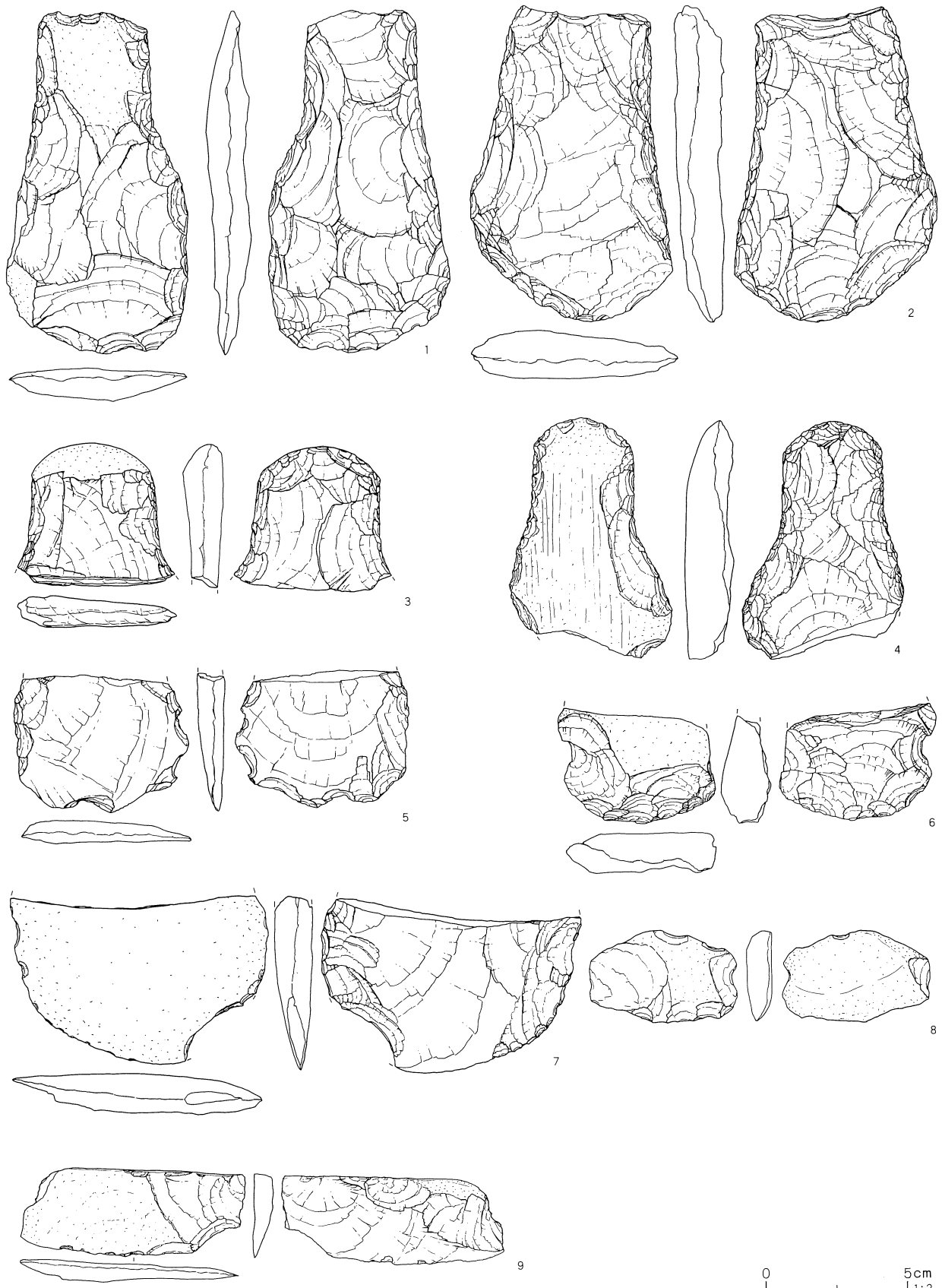
第143図 第4遺構面出土遺物(I)



第144図 第4遺構面出土遺物(2)



第145図 第4遺構面出土遺物(3)



第6表 第4遺構面出土遺物観察表（第143～145図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考	
1	壺	(16.2)			ABF	B~A	にぶい橙色	30	SD11	板ナデ後ミガキ 風化	
2	壺	(17.0)			ABF	B	橙色	20	SD 7	ミガキ	
3	壺	(18.8)			ABF	A	浅黄橙色	20	SD 7	ハケ後ナデ	
4	壺	(16.5)			ABF	A	橙色	20	SD11	外；ハケ 内；ハケ後板ナデ	
5	壺	(20.6)			ABF	B	橙色	20	SD11	ヘラケズリカナデ後ヘラミガキ	
6	壺	(20.7)			ABF	A	明赤褐色	40	SD11	器面風化	
7	壺	(18.5)			AB	B	にぶい橙色	20	SD11	外；ハケ後ナデ 内；板ナデ後ミガキ	
8	壺			5.2	AB	A	橙色	80	SD11	ハケナデ 風化顕著	
9	小形甕	(9.4)			ABDF	A	橙色	15	SD11	外；ハケ 内；板ナデ	
10	甕	(13.9)			AB	A	橙色	15	SD 7	外；ハケ 内；板ナデ	
11	甕	(13.6)			ABF	A	浅黄橙色	20	SD11	外；ハケ 内；指ナデ	
12	甕	(16.4)			ABF	A	にぶい黄橙色	20	SD11	外；ハケ 内；板ナデ	
13	甕	(14.4)			ABF	A	浅黄色	15	SD11	外；ハケ 内；板ナデ	
14	台付甕脚		5.4	8.4	ABDF	A	灰白色	75	SD11	ハケ後ナデ	
15	台付甕脚		5.1	7.2	ABF	A	にぶい橙色	60	SD11	ハケ	
16	甕	13.9			ABDF	C	黒褐色	65	SD11	ハケ後ナデ	
17	甕	12.5			ABDF	A	灰白色	80	SD11	風化顕著	
18	甕	16.9			AF	A	橙色	40	SD11	上；ハケナデ 下；板ナデ	
19	甕	(15.0)			AB	A	にぶい黄橙色	40	SD 7	風化	
20	甕	(18.4)			ABF	B	にぶい黄橙色	20	SD11	外；ハケ 内面風化剥離	
21	小形壺	10.2	8.9	1.7	ABF	A	明赤褐色	60	SD 7	ハケ後板ナデ	
22	小形壺	8.2	8.9	4.2	ABDF	A	にぶい橙色	85	SD 7	ハケ後板ナデ	
23	小形壺	8.8	9.1	2.6	ABF	A	にぶい褐色	95	SD11	ヘラケズリ	
24	小形壺		6.6	2.0	ABDF	A	にぶい黄橙色	100	SD 7	ハケナデ	
25	小形壺		6.4	2.3	ABF	A	淡赤褐色	100	SD11	外；板ナデ 内；ヘラケズリ	
26	小形壺		8.5	3.3	ABDF	A	にぶい赤褐色	90	SD 7	板ナデ	
27	小形壺	12.9			ABF	A	橙色	80	SD 7	ハケ後ナデ	
28	小形壺	(12.1)	(17.1)	4.4	ABF	A	にぶい橙色	80	SD11	ヘラケズリ後ハケナデ	
29	器台	7.0	2.3		ABF	A	橙色	85	SD11	外；ハケ後板ナデ	
30	器台	9.7	7.8	9.9	A	B	橙色	45	SD11	外；板ナデ 内；ハケ	
31	高杯脚				ABF	A	橙色	60	SD 7	ミガキ 風化	
32	高杯	17.0	5.2		AB	B	橙色	100	SD 7	風化	
33	高杯脚		7.0	12.9	ADF	B	橙色	100	SD11	外；ミガキ 内；ハケナデ	
34	高杯脚				AB	A	明褐色	60	SD11	風化顕著	
35	高杯脚				ABF	A	黒褐色	65	SD11	外；ミガキ 内；しぼり後ハケナデ	
36	高杯脚				AB	B	橙色	80	SD11	ハケ後板ナデ後ミガキ	
37	高杯脚		8.4		ABF	A	橙色	65	SD11	器面風化顕著	
38	高杯脚				ABDF	A	にぶい橙色	90	SD11	ヘラケズリ後ヘラナデ	
39	高杯脚				AB	A	橙色	90	SD11	ヘラケズリ後ナデ	
40	甕	(14.6)			ABF	A	にぶい赤褐色	15	SD11	器面風化顕著	
41	甕	(13.2)			ABF	A	黒褐色	10	SD11	単節LR	
42	甕	(14.4)			ABF	A	灰黄褐色	15	SD11	単節RL 内面風化	
43	甕				AB	A	にぶい褐色		SD11	単節RL	
44	甕				ABF	A	褐灰色		SD11	単節LR	
45	壺				AF	A	橙色		SD11	ヘラガキ沈線	
46	菅玉	長さ3.4cm, 径0.7cm, 孔径0.3cm, 重さ3.1g								SD11	緑泥石
47	菅玉	長さ2.8cm, 径0.5cm, 孔径0.2cm, 重さ1.8g								SD11	緑泥石
48	壺口縁	16.8			ABF	A	橙色	20	SD 8	ハケナデ後ヘラミガキ	
49	壺	18.6	7.8		AB	A	明赤褐色	100	SD 8	ハケ後ミガキ	
50	甕	(14.2)			ABF	B	にぶい黄橙色	50	SD 8	上；ハケナデ 下；ハケ後ヘラケズリ	
51	台付甕脚		5.0		AB	A	明赤褐色	20	SD 8	上；ハケ 下；ハケ後板ナデ	
52	小形壺	10.6	10.0	2.6	AB	A	赤褐色	100	SD 8	上；ハケナデ 下；ミガキ	
53	器台				ABDF	B	橙色	40	SD 8	器面風化顕著	
54	高杯				AB	A	にぶい橙色	60	SD 8	ハケ後ミガキ	
55	小形壺			5.3	AB	A	橙色	75	SD 8	器面風化顕著	
56	杯	(12.0)			ABF	A	黄橙色	20	SD5		
57	杯	(13.0)			ABF	A	にぶい橙色	25	SD94	風化顕著	

58	小形壺	(9.0)	9.3	AB	A	明赤褐色	80	SD58	ハケ後ナデ
59	壺	(14.8)		ABF	A	淡橙色	20	SD167	ハケ後板ナデ
石器類									
1	打製石斧	長さ17.8×9.5cm, 厚み2.2cm, 重さ489.4g						SD11	頁岩
2	打製石斧	長さ16.4×10.6cm, 厚み2.4cm, 重さ502.7g						SD13	頁岩
3	打製石斧	長さ7.4×8.3cm, 厚み2.2cm, 重さ170.6g						28坪	頁岩
4	打製石斧	長さ12.5×8.4cm, 厚み2.6cm, 重さ285.2g						29坪	細粒砂岩
5	打製石斧	長さ7.3×9.1cm, 厚み1.3cm, 重さ115.6g						19坪	細粒砂岩
6	打製石斧	幅8.0cm, 厚み2.6cm, 重さ127.2g						SD11	頁岩
7	打製石斧	長さ8.9×13.6cm, 厚み2.0cm, 重さ284.1g						23坪	頁岩
8	剥片	長さ7.7×4.2cm, 厚み1.3cm, 重さ64.8g						SD161	細粒砂岩、一部調整
9	剥片	長さ4.6×11.6cm, 厚み1.0cm, 重さ62.2g						29坪	頁岩、一部調整

IX その他の出土遺物

1. 水田耕作土出土古銭

水田耕作土からは、少数の古銭が出土した。詳細は 第146図および第7表に示した。

2. 河川跡出土遺物

K4グリッドでは、調査範囲内に女堀川蛇行部分が入り込んでいた(第7図)。この部分は昭和24年段階の米軍写真にも写っており、女堀川河川改修の折まで侵食が繰り返されてきたことがわかる。

第147図・第8表の遺物は、すべてこの蛇行部分から出土したものである。女堀川左岸の自然堤防上では、6・7世紀を中心とする大規模集落今井川越田遺跡を検出した。今井川越田遺跡の南部や東部は、蛇行した

女堀川の流路によって激しく侵食されていた。本来、これらの出土遺物は、今井川越田遺跡から流出したものと考えられる。

3. 縄文時代の出土遺物

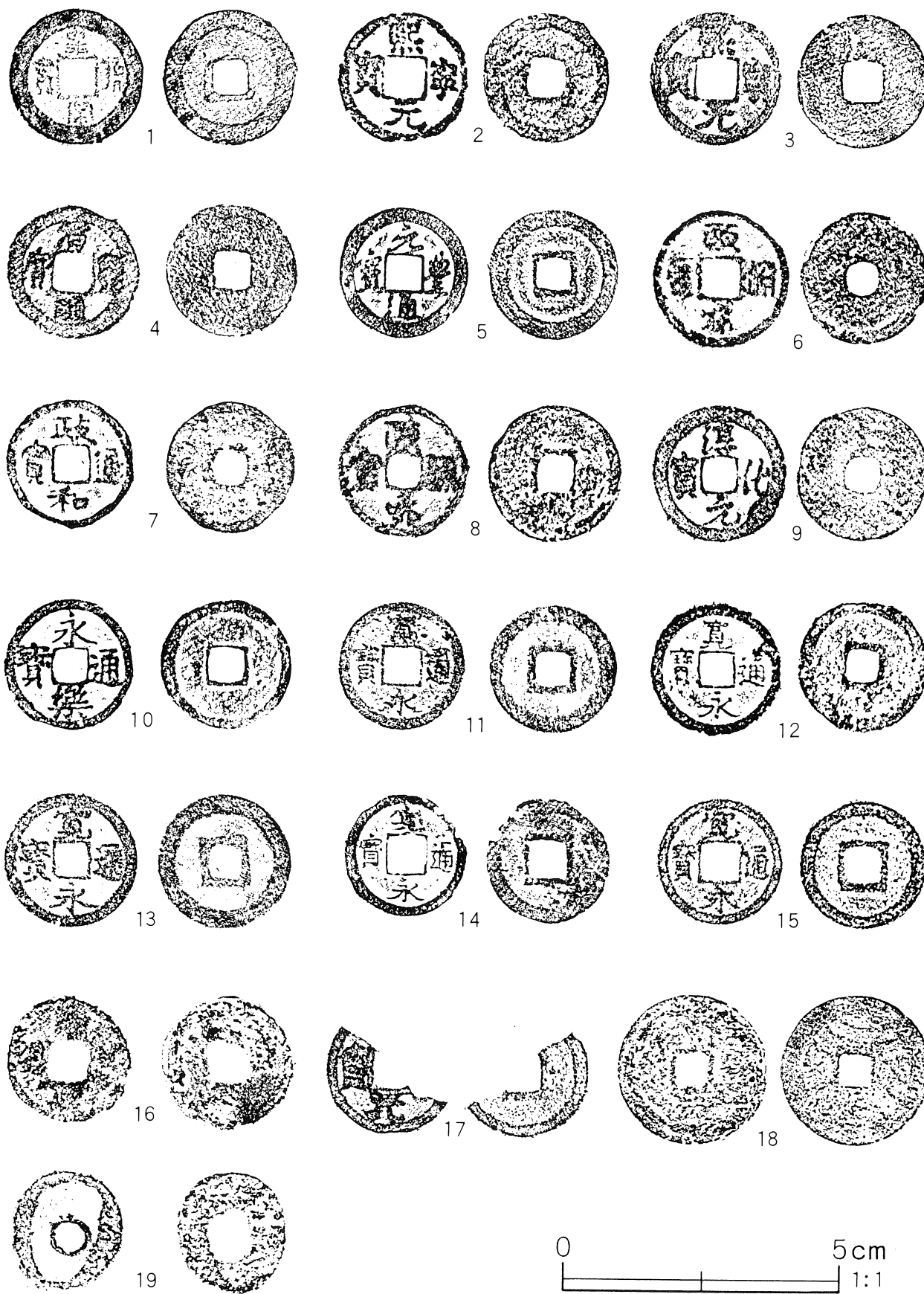
第148図に示した遺物は、調査範囲全体に散漫な分布で検出した縄文時代の遺物である。

1は、キャリパー形の深鉢形土器胴部下半である。

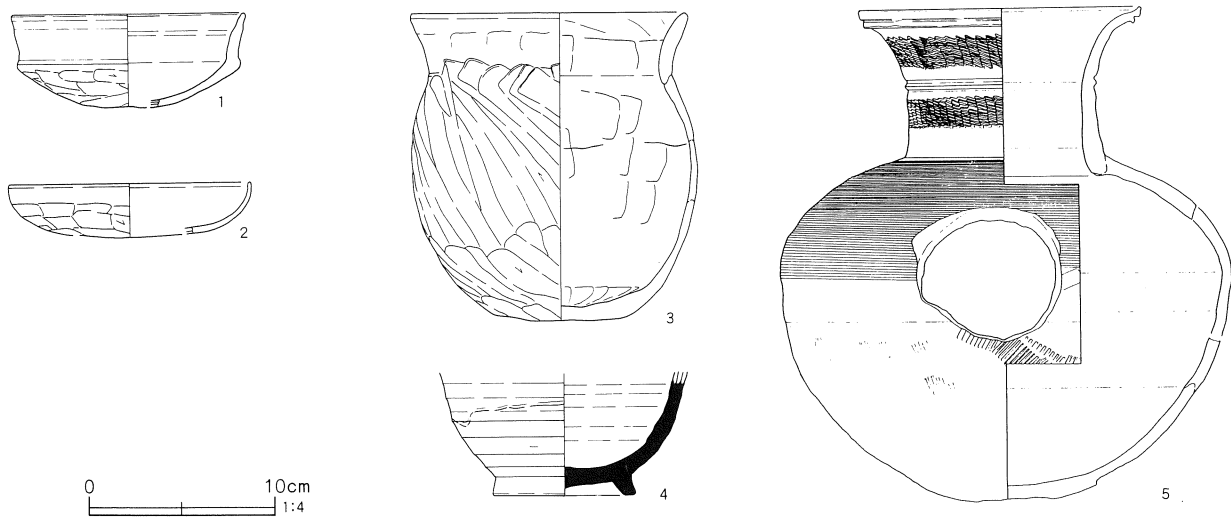
第7表 水田耕作土出土古銭一覧表(第146図)

番号	銭貨名	初鋳年	遺構名	径(cm)	郭径(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	皇宋通宝	1039	SD119	2.40	0.65	0.09	3.35	
2	熙寧元宝	1068	19坪	2.35	0.70	0.10	3.64	II2層中
3	熙寧元宝	1068	SD2	2.35	0.70	0.08	3.09	
4	元豊通宝	1078	17坪	2.30	0.60	0.09	3.26	
5	元豊通宝	1078	17坪	2.30	0.70	0.08	2.76	II層中
6	政和通宝	1111	11坪	2.30	0.55	0.07	1.76	南端堰
7	政和通宝	1111	13坪	2.30	0.55	0.10	2.97	
8	政和通宝	1111	19坪	2.40	0.65	0.12	2.90	
9	淳祐元宝	1241	17坪	2.40	0.60	0.08	3.56	江戸水田溝内
10	永樂通宝	1408	12坪	2.35	0.65	0.11	3.59	浅間上層B
11	寛永通宝	1636	SD2	2.30	0.60	0.09	2.70	
12	寛永通宝	1636	SD112	2.40	0.65	0.09	3.16	
13	寛永通宝	1636	24・30坪境	2.40	0.60	0.09	2.89	江戸南端堰
14	寛永通宝	1636	SD146	2.20	0.70	0.06	1.65	
15	寛永通宝	1636	18坪	2.30	0.65	0.07	2.23	B中
16	〇〇通宝		11坪	2.20	0.70	0.08	2.33	
17	〇〇元宝		女堀川(旧河道)	(2.30)	(0.60)	0.09	0.98	
18	〇〇〇宝		SD140	2.65	0.55	0.09	3.79	背文(青海波)
19	雁首銭		17坪	2.20	0.50	0.10	2.63	

第146図 水田耕作土出土古銭



第147図 河川跡出土遺物



第8表 河川跡出土遺物観察表（第147図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	出土遺構	備考
1	杯	(12.6)	5.0		ABDF	A	橙色	25	21坪	
2	杯	(13.0)			AB	A	にぶい橙色	15		
3	甕	(14.8)	16.3	6.8	ABF	A	にぶい黄橙色	50		
4	椀			7.5	A	A	黒褐色	60	21坪	
5	須恵器壺	15.1	26.5		A	A	灰色	100	河川跡	11条 1 単位の櫛描波状文

上部が横位の沈線と隆帯によって区画され、沈線による連弧文が施されている。地文は単節LRの撚糸文である。胎土は粗く、角閃石・輝石・チャートを含む。器面は、にぶい橙色である。K 2グリッドより出土した。

2～4は、分銅形の打製石斧である。2は粘盤岩で120g、H 4グリッドで出土した。3は絹雲母片岩で185g、L 2グリッドで出土した。4はホルンフェルスで387g、SK24から出土した。

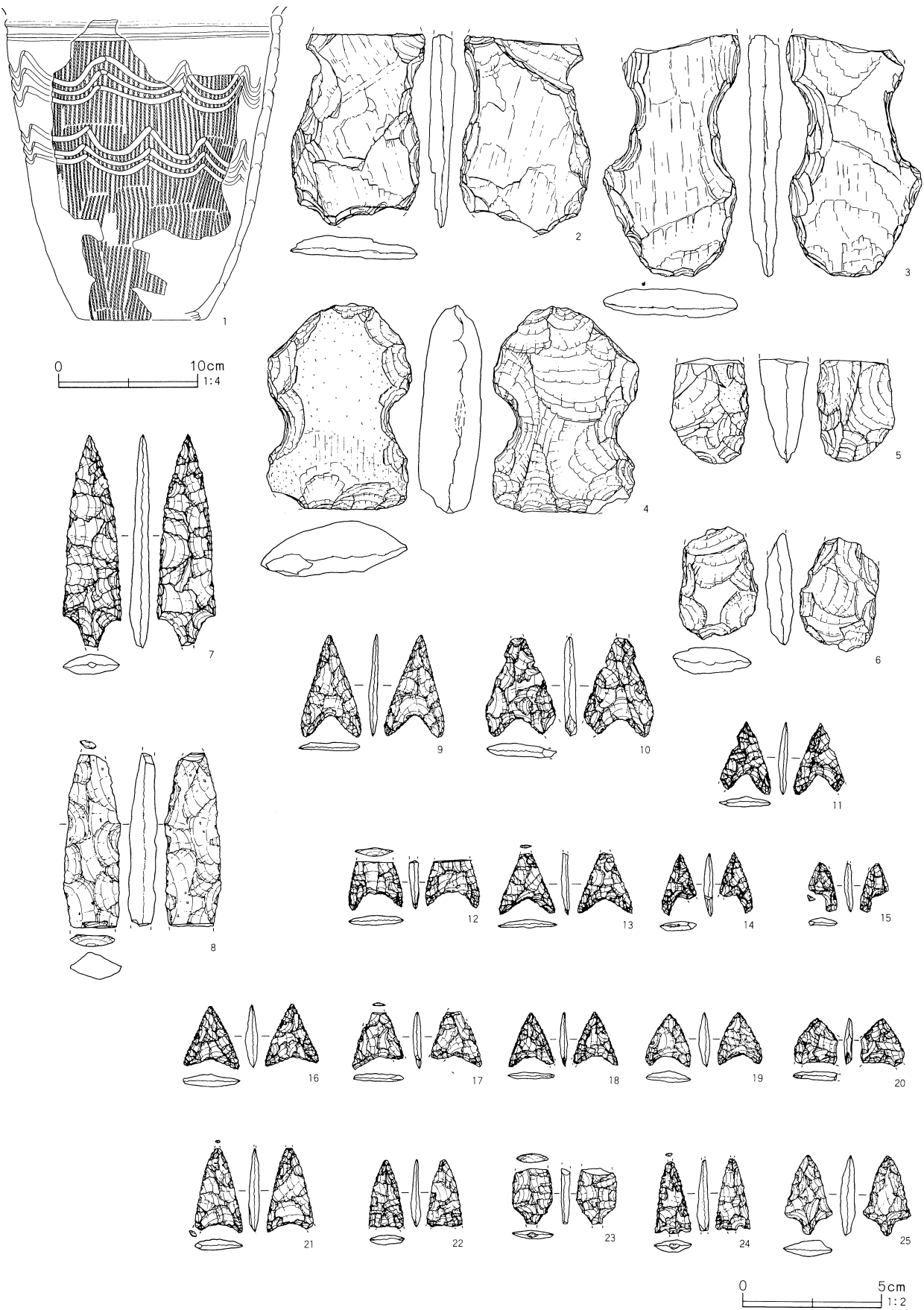
5・6は、短冊形の石斧である。上部を折損している。5はホルンフェルスで58g、F 3グリッドで出土した。6はホルンフェルスで41g、SD169内に流入していた。

7・8は尖頭器、9～25は石鏃である。7は、安山岩で9.67gである。J 2グリッドから出土した。8は、安山岩で14.25gである。E 3グリッドから出土した。

9は、安山岩で1.78gである。表面採集した。10は、黒曜石で3.01gである。D 5グリッドから出土した。11は、

黒曜石で0.85gである。F 3グリッドから出土した。12は、黒曜石で0.92gである。F 3グリッドから出土した。13は、チャートで0.88gである。F 3グリッドから出土した。14は、黒曜石で0.47gである。F 3グリッドから出土した。15は、チャートで0.36gである。F 3グリッドから出土した。16は、黒曜石で1.21gである。F 3グリッドから出土した。17は、チャートで0.81gである。F 3グリッドから出土した。18は、チャートで0.54gである。F 3グリッドから出土した。19は、チャートで0.86gである。F 3グリッドから出土した。20は、チャートで0.82gである。E 5グリッドから出土した。21は、チャートで1.63gである。E 5グリッドから出土した。22は、チャートで0.90gである。K 3グリッドから出土した。23は、チャートで1.01gである。F 3グリッドから出土した。24は、チャートで0.96gである。E 6グリッドから出土した。25は、ホルンフェルスで2.01gである。F 3グリッドから出土した。

第148図 縄文時代の出土遺物



第9表 今井条里遺跡溝跡一覽

番号	グリッド	火山灰	性格	時代	主な出土遺物
1	K2・3	A	条里坪界幹線用水路	中近世	陶磁器
1A	J4	B	条里坪界幹線用水路	平安	陶磁器
1B	J4	A	条里坪界幹線用水路	近世	
2	J2・3		条里坪界幹線用水路	近世	
2A	I4・J4	B	条里坪界幹線用水路	平安	
2B	I4・J4	A	条里坪界幹線用水路	近世	
3	I5・J5		条里坪界幹線用水路	近世	
4	I5・6		条里坪界幹線用水路	平安	陶磁器
5	G4・5		幹線用水路	古墳後期	土師器杯・甕
6	G4・5		幹線用水路	古墳前期	土師器甕
7	G4~J4		幹線用水路	古墳中期	土師器台甕・壺
8	G4~J4	C	幹線用水路	古墳前期	土師器台甕・壺
9	I4・J4		幹線用水路	古墳中期	土師器台甕・壺
10	J4		用水路	古墳前期	
11	D7~J4	C	幹線用水路	古墳前期	土師器台甕・壺・高杯
12	J4・K4	C	幹線用水路	古墳前期	
13	J4		幹線用水路	古墳前期	打製石斧
14	J4		不明	古墳中期	
15	I2・3		自然流路	不明	
16	I2・3		自然流路	不明	
17	I2		自然流路	不明	
18	I2		自然流路	不明	
19	J2・3	B	条里坪界幹線用水路	平安	
20	I2・J2		自然流路	不明	
21	I2・J2		自然流路	不明	
22	I3~J3		自然流路	不明	
23	J3~K3		自然流路	不明	
24	K2		自然流路	不明	
25	K2		自然流路	不明	
26	K2		自然流路	不明	
27	K2		自然流路	不明	
28	K2		自然流路	不明	
29	K2		自然流路	不明	
30	K2		自然流路	不明	
31	K2		自然流路	不明	
32	F2・G2		自然流路	不明	
33	G2	A	条里坪界幹線用水路	近世	
34	G2	A	条里坪界幹線用水路	近世	
35	G3~H3	A	条里坪界幹線用水路	中世	
36	H-2	A	条里坪界幹線用水路	中世	
37	G2・3	A	条里坪界幹線用水路	近世	陶磁器
38	H2		条里坪内支線用水路	近世	
39	G2		攪乱 (条里坪界幹線)	現代	
40	G3・H3	A	条里坪界幹線用水路	近世	
41	F2・3		幹線用水路	古墳・奈良	
42	F2・3		幹線用水路	古墳・奈良	
43	F3		幹線用水路	古墳・奈良	
44	F3	A	条里坪内支線用水路	平安	
45	F2~G3	A	条里坪内支線用水路	平安	
46	F2~G3	A	条里坪内支線用水路	平安	
47	F2~G3		幹線用水路	古墳・奈良	
48	F2~G3		幹線用水路	古墳・奈良	
49	F2・G3		幹線用水路	古墳・奈良	
50	F2・G3		幹線用水路	古墳・奈良	
51	F3		幹線用水路	古墳・奈良	土師器杯・甕
52	F3		幹線用水路	古墳・奈良	
53	F2~G4		幹線用水路	古墳・奈良	土師器甕・鉢
54	F2~G4		幹線用水路	古墳・奈良	土師器・須恵器
55	F2~G4		支線用水路	古墳中期	土師器甕・壺
56	F2~G4		幹線用水路	古墳・奈良	
57	G3		用水路	古墳・奈良	
58	G3		幹線用水路	古墳中期	土師器壺

番号	グリッド	火山灰	性格	時代	主な出土遺物
59	G3		用水路	古墳・奈良	
60	G3		不明	古墳後期?	
61	G3		不明	古墳後期?	
62	G3		不明	古墳後期?	
63	G3		不明	古墳後期?	
64	G3		幹線用水路	古墳・奈良	
65	H3		条里坪内支線用水路	近世?	
66	H3・4		条里坪内支線用水路	近世?	
67	H3		自然流路	不明	
68	H4		自然流路	不明	
69	H4		自然流路	不明	
70	H4		自然流路	不明	
71	F2	A	自然流路	不明	
72	F2	A	自然流路	不明	
73	H4		自然流路	不明	
74	H4		自然流路	不明	
75	H4		自然流路	不明	
76	H4		自然流路	不明	
77	H4		自然流路	不明	
78	H4		自然流路	不明	
79	H4		幹線用水路	古墳前期	
80	H4		幹線用水路	古墳	
81	H4		幹線用水路	古墳前期	
82	F4		条里坪内支線用水路	近世	
83	F4		条里坪界幹線用水路	平安	
84	H4		条里坪内支線用水路	平安	
85	H4		条里坪内支線用水路	奈良	須恵器杯
86	H4		条里坪内支線用水路	奈良	
87	G4		幹線用水路	奈良	
88	G4	B	条里坪内支線用水路	平安	
89	D3~E3		大規模用水路	古墳~平安	土師器杯・甕
90	F4		条里坪内支線用水路	近世	
91	H4		条里坪内支線用水路	古代~中世	
92	F3		不明	不明	
93	F3		不明	不明	
94	G4		幹線用水路	古墳後期	土師器杯
95	G4・H4		幹線用水路	古墳後期	
96	G4		幹線用水路	古墳前期	
97	G4		幹線用水路	古墳・奈良	
98	F4	B	条里坪内支線用水路	平安	
99	H3・4		条里坪界幹線用水路	平安	
100	H4		条里坪界幹線用水路	近世	
101	H4		条里坪界幹線用水路	中近世	
102	G4・H4	A	条里坪界幹線用水路	中近世	
103	H3・4		条里坪界幹線用水路	近世	
104	H3・4		条里坪界幹線用水路	近世	
105	H4		条里坪界幹線用水路	中近世	
106	H3		条里坪界幹線用水路	近世	
107	E3・F3	A	条里坪界幹線用水路	中近世	
108	H3・4		自然流路	不明	
109	E2	B	支線用水路	奈良	
110	D3・E3		条里坪内支線用水路	近世	
111	D3		支線用水路	奈良	
112	E4・F4		条里坪界幹線用水路	近世	陶磁器
113	F4		条里坪界幹線用水路	中近世	
114	E4	B	条里坪界幹線用水路	平安	
115	F4		条里坪内支線用水路	中近世	
116	F4	B	条里坪内支線用水路	中近世	
117	F4・5	B	条里坪内支線用水路	中近世	陶磁器 (波佐見)
118	E4	B	条里坪界幹線用水路	中近世	
119	E6・F6		条里坪界幹線用水路	近世	陶磁器 (伊万里・美濃)
120	E6・7		条里坪界幹線用水路	近世	陶磁器
121	G6・7	B	条里坪界幹線用水路	平安	土師器杯・甕

番号	グリッド	火山灰	性格	時代	主な出土遺物	
122	F6	B	条里坪界幹線用水路	平安	土師器杯・甕	
123	E6・F6		条里坪界幹線用水路	平安		
124	F6	B	条里坪内支線用水路	平安		
125	F6	B	条里坪内支線用水路	平安		
126	F6	B	条里坪内支線用水路	平安		
127	F6	B	条里坪内支線用水路	平安		
128	F6		条里坪界幹線用水路	奈良・平安		
129	F6・7	B	条里坪界幹線用水路	奈良・平安		
130	E6・7	A	条里坪界幹線用水路	近世		
131	E5・6	B	条里坪界幹線用水路	平安		土師器・須恵器
132	E5・6	B	条里坪界幹線用水路	平安		土師器杯・甕
133	E5・6	B	条里坪界幹線用水路	平安		土師器甕
134	E5・6	B	条里坪界幹線用水路	平安		土師器甕
135	E7		条里坪内支線用水路	中世		
136	E5・6	A	条里坪内支線用水路	平安		
137	E6	A	条里坪内支線用水路	近世	磁器	
138	E6	A	条里坪界幹線用水路	平安		
139	E6	A	条里坪内支線用水路	近世	陶磁器 (伊万里)	
140	E6		条里坪界幹線用水路	近世	陶磁器 (波佐見・万古)	
141	E6・7	B	条里坪内支線用水路	古墳・奈良		
142	E6	B	条里坪界幹線用水路	平安		
143	E6		条里坪内支線用水路	近世		
144	E6		条里坪内支線用水路	中近世		
145	D7・E7	B	条里坪界幹線用水路	平安	土師・須恵・灰釉 土師器杯 陶磁器 陶磁器	
146	D4~7	B	大規模用水路	平安		
147	D4~7		条里坪界幹線用水路	平安		
148	D6・7	A	条里坪界幹線用水路	近世		
149	D6・E6		条里坪界幹線用水路	中近世		
150	D7・E7	B	条里坪界幹線用水路	平安		
151	D6・7		条里坪界幹線用水路	平安		
152	D7		条里坪内支線用水路	奈良・平安		
153	D7		条里坪界幹線用水路	平安		
154	D6	B	条里坪界幹線用水路	平安		
155	D7	C	幹線用水路	古墳前期		
156	D6		条里坪界幹線用水路	平安		
157	D4		条里坪界幹線用水路	奈良・平安		
158	D4		条里坪界幹線用水路	奈良・平安		
159	D4		不明	奈良・平安		
160	D5		大畦畔土取り	平安		
161	D6・7		幹線用水路	古墳中期	土師器杯	
162	D6・7		幹線用水路	古墳中期		
163	D6~E6		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良	土師器・須恵器	
164	D6		不明	古墳・奈良	土師器杯	
165	D5		大畦畔土取り	平安		
166	D5		大畦畔土取り	平安		
167	D6・7		幹線用水路	古墳中期	土師器壺・高杯	
168	D7		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良		
169	D7		幹線用水路	古墳中期		
170	D6		条里坪界幹線用水路	平安	土師器甕	
171	D6	B	条里坪界幹線用水路	平安		
172	D7		支線用水路	古墳中期		
173	D7		支線用水路	古墳中期		
174	D6	B	条里坪界幹線用水路	平安		
175	D6	B	条里坪界幹線用水路	平安		
176	E5		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良		
177	E5・6		幹線用水路	古墳中期		
178	E6		条里坪界幹線?	古墳・奈良		
179	E6		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良		
180	E6		支線用水路	古墳中期		
181	D6		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良	土師器杯	
182	E6		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良		
183	E6		条里坪界幹線用水路	古墳・奈良		
184	D7		不明	奈良		

番号	グリッド	火山灰	性格	時代	主な出土遺物
185	D7・E7		不明	奈良	
186	E7		条里坪界幹線用水路	奈良・平安	
187	E7		不明	奈良	
188	E7		不明	奈良	
189	E7		不明	奈良	
190	E6		支線用水路	古墳前期	
191	D6		支線用水路	古墳中期	
192	D6・E6		条里坪界幹線用水路	平安	
193	I3・J2		条里坪界幹線用水路	中近世	
194	G3～H3		条里坪界幹線？	奈良？	
195	H4	B	条里坪界幹線用水路	平安	
196	J4	B	条里坪界幹線？	平安	

第10表 今井条里遺跡水田跡一覽

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1	16.4			N-4°-E	1坪	G2	江戸	68	11.7			N-S	19坪	H3	平安
2	16.6	26.4	438.2	N-4°-E	1坪	G2	江戸	69				N-S	19坪	H3	平安
3	16.6			N-4°-E	1坪	G2	江戸	70				N-5°-E	19坪	H3	平安
4	18.1			N-4°-E	1坪	G2	江戸	71	6.6			N-5°-E	19坪	H3	平安
5	16.4			N-4°-E	1坪	G2	江戸	72	6.9			N-S	19坪	H3	平安
6				N-4°-E	1坪	G2	江戸	73	10.3			N-S	19坪	H3	平安
7	14.2			N-4°-E	1坪	G2	江戸	74	6.0			N-S	19坪	H3	平安
8	8.1	17.1	138.5	N-9°-E	11坪SD66	H3	江戸	75	7.0			N-S	19坪	H3	平安
9		11.2		N-5°-E	19坪	H3	平安	76				N-5°-E	11坪	H3	平安
10	5.4	12.0	64.8	N-2°-W	19坪	H3	平安	77	10.8			N-5°-E	11坪	H3	平安
11	5.2	11.0	57.2	N-2°-W	19坪	H3	平安	78	14.7			N-2°-W	11坪	H3	平安
12	6.0	10.8	64.8	N-5°-E	19坪	H3	平安	79	9.4			N-2°-W	11坪	H3	平安
13	11.3	10.0	113.0	N-4°-E	19坪	H3	平安	80	10.5			N-2°-W	11坪	H3	平安
14	7.0	9.0	63.0	N-4°-E	19坪	H3	平安	81	11.4			N-2°-W	11坪	H3	平安
15		7.2		N-4°-E	19坪	H3	平安	82	6.3				11坪	H3	平安
16	9.2	5.0	46.0	N-S	19坪	H3	平安	83		5.8		N-5°-E	11坪	H3	平安
17	6.8	4.7	32.0	N-S	19坪	H3	平安	84	12.2	6.8	83.0	N-5°-E	11坪	H3	平安
18		10.5		N-5°-E	19坪	H3	平安	85	13.4	5.6	75.0	N-2°-W	11坪	H3	平安
19	8.7	10.0	87.0	N-5°-E	19坪	H3	平安	86	8.8	7.2	63.4	N-2°-W	11坪	H3	平安
20		11.7		N-4°-E	19坪	H3	平安	87	7.0	7.8	54.6	N-5°-E	11坪	H3	平安
21	8.5	11.2	95.2	N-4°-E	19坪	H3	平安	88	10.1	7.8	78.8	N-2°-W	11坪	H3	平安
22		10.3		N-7°-E	19坪	H3	平安	89	11.4	8.1	92.3	N-2°-W	11坪	H3	平安
23	10.4	11.6	120.6	N-7°-E	19坪	H3	平安	90	6.1	8.0	48.8	N-2°-W	11坪	H3	平安
24	7.5	7.0	52.5	N-S	19坪	H3	平安	91		7.6			11坪	H3	平安
25	12.0	7.2	86.4	N-5°-E	19坪	H3	平安	92		6.0		N-6°-E	11坪	H2	平安
26	11.0	6.8	74.8	N-5°-E	19坪	H3	平安	93	17.3	5.2	90.0	N-S	11坪	H2	平安
27	12.9	4.5	58.1	N-S	19坪	H3	平安	94	7.3	5.8	42.3	N-4°-E	11坪	H2	平安
28	14.8	10.8	159.8	N-4°-E	19坪	H3	平安	95	9.4	5.5	51.7	N-4°-E	11坪	H2	平安
29	9.0	6.6	59.4	N-4°-E	19坪	H3	平安	96	8.4	8.5	71.4	N-4°-E	11坪	H2	平安
30	9.8	10.8	105.8	N-4°-E	19坪	H3	平安	97	12.3	8.0	98.4	N-2°-W	11坪	H2	平安
31	7.8	8.4	65.5	N-5°-E	19坪	H3	平安	98	6.0	7.4	44.4	N-S	11坪	H2	平安
32	3.2	7.8	25.0	N-S	19坪	H3	平安	99		8.0			11坪	H2	平安
33	14.4	2.8	40.3	N-3°-E	19坪	H3	平安	100		4.2		N-10°-E	11坪	H2	平安
34	8.4	4.8	40.3	N-10°-E	19坪	H3	平安	101	10.2	5.5	56.1	N-S	11坪	H2	平安
35	8.4	6.2	52.1	N-4°-E	19坪	H3	平安	102		8.2		N-10°-E	11坪	H2	平安
36	14.6	7.7	112.4	N-3°-E	19坪	H3	平安	103	11.7	7.0	81.9	N-S	11坪	H2	平安
37	22.8	8.2	187.0	N-4°-E	19坪	H3	平安	104	11.2	12.3	137.8	N-3°-E	11坪	H2	平安
38	8.8	11.7	103.0	N-4°-E	19坪	H3	平安	105	10.0	13.0	130.0	N-3°-E	11坪	H2	平安
39	8.2	15.8	129.6	N-4°-E	19坪	H3	平安	106	12.8	13.2	169.0	N-3°-E	11坪	H2	平安
40		5.3		N-S	19坪	H3	平安	107	7.3	10.3	75.2	N-5°-E	11坪	H2	平安
41		11.6		N-4°-E	19坪	H3	平安	108	6.0	10.5	63.0	N-5°-E	11坪	H2	平安
42		8.4		N-5°-W	19坪	H3	平安	109	6.7	10.8	72.4	N-S	11坪	H2	平安
43	6.2	11.6	71.9	N-5°-W	19坪	H3	平安	110	5.2	11.4	59.3	N-5°-E	11坪	H2	平安
44	7.1	3.4	24.1	N-5°-W	19坪	H3	平安	111				N-S	11坪	H2	平安
45	7.3	3.5	25.6	N-S	19坪	H3	平安	112				N-5°-E	18坪	G4	平安
46	10.4	3.0	31.2	N-S	19坪	H3	平安	113	8.5			N-5°-E	18坪	G4	平安
47	7.0	3.7	25.9	N-S	19坪	H3	平安	114	6.2			N-5°-E	18坪	G4	平安
48	6.8	17.0	115.6	N-5°-W	19坪	H3	平安	115	11.2			N-5°-E	18坪	G4	平安
49		4.3		N-3°-E	19坪	H3	平安	116	10.8			N-5°-E	18坪	G3・4	平安
50		4.5		N-3°-E	19坪	H3	平安	117	8.1			N-5°-E	18坪	G3・4	平安
51	13.3			N-S	19坪	H3	平安	118	5.0			N-5°-E	18坪	G3	平安
52	9.5	8.4	79.8	N-S	19坪	H3	平安	119	18.3			N-5°-E	18坪	G3	平安
53					19坪	H3	平安	120	6.0			N-5°-E	18坪	G3	平安
54	12.3	9.4	115.6	N-4°-E	19坪	H3	平安	121	11.1			N-5°-E	18坪	G3・H3	平安
55	14.0	10.5	147.0	N-4°-E	19坪	H3	平安	122	5.3			N-2°-W	11坪	H3	平安
56		7.2		N-4°-E	19坪	H3	平安	123				N-3°-E	18坪	G3	平安
57		8.7		N-4°-E	19坪	H3	平安	124	8.7			N-3°-E	18坪	G3	平安
58				N-3°-E	19坪	H3	平安	125	6.1	7.5	45.8	N-3°-E	18坪	G3	平安
59		8.0		N-4°-W	19坪	H3	平安	126	11.7	7.2	84.2	N-3°-E	18坪	G3	平安
60	7.2	8.1	58.3	N-3°-E	19坪	H3	平安	127	7.4	3.7	27.4	N-S	18坪	G3	平安
61	5.4	9.7	52.4	N-3°-E	19坪	H3	平安	128	11.1	4.1	45.5	N-S	18坪	G3	平安
62	10.3	8.8	90.6	N-3°-E	19坪	H3	平安	129	10.7	11.3	120.9	N-8°-E	18坪	G3	平安
63	7.0	8.6	60.2	N-S	19坪	H3	平安	130	12.4	8.8	109.1	N-9°-E	18坪	G3	平安
64	6.3	8.3	52.3	N-S	19坪	H3	平安	131	9.0	8.9	84.2	N-9°-E	18坪	G3	平安
65		7.8		N-5°-E	19坪	H3	平安	132	10.5	9.4	98.7	N-9°-E	18坪	G3	平安
66	14.6	11.2	163.5	N-6°-E	19坪	H3	平安	133	6.1	9.0	54.9	N-9°-E	18坪	G3	平安
67	7.0	10.7	74.9	N-6°-E	19坪	H3	平安	134	10.1	8.1	81.8	N-9°-E	18坪	G3・H3	平安

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
135					18坪	H3	平安	203	3.2	3.3	10.6	N-15°-E		G4	古墳・奈良
136				N-3°-E	18坪	G3	平安	204	2.8	2.6	7.3	N-10°-E		G4	古墳・奈良
137		11.2		N-8°-E	18坪	G3	平安	205	3.0	2.7	8.1	N-10°-E		G4	古墳・奈良
138	10.8	10.3	111.2	N-3°-E	18坪	G3	平安	206	3.3	2.8	9.2	N-10°-E		G4	古墳・奈良
139	10.2	10.6	108.1	N-3°-E	18坪	G3	平安	207	3.4	3.7	12.6	N-10°-E		G4	古墳・奈良
140	5.6	9.6	53.8	N-3°-E	18坪	G3	平安	208	4.3					G4	古墳・奈良
141	9.0	10.1	90.9	N-3°-E	18坪	G3・H3	平安	209	2.5	3.2	8.0	N-15°-E		G4	古墳・奈良
142					18坪	H3	平安	210	2.3	2.6	6.0	N-15°-E		G4	古墳・奈良
143				N-3°-E	18坪	G3	平安	211	1.9	2.5	4.8	N-15°-E		G4	古墳・奈良
144				N-3°-E	18坪	G3	平安	212	2.1	3.2	6.7			G4	古墳・奈良
145				N-3°-E	18坪	G3	平安	213	1.9	3.0	5.7	N-10°-E		G4	古墳・奈良
146		5.9		N-S	18坪	G3	平安	214	3.3	3.2	10.6	N-S		G4	古墳・奈良
147				N-S	18坪	G3	平安	215	3.1	2.5	7.8	N-5°-E		G4	古墳・奈良
148	7.3			N-S	18坪	G3	平安	216	2.8	2.9	8.1	N-5°-E		G4	古墳・奈良
149				N-8°-E	18坪	G3	平安	217	2.1	2.7	5.7	N-5°-E		G4	古墳・奈良
150				N-8°-E	18坪	G3	平安	218		2.4				G4	古墳・奈良
151	15.0	9.3	139.5	N-5°-E	18坪	G3	平安	219						G4	古墳・奈良
152	8.1	10.1	81.8	N-S	18坪	G3	平安	220	3.6					G4	古墳・奈良
153		10.4		N-5°-E	18坪	G3・H3	平安	221	2.8	3.0	8.4	N-S		G4	古墳・奈良
154	16.2			N-3°-E	18坪	G3	平安	222	3.2	2.5	8.0	N-S		G4	古墳・奈良
155				N-S	18坪	G3	平安	223	2.8	2.8	7.8	N-2°-W		G4	古墳・奈良
156				N-S	18坪SD83	F3	平安	224	2.6			N-2°-W		G4	古墳・奈良
157		4.0		N-4°-E	18坪SD83	F3	平安	225		3.0		N-2°-W		G4	古墳・奈良
158		11.4		N-10°-E	18坪SD83	F3	平安	226	2.8	3.1	8.7	N-S		G4	古墳・奈良
159				N-9°-E	18坪SD83	F3	平安	227	2.9	2.5	7.3	N-S		G4	古墳・奈良
160				N-3°-E	18坪	F3	平安	228						G4	古墳・奈良
161		10.9		N-7°-E	18坪	F3	平安	229		2.9				G4	古墳・奈良
162		12.9		N-4°-W	18坪	F3	平安	230	3.0					G4	古墳・奈良
163				N-9°-W	18坪	F3	平安	231	3.0	2.7	8.1	N-4°-E		G4	古墳・奈良
164						G4	古墳・奈良	232						G4	古墳・奈良
165						G4	古墳・奈良	233						G4	古墳・奈良
166	1.9			N-20°-E		G4	古墳・奈良	234						G4	古墳・奈良
167	1.9			N-20°-E		G4	古墳・奈良	235	2.4					G4	古墳・奈良
168						G4	古墳・奈良	236	2.4			N-4°-E		G4	古墳・奈良
169	2.8	2.3	6.4	N-20°-E		G4	古墳・奈良	237						G4	古墳・奈良
170	2.6	2.2	5.7	N-20°-E		G4	古墳・奈良	238						G4	古墳・奈良
171	3.2			N-20°-E		G4	古墳・奈良	239		2.5				G4	古墳・奈良
172		2.6				G4	古墳・奈良	240		1.9				G4	古墳・奈良
173		2.3				G4	古墳・奈良	241		3.9				G4	古墳・奈良
174	3.5			N-20°-E		G4	古墳・奈良	242						G4	古墳・奈良
175	3.2	2.3	7.4	N-20°-E		G4	古墳・奈良	243	6.0			N-S		G4	古墳・奈良
176	3.4	3.0	10.2	N-15°-E		G4	古墳・奈良	244	5.6	2.1	11.8	N-S		G4	古墳・奈良
177	3.2	3.0	9.6	N-10°-E		G4	古墳・奈良	245	4.6	2.2	10.1	N-S		G4	古墳・奈良
178	2.7	1.9	5.1	N-10°-E		G4	古墳・奈良	246	4.5	3.7	16.7	N-2°-E		G4	古墳・奈良
179	3.2	2.6	8.3	N-10°-E		G4	古墳・奈良	247		3.8		N-2°-E		G4	古墳・奈良
180		2.2				G4	古墳・奈良	248	3.2	4.0	12.8	N-S		G4	古墳・奈良
181	2.7			N-15°-E		G4	古墳・奈良	249						G4	古墳・奈良
182	2.7	2.6	7.0	N-15°-E		G4	古墳・奈良	250		2.1		N-S		G4	古墳・奈良
183	2.6	3.1	8.1	N-15°-E		G4	古墳・奈良	251	3.0	4.0	12.0	N-S		G4	古墳・奈良
184	2.8	2.6	7.3	N-15°-E		G4	古墳・奈良	252	2.5	4.1	10.3	N-S		G4	古墳・奈良
185	2.9	2.1	6.1	N-15°-E		G4	古墳・奈良	253	2.3	3.7	8.5	N-S		G4	古墳・奈良
186	2.7	2.9	7.8	N-15°-E		G4	古墳・奈良	254						G4	古墳・奈良
187		2.0		N-10°-E		G4	古墳・奈良	255	3.5	3.4	11.9	N-S		G4	古墳・奈良
188						G4	古墳・奈良	256	3.4	3.6	12.2	N-6°-E		G4	古墳・奈良
189	3.3			N-15°-E		G4	古墳・奈良	257	3.0	3.7	11.1	N-S		G4	古墳・奈良
190	3.5	2.7	9.5	N-15°-E		G4	古墳・奈良	258	2.2	2.6	5.7	N-6°-W		G4	古墳・奈良
191	3.2	3.3	10.6	N-15°-E		G4	古墳・奈良	259	5.3	3.4	18.0	N-5°-E		G4	古墳・奈良
192	3.0	2.6	7.8	N-15°-E		G4	古墳・奈良	260	2.8	4.0	11.2	N-S		G4	古墳・奈良
193	3.2	2.5	8.0	N-15°-E		G4	古墳・奈良	261	3.9	4.0	15.6	N-S		G4	古墳・奈良
194	3.5	2.6	9.1	N-15°-E		G4	古墳・奈良	262	4.0			N-S		G4	古墳・奈良
195	4.1	3.0	12.3	N-10°-E		G4	古墳・奈良	263						G4	古墳・奈良
196	2.4	2.5	6.0	N-15°-E		G4	古墳・奈良	264	3.9	3.0	11.7	N-S		G4	古墳・奈良
197	2.7	3.3	8.9	N-15°-E		G4	古墳・奈良	265		2.7				G4	古墳・奈良
198	2.6	2.5	6.5	N-15°-E		G4	古墳・奈良	266				N-S		G4	古墳・奈良
199	2.2	2.5	5.5	N-15°-E		G4	古墳・奈良	267		2.7		N-S		G4	古墳・奈良
200	2.0	2.7	5.4	N-15°-E		G4	古墳・奈良	268	3.0	2.9	8.7	N-S		G4	古墳・奈良
201	2.2	3.7	8.1	N-15°-E		G4	古墳・奈良	269	3.0	2.9	8.7	N-S		G4	古墳・奈良
202	4.0					G4	古墳・奈良	270	4.7	3.6	16.9	N-S		G4	古墳・奈良

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
271	4.2	4.3	18.1	N-S		G4	古墳・奈良	339	5.2					G5	古墳・奈良
272	3.2					G4	古墳・奈良	340	3.0	3.4	10.2	N-S		G5	古墳・奈良
273		4.8				G4	古墳・奈良	341	2.3	3.6	8.3	N-S		G5	古墳・奈良
274	2.0	2.9	5.8	N-4°-E		G4	古墳・奈良	342	3.9	4.2	16.4	N-S		G5	古墳・奈良
275	3.3	2.8	9.2	N-7°-E		G4	古墳・奈良	343	3.6	5.2	18.7	N-S		G5	古墳・奈良
276				N-4°-E		G4	古墳・奈良	344		2.7		N-S		G5	古墳・奈良
277	3.4			N-7°-E		G4	古墳・奈良	345						G5	古墳・奈良
278	3.6			N-S		G4	古墳・奈良	346	3.5	3.6	12.6	N-S		G5	古墳・奈良
279	5.4	3.2	17.3	N-S		G4	古墳・奈良	347	4.6	3.3	15.2	N-3°-E		G5	古墳・奈良
280	6.2	2.5	15.5	N-S		G4	古墳・奈良	348	5.7	5.5	31.4	N-3°-W		G5	古墳・奈良
281	5.3	4.2	22.3	N-S		G4	古墳・奈良	349	5.6	2.6	14.6	N-3°-W		G5	古墳・奈良
282		4.5		N-S		G4	古墳・奈良	350	5.6					G5	古墳・奈良
283						G4	古墳・奈良	351	5.1					G5	古墳・奈良
284	3.5	4.5	15.8	N-5°-E		G4	古墳・奈良	352	2.0	5.7	11.4	N-3°-E		G5	古墳・奈良
285	3.8			N-5°-E		G4	古墳・奈良	353				N-S		G5	古墳・奈良
286	5.4			N-5°-E	SD54	G4	古墳・奈良	354	3.9	4.6	17.9	N-2°-E		G5	古墳・奈良
287	4.8	3.0	14.4	N-10°-E	SD54	G4	古墳・奈良	355		1.8		N-S		G5	古墳・奈良
288	4.7	4.5	21.2	N-8°-E	SD54	G4	古墳・奈良	356		1.8		N-S		G5	古墳・奈良
289				N-5°-E		G4	古墳・奈良	357		4.0		N-S		G5	古墳・奈良
290	4.6			N-S		G4	古墳・奈良	358	3.5	3.0	10.5	N-S		G5	古墳・奈良
291						G4	古墳・奈良	359	3.7	3.3	12.2	N-10°-E		G5	古墳・奈良
292		4.0		N-5°-E		G4	古墳・奈良	360	4.2			N-10°-E		G5	古墳・奈良
293		2.4		N-5°-E		G4	古墳・奈良	361						G5	古墳・奈良
294						G4	古墳・奈良	362						G5	古墳・奈良
295	4.2				SD54	G4	古墳・奈良	363		3.3		N-5°-W		G5	古墳・奈良
296		4.1			SD54	G4	古墳・奈良	364	1.8	3.2	5.8	N-10°-W		G5	古墳・奈良
297	1.9	4.2	8.0	N-S	SD54	G4	古墳・奈良	365						G5	古墳・奈良
298	2.6				SD54	G4	古墳・奈良	366	2.0	3.8	7.6	N-2°-W	SD86	G5	古墳・奈良
299	4.7	2.6	12.2	N-5°-W	SD54	G4	古墳・奈良	367					SD86	G5	古墳・奈良
300	4.4	5.0	22.0	N-S	SD54	G4	古墳・奈良	368		1.7		N-5°-W		G5	古墳・奈良
301		3.0		N-S	SD54	G4	古墳・奈良	369		1.7		N-S	SD86	G5	古墳・奈良
302	3.3	1.6	5.3	N-S	SD54	G4	古墳・奈良	370		2.5		N-S		G5	古墳・奈良
303	3.0	2.0	6.0	N-S	SD54	G4	古墳・奈良	371						G5	古墳・奈良
304	4.1	2.4	9.8	N-5°-E		G4	古墳・奈良	372	2.3	2.8	6.4	N-5°-W		G5	古墳・奈良
305	4.3	1.8	7.7	N-S		G4	古墳・奈良	373						G5	古墳・奈良
306	4.3					G4	古墳・奈良	374						G5	古墳・奈良
307	4.2			N-5°-W		G4	古墳・奈良	375	2.8	2.3	6.4	N-S		G5	古墳・奈良
308	3.4	3.0	10.2	N-S		G4	古墳・奈良	376	2.3			N-S		G5	古墳・奈良
309	3.6	4.3	15.5	N-2°-E		G4	古墳・奈良	377		2.0		N-S		G5	古墳・奈良
310	3.7	4.6	17.0	N-10°-E		G4	古墳・奈良	378						G5	古墳・奈良
311	4.6	2.4	11.0	N-2°-E		G4	古墳・奈良	379					SD86	G5	古墳・奈良
312	4.5					G4	古墳・奈良	380						G5	古墳・奈良
313	3.9					G4	古墳・奈良	381		3.2		N-S		G5	古墳・奈良
314	2.7	3.9	10.5	N-10°-E		G4	古墳・奈良	382					SD86	G5	古墳・奈良
315	4.0	4.8	19.2	N-10°-E		G4	古墳・奈良	383		2.2				G5	古墳・奈良
316	4.1	2.4	9.8	N-10°-E		G4	古墳・奈良	384	3.0	2.5	7.5	N-S	SD86	G5	古墳・奈良
317	4.5			N-10°-E		G4	古墳・奈良	385		2.6				G5	古墳・奈良
318	4.8	2.1	10.1	N-5°-W		G4	古墳・奈良	386	2.7	2.1	5.7	N-S		G5	古墳・奈良
319	3.5			N-5°-W		G4	古墳・奈良	387		3.8				G5	古墳・奈良
320	4.2	2.9	12.2	N-10°-E		G4	古墳・奈良	388	2.3	3.8	8.7	N-S		G5	古墳・奈良
321	3.4	5.9	20.1	N-5°-E		G4・5	古墳・奈良	389		2.5				G5	古墳・奈良
322	3.2			N-10°-E		G4・5	古墳・奈良	390		2.4				G5	古墳・奈良
323						G4	古墳・奈良	391						G5	古墳・奈良
324		4.1				G4	古墳・奈良	392	3.8	2.2	8.4	N-5°-W		G5	古墳・奈良
325		3.9		N-6°-W		G4・5	古墳・奈良	393	4.7					G5	古墳・奈良
326		5.3				G5	古墳・奈良	394	3.4	3.5	11.9	N-S		G5	古墳・奈良
327						G5	古墳・奈良	395	3.4	3.1	10.5	N-S	SD86	G5	古墳・奈良
328						G5	古墳・奈良	396	3.3	2.3	3.8		SD86	G5	古墳・奈良
329						G5	古墳・奈良	397		2.5		N-2°-W		G5	古墳・奈良
330	3.6	3.5	12.6	N-S		G5	古墳・奈良	398	3.7	1.7	6.3	N-2°-W		G5	古墳・奈良
331	3.0					G5	古墳・奈良	399	4.7	3.9	18.3	N-S		G5	古墳・奈良
332	2.8	4.1	11.5	N-2°-W		G5	古墳・奈良	400	2.1	3.0	6.3	N-5°-W		G5	古墳・奈良
333	3.4					G5	古墳・奈良	401	2.7	2.4	6.5	N-10°-W		G5	古墳・奈良
334		3.7				G5	古墳・奈良	402	4.0					G5	古墳・奈良
335						G5	古墳・奈良	403		2.2		N-10°-W		G5	古墳・奈良
336		3.5				G5	古墳・奈良	404	2.8				SD86	G5	古墳・奈良
337						G5	古墳・奈良	405	3.0				SD86	G5	古墳・奈良
338		5.2				G5	古墳・奈良	406		3.0				G5	古墳・奈良

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
407		2.3				G5	古墳・奈良	475	13.8				17坪	F3	平安
408	2.3					G5	古墳・奈良	476	4.3			N-2°-E	17坪	F3	平安
409	2.3	2.5	5.8	N-15°-W		G5	古墳・奈良	477					17坪	F3	平安
410	3.2	2.3	7.4	N-15°-W		G5	古墳・奈良	478				N-4°-E	10坪	G3	平安
411	3.0					G5	古墳・奈良	479		8.5		N-5°-E	10坪	G3	平安
412						G5	古墳・奈良	480		12.8		N-5°-E	10坪	G3	平安
413		2.3		N-15°-W		G5	古墳・奈良	481		19.0		N-2°-E	10坪	G3	平安
414		2.4				G5	古墳・奈良	482					10坪	G3	平安
415					SD85	G5	古墳・奈良	483					11坪	H3	平安
416					SD85	G5	古墳・奈良	484		9.5		N-S	11坪	H3	平安
417					SD85	G5	古墳・奈良	485		15.2		N-5°-E	11坪	H3	平安
418					SD85	G5	古墳・奈良	486		11.5		N-10°-E	11坪	H3	平安
419						G5	古墳・奈良	487		11.0		N-S	11坪	H3	平安
420					SD85	G5	古墳・奈良	488					11坪	H3	平安
421	2.5	2.5	6.3	N-6°-E	SD85	G5	古墳・奈良	489	18.0				11坪	H3	平安
422	1.5				SD85	G5	古墳・奈良	490				N-5°-E	9坪	F2	平安
423	1.6	1.9	3.0	N-S	SD85	G5	古墳・奈良	491				N-5°-E	9坪	F2	平安
424	2.0	3.0	6.0	N-S	SD85	G5	古墳・奈良	492				N-5°-E	9坪	F2	平安
425						G5	古墳・奈良	493				N-5°-E		F4	古墳・奈良
426						G5	古墳・奈良	494	2.5			N-10°-E		F4	古墳・奈良
427		2.5				G5	古墳・奈良	495	2.9			N-20°-E		F4	古墳・奈良
428						G5	古墳・奈良	496						F4	古墳・奈良
429					17坪	F3	平安	497	5.2					F4	古墳・奈良
430					17坪	F3	平安	498	3.0	2.7	8.1	N-S		F4	古墳・奈良
431					17坪	F3	平安	499	2.6	3.1	8.1	N-S		F4	古墳・奈良
432	10.0	6.7	67.0	N-S	17坪	F3	平安	500	1.8	3.1	5.6	N-S		F4	古墳・奈良
433					17坪	F3	平安	501	4.1					F4	古墳・奈良
434				N-S	17坪	F3	平安	502		3.1		N-5°-E		F4	古墳・奈良
435	3.6	5.0	18.0	N-S	17坪	F3	平安	503	2.7	3.1	8.4	N-10°-E		F4	古墳・奈良
436		3.0		N-S	17坪	F3	平安	504	2.9	3.4	9.9	N-20°-E		F4	古墳・奈良
437		8.7		N-S	17坪	F3	平安	505	2.7	5.3	14.3	N-20°-E		F4	古墳・奈良
438					17坪	F3	平安	506	3.7	4.3	15.9	N-10°-E		F4	古墳・奈良
439					17坪	F3	平安	507	3.1	2.8	8.7	N-5°-E		F4	古墳・奈良
440	5.4			N-4°-W	17坪	F3	平安	508	2.2	3.4	7.5	N-5°-E		F4	古墳・奈良
441	4.9	6.0	29.4	N-4°-W	17坪	F3	平安	509	3.7	4.2	15.5	N-5°-E		F4	古墳・奈良
442	7.1	5.3	37.6	N-4°-W	17坪	F3	平安	510						F4	古墳・奈良
443	7.1	4.7	33.4	N-4°-W	17坪	F3	平安	511						F4	古墳・奈良
444	4.6			N-2°-W	17坪	F3	平安	512	2.7			N-10°-E		F4	古墳・奈良
445					17坪	F3	平安	513	2.4			N-20°-E		F4	古墳・奈良
446	5.6	6.6	37.0	N-2°-W	17坪	F3	平安	514	2.2	2.2	4.8	N-20°-E		F4	古墳・奈良
447	11.3	7.5	84.8	N-2°-W	17坪	F3	平安	515	3.1	2.9	9.0	N-10°-E		F4	古墳・奈良
448		4.9		N-2°-W	17坪	F3	平安	516	2.4	3.0	7.2	N-10°-E		F4	古墳・奈良
449		3.9		N-2°-W	17坪	F3	平安	517		3.0		N-10°-E		F4	古墳・奈良
450	6.0	4.8	28.8	N-S	17坪	F3	平安	518	3.7	2.3	8.5	N-10°-E		F4	古墳・奈良
451					17坪	F3	平安	519	3.3	2.9	9.6	N-10°-E		F4	古墳・奈良
452				N-6°-E	17坪	F3	平安	520	1.6	3.1	5.0	N-10°-E		F4	古墳・奈良
453				N-6°-E	17坪	F3	平安	521	1.9	3.1	5.9	N-10°-E		F4	古墳・奈良
454		5.6		N-10°-E	17坪	F3	平安	522	1.8	3.2	5.8	N-10°-E		F4	古墳・奈良
455				N-6°-E	17坪SD98	F3	平安	523	2.1	1.4	2.9	N-10°-E		F4	古墳・奈良
456		6.3		N-S	17坪SD98	F3	平安	524				N-10°-E		F4	古墳・奈良
457		4.1		N-2°-E	17坪	F3	平安	525	2.2	1.5	3.3	N-10°-E		F4	古墳・奈良
458	7.5	4.1	30.8	N-2°-E	17坪	F3	平安	526		2.4		N-10°-E		F4	古墳・奈良
459	8.3	4.3	35.7	N-2°-E	17坪	F3	平安	527						F4	古墳・奈良
460	7.0	4.8	33.6	N-2°-E	17坪	F3	平安	528		1.6		N-15°-E		F4	古墳・奈良
461		6.4		N-S	17坪	F3	平安	529		2.3		N-15°-E		F4	古墳・奈良
462	7.9	6.3	49.8	N-S	17坪	F3	平安	530						F4	古墳・奈良
463	7.0	7.1	49.7	N-S	17坪	F3	平安	531		2.4		N-10°-E		F4	古墳・奈良
464	4.8	10.4	49.9	N-5°-E	17坪	F3	平安	532		2.0		N-10°-E		F4	古墳・奈良
465	4.3	10.4	44.7	N-5°-E	17坪	F3	平安	533		1.9		N-10°-E		F4	古墳・奈良
466	7.6	10.5	79.8	N-5°-E	17坪SD98	F3	平安	534	6.5	2.3	15.0	N-10°-E		F4	古墳・奈良
467					17坪SD98	F3	平安	535		4.1		N-10°-E		F4	古墳・奈良
468		6.6		N-4°-E	17坪	F3	平安	536	2.0	1.5	3.0	N-10°-E		F4	古墳・奈良
469	6.9	6.9	47.6	N-4°-E	17坪	F3	平安	537	2.0	1.4	2.8	N-10°-E		F4	古墳・奈良
470	6.4	6.0	38.4	N-4°-E	17坪	F3	平安	538		2.6		N-5°-E		F4	古墳・奈良
471	4.5			N-10°-E	17坪	F3	平安	539		2.0		N-10°-E		F4	古墳・奈良
472	2.6			N-3°-W	17坪	F3	平安	540	1.6	1.5	2.4	N-10°-E		F4	古墳・奈良
473				N-S	17坪	F3	平安	541	2.0	1.9	3.8	N-20°-E		F4	古墳・奈良
474					17坪	F3	平安	542	2.1	1.5	3.2	N-20°-E		F4	古墳・奈良

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
543		1.5		N-15°-E		F4	古墳・奈良	611						G4	古墳
544		3.8				F4	古墳・奈良	612						G4	古墳
545	1.5	2.0	3.0	N-20°-E		F4	古墳・奈良	613						G4	古墳
546	2.1	2.1	4.4	N-20°-E		F4	古墳・奈良	614	2.0	1.3	2.6	N-5°-E		G4	古墳
547	2.3	2.4	5.5	N-20°-E		F4	古墳・奈良	615	1.8	1.5	2.7	N-5°-E		G4	古墳
548		2.4				F4	古墳・奈良	616						G4	古墳
549				N-10°-E		F4	古墳・奈良	617	1.2					G4	古墳
550	3.4			N-10°-E		F4	古墳・奈良	618	0.9	1.1	1.0	N-5°-E		G4	古墳
551		4.0		N-10°-E		F4	古墳・奈良	619	1.1					G4	古墳
552	1.8	3.7	6.7	N-10°-E		F4	古墳・奈良	620	1.3	0.9	1.2	N-5°-E		G4	古墳
553	4.6	3.3	15.2	N-5°-E		F4	古墳・奈良	621						G4	古墳
554	2.2	3.0	6.6	N-10°-E		F4	古墳・奈良	622	1.8					G4	古墳
555	2.7	3.0	8.1	N-10°-E		F4	古墳・奈良	623	1.6	2.1	3.4	N-10°-E		G4	古墳
556	3.7	2.5	9.3	N-10°-E		F4	古墳・奈良	624		1.5				G4	古墳
557		3.0		N-10°-E		F4	古墳・奈良	625						G4	古墳
558	2.4			N-10°-E		F4	古墳・奈良	626	3.0	1.2	3.6	N-5°-E		G4	古墳
559	4.0	2.2	8.8	N-5°-E		F4	古墳・奈良	627	2.5			N-5°-E		G4	古墳
560	4.9	2.4	11.8	N-10°-E		F4	古墳・奈良	628	1.5					G4	古墳
561	4.0	1.9	7.6	N-10°-E		F4	古墳・奈良	629	1.2					G4	古墳
562	2.4	3.9	9.4	N-10°-E		F4	古墳・奈良	630		1.0		N-10°-E		G4	古墳
563	3.2	3.4	10.9	N-10°-E		F4	古墳・奈良	631	1.1	0.9	1.0	N-15°-E		G4	古墳
564	2.2	3.0	6.6	N-5°-E		F4	古墳・奈良	632	0.9	1.0	0.9	N-20°-E		G4	古墳
565	2.3	2.8	6.4	N-20°-E		F4	古墳・奈良	633						G4	古墳
566	1.9	2.3	4.4	N-15°-E		F4	古墳・奈良	634	2.6					G4	古墳
567		2.8				F4	古墳・奈良	635	2.4	1.0	2.4	N-20°-E		G4	古墳
568				N-10°-E		F4	古墳・奈良	636	2.2	1.3	2.9	N-20°-E		G4	古墳
569	3.4			N-5°-E		F4	古墳・奈良	637	2.2	1.1	2.4	N-5°-E		G4	古墳
570	3.5	4.7	16.5	N-5°-E		F4	古墳・奈良	638	2.2	1.1	2.4	N-5°-E		G4	古墳
571	2.9	4.2	12.2	N-S		F4	古墳・奈良	639						G4	古墳
572	4.3	3.8	16.3	N-S		F4	古墳・奈良	640	1.5	2.0	3.0	N-20°-E		G4	古墳
573	2.4	3.3	7.9	N-5°-E		F4	古墳・奈良	641	1.4	1.0	1.4	N-5°-E		G4	古墳
574	3.0	3.1	9.3	N-15°-E		F4	古墳・奈良	642	1.4	0.7	1.0	N-5°-E		G4	古墳
575	2.1	3.4	7.1	N-5°-E		F4	古墳・奈良	643		0.6				G4	古墳
576	4.0	3.0	12.0	N-10°-E		F4	古墳・奈良	644		1.1				G4	古墳
577		2.0				F4	古墳・奈良	645						G4	古墳
578		2.3		N-5°-E		F4	古墳・奈良	646	1.9	1.1	2.1	N-15°-E		G4	古墳
579		2.6		N-2°-E		F4	古墳・奈良	647	1.5	1.7	2.6	N-20°-E		G4	古墳
580		3.3		N-2°-E		F4	古墳・奈良	648	1.5	1.6	2.4			G4	古墳
581	3.5	3.7	13.0	N-2°-E		F4	古墳・奈良	649	1.8	0.7	1.3	N-3°-E		G4	古墳
582		2.9				F4	古墳・奈良	650	1.7	1.1	1.9	N-3°-E		G4	古墳
583		2.2				F4	古墳・奈良	651	1.3	1.4	1.8	N-3°-E		G4	古墳
584	3.6					F4	古墳・奈良	652						G4	古墳
585	3.7	4.5	16.7	N-5°-E		F4	古墳・奈良	653	1.5					G4	古墳
586						F4	古墳・奈良	654		1.7		N-20°-E		G4	古墳
587	3.2	2.3	7.4	N-S		F4	古墳・奈良	655	1.6	1.1	1.8	N-5°-E		G4	古墳
588	3.7	2.2	8.1	N-5°-E		F4	古墳・奈良	656	1.0	0.9	0.9	N-3°-E		G4	古墳
589	3.6					F4	古墳・奈良	657	1.0	1.1	1.1	N-3°-E		G4	古墳
590				N-2°-W		F4	古墳・奈良	658	1.7	1.3	2.2	N-S		G4	古墳
591	4.1	2.3	9.4	N-2°-E		F4	古墳・奈良	659	1.8	1.3	2.3	N-S		G4	古墳
592						F4	古墳・奈良	660						G4	古墳
593	4.1	2.8	11.5	N-S		F4	古墳・奈良	661	1.0			N-5°-E		G4	古墳
594	3.0	2.6	7.8	N-5°-E		F4	古墳・奈良	662	1.2			N-2°-E		G4	古墳
595						F4	古墳・奈良	663	1.3	0.8	1.0	N-5°-E		G4	古墳
596	3.5	2.8	9.8	N-10°-E		F4	古墳・奈良	664	1.3	1.0	1.3	N-S		G4	古墳
597	3.9	3.1	12.1	N-10°-E		F4	古墳・奈良	665	1.1	0.8	0.9	N-5°-E		G4	古墳
598	4.0	3.2	12.8	N-10°-E		F4	古墳・奈良	666	0.9	0.9	0.8	N-2°-E		G4	古墳
599	3.4	3.2	10.9	N-15°-E		F4	古墳・奈良	667	1.3	1.3	1.7	N-S		G4	古墳
600	3.2	2.9	9.3	N-15°-E		F4	古墳・奈良	668	1.3	1.3	1.7	N-S		G4	古墳
601		3.3		N-15°-E		F4	古墳・奈良	669						G4	古墳
602						F4	古墳・奈良	670	1.3					G4	古墳
603						F4	古墳・奈良	671	1.2	0.9	1.1	N-2°-E		G4	古墳
604	1.2					G4	古墳	672	1.3	1.1	1.4	N-2°-E		G4	古墳
605	1.4	1.8	2.5	N-S		G4	古墳	673	1.3			N-4°-E		G4	古墳
606						G4	古墳	674						G4	古墳
607	2.1	1.7	3.6	N-S		G4	古墳	675		1.0				G4	古墳
608	2.0					G4	古墳	676		0.9				G4	古墳
609						G4	古墳	677						G4	古墳
610						G4	古墳	678		1.3				G4	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
679	0.9	1.3	1.2	N-10°-E		G4	古墳	747						G4	古墳
680						G4	古墳	748						G4	古墳
681	1.7	1.9	3.2			G4	古墳	749	1.3			N-2°-E		G4	古墳
682						G4	古墳	750	0.8			N-S		G4	古墳
683	1.3	1.2	1.6			G4	古墳	751	1.0					G4	古墳
684				N-10°-E		G4	古墳	752	1.0					G4	古墳
685	1.9	1.1	2.1	N-5°-E		G4	古墳	753						G4	古墳
686		1.2		N-2°-E		G4	古墳	754	1.0					G4	古墳
687		0.7				G4	古墳	755						G4	古墳
688	1.2	1.5	1.8	N-S		G4	古墳	756						G4	古墳
689	1.6	0.7	1.1	N-2°-W		G4	古墳	757						G4	古墳
690						G4	古墳	758						G4	古墳
691	1.0					G4	古墳	759						G4	古墳
692	1.1	1.5	1.7	N-S		G4	古墳	760						G4	古墳
693	1.5			N-10°-E		G4	古墳	761						G4	古墳
694	1.2	1.4	1.7	N-5°-E		G4	古墳	762	1.1	1.3	1.4	N-20°-E		G4	古墳
695	1.5	1.0	1.5	N-S		G4	古墳	763	1.0	1.2	1.2	N-20°-E		G4	古墳
696	2.0	1.8	3.6	N-2°-E		G4	古墳	764	1.3	1.0	1.3	N-20°-E		G4	古墳
697	2.0	1.2	2.4	N-S		G4	古墳	765	1.1			N-20°-E		G4	古墳
698	1.3			N-10°-E		G4	古墳	766	1.0	0.9	0.9	N-8°-E		G4	古墳
699	1.0	1.5	1.5	N-S		G4	古墳	767	1.0	2.0	2.0	N-15°-E		G4	古墳
700	1.1	1.0	1.1	N-S		G4	古墳	768	1.2	1.4	1.7	N-15°-E		G4	古墳
701	2.0			N-S		G4	古墳	769	1.2	0.8	1.0	N-10°-E		G4	古墳
702	1.4	1.3	1.8	N-S		G4	古墳	770	1.4	1.0	1.4	N-15°-E		G4	古墳
703	1.7	1.2	2.0	N-5°-E		G4	古墳	771	1.1	0.8	0.9	N-15°-E		G4	古墳
704	1.1			N-S		G4	古墳	772	0.9	1.1	1.0	N-10°-E		G4	古墳
705	1.4			N-5°-E		G4	古墳	773	1.1	0.8	0.9	N-10°-E		G4	古墳
706	1.7	1.6	2.7	N-S		G4	古墳	774	1.2	0.5	0.6	N-10°-E		G4	古墳
707	1.5	1.2	1.8	N-S		G4	古墳	775	1.4	1.5	2.1	N-5°-E		G4	古墳
708	1.4	1.3	1.8	N-S		G4	古墳	776	1.3	0.9	1.2	N-10°-E		G4	古墳
709		1.4		N-S		G4	古墳	777	0.8	1.4	1.1	N-10°-E		G4	古墳
710						G4	古墳	778	0.9	1.3	1.2			G4	古墳
711	2.1			N-2°-E		G4	古墳	779	1.0	1.5	1.5			G4	古墳
712	2.0	2.8	5.6	N-S		G4	古墳	780	1.1	0.7	0.8			G4	古墳
713	1.2			N-5°-E		G4	古墳	781						G4	古墳
714	0.9			N-2°-E		G4	古墳	782	0.9	1.1	1.0	N-5°-E		G4	古墳
715	2.3	1.9	4.4	N-5°-E		G4	古墳	783	0.9	1.0	0.9	N-15°-E		G4	古墳
716	1.2	2.0	2.4	N-S		G4	古墳	784	0.8	1.0	0.8	N-20°-E		G4	古墳
717	1.3	2.2	2.9	N-S		G4	古墳	785	0.7	0.7	0.5	N-15°-E		G4	古墳
718						G4	古墳	786						G4	古墳
719	0.8	2.0	1.6	N-S		G4	古墳	787	1.3	1.6	2.1	N-10°-E		G4	古墳
720	1.1	2.0	2.2	N-S		G4	古墳	788	1.6	1.2	1.9	N-10°-E		G4	古墳
721	2.0	1.6	3.2	N-S		G4	古墳	789	1.5	1.1	1.7			G4	古墳
722				N-5°-E		G4	古墳	790	1.7	1.1	1.9	N-10°-E		G4	古墳
723		1.5		N-5°-E		G4	古墳	791	1.0	0.8	0.8	N-15°-E		G4	古墳
724		1.7		N-S		G4	古墳	792	0.9	1.2	1.1	N-2°-E		G4	古墳
725	0.8			N-S		G4	古墳	793	0.8	0.9	0.7	N-5°-E		G4	古墳
726	0.8			N-S		G4	古墳	794	0.8	1.5	1.2	N-5°-E		G4	古墳
727	1.6					G4	古墳	795						G4	古墳
728						G4	古墳	796						G4	古墳
729						G4	古墳	797		1.7				G4	古墳
730						G4	古墳	798	0.8	1.0	0.8	N-20°-E		G4	古墳
731	1.5			N-10°-E		G4	古墳	799	0.7	0.7	0.5	N-20°-E		G4	古墳
732						G4	古墳	800						G4	古墳
733						G4	古墳	801	1.8	1.3	2.3	N-15°-E		G4	古墳
734						G4	古墳	802	1.6	0.9	1.4	N-20°-E		G4	古墳
735						G4	古墳	803	1.9	0.8	1.5	N-15°-E		G4	古墳
736	1.2			N-20°-E		G4	古墳	804		1.0		N-20°-E		G4	古墳
737				N-20°-E		G4	古墳	805	2.0	1.1	2.2	N-10°-E		G4	古墳
738				N-20°-E		G4	古墳	806		1.3		N-10°-E		G4	古墳
739				N-20°-E		G4	古墳	807	2.2	1.4	3.1	N-5°-E		G4	古墳
740						G4	古墳	808		1.5		N-10°-E		G4	古墳
741						G4	古墳	809	2.1	1.0	2.1	N-5°-E		G4	古墳
742		1.1		N-15°-E		G4	古墳	810		1.1		N-15°-E		G4	古墳
743		0.9		N-15°-E		G4	古墳	811	1.9	1.4	2.7	N-10°-E		G4	古墳
744	1.0			N-S		G4	古墳	812		1.2				G4	古墳
745	1.1			N-S		G4	古墳	813	0.7	0.9	0.6	N-15°-E		G4	古墳
746				N-S		G4	古墳	814	2.0	1.1	2.2	N-5°-E		G4	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
815	0.7	0.8	0.6	N-10°-E		G4	古墳	883	0.9	1.3	1.2	N-20°-E		G4	古墳
816	0.9	0.8	0.7	N-15°-E		G4	古墳	884						G4	古墳
817	2.2	1.0	2.2	N-5°-E		G4	古墳	885	2.3	0.9	2.1	N-10°-E		G4	古墳
818	0.8	0.8	0.6	N-20°-E		G4	古墳	886	2.3	1.0	2.3	N-5°-E		G4	古墳
819	1.0	0.8	0.8	N-20°-E		G4	古墳	887	1.7	0.8	1.4	N-10°-E		G4	古墳
820	0.8	1.2	1.0	N-15°-E		G4	古墳	888	1.7	1.5	2.6	N-10°-E		G4	古墳
821		1.9		N-10°-E		G4	古墳	889	1.3	0.8	1.0	N-10°-E		G4	古墳
822		1.1		N-15°-E		G4	古墳	890	1.1	1.3	1.4	N-10°-E		G4	古墳
823	0.9	1.5	1.4	N-20°-E		G4	古墳	891	0.7	1.2	0.8	N-10°-E		G4	古墳
824	1.0	1.5	1.5	N-15°-E		G4	古墳	892	2.1	1.0	2.1	N-10°-E		G4	古墳
825		1.5		N-2°-E		G4	古墳	893	1.4	0.6	0.8	N-10°-E		G4	古墳
826		1.5		N-10°-E		G4	古墳	894	1.4	0.8	1.1	N-10°-E		G4	古墳
827	0.7	1.1	0.8	N-10°-E		G4	古墳	895		0.8		N-10°-E		G4	古墳
828	1.3	1.2	1.6	N-10°-E		G4	古墳	896		1.0		N-10°-E		G4	古墳
829		1.4		N-10°-E		G4	古墳	897		0.8		N-10°-E		G4	古墳
830		1.3		N-5°-E		G4	古墳	898	1.1	0.8		N-8°-E		G4	古墳
831	1.0	1.0	1.0	N-10°-E		G4	古墳	899		0.9		N-8°-E		G4	古墳
832	1.0	1.0	1.0	N-10°-E		G4	古墳	900		1.1		N-8°-E		G4	古墳
833	1.2			N-20°-E		G4	古墳	901		1.0		N-8°-E		G4	古墳
834	1.2	1.1	1.3	N-10°-E		G4	古墳	902	0.9	1.5	1.4	N-8°-E		G4	古墳
835	1.8			N-5°-E		G4	古墳	903	2.4	1.2	2.9	N-8°-E		G4	古墳
836	0.9			N-5°-E		G4	古墳	904	2.5	0.9	2.3	N-12°-E		G4	古墳
837		1.0		N-15°-E		G4	古墳	905	1.6			N-10°-E		G4	古墳
838		1.0		N-15°-E		G4	古墳	906	1.1	1.2	1.3	N-8°-E		G4	古墳
839	0.8			N-15°-E		G4	古墳	907	1.3	0.8	1.0	N-5°-E		G4	古墳
840	1.2	1.7	2.0	N-15°-E		G4	古墳	908	1.4			N-10°-E		G4	古墳
841	0.7	1.4	1.0	N-15°-E		G4	古墳	909	1.6	1.4	2.2	N-8°-E		G4	古墳
842	0.7	1.5	1.1	N-15°-E		G4	古墳	910	1.9	0.8	1.5	N-8°-E		G4	古墳
843	0.8	1.7	1.4	N-3°-E		G4	古墳	911	1.2	0.8	1.0	N-2°-E		G4	古墳
844	1.2	1.7	2.0	N-15°-E		G4	古墳	912	1.3	1.0	1.3	N-5°-E		G4	古墳
845	1.0	1.2	1.2	N-15°-E		G4	古墳	913	1.3	2.0	2.6	N-12°-E		G4	古墳
846	0.9	1.7	1.5	N-3°-E		G4	古墳	914	1.9	2.0	3.8	N-12°-E		G4	古墳
847	1.0	1.8	1.8	N-5°-E		G4	古墳	915	1.0	2.3	2.3	N-10°-E		G4	古墳
848	1.1	1.0	1.1	N-15°-E		G4	古墳	916	1.2			N-10°-E		G4	古墳
849	1.2	1.4	1.7	N-15°-E		G4	古墳	917	1.3	0.9	1.2	N-10°-E		G4	古墳
850	1.0	1.5	1.5	N-15°-E		G4	古墳	918	1.4	1.2	1.7	N-12°-E		G4	古墳
851	0.9	1.2	1.1	N-15°-E		G4	古墳	919	1.4	1.3	1.8	N-12°-E		G4	古墳
852	1.0	1.3	1.3	N-10°-E		G4	古墳	920	1.1	1.1	1.2	N-12°-E		G4	古墳
853	1.0	0.9	0.9	N-15°-E		G4	古墳	921				N-12°-E		G4	古墳
854	1.2	0.8	1.0	N-15°-E		G4	古墳	922	1.1	0.9	1.0	N-15°-E		G4	古墳
855	1.1	1.3	1.4	N-15°-E		G4	古墳	923	1.3	1.0	1.3	N-15°-E		G4	古墳
856	0.8	1.1	0.9	N-15°-E		G4	古墳	924	1.2	0.9	1.1	N-12°-E		G4	古墳
857	2.0	0.9	1.8	N-20°-E		G4	古墳	925	2.1	1.1	2.3	N-10°-E		G4	古墳
858	1.9	1.0	1.9	N-18°-E		G4	古墳	926	1.3					G4	古墳
859	2.1	1.0	2.1	N-18°-E		G4	古墳	927	1.2	1.4	1.7	N-2°-E		G4	古墳
860	1.9	1.0	1.9	N-15°-E		G4	古墳	928						G4	古墳
861	1.6	1.1	1.8	N-15°-E		G4	古墳	929						G4	古墳
862	1.6	1.1	1.8	N-10°-E		G4	古墳	930		1.2		N-5°-E		G4	古墳
863	2.3	1.5	3.5	N-15°-E		G4	古墳	931		1.2		N-5°-E		G4	古墳
864	2.1	1.1	2.3	N-10°-E		G4	古墳	932		0.9		N-S		G4	古墳
865	0.7	0.7	0.5	N-3°-E		G4	古墳	933		1.2		N-S		G4	古墳
866	0.6	1.4	0.8	N-3°-E		G4	古墳	934		1.3		N-2°-E		G4	古墳
867	1.0	1.8	1.8	N-15°-E		G4	古墳	935		0.9		N-S		G4	古墳
868	0.7	1.3	0.9	N-3°-E		G4	古墳	936		0.8		N-S		G4	古墳
869	1.6	1.4	2.2	N-5°-E		G4	古墳	937		0.8		N-2°-E		G4	古墳
870	1.7	1.1	1.9	N-5°-E		G4	古墳	938	1.1	0.8	0.9	N-S		G4	古墳
871	1.7	1.2	2.0	N-2°-E		G4	古墳	939		1.3		N-S		G4	古墳
872	1.1	1.7	1.9	N-S		G4	古墳	940		1.6		N-2°-E		G4	古墳
873	1.1	1.1	1.2	N-2°-E		G4	古墳	941		1.0		N-S		G4	古墳
874						G4	古墳	942		0.8		N-S		G4	古墳
875	1.2			N-20°-E		G4	古墳	943						G4	古墳
876	0.8			N-20°-E		G4	古墳	944		1.5		N-S		G4	古墳
877	0.6			N-15°-E		G4	古墳	945		0.9		N-S		G4	古墳
878						G4	古墳	946		1.2		N-S		G4	古墳
879	2.1	1.5	3.2	N-10°-E		G4	古墳	947		1.1				G4	古墳
880	2.0	0.9	1.8	N-5°-E		G4	古墳	948		0.9		N-S		G4	古墳
881	2.3	0.8	1.8	N-5°-E		G4	古墳	949						G4	古墳
882	2.3	0.8	1.8	N-10°-E		G4	古墳	950		0.7		N-S		G4	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
951		1.3		N-2°-E		G4	古墳	1019	10.5			N-3°-E	30坪SD120	F7	平安
952		1.2				G4	古墳	1020		8.8		N-4°-E	30坪	F7	平安
953						G4	古墳	1021		8.9		N-4°-E	30坪	F7	平安
954						G4	古墳	1022	5.0	7.5	37.5	N-4°-E	30坪	F7	平安
955		1.0		N-S		G4	古墳	1023	12.1	7.7	93.2	N-4°-E	30坪	F7	平安
956						G4	古墳	1024	9.6	7.0	67.2	N-3°-E	30坪	F7	平安
957	1.3	1.0	1.3	N-2°-E		G4	古墳	1025	5.8	6.8	39.4	N-3°-E	30坪	F7	平安
958						G4	古墳	1026	5.9	6.2	36.6	N-3°-E	30坪	F7	平安
959	0.8			N-S		G4	古墳	1027	5.4	6.5	35.1	N-3°-E	30坪	F7	平安
960	1.4	1.0	1.4	N-S		G4	古墳	1028	6.0	6.1	36.6	N-3°-E	30坪	F7	平安
961	1.6	1.8	2.9	N-5°-E		G4	古墳	1029	7.4	6.1	45.1	N-3°-E	30坪	F7	平安
962						G4	古墳	1030	2.8	6.5	18.2	N-2°-E	30坪SD120	G7	平安
963						G4	古墳	1031		9.6		N-2°-E	30坪	F6・7	平安
964	0.8	1.2	1.0	N-3°-E		G4	古墳	1032					30坪	F6・7	平安
965	0.9			N-S		G4	古墳	1033	7.0			N-2°-E	30坪	F6・7	平安
966	0.6	1.2	0.7	N-5°-E		G4	古墳	1034					30坪	F6・7	平安
967		1.3		N-5°-E		G4	古墳	1035		9.2		N-4°-E	30坪	F6・7	平安
968	1.1			N-3°-E		G4	古墳	1036		9.0		N-2°-E	30坪	F6・7	平安
969						G4	古墳	1037		8.7		N-2°-E	30坪	F6・7	平安
970	1.1			N-6°-E		G4	古墳	1038	4.9	7.9	38.7	N-2°-E	30坪	F6・7	平安
971	0.9	1.4	1.3	N-6°-E		G4	古墳	1039	6.6	7.6	50.2	N-6°-E	30坪	F6・7	平安
972	1.2			N-S		G4	古墳	1040	6.3	7.5	47.3	N-6°-E	30坪	F6・7	平安
973				N-6°-E		G4	古墳	1041	3.0	6.7	20.1	N-5°-W	30坪SD120	G6・7	平安
974	1.0	1.3	1.3	N-6°-E		G4	古墳	1042					30坪	F6	平安
975	0.8			N-S		G4	古墳	1043					30坪	F6	平安
976	1.4	0.8	1.1	N-S		G4	古墳	1044					30坪	F6	平安
977	1.6			N-S		G4	古墳	1045	7.3	6.5	47.5	N-S	30坪	F6	平安
978	1.3			N-4°-E		G4	古墳	1046	9.7	5.0	48.5	N-4°-E	30坪	F6	平安
979	1.6	0.9	1.4	N-4°-E		G4	古墳	1047	9.7	4.4	42.7	N-7°-E	30坪	F6	平安
980		0.8		N-4°-E		G4	古墳	1048				N-4°-E	30坪	F6	平安
981		0.7		N-3°-E		G4	古墳	1049		10.4		N-6°-E	30坪	F6	平安
982		0.8		N-2°-E		G4	古墳	1050		17.6		N-6°-E	30坪	F6	平安
983				N-S		G4	古墳	1051		4.3		N-S	30坪	F6	平安
984		1.0		N-15°-E		G4	古墳	1052		6.1		N-S	30坪	F6	平安
985	1.1	0.9	1.0	N-15°-E		G4	古墳	1053	6.7			N-5°-E	30坪	F6	平安
986						G4	古墳	1054	3.7				30坪	F6	平安
987	1.3			N-10°-E		G4	古墳	1055					30坪	F6	平安
988	1.1	1.5	1.7	N-5°-E		G4	古墳	1056		3.8		N-4°-E	30坪	F6	平安
989	1.7	1.5	2.6	N-10°-E		G4	古墳	1057		5.0		N-6°-E	30坪	F6	平安
990	1.9	1.1	2.1	N-20°-E		G4	古墳	1058		3.3		N-6°-E	30坪	F6	平安
991	0.8			N-5°-E		G4	古墳	1059		7.5		N-6°-E	30坪	F6	平安
992	0.9	1.1	1.0	N-10°-E		G4	古墳	1060		5.5		N-4°-E	30坪	F6	平安
993	2.3	1.2	2.8	N-5°-E		G4	古墳	1061		2.3		N-5°-E	30坪	F6	平安
994	2.0	0.8	1.6	N-10°-E		G4	古墳	1062		2.5		N-5°-E	30坪	F6	平安
995						G4	古墳	1063	5.1	3.5	17.9	N-4°-E	30坪	F6	平安
996						G4	古墳	1064	4.0	5.0	20.0	N-6°-E	30坪	F6	平安
997	1.8	1.3	2.3	N-10°-E		G4	古墳	1065	4.2	3.1	13.0	N-6°-E	30坪	F6	平安
998						G4	古墳	1066	4.0			N-10°-E	30坪	F6	平安
999						G4	古墳	1067	7.6	4.5	34.2	N-5°-E	30坪	F6	平安
1000	1.5	1.2	1.8	N-S		F4	古墳	1068	2.2	2.4	5.3	N-S	30坪	F6	平安
1001	1.8	1.3	2.3	N-S		F4	古墳	1069	2.2	3.8	8.4	N-4°-E	30坪	F6	平安
1002		1.1		N-S		F4	古墳	1070	1.4	4.5	6.3	N-10°-E	30坪	F6	平安
1003		1.3		N-2°-W		F4	古墳	1071	1.4	4.9	6.9	N-6°-E	30坪	F6	平安
1004						F4	古墳	1072		4.5		N-7°-E	30坪	F6	平安
1005						G4	古墳	1073	4.3	3.4	14.6	N-15°-E	30坪	F6	平安
1006						G4	古墳	1074	3.0	2.8	8.4	N-5°-E	30坪	F6	平安
1007					30坪	F7	平安	1075	3.8	3.8	14.4	N-15°-E	30坪	F6	平安
1008					30坪	F7	平安	1076	4.5	4.1	18.5	N-8°-E	30坪	F6	平安
1009		9.8		N-4°-E		F7	平安	1077	5.1	4.8	24.5	N-8°-E	30坪	F6	平安
1010	15.9			N-4°-E		F7	平安	1078	2.1	3.5	7.4	N-10°-E	30坪	F6	平安
1011	11.9			N-4°-E		F7	平安	1079	2.1	4.0	8.4	N-3°-E	30坪	F6	平安
1012	17.3			N-4°-E		F7	平安	1080	3.5	4.0	14.0	N-S	30坪SD120	F6	平安
1013	7.4			N-4°-E		F7	平安	1081	2.8	3.8	10.6	N-15°-E	30坪	F6	平安
1014						F7	平安	1082	3.3	3.7	12.2	N-15°-E	30坪	F6	平安
1015	9.0			N-4°-E		F7	平安	1083		5.3		N-15°-E	30坪	F6	平安
1016				N-4°-E		F7	平安	1084		4.3		N-15°-E	30坪	F6	平安
1017	6.3			N-4°-E		F7	平安	1085		3.2		N-15°-E	30坪	F6	平安
1018	5.6			N-4°-E		F7	平安	1086		3.2		N-15°-E	30坪	F6	平安

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1087				N-8°-E	30坪	F6	平安	1155	5.5	7.2	39.6	N-2°-E	24坪	F6	平安
1088					30坪	F6	平安	1156	6.6	7.3	48.2	N-5°-E	24坪	F6	平安
1089					30坪	F6	平安	1157	3.1			N-5°-E	24坪	F6	平安
1090	10.4			N-10°-E	30坪	F6	平安	1158		5.1		N-5°-E	24坪	F6	平安
1091					30坪	F6	平安	1159					24坪	F6	平安
1092					30坪SD122	F6	平安	1160		7.1			24坪	F6	平安
1093					30坪	F6	平安	1161	4.6	6.1	28.1	N-S	24坪	F6	平安
1094	8.1			N-10°-E	30坪	F6	平安	1162	6.9	6.0	41.4	N-4°-E	24坪	F6	平安
1095		3.8		N-8°-E	30坪	F6	平安	1163	4.5	6.0	27.0	N-4°-E	24坪	F6	平安
1096					30坪SD122	F6	平安	1164	7.0	6.9	48.3	N-S	24坪	F6	平安
1097	5.0			N-S	30坪SD122	F6	平安	1165	5.9	6.3	37.2	N-S	24坪	F6	平安
1098	4.4			N-2°-W	30坪SD122	F6	平安	1166					24坪	F6	平安
1099					24坪	E6・F6	平安	1167					24坪	F6	平安
1100		4.2		N-20°-W	24坪	E6・F6	平安	1168		3.5		N-S	24坪	F6	平安
1101	7.5			N-5°-W	24坪	F6	平安	1169					24坪	F6	平安
1102	6.6			N-15°-W	24坪	F6	平安	1170	5.6	3.0	16.8	N-S	24坪	F6	平安
1103	6.5	4.7	30.6	N-S	24坪	F6	平安	1171					24坪	F6	平安
1104	3.2	6.3	10.1		24坪	F6	平安	1172					24坪	F6	平安
1105					24坪	F6	平安	1173		3.3			24坪	F5	平安
1106					24坪	F6	平安	1174	5.3			N-4°-W	24坪	F5	平安
1107	6.5	6.7	43.6	N-10°-W	24坪	E6・F6	平安	1175	5.0	4.7	23.5	N-4°-E	24坪	F5	平安
1108		6.8		N-20°-W	24坪	F6	平安	1176	4.1	5.8	23.8	N-5°-E	24坪	F5	平安
1109		2.5		N-20°-W	24坪	F6	平安	1177	5.2	4.5	23.4	N-5°-E	24坪	F5	平安
1110	4.8	4.3	20.6	N-20°-W	24坪	F6	平安	1178	3.5	4.6	16.1	N-S	24坪	F5	平安
1111	2.5	2.9	7.3	N-20°-W	24坪	F6	平安	1179	4.5	4.6	20.7	N-S	24坪	F5	平安
1112	2.7	3.6	9.7	N-20°-W	24坪	F6	平安	1180		5.6			24坪	F5	平安
1113	4.4	3.3	14.5	N-20°-W	24坪	F6	平安	1181	4.7	5.8	27.3	N-3°-W	24坪	E5	平安
1114	3.5	3.4	11.9	N-20°-W	24坪	F6	平安	1182	5.9	3.4	20.1	N-3°-E	24坪	F5	平安
1115	8.0	4.4	35.2		24坪	F6	平安	1183	4.2	3.2	13.4	N-S	24坪	F5	平安
1116	4.2			N-20°-W	24坪	F6	平安	1184	5.2	3.3	17.2	N-S	24坪	F5	平安
1117	3.6			N-5°-E	24坪	F6	平安	1185	3.4	3.7	12.6	N-S	24坪	F5	平安
1118	3.0	5.0	15.0	N-5°-E	24坪	F6	平安	1186	5.0	4.0	20.0	N-S	24坪	F5	平安
1119	4.2			N-2°-E	24坪	F6	平安	1187		4.0		N-S	24坪	F5	平安
1120	4.4	6.2	27.3	N-5°-E	24坪	F6	平安	1188		1.5			24坪	F5	平安
1121				N-2°-E	24坪	F6	平安	1189		2.6			24坪	F5	平安
1122		6.3		N-5°-E	24坪	F6	平安	1190	5.1	5.1	26.0	N-3°-W	24坪	E5	平安
1123				N-2°-E	24坪	F6	平安	1191	5.7	6.8	38.8	N-3°-E	24坪	F5	平安
1124	6.4			N-5°-E	24坪	F6	平安	1192	4.5	6.4	28.8	N-3°-W	24坪	F5	平安
1125				N-S	24坪	F6	平安	1193	4.3	6.7	28.8	N-S	24坪	F5	平安
1126		4.0		N-S	24坪	F6	平安	1194	4.2	6.5	27.3	N-4°-E	24坪	F5	平安
1127					24坪	F6	平安	1195	5.5				24坪	F5	平安
1128		4.6		N-2°-E	24坪	F6	平安	1196					24坪	F5	平安
1129					24坪	F6	平安	1197		6.8		N-3°-E	24坪	F5	平安
1130		5.0		N-2°-E	24坪	F6	平安	1198	5.4	6.8	36.7	N-7°-E	24坪	F5	平安
1131		3.1			24坪	F6	平安	1199	5.5	6.7	36.9	N-S	24坪	E5	平安
1132		4.0		N-S	24坪	F6	平安	1200	4.6			N-S	24坪	F5	平安
1133	3.7	1.0	1.9		24坪	F6	平安	1201					24坪	F5	平安
1134		4.7		N-2°-E	24坪	F6	平安	1202		6.7		N-3°-E	24坪	E5	平安
1135	7.2	2.0	14.4	N-2°-E	24坪	F6	平安	1203	5.4	4.0	21.6	N-5°-E	24坪	F5	平安
1136	5.1	4.6	23.5	N-4°-E	24坪	F6	平安	1204					24坪	F5	平安
1137	6.5	10.0	65.0	N-4°-E	24坪	F6	平安	1205					24坪	E5	平安
1138	4.1	4.5	9.3		24坪	F6	平安	1206					24坪	E5	平安
1139	7.8	4.7	36.7	N-4°-E	24坪	F6	平安	1207	4.8				23坪	E5	平安
1140	6.2	6.2	38.4	N-3°-E	24坪	F6	平安	1208	4.1				23坪	E5	平安
1141	5.9	4.5	26.6	N-4°-E	24坪	F6	平安	1209	4.5				23坪	E5	平安
1142	7.0	5.6	39.2	N-5°-E	24坪	F6	平安	1210		4.4		N-15°-W	23坪	E5	平安
1143	6.7	4.4	29.5	N-4°-E	24坪	F6	平安	1211		2.8		N-8°-W	23坪	E5	平安
1144	8.1	5.5	44.6	N-S	24坪	F6	平安	1212		5.8		N-S	23坪	E5	平安
1145					24坪	F6	平安	1213		7.7		N-5°-E	23坪	E5	平安
1146		3.8		N-S	24坪	F6	平安	1214		6.6		N-5°-E	23坪	E5	平安
1147				N-S	24坪	F6	平安	1215		4.8		N-3°-E	23坪	E5	平安
1148				N-S	24坪	F6	平安	1216				N-4°-W	29坪	E7	平安
1149		5.5			24坪	F6	平安	1217	3.9			N-4°-W	29坪	E7	平安
1150	4.0	5.1	20.4	N-2°-E	24坪	F6	平安	1218		5.2		N-4°-W	29坪SD145	E7	平安
1151	6.5	4.1	26.7	N-S	24坪	F6	平安	1219		6.4		N-S	29坪	E7	平安
1152	7.4	9.0	66.6	N-S	24坪	F6	平安	1220	6.9	5.3	36.6	N-S	29坪SD145	E7	平安
1153	5.5	8.6	47.3	N-2°-E	24坪	F6	平安	1221	6.5	6.3	41.0	N-2°-E	29坪	E7	平安
1154	6.1	7.4	45.1	N-2°-E	24坪	F6	平安	1222		5.0		N-S	29坪SD145	E7	平安

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1223		4.2		N-S	29坪SD145	E7	平安	1291		5.3		N-S	29坪	E6・7	平安
1224		6.2		N-S	29坪	E7	平安	1292		7.0		N-S	29坪	E6	平安
1225		5.0		N-4°-E	29坪SD145	E7	平安	1293		8.0		N-S	29坪	E6	平安
1226					29坪	E7	平安	1294		6.0		N-S	29坪	E6	平安
1227				N-S	29坪	E7	平安	1295	9.0	7.3	65.7	N-7°-E	29坪	E6	平安
1228		4.8		N-S	29坪	E7	平安	1296	4.0	7.3	29.2	N-7°-E	29坪	E6	平安
1229	6.6	5.0	33.0	N-S	29坪	E7	平安	1297		8.0		N-7°-E	29坪	E6	平安
1230				N-4°-W	29坪	E7	平安	1298	9.5	8.0	76.0	N-10°-E	29坪	E6	平安
1231		5.6		N-5°-W	29坪	E7	平安	1299		5.0		N-5°-E	29坪	E6	平安
1232				N-4°-E	29坪	E7	平安	1300				N-3°-E	29坪	E6	平安
1233				N-4°-E	29坪	E7	平安	1301		4.5		N-2°-E	29坪	E6	平安
1234					29坪	E7	平安	1302		5.5		N-S	29坪	E6	平安
1235		4.5		N-12°-W	29坪	E7	平安	1303	7.5	7.0	52.5	N-3°-E	29坪	E6	平安
1236					29坪	E7	平安	1304		5.3		N-S	29坪	E6	平安
1237					29坪	E7	平安	1305				N-S	29坪	E6	平安
1238	6.9	3.9	26.9	N-S	29坪	E7	平安	1306		4.8		N-S	29坪	E6	平安
1239	7.0	9.5	66.5	N-S	29坪	E7	平安	1307					29坪	E6	平安
1240	6.0				29坪	E7	平安	1308					29坪	E6	平安
1241		9.5			29坪	E7	平安	1309		8.0		N-S	29坪	E6	平安
1242					29坪	E7	平安	1310		3.3		N-3°-E	29坪	E6	平安
1243		5.3		N-S	29坪	E7	平安	1311		4.0		N-S	29坪	E6	平安
1244		5.7		N-S	29坪	E7	平安	1312		4.0			29坪	E6	平安
1245	7.5			N-S	29坪	E7	平安	1313		3.0			29坪	E6	平安
1246		4.1		N-2°-E	29坪	E7	平安	1314		5.5		N-S	29坪	E6	平安
1247				N-S	29坪	E7	平安	1315		9.0		N-5°-E	29坪	E6	平安
1248		10.0		N-5°-W	29坪	E7	平安	1316		8.5		N-S	29坪	E6	平安
1249				N-S	29坪	E7	平安	1317		3.5		N-5°-W	29坪	E6	平安
1250		8.3		N-2°-E	29坪	E7	平安	1318		4.0		N-S	29坪	E6	平安
1251	5.5	4.0	22.0	N-2°-E	29坪	E7	平安	1319		3.8			29坪	E6	平安
1252	9.1	6.1	55.5	N-2°-E	29坪	E7	平安	1320		4.5		N-S	29坪	E6	平安
1253		2.7		N-S	29坪	E7	平安	1321	3.8			N-S	29坪	E6	平安
1254		5.2		N-S	29坪	E7	平安	1322				N-S	29坪	E6	平安
1255	6.0			N-2°-E	29坪	E7	平安	1323				N-S	29坪	E6	平安
1256					29坪	E7	平安	1324					29坪	E6	平安
1257	9.7	8.0	77.6	N-4°-E	29坪	E7	平安	1325					29坪	E6	平安
1258	4.2			N-4°-E	29坪	E7	平安	1326		5.5		N-S	29坪	E6	平安
1259	6.8	8.5	57.8	N-S	29坪	E7	平安	1327		6.0			29坪	E6	平安
1260					29坪	E7	平安	1328					29坪	E6	平安
1261	8.0	8.5	68.0	N-S	29坪	E7	平安	1329	6.0	5.0		N-4°-E	29坪	E6	平安
1262	4.5	15.2	68.4	N-16°-E	29坪	E7	平安	1330		5.0			29坪	E6	平安
1263	14.1	6.0	84.6	N-S	29坪	E7	平安	1331		3.5		N-S	29坪SD142	E6	平安
1264					29坪	E7	平安	1332		3.0		N-4°-E	29坪SD142	E6	平安
1265	4.0	7.3	29.2	N-4°-W	29坪	E7	平安	1333					29坪	D6	平安
1266		8.0		N-S	29坪	E7	平安	1334				N-S	29坪	E6	平安
1267				N-S	29坪	E6	平安	1335	11.0			N-S	29坪	E6・7	平安
1268	105	6.6	693.0	N-S	29坪	E7	平安	1336					29坪	E7	平安
1269		7.8		N-4°-E	29坪	E7	平安	1337					28坪	D6	平安
1270		7.2		N-S	29坪	E7	平安	1338					28坪	D6	平安
1271		7.1		N-S	29坪	E7	平安	1339					28坪	D6	平安
1272					29坪	E6・7	平安	1340					28坪	D6	平安
1273					29坪	E6・7	平安	1341					28坪	D6	平安
1274				N-2°-E	29坪	E6・7	平安	1342					28坪	D6	平安
1275		7.0		N-2°-E	29坪	E7	平安	1343					28坪	D6	平安
1276		7.3		N-S	29坪	E6	平安	1344					28坪	D6	平安
1277	10.6	6.6	70.0	N-S	29坪	E7	平安	1345					28坪	D6	平安
1278	12.0	4.0	48.0	N-2°-E	29坪	E6・7	平安	1346						D6	古墳
1279	11.0	7.3	80.3	N-10°-E	29坪	E6	平安	1347						D6	古墳
1280	9.9	3.8	37.6	N-2°-E	29坪	E6・7	平安	1348	2.4	2.4	5.8	N-2°-E		D6	古墳
1281	5.0	14.8	74.0	N-10°-E	29坪	E6	平安	1349		2.4		N-5°-W		D6	古墳
1282	5.5	13.3	73.2	N-7°-E	29坪	E6	平安	1350						D6	古墳
1283		4.8		N-S	29坪	E6・7	平安	1351	2.8			N-S		D6	古墳
1284		4.0		N-S	29坪	E6	平安	1352	2.2			N-2°-E		D6	古墳
1285		2.9		N-S	29坪	E6	平安	1353						D6	古墳
1286	11.5	7.6	87.4	N-S	29坪	E6	平安	1354				N-15°-E		D6	古墳
1287	2.8	2.5	7.0	N-S	29坪	E6	平安	1355	1.5	3.3	5.0	N-15°-E		D6	古墳
1288	9.1	5.0	45.5	N-S	29坪	E6・7	平安	1356	2.0	2.5	5.0	N-2°-E		D6	古墳
1289	7.5	7.0	52.5	N-S	29坪	E6	平安	1357	2.4	2.0	4.8	N-25°-E		D6	古墳
1290	5.6	7.3	40.9	N-S	29坪	E6	平安	1358	2.3	2.0	4.6	N-10°-E		D6	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1359	2.0	1.5	3.0	N-10°-E		D6	古墳	1427	1.3	2.7	3.5	N-S		D6	古墳
1360	2.6	1.4	3.6	N-S		D6	古墳	1428	1.6	2.5	4.0	N-5°-E		D6	古墳
1361	1.2	1.4	1.7	N-15°-E		D6	古墳	1429	1.7	2.6	4.4	N-10°-E		D6	古墳
1362	2.3	3.0	6.9	N-10°-E		D6	古墳	1430	2.1	2.3	4.8	N-5°-W		D6	古墳
1363	1.7	2.7	4.6	N-10°-E		D6	古墳	1431		2.4		N-10°-E		D6	古墳
1364		2.6		N-10°-E		D6	古墳	1432	2.3	2.5	5.8	N-20°-E		D6	古墳
1365	2.2	2.2	4.8	N-2°-E		D6	古墳	1433	2.3	2.7	6.2	N-10°-E		D6	古墳
1366	2.2	2.2	4.8	N-2°-E		D6	古墳	1434		2.2		N-S		D6	古墳
1367		2.5		N-2°-E		D6	古墳	1435	3.2			N-S		D6	古墳
1368	2.0	2.3	4.6	N-15°-E		D6	古墳	1436						D6	古墳
1369	2.3	2.9	6.7	N-5°-E		D6	古墳	1437	2.6			N-7°-W		D6	古墳
1370						D6	古墳	1438	1.8			N-15°-W	SD11	D6	古墳
1371	1.8	1.7	3.1	N-20°-E		D6	古墳	1439	2.9	3.3	9.6	N-15°-W	SD11	D6	古墳
1372	2.0	1.7	3.4	N-20°-E		D6	古墳	1440						D6	古墳
1373		1.6		N-20°-E		D6	古墳	1441	1.3			N-S	SD11	D6	古墳
1374				N-10°-E		D6	古墳	1442	1.8	2.1	3.8	N-S	SD11	D6	古墳
1375						D6	古墳	1443	2.2	2.9	6.4	N-S	SD11	D6	古墳
1376						D6	古墳	1444	1.4	2.4	3.4	N-S	SD11	D6	古墳
1377						D6	古墳	1445	1.2	3.5	4.2	N-10°-E	SD11	D6	古墳
1378				N-10°-E		D6	古墳	1446				N-20°-E		E6	古墳
1379				N-10°-E		D6	古墳	1447		1.9		N-20°-E		E6	古墳
1380		1.8		N-15°-E		D6	古墳	1448	2.6	1.6	4.2	N-20°-E		E6	古墳
1381		1.8		N-15°-E		D6	古墳	1449	2.8	2.5	7.0	N-5°-W		E6	古墳
1382				N-15°-E		D6	古墳	1450	1.7	1.9	3.2	N-S		E6	古墳
1383	2.4	1.5	3.6	N-10°-E		D6	古墳	1451		2.6				E6	古墳
1384				N-5°-E		D6	古墳	1452	2.8	2.0	5.6	N-30°-E		E6	古墳
1385				N-5°-E		D6	古墳	1453	3.3	2.4	7.9	N-20°-E		E6	古墳
1386		1.7		N-2°-E		D6	古墳	1454	2.3	2.2	5.1	N-5°-W		E6	古墳
1387				N-5°-E		D6	古墳	1455	2.2	2.4	5.3	N-S		E6	古墳
1388		1.5		N-5°-E		D6	古墳	1456				N-30°-E		E6	古墳
1389						D6	古墳	1457				N-25°-E		E6	古墳
1390						D6	古墳	1458				N-S		E6	古墳
1391						D6	古墳	1459	2.0			N-10°-E		E6	古墳
1392						D6	古墳	1460				N-10°-E		E6	古墳
1393				N-S		D6	古墳	1461				N-10°-E		E6	古墳
1394		1.5		N-2°-E		D6	古墳	1462				N-15°-E		E6	古墳
1395		1.9		N-25°-E		D6	古墳	1463				N-10°-E		E6	古墳
1396				N-10°-E		D6	古墳	1464	2.0			N-S		E6	古墳
1397				N-10°-E		D6	古墳	1465				N-10°-E		E6	古墳
1398				N-10°-E		D6	古墳	1466	2.3	1.4	3.2	N-15°-E		E6	古墳
1399				N-10°-E		D6	古墳	1467		1.5		N-10°-E		E6	古墳
1400	2.7	2.9	7.8	N-7°-W		D6	古墳	1468	1.7			N-S		E6	古墳
1401				N-25°-E		D6	古墳	1469						E6	古墳
1402				N-10°-E		D6	古墳	1470	2.5			N-10°-E		F6	古墳
1403				N-10°-E		D6	古墳	1471				N-10°-E		F6	古墳
1404	2.2			N-5°-E		D6	古墳	1472						F6	古墳
1405						D6	古墳	1473		3.6		N-5°-E		F6	古墳
1406		2.5		N-10°-E		D6	古墳	1474		4.2		N-5°-E		F6	古墳
1407	1.9	2.0	3.8	N-2°-E		D6	古墳	1475	2.3	4.3	9.9	N-S		F6	古墳
1408		1.4		N-2°-E		D6	古墳	1476	4.0				SD11	E6	古墳
1409		1.5		N-2°-E		D6	古墳	1477	2.3					E7	古墳
1410						D6	古墳	1478	2.3					E7	古墳
1411						D6	古墳	1479	1.7			N-8°-E		E7	古墳
1412	1.7	2.1	3.6	N-20°-E		D6	古墳	1480	1.8			N-12°-E		E7	古墳
1413						D6	古墳	1481	2.5	2.3	5.8	N-3°-E		E7	古墳
1414		1.6		N-20°-E		D6	古墳	1482		2.7		N-25°-E		E7	古墳
1415		4.0		N-15°-E		D6	古墳	1483	1.3	3.0	3.9	N-15°-E		E7	古墳
1416		4.4		N-15°-E		D6	古墳	1484	1.7	2.9	4.9	N-15°-E		E7	古墳
1417		1.8		N-15°-E		D6	古墳	1485	1.8	3.0	5.4	N-15°-E		E7	古墳
1418	1.7	2.0	3.4	N-15°-E		D6	古墳	1486	2.1	2.9	6.1	N-5°-E		E7	古墳
1419		1.3		N-15°-E		D6	古墳	1487	2.5	2.5	6.3	N-3°-E		E7	古墳
1420				N-15°-E		D6	古墳	1488		3.4				E7	古墳
1421						D6	古墳	1489	1.6	2.6	4.2	N-15°-E		E7	古墳
1422				N-15°-E		D6	古墳	1490	1.3			N-10°-E		E7	古墳
1423						D6	古墳	1491	1.9			N-10°-E		E7	古墳
1424		3.2		N-10°-E		D6	古墳	1492	2.6			N-10°-E		E7	古墳
1425	2.3	3.3	7.6	N-10°-E		D6	古墳	1493	2.3			N-10°-E		E7	古墳
1426	1.8	3.2	5.8	N-10°-E		D6	古墳	1494	2.7					E7	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1495	1.8			N-8°-E		E7	古墳	1563	1.4	2.9	4.1	N-5°-E		E6	古墳
1496	2.2			N-8°-E		E7	古墳	1564	1.0	2.6	2.6	N-2°-E		E6	古墳
1497	4.0	3.0	12.0	N-30°-E		E7	古墳	1565	1.1			N-5°-E		E6	古墳
1498	2.7	2.3	6.2	N-15°-E		E7	古墳	1566	1.9	1.7	3.2	N-2°-E		E6	古墳
1499	1.6	3.2	5.1	N-S		E7	古墳	1567	2.1	1.2	2.5	N-2°-E		E6	古墳
1500	2.0	3.3	6.6	N-12°-E		E7	古墳	1568	2.1	1.3	2.7	N-2°-E		E6	古墳
1501	2.7	3.3	8.9	N-12°-E		E7	古墳	1569	1.7	2.0	3.4	N-2°-E		E6	古墳
1502		4.0				E7	古墳	1570				N-S		E6	古墳
1503	4.3	3.1	13.3	N-12°-E		E7	古墳	1571		1.5		N-2°-E		E6	古墳
1504	1.8	2.7	4.9	N-12°-E		E7	古墳	1572	1.4	1.7	2.4	N-10°-E		E6	古墳
1505	2.6	2.2	5.7	N-4°-E		E7	古墳	1573	2.2	1.8	4.0	N-8°-E		E6	古墳
1506	2.3	2.8	6.4	N-4°-E		E7	古墳	1574	3.2	2.4	7.7	N-S		E6	古墳
1507	3.0	2.5	7.5	N-4°-E		E7	古墳	1575	2.8	1.6	4.5	N-8°-E		E6	古墳
1508	2.9	2.4	7.0	N-10°-E		E7	古墳	1576	2.8	1.8	5.0	N-S		E6	古墳
1509	2.3	2.0	4.6	N-20°-E		E7	古墳	1577	2.8	1.1	3.1	N-S		E6	古墳
1510	2.3	3.3	7.6	N-20°-E		E7	古墳	1578	2.9			N-8°-E		E6	古墳
1511	1.7	1.7	2.9	N-10°-E		E7	古墳	1579	2.9	2.2	6.4	N-4°-E		E6	古墳
1512	2.4	1.9	4.6	N-10°-E		E7	古墳	1580	2.7	0.8	2.2	N-4°-E		E6	古墳
1513	2.0	2.2	4.4	N-8°-E		E7	古墳	1581	3.1	2.1	6.5	N-4°-E		E6	古墳
1514	2.5	2.5	6.3	N-8°-E		E7	古墳	1582	2.3			N-8°-E		E6	古墳
1515	2.7	2.5	6.8	N-12°-E		E7	古墳	1583	2.3	2.3	5.3	N-S		E6	古墳
1516		2.4		N-12°-E		E7	古墳	1584	2.8	2.9	8.1	N-3°-E		E6	古墳
1517	1.6	1.7	2.7	N-20°-E		E7	古墳	1585	1.7	2.7	4.6	N-S		E6	古墳
1518	1.5	2.0	3.0	N-3°-E		E7	古墳	1586		0.9		N-3°-E		E6	古墳
1519		1.8		N-25°-E		E7	古墳	1587		1.1		N-3°-E		E6	古墳
1520	1.7	1.6	2.7	N-8°-E		E7	古墳	1588	2.7	2.7	7.3	N-10°-E		E6	古墳
1521		1.7		N-8°-E		E7	古墳	1589		1.3		N-5°-E		E6	古墳
1522	2.1	2.3	4.8	N-35°-E		E7	古墳	1590		2.1		N-5°-E		E6	古墳
1523	1.8	3.1	5.6	N-12°-E		E7	古墳	1591	2.8	2.5	7.0	N-5°-E		E6	古墳
1524	1.5	2.7	4.1	N-3°-E		E7	古墳	1592	2.4	2.3	5.5	N-5°-E		E6	古墳
1525		2.2		N-18°-E		E7	古墳	1593	2.7	1.7	4.6	N-5°-E		E6	古墳
1526	2.2	2.2	4.8	N-30°-E		E7	古墳	1594	2.4	1.8	4.3	N-10°-E		E6	古墳
1527	2.0	1.8	3.6	N-5°-E		E7	古墳	1595	3.0	2.1	6.3	N-5°-E		E6	古墳
1528	1.5	2.5	3.8	N-3°-E		E7	古墳	1596	3.5	2.0	7.0	N-5°-E		E6	古墳
1529		3.0		N-15°-E		E7	古墳	1597	4.0	2.4	9.6	N-5°-E		E6	古墳
1530	2.9	2.0	5.8	N-25°-E		E7	古墳	1598	3.6	1.4	5.0	N-5°-E		E6	古墳
1531	1.8	2.8	5.0	N-3°-E		E7	古墳	1599	2.9	2.0	5.8	N-10°-E		E6	古墳
1532	1.8	2.4	4.3	N-20°-E		E6	古墳	1600	4.1	2.3	9.4	N-5°-E		E6	古墳
1533	2.0	2.4	4.8	N-15°-E		E6	古墳	1601				N-10°-E		E6	古墳
1534	1.7	2.2	3.7	N-15°-E		E6	古墳	1602		2.9				E6	古墳
1535	1.9	2.2	4.2	N-15°-E		E6	古墳	1603				N-8°-E	SD11	E6	古墳
1536	2.1	2.2	4.6	N-30°-E		E6	古墳	1604				N-10°-E		E6	古墳
1537		3.2		N-30°-E		E6	古墳	1605	2.5	4.8	6.0		SD11	E6	古墳
1538		2.2				E6	古墳	1606	3.4	1.9	6.5	N-10°-E		E6	古墳
1539		2.0		N-40°-E		E6	古墳	1607	3.6	2.4	8.6	N-10°-E		E6	古墳
1540		1.9				E6	古墳	1608	2.8	3.0	8.4	N-10°-E	SD11	E6	古墳
1541		3.4		N-20°-E		E6	古墳	1609	1.6			N-10°-E		E6	古墳
1542	2.3	3.5	8.1	N-20°-E		E6	古墳	1610	1.8	1.7	3.1	N-10°-E		E6	古墳
1543	3.2	2.7	8.6	N-10°-E		E6	古墳	1611	1.4	2.1	2.9	N-10°-E		E6	古墳
1544	1.6	2.0	3.2	N-10°-E		E6	古墳	1612	1.3	1.5	2.0	N-10°-E		E6	古墳
1545		2.4		N-10°-E		E6	古墳	1613	2.3	3.5	8.1	N-10°-E		E6	古墳
1546	2.6	3.5	9.1	N-20°-E		E6	古墳	1614	2.0	1.8	3.6	N-10°-E		E6	古墳
1547		3.2		N-S		E6	古墳	1615	2.2	2.1	4.6	N-10°-E		E6	古墳
1548	1.8	2.2	4.0	N-S		E6	古墳	1616	2.4	1.9	4.6	N-10°-E		E6	古墳
1549		1.7		N-S		E6	古墳	1617	3.0	3.0	9.0	N-10°-E		E6	古墳
1550	2.5			N-7°-E		E6	古墳	1618	3.0	1.3	3.9	N-10°-E		E6	古墳
1551						E6	古墳	1619	2.9	2.2	6.4	N-15°-E		E6	古墳
1552				N-10°-E		E6	古墳	1620	3.1	2.1	6.5	N-10°-E		E6	古墳
1553	1.4	2.3	3.2	N-15°-E		E6	古墳	1621	2.9	1.7	4.9	N-10°-E		E6	古墳
1554	2.4	1.9	4.6	N-15°-E		E6	古墳	1622	3.0	2.2	6.6	N-8°-E		E6	古墳
1555	1.5	1.9	2.9	N-8°-E		E6	古墳	1623		2.1		N-8°-E		E6	古墳
1556	1.9	2.2	4.2	N-8°-E		E6	古墳	1624		2.1		N-8°-E		E6	古墳
1557	1.2	3.3	4.0	N-15°-E		E6	古墳	1625						E6	古墳
1558	1.0	3.7	3.7	N-15°-E		E6	古墳	1626		1.7		N-8°-E		E6	古墳
1559	2.0					E6	古墳	1627		1.4		N-S		F7	古墳
1560	1.3	2.0	2.6	N-S		E6	古墳	1628		1.7		N-S		F7	古墳
1561		2.6				E6	古墳	1629	2.2			N-S		F7	古墳
1562	1.5	2.4	3.6	N-5°-E		E6	古墳	1630	2.4			N-S		F7	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1631		1.7		N-15°-E		F7	古墳	1699		1.5		N-15°-E		F6	古墳
1632	2.0			N-15°-E		F7	古墳	1700		1.4		N-5°-E		F6	古墳
1633		2.0		N-2°-E		F7	古墳	1701		1.1		N-15°-E		F6	古墳
1634		1.5		N-S		F6	古墳	1702						F6	古墳
1635		2.2		N-2°-E		F7	古墳	1703		1.2		N-2°-E		F6	古墳
1636		1.2		N-2°-W		F6	古墳	1704	1.5	1.6	2.4	N-15°-E		F6	古墳
1637	3.0	1.2	3.6	N-10°-E		F7	古墳	1705		1.6		N-15°-E		F6	古墳
1638	3.5			N-10°-E		F7	古墳	1706				N-2°-E		F6	古墳
1639	3.4	2.3	7.8	N-10°-E		F7	古墳	1707				N-15°-E		F6	古墳
1640	2.6	2.0	5.2	N-12°-E		F7	古墳	1708	1.4			N-15°-E		F6	古墳
1641	2.9	1.9	5.5	N-12°-E		F7	古墳	1709						F6	古墳
1642	4.0	2.7	10.8	N-12°-E		F7	古墳	1710						F6	古墳
1643	2.6	2.9	7.5	N-2°-E		F7	古墳	1711						F6	古墳
1644	5.6			N-10°-E		F7	古墳	1712		1.5				F6	古墳
1645	2.0			N-15°-E		F7	古墳	1713	3.1	1.5	4.7	N-7°-E		F6	古墳
1646	2.7			N-15°-E		F7	古墳	1714		1.5		N-7°-E		F6	古墳
1647	2.2	2.5	5.5	N-15°-E		F7	古墳	1715		1.8				F6	古墳
1648		1.7		N-15°-E		F7	古墳	1716	3.0	1.8	5.4	N-2°-E		F6	古墳
1649		2.9		N-15°-E		F7	古墳	1717		1.4		N-2°-E		F6	古墳
1650	1.4	2.8	3.9	N-5°-E		F7	古墳	1718						F6	古墳
1651				N-5°-E		F7	古墳	1719	3.0			N-2°-E		F6	古墳
1652		3.0				F7	古墳	1720				N-2°-E		F6	古墳
1653	2.0	3.0	6.0	N-3°-E		F7	古墳	1721	3.0					G7	古墳
1654				N-3°-E		F7	古墳	1722	2.6					G7	古墳
1655	2.3			N-5°-E		F7	古墳	1723	2.6					G7	古墳
1656	3.4	2.6	8.8	N-5°-E		F7	古墳	1724	2.4					G7	古墳
1657		2.2		N-8°-E		F7	古墳	1725	2.2					G7	古墳
1658	2.1	2.2	4.6	N-8°-E		F7	古墳	1726	2.6					G7	古墳
1659		3.2		N-8°-E		F7	古墳	1727	3.7					G6・7	古墳
1660	2.3	3.1	7.1	N-8°-E		F7	古墳	1728	3.1			N-20°-E		G6	古墳
1661	2.9	3.3	9.6	N-8°-E		F7	古墳	1729	2.2			N-20°-E		G6	古墳
1662		2.5		N-12°-E		F7	古墳	1730	2.7			N-20°-E		G6	古墳
1663	2.4	2.5	6.0	N-12°-E		F7	古墳	1731	2.9	1.5	4.4	N-15°-E		G7	古墳
1664	3.9	2.1	8.2	N-12°-E		F6・7	古墳	1732	2.4	2.0	4.8	N-15°-E		G7	古墳
1665	3.1	2.6	8.1	N-8°-E		F6・7	古墳	1733	2.6	1.5	3.9	N-15°-E		G7	古墳
1666	2.6			N-8°-E		F6・7	古墳	1734	2.6	1.7	4.4	N-15°-E		G7	古墳
1667	3.9	2.6	10.1	N-15°-E		F6・7	古墳	1735	2.7	2.0	5.4	N-15°-E		G6	古墳
1668	2.2	2.4	5.3	N-8°-E		F6	古墳	1736	2.5	2.0	5.0	N-12°-E		G6	古墳
1669	3.3			N-8°-E		F6	古墳	1737	3.3	1.8	5.9	N-20°-E		G6	古墳
1670				N-8°-E		F6	古墳	1738	3.3	2.0	6.6	N-20°-E		G6	古墳
1671		2.6		N-15°-E		F6	古墳	1739	2.6	2.0	5.2	N-20°-E		G6	古墳
1672		2.6		N-15°-E		F6	古墳	1740	2.8	2.0	5.6	N-20°-E		G6	古墳
1673	2.2	2.7	5.9	N-15°-E		F6	古墳	1741		1.7		N-20°-E		G6	古墳
1674		2.6		N-15°-E		F6	古墳	1742		3.7		N-15°-E		G6・7	古墳
1675		2.9		N-15°-E		F6	古墳	1743	3.1	3.3	10.2	N-15°-E		G6・7	古墳
1676		2.6		N-15°-E		F6	古墳	1744	2.2	3.1	6.8	N-7°-E		G6・7	古墳
1677	2.6	2.2	5.7	N-15°-E		F6	古墳	1745	2.8	2.6	7.3	N-15°-E		G6	古墳
1678	3.8	2.3	8.7	N-15°-E		F6	古墳	1746	2.6	2.5	6.5	N-15°-E		G6	古墳
1679		2.7		N-15°-E		F6	古墳	1747	2.2	2.5	5.5	N-20°-E		G6	古墳
1680	1.9	3.1	2.9	N-15°-E		F6	古墳	1748	2.7	2.2	5.9	N-20°-E		G6	古墳
1681	2.3	1.5	3.5	N-15°-E		F6	古墳	1749	2.9	2.2	6.4	N-20°-E		G6	古墳
1682	2.3	2.2	5.1	N-15°-E		F6	古墳	1750	2.8	2.0	5.6	N-15°-E		G6	古墳
1683	3.8	2.7	10.3	N-15°-E		F6	古墳	1751	2.8	1.8	5.0	N-15°-E		G6	古墳
1684		2.6		N-15°-E		F6	古墳	1752		1.6				G6	古墳
1685	1.8			N-2°-E		F6	古墳	1753		2.3		N-3°-E		G6	古墳
1686	2.3					F6	古墳	1754	2.9	2.5	7.3	N-15°-E		G6	古墳
1687	3.4			N-25°-E		F6	古墳	1755	2.1	2.5	5.3	N-3°-E		G6	古墳
1688						F6	古墳	1756	2.5	2.9	7.3	N-10°-E		G6	古墳
1689				N-15°-E		F6	古墳	1757	2.8			N-10°-E		G6	古墳
1690				N-15°-E		F6	古墳	1758	2.1	2.8	5.9	N-18°-E		G6	古墳
1691				N-15°-E		F6	古墳	1759	2.8	2.4	6.7	N-18°-E		G6	古墳
1692				N-15°-E		F6	古墳	1760	3.4	2.4	8.2	N-18°-E		G6	古墳
1693				N-15°-E		F6	古墳	1761	2.6	2.1	5.5	N-13°-E		G6	古墳
1694				N-15°-E		F6	古墳	1762	2.8	1.8	5.0	N-13°-E		G6	古墳
1695				N-15°-E		F6	古墳	1763		1.8				G6	古墳
1696		2.3		N-15°-E		F6	古墳	1764		1.7		N-10°-E		G6	古墳
1697				N-15°-E		F6	古墳	1765	2.8	1.9	5.3	N-10°-E		G6	古墳
1698				N-15°-E		F6	古墳	1766	1.6	2.0	3.2	N-10°-E		G6	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1767	3.1	1.7	5.3	N-15°-E		G6	古墳	1835	2.7	1.8	4.9	N-13°-E		G6	古墳
1768	3.2			N-10°-E		G6	古墳	1836		1.6	0.0	N-13°-E		G6	古墳
1769	2.0	1.9	3.8	N-18°-E		G6	古墳	1837	2.9	1.6	4.6	N-13°-E		G6	古墳
1770	3.0	2.5	7.5	N-18°-E		G6	古墳	1838	2.6	1.5	3.9	N-13°-E		G6	古墳
1771	2.8	2.3	6.4	N-18°-E		G6	古墳	1839	2.4	1.5	3.6	N-13°-E		G6	古墳
1772	2.9	2.6	7.5	N-15°-E		G6	古墳	1840		2.5		N-13°-E		F6	古墳
1773	3.4	2.8	9.5	N-15°-E		G6	古墳	1841	4.2			N-10°-E		F6・G6	古墳
1774		2.8				G6	古墳	1842	3.1			N-10°-E		F6・G6	古墳
1775		2.5		N-12°-E		G6	古墳	1843	3.2	2.0	6.4	N-10°-E		G6	古墳
1776	2.8	2.6	7.3	N-12°-E		G6	古墳	1844		1.7		N-10°-E		G6	古墳
1777	1.6	2.6	4.2	N-12°-E		G6	古墳	1845		1.3		N-13°-E		G6	古墳
1778	2.5	2.7	6.8	N-15°-E		G6	古墳	1846	2.1	1.3	2.7	N-13°-E		G6	古墳
1779	3.5	2.0	7.0	N-12°-E		G6	古墳	1847	2.5	1.4	3.5	N-13°-E		G6	古墳
1780	2.3	2.4	5.5	N-15°-E		G6	古墳	1848	2.9	1.4	4.1	N-13°-E		G6	古墳
1781	2.2	1.8	4.0	N-15°-E		G6	古墳	1849	2.9	1.8	5.2	N-13°-E		G6	古墳
1782	2.8	1.9	5.3	N-15°-E		G6	古墳	1850	2.6	1.8	4.7	N-13°-E		G6	古墳
1783	2.8	1.8	5.0	N-15°-E		G6	古墳	1851	2.1	1.7	3.6	N-13°-E		G6	古墳
1784	3.2	1.9	6.1	N-15°-E		G6	古墳	1852	2.9	1.4	4.1	N-13°-E		F6・G6	古墳
1785	2.7	1.7	4.6	N-15°-E		G6	古墳	1853		1.5		N-13°-E		G6	古墳
1786	3.0	1.7	5.1	N-12°-E		G6	古墳	1854		1.9		N-13°-E		G6	古墳
1787	2.0			N-12°-E		G6	古墳	1855	2.1	1.8	3.8	N-13°-E		G6	古墳
1788	2.2			N-12°-E		G6	古墳	1856	2.1	1.6	3.4	N-13°-E		G6	古墳
1789		1.8		N-12°-E		G6	古墳	1857	3.0			N-15°-E		G6	古墳
1790	2.7	1.6	4.3	N-12°-E		G6	古墳	1858	3.0			N-15°-E		G6	古墳
1791	2.9	1.7	4.9	N-23°-E		G6	古墳	1859	2.4			N-15°-E		G6	古墳
1792	2.2	1.8	4.0	N-10°-E		G6	古墳	1860	2.2	2.0	4.4	N-15°-E		G6	古墳
1793	2.6	1.8	4.7	N-10°-E		G6	古墳	1861		2.1				F6・G6	古墳
1794	2.6	1.6	4.2	N-15°-E		G6	古墳	1862		1.9				G6	古墳
1795	2.1	1.5	3.2	N-15°-E		G6	古墳	1863		1.3		N-13°-E		G6	古墳
1796	2.2	1.5	3.3	N-13°-E		G6	古墳	1864	2.1	1.4	2.9	N-13°-E		G6	古墳
1797	2.9	1.8	5.2	N-13°-E		G6	古墳	1865	2.1	1.6	3.4	N-13°-E		G6	古墳
1798	3.0	1.9	5.7	N-13°-E		G6	古墳	1866	2.9	1.7	4.9	N-15°-E		G6	古墳
1799	3.1	2.1	6.5	N-13°-E		G6	古墳	1867		2.7				F6・G6	古墳
1800	2.8	2.3	6.4	N-13°-E		G6	古墳	1868		2.8				G6	古墳
1801	2.4	2.4	5.8	N-13°-E		G6	古墳	1869		2.4		N-13°-E		G6	古墳
1802	2.4	2.5	6.0	N-13°-E		G6	古墳	1870	2.1	2.1	4.4	N-13°-E		G6	古墳
1803		1.9		N-13°-E		G6	古墳	1871	1.9			N-13°-E		G6	古墳
1804	2.2	2.1	4.6	N-13°-E		G6	古墳	1872	2.8			N-13°-E		G6	古墳
1805	3.1	2.0	6.2	N-13°-E		G6	古墳	1873	2.7					G6	古墳
1806	2.7	1.5	4.1	N-13°-E		G6	古墳	1874	1.7					G6	古墳
1807	2.4	1.5	3.6	N-8°-E		G6	古墳	1875	2.5					G6	古墳
1808	2.6	1.6	4.2	N-15°-E		G6	古墳	1876	2.3					G6	古墳
1809	1.9	1.9	3.6	N-15°-E		G6	古墳	1877	2.0					G6	古墳
1810	2.3	1.6	3.7	N-15°-E		G6	古墳	1878	2.5					G6	古墳
1811	2.8	1.4	3.9	N-15°-E		G6	古墳	1879	2.2					G6	古墳
1812	2.9	1.6	4.6	N-20°-E		G6	古墳	1880	1.5					G6	古墳
1813	2.8	1.5	4.2	N-13°-E		G6	古墳	1881						G6	古墳
1814	2.6	1.3	3.4	N-13°-E		G6	古墳	1882		1.6		N-8°-E		G6	古墳
1815	2.4	1.4	3.4	N-13°-E		G6	古墳	1883	1.6	1.5	2.4	N-15°-E		G6	古墳
1816	2.1	2.3	4.8	N-20°-E		G6	古墳	1884	2.8	1.2	3.4	N-15°-E		G6	古墳
1817	2.3	1.9	4.4	N-13°-E		G6	古墳	1885	2.1	1.6	3.4	N-15°-E		G6	古墳
1818	3.0	1.7	5.1	N-13°-E		G6	古墳	1886	2.0	1.6	3.2	N-25°-E		G6	古墳
1819		1.7		N-13°-E		G6	古墳	1887	2.4	1.6	3.8	N-15°-E		G6	古墳
1820	2.2	2.1	4.6	N-12°-E		G6	古墳	1888	1.9	1.6	3.0	N-15°-E		G6	古墳
1821	2.5	1.9	4.8	N-12°-E		G6	古墳	1889	1.9	1.3	2.5	N-10°-E		G6	古墳
1822	2.3	2.0	4.6	N-12°-E		G6	古墳	1890	1.9	1.4	2.7	N-18°-E		G6	古墳
1823	2.2	2.3	5.1	N-12°-E		G6	古墳	1891		1.7		N-15°-E		G6	古墳
1824	2.7	2.0	5.4	N-10°-E		G6	古墳	1892	1.4	1.7	2.4	N-15°-E		G6	古墳
1825	2.8	1.8	5.0	N-15°-E		G6	古墳	1893	2.4	1.9	4.6	N-20°-E		G6	古墳
1826	2.9	1.5	4.4	N-13°-E		G6	古墳	1894	1.9	1.8	3.4	N-20°-E		G6	古墳
1827	2.9	1.5	4.4	N-13°-E		G6	古墳	1895	1.8	1.9	3.4	N-20°-E		G6	古墳
1828	2.3	1.6	3.7	N-13°-E		G6	古墳	1896	2.7	1.9	5.1	N-20°-E		G6	古墳
1829	3.1	2.8	8.7	N-15°-E		G6	古墳	1897	1.9	1.9	3.6	N-12°-E		G6	古墳
1830	2.4	1.7	4.1	N-10°-E		G6	古墳	1898	2.0	1.9	3.8	N-12°-E		G6	古墳
1831	3.0	1.7	5.1	N-10°-E		G6	古墳	1899				N-10°-E		G6	古墳
1832		1.7		N-15°-E		G6	古墳	1900		1.6		N-20°-E		G6	古墳
1833	2.5	1.6	4.0	N-15°-E		G6	古墳	1901	1.5	1.5	2.3	N-20°-E		G6	古墳
1834	2.3	1.7	3.9	N-15°-E		G6	古墳	1902	2.5	1.9	4.8	N-15°-E		G6	古墳

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
1903	1.8	1.6	2.9	N-20°-E		G6	古墳	1971	3.5	2.1	7.4	N-3°-E		F6	古墳
1904	1.8	1.6	2.9	N-20°-E		G6	古墳	1972	3.3	2.0	6.6	N-3°-E		F6	古墳
1905	2.0	1.8	3.6	N-20°-E		G6	古墳	1973	2.0			N-15°-E		F6	古墳
1906	2.3	2.0	4.6	N-15°-E		G6	古墳	1974	3.0			N-3°-E		F6	古墳
1907		2.1		N-15°-E		G6	古墳	1975	3.2	3.6	11.5	N-S		F4	古墳
1908		1.8		N-17°-E		G6	古墳	1976	5.4			N-3°-E	31坪SD121	G6	平安
1909	1.9	1.8	3.4	N-17°-E		G6	古墳	1977	5.2				31坪	G6	平安
1910	2.1	1.8	3.8	N-15°-E		G6	古墳	1978	4.3				31坪	G6	平安
1911	1.5	1.6	2.4	N-15°-E		G6	古墳	1979					31坪	G6	平安
1912	1.7	1.6	2.7	N-25°-E		G6	古墳	1980	5.6	6.0		N-3°-E	31坪SD121	G6	平安
1913	2.1	1.5	3.2	N-25°-E		G6	古墳	1981	5.3	5.9		N-3°-E	31坪	G6	平安
1914	2.3	1.5	3.5	N-25°-E		G6	古墳	1982	5.0	5.6		N-3°-E	31坪	G6	平安
1915		1.5		N-13°-E		G6	古墳	1983	4.5	5.3		N-5°-E	31坪	G6	平安
1916	2.0	1.5	3.0	N-13°-E		G6	古墳	1984	4.9	5.5		N-5°-E	31坪	G6	平安
1917	1.8	1.4	2.5	N-13°-E		G6	古墳	1985	5.4			N-5°-E	31坪	G6	平安
1918	1.8	1.4	2.5	N-13°-E		G6	古墳	1986	5.3			N-5°-E	31坪	G6	平安
1919	1.8	1.8	3.2	N-25°-E		G6	古墳	1987	5.4				31坪	G6	平安
1920	1.8	1.7	3.1	N-25°-E		G6	古墳	1988					31坪	G6	平安
1921		1.9		N-25°-E		G6	古墳	1989	5.4	7.9	42.7	N-3°-E	31坪SD121	G6	平安
1922	2.0					G6	古墳	1990	5.1	8.0	40.8	N-3°-E	31坪	G6	平安
1923	1.5					G6	古墳	1991	4.5	8.7	39.2	N-8°-E	31坪	G6	平安
1924	1.5					G6	古墳	1992	5.1	9.0	45.9	N-8°-E	31坪	G6	平安
1925	1.8			N-23°-E		G6	古墳	1993	4.9	7.9	38.7	N-2°-E	31坪	G6	平安
1926				N-23°-E		G6	古墳	1994	5.5	8.0	44.0	N-2°-E	31坪	G6	平安
1927	2.2			N-20°-E		F7	古墳	1995	5.6	8.1	45.4	N-7°-E	31坪	G6	平安
1928	3.5			N-20°-E		F7	古墳	1996	6.2	8.3	51.5	N-7°-E	31坪	G6	平安
1929	2.4			N-10°-E		F7	古墳	1997		8.2		N-S	31坪	G6	平安
1930	2.1			N-15°-E		F7	古墳	1998	4.8	7.5	36.0	N-10°-E	31坪SD121	G6	平安
1931	2.9			N-15°-E		F7	古墳	1999	5.1	7.0	35.7	N-S	31坪	G6	平安
1932	1.9					F7	古墳	2000	3.9	6.4	25.0	N-6°-E	31坪	G6	平安
1933	3.4			N-20°-E		F7	古墳	2001	5.5	5.9	32.5	N-6°-E	31坪	G6	平安
1934	2.8					F7	古墳	2002	5.1	5.9	30.1	N-2°-E	31坪	G6	平安
1935	1.9					F7	古墳	2003	5.5	5.7	31.4	N-2°-E	31坪	G6	平安
1936	1.9					G7	古墳	2004	5.5	5.0	27.5	N-3°-E	31坪	G6	平安
1937	2.5			N-15°-E		F7	古墳	2005	6.6	4.4	29.0	N-3°-E	31坪	G6	平安
1938				N-15°-E		F7	古墳	2006					31坪	G6	平安
1939	3.1	1.8	5.6	N-20°-E		F7	古墳	2007		7.0		N-S	31坪SD121	G6	平安
1940	2.9	2.2	6.4	N-20°-E		F7	古墳	2008		7.7		N-S	31坪	G6	平安
1941	1.7	1.9	3.2	N-10°-E		F7	古墳	2009	4.3	8.1	34.8	N-3°-E	31坪	G6	平安
1942	2.2	2.3	5.1	N-10°-E		G7	古墳	2010	5.3	8.0	42.4	N-3°-E	31坪	G6	平安
1943	2.6	2.6	6.8	N-5°-E		G7	古墳	2011	5.4	7.7	41.6	N-3°-E	31坪	G6	平安
1944		2.1				F7	古墳	2012	5.5	8.0	44.0	N-2°-E	31坪	G6	平安
1945	2.3			N-13°-E		F7	古墳	2013	5.2	8.3	43.2	N-2°-E	31坪	G6	平安
1946	2.3			N-13°-E		F7	古墳	2014					31坪	G6	平安
1947	1.7			N-13°-E		F7	古墳	2015		7.5		N-3°-E	31坪SD121	G6	平安
1948	2.8	3.0	8.4	N-20°-E		F7	古墳	2016		7.6		N-3°-E	31坪	G6	平安
1949	2.9	3.0	8.7	N-20°-E		F7	古墳	2017	4.3	7.2	31.0	N-3°-E	31坪	G6	平安
1950	3.0	2.3	6.9	N-20°-E		F7	古墳	2018	5.3	6.8	36.0	N-3°-E	31坪	G6	平安
1951	2.2			N-20°-E		F7	古墳	2019	5.5	6.9	38.0	N-3°-E	31坪	G6	平安
1952	2.8	2.3	6.4	N-3°-E		G7	古墳	2020	5.8				31坪	G6	平安
1953	2.6	2.0	5.2	N-3°-E		G7	古墳	2021					31坪	G6	平安
1954	3.1			N-12°-E		F7	古墳	2022		4.7		N-2°-E	31坪SD121	G6	平安
1955		2.0		N-12°-E		F7	古墳	2023		4.7		N-2°-E	31坪	G6	平安
1956	2.9	2.3	6.7	N-12°-E		F7	古墳	2024	4.7	4.8	22.6	N-2°-E	31坪	G6	平安
1957	2.4			N-3°-E		G7	古墳	2025	4.9	5.3	26.0	N-2°-E	31坪	G6	平安
1958	2.2					G7	古墳	2026					31坪	G6	平安
1959	2.2			N-25°-E		F7	古墳	2027					31坪SD121	G6	平安
1960	3.6			N-10°-E		F7	古墳	2028					31坪	G6	平安
1961	2.7			N-5°-E		F7	古墳	2029	4.5				31坪	G6	平安
1962	2.5	2.4	6.0	N-5°-E		F7	古墳	2030					31坪	G6	平安
1963	3.3	1.9	6.3	N-10°-E		F7	古墳	2031				N-8°-E	12坪SD2A	I4	平安
1964	2.2	1.5	3.3	N-7°-E		G7	古墳	2032		9.7		N-8°-E	12坪SD2A	I4	平安
1965	2.7	2.2	5.9	N-7°-E		F7	古墳	2033	7.4	8.0	59.2	N-8°-E	12坪SD2A	I4	平安
1966				N-15°-E		F7	古墳	2034	8.7	9.7	84.4	N-5°-E	12坪SD2A	I4	平安
1967		1.5		N-15°-E		F6	古墳	2035		7.8		N-8°-E	12坪SD2A	I4	平安
1968	2.9	1.6	4.6	N-S		F6	古墳	2036		8.6		N-5°-E	12坪	I3	平安
1969	3.5	2.1	7.4	N-2°-E		F6	古墳	2037	6.6	9.2	60.7	N-5°-E	12坪	I3	平安
1970		2.1				F6	古墳	2038	8.6	9.2	79.1	N-5°-E	12坪	I3	平安

番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期	番号	縦	横	面積	方位	関連遺構	位置	時期
2039	9.3	8.6	80.0	N-S	12坪	I3	平安	2064	6.7			N-S	21坪	J4	平安
2040		8.5		N-8°-E	12坪	I3	平安	2065		9.2		N-2°-E	21坪	J4	平安
2041		8.6		N-5°-E	12坪	I3	平安	2066	8.4			N-S	21坪	J4	平安
2042	6.7	9.2	61.6	N-5°-E	12坪	I3	平安	2067				N-S	21坪	J4	平安
2043	7.4	8.2	60.7	N-S	12坪	I3	平安	2068	5.9	7.4	43.7	N-S	21坪	J4	平安
2044	8.5	8.8	74.8	N-5°-E	12坪	I3	平安	2069		6.5		N-S	21坪	J4	平安
2045		11.7		N-10°-E	12坪	I3	平安	2070	8.4	7.2	60.5	N-S	21坪	J4	平安
2046		13.0		N-5°-E	12坪	I3	平安	2071	7.0			N-S	21坪	J4	平安
2047	6.4	11.0	70.4	N-5°-E	12坪	I3	平安	2072		6.3		N-S	21坪	J4	平安
2048	7.0	12.0	84.0	N-2°-W	12坪	I3	平安	2073	7.4	4.9	36.3	N-S	21坪	J4	平安
2049	8.5	9.0	76.5	N-S	12坪	I3	平安	2074	10.8	6.3	68.0	N-S	21坪	J4	平安
2050		8.0		N-10°-E	12坪	I3	平安	2075	8.0	6.2	49.6	N-S	21坪	J4	平安
2051					12坪	I3	平安	2076		5.9		N-S	21坪	J4	平安
2052	7.0	8.6	60.2	N-2°-E	12坪	I3	平安	2077		6.6		N-S	21坪	J4	平安
2053	6.3	8.0	50.4	N-S	12坪	I3	平安	2078	11.2	6.0	67.2	N-S	21坪	J4	平安
2054	6.9	8.5	58.7	N-S	12坪	I3	平安	2079	8.3	5.9	49.0	N-S	21坪	J4	平安
2055		7.2		N-S	12坪	I3	平安	2080		6.9		N-S	21坪	J4	平安
2056		6.0		N-2°-W	12坪	I3	平安	2081		5.0		N-S	21坪	J4	平安
2057		4.8		N-2°-W	12坪	I3	平安	2082	11.2	5.0	56.0	N-S	21坪	J4	平安
2058					12坪	I3	平安	2083	9.5			N-S	21坪	J4	平安
2059	12.5				12坪	I3	平安	2084				N-S	21坪SD1A	J4	平安
2060		10.2			12坪	I3	平安	2085	12.0			N-S	21坪SD1A	J4	平安
2061	6.3			N-2°-E	21坪	J4	平安	2086	8.3			N-S	21坪SD1A	J4	平安
2062				N-2°-E	21坪	J4	平安	2087	9.0			N-S	21坪SD1A	J4	平安
2063	6.8	7.5	51.0	N-S	21坪	J4	平安	2088	13.2			N-S	21坪SD1A	J4	平安